

# 秋田城跡 II

- 鶴ノ木地区 -

2008年3月

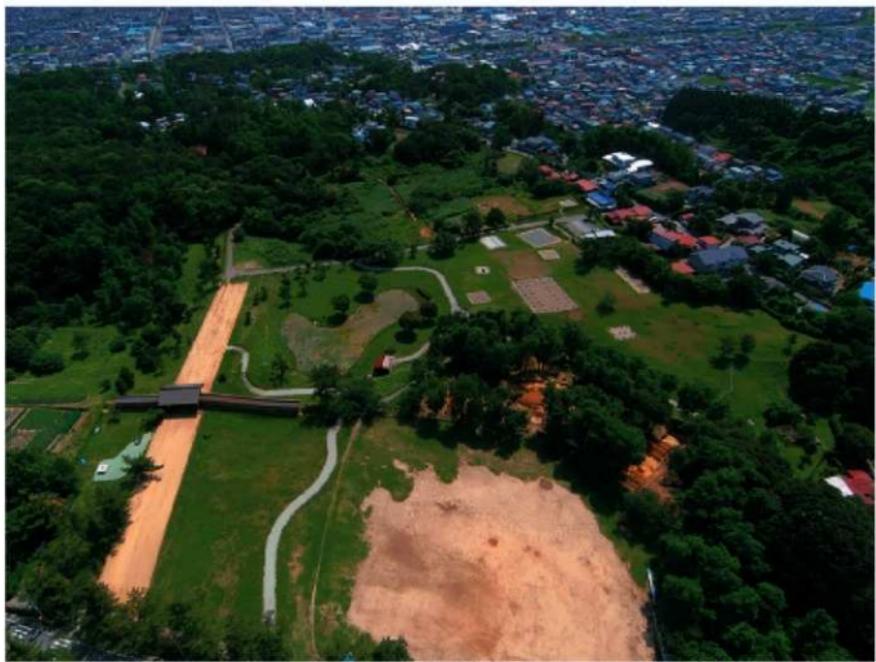
秋田市教育委員会  
秋田城跡調査事務所



高清水丘陵航空写真



鶴ノ木地区全景（東から）



鶴ノ木地区全景（西から）



第30次調査地全景（鞠ノ木地区南半建物群）（東から）



第25次調査検出 SB006・SB395掘立柱建物跡（東から）



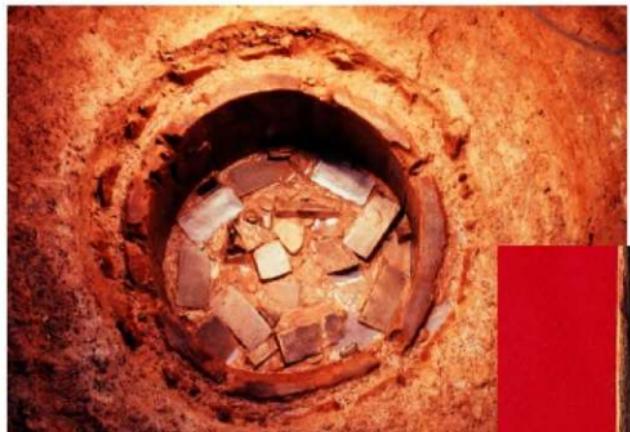
第63次調査検出 SB1351古代水洗便所跡（西から）



SB1351  
古代水洗便所跡  
(上空から)



第25次調査検出  
SE406井戸跡  
(西から)



SE406井戸跡 井筒内



SE406井戸跡出土  
「天平六年月」  
釘書き木簡



第39次調査地全景



第39次調査検出 SG463沼地跡北西岸祭祀遺構（東から）



第39次調查出土 人面墨書土器



第39次調查出土 人形



第62次調查出土 和銅開稱銀錢



第63次調查古代水洗便所跡出土 鑿木

## 序

国指定史跡秋田城跡は古代の大規模な地方官庁の遺跡で、出羽国の行政・軍事・文化の中心地でした。近年は北方地域との交流や交易、さらには大陸の渤海国との外交拠点としての役割も注目されています。

秋田城については、江戸時代後期から多くの先人が研究を重ね、それらの記録をもとに、近代以降も地方史研究家らが調査活動を重ね、昭和14年に国の史跡に指定されました。

秋田城跡の本格的な調査が開始されたのは、昭和34年から37年までの国営による調査でしたが、その際に土壘に囲まれた内城（政府跡）に加え注目されたのが、付属寺院である四天王寺跡と推定された建物跡群が発見された鵜ノ木地区でした。

鵜ノ木地区は、昭和47年に秋田市教育委員会が発掘調査を開始した以降も、重要地区として継続的に調査が行われてきました。秋田城の史跡内でも、最も順調に土地公有化と調査が進展した地区であり、平成元年度からは史跡公園としての環境整備事業が開始されることとなりました。

このたび、鵜ノ木地区の主要部の調査が終わったことを受け、秋田城跡の調査開始から35年をむかえる記念の年に、『秋田城跡—鵜ノ木地区一』の報告書を刊行できますことは誠に喜びに堪えません。

本報告書は秋田城外の最重要地区として、昭和47年度から延べ35年間にわたって実施してまいりました「鵜ノ木地区」の発掘調査の記録、また文字資料、文献史料を収録してまとめたものとなっています。

本書に収録された発掘調査記録等が全国の古代城柵官衙遺跡の研究に役立つとともに、広くご活用いただければ幸いです。

本報告書の刊行に当たり、ご指導、ご助言をいただきております文化庁、宮城県多賀城跡調査研究所、秋田県教育委員会をはじめとする関係各位に深く感謝申し上げます。

平成20年3月

秋田市教育委員会  
教育長 高橋健一

## はじめに

国指定史跡である秋田城跡は、秋田市寺内地内の通称高清水岡に所在する奈良時代から平安時代にかけて置かれた日本最北の大規模な地方官庁の遺跡である。創建は天平5年（733）に山形県庄内地方にあった出羽権が北進し、高清水岡に遷されたのが始まりで、その後天平宝字4年（760）頃に阿支太城（秋田城）と呼ばれるようになった。

秋田城跡を本格的に調査するきっかけとなったのは、昭和33年に秋田城跡の北側にある通称弊切山で行われた宅地造成による無断現状変更である。これを重視した文化財保護委員会（現文化庁）は調査団を結成し、昭和34～37年までの4年間にわたり秋田城跡を解明する国営調査を実施したのである。調査地城は丘陵のはば全域にわたり、鶴ノ木地区についても広範囲に調査が行われ、大規模な掘立柱建物群が整然と立ち並んで発見され、『類聚国史』天長7年（830年）条にある出羽國の大地震で倒壊した四天王寺跡と推定したことから大きな反響を呼んだ。

昭和47年、史跡の保護管理計画を作定する必要性が生じたため、秋田市は現地に秋田城跡発掘調査事務所を設置し国の指導を得ながら秋田城の規模や外郭の構造、遺構の分布状況や変遷を解明する調査を実施することになった。調査については多賀城跡調査研究所の全面的な協力を得た。その結果、秋田城の規模は東西550m、南北550mの北西部が欠ける不整方形をなし、外郭の構造は築地塀であることが判明した。政庁は東西94m、南北77mのやや横長の築地塀に囲まれており、その内部から正殿、東脇殿、北東建物などが検出されたことから、政庁と外郭の二重構造を基本とすることが判明した。

このたび報告書の刊行となった鶴ノ木地区については、城外南東側に位置し、重要地区として昭和47年度の第7次調査以降平成19年度の第91次調査まで国営調査も含め継続的に調査され60,920m<sup>2</sup>にもおよぶ面積を発掘した。調査の結果、南側の高所では国営調査で推定四天王寺跡とした奈良時代から平安時代にかけて規則的に配置された大規模な建物群を検出した。また、昭和53年度の第25次調査で発見されたSE406井戸跡からは「天平六年月」とクギ書きされた木簡が出土し、『続日本記』天平5年条に見られる出羽権遷置が裏付けられたことは大きな成果であった。北側では縄文時代から形成された沼地跡が検出され、その沼地岸辺では「祓」の祭祀遺構が検出された。また、平成6・7年に古代水洗廁跡が検出され、廁舎沈殿槽内から当時の日本人の食さない、豚食をする人に感染する有鉤条虫卵が検出したことから、豚食習慣のある大陸（渤海）から来た人が使用した廁舎と考えられ、遠く渤海との交易を思わせる重要な遺構の発見となり、鶴ノ木地区的性格にも一石を投じた。さらに中世には沼地が埋められ、整地後に建物群や井戸跡、墓塚群が検出されるなど、中世においてもこの地が活発に利用されていたことが判明した。そのような多くの調査成果を重ねながら、鶴ノ木地区的実体が解明されてきた。

本報告書はこの鶴ノ木地区的調査成果を集大成したものである。

本報告書の刊行にあたり、ご指導、ご助言をいただいている文化庁、多賀城跡調査研究所、秋田県教育庁などの、関係各位、調査に従事された方々、調査に協力いただいた地元の皆様には心より感謝申し上げるしだいである。

## 例　　言

1 本報告書は秋田城跡鶴ノ木地区の正式報告書であり、昭和47年（1972）～平成19年（2007）に秋田城跡調査事務所が実施した第7次・第10次・第12次・第18次・第22次・第25次・第26次・第30次・第34次・第35次・第37次・第39次・第42次・第46次・第48次・第50次・第51次・第57次・第58次・第61次・第62次・第63次・第67次・第69次・第81次・第91次発掘調査の成果を収録したものである。当事務所がこれまで公表したものと見解が異なる場合は、本報告書の記述内容が優先するものである。

なお、鶴ノ木地区においては昭和34年（1959）から昭和37年（1960）にかけて文化財保護委員会による発掘調査（以下国営調査と呼称）が行われ、調査概報が作成されているが、正式報告書は未刊行となっている。その後秋田市教育委員会が調査地を全て再調査しており、本報告書は国営調査の成果も再検討したものとなっている。国営調査についてはその調査経過などを報告する。

2 遺構と遺物は実測図と写真によって示した。

3 本報告書は、秋田市教育委員会文化振興室、秋田城跡調査事務所の下記の職員が分担執筆し、伊藤武士が編集した。

第Ⅰ章 第1節・第2節	伊藤 武士
第Ⅱ章 第1節の1・第2節の2	伊藤 武士
第1節の2	小松 正夫
第2節の2	松下 秀博
第Ⅲ章 第1節の1	小松 正夫
第2節	伊藤 武士
第3節	石郷岡誠一・伊藤 武士
第Ⅳ章	伊藤 武士
第V章	平成7年度秋田城跡調査概報より転載（伊藤編集）
第VI章	伊藤 武士
結　語	石郷岡誠一
別　編	伊藤 武士

### （平成19年度秋田城跡発掘調査体制）

秋田市教育委員会	教育長	高橋 健一
秋田城跡調査事務所	所長	石郷岡誠一
	主席主査	松下 秀博
	主　査	伊藤 武士

（分担執筆者）秋田市教育委員会　文化振興室長 小松 正夫

4 文字資料の判読・訛読は国立歴史民俗博物館館長平川南氏の御教示による。なお、本報告書の資料の詳細については、『秋田城跡調査事務所研究紀要Ⅰ～Ⅲ』（昭和59年9月、平成9年3月、平成12年3月）に掲載している。

5 掲図・表・図版の作成は伊藤武士・石郷岡誠一のほか、大井重樹・森泉裕美子・伊藤雅子・最上谷布美子・加藤亜紀が行った。

6 本書に掲載した地図は秋田市管内図を使用した。

## 凡　　例

### 遺構

-  飛砂層
-  寺内層
-  沼地跡・植物遺体 (スクモ)

### 遺物

- 1 土器断面を黒く塗りつぶしたのが、須恵器である。
- 2 土器の性格の相違は下記スクリーントーンで表現した。

-  黒色処理
-  転用硯
-  ミガキ

- 3 土器の表面付着物の相違は下記スクリーントーンで表現した。

-  煤
-  漆

- 4 遺物観察表などにおける土器の調整技術や切り離し等の表記は、下記のとおりである。
  - ・回転利用ケズリは、ケズリ調整と記載。ケズリ調整以外の調整はその都度別記。
  - ・ロクロ等広い意味の回転を利用したカキ目調整は、ロクロ利用のカキ目調整と記載。
  - ・切り離し、粘土紐、タタキ痕跡等、成形時痕跡の消滅を目的としない軽度な器面調整痕跡は、軽いナデ調整と記載。成形時痕跡の摩滅を目的とし、痕跡が一部残るものをナデ調整、ほとんど痕跡を残さないものを丁寧なナデ調整と記載。
  - ・底部回転ヘラ切りによる切り離しは、ヘラ切りと記載。底部回転糸切りによる切り離しは、糸切りと記載。底部回転以外の切り離しはその都度別記。
  - ・実測図・写真図版の縮尺は、図ごとに示した。
- 5 遺構一覧表や遺物一覧表などにおいては下記のような表記の省略を行った  
北側桁行柱列の北から→北桁北～（「側」・「柱列」・「から」などの表記省略）  
遺構の新旧関係（重複関係）については、報告遺構が対象の遺構より古い場合は（古）○○○○、新しい場合は（新）○○○○とした。  
底部ナデ調整→ナデ（「部位」や「調整」の表記省略）　底部無調整→無調整  
9世紀第2四半期→9C第2（「世紀」を「C」に表記省略、四半期の表記を省略）

### 方位・測量原点

文章中の方位と方向を示す東西南北は、遺跡全域に設定された発掘基準線に基づく真東、真西、真南、真北を示す。

遺跡の測量原点は、外郭範囲内のはば中央にあたる政府正殿東の任意点に埋標されている。その原点から真北を求めた南北基準線を定め、これに直交する東西基準線を定めて、座標軸を設定している。報告においてE・W・S・Nと共に示された数値は、測量原点からの座標上の位置、東西南北の距離を示す。

# 目 次

例言・凡例

<b>第Ⅰ章 遺跡の概要</b>	1
<b>第1節 遺跡の位置と立地</b>	1
1 秋田城跡の位置と立地	1
2 鶴ノ木地区の位置と立地	2
<b>第2節 遺跡の現況—鶴ノ木地区を中心に—</b>	5
<b>第Ⅱ章 研究史と保護の経過</b>	6
<b>第1節 研究史</b>	6
1 秋田城跡の研究歴史	6
2 鶴ノ木地区の研究史—その性格について—	7
<b>第2節 保護と活用整備の経過</b>	8
1 保護の経過	8
2 活用整備の経過	10
<b>第Ⅲ章 調査の経過と記録の方法</b>	13
<b>第1節 調査の経過</b>	13
1 文化財保護委員会による調査	13
2 秋田市教育委員会による調査	13
<b>第2節 記録の方法</b>	16
1 遺跡基準線と地区割設定の表示記号	16
2 遺構・遺物の表示方法	17
3 土器類の名称	17
<b>第3節 鶴ノ木地区発掘調査成果の概要</b>	18
1 国営調査	18
2 第7次発掘調査	19
3 第12次発掘調査	19
4 第18次発掘調査	19
5 第22次発掘調査	19
6 第25次発掘調査	20
7 第26次発掘調査	20
8 第30次発掘調査	22
9 第34次発掘調査	22
10 第35次発掘調査	25
11 第37次発掘調査	25
12 第39次発掘調査	25

13	第42次発掘調査	26
14	第46次発掘調査	26
15	第48次発掘調査	26
16	第50次発掘調査	27
17	第51次発掘調査	27
18	第57次発掘調査	27
19	第58次発掘調査	27
20	第61次発掘調査	28
21	第62次発掘調査	28
22	第63次発掘調査	29
23	第67次発掘調査	29
24	第69次発掘調査	30
25	第81次発掘調査	30
26	第91次発掘調査	30
<b>第Ⅳ章 検出遺構と出土遺物</b>		32
第1節	鵜ノ木地区の基本層序	32
1	自然地形と整地事業	32
2	各調査地の層序	33
3	鵜ノ木地区の基本層序と各層出土土器	34
第2節	検出遺構と出土遺物	42
1	建物跡	42
2	水洗便所遺構（SB1351掘立柱建物跡・SA1352材木列壠跡）	73
3	三本柱遺構	82
4	区画施設（材木塀・区画溝）	84
5	溝跡	93
6	道路遺構	100
7	堅穴住居跡・堅穴遺構	103
8	工房跡	129
9	井戸跡	131
10	土坑	151
11	土取り穴跡	161
12	祭祀遺構	165
13	墓壙群	185
14	その他の遺構	188
第3節	出土遺物（遺構外出土遺物および特徴的出土遺物）	189
1	土器・陶器類	189
2	瓦・埴類	191
3	木製品類	191

4	金属製品 .....	192
5	石製品 .....	194
6	土製品 .....	194
7	銭貨 .....	197
8	かわらけおよび貿易陶磁器 .....	197
第4節	出土文字資料 .....	202
1	木簡 .....	203
2	墨書き土器 .....	204
<b>第V章 自然科学分析 .....</b>		<b>205</b>
1	秋田城跡便所遺構における微遺体分析 .....	205
2	トイレ遺構に伴う木柵の年輪年代 .....	223
<b>第VI章 考 察 .....</b>		<b>224</b>
第1節	検出遺構について .....	224
1	遺構期の設定と変遷 .....	224
2	鶴ノ木地区中央建物群について .....	234
3	特徴的遺構について .....	253
第2節	出土遺物について .....	258
1	鶴ノ木地区における出土遺物の様相 .....	258
2	特徴的出土遺物の検討 .....	259
第3節	鶴ノ木地区の変遷 .....	266
第4節	鶴ノ木地区建物群の機能と性格 .....	273
1	古代における鶴ノ木地区の機能と性格 .....	273
2	中世における鶴ノ木地区の機能と性格 .....	275
<b>結 語 .....</b>		<b>277</b>
<b>図版</b>	遺構写真（図版1～39）.....	279
	遺物写真（図版40～59）.....	318
<b>資料編</b>	別編1 1 秋田城跡の出土土器編年 .....	339
	2 秋田城跡鶴ノ木地区出土墨書き土器集成 .....	346
別編2	2 秋田城跡鶴ノ木地区出土木簡集成 .....	369(8)
	1 秋田城跡鶴ノ木地区関係史料集成 .....	376(1)
<b>付図</b>	秋田城跡鶴ノ木地区遺構実測図（全体図1／300）	
	秋田城跡鶴ノ木地区遺構期別色分け図（全体図1／300）	

## 第Ⅰ章 遺跡の概要

### 第1節 遺跡の位置と立地

#### 1 秋田城跡の位置と立地（第1図）

史跡秋田城跡は、秋田県秋田市寺内の大畑・焼山・大小路・鶴ノ木・高野・見桜・堂ノ沢・神屋敷、秋田市将軍野南一丁目、秋田市土崎港南三丁目にかけて所在する。遺跡の位置はおよそ、北緯39°44'20"、東経140°05'00"で、城跡の外郭範囲内のはば中央にあたる測量原点は世界測地系座標で、X = -28562.592、Y = -64607.889である。

遺跡は秋田県の西中央部に位置する秋田平野の西部、平野中央部のJR秋田駅から直線で北西へ5kmの地点にあり、雄物川河口右岸の高清水丘陵あるいは寺内丘陵と呼称される標高30~50mの低位丘陵上に立地する。秋田城跡の外郭線は丘陵の高い部分を取り囲むように巡り、地形の制約をうけ不整



第1図 史跡秋田城跡位置図

方形を呈している。外郭の規模は東西・南北約550mであり、さらに中央に東西94m、南北77mに区画された政府域がある二重構造を基本構造としている。また、秋田城跡に関係する付属施設や居住域は丘陵全域におよんでおり、丘陵ほぼ全域が史跡指定地となっている。その指定面積は約893,733m<sup>2</sup>である。

遺跡の立地する高清水丘陵は、雄物川に隣接する低位丘陵で、城の北北西一南南東に延び、延長約3km、幅約800mの河食段丘である。遺跡西側を流れる雄物川は約2kmで日本海に至る。かつて丘陵の西縁に沿って北流し日本海に注いでいたが、その後大正6年から昭和13年の直路開削工事により新放水路が完成し、旧流水路は現在秋田運河（旧雄物川）と呼ばれている。

高清水丘陵と同様な河食段丘は海岸沿いに点々と続いている、南は大森山丘陵、勝平山丘陵、中野丘陵などがあり、秋田平野内では、千秋公園・飯岡山・長岡などに丘陵が分布している。いずれの丘陵もその基盤をなす地層は今から500万年前から始まり、200万年前まで続く新生代第三期「鮮新世」の天徳寺層や、これに整合（一部不整合）する上位の笹岡層である。高清水丘陵では、これらの第三紀層を不整合に被覆した、今から200万年前に始まる新生代第四紀「更新世」の湯西層（寺内層）が最上部の地層として現れている。また、丘陵は日本海岸に近接するため、北西からの季節風を受けて、北部から西部にかけて最上層土壤を覆うように2~10mの海岸飛砂が堆積している。

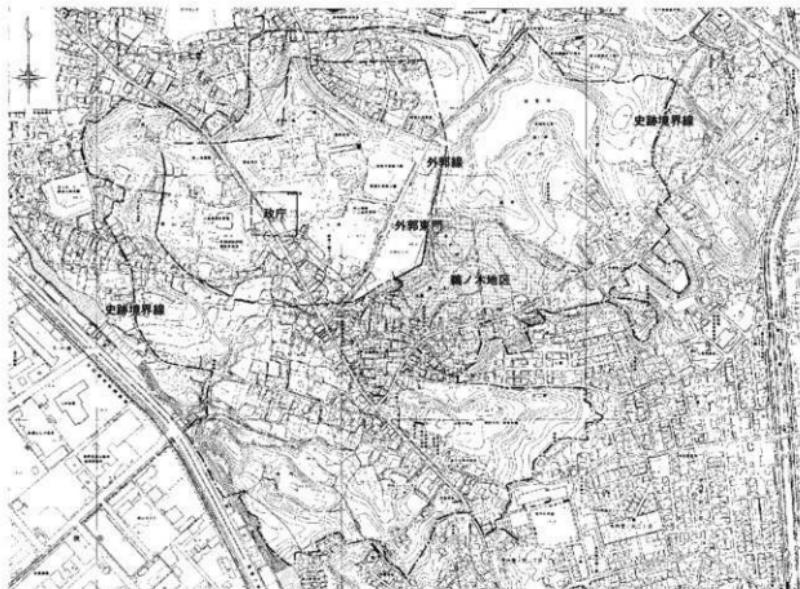
丘陵基盤の天徳寺層は泥岩やシルト岩から構成され、笹岡層はシルト岩や砂質シルト岩、そして上方に漸次砂質化する細微粒の砂岩から構成されている。一方、湯西層は礫、砂および泥から構成される凝固度の弱い良帶水層で、孔隙性、浸透性が共に高く好適な湧水層となっており、下位の笹岡層との境界は地下水流动面となり、凹所に被圧地下水が集水する。その地下水が層理や割れ目より湧水した部分は、現在、将軍野・大小路・鶴ノ木・焼山地区などにみられ、特に大小路地区にある湧水は「高清水」として有名である。それら丘陵上の豊富な湧水は地理的環境の特徴ともなっている。また、標高12~39mの丘陵斜面や周縁には、谷水や自然湧水を貯えた小さい池沼が数多く分布している。

## 2 鶴ノ木地区の位置と立地（第2~3図）

今回報告の対象としている鶴ノ木地区は、史跡指定地である高清水丘陵東側に位置している。標高30~40mの段丘面で、丘陵最上部となる西寄り標高40~50mの段丘面より一段低い位置にある。段丘面には微地形として小さな沢や尾根、丘陵によって構成される凹凸があり、丘陵上の浅い谷が飛砂によりせき止められ湧水や谷水がたまつた沼地や、窪地上の地形に湧水や谷水がたまつた沼地が認められる。地区北西にはSG463沼地跡、地区東側にはSG1206沼地跡が検出されており、それらは古代にも存在しており、SG463については自然科学分析により、その形成が3,000年~4,000年前・繩文中期末頃に遡ることが判明している。なお、地区北西側は飛砂が堆積しているが、東側から南側にかけては、飛砂が届ききらず、湯西層の粘土層が露出している。鶴ノ木地区の遺構は北西側は飛砂層を、東側から南側にかけては粘土層を地山層とし、構築面としている。

史跡秋田城跡における位置関係で見た場合、鶴ノ木地区は城外南東側一帯にあたり、地区中央南側の比高差5~8m、標高40~45mの小高い丘部分を中心にして秋田城跡に付属する古代の建物群等の施設が検出されている。また、居住域などの古代の遺構の広がりは、北側や東側を含めた地区全域に認められ、中世の遺構もほぼ全域で認められている。

古代の建物群が存在する地区中央南側小高い丘部分は、北側から東側を沼地で囲まれ、南西側は沢地形が入り込む湿地で囲まれ、さらに南側は段丘の急斜面となっており、半ば独立した丘陵地形となっ



第2図 史跡秋田城跡平面図・鶴ノ木地区位置図（1：10,000）

いていたと考えられる。しかし、現状ではその丘陵地形の南側半分が近世以降の土取りにより、削平され失われている。旧地形を復元すれば、北側の沼地や南側に向け緩やかに下る斜面を有する独立した小丘陵が、地区中央に存在してたと考えられる。

なお、今回鶴ノ木地区として報告対象とした範囲は、地番では寺内鶴ノ木のほか、北側に寺内高野、南側に寺内鬼桜の一部を含んでいる。また、寺内鶴ノ木地区内となっているが、鶴ノ木地区南西部については、前述した旧地形の沢地形や湿地により、地区中央部の遺構群とは分離していたと考えられ、また、今後城外南面区域の正報告の対象と判断されるため、報告対象から除外している。

#### 参考文献

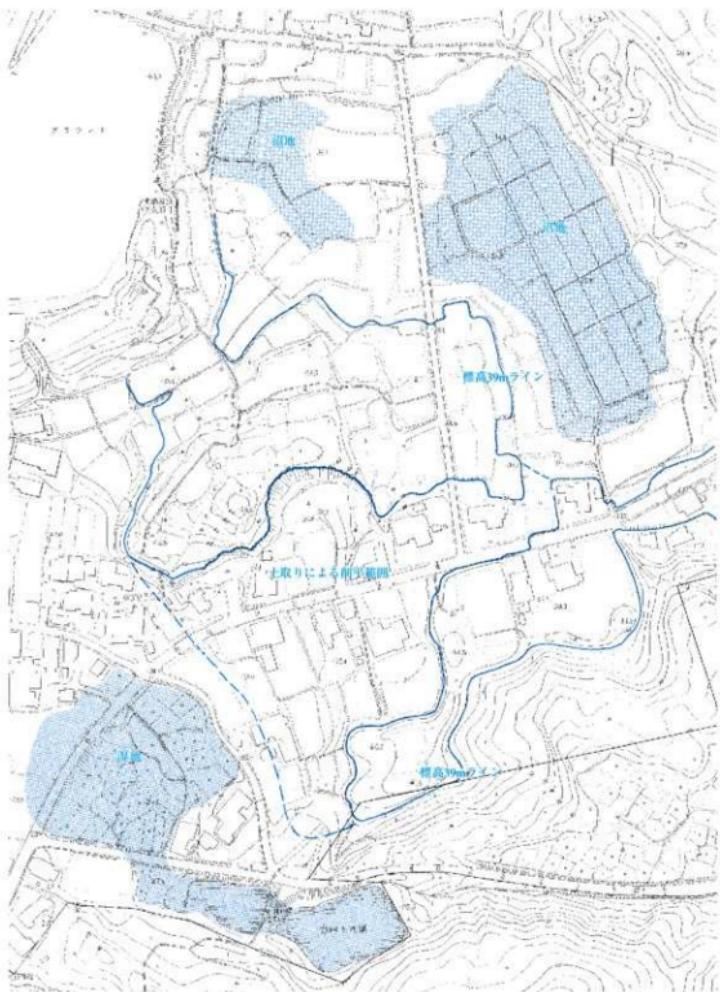
経済企画庁『土地分類基本調査 地形・



古四王神社方向から鶴ノ木地区南半部を望む



鶴ノ木地区南半丘陵上（土取り跡端部）より古四王神社方向を望む  
挿図1 昭和30年代の鶴ノ木地区南半部の状況写真



第3図 鶴ノ木地区旧地形復元図（1：2,000）

表層地層・土壤—秋田—5万分の1』 1966年

藤岡一男 「秋田城時代の地学的自然環境について」『秋田考古学』第37号 1981年

## 第2節 遺跡の現況—鶴ノ木地区を中心に—

史跡秋田城跡の史跡指定は、昭和14年9月であり、現在の指定面積は約893,733m<sup>2</sup>で、その約60%が山林及び畠、約30%が宅地である。

秋田市教育委員会秋田城跡調査事務所による発掘調査は、昭和47年（1972）から実施しており、2001年で第7次5ヶ年計画の第1年次にあたる。これまでに調査を実施した面積は、64,929m<sup>2</sup>で、遺跡面積の7.3%にあたり、長期計画で予定している発掘調査面積（150,000m<sup>2</sup>）の43.3%にあたる。

遺跡の所在する高清水丘陵周辺はかつて畠地や松林、水田が広がっていたが、昭和40年代以降宅地化が著しく進行し、現在は市街地化している。

秋田城跡の外郭を区画する築地塀跡は、土壘状の痕跡として現在も東辺及び西辺一部に残存している。また、外郭の東西南北の諸門のうち、鶴ノ木地区の北西にあたる外郭東門跡のみが、平成元年から同2年にかけての第54次調査で確認されている。その外郭東門付近は平成6年度以降、発掘調査結果に基づいた保存整備が行われ、東門や築地塀、大路などが復元・標示されている。

外郭築地で囲まれた城内の大部分は標高40m以上の丘陵にのっており、かつては畠地がほとんどを占めていた。現在この平坦部分には昭和初期から20年代の混乱期にかけて造られた護国神社が所在し、同時期に作られた焼山浄水場の跡地、高清水小およびグラウンドの跡地、秋田県自治研修所の跡地などの公有地が大きな面積を占めている。また東西には若干の畠地が残り、これ以外は住宅地となっている。外郭築地の北西部から南西方向に通称旧国道と言られている市道土崎保戸野線が走り、平坦地はこれによって分断されている。城内の政府跡は、護国神社南側広場を中心として国営調査とその後の秋田市教育委員会による調査により、構造や変遷が確認されている。政府城については平成14年度より環境整備事業が着手され、現在も復元と標示が進んでいる。

今回報告する鶴ノ木地区は、発掘調査開始以前は東側の旧沼地跡が水田として利用されていた以外は、畠地がほとんどを占めていた。一帯の畠地としての造成と利用は近世に遡る。また、前節で前述した地区中央南側の丘陵部については、明治から昭和初期を中心に段階的に土取りが行われ、昭和34年の国営調査開始段階では既に宅地や畠地となっていた。昭和41年度以降の土地公有化開始を受け、鶴ノ木地区では昭和50年度の第18次調査以降の発掘調査から平成19年度の第91次調査にかけて継続的に調査された。その結果、規則的配置に基づく建物群跡や沼地岸辺での祭祀遺構、古代水洗便所跡等の重要な調査成果が上がり、地区の実態解明が進んだ。

平成元年度からは史跡内で最初に発掘調査成果に基づく環境整備事業が着手され、整備地の造成、建物群や井戸跡等の復元・標示等が行われ、歴史公園としての整備が進んでいる（環境整備状況については第6図参照）。現状では地区中央と北部は歴史公園化し、地区南部は宅地となっている。地区北側の市道は城外東大路の整備により廃道となったが、歴史公園の中央を南北に走り北側で東に曲がる市道は通学路などとして利用され、現存している。なお、平成14年度からは古代水洗廁跡復元事業が着手され、現在事業が進行中である。

### 参考文献

- 秋田市教育委員会『史跡秋田城跡 保存管理計画』 1986年
- 秋田市教育委員会『史跡秋田城跡 整備事業報告書』 1999年
- 秋田市教育委員会『史跡秋田城跡 政府跡』 2002年

## 第Ⅱ章 研究史と保護の経過

### 第1節 研究史

#### 1 秋田城跡の研究歴史

秋田城の文献史料上の初見は、『続日本紀』天平5（733）年12月26日条「出羽柵 秋田村高清水岡遷置」で、「出羽柵」を移転し北進させ、「出羽柵」を秋田村高清水岡に遷し置いたことを記載したものである。ついで、『大日本古文書25巻』の天平宝字4（760）年3月19日「丸部足人解」の「阿支太城」とあるように、この頃秋田出羽柵から秋田城に改称されたことがわかる。以後、「秋田城」の名称は、11世紀中頃まで散見できる（別編2—3 秋田城・鶴ノ木地区関係史料参照）。その後多くの研究者によって文献上の解釈を中心に論議がなされてきた。

遺跡としての秋田城を記述した最も古い文献は、進藤重記により宝暦10年（1760）頃に書かれた『出羽国風土略記』であり、場所は不明ながらも高清水岡上に秋田城跡が存在していたことを記している。その後、寺内村明和年中（1764～1771）に寺内村古四王神社の惣宜 鎌田正家の祖父である鎌田正苗が刊行した『寺内古蹟記』に、現在の史跡指定地南側の勅使館が秋田城であるとの認識を示している。前述した鎌田正家に滞留していた紀行家 菅江真澄は、正家等から寺内村の由緒を聞き、古老から聞き取り調査を実施した。そして、文化9年（1812）頃に刊行した『水の面影』に、古四王神社から北側に見える小高い山が高清水の岡であるとの考えを記している。

これ以降、秋田城跡・出羽柵跡に触れているものに、文政6年（1823）に記された『秋田千年瓦』（黒澤道形著）や天保14年（1843）に記された『寺内村記』（高階貞房著）などがあり、高清水の地に秋田城を想定している。

近代に入った当初は、秋田城跡についての目立った研究や紹介はみられない。しかし、明治30年（1897）に至り、狩野徳蔵が『秋田城古跡考』で、勅使館を秋田城跡と考え同所を観察し、その様子を詳細に述べている。明治30年代から秋田県立秋田中学校に勤務した大山宏は、丘陵の現状調査や地名・神社仏閣などの資料分析を行い、秋田城=寺内説を結論付けていった。明治40年（1907）に刊行された『大日本地名辞書一河辺郡・南秋田郡一』（吉田東伍著）には、やはり勅使館を当初の秋田城跡とする考えが示され、その後の国府移転説についても述べられている。他に明治40年（1907）秋田魁新聞紙上に『秋田城考』（橋本宗彦）が発表され、寺内丘陵（高清水丘陵）全体を秋田城跡とする説を述べられており、勅使館=秋田城跡とする説から高清水丘陵全体を秋田城とする説も提唱されるようになる。

大正時代に入ると、秋田城跡をめぐる問題に取り組む地方研究者が増え、活発な論考がなされる。『秋田の土と人』（安藤和風著）、『秋田城跡に就て』（武藤一郎著）、『秋田城考』（栗田茂治著）、『秋田城趾署考』（大山宏著）などでは、勅使館を秋田城の付属施設と考え、高清水丘陵全体が秋田城跡であるとされた。土墨も一部確認してきたことから、文献とともに遺構や遺物などの資料からの分析が行われるようになった。秋田城の実態解明に向けた地元の気運が高まる中、大正13年9月に内務省史跡名勝天然記念物係官 柴田常恵が来秋し、秋田城の範囲を確定付けるために、土器や瓦といった遺物の分布状況や土墨の痕跡確認などの現地調査を実施した。詳細な測量調査により、大畠地区を中心とし、土墨の痕跡が確認され、秋田城の範囲は寺内丘陵のほぼ全体に広がることになった。この調査をもとに、昭和2年（1927）秋田師範学校 栗田茂治、佐々木三治郎らが踏査研究を行い、さらに、県の史跡名勝天然記念物調査員であった大山宏は、昭和6年（1931）に高清水丘陵全域と土墨遺構が遺

存していた約1.2kmにわたる部分の測量を行い、秋田城趾附近実測図を作成し、翌7年『秋田城趾に就いて』の論文を「秋田県史蹟調査報告書第一輯」に発表した。この土壙測量図は、現在発掘調査で確認されている外郭築地塀とはほぼ一致している。こうした現地調査成果を受け、昭和10年8月、史蹟調査のベテランである文学博士 萩野伸三郎が来県し、実地調査を行い、さらに秋田魁新報社主催で史談研究会が開催され、秋田城の位置・範囲は寺内丘陵のはば全城に及ぶとの結論が出され、これにより史跡指定申請が行われた。そして、昭和10年10月文部省史蹟調査会の史跡指定の承認を受け、昭和14年9月7日付けの官報告示を持って国指定史跡となった。

その後、社会情勢が変化するなかで、秋田城は重要な遺跡であるという認識はあったが、具体的な動きはほとんどなかった。

#### 参考文献

- 進藤重記 「卷之九一四 秋田城」『出羽国風土略記』歴史図書社 1974年  
鎌田正苗 『寺内古蹟記』  
菅江真澄 「水の面影」「菅江真澄隨筆集 内田武志編」平凡社 1988年  
黒澤道形 「秋田千年瓦」「新秋田叢書 第3巻」に所収 1939年  
高階貞房 「天保十四年九月二十日」「寺内村記」  
狩野徳藏 「秋田城古跡考」「棣華六号（「秋田寺内旧蹟誌」に所収）」東山文庫 1897年  
吉田東伍 「河辺郡・南秋田郡」「大日本地名辞書 第5冊の下」富山書房 1907年  
橋本宗彦 「秋田城考」秋田魁新報 1907年  
安藤和風 「秋田の土と人 土之巻」秋田郷土会 1931年  
武藤一郎 「秋田城趾に就いて」「秋田考古会会誌」1巻3号 1926年  
栗田茂治 「秋田城考」1926年  
大山 宏 「秋田城址考」「羽城55号」秋田県立秋田中学校内校友会 1926年  
「秋田城趾に就いて」「秋田県史蹟調査報告第一号」1932年

## 2 鶴ノ木地区の研究史—その性格について—

鶴ノ木地区については、後述するように昭和30年代に実施された国営発掘調査や昭和47年以来秋田市教育委員会が継続して実施している発掘調査の他、地元郷土史家らによる研究がなされている。

昭和34年～37年の国営発掘調査は、広範囲の面積を実施しており、その結果、大規模且つ整然と配置された掘立柱建物跡が発見されたことから『類聚国史』天長7年（830）条の出羽国大地震で倒壊した四天王寺跡との結論が示され大きな反響を呼んだ。

その後、秋田市が実施した発掘調査では国営調査で結論づけた四天王寺跡説を継承しつつも様々な検討がなされ、異なる見解も示されている。

昭和53年度第25次発掘調査では、SE406井戸跡から「天平六年月」とクギ書きされた木簡が出土したことから『統日本紀』天平5年（733）条に見られる出羽柵遷置が実証されたことは大きな成果であった。一方で、鶴ノ木地区の四天王寺跡への疑問も提示された。例えば、①寺の中心的建物である金堂とされている建物が掘立柱建物であること、②周囲の遺物出土状況から瓦葺きの可能性がないこと、③南面する伽藍配置とすれば金堂の後方にある講堂や鐘楼・経蔵とする建物群が正面（南）から見えないという地形的立地条件等々がその根拠となった。同時に、これまで秋田出羽柵（秋田城）の中心部が秋田県護国神社境内地と考えられていたものが、木簡の出土や同地区の大規模な建物群の存

在から鶴ノ木地区の可能性も指摘された（註1）。そんな中で、昭和55年第30次調査では、9世紀第2四半期と考えられる四面庇の堂風掘立柱建物とそれを取り囲む柵列跡が発見され、少なくともこの時期に仏堂の存在したことが明らかとなった。また、同地区からは多くの「寺」銘や「□玉寺」等の墨書き土器が出土しており、前述の建物配置、出土土器編年も考慮し、8世紀の建物群についても寺跡とする研究も発表された（註2）。

平成6年の第63次発掘調査では、鶴ノ木地区北東側で掘立柱建物の中に3基並んだ便槽と建物の外に延びる木樋、汚物を貯める沈殿槽がセットになった水洗便所跡が検出され、同地区的性格と機能を考える上で注目された（遺構の詳細は別項参照）。また、沈殿槽の中からは籌木や土器の他、土壤中から多量の寄生虫卵が検出された。特に注目を集めたのは、回虫や鞭虫等8種類の寄生虫の中に有钩条虫卵が検出されたことである。同条虫卵は、豚を常食とする人間を中心宿主として伝染する寄生虫であるが、古代日本では豚肉の食習慣がないことから中国大陆との関係が考えられた。このことは、同条虫卵が秋田城跡以外では鴻臚館跡からしか発見されていないことも大きな要因となった。秋田大学名誉教授新野直吉氏は、この寄生虫卵の出土に触れ、出羽柵を莊内から約100km北進した現在の高清水岡に遷設したのは、大陸を含む北方交流を意図したものであるという秋田城の機能・性格論を前面に出し、鶴ノ木地区の水洗便所は渤海国使節の客館的施設として設置され、使用されたものであることを論じた（註3）。これまでの調査では、秋田城跡及び周辺の遺跡から大陸との交流を直接的に示す考古学的遺物は出土していないが、秋田城跡から出土している鉄の鍔釜や「客人」「客厨」「迎京」「京迎」銘の墨書き土器に注目する研究者もいる。

鶴ノ木地区では、中世の遺物、遺構も多く出土している。特に、同地区中央部では低地に盛り土整地した面に掘立柱建物跡群を、また東側では掘立柱建物跡や井戸跡などが集中的に検出されており、積極的な土地利用が見受けられる。しかし、その遺構群全体を取り囲むような堀や土塁等の遺構が認められないことから、同地区的性格まで言及できないが、懸仏や中国製磁器も多く出土する等、一般集落とは異なる様相を示している（註4）。

註1 秋田市教育委員会『秋田城跡発掘調査概報』1978年

註2 舟木義勝「[秋田城跡]についての一考察—8世紀の土器と施設の創建年代—」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』1986年

註3 新野直吉「歴史学研究と考古学成果」「政治経済史学」1996年

註4 伊藤武士「出羽府中と秋田城」「中世出羽の領主と城館」奥羽史研究叢書2 2002年

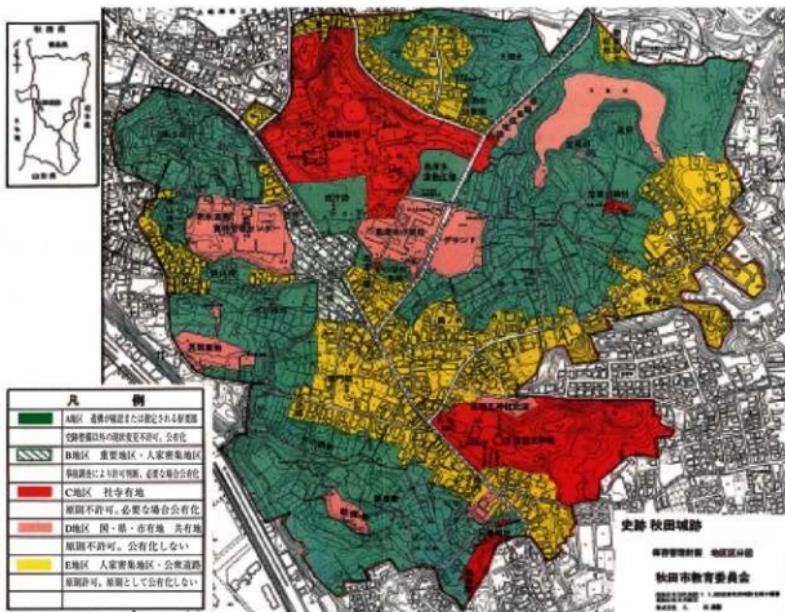
小松正夫「中世秋田城の行方—高清水岡の考古学的知見から—」「生産の考古学—倉田芳郎先生古希記念—」1997年

## 第2節 保護と活用整備の経過

### 1 保護の経過

#### 1) 史跡指定と保護管理計画策定（第4図）

秋田城跡は、昭和10年8月に史跡指定申請が行われ、昭和10年10月15日、文部省の部会で可決され、10月22日指定が決定された。文部省の官報告示第410号によって、正式に国史跡に指定されたのは、指定に必要な史跡の地番等の資料整理に時間を要し、昭和14年9月7日となっている。



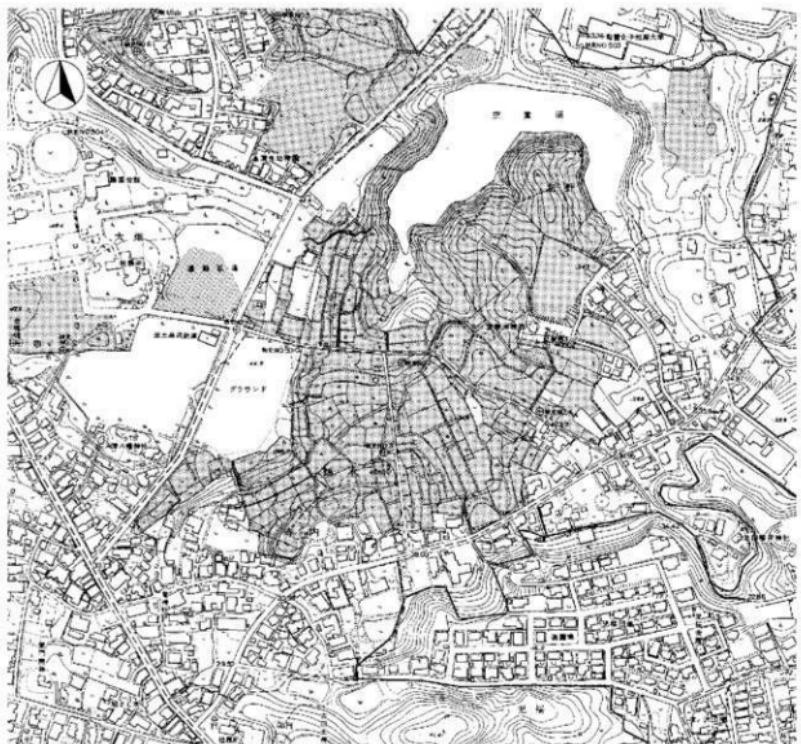
第4図 史跡秋田城跡保存管理計画図

その後、現状変更の急増に伴い、昭和34年から同37年にかけて実施された国営発掘調査の成果を踏まえ保存管理計画案を作成している。秋田市の都市開発部局との調整や部分修正を経て、昭和47年には秋田市教育委員会に秋田城跡発掘調査事務所を開設し、継続調査に着手するとともに保護管理体制を強化し、昭和52年に「保存管理計画」を策定している。また、昭和52年には、史跡の追加指定申請を行い、昭和53年3月22日の官報告示第51号で告示されている。その後調査による史跡実態把握の進展と社会環境の変化や、整備基本計画との関わりから、昭和62年3月に「保存管理計画」を改訂している。

現行の管理計画においては、今回報告の鶴ノ木地区は、北部から中央部がA地区（重要保存地区・土地公有化対象・史跡整備以外の現状変更不許可）、南部から南西部にかけての住宅地がE地区（人気密集地区・非土地公有化対象・現状変更原則許可）となっている。

## 2) 土地公有化（第5図）

秋田城跡の土地公有化は、史跡指定地周辺に土地開発が波及し、保存問題が深刻化する中、昭和40年の現状変更の不許可第一号が発生したことを受け、昭和41年度から土地買い上げ事業として開始された。それ以降現状変更が認められない重要保存地区について、秋田市が事業主体となり、国庫補助事業として実施してきた。また、昭和44年度から同46年度にかけて大幅な一筆測量を実施した。土地公有化は、地権者の買取請求に対応するとともに、公有地の散在防止のために高野・鶴ノ木地区を



第5図 史跡秋田城跡鶴ノ木地区土地公有化状況（1：5000）

公有化範囲

第1拠点、焼山地区を第2拠点、大小路地区を第3拠点、神屋敷地区を第4拠点として、円を広げる方向で公有化を進めてきた。また、開発防止の観点から道路沿いに主点を置き公有化を進めてきた。

今回報告の鶴ノ木地区は、国営発掘調査で秋田城に付属する四天王寺跡の存在が推定される重要な保有地区として位置づけられ、当初より重点的に買い上げが行われた。鶴ノ木地区における土地公有化は昭和43年度から平成19年度にかけて実施され、実績は公有化総面積が $34,142.48\text{m}^2$ 、公有化総額は371,614,510円となっている。地区公有化予定面積の95%が公有化済みとなっており、史跡秋田城跡内で最も公有化が進展した地区となっている。

## 2 活用整備の経過（第6図）

秋田城跡では、より積極的な史跡の保護と活用を図ることを目的に昭和59年度から昭和61年度までの3ヵ年計画で秋田城跡整備基本計画を策定し、平成元年度から環境整備事業に着手している。

通常、城柵等の整備は、中心施設である政府城や城柵の正面となる南門等から行うのが一般的であるが、秋田城跡の政府城である護国神社境内地の未買収地に存在した4基の石碑のため、一部調査が

実施できなかったことから、調査の進んでいた鶴ノ木地区から着手した。

### 1) 整備概要

本地区の建物群は、数時期の建て替えや城外にありながら大規模な建物を含み、規則的に配置されていた。建物の整備にあたっては、その規則性や建物規模を考慮し、柱位置や径、軒の出等を一部高さを加えて平面的に表示する手法を主体とした。

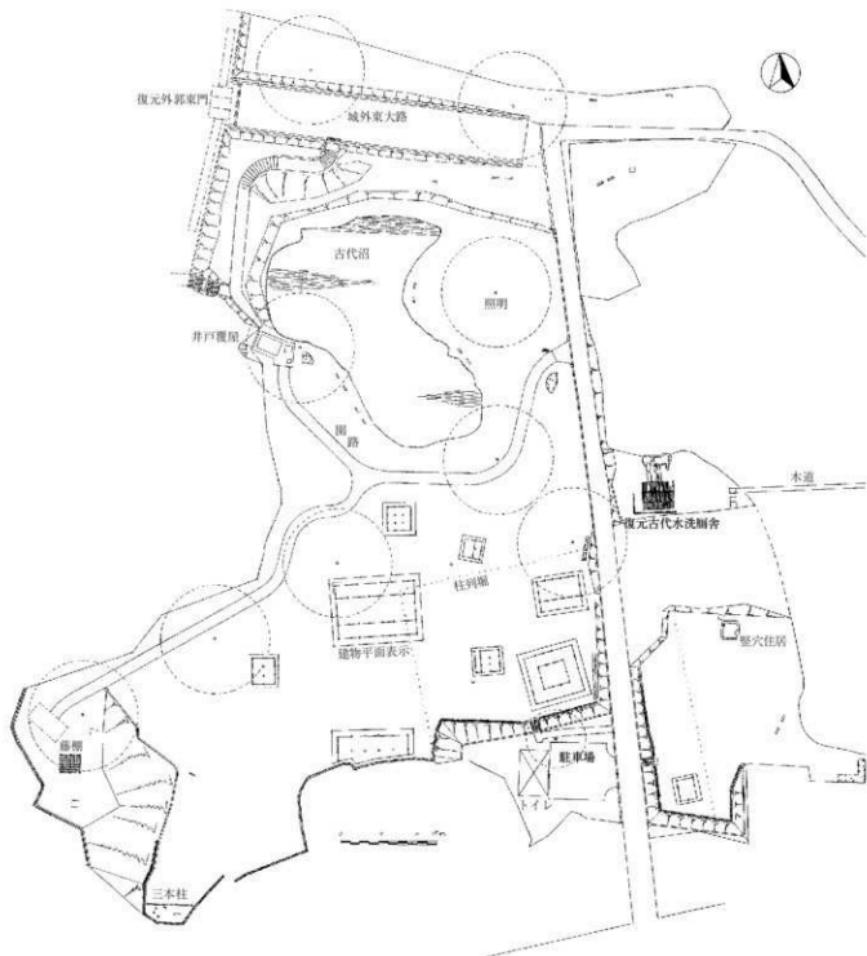
また、本地区北西側から検出された井戸跡については、発掘調査により再び湧水を始めたことから湧水と出土井側材を利用した露出展示を行っているほか、その東側から検出された大祓などが行われた沼跡については、安全性確保のため水深を浅くし、規模・形状を主とした復元を行っている。

その他、遺跡空間の整備という観点から植栽や地形についても可能な限りその復元に努めている。  
整備事業の概要について、以下に記す。

年 度	対象地区	施 工 内 容	面積 (m <sup>2</sup> )	事業費 (千円)
平成元年度	北 地 区	沼復元、園路、給排水施設 休養施設、植栽	5,400	15,449
タ 2 タ	中央地区 (1)	井戸覆屋、覆屋広場、照明灯3基 井戸・沼説明板、地区案内板 植栽、排水施設	252	15,002
タ 3 タ	タ タ (2)	建物平面表示2棟、園路、井戸説明板 排水施設、植栽	1,716	20,000
タ 4 タ	西 地 区 (1)	修景施設、園路、法面整形 植栽、休養施設、排水施設	2,069	20,001
タ 5 タ	タ (2)	建物平面表示2棟、三本柱造構表示 三本柱造構説明板、排水施設	1,790	20,006
タ 6 タ	北 地 区 (2)	園路、照明灯2基、沼説明板 植栽、排水施設	2,670	20,000
小 計			13,897	110,458

年 度	対象地区	施 工 内 容	面積 (m <sup>2</sup> )	事業費 (千円)
タ 7 タ	中央地区 (3)	建物平面表示1棟、柱列表示28本 植栽、排水施設	1,980	20,000
タ 8 タ	南 地 区 (1)	公衆トイレ トイレ出入り用通路	110	20,002
タ 9 タ	タ (2)	建物平面表示1棟、柱列表示9本 公衆トイレ外構	370	20,000
タ 10 タ	鶴ノ木 地区全体	照明灯4基、 誘導標7基	—	3,978
タ 11 タ	中央地区 (4)	建物平面表示1棟、柱列表示10本 植栽(保護工合)、排水施設	2,150	20,000
タ 12 タ	タ タ (5)	建物平面表示1棟、柱列表示5本 階段工、植栽、排水施設	670	20,000
タ 13 タ	東 地 区 (1)	建物平面表示1棟、柱列表示18本 階段工、植栽、照明灯1基、排水施設	1,280	20,000
タ 14 タ	タ (2)	建物平面表示1棟、柱列表示14本 竪穴住居・柱列用説明板、植栽、排水施設	860	20,000
タ 15 タ	タ (3)	水洗廁舎部分造成、木道設置 間伐、植栽、排水施設	5,700	20,000
タ 16 タ	東 地 区 (4)	雨池北端部造成	17,517	20,000
タ 18 タ	東 地 区 (3)	水洗廁舎便槽等レプリカ製作	—	23,625

年 度	対象地区	施 工 内 容	面積(m <sup>2</sup> )	事業費(千円)
平成19年度	東地区 (3)	水洗廁舍便槽等レプリカ据付 水洗廁舍建物復元	—	35,595
〃20〃 (予定)	タ (3)	水洗廁舍建物復元	—	—
合 計			44,534	353,658



第6図 鶴ノ木地区環境整備実施状況 (1:1,250)

## 第Ⅲ章 調査の経過と記録の方法

### 第1節 調査の経過

#### 1 文化財保護委員会による調査

秋田城跡の発掘調査は、昭和33年に高清水丘陵北側の幣切山で行われた宅地造成による無断現状変更がきっかけで、秋田県教育委員会が緊急発掘調査を実施したのが最初である。この結果を受けて、文化財保護委員会（現文化庁）は調査団を結成し、翌年の昭和34年～同37年まで4ヶ年計画で国営調査を実施した。

調査団は、団長を文化財保護委員会の斎藤忠文化財調査官（当時）が勤め、在京の大学教授や岩手大学、秋田大学の教授・学生、それに地元研究者を中心として結成され、主に7・8月の夏期に発掘調査が実施された。

調査地域はほぼ丘陵全体に及び、秋田城の中心部と考えられていた護国神社境内地南側の広場や大規模な建物跡が発見された神社西側の焼山地区、それに旧高清水小学校グラウンド東の鶴ノ木地区等、主要地域についてはトレーニングを拡張して広範囲の調査が行われた。

発掘調査の結果、丘陵南側の通称勅使館地区を含む土塁が秋田城の外郭を構成していることや、護国神社境内地南側の広場は柵列が巡る政府城、焼山地区は倉庫群の遺構が発見されたことが報告されている。

鶴ノ木地区については、昭和34年の発掘調査から第4調査班が「児桜地区」として着手した。調査の結果、掘立柱建物の掘り方等が検出されたため翌年度以降も引き続き継続調査が実施された。第2次調査の昭和35年は、昨年度の隣接地を鶴ノ木第一地区と地区名を改め第3班が、また第4班は地区内で最も低地の通称「雨池」部分のトレーニング調査を実施している。昭和36年第3次調査は、この年初めて「鶴ノ木地区—推定四天王寺跡—」として位置付けられ、当該地区が天長7年（830）に出羽国大地震で倒壊した四天王寺跡と結論付けた。最終年度の昭和37年第4次調査では、その結果を踏まえて『秋田城跡第四次調査概要』に地区的全体図と四天王寺金堂跡の復元図を掲載し、鶴ノ木地区を総括している。

#### 2 秋田市教育委員会による調査

##### 1) 調査に至る経過

史跡秋田城跡の発掘調査は前述したとおり、幣切山地区の宅地造成に伴う無断現状変更に端を発した昭和33年（1958）の緊急発掘調査や同34年から同37年までの4年間の文化財保護委員会による国営調査以降昭和46年まで実施されていなかった。しかし、昭和40年代に入り史跡指定地周辺に土地開発が波及し、保存問題が深刻化してくると、保存管理計画の策定も急がれることになった。しかし、国営調査が行われた以外の地区では保存のための基礎資料がなかったため、保存管理計画策定に必要な史跡指定地の遺構の分布状況・変遷・重要度を明確にするための発掘調査を実施することになった。基本的には、秋田城跡の外郭線の明確化や、政府・鶴ノ木・大小路・焼山地区等の遺構密集地の性格を明確化することも視野に入れた5ヶ年計画を基本とした年次計画が策定された。

昭和47年（1972）、国の指導を得て一貫した調査を継続して行うために、秋田城調査事務所を開設

した。発掘調査事業は国庫補助事業として、調査指導機関を宮城県多賀城跡調査研究所とし、継続実施された。

## 2) 全体年次計画と実績および調査成果

秋田城跡の外郭線や政庁の位置や構造など城の基本構造に関わる調査に加え、国営調査で推定四天王寺跡とされ重要遺構が存在するとされた鶴ノ木地区についても第2次5ヶ年計画以降、継続的に調査されている。

### 1. 第1次5ヶ年計画と実績（昭和47年～昭和51年、1972～1976）

基　本　計　画	実　績
(1) 秋田城の規模の明確化	(1) 発掘調査地 17地点
外郭線の調査	(2) 発掘調査面積 9,848m <sup>2</sup>
(2) 大規模調査に対応するための基準測量の実施	(3) 事業費 38,176千円
(3) 開発計画に対応し得る基礎調査の促進	
(4) 史跡保存のための基礎資料管理計画の策定	

### 2. 第2次5ヶ年計画と実績（昭和52年～昭和56年、1977～1981）

基　本　計　画	実　績
(1) 外郭線調査の継続	(1) 発掘調査地 14地点
(2) 鶴ノ木地区を中心とする調査 (国営調査時四天王寺とされていた)	(2) 発掘調査面積 11,820m <sup>2</sup>
政庁域の学術調査	(3) 事業費 63,197千円
(3) 現状変更届出に伴う緊急調査の実施	

### 3. 第3次5ヶ年計画と実績（昭和57～昭和61年、1982～1986）

基　本　計　画	実　績
(1) 鶴ノ木地区の学術調査	(1) 発掘調査地 12地点
(2) 政府地区の学術調査	(2) 発掘調査面積 10,089m <sup>2</sup>
大小路地区の学術調査	(3) 事業費 64,047千円
(3) 現状変更届出に伴う緊急調査	

### 4. 第4次5ヶ年計画と実績（昭和62年～平成3年、1987～1991）

基　本　計　画	実　績
(1) 鶴ノ木地区の学術調査	(1) 発掘調査地 11地点
(2) 政府域及び周辺の学術調査	(2) 発掘調査面積 8,243m <sup>2</sup>
(3) 東門周辺の学術調査	(3) 事業費 70,012千円
(4) 西側外郭線の学術調査	
(5) 現状変更届出に伴う緊急調査	

### 5. 第5次5ヶ年計画と実績（平成4年～平成8年、1992～1996）

基　本　計　画	実　績
(1) 鶴ノ木地区の学術調査	(1) 発掘調査地 11地点
(2) 焼山地区的学術調査	(2) 発掘調査面積 9,959m <sup>2</sup>
(3) 東門周辺の学術調査	(3) 事業費 77,013千円
(4) 現状変更届出に伴う緊急調査	

## 6. 第6次5ヶ年計画と実績（平成9年～平成13年、1997～2001）

基 本 計 画	実 繢
(1) 鶴ノ木地区の学術調査	(1) 発掘調査地 11地点
(2) 燃山地区的学術調査	(2) 発掘調査面積 6,724m <sup>2</sup>
(3) 大畠地区（旧高清水小学校グラウンド）の 学術調査	(3) 事業費（平成12年まで） 65,516千円
政庁域の学術調査	

### 3) 鶴ノ木地区調査実績一覧

今回鶴ノ木地区正報告書の報告対象とした範囲は、地番では寺内鶴ノ木のほか、北側に寺内高野、南側に寺内児桜の一部を含む。また、外郭東辺と外郭外南側にある鶴ノ木地区南西部における調査については、地番では寺内鶴ノ木地区内ではあるものの、今後、外郭区画施設の正報告や城外南面区域の正報告の対象と判断されるため、報告対象から除外している。地番（旧字名）で寺内鶴ノ木となっているが、報告対象から除外した調査地は、昭和48年度の第10次調査（鶴ノ木地区西部）、昭和51年度の第20次B調査（鶴ノ木地区南部）、平成16年度の第83次調査（鶴ノ木地区西部）となっている。

なお、調査次数については、昭和34年文化財保護委員会（現文化庁）による調査を1次とし、同37年までの1年度ごとの調査を1回の次数として第4次までとした。秋田城跡調査事務所が昭和47年度から開始した、次数番号については1現場を1次とすることから、通称勅使館の土壙（畑の耕作面積拡張のため土壙の一部が破壊）の調査を第5次調査として、以下調査地域単位に連続する番号を付して整理している。

表1 史跡秋田城跡鶴ノ木地区発掘調査一覧表

年 度	次 数	発掘調査地	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調 査 期 間
昭和47	7	高野地区南部	330	1972年 8月28日～12月20日
昭和49	12	児桜地区西部	450	1974年 4月3日～4月30日
昭和50	18	鶴ノ木地区中央部	180	1975年11月10日～11月18日
昭和51	18	鶴ノ木地区中央部	1,692	1976年 4月12日～7月 1日
昭和52	22	鶴ノ木地区北部	1,296	1977年 6月23日～8月 12日
昭和53	25	鶴ノ木地区中央部	1,476	1978年 7月10日～12月11日
昭和54	26	鶴ノ木地区中央部	1,683	1979年 4月16日～9月22日
昭和55	30	鶴ノ木地区中央部	1,780	1980年 6月16日～10月24日
昭和56	34	鶴ノ木地区西部	864	1981年 9月26日～12月12日
昭和57	35	鶴ノ木地区西部	972	1982年 4月 5日～7月 4日
昭和58	37	鶴ノ木地区北部	517	1983年 4月12日～5月18日
昭和59	39	鶴ノ木地区北西部	607	1984年 4月16日～7月 7日
昭和60	42	鶴ノ木地区西部	1,728	1985年 5月25日～12月13日
昭和61	46	鶴ノ木地区西部	504	1986年10月 6日～11月18日
昭和62	48	鶴ノ木地区南西部	966	1987年 4月16日～7月11日
昭和62	50	鶴ノ木地区中央部	567	1987年 9月24日～10月31日
昭和63	51	鶴ノ木地区中央部南西側	792	1988年 4月11日～7月 4日
平成3	57	鶴ノ木地区中央部南東側	1,300	1991年 7月18日～11月21日
平成4	58	鶴ノ木地区中央部東側	1,340	1992年 4月10日～10月 8日
平成5	61	鶴ノ木地区中央部東側	507	1993年 9月28日～12月28日
平成6	62	鶴ノ木地区北部	1,700	1994年 4月11日～9月 2日
平成6	63	鶴ノ木地区中央部東側	450	1994年 9月 5日～10月24日
平成7	63	鶴ノ木地区中央部東側	480	1995年 4月13日～8月18日
平成8	67	鶴ノ木地区北部	672	1996年 8月27日～12月11日
平成9	69	鶴ノ木地区北部	664	1997年 4月 7日～7月 8日
平成15	81	鶴ノ木地区東部	199	2003年 4月15日～6月 5日
平成19	91	鶴ノ木地区中央部東側	489	2007年 4月10日～10月 8日
		合 计	62,920	

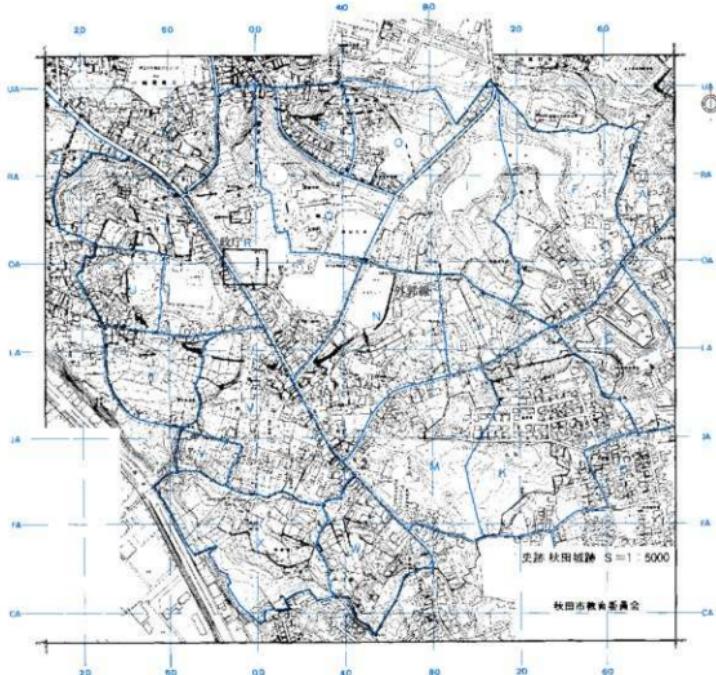
## 第2節 記録の方法

本遺跡は長期間にわたって調査を行うため、調査地域、検出構造や遺物の整理にあたっては、統一的な分類表示で行うことにして、原則として宮城県多賀城跡調査研究所の方法に従った。

## 1 遺跡基準線と地区割設定の表示記号

秋田城跡では、丘陵のほぼ中心部にある護国神社グラウンドの南寄りに測量原点を設置した。測量原点は世界測地系座標で、 $X = -28562.592$ 、 $Y = -64607.889$ である。さらに、この原点から真北を求める南北方向の基準線を定め、それに直交する線を東西方向の基準線とした。

調査区画の割り付けは、基準線に沿って3m方眼を設定し個々の区画を呼ぶ記号としてアルファベット2文字と、2桁の数字の組み合わせを用いている。すなわち原点を通る東西基準線をOAと定め、北へ3m毎にOB、OC～OTとし、番号付けし、21番目にあたる東西基準線から60mの線をPAとし、南北の基準線も3m毎にNT、NS～NA、MTと順次定めた。また、原点を通る南北基準線を00と定め、西へ3m毎に01、02～20、21とし、東の基準線も3m毎に99、98～80、79と順次定めた。そして、東西方向線と南北方向線の直交する地点の南東交点をグリッド名としている。



第7図 遺跡基準線と地区割り設定図

さらに、秋田城跡では、史跡指定地内を字界および道路を基準として、A～Yまでの地区割を行ない、その上に「秋田城跡」の略号である『DAK』を冠して標示すしている（頭文字のDは東北地方の城柵跡を意味し、AKは秋田城跡のローマ文字による頭文字である）報告対象の鶴ノ木地区は『DAKJ』の標示となる。

## 2 遺構・遺物の表示方法

発掘調査により発見される遺構には一連番号を付けている。この番号の前に遺構であるSと遺構の種類を示すアルファベット記号（第3表）を付して用いる。また、ほほ同位置・同規模で改築された遺構は同番号の後にA・B・Cをつけて区別している。これらの記号および種類は遺構登録台帳に記載する。遺物の標示は、遺構内は遺構毎か、遺構外は3m四方のグリッド単位で取り上げている。この際番号の前に遺物の材質を示すアルファベット記号（第3表）を付すことにしている。

遺物カードには遺物の一連番号、出土層位、取上期日も記入している。

表2 遺構・遺物の分類記号

遺 構				遺 物			
SA	柱列・柵列	SH	広場	D	土器	A	土製品
SB	建物	SI	堅穴住居	S	石製品	C	繊維製品
SC	廊	SK	土坑	T	鉄製品	B	漆器
SD	溝	SKF	フ拉斯コ状ピット	M	木製品	X	その他
SE	井戸	SX	その他	K	瓦・搏		
SF	墓地						
SG	苑池						

### 参考文献

宮城県多賀城跡調査研究所 「遺跡の調査計画と調査整理方法」「宮城県多賀城跡調査研究所年報1971年」 1972年  
秋田市教育委員会 「秋田城跡」「昭和47年度秋田城跡発掘調査概報」 1972年

## 3 土器の名称

秋田城跡から出土する土器類としては、土師器、須恵器、赤褐色土器の種別がある。

土師器には、非クロコ成形とクロコ成形があり、酸化炎焼成されている土器である。非クロコ成形のうち壺類と鉢類には内面にミガキ調整と黒色処理が施される。器種としては、供膳具の壺・高壺・台付壺、貯蔵の壺・甕・鉢、煮炊具の甕などがある。クロコ成形のものは、壺、皿、鉢等の供膳具があり、内面または内外面にミガキ調整と黒色処理が施される。

須恵器は、ロクロ成形、窯で還元炎焼成された土器で、秋田出羽柵創建期にあたる八世紀前半では関東、北陸、陸奥からの搬入品と考えられるものが主体を占め、その後八世紀中頃以降は在地生産供給が増加する。器種としては供膳具の壺、皿、塊、台付壺、双耳壺、高壺、蓋、貯蔵具の壺、甕、鉢等がある。

秋田城跡の発掘調査を実施している秋田市教育委員会では、ロクロ成形、酸化炎焼成ではあるが、黒色処理を行わない土師質の土器について、その色調などから「赤褐色土器」と呼称し、他のロクロ土師器と区別している。赤褐色土器は特に平安初期以降に出土土器の組成の中で大きな割合を占め、それが秋田城跡出土土器の様相の特徴となり、出羽北部地域における土器様相の特徴ともなっている。

赤褐色土器の器種としては、供膳容器として壺、台付壺、蓋、皿、台付皿があり、煮炊具として甕、鍋、脚付き鍋、瓶、貯蔵容器として鉢などがある。また、赤褐色土器のうち壺類の底部から体部下端及び下半にかけてケズリ調整を施すものを壺B、無調整のものを壺Aとしている。

### 第3節 鶴ノ木地区発掘調査成果の概要（第8・9図）

#### 1 国営調査（図版1・2）

##### 1) 昭和34年 第1次発掘調査

発見遺構は、掘り方が南北に3列並ぶ東西棟の掘立柱建物跡1棟で、規模は不明であるが柱間が約13尺、掘り方の深さが2尺～3尺で柱痕跡も認められる。遺物は土師器、須恵器が少量出土している。

##### 2) 昭和35年 第2次発掘調査

前年度の北方地区を第1地区として調査を実施した結果、10間（23.2m）×5間（12.57m）の東西棟で南面に庇が付く掘立柱建物が検出された。また、前年度発見された建物との位置関係や建物規模から天長7年（830）の文献に見られる四天王寺跡と推測され、前年度の建物を金堂跡、本年度の建物を講堂跡とすることが妥当との見解が示された。このことは、同地区で出土した「寺」銘の墨書き土器が性格を決定する重要な遺物として特記されている。遺物は、土師器、須恵器や瓦、埴等が出土したが何れも少量だったことから、屋根については一部にのみ瓦が使用されたとの見解を示している。

また、同地区の最も低地に当たる通称「雨池」を第2地区として調査を実施している。全体に泥炭層が堆積していることから、遺構の存在は否定されている。遺物は、土師器、須恵器の他、木皿、さらに頭部を三角に削り出した斎串等多くの木製品も出土している。

##### 3) 昭和36年 第3次発掘調査

前年度調査地の西側を中心に推定四天王寺跡として4地区（A～D地区）の調査が実施され、A・C地区では次の重要な遺構が発見された。A地区では、竪穴住居と重複して前年度講堂跡と推定された建物の西に東西7間（22m）×南北4間（10.5m）の東西棟の掘立柱建物跡が検出された。掘り方は一辺が約1.5m前後、深さが1.5～1.6mの大きさで、ほぼ真中に40cm前後の柱痕跡が認められている。C地区では、前年度の金堂跡とされた建物の西に近接して南北3間（5.4m）×東西2間（4.85m）の南北棟の総柱建物跡が検出されたが、これまでの建物配置から経蔵と推測された。

##### 4) 昭和37年 第4次発掘調査

前年度に講堂跡とした南側が調査対象地である。調査の結果、前年度に講堂跡とした建物跡から南に27mの位置に東西5間（18.5m）×南北5間（15m）の東西棟の掘立柱建物が検出された。さらに、本建物跡と前年度の講堂跡、経蔵跡との配置関係から西側の建物を想定し、調査したところ、そのほぼ想定位置に経蔵跡と同規模の総柱建物跡が検出された。

これらのことから、昭和34・35年の南北に2棟並ぶ東西棟建物の南を金堂跡、北を講堂跡として第一次四天王寺跡、同36・37年の南北に並ぶ2棟の東西棟建物の南を金堂跡、北を講堂跡、さらに両者の中間に東西に並ぶ建物をそれぞれ経蔵、鐘楼として第2次金堂跡と結論づけた。

また同地区からは、土器の形態から平安時代と考えられる口縁部を入れ子にした合口甕棺が出土している。土壤の掘り方は長軸80cm、短軸50cm、ローム面からの深さは20cmで、甕は長軸方向に埋設さ

れていたが、人骨等の伴出遺物は検出されていない。

## 2 第7次発掘調査（昭和47年度）

第7次発掘調査は高野西部の畠地を対象とした。調査地は、高清水小学校のグラウンド東側を走る築地塙跡の東方100m、推定四天王寺跡とされていた地区中央建物群の北東140mに位置する。

調査は、空素沼南部分における秋田城の北、東郭線遺構の有無を追求、確認することを目的に実施された。調査の結果、目的とした外郭線遺構は検出されず、SX109のツキ固め遺構と2条の溝跡と柱穴群が検出された。遺構を覆っている黒砂層から須恵器、土師器、須恵系土器、灰釉陶器などが出土し、ツキ固め遺構は古代の道路状遺構となる可能性も考えられた。

## 3 第12次発掘調査（昭和49年度）

第12次発掘調査は、児桜西部を対象とした住居新築に伴う現状変更による緊急調査である。調査地は、推定四天王寺跡とされていた建物群の南100mに位置する鶴ノ木地区丘陵の南端部付近である。標高も建物群と同位で40m程であり、中間部が土取りされる以前は、建物群から調査地へ緩やかな傾斜面が続いていると考えられた。位置的にも建物群に近接することから、関連する遺構の有無を確認する目的で実施した。

調査の結果、調査地北西で南北から北東に延びる東西方向のSD162溝状遺構を確認した。埋土から須恵器壺や赤褐色土器壺が出土した。調査地南側ではカマドを伴う堅穴住居跡が1軒検出された。当初目的とした建物群に直接関連する遺構は確認されなかったが、鶴ノ木地区丘陵の南端部に古代の遺構が広がりを持つことが確認されるとともに、SD162については建物群南側を区画する区画溝となる可能性が残った。

## 4 第18次発掘調査（昭和51年度）

第18次発掘調査は鶴ノ木中央部を対象とした。東外郭線の東方約100mの周囲より一段高い丘陵部で、昭和34年から37年の国営発掘調査では掘立柱建物群が検出され、四天王寺跡に推定されている場所である。国営発掘調査では推定四天王寺跡は二時期あるとされており、東側を第一次、西側を第二次四天王寺跡としている。調査では第一次四天王寺跡としている東側の地区を発掘し、さらに北側に調査区を拡張して付属建物の確認とその性格を解明することを目的に調査を実施した。

国営調査を行った南側調査区の再発掘により、国営調査で講堂跡とされていた掘立柱建物跡は時期や方位のことなる4棟の建物跡（SB257、SB258、SB262、SB263）の重複であることが判明し、新たに4棟の建物跡が検出された。その他に掘立柱建物跡、堅穴住居跡、井戸跡、溝跡、溝状土坑、ピット群が検出された。北側調査区からは、古代の土取穴、堅穴住居跡、縦柱掘立柱建物跡2棟、井戸跡2基などが検出された。そのうちのSB266・SB268掘立柱建物跡、SE269井戸跡は、古代の土取り穴を埋め立て、整地した面から堀り込まれている中世の遺構群と判明した。調査の結果、調査地南側で推定四天王寺跡の地区中央建物群に付属する建物の一部を確認し、北側には中世の遺構が重複することが明らかになった。

## 5 第22次発掘調査（昭和52年度）

第22次発掘調査は鶴ノ木中央部を対象とした。前年度調査した第18次調査地の北側に調査地を設定し、建物群の北への広がりとそれらを区画する遺構の有無を追求する目的で調査を実施した。

調査により、井戸跡、土坑、溝などの遺構が検出されたが、第18次調査で検出した掘立柱建物群に

関連する遺構は確認できなかった。また、「ドジョウ穴」と呼ばれる溜め池があった調査地北西部で、スクモ層（泥炭層）の厚い堆積、古代の沼地跡の存在を確認した。土坑はSK326からSK345までの20基を検出した。ほとんどが調査地北東部に集中し切り合って検出されたが、埋土の状態や出土遺物などから、短期間に掘り込まれた古代の土取り穴と考えられた。溝跡は4本検出され、区画溝か道路側溝の可能性が考えられたが、後に排水溝の可能性が高まった。

## 6 第25次発掘調査（昭和53年度）

第25次発掘調査は寺内鞠ノ木中央部を対象とした。調査地は東外郭線の東方約100mのところで、南側は周囲より一段高くなっている北に傾斜している。一段高い南側では昭和34年から同37年の国営発掘調査で推定四天王寺第二次講堂とされる建物跡、それに10軒前後の堅穴住居跡が検出されていた。また、調査地に隣接する東側では第18次調査が行われ建物群などの遺構が検出されていた。調査では国営発掘調査地域を再調査するとともに、それよりさらに北側に調査区を延ばし、地区中央建物群やそれに関連する遺構の広がりを追求し、性格を究明すること目的に調査を実施した。

調査の結果、推定四天王寺第二次講堂の建物跡の他に、新たに掘立柱建物跡、堅穴住居跡、堅穴状遺構、井戸跡、溝、土坑、ピット群等を検出した。国営調査地を再発掘した南側では、推定第二次講堂として桁行二間×梁間三間で、ほぼ同位置・同規模で重複する2棟の大規模な東西棟建物であるSB006・SB395掘立柱建物跡を検出した。SB006は南北廂建物、SB395は廂の付かない建物跡であることが確認された。SB395の柱痕跡には多量の焼壁や炭化物が認められ、火災により焼失したものと考えられ、また、重複切り合い関係から、SB006よりSB395が新しいことが判明した。また、SB395から北に約14mの位置で検出された東西三間×南北三間の総柱のSB396掘立柱建物跡は、SB006と東側梁間の柱筋が通ることから、同時期の建物と考えられた。

さらに重要遺構としてSE406井戸跡が調査地北東側で検出された。井筒内埋土から秋田城跡の調査では初めての本簡が7点出土した。そのうちの1点は「天平六年月」と釘書きされており、まさに『統日本記』の天平五年条にある出羽柵の秋田村高清水岡移遷の記事、高清水丘陵における出羽柵（秋田城）の創建を裏付ける貴重な調査成果となった。また、それにより鞠ノ木地区中央建物群が創建期に遡る重要な遺構群であることも再認識されることになった。SE406は井戸館を伴い玉石敷きであり、底部からは厚い杉材を加工し、組み合わせた井筒が検出された。井筒底部は埠敷で、そこから「龍」や「人物」の墨書塙が出土した。調査地からは、この他に3棟の掘立柱建物跡と堅穴住居跡が7軒検出された。

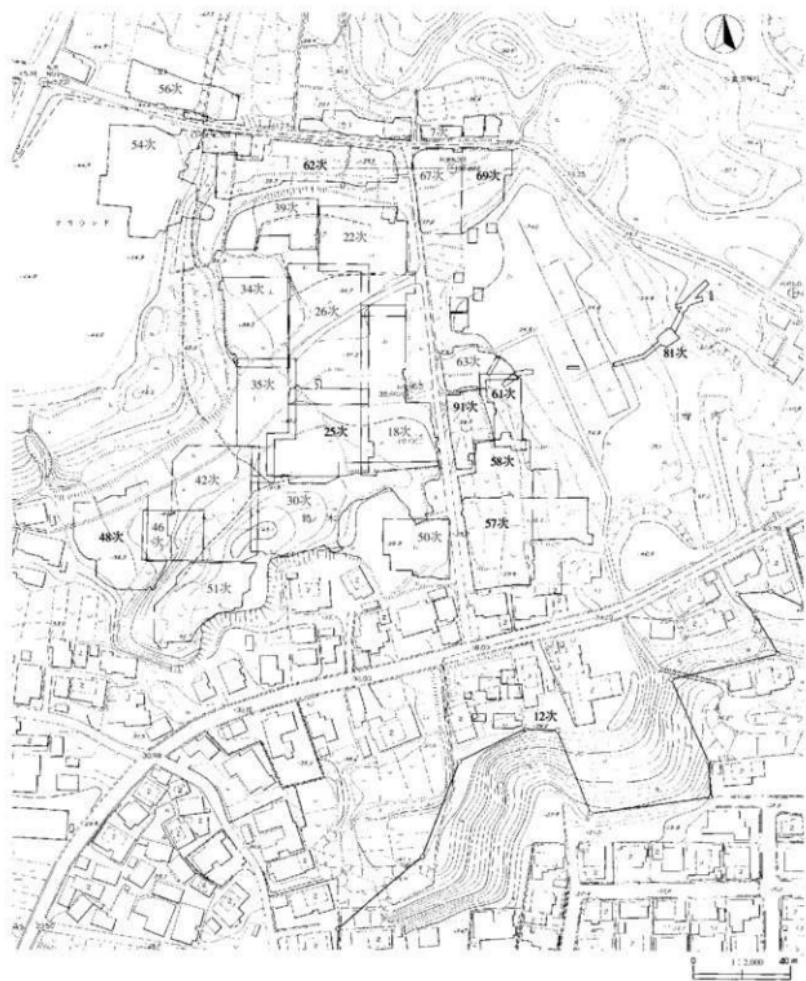
## 7 第26次発掘調査（昭和54年度）

第26次発掘調査は鞠ノ木中央部を対象とした。調査地はこれまでの調査で確認された地区中央建物群の北側にあたり、新たな遺構の広がりを把握し、建物群を囲む区画施設の有無と、遺構の時期的な立地状況を確認する目的で実施した。

調査のにより、新たに掘立柱建物跡3棟、井戸跡3基、溝、土坑、杭列を検出したが、建物群の区画施設は確認されなかった。調査地北側では泥炭が堆積する沼地跡が広い範囲で確認された。調査地南側の一段高い場所ではSB396・SB397掘立柱建物跡が検出された。SB397は桁行三間×梁間二間の南北棟建物、SB429は東西一間×南北一間で、建物方位はともに同方向を示していた。

北側の調査地で確認された沼跡は北西から南東方向に約40m程伸びてさらに北東方向に続いており、SG463沼跡とした。深さは約1.5mで南岸部の上面は整地地業により埋め立て整地されている。この

整地層は2層認められ、珠洲系陶器を含む上層整地層は中世、赤褐色土器が主体の下層整地層は古代と考えられた。また古代整地層からは「寺」、「○○王寺」と墨書された土器がまとまって出土したことから、周辺に寺院跡の存在が推定された。沼の南側には沼を巡るように数条の溝が検出され、溝南側の中世整地層面ではSB427総柱建物跡、SB428掘立柱建物跡、SE430・SE431・SE432井戸跡が検出された。調査の結果、中央建物群の北辺部が確認され、その北側のSG463沼跡南岸には中世の生



活域が広がっていることが明らかになった。

### 8 第30次発掘調査（昭和55年度）

第30次調査は鶴ノ木中央部を対象とした。調査地は第18、25次調査地の南にあたり、鶴ノ木地区でも標高の最も高いところである。国営調査が実施されており、推定四天王寺の第一次、二次の金堂跡、経蔵あるいは鐘楼跡と呼ばれる掘立柱建物跡が検出されている。調査は、国営調査地の一部を再発掘し、これら建物の性格や規模、構造、変遷等を明らかにすることと、付属する施設や他の遺構を把握し、鶴ノ木地区南側の実態を解明することを目的に実施された。

調査により、掘立柱建物跡11棟、堅穴住居跡8軒、柱列4列、溝跡8条、土取り穴群、袋状ピット、土抗等を検出した。最も高いところで検出されたSB018掘立柱建物跡は、推定四天王寺の二次の金堂跡とされてた建物跡で、身舎が桁行五間×梁間三間以上の東西棟で、北廊を持ち、建物方位は桁行方向が西で3度北に振れていることが確認された。南側は土取りにより削られ崖になっており不明であった。焼土・炭化物が建物跡身舎の柱痕跡に多量に混入していることから、身舎部分についてはSB018と同位置、同規模、同方向でSB484に建て替えが行われたことが判明し、その後火災で焼失したものと考えられた。SB018、SB484から北東に約25m程離れた場所では、推定四天王寺の経蔵に比定されていたSB019、SB485掘立柱建物跡が重複して検出された。SB485は、桁行三間×梁間二間で西廊を持つ南北棟の純柱建物跡であった。ほぼ同位置、同規模でSB019に建て替られており、SB484同様身舎の柱痕跡には焼土・炭化物を多量に含み、やはり火災で焼失したものと考えられた。

調査地東側では第一次金堂と推定されたSB488掘立柱建物跡を再検出し、桁行三間×梁間二間の東西棟で東西南北に廊の付く四面廊の掘立柱建物跡と推定された。SB487掘立柱建物跡は新たに判明した建物で、SB488を北に移動して建て替えたもので、桁行三間×梁間二間の身舎の四面に廊が付く堂風建物であった。建物方位は桁行方向が西で14度南に振れており、建物方位をやや異にして建て替えられていた。また、鶴ノ木地区中央部で初めて区画施設が検出された。SA500～SA503の4列の柱列は、布掘り溝に柱穴が認められる木材辨跡であり、方向が真北や真西に対し10度の振れを持つSA502柱列と約13～15度とやや振れの大きいSA500・SA501柱列があり、これまで調査してきた地区中央東側で検出された10度以上の振れのある建物跡に関連する区画施設と考えられた。この他にSB490、SB491、SB492掘立柱建物跡が確認された。堅穴住居跡は調査区の西半部にまとまり8軒が検出された。

調査により、中央西寄りの規則的配置に基づく推定第二次四天王寺とされた建物群には新旧2時期の変遷があり、新しいものは火災を受けていること、中央東寄りの推定第一次金堂跡は建物方位とプランが前者とは大きく異なり区画施設を伴うことが確認された。

### 9 第34次発掘調査（昭和56年度）

第34次調査は、鶴ノ木地区西部、第26次調査地の西側隣接地を対象とした。これまでの調査で確認されている地区中央建物群に伴う遺構の広がりの追求と、鶴ノ木地区北側に広がるSG463沼地跡と沼地岸辺の整地範囲や整地に伴う遺構の追求を目的に実施した。

調査の結果、掘立柱建物跡群に伴う奈良時代の遺構は検出されなかつたが、平安時代や中世の遺構の広がりが確認された。SG463沼地跡についてはその範囲が東西約35m以上で北西方向に延びており、南北は60m以上となることが判明した。SG463沼地跡南西岸でも平安時代後半の整地が確認され、沼の南縁全面にわたり整地を行っていることが確認された。遺構としては井戸跡、堅穴遺構、土取り穴



第9図 鶴ノ木地区各調査次数調査範囲および検出構造

等が検出された。そのうち SE621井戸跡は、「井籠組」を基本とした構造からなる9世紀後半の井戸と推定された。竪穴遺構は3基検出されており、土取り穴埋土を掘りこんでいることや、SI610からは古瀬戸の破片が出土することから中世以降の時期が考えられた。SI622や土取り穴と思われるSK611～613、SK623～625はSI622から赤褐色土器が出土しており、また古代整地層面で確認されていていることから、平安時代の遺構と考えられた。

## 10 第35次発掘調査（昭和57年度）

第35次調査は、鶴ノ木地区西部、第25・26次調査地西側および第34次調査地南側隣接地を対象とした。調査は地区中央建物群に伴う遺構の広がりの追求と、鶴ノ木地区北側に広がるSG463沼地跡岸辺の整地範囲や整地に伴う遺構の追求を目的に実施した。

調査の結果、SG463沼地跡岸辺からの整地が本調査地まで及んでいることが判明した。また、整地層下には北側の第34次調査地から連続するSK651土取り穴群が検出され、鶴ノ木地区西側一帯に古代の土取り穴群が広がることが判明した。珠洲系中世陶器が出土する整地層の上面からは中世の墓壙群、井戸跡、掘立柱建物跡などが検出された。鶴ノ木地区西側には中世の墓域が存在することが明らかになつた。墓壙群はST627～ST635、ST653、ST656からなり、そのうち、ST627は内部に多量の炭化物が認められ火葬が行われたものとも考えられた。副葬品の銭貨から寛永通宝など近世の銭貨は出土しないことから、墓壙は近世以前のものと考えられた。SE626井戸跡は墓壙と同時期かそれより降るものと考えられた。この他に地山飛砂層検出のSX654落ち込みからは縄文時代後期初頭の土器が出土し、縄文時代の生活域の存在も確認された。

## 11 第37次発掘調査（昭和58年度）

第37次調査は鶴ノ木地区東部の通称雨池と言わされている低湿地を対象とした。調査は、低湿地と西側の鶴ノ木地区南半建物群が検出されている一段高い台地部との関連を把握することと、国営調査でこの地より多くの木製品が出土しているので、遺物の散布状況を確認することを目的とした。調査の結果、北側グリッドで表土下のスクモ層直上に土師器、須恵器の小破片数点と腐植の進んだ木製品が数点検出されたが、スクモ層を部分的に掘り下げた所では遺物は認められなかった。地形との関連では、古代の沼地の存在は把握されたものの、遺物の分布は密ではないと判断された。

## 12 第39次発掘調査（昭和59年度）

第39次調査は鶴ノ木地区北西部、東外郭線の隣接地を対象に、これまで確認しているSG462沼地跡の北岸を明確にすることと、沼地の形成過程を把握する目的で調査を実施した。

調査の結果、SG462沼地跡の北岸から北西岸部が確認され、それによりSG462沼地跡はその全容がほぼ解明された。沼地跡は東西約40m、南北約60mの大きさで、形は東に屈曲する「く」の字状になつておらず、スクモ層（泥炭層）の堆積が確認され、最深部で厚さ1.5mの堆積が確認された。自然科学分析により、BC1700年頃・縄文時代中期末頃から自然形成された沼地であることが明らかとなつた。沼地跡は南側岸部分を中心に古代（9世紀後半）と中世（13世紀）、の大きく二時期に整地されていたが、北岸から西岸では中世の整地は確認されず、中世の利用はないことが把握された。

SG462沼地跡北岸にはSD738大溝やしがらみを組んだ土留めと思われるSA739、SA740A・B杭列が検出された。さらに北西岸ではSX741のステップ状の張り出し部が人工的に造成されており、その北西岸地を中心に多量の祭祀遺物が出土した。斎串、刺串、人形、馬形、呪符木簡等の木製祭祀具

や人面墨書き土器甕に加え、木器や土器類が出土した。これらは「祓」の儀式に関わる祭祀遺物と思われ、沼地の北西岸が祭祀場として利用されていたこととともに、最北の古代城柵の秋田城においても律令祭祀が執り行われていたことも明らかとなった画期的な成果となった。

### 13 第42次発掘調査（昭和60年度）

第42次調査は、鶴ノ木地区西部を対象に、地区中央建物群に伴う遺構の広がりの追求と、その時期を把握することを主目的に実施した。

調査により、国営調査で一部検出済のSB021掘立柱建物跡を検出した。建物跡の調査については検出段階で留め精査は次年度に行うこととした。調査区の北、西側の低地ではSK824～SK828などの古代の土取り穴が多数検出された。中でも北東部で検出したSK824土取り穴からは、埋土からは外面に花弁状の模様を墨書きした赤褐色土器小型甕出土し、何らか祭祀行為が行われたと考えられた。北東に隣接する第35次調査地と同様、北半部では中世の小ビット群と北西部でST808～ST813、ST838～ST840からなる墓壙群を検出した。調査の結果、古代の土取り穴と中世の墓域がさらに広がりを持つことが明らかになった。調査区南西部では縄文時代前期の地床炉を伴うSI834・SI835堅穴住居跡とSK836フ拉斯コ状土坑が検出され、縄文時代の生活域も鶴ノ木地区西部全体に広がりをもつことが明らかになった。

### 14 第46次発掘調査（昭和61年度）

第46次調査は、鶴ノ木地区南西部の第42次調査地の西隣接地と、昨年度、調査期間の関係で精査を中断したSB021掘立柱建物跡を対象として実施した。これまでにSB021掘立柱建物跡は新旧二時期に重複が判明しており、新しい時期の建物をSB021A掘立柱建物跡、古い時期をSB021B掘立柱建物跡とした。SB021A掘立柱建物跡は、桁行三間×梁間二間の南北棟の総柱の建物で東側に桁行との柱間が1.8mの廊が伴う。身舎や廡の柱痕跡の埋土には焼土・炭化物などが混入しており、火災より焼失したと考えられた。SB021B掘立柱建物跡はSB021A掘立柱建物跡とほぼ同位置で重複しており、柱痕跡もSB021Aにすべて壊されていた。SB021は、第30次調査で検出されたSB019・SB485と国営調査で推定金堂・講堂跡とした建物の中軸線をはさみ左右対称の位置にあり、計画的建物配置が行われたことが確認された。さらに今次調査では、桁行四間×梁間二間のSB795掘立柱建物跡を検出した。建物方位から中央建物群の西辺部となると考えられた。その他にSI918堅穴住居跡、SD900、SD921溝跡、SK919、SK920土取り穴などの遺構が検出された。

### 15 第48次発掘調査（昭和62年度）

第48次調査は、鶴ノ木地区最西端部を対象に一部第46次調査地を含み調査地を設定し、実施した。調査の目的は、これまで検出された地区中央建物群やそれらに伴う遺構の西への広がりを追求することであった。

調査の結果、直接建物群に関連する古代の遺構は検出されなかった。遺構としては古代の土取り穴群、中世の掘立柱建物跡、井戸跡などを検出し、土取り穴群が地区西端部まで広がりを持つことと、中世を中心とする利用状況が把握された。掘立柱建物跡は中世の総柱建物で、土取り穴群を中世初期に整地した上に建てられていた。東西棟の総柱建物であるSB924・SB925掘立柱建物跡が検出された。その他にSB925と同位置でSB925を一回り小さくしたSB926掘立柱建物跡、その南でSB927掘立柱建物跡が検出された。付近より建物に伴うSE928・SE929井戸跡が検出された。他に屋外のカマドと考

えられる SX930カマド状遺構、SD932・SD935・SD936溝跡、SA949ピット群、SA934布堀跡、SK937～SK948土取り穴等が検出された。

#### 16 第50次発掘調査（昭和62年度）

第50次調査は、鶴ノ木地区南東部を対象に実施した。昭和初期に大規模な土取りが行われており古代の遺構は検出されないと考えられていた地区であったが、掘り込みの深い遺構の遺存の可能性もあり、その確認のために調査を実施した。調査の結果、やはり土取りが大規模であり、明確な遺構は発見されなかった。ただ、形の不明瞭な SK961土取りが確認され、その底面から一括して特殊な小型土器が出土した。その特殊な小型土器については、草戸千軒町遺跡に類例を見ることができることなどから、祭祀に関連した特殊な遺物と考えられた。

#### 17 第51次発掘調査（昭和63年度）

第51次調査は、鶴ノ木地区中央丘陵部の最南西部を対象に実施した。調査は、地区中央建物群とそれに関連する遺構の広がりを確認することを目的に実施した。調査の結果、関連遺構は最南西部まで広がっていることが確認された。遺構としては、古代の掘立柱建物跡、三本一組の掘立柱遺構、竪穴住居跡の他に、中世の溝、绳文時代のTピットや埋葬炉などが検出された。方位や位置から建物群の一部と考えられる SB962掘立柱建物跡は、東西二間×南北一間以上の南北棟で、三本一組の掘立柱遺構とした SA963は、三角形に柱を配した特殊な遺構であり、深さのある 2 基の掘り方が真ん中を挟み柱を支える構造と考えられたが、性格等については現段階では不明とされた。

#### 18 第57次発掘調査（平成3年度）

第57次調査は、鶴ノ木地区中央東側で、南から北へ通る市道の東側を対象に実施した。調査地北側の第18、30次調査地では、地区中央建物群が検出されており、建物群とそれに関連する遺構の鶴ノ木地区東側への広がりを追求することと、建物群の性格解明を目的に調査を実施した。

調査の結果、調査地の西側の一段低い部分は第50次調査地同様削平されていることが確認されたが、北西部の地山粘土面で東西棟の SB1129掘立柱建物跡が検出された。調査地の中央部では規模の大きい SB1134掘立柱建物跡、SI1136～SI1138の竪穴住居跡が、南側では SB1130～SB1133掘立柱建物跡、SI1135竪穴住居跡がそれぞれ確認された。さらに調査地中央部分から柱列や溝跡が検出された。それら建物跡や区画施設の検出により、南半建物群は地区東側にもさらに広がりを持つことが判明した。調査地中央より東側の地域は、台地部から湿地へと続く接続部になっており、井戸状遺構、大形竪穴状遺構、土抗を検出したが包含層も厚く、来年度の調査地区とすることとした。

#### 19 第58次発掘調査（平成4年度）

第58次調査は、鶴ノ木地区南東部で、前年度実施した第57次調査地の北側および東側の隣接地を対象とした。西側と東側に大別され、西側は畠地で高く、東側は一段下がり湿地（通称兩池）へと傾斜していく地形となっている。今次調査は前年度に引き続きこの地域における遺構の広がりを追求し、同地区的建物群の性格、変遷を解明することを目的に調査を実施した。

調査により、調査地西側で掘立柱建物跡 3 棟、竪穴住居跡 3 軒、土抗 1 基、柱列 2 列、溝跡 1 条を検出した。そのうち南北方向の SA1142布堀り溝は、第30次調査検出の堂風の SB487・SB488掘立柱建物跡を中心に区画する材木塀の東辺部であることが把握された。また、新たに建物群を構成する SB1146 と SB1147掘立柱建物跡の規模の大きい東西棟建物を検出した。なお検出遺構のうち竪穴住居

跡については、調査区中央部から東側の範囲で総数13軒が集中して検出された。これらの堅穴住居跡群は9世紀前半を中心として、創建期から9世紀後半まで継続的に営まれていることが判明した。それらの調査結果から、鶴ノ木地区東部にも中央建物群の遺構が広がることが再確認された。また、遺構の重複関係などから、国営調査で第1次金堂とされたSB487・SB488掘立柱建物跡を中心とする遺構群が創建期の第1次ではなく、平安時代の遺構群となる変遷が確定することとなった。

前年度の継続となった南東部は今回精査し、掘立柱建物跡2棟、井戸跡11基、焼土遺構、土抗等を検出した。この東側南部では古代から存在するSG1206沼地跡が検出され、その沼地部分で中世の整地層とスクモ層をはさみ、更に下層に古代の整地層の堆積が確認された。上層の中世整地層面では、SB1150～SB1152総柱建物掘立柱建物跡が検出された他、その東側に井戸跡が新旧2基単位でまとまって検出された。また、調査地南東端では大型曲物を井筒として使用した鎌倉時代のSE1171井戸跡が検出された。下層の古代整地層面西側では、井戸館を伴う大規模なSE1176井戸跡が検出された。調査の結果、第58次調査により鶴ノ木地区東部にも北部のSG463沼地跡と同様に、古代と中世の整地事業とそれに伴う遺構群が存在することが明らかとなった。

## 20 第61次発掘調査（平成5年度）

第61次調査は、鶴ノ木地区中央東側で、前年度の第58次調査地の北側隣接地を対象とした。旧畠地で西側が高く、二～三段下がり東および北東側の湿地（SG1206沼地跡）へと傾斜していく地形となっていた。調査は前年度に引き続きこの地域における遺構の広がりを追求し、同地区の遺構の性格を解明することを目的に調査を実施した。

調査により、西側と南側で掘立柱建物跡2棟、中央部と北部、南部で堅穴住居跡、中央部で溝跡などを検出した。北東側ではSG1206沼地跡の西岸部の土層堆積を確認した。掘立柱建物跡2棟のうち南東部では南北棟のSB1307掘立柱建物跡、中央西側では東西棟のSB1308掘立柱建物跡が検出された。堅穴住居跡は第58次調査で確認されていたものを除きSI1308～SI1313など6軒が検出され、8世紀から9世紀にかけて変遷することが把握された。調査の結果、地区中央東側の建物群と居住域がさらに広がることが明らかになった。

## 21 第62次発掘調査（平成6年度）

第62次調査は、鶴ノ木地区北部から高野地区南西部を対象とした。現地形は全体的に東側に緩く傾斜し、調査地中央部を市道が走り、市道を挟みさらに北側と南側に傾斜している。そのため、調査は北側調査区（高野地区南西部）と南側調査区（鶴ノ木地区北部）とに分けて実施した。調査は、外郭東門から郭外に延びる城外東大路の検出と周辺の利用状況把握を目的として実施した。

調査の結果、東西道路遺構については削平等により明確に確認できなかったが、堅穴住居跡11軒、柱列5列、土抗、溝跡が検出された他、SG463沼地跡北岸の一帯や外郭東門からSG463北西岸に向かう道路状遺構と考えられるSX1350ツキ固め遺構が検出された。また、畠地土手部分の旧耕作土より和同開珎銀銭1枚が出土し、東北では初の出土例として注目を集めた。

南側調査区の南側にある傾斜面には遺物包含層が多数堆積しており、土器と鉄製品を主に多量の遺物が出土した。最下層からは平安時代初めの「目」の墨書き土器が出土し、SG463北西岸の祭祀行為の開始が平安時代初めに遡る可能性が考えられた。また、南側調査区では、東側から中央にかけてSI1321～SI1324堅穴住居跡を検出し、東西方向のSA1334、SA1332、SA1333柱列を検出した。北側調査区では、SI1325～SI1331堅穴住居跡を検出した。これらの住居跡の年代は9世紀以降と考えられ

た。東西道路遺構については、奈良時代から平安時代にかけて住居が存在しない空閑地が存在することや、平安時代に東西方向の区画施設が設けられることなどから、その存在が推定されることとなつた。

## 22 第63次発掘調査（平成6年度・平成7年度）

第63次調査は、鶴ノ木地区中央北東側を対象に平成6年と7年の2ヵ年かけて調査を実施した。調査地は前年度調査した第61次調査地の北側隣接地にある。地形的には旧畠地で南側が高く、北および北東部へ向かい数段の段差があり、湿地（SG1206沼地跡）へと傾斜し低くなっている。調査はこの地域の遺構の広がりを追求し、遺構群の性格、変遷を解明することを目的に調査を実施した。

平成6年度調査は、古代から中世にかけてのSG1206沼地跡南西岸辺の整地層を段階的に除去し、古代の最終整地層面を精査している段階で、沼地側に向けた南北方向の木樋状遺構（暗渠）と考えられる遺構を伴う東西三間×南北二間で南に一間の廊が付くSB1351掘立柱建物跡を検出した。さらに精査を進め、建物内に東西方向に3基並んで円形の堀り込み（便槽）が検出され、そこから各々北側沼地方向へ木樋（暗渠）が延びることが判明した。掘り下げにより、円形の堀り込み底部には木樋がとりつき暗渠となる構造が判明した。一連の結果から、この特殊遺構については、便所遺構としての性格究明も含め詳細な調査が必要と考えられたため、来年度も継続することとした。

11月には奈良国立文化財研究所理蔵文化財センターの松井章氏より、遺構や堆積土の検討と分析用資料採取の指導を仰いだ。その結果、沼地側の堀込み堆積土中より籌木と考えられる棒や未消化の多種多様な種実、糞等に集まる昆虫の遺体、ハエの蛹等が検出され、便所遺構となることが判明した。さらに寄生虫卵、花粉分析、種実同定を天理大学附属天理参考館（当時）の金原正明氏、残存脂肪酸分析を帯広畜産大学（当時）の中野益男氏に依頼した。その結果、土壤分析で寄生虫卵が発見されたことなどにより、SB1351とその付属施設が便所遺構であることが自然科学分析により裏付けられた。

平成7年度は、前年に検出した便所遺構の詳細な調査を実施した。便所遺構は、建物跡と建物内の3基の便槽、便槽から沼地に延びる暗渠と暗渠出口付近のSG1206沼地跡を掘り込んだ2基の沈殿槽からなることが判明した。また、便所遺構の南部分を精査した結果、鶴ノ木地区南半建物群方向への目隠し塀と考えられるSA1352布堀り溝を確認、その他SK1354などを検出した。

便所遺構の年代については、沈殿槽出土土器の年代や奈良国立文化財研究所理蔵文化財センターの光谷拓実氏による木樋の年輪年代測定などにより、8世紀後半の遺構と位置づけられた。

さらに、金原氏による寄生虫卵の分析・検討の結果、アタを常食とする大陸系外来者による便所使用の可能性が指摘されることとなり、鶴ノ木地区南半建物群の性格や、渤海使来航に関係した秋田城の外交施設としての機能に結びつく大きな成果と課題が提示されることとなった。

## 23 第67次発掘調査（平成8年度）

第67次調査は、鶴ノ木地区北部を対象に実施した。調査地の北側は外郭東門から延びる大路の延長線上に推定され、また、第63次調査で検出した古代水洗便所遺構が面するSG1206沼地跡の北側対岸部分にあたり、沼地跡の北側における遺構の広がりや利用状況の把握を目的に実施した。地形は沼地に面し傾斜する南側に対し、北側は一段高い旧畠地となっていた。

調査の結果、大路跡は検出されなかったが、掘立柱建物跡3棟、堅穴住居跡1軒、堅穴状遺構2基、井戸跡4基、溝跡3条、土抗9基など古代から中世にかけての遺構が検出された。調査地南側ではSG1206沼地跡北岸部を確認し、南岸部と同様に岸辺付近の斜面から沼地にかけて古代から中世にか

けての遺物包含層（整地層）の堆積とそれに伴う遺構が存在することが明らかとなった。主な古代の遺構として、調査地北側の地山砂層からいずれも小規模な建物跡となる SB1465～SB1467掘立柱建物跡、SI1468竪穴住居跡や SI1469竪穴状遺構が検出された。南側の沼地岸辺付近では古代の井戸跡として9世紀代に位置づけられる SE1474と SE1473井戸跡が検出され、調査地は平安時代以降に利用されるようになると考えられた。中世の遺構は調査地の南側にまとまっており、検出面から SE1471・SE1472井戸跡や SK1483・SK1484、SK1480～SK1482・SD1476のまとまりの二小時期があり、ともに12世紀後半の時期とそれを大きく降らない時期が考えられた。

#### 24 第69次発掘調査（平成9年度）

第69次調査は、鶴ノ木地区北部を対象に実施した。調査地は第67次調査地の東側隣接地にあたり、調査地東側は SG1206沼地跡の沼尻付近にあたっている。地形は沼地に面し一段高く平坦に整地された南側および東側に対し、北西側が更に一段高い畠地であった。調査は周辺の遺構の広がりや利用状況の把握を目的に実施した。

調査の結果、第67次調査地と同様 SG1206沼地跡岸辺付近の斜面から沼地にかけて古代から中世にかけての遺物包含層（整地層）の堆積とそれに伴う遺構を確認し、掘立柱建物跡1棟、材木列塀1列、柱列5列、井戸跡3基、溝跡6条、土坑9基などの遺構が検出された。古代の遺構のうち最下層面で検出した SA1489材木列塀は布堀り溝と丸太材の一部とその痕跡が検出され、東側調査区外の沼地跡の沼尻付近に延びる状況が認められた。9世紀代の井戸跡として SE1502井戸跡、SE1501井戸跡を検出した。中世の遺構としては SE1500井戸跡などが検出された。第67次調査と今次調査ではともに8世紀代の遺構は検出されず、包含層の堆積時期も8世紀末以降となっていることから、鶴ノ木地区北部一帯には奈良時代に利用に対し何らかの規制が存在したと考えられるに至った。

#### 25 第81次発掘調査（平成15年度）

第81次調査は、鶴ノ木地区東部の湿地（SG1206沼地跡）とその東岸部を対象に実施した。調査地については、環境整備事業の中で公園園路の整備が予定されており、調査はその西岸から東岸にかけてと、東岸斜面から北東側台地上にわたって遺構の有無、周辺の利用状況の把握を目的として実施した。調査地は広域にわたり、A～C調査区に分けトレーニチを設定して実施した。

調査の結果、沼地西岸のA調査区では古代から中世にかけての SG1206沼地跡を検出した。沼地内のB調査区では表土下が植物遺体層となっており、沼地中央部では薄く十和田a火山灰の二次堆積が認められたが、遺物の出土はなかった。沼地東岸のC調査区では、A調査区同様 SG1206沼地跡を検出した。また、沼地汀線附近で SX1701木道跡を検出した。岸辺上方の平場では SI1696竪穴住居跡、炉跡を伴う SI1697竪穴状工房跡、SA1694柱列、SK1700土坑などを検出した。また、北東側台地上では東西方向の SA1695材木塀列や SI1699竪穴住居跡などを検出した。調査により、SG1206沼地跡東岸部にも古代が広がることが判明し、8世紀後半以降に台地上が、9世紀以降は沼地岸辺と一段高い平場が生産域や居住域として利用される状況が把握された。

#### 26 第91次発掘調査（平成19年度）

第91次調査地は、鶴ノ木地区東部、鶴ノ木地区中央建物群の東側、第63次調査検出の古代水洗便所跡の南側隣接地を対象とした。調査は、水洗便所関連施設の有無の把握や、存在が推定されていた中央建物群を囲む材木塀の北東コーナー部把握を目的として実施した。

調査の結果、奈良時代の水洗便所跡関連施設は確認されなかったが、平安時代の材木塀の南東コーナー部分を確認した。その他にも、奈良時代の規模の大きい掘立柱建物跡や平安時代の掘立柱建物跡、平安時代の堅穴住居跡や鍛冶工房跡などが検出された。全体として掘立柱建物跡5棟、柱列跡1列、材木塀跡2条、溝跡1条、堅穴住居跡5軒、堅穴状鍛冶工房1棟、土坑4基、小柱掘り方群などの遺構が検出された。

利用状況の変遷としては、水洗便所が機能した奈良時代後半には、中央建物群の東側の一画として、東西棟建物が南北に列をなす形で利用されることが判明した。平安時代には、一時居住域として利用されるが、天長7年（830）の天長大地震後に材木塀が造られ、西側の四面庇堂風建物を中心とする中央建物群を囲む区画施設が設けられるという地区全体に共通する変遷が把握された。さらに、より新しい段階区画施設の存在が新たに判明した。また、9世紀前半のSI1978・SI1979堅穴住居跡のカマド付近からは、住居廃絶時に、特殊な小型坏が一括廃棄される祭祀行為が行われている状況が検出され、鵜ノ木地区における宗教的性格の一端を示唆するものと考えられた。

## 第IV章 検出遺構と出土遺物

### 第1節 鵜ノ木地区の基本層序

#### 1 自然地形と整地事業（第10・11図、図版23・24・27）

鵜ノ木地区には発掘調査により古代から存在する沼地跡が2箇所確認されている。地区東側のSG1206沼地跡は東西約90m、南北約140mの範囲にわたり、形は西に屈曲する「く」の字状になっている。地区北西側のSG462沼地跡は東西約40m、南北約60mの大きさで、形は東に屈曲する「く」の字状になっている。ともに禾本科植物に由来する有機質に富んだ土壤、スクモ層（泥炭層）の堆積が確認された。ほぼ全体を調査したSG462沼跡では、最深部で厚さ1.5mの堆積が確認され、自然科学分析により、BC2300年頃、縄文時代中期末頃から自然形成された沼地であることが確認された。SG1206沼地跡は現代まで湿地となっており、昭和になり一時水田として利用された。SG462沼地跡は近世以降に段階的に埋め立てられ、国営調査時にはすでに畑地となっていた。

鵜ノ木地区における発掘調査により、古代にはSG462沼地跡の北岸部・西岸部・南岸部と、SG1206沼地跡の北岸部・西岸部・南岸部・東岸部において、岸部を埋め立て利用地拡張目的とした整地事業が段階的に行われることが確認されている。また、中世にもSG462沼地跡南西岸部・南岸部とSG1206沼地跡北岸部・西岸部・南岸部において、同様に整地事業が行われることが確認されている。

旧地形では、SG1206沼地跡とSG462沼地跡が地区中央部の丘陵部分の北側と東側を取り囲むような地形となっており、比高差のある丘陵側から切り土によりそれらの整地事業に土砂が供給されたと考えられる。近現代の畑地や水田としての利用に伴う造成に際しても、同様に丘陵側から切り土がお



第10図 標高36m～44m等高線部分推定図

こなわれたと考えられる。そのため、地区中央の丘陵部分については、丘陵部自体の畠地造成も含め大きく削平を受けており、ほとんど遺物包含層の堆積が認められない。わずかに創建期整地の一部と考えられる明褐色土層が認められるのみである。

また、旧地形では、南半の丘陵部の西側に南西から北東方向に浅い谷地形が入り込んでおり、その付近に地山粘土層が露出していたと考えられ、古代に土取りが行われている。それに対し古代または中世に段階的に整地事業が行われている。地山粘土層に対する土取りは、SG462沼地跡周辺の第18次調査地北側や第22次調査地北側でも行われており、同様古代に整地事業が行われている。

鶴ノ木地区では、以上のように自然地形（旧地形）に関係する沼地岸部付近の整地事業や土取りに対する整地事業を中心として土層が堆積している。

## 2 各調査地の層序（第12・13図、図版39）

沼地岸部付近の整地事業を中心に層序が構成されている箇所は、SG462沼地跡においては北岸部の第22次調査・第62次調査、西岸部の第39次調査、第34次調査北半、SG462沼地跡南岸の第18次調査、第26次調査である。また、SG1206沼地跡においては北岸部の第67次・第69次調査、南西岸部の第63次調査、南岸部の第57次・第58次調査、第61次調査、第81次調査である。

SG462沼地跡北岸部の層序（土層断面図①）については、①表土（耕作土）・②旧耕作土・③旧畠地造成土の下層に④暗褐色土層、⑤明褐色粘土・黄褐色砂層、⑥暗褐色砂層、⑦黄褐色砂層、⑧にぶい黄褐色砂層、⑨暗褐色砂（焼土炭化物）層、⑩灰褐色砂土（硬化面）、⑪暗褐色砂・黄褐色砂層、⑫黄褐色砂層、⑬暗褐色砂・明黄褐色砂層、⑭地山飛砂層（南端部は沼地の影響でグライ化）となっている。以下の沼地岸部より層堆積が多いのは、外郭東門や城外東大路に近く平安期以降斜面上部の利用に伴う造成が活発なこと、SG462沼地跡北西岸の祭祀遺構の造成やそこへの道路造成が行われるためと考えられる。

SG462沼地跡西岸の層序（土層断面図②）については、①表土（耕作土）、②旧耕作土・・③旧畠地造成土の下層に中世以前の遺物包含層である④灰褐色土（粘土）層、⑤黒色土・黒色砂（植物遺体混入）層、⑥赤褐色砂層、⑦黄褐色砂層、⑧灰白色砂層、⑨泥炭層、⑩灰白色砂層、⑪浅黄色砂層、⑫地山飛砂層・地山腐植土（スクモ）層となっている。北西岸では砂層と互層となる⑨の泥炭層から、祭祀遺物が出土している。

SG462沼地跡南岸部の層序（土層断面図③）については、①表土（耕作土）、②旧耕作土・・③旧畠地造成土の下層に中世以前の遺物包含層である④灰褐色土（粘土）層、⑤黒色土・黒色砂（植物遺体混入）層、⑥灰白色粘土層、⑩地山腐植土（スクモ）層となっている。

なお、SG462沼地跡南岸部の南側、中央丘陵部分については、わずかに創建期整地の一部と考えられる⑦明褐色土層が認められる。

SG1206沼地跡西岸から南岸部の層序（土層断面図⑤⑥）については、①表土（耕作土）、②旧耕作土・③旧畠地造成土の下層に中世以前の遺物包含層である④灰褐色土・灰褐色粘土層、⑤黒褐色土層、⑥黒褐色植物遺体（スクモ）層、⑦灰褐色土・にぶい黄褐色土・灰黄褐色土層、⑧褐色土・暗褐色土層、⑨灰黄褐色土・浅黄色粘土層、⑩地山植物遺体・腐植土（スクモ層）となっている。また、第58次調査報告段階では⑦層から⑨層までが細分されていない状況だった。⑧褐色土層は斜面上方では焼土・炭化物が混入する。なお、北岸部（土層断面図④）では④灰褐色土・灰褐色粘土層の下層に、④-2 黒褐色土、④-3 暗褐色土の堆積が認められ、⑦層以下の層序は SG462沼地跡北岸に共通し

ており、南岸部とは異なる土層堆積状況も認められる。

SG462沼地跡周辺と SG1206沼地跡周辺の土層堆積状況には共通性が多く認められ、SG462の⑤層や SG1206の⑥層といった中間の植物遺体層をはさみ、上層の中世と下層の古代に時期が大別される。また中間の植物遺体層に二次堆積する火山灰は平成9年度実施の自然科学分析で十和田a火山灰（降下年代915年と推定）であることが判明している。

地区西部で土取り穴群への整地事業や自然堆積を中心に層序が構成されている箇所は、第34次調査地南半、第35次調査地、第42次調査地、第48次調査地である。地区西部の基本層序については、①表土（耕作土）、②旧耕作土、③旧畑地造成土の下層に中世以前の遺物包含層である④赤褐色粘土・黄褐色砂層、⑤黒色土層、⑥赤褐色粘土・黄褐色砂層、⑦黒褐色土（植物遺体混入）層、地山粘土層となっている。

### 3 鶴ノ木地区の基本層序と各層出土土器

前述した鶴ノ木地区の土層堆積状況を見ると、（1）地区北部の城外東大路周辺となる SG462沼地跡西岸・北岸から SG1206沼地跡北岸の一帯と、（2）地区中央部北寄りの SG462沼地跡南岸と地区中央部東寄りの SG1206沼地跡西岸・南岸・東岸の一帯、（3）地区西部一帯で各々層序に共通点とまとまりを持つと考えられる。（1）～（3）における各層出土の土器様相や年代比定資料をふまえれば（第13図参照）、土層堆積の時期や整地事業の時期が把握され、基本層序として以下のようにまとめられる。なお、同一層であっても場所により相違をみせているため、複数の土色と土質を示した。

#### 1) 鶴ノ木地区北西部・北部の基本層序

地区北部の城外東大路周辺となる SG462沼地跡北西・北岸から SG1206沼地跡北岸の一帯の層序を基本層序としてまとめると以下のようになる。

第1層 表土・耕作土

第2層 旧耕作土：近世～近現代

第3層 旧畑地造成土：近世～近現代

第4層 中世整地Ⅱ層：灰褐色土・灰褐色粘土層：13世紀前半～中葉

第5層 中世整地Ⅰ層：黒褐色土（砂）層と暗褐色土層に細分：12世紀末～13世紀初

第6層 自然堆積層：黒褐色土層・灰黃褐色土：10世紀中頃～11世紀

第7層 暗褐色土（砂）・明褐色粘土・黄褐色砂・赤褐色砂層：10世紀前半～中頃

第8層 上層スクモ層：黒褐色植物遺体に十和田a火山灰（降下年代915年）が二次堆積：9世紀  
第4四半期～10世紀第1四半期

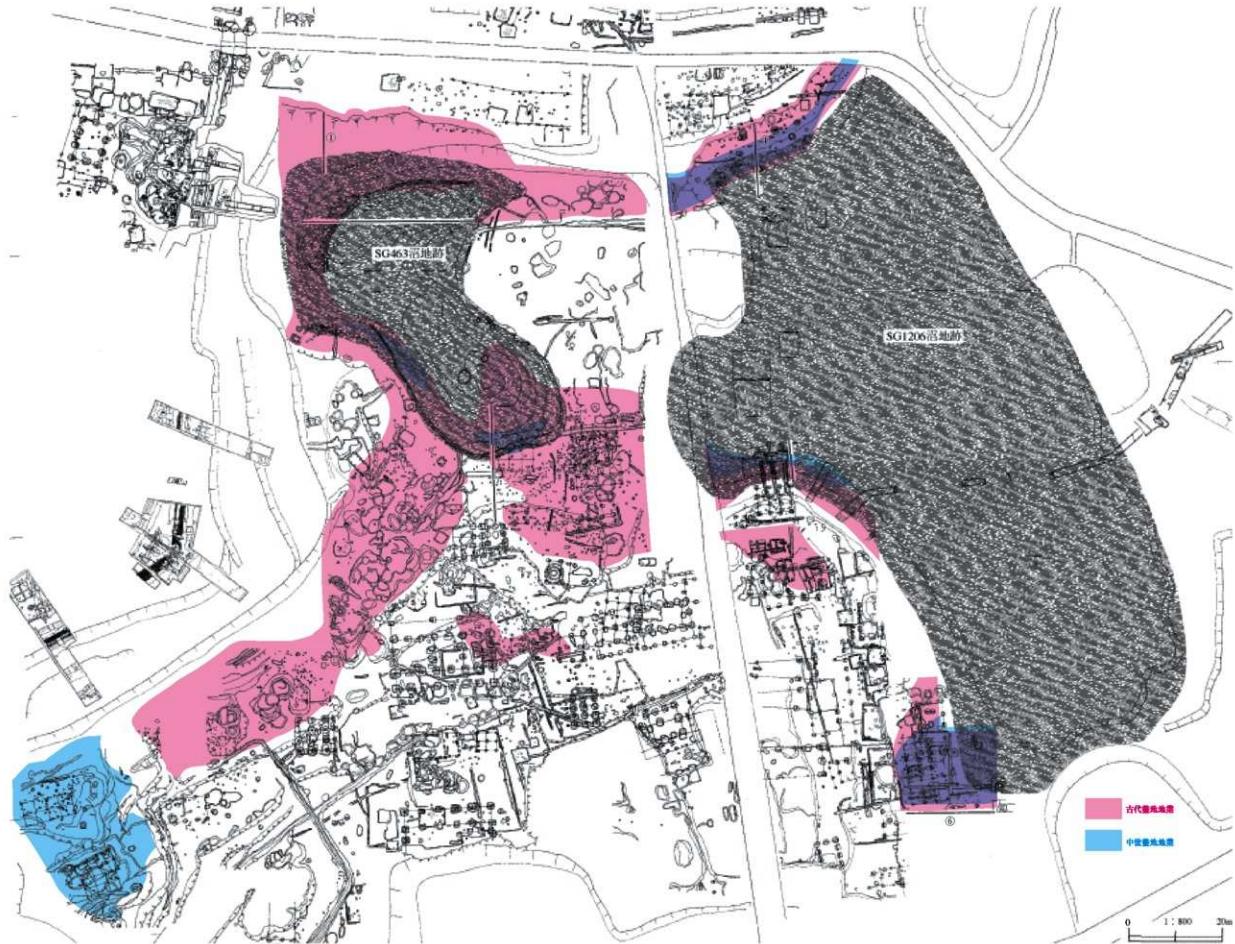
第9層 古代整地層：にぶい黄褐色砂層・暗褐色砂（焼土炭化物層）・沼地の灰白色砂層：9世紀  
第4四半期

第10層 古代整地層：灰褐色砂土（砂）・褐色土（砂）・黄褐色砂層：9世紀第2四半期～第3四半期（SX1350道路遺構造成土および硬化面、SG462沼地跡北西岸では灰白色砂・黄褐色砂と植物遺体層の互層からなる泥炭層）

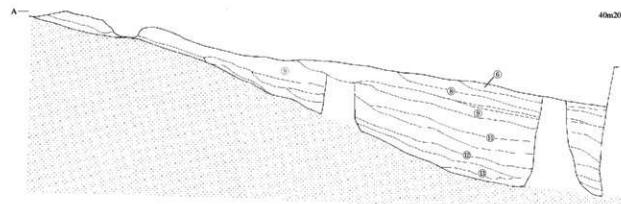
第11層 古代整地層：黄褐色砂層：8世紀末～9世紀初

第12層 暗赤褐色土（砂）・明黄褐色砂層：8世紀後半

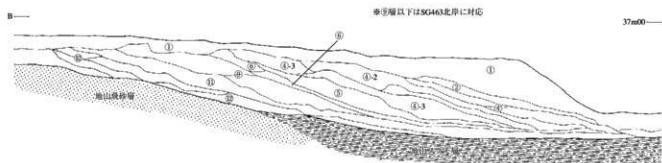
地山植物遺体・腐植土（スクモ）層地山飛砂層



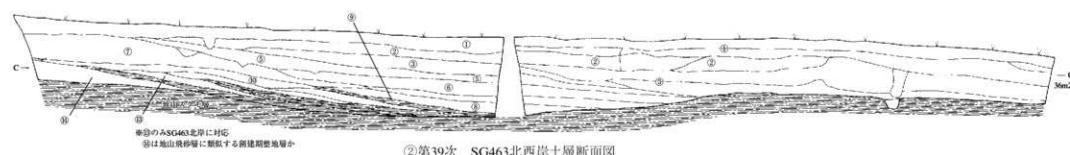
第11図 鶴ノ木地区古代・中世整地地業に伴う土層堆積範囲



①第62次 南西側斜面南北土層断面図 (SG463北岸部)



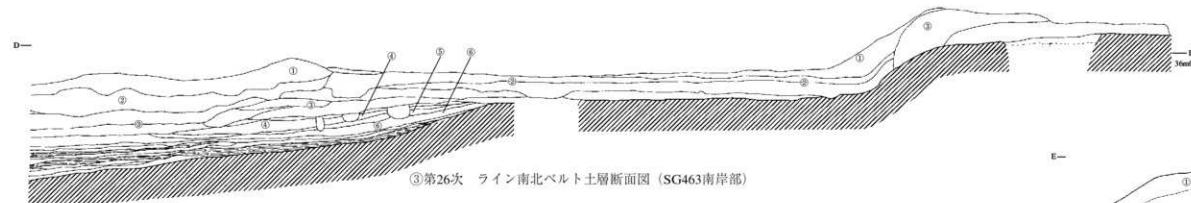
④第67次 調査地東壁拡大土層断面図 (SG1206北岸部)



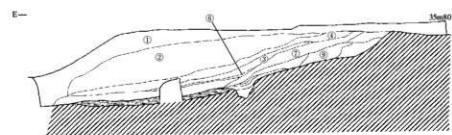
※図のA-A'はSG463北岸にに対応  
※は地山飛砂層に類似する新建期堆積層

②第39次 SG463北西岸土層断面図

\*土層断面図①は本文のSG463北岸部順序の土層番号に対応  
土層断面図②は本文のSG463北岸部順序の土層番号に対応  
土層断面図③は本文のSG463南岸部順序の土層番号に対応  
土層断面図④～⑥はSG1206北岸部順序の土層番号に対応



③第26次 ライン南北ベルト土層断面図 (SG463南岸部)



⑤第63次 E405ライン土層断面図 (SG1206南西岸部)



⑥第58次 東側調査区 S177ラインベルト (SG1206南岸部)



第12図 福ノ木地区整地地業部分土層断面図

## 2) 鶴ノ木地区中央部から東部の基本層序

SG462沼地跡周辺と SG1206沼地跡周辺の層序を、基本層序としてまとめると以下のようになる。

第1層 表土・耕作土

第2層 旧耕作土：近世～近現代

第3層 旧畑地造成土：近世～近現代

第4層 中世整地層：灰褐色土・灰褐色粘土層：12世紀末～13世紀中頃

第5層 自然堆積層：黒褐色土（砂）層：10世紀中頃～11世紀

第6層 上層スクモ層：黒褐色植物遺体に十和田a火山灰二次堆積混入：9世紀第4四半期～10世紀第1四半期

第7層 古代整地Ⅲ層：灰褐色土・にぶい黄褐色土・灰黄褐色土層・灰白色粘土：9世紀第2四半期～第3四半期（瓦と塙の破片多く混入）

第8層 古代整地Ⅱ層：褐色土・暗褐色土層（焼土・炭化物混入）：8世紀末～9世紀初め

第9層 古代整地Ⅰ層：灰黄褐色土・浅黄色粘土層：8世紀第3四半期

第10層 古代整地0層：褐色土・明褐色土（粘土）・浅黄色粘土層：8世紀第2四半期

地山植物遺体・腐植土（スクモ）層

## 3) 地区西部一帯の基本層序

地区西部で土取り穴群一帯の層序を基本層序としてまとめると以下のようになる。

第1層 表土・耕作土

第2層 旧耕作土：近世～近現代

第3層 旧畑地造成土：近世～近現代

第4層 中世整地層：赤褐色粘土・黄褐色砂層：12世紀末～13世紀中葉

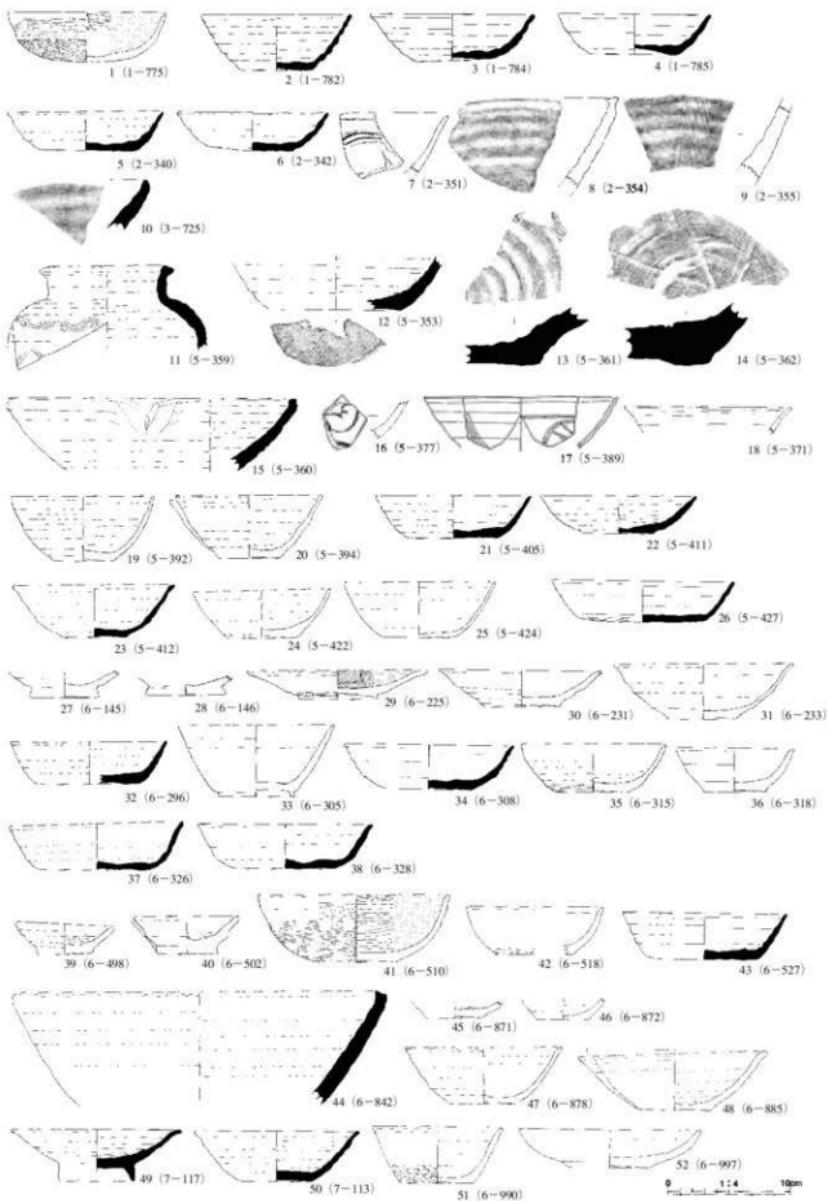
第5層 自然堆積層：黒褐色土（砂）層：10世紀中頃～12世紀

第6層 古代整地層：赤褐色粘土（砂）・黄褐色砂（粘土）層：9世紀第2四半期～第4四半期

第7層 スクモ層：黒褐色土に植物遺体混入

地山粘土層

鶴ノ木地区全体として見た場合、地区北部と南部・中央部では基本層序と利用状況に違いがあると考えられる。その一方で、8世紀末～9世紀初め段階・9世紀第2四半期・12世紀末～13世紀中頃などには共通して整地事業が行われ、それらは地区的利用状況など変遷上の画期を反映していると考えられる。また、地区中央第8層および地区北部第9層への焼土・炭化物の混入は、周辺での火災により生じたものと判断され、それらも変遷上の画期を反映していると考えられる。



第13図 瀬ノ木地区遺物包含層出土遺物（年代比定資料）

鶴ノ本地区遺物包含層出土遺物一覧表

国版 番号	遺物 番号	種類・器種	調査次数・出土層位	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	底部切り離し	調整等	年代
13-1	1-775	土師器・壺	26次・地区中央部第7層	13.1	4	7.6		部体有段・内面ミガキ調整、内面黒色処理	8C前半
13-2	1-782	須恵器・壺	26次・地区中央部第7層	12.7	4.7	6.1	糸切り	無調整	9C第3
13-3	1-784	須恵器・壺	26次・地区中央部第7層	13.6	3.8	6.2	糸切り	無調整	9C第2
13-4	1-785	須恵器・壺	26次・地区中央部第7層	12.6	3.3	7.4	糸切り	無調整	9C第2
13-5	2-340	須恵器・壺	34次・地区中央部第7層	12.9	3.2	7.8	ヘラ切り	軽いナデ調整	9C第2
13-6	2-342	須恵器・壺	34次・地区中央部第7層	12.5	3.2	6.9	ヘラ切り	軽いナデ調整	9C第2
13-7	2-351	青磁・碗	34次・地区西部第5層					龍泉窯系刻花文碗	12C後半~13C前半
13-8	2-354	珠洲系中世陶器・擂鉢	34次・地区東部第4層					内面無文・珠洲Ⅰ期	12C後半
13-9	2-355	珠洲系中世陶器・擂鉢	34次・地区西部第4層					粗い鋸し目・珠洲Ⅱ期	13C前半
13-10	3-725	珠洲系中世陶器・擂鉢	48次・地区西部第5層					珠洲Ⅱ期	13C前半
13-11	5-359	珠洲系中世陶器・壺	58次・地区中央部第4層	10.9				波状文壺・珠洲Ⅰ期	12C後半
13-12	5-353	珠洲系中世陶器・擂鉢	58次・地区中央部第4層		10.8			内面無文・底部静止糸切り・珠洲Ⅰ期	12C後半
13-13	5-361	珠洲系中世陶器・擂鉢	58次・地区中央部第4層					粗い鋸し目・底部静止糸切り・珠洲Ⅱ期	13C前半
13-14	5-362	珠洲系中世陶器・擂鉢	58次・地区中央部第4層					粗い鋸し目・珠洲Ⅱ期	13C前半
13-15	5-360	珠洲系中世陶器・片口鉢	58次・地区中央部第4層	23.6				珠洲Ⅰ期	12C後半
13-16	5-377	青磁・碗	58次・地区中央部第4層					龍泉窯系刻花文碗	12C後半~13C前半
13-17	5-389	青磁・碗	58次・地区中央部第4層					同安窑系描画文碗	12C末~13C前半
13-18	5-371	白磁・碗	58次・地区中央部第4層					口縁部口剥げ・白磁直腹	13C中葉~後半
13-19	5-392	赤褐色土器・壺A	58次・地区中央部第6層	11.8	5.4	4.9	糸切り	無調整	9C第4
13-20	5-394	赤褐色土器・壺A	58次・地区中央部第6層	12.1	5.2	5	糸切り	無調整	9C第4
13-21	5-408	須恵器・壺	58次・地区中央部第6層	12.8	3.5	7.3	ヘラ切り	ナデ調整	9C第2
13-22	5-411	須恵器・壺	58次・地区中央部第6層	12.9	3.2	5.9	糸切り	無調整	9C第2
13-23	5-412	須恵器・壺	58次・地区中央部第6層	13.5	4.4	5.4	糸切り	無調整	9C第2
13-24	5-422	赤褐色土器・壺B	58次・地区中央部第6層	11.4	5.7	4	糸切り	体部下端ケズリ調整	9C第2
13-25	5-424	赤褐色土器・壺A	58次・地区中央部第6層	12.4	4.6	6	糸切り	無調整	9C第3
13-26	5-427	須恵器・壺	58次・地区北部第10層・地出スカモ直上	15	3.4	10.7	不明	底部全周ケズリ調整	8C第2
13-27	6-145	赤褐色土器・壺A	62次・地区北部第7層		5.7		糸切り	無調整・柱状高台	10C第
13-28	6-146	赤褐色土器・壺A	62次・地区北部第7層		5.7		糸切り	無調整・柱状高台	10C第1
13-29	6-225	土師器・台付皿	62次・地区北部第9層	15.9	2.4	6.6	糸切り	内面ミガキ調整・内面黒色処理・底部ケズリ調整	9C第4
13-30	6-231	赤褐色土器・皿	62次・地区北部第9層	13.5	3	6.2	糸切り	無調整	9C第4
13-31	6-233	赤褐色土器・壺A	62次・地区北部第9層	13.8	4.6	5.6	糸切り	無調整	9C第4
13-32	6-296	須恵器・壺	62次・地区北部第10層	12.9	3.6	8	ヘラ切り	軽いナデ調整	9C第2
13-33	6-305	赤褐色土器・台付壺	62次・地区北部第10層	12.8	6	6.4	糸切り	台取り付け後ナデ調整	9C第2
13-34	6-308	須恵器・壺	62次・地区北部第11層	14	3.7	7	糸切り	無調整	9C第1
13-35	6-315	赤褐色土器・壺B	62次・地区北部第11層	12	4	5.9	不明	底部・体部下端ケズリ調整	8C末~9C第1
13-36	6-318	赤褐色土器・壺A	62次・地区北部第11層	9.6	3.7	5.2	糸切り	無調整・小型壺	8C末~9C第1
13-37	6-326	須恵器・壺	62次・地区北部第13層	14.4	3.8	9.2	ヘラ切り	丁寧なナデ調整	8C第4
13-38	6-328	須恵器・壺	62次・地区北部第13層	14.4	3.7	8.2	ヘラ切り	軽いナデ調整	8C第4
13-39	6-494	赤褐色土器・壺A	63次・地区中央部第5層	8.2	2.1	4.6	糸切り	無調整・小型壺	11C前半
13-40	6-502	赤褐色土器・壺A	63次・地区中央部第5層	8.2	2.1	4.6	糸切り	無調整・小型壺	11C前半
13-41	6-510	土師器・壺	63次・地区中央部第6層	15.8	5.6	6.2	糸切り	内面外面上半ミガキ調整・内面黒色処理・体部下半ケズリ調整	9C第4
13-42	6-518	赤褐色土器・壺B	63次・地区中央部第7層	11.3	4	6.5	糸切り	体部下端ケズリ調整	9C第2
13-43	6-527	須恵器・壺	63次・地区中央部第8層	13.6	3.9	8.6	ヘラ切り	丁寧なナデ調整	8C末~9C第1
13-44	6-842	珠洲系中世陶器・擂鉢	67次・地区北部第5層	30.6				内面無文・珠洲Ⅰ期	12C後半
13-45	6-871	赤褐色土器・壺A	67次・地区北部第7層		4.6		糸切り	無調整・底形縮小	10C第2
13-46	6-872	赤褐色土器・壺A	67次・地区北部第7層		4.4		糸切り	無調整・底形縮小	10C第2
13-47	6-878	赤褐色土器・壺A	67次・地区北部第8層	13	4.7	5.7	糸切り	無調整	10C第1
13-48	6-885	赤褐色土器・壺A	67次・地区北部第8層	15	5	6	糸切り	無調整・歪み有り	10C第1
13-49	7-117	須恵器・台付皿	69次・地区北部第9層	14	4.4	6.3	糸切り	台取り付け後ナデ調整	9C第4
13-50	7-113	須恵器・壺	69次・地区北部第9層	13.7	4.2	5.7	糸切り	無調整	9C第4
13-51	6-990	赤褐色土器・壺B	67次・地区北部第10層	10.7	4.7	6	糸切り	体部下半ケズリ調整	9C第2
13-52	6-997	赤褐色土器・壺A	67次・地区北部第10層	15	3.2	6.6	糸切り	無調整	9C第2

## 第2節 検出遺構と出土遺物

検出した主な遺構は、建物跡、水洗便所遺構、三本柱遺構、区画施設（材木堆跡・区画溝跡）、溝跡、道路遺構、堅穴住居跡、工房跡、井戸跡、土坑、土取り穴、祭祀遺構等である。

明確に遺構の構造と時代が異なる建物跡（古代と中世）と堅穴住居跡（縄文時代と古代）を除き、その他の遺構は原則的に調査次数（調査地）および遺構番号順に示した。遺構出土遺物については遺構ごとに出土遺物一覧表に示した。また、広範囲を対象とし、かつ全体に遺構数が多いため、建物跡、区画施設、溝跡、堅穴住居跡、井戸跡、土坑、土取り穴、墓壙群については、全体の概要を文章で報告し、各遺構については一覧表に示した。特に堅穴住居跡、主要なものを除く井戸跡、土坑については縮小した遺構および遺物の集成図と一覧表で報告する形をとった。なお、各種遺構において、出土遺物などから別編1の基準土器編年に基づき年代の把握が可能なものについては、第VI章で後述する考察の前提として、一覧表や記述においてそれを示すこととした。

### 1 建物跡（第14～48図、図版3～13・35・38）

鵜ノ木地区検出の建物跡については、構造的にすべて掘立柱建物となっており、礎石建物は検出されていない。遺構は原則として調査次数および遺構番号ごとに、また建物構造が明確に異なる古代の建物と中世建物を区別して一覧表に示すこととした。各遺構では、基本的に遺構番号・規模・柱間・建物構造・建物方位・柱掘り方及び柱痕跡・検出位置と層位・重複関係・備考（出土遺物等）の順に記述した。柱間などで、建物重複や削平、調査区外となり規模が不明なものや推定数値となっているものは（ ）で示した。また、建物の方位については、東西と南北の発掘基準線に対する角度を示した。なお、建物の遺構からは、年代比定資料はほとんど出土しておらず、重複関係や建物方位などに基づき、年代的位置付けや変遷について考察していく必要がある。

#### 1) 古代の建物（第14～48図、図版3～13・35・38）

古代の建物は、構造的にはすべて掘立柱建物である。検出位置からは、地区北部のSG1206沼地跡北岸部のまとまりと地区中央部のまとまりに大別される。後者については、規模の大きい建物で構成され、建物配置や建物方位に規則性が認められ、建物群として把握される（以下鵜ノ木地区中央建物群と標記）。その鵜ノ木地区中央建物群は、規模の大きい主要な建物を中心として、方位と位置にまとまりを持つ2グループに分けられ、建物群のプラン全体を変更しての建て替えが認められる。さらに、そのうちの主要建物には同位置での建て替えが認められる。それらは、地区的遺構変遷と画期を反映しており、鵜ノ木地区中央建物群は長期にわたり地区的中心施設として機能したと判断される。

具体的に見ていくと、地区中央西寄りの建物群は、SB018・SB484掘立柱建物跡とSB006・SB395掘立柱建物跡の南北方向の廂付き建物列を中心軸として、東にSB019・SB485、西にSB021A・Bの縦柱建物跡が配置される。この4棟の主要建物を、国営調査時には各々を秋田城に付属する四天王寺の第2次金堂（SB018・SB484）、第2次講堂（SB006・SB395）、第2次経蔵（SB019・SB485）、第2次鐘楼（SB021A・B）と推定している。主要建物にはほぼ同位置での建て替えが認められ、2時期の変遷がある。新しい建物の柱痕跡には多量の焼土・炭化物が混入しており、火災により焼失したと判断される。これらの主要建物は建物方位も南北柱筋が真北からやや西に振れる（0度～5度）方位で規則性を持つが、建て替えられた建物の方位がより西に振れる傾向が指摘される。周囲には同方

位でやや規模の小さい建物も位置しており、同時期の建物群を構成すると判断される。

地区中央東寄りには、四面廟のSB487・SB488掘立柱建物跡を中心として北にSB258・SB262・SB263掘立柱建物跡のまとまりが配置される。この主要建物を、国営調査時には各々を秋田城に付属する天王寺の第1次金堂（SB487・SB488）、第1次講堂（SB258・SB262・SB263）と推定している。主要建物はほぼ同位置での建て替えが認められ、2時期の変遷がある。これらの主要建物は建物方位も南北柱筋が北で約6度から15度西に振れる方位で規則性を持つが、建て替えられた建物の方位がより西に（13度以上）振れる傾向が指摘される。さらに新しい建物群は周囲を囲む区画施設が存在する。主要建物の周囲には同方位でやや規模の小さい建物も位置しており、主要建物と同時期の建物群を構成すると判断される。

その他に地区中央のさらに東寄りを中心として、東西棟のSB1129・SB1146・SB1147・SB1308掘立柱建物跡といった規模の大きい建物跡や南北棟のSB1149・SB1307などが規則性を持って配置されており、建物方位も南北柱筋が北でやや西に振れる方位でまとまりを示している。これらの建物群も方位などから、前述の中央西寄りの建物群と同時期となる可能性が指摘される。

中央建物群を構成する建物の方位だけみると、南北柱筋が北ではば真北（北で東に1度）から4度西に振れるA類、西に約6度から11度振れるB類、西に約13度から15度振れるC類、東に約1度から6度振れるD類に分類される。

鶴ノ本地区検出建物跡一覧表（1）

造構番号	前面番号	調査次数	規模・桁行（m）・梁間（m）	建物構造および方位	柱墨り方・規模形状・深さ	柱痕跡・規模形状・深さ	埋土状況	検出位置・層位重複関係	備考（出土物等）
SB006	16	25次	桁行7間（20.8） 南北西-（3.2）+（2.7）+（3.0） +（3.2）+（3.8）+（3.1）+（2.8） 梁間3間（8.4）+南北幅1間 （3.5） 西壁北-（3.5）+（2.4）+（2.2） +（2.4）+（3.5）	東西棟南北 面附 掘立柱建物 （N 3° W）	一辺4.1~4.8 m隔丸方形 深 1.2~1.8 m	（身寄・廻）直 径30~40cm	褐色土・赤褐色 粘土・黄白色 粘土の互層 (古)SB395	地区中央 第10層～地山粘 土層	国営調査第2次 天王寺講堂と 推定
SB395	16	25次	桁行7間（20.8） 北桁西-3.1+2.8+2.9+3.0 +2.9+2.8+3.2 梁間3間（7.0） 西壁北-2.3+2.2+2.5	東西棟 掘立柱建物 N 3° 30' W	一辺1.1~1.3 m隔丸方形 深 0.6~0.7 m	直径40cm・焼 土炭化物多量 混入	褐色土・赤褐色 粘土・黄白色 粘土の互層 (新)SB006	地区中央 第10層～地山粘 土層	SB006の身寄部 とほぼ同位置で 重複 火災により焼失 か
SB018	17	30次	桁行5間（18.35） 北桁西-（3.75）+（3.6）+（3.6） +（3.6）+（3.8） 梁間2間以上（2.4~）+北側 廻1間（3.6） 西壁北-（3.6）+（2.4）+…	東西棟南北 面附掘立柱 建物 （W 3° S）	一辺1.1~1.7 m隔 5.50~90 cm	（直径40~45 cm）	黒色土・赤褐色 粘土・黄褐色 粘土の互層 (古)SB484 (不明)SB486 SB020	地区中央 地山粘土層 (古)	国営調査第2次 天王寺金堂と 推定・柱痕跡円 柱状に掘削、建 物周囲土取りに より不明
SB484	17	30次	桁行5間（18.3） 北桁西-3.8+（3.6）+（3.6）+ +3.6+3.8 梁間2間以上（2.4~）+北側 廻（3.6） 西壁北-3.6+2.4	東西棟南北 面附 掘立柱建物 W 3° S	一辺1.0~1.8 m隔 0.5~1.5m	（身寄）直 径45cm・焼 土炭化物多量 混入 赤鉄片出土	黒色土・赤褐色 粘土・黄褐色 粘土の互層 (新)SB018 (古)SB486	地区中央 地山粘土層 (新)SB018 (古)SB486	SB018とほぼ同 位置で重複
SB019	18	30次	桁行3間（5.45） 西桁北-1.8+1.8+1.85 梁間2間（4.8）+西壁（1.6） 北壁西-+1.6 2.4+2.4	南北棟南北 面附 掘立柱建 物 N 3° 30' W	一辺60cm	（身寄・廻）直 径30~40cm 燒土炭化物多 量混入		地区中央 地山粘土層 (新)SB485	国営調査第2次 天王寺經蔵と 推定・柱痕跡円 柱状に掘削
SB485	18	30次	桁行3間（5.35） 西桁北-（1.8）+（1.8）+（1.75） 梁間2間（4.8）+西壁（1.2） 北壁西-（1.2）+（2.4）+（2.4）	南北棟南北 面附掘立柱建 物 N 2° W	一辺1.1~1.8 m方形・直径 1.6m 深 0.7~0.9 m	（直径20cm）		地区中央 地山粘土層 (古)SB019	SB019とほぼ同 位置で重複
SB021 A	19	42次 46次	桁行3間（6.8） 西桁北-2.3+2.3+2.2 梁間2間（5.9）+東壁1間（2.8） 北壁西-3.0+2.9+2.8	南北棟南北 面附 掘立柱建 物 N 3° W	（身寄）直 径4.0cm （身寄）直 径24cm 前後 柱抜き取り入 る・身寄・廻 焼土炭化物多 量混入	（身寄）直 径40cm （身寄）直 径24cm 前後 柱抜き取り入 る・身寄・廻 焼土炭化物多 量混入	地区西部 第6層 (新)SB021B	国営調査第2次 天王寺櫓様と 推定・柱痕跡円 柱状に掘削・柱 痕跡より瓦片・ 須恵器・赤褐色 土器片出土	

鶴ノ本地区検出建物跡一覧表（2）

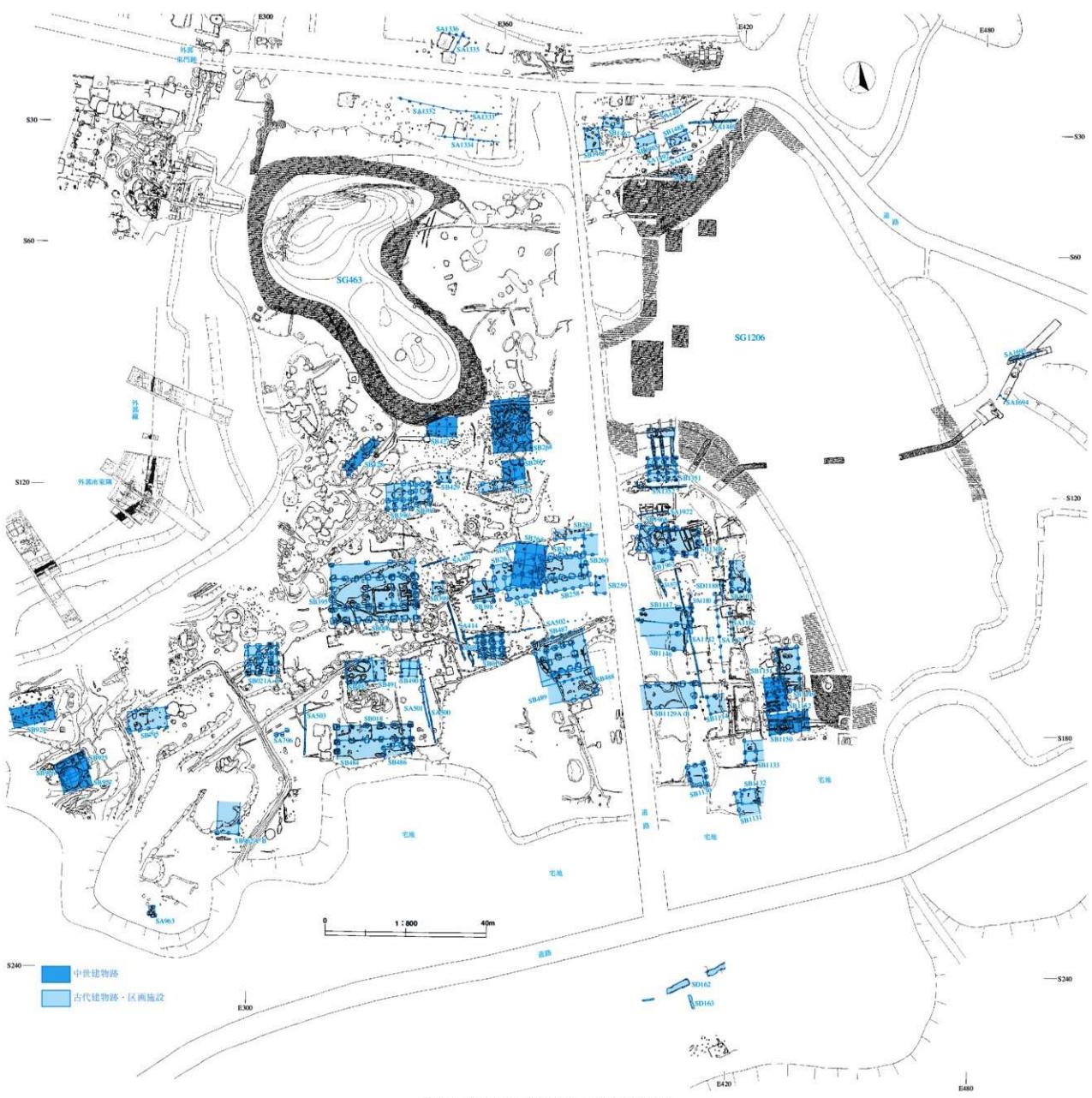
遺構番号	表面番号	調査次数	規模・桁行（m）・梁間（m）	建物構造および方位	柱位置・規模形状・深さ	柱直路・規模形状・深さ	埋土状況	検出位置・層位重複関係	備考（出土遺物等）
SB021 B	19	42次 46次	桁行3間(不明) SB021A重複により不明 南北2間(不明)+東西1間(不明) SB021A重複により不明	南北棟東西柱立柱建物 柱高1.6m	(身合)SB021 A重複により不明 (暗)SB021A重複により不明	(身合)SB021 A重複により不明 (暗)SB021A重複により不明	埋土に焼土炭化物混入せず	地区西部 第6層 (古)SB021A	国営調査第2次 四天王寺鐘楼と 推定・柱根跡より瓦片出土
SB487	20	30次	桁行3間(6.6)+北廊1間 (3.0)+南廊1間(3.0) 西桁北~3.0+2.2+2.2+2.2 +3.0 梁間2間(6.0)+北廊1間 (2.7)+南廊1間(2.7) 西梁北~2.7+(3.0)+(3.0)+ 2.7	東西棟四面 柱立柱建物 N14° W	(身合)一辺 1.1~1.2m深 φ0.5~0.8m 方形 (暗)一辺 60cm深 φ20~40cm方形	(身合)直径30 cm前後 柱抜き取り入る (暗)直径27cm 前後 柱抜き取り入る		地区中央 地山粘土層 (不明)SB488	建物南半国営調 査時掘り方全掘 削 第438回~1須恵 器出土
SB488	21	30次	桁行3間(7.8)+西廊(不明) +東廊(不明) 南北内~……+(3.9)+(3.9)+… 梁間2間(7.2)+北廊1間 (3.6)+南廊1間(不明) 東梁北~(3.6)+(3.6)	東西棟四面 柱立柱建物 N11° W	(身合)一辺 1.3~1.6m方形 深5.0m (暗)一辺 1.6~1.8m方形 深7.0m	(身合)不明 (暗)不明確		地区中央 地山粘土層 (不明)SB487	国営調査第1次 四天王寺金堂と 推定・国営調査 時掘り方全掘削・ 建物南・東・西 側土取りにより 不明
SB489	21	30次	南北2間以上(不明) 西南南北柱3.0?+…	掘立柱建物	直径1.2m ややゆがんだ 円形	不明確		地区中央 地山粘土層	建物西側土取り により不明
SB257	22	18次	桁行4間(9.94) 北桁西~2.50+2.36+2.48+ 2.60mm柱2間(5.14) 西梁北~2.64+2.50	東西棟 柱立柱建物 N 0° W	一辺1.2~1.6 m方形 深60cm	直径33~40cm 柱抜き取り入る ・焼土炭化物 多量混入	褐色粘土・ 黄白色粘土の 互層	地区中央 地山粘土層 (古)SB258	
SB258	22	18次	桁行4間(10.8) 北桁西~(2.16)+(2.16)+ (2.16)+(2.16)+(2.16) 梁間2間(5.4)+1間(2.65) 東梁北~2.68+2.66+2.65	東西棟南面 柱立柱建物 N 10°~30° W	一辺1.0 m 前 後 方 梁間2間(5.4)+1間(2.65) 東梁北~2.68+2.66+2.65	直径36cm	褐色土・明褐色 粘土プロック の互層	地区中央 地山粘土層 (新)SB259 (不明)SB260	国営調査時掘り 方全掘削
SB259	22	30次	桁行2間以上(2.1~) 北桁西~2.5~+… 梁間2間(4.2) 西梁北~2.1+2.1	掘立柱建物 N 2° E	一辺60~80cm 方形または直 角60~80cmの 円形 深340cm	不明	褐色土・赤褐色 粘土プロック	地区中央 地山粘土層	
SB260	22	18次	桁行2間(2.1)以上 北桁西~2.1~+… 梁間2間(4.7) 北梁西~(2.35)+(2.35)+…	掘立柱建物 N 6°~30° W	直径60~70cm 不整円形 深30cm	直径18cm	褐色土しまり なし	地区中央 地山粘土層 (不明)SB258~ SB260	建物東側削平に より不明
SB261	22	18次	東西3間(2.1) 南北柱西~(1.8)+(1.8)+(1.8) 南北柱~(1.8)間以上(不明) 不明	掘立柱建物 W 2° S	直径70~80cm 円形 深30cm	直径18cm	明褐色粘土・ 黄白色粘土の 互層やしまり なし	地区中央 地山粘土層 (不明)SB260	建物北側削平に より不明
SB262	22	18次	桁行3間(9.94) 北桁西~(2.5)+(2.1)+(2.1) 梁間2間(5.8) 西梁北~(2.9)+(2.9)	東西棟 柱立柱建物 W 11° S	一辺0.8~1.0 m方形 深50cm	不明		地区中央 地山粘土層 (不明)SB257	国営調査時掘り 方全掘削
SB263	22	18次	桁行3間(9.6) 北桁西~(3.32)+(3.46)+(4.0) 梁間2間(5.8) 西梁北~(3.3)+(3.3)	東西棟 柱立柱建物 W 13° S	一辺1.0~1.2 m方形 深250~60cm	不明	褐色粘土・黄 白色粘土の互 層	地区中央 地山粘土層 (不明)SB257	国営調査時掘り 方全掘削
SB267	44	18次	桁行3間(9.6) 北桁西~2.4+2.4+2.4+2.4 梁間2間(1.8) 東梁北~1.8	東西棟 柱立柱建物 W 11°~30° S	一辺0.8~1.0 m方形 深250~60cm	直径20cm	褐色土	地区中央 地山粘土層 (古)SB260	
SB396	23	25次	桁行3間(6.3) 東西北~2.1+2.1+2.1 梁間2間(6.3) 南梁西~2.1+2.1+2.1	南北棟柱立柱建 物N 3° W	一辺1.1~1.3 m方形 深50cm	直径20~25cm	褐色土・黄 白色粘土の互 層	地区中央 地山粘土層 (新)SI397 (古)SI400、SI 401、SK419	
SB397	23	25次 26次	桁行3間(4.95) 西桁北~1.65+1.65+1.65 梁間2間(3.4) 南梁西~1.6~1.8	南北棟 柱立柱建物 N 2° W	一辺0.9~1.2 m方形か不整 形・直径1.2 m円形 深50.8~1.8 m	直径30cm 柱抜き取り入る	黄色粘土・暗 赤褐色土の互 層	地区中央 地山粘土層 (古)SB396、SI 401	
SB398	24	25次 26次	桁行2間(5.2) 西桁北~2.6+2.6 梁間2間(5.4) 北梁西~2.7+2.4	南北棟 柱立柱建物 N 3° W	一辺60~80cm 隅丸方形 深50cm	直径30~35cm		地区中央 第10層~地山粘 土層	国営調査時掘り 方全掘削

鶴ノ本地区検出建物跡一覧表（3）

遺構番号	表面番号	調査次数	規模・桁行（m）・梁間（m）	建物構造および方位	柱位置・規模 形状・深さ	埋土状況	検出位置・層位 重複関係	備考 (出土遺物等)
SB399	25	25次	桁行1間(2.6) 東西2.6 南北2.6 北壁2.55	東西棟 獨立柱建物 N3° W	一辺50~65cm 隅丸方形 深さ40~50cm	直径25~30cm 埴土炭化物多 量混入	褐色土・黄白 色粘土の互層	地区中央 第10層~地山粘 土層
SB429	23	26次	桁行1間(3.0) 北軒3.0 東西2.4 南北2.4	東西棟 獨立柱建物 N2° W	一辺0.8~1.1 m方形 深さ44~120 cm	直径20~25cm 柱抜き取り入 る、焼土炭化 物混入	黄色粘土・暗 赤褐色土の互 層	地区中央 地山粘土層
SB486	17	30次	東西3間(6.9) 北軒西~(2.4)+(2.1)+(2.4) 南北2.5 1.8+…	獨立柱建物 W8° S	一辺1.0m 方形 深さ30 cm~40cm	不明確		地区中央 地山粘土層 (新)SB484
SB490	26	30次	東西2間(4.1) 南北西~1.9+2.2 梁間2間(3.9) 西壁北~1.8+2.1	東西棟柱 式獨立柱建 物 N2° E	一辺50cm方 形、梁間50cm 円形 深さ20~50cm	直径20cm		地区中央 地山粘土層 (新)SA494、SA 500
SB491	27	30次	桁行5間(9.45) 北軒南~(1.5)+2.0+2.0+1.9 東西2.6 梁間2間(4.9) 東壁北~2.5+2.4	東西棟 獨立柱建物 N4° W	一辺40cm 方形 深さ30~60cm	直径15~20cm		地区中央 地山粘土層 (古) SK512~ SK540、SD505
SB492	27	30次	桁行3間(6.6) 北軒西~(2.3)+(2.3)+2.0 南北2間(5.9) 東壁北~2.3+1.3+2.3	東西棟 獨立柱建物 N7° W	直径30~40cm 円形柱折円形 梁間25~45cm	直径20cm		地区中央 地山粘土層 (古) SK512~ SK540、SD505
SB795	28	46次	桁行4間(9.5) 北軒南~(2.5)+2.5+2.4+2.1 梁間2間(5.0) 東壁北~2.5+2.5	東西棟 獨立柱建物 N6° W	一辺70~80cm 方形・方向整 然としてない い 深さ30~90cm	直径21~27cm	褐色土	地区西部 地山粘土層 (不明) SP1直 接の切り合いな し
SB962 A	29	51次	東西2間(5.45) 南北柱列北~2.75+2.7 南北2間以上(2.7~) 2.7+…	獨立柱建物 W1° N	一辺0.7~1.0 m 方形 深さ0.8~1.2 m	直径25cm	赤褐色粘土・ 黄色粘土・暗 褐色土互層	地区北側土取 りにより不明・SB 962Aとはほぼ同 位置で重複
SB962 B	29	51次	東西2間(5.45) 南北柱列北~2.75+2.7 南北2間以上(2.6~) 2.6+…	獨立柱建物 W1° N	SB962A 重複 により不明	SB962A 重複 により不明	赤褐色粘土・ 黄色粘土・暗 褐色土互層	地区北側土取 りにより不明・SB 962Aとはほぼ同 位置で重複
SB1129 A	30	57次	桁行4間以上(12.1~) 北軒東~3.1+3.0+3.0+3.0~ 梁間2間(6.2) 東壁北~3.1+3.1	東西棟 獨立柱建物 N4° W	一辺1.1~1.8 m 方形 深さ40~60cm	直径30cm	褐色土	地区中央東側 地山粘土層 (新)SB1129B
SB1129 B	30	57次	桁行4間以上(12.1~) 北軒東~(3.1)+(3.0)+(3.0)+ (3.0)... 梁間2間(6.2) 東壁北~(3.1)+(3.1)	東西棟 獨立柱建物 (N4° W)	一辺0.9~1.2 m 方形 深さ20cm	SB1129A 重複 により不明	褐色土主体	地区中央東側 地山粘土層 (古) SB1129A
SB1130	32	57次	桁行3間(5.4) 東西北~1.8+1.8+1.8 梁間2間(4.2) 北壁西~2.1+2.1	南北棟 獨立柱建物 N13° W	一辺1.1~1.3 m 方形 深さ30~50cm	直径50cm	暗褐色土主体	地区中央東側 地山粘土層 (新) SU1135
SB1131	33	57次	桁行4間以上(4.2~) 東西北~2.1+(2.1)+… 梁間2間(5.0) 北壁西~2.5+2.5	南北棟 獨立柱建物 N15° W	一辺0.8~1.0 m 方形 深さ20~40cm	直径20~40cm 柱抜き取り入 る	褐色土と暗 褐色土主体	地区中央東側 地山粘土層 (不明) SB1132 直接の切り合 いなし
SB1132	33	57次	桁行3間以上(4.2) 東西北~2.1+2.1+… 梁間2間(3.6) 西壁北~1.8+1.8	東西棟 獨立柱建物 N7° W	直径30~50cm 円形 深さ30~50cm	柱抜き取り入 るより柱痕跡不 明	暗褐色土主体	地区中央東側 地山粘土層 (不明) SB1131 直接の切り合 いなし
SB1133	34	57次	東西2間以上(2.7~) 南側東西柱列西~2.7+… 南北2間(5.2) 西側南北柱列北~2.6+2.6	独立柱式獨立 柱建物 N6° W	直径0.8~1.1 m 円形 深さ40~60cm	直径30cm 柱抜き取り入 る		地区中央東側 地山粘土層
SB1134	35	57次	東西2間以上(1.9~) 北側東西柱列西~1.9+… 南北2間(4.4) 西側南北柱列北~2.2+2.2	東西棟 獨立柱建物 N13° W	一辺0.6~1.0 m 方形 深さ30~40cm	直径30~40cm 柱抜き取り入 る	褐色土主体	地区中央東側 地山粘土層
SB1146	37	58次 91次	桁行4間以上(12.0~) 北軒東~3.0+(3.0)+(3.0)+ (3.0)+… 梁間2間(6.6) 東壁北~3.3+3.3	東西棟 獨立柱建物 N4° E	一辺0.6~1.2 m 方形 深さ50~40cm	直径30~40cm	褐色土	地区中央東側 地山粘土層 (古) SB1153、 SK1189 (不明) SB1147 直接の切り合 いなし 第43回~2須慈 發出土

鶴ノ本地区検出建物跡一覧表（4）

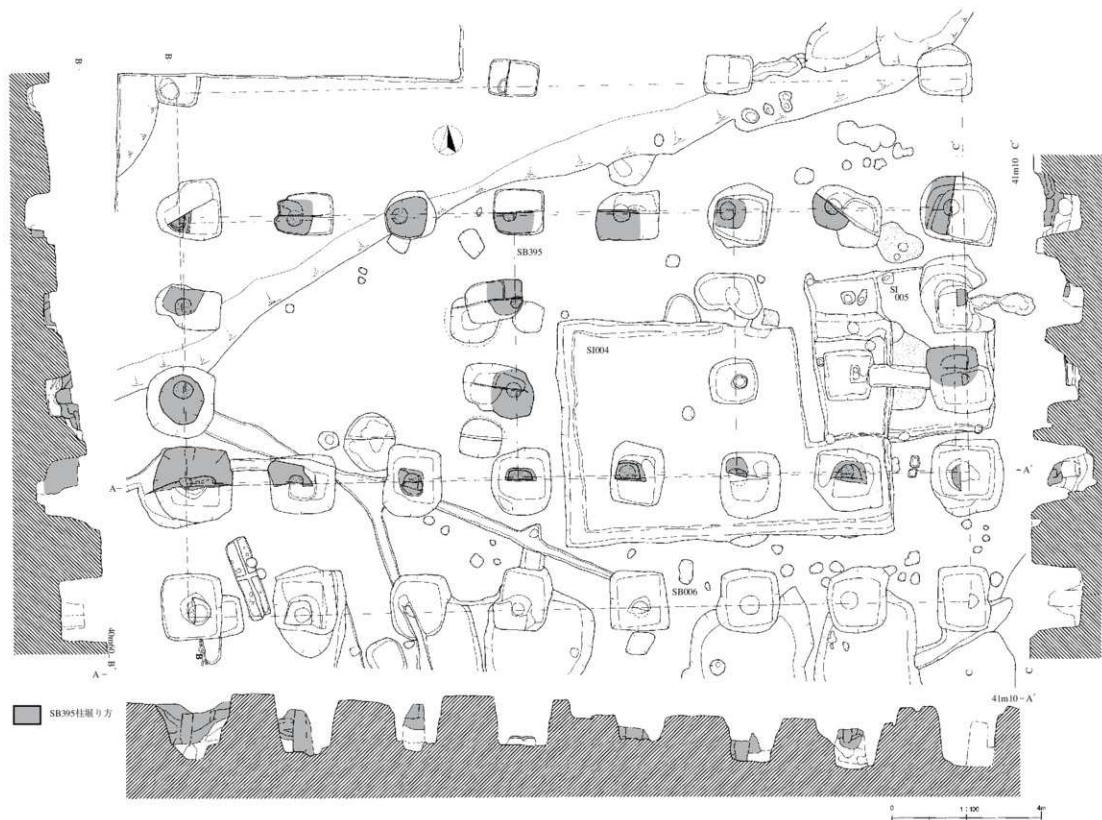
遺構番号	表面番号	調査次数	規模・桁行（m）・梁間（m）	建物構造および方位	柱振り方・規模形状・深さ	柱直路・規模形状・深さ	埋土状況	検出位置・層位重複関係	備考（出土遺物等）
SB1147	37	58次 91次	桁行4間以上(12.0～) 南北軸=3.0+(3.0)+(3.0)+ 梁間2間(6.6) 東要素北=3.3+3.3	東西棟 獨立柱建物 N 4° W	一辺1.2～1.4 m 方形 深さ10～50cm	直径24～36cm 柱抜き取り入る 燒土炭化物混入	褐色土	地区中央東側 地山粘土層 (古)SI1153、 SK1189 (新)SB1146 直接の切り合いなし	建物西側土取り により削平され 不明
SB1149	36	58次	桁行4間(10.8) 西軸北=2.7+2.7+2.7+2.7 梁間2間(5.4) 北壁西=2.7+2.7	南北棟 獨立柱建物 N 3° W	直径0.8～1.2 m 円形 深さ20～90cm	直径30cm 柱抜き取り入る	明褐色 土・浅黃白色 粘土・褐色土の互層	地区中央東側 第8層 (新)SI1154 (古)SI1155、SI 1156、SI1164	
SB1307	31	61次	桁行4間(11.2) 西軸北=2.8+2.8+2.8+1.8 梁間2間(4.8) 北要素西=2.4+2.4	南北棟 獨立柱建物 N 3° W	一辺0.8～1.2 m 方形か不整方形 深さ50cm	直径20cm 柱抜き取り入る 燒土炭化物混入	褐色土・明褐色 粘土の互層	地区中央東側 第9層 (古)SI1162	
SB1308	38	61次 91次	桁行5間(15.0) 南北軸=3.0+3.0+3.0+3.0+ 3.0 梁間2間(6.0) 東要素北=3.0+3.0	東西棟 獨立柱建物 N 6° E	一辺1.3～1.6 m 方形 深さ30～80cm	直径30cm 柱抜き取り入る	褐色土・明褐色 粘土ブロックの互層	地区中央東側 地山粘土層 (古)SB1967、 SB1968、SA 1969、SI1309、 SI1976	SA1969は建物 構造の一部となる 可能性あり 第43図-5赤褐色土器鉢出土
SB1465	38	67次	桁行2間(4.8) 北軸西=2.4+2.4 梁間1間(2.1) 西要素北=2.1	東西棟 獨立柱建物 N 17° W	直径40～60cm 円形 深さ40～60cm	直径15cm 柱抜き取り入る	褐色砂・明黄 色砂・浅黃 色砂の混じり	地区北部 地山飛砂層	
SB1466	39	67次	桁行2間(5.4) 西軸北=2.7+2.7 梁間1間(3.6) 北要素西=3.6	南北棟 獨立柱建物 N 7° W	直径50～60cm 円形 深さ20cm	柱抜き取りに より柱痕跡不明	*	地区北部 地山飛砂層	
SB1467	40	67次	桁行2間(4.8) 北軸西=2.4+2.4 梁間1間(2.4) 西要素北=2.4	東西棟 獨立柱建物 N 5° E	直径50～60cm 円形 深さ20～40cm	柱抜き取りに より柱痕跡不明	*	地区北部 地山飛砂層	
SB1488	41	69次	桁行2間(5.4) 北軸西=2.7+2.7 梁間1間(2.7) 西要素北=2.7	東西棟 獨立柱建物 N 24° W	直径30～50cm 円形 深さ20～50cm	柱抜き取りに より柱痕跡不明	褐色土・褐 色土の混じり	地区北部 第12層 (新)SK1509	第43図-3・4 縄文土器出土
SB1967	42	91次	桁行3間(8.1) 西軸北=2.7+2.7+2.7 梁間2間(4.8) 南要素西=2.4+2.4	南北棟 獨立柱建物 N 10° W	直径0.7～1.0 m 隅丸方形 深さ10～35cm	直径18～21cm 柱抜き取り入る	褐色土・明褐色 粘土の互層	地区中央東側 第8層～地山粘 土層 (新)SB1308、 SB1968 (古)SI11976	
SB1968	42	91次	桁行2間(5.5) 西軸北=2.8+2.7 梁間2間(4.8) 南要素西=(2.4)+(2.4)	南北棟 獨立柱建物 N 6° W	SB1968重複 により不明 円形か 深さ30～45cm	直径13～15cm 柱抜き取り入る	褐色土・明褐色 粘土の互層	地区中央東側 第8層～地山粘 土層 (新)SB1308 (古)SI11976、 SB1967	



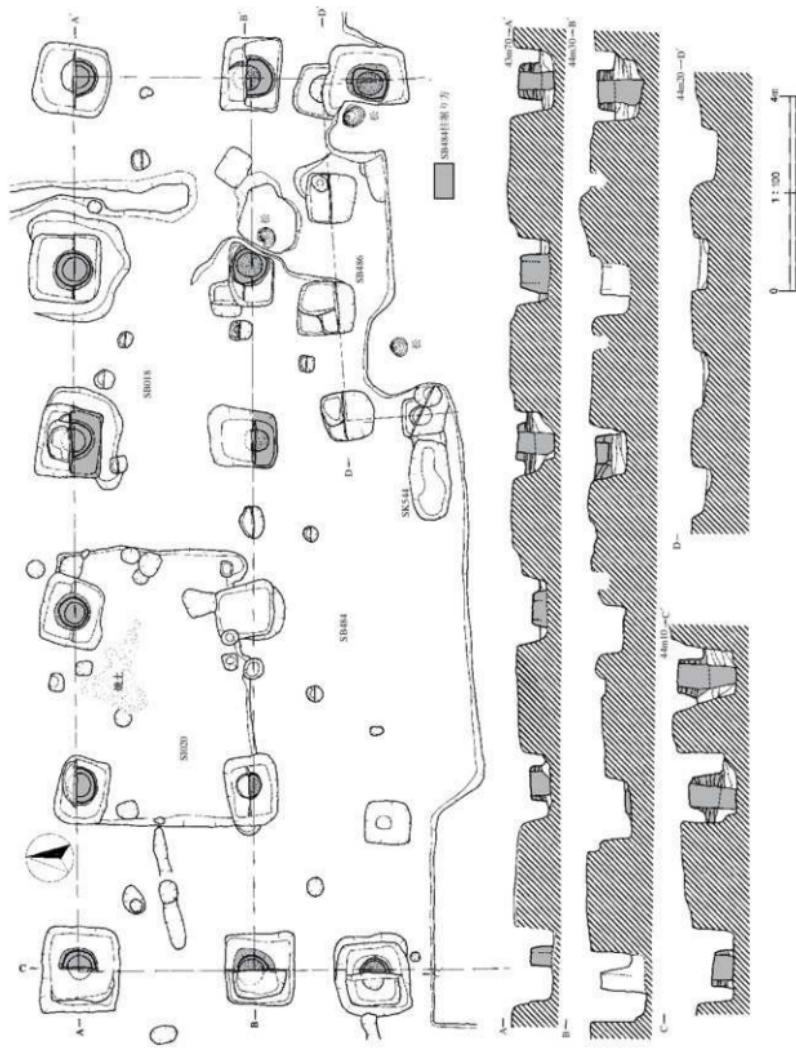
第14図 鶴ノ木地区検出建物跡・区画施設位置図



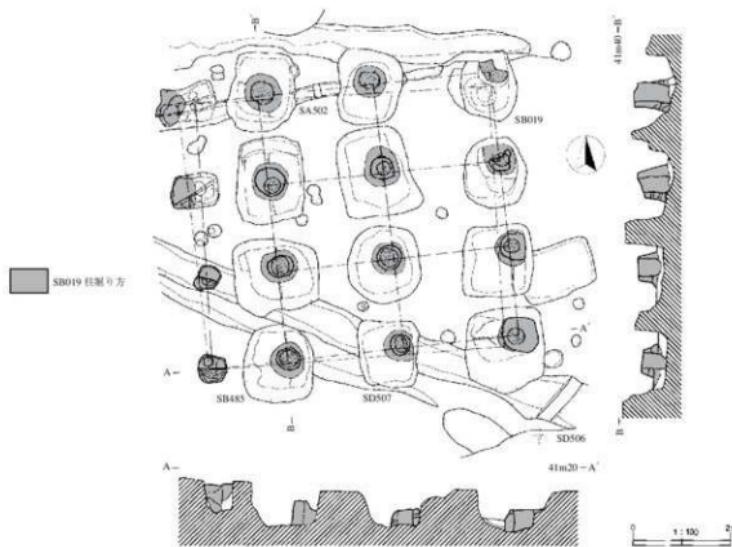
第15図 萸ノ木地区中央建物群造構平面図



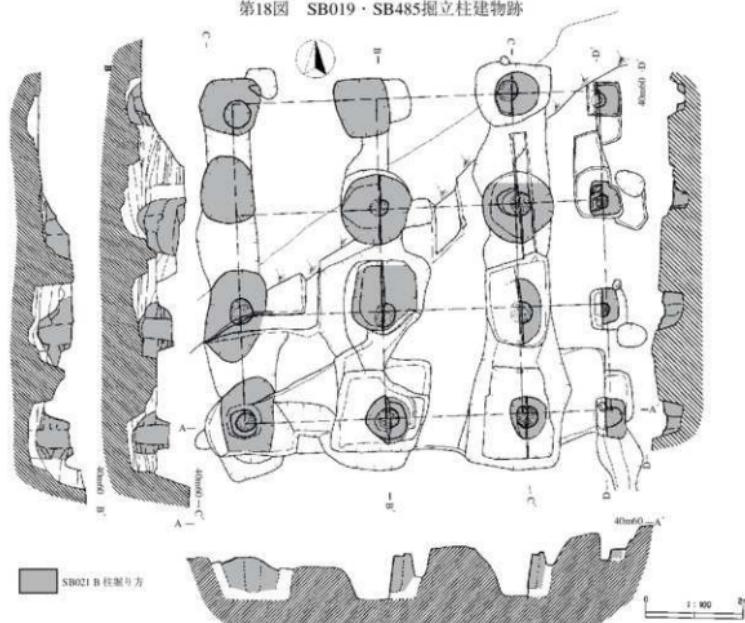
第16図 SB006・SB395掘立柱建物跡



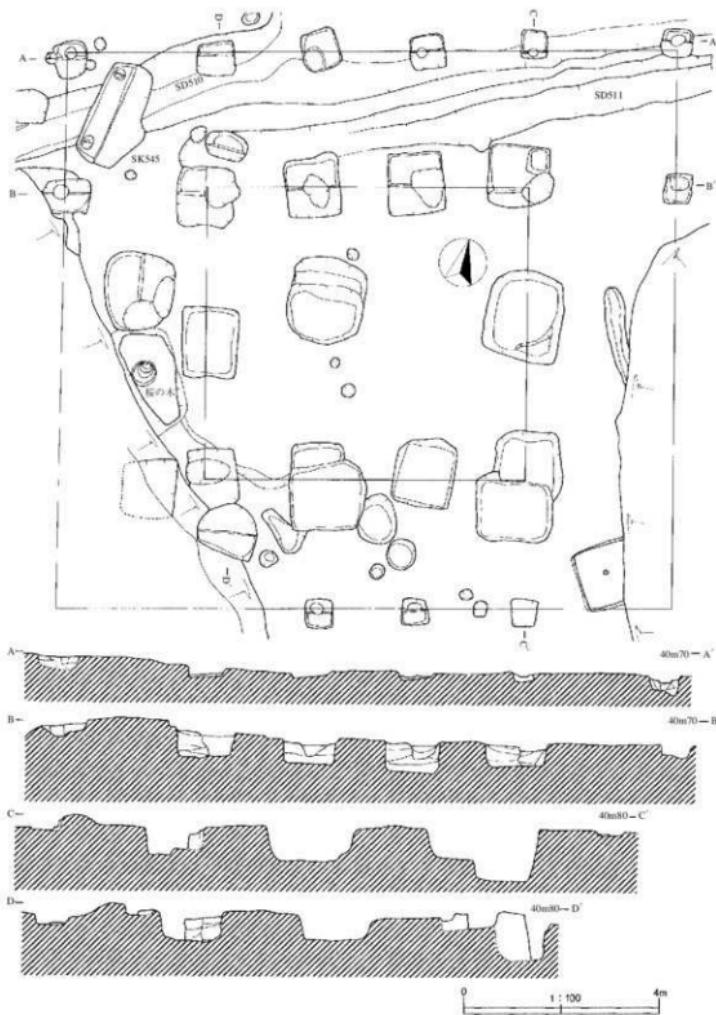
第17图 SB018·SB484·SB486掘立柱建物跡



第18図 SB019・SB485掘立柱建物跡



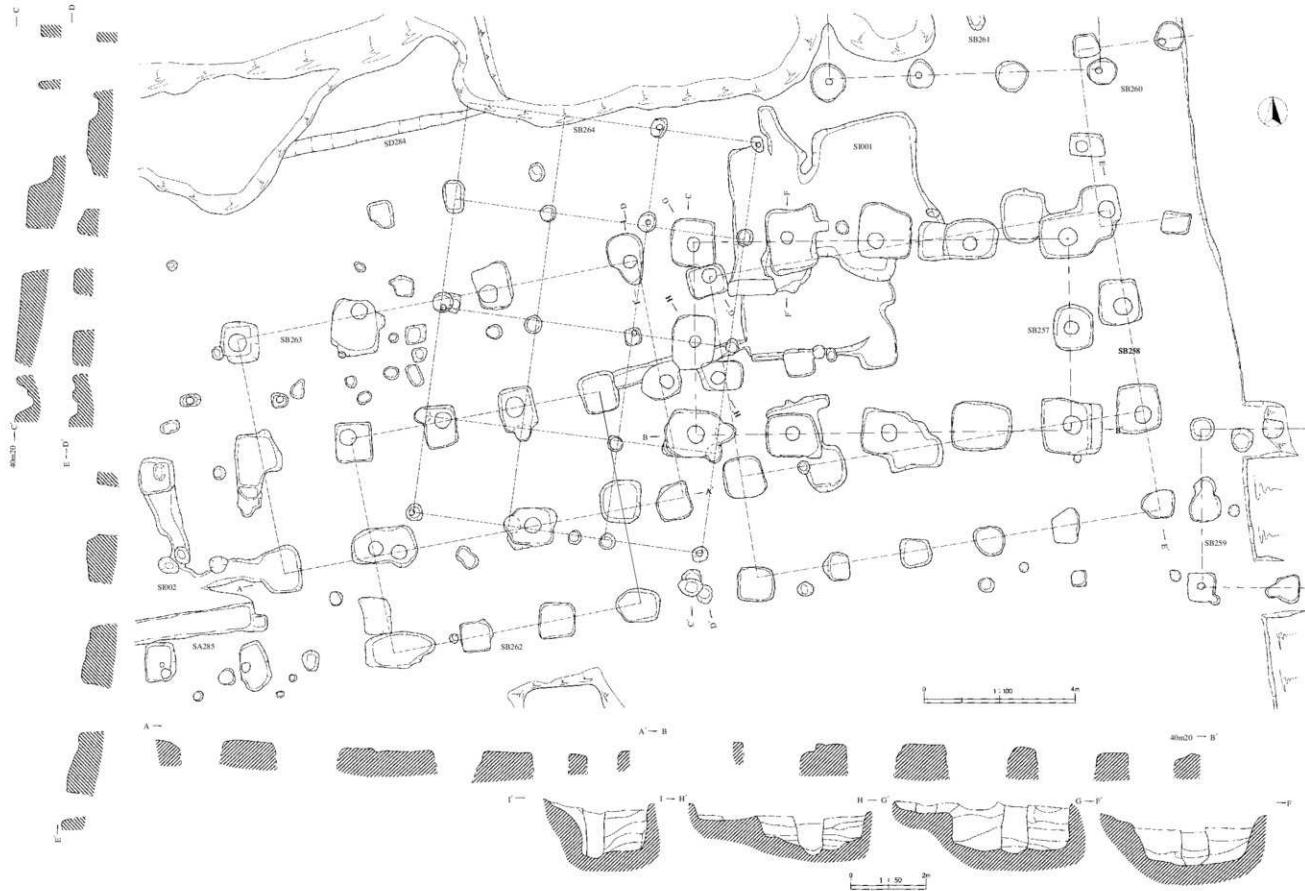
第19図 SB021A・B 掘立柱建物跡



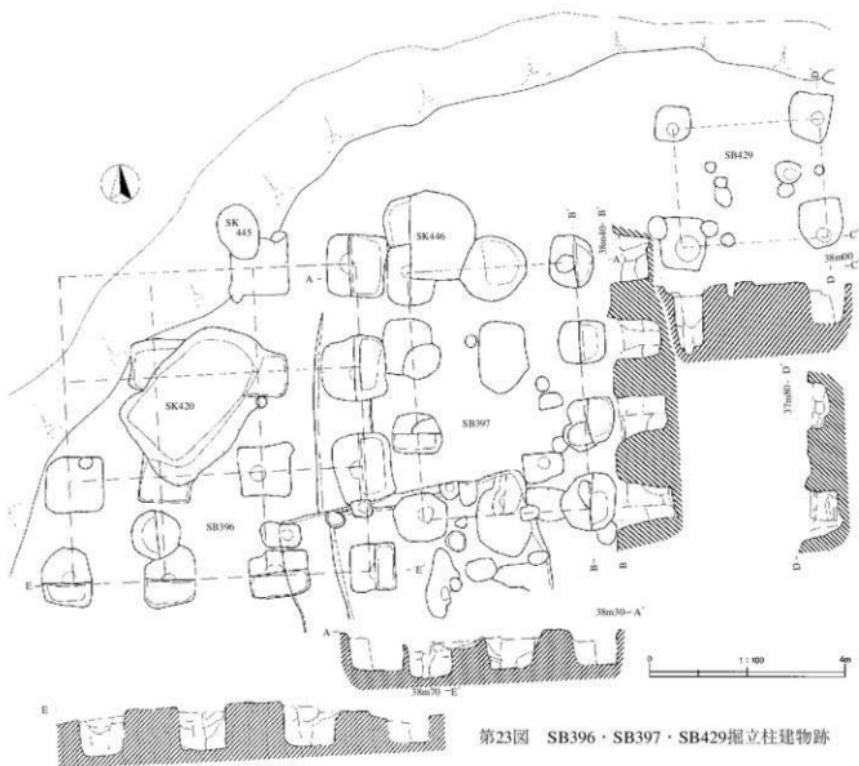
第20図 SB487掘立柱建物跡



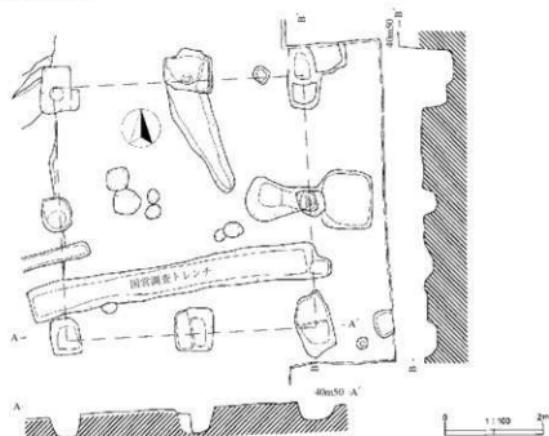
第21図 SB488・SB489掘立柱建物跡



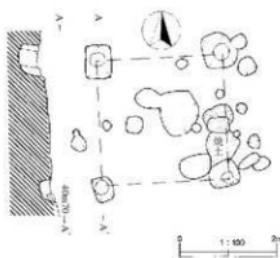
第22図 SB257・SB258・SB259・SB260・SB261・SB262・SB263・SB264掘立柱建物跡



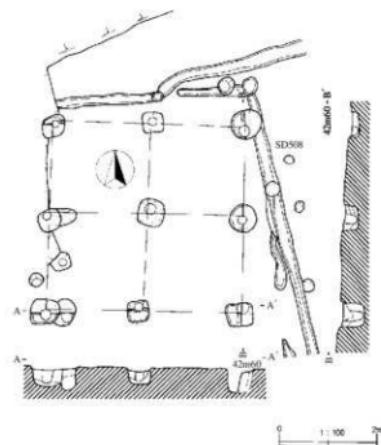
第23図 SB396・SB397・SB429掘立柱建物跡



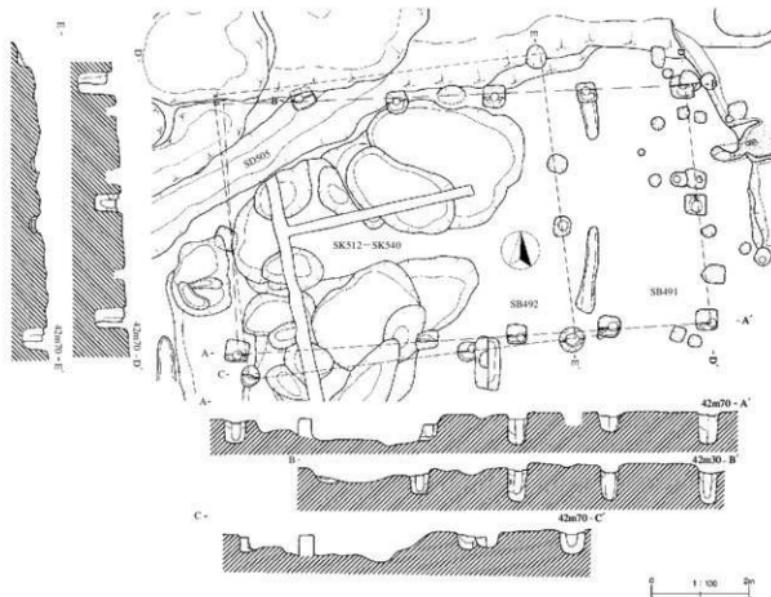
第24図 SB398掘立柱建物跡



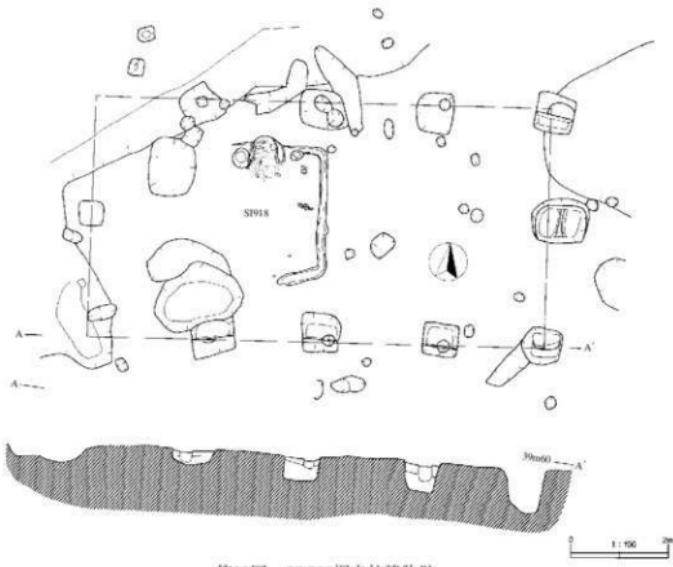
第25図 SB399掘立柱建物跡



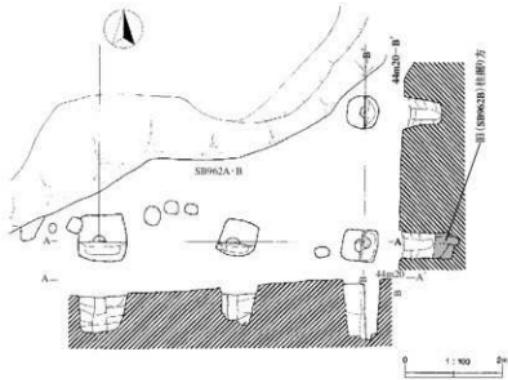
第26図 SB490掘立柱建物跡



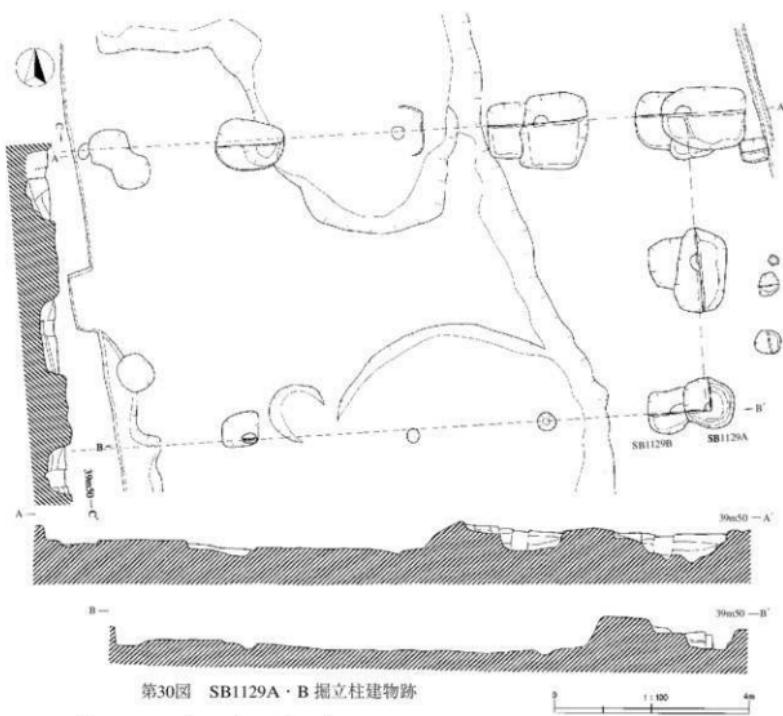
第27図 SB491・SB492掘立柱建物跡



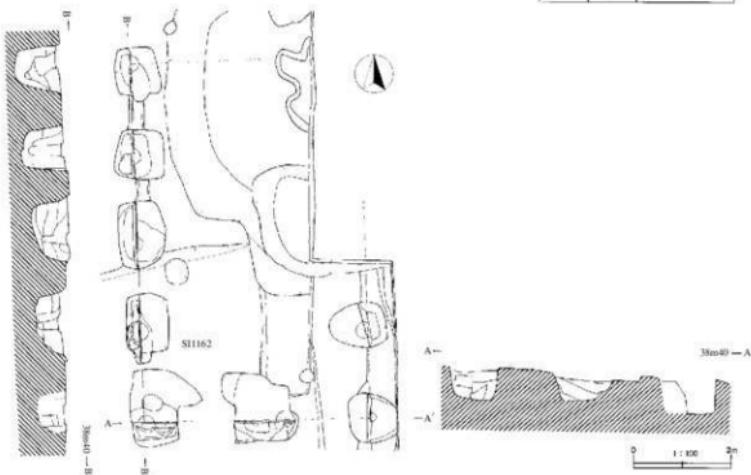
第28図 SB795掘立柱建物跡



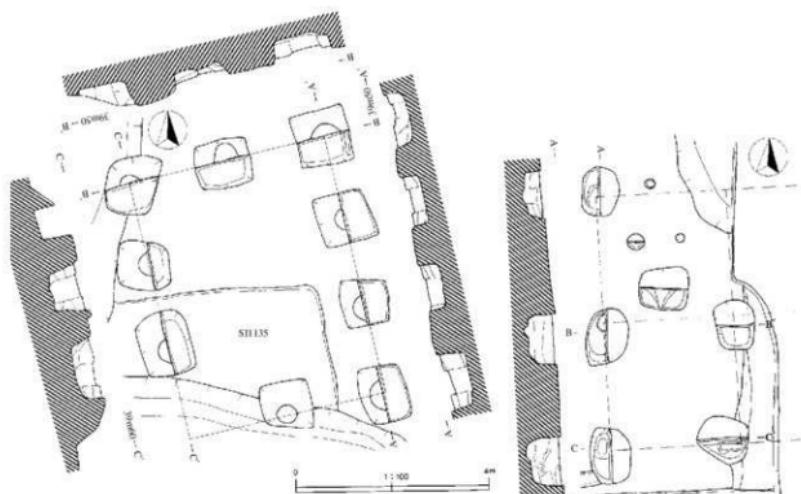
第29図 SB962A・B 掘立柱建物跡



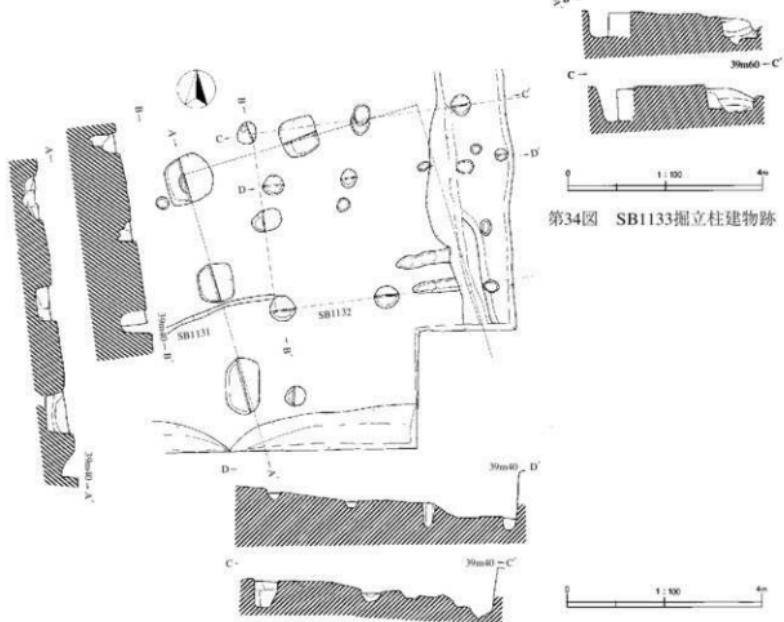
第30図 SB1129A・B 掘立柱建物跡



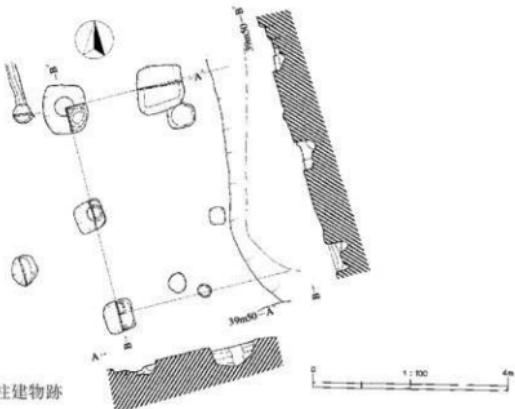
第31図 SB1307掘立柱建物跡



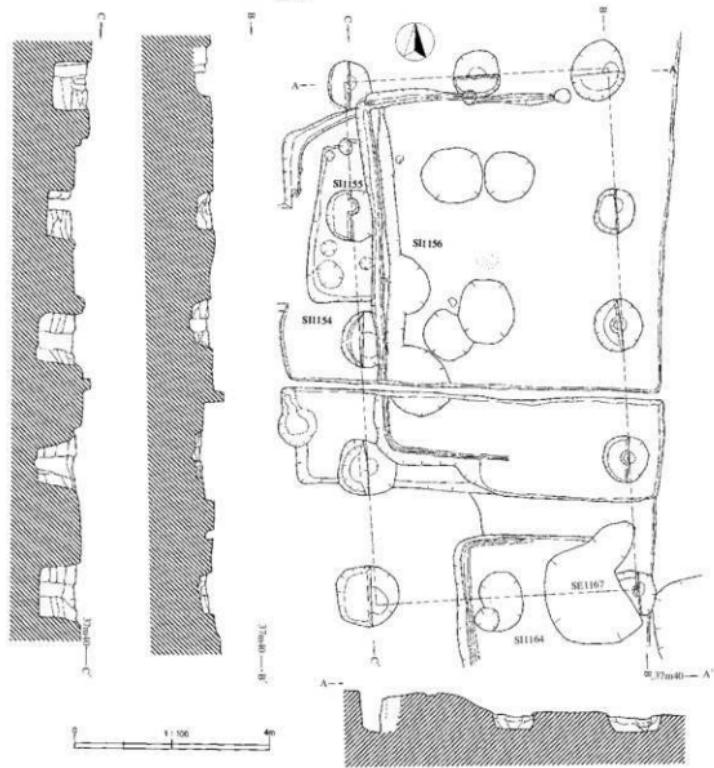
第32図 SB1130掘立柱建物跡



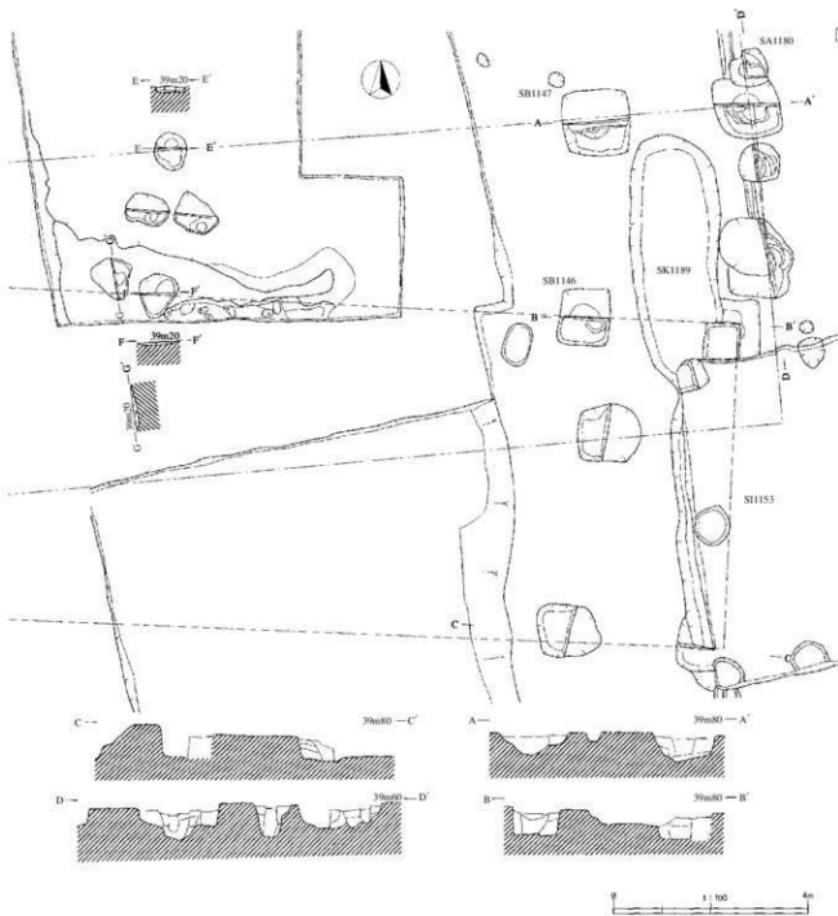
第33図 SB1131・SB1132掘立柱建物跡



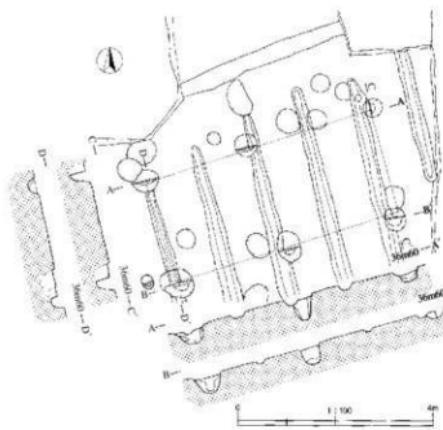
第35図 SB1134掘立柱建物跡



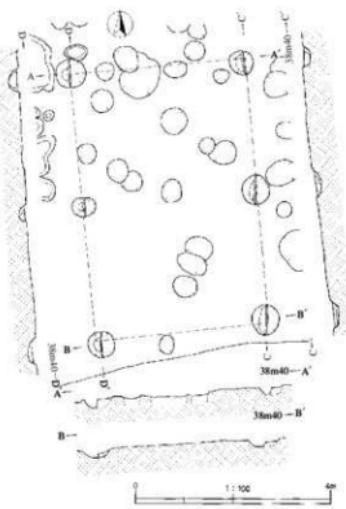
第36図 SB1149掘立柱建物跡



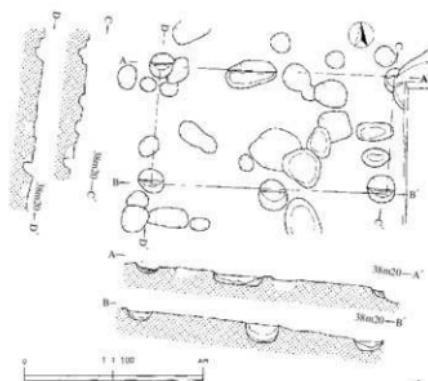
第37図 SB1146・SB1147掘立柱建物跡・SA1180柱列跡



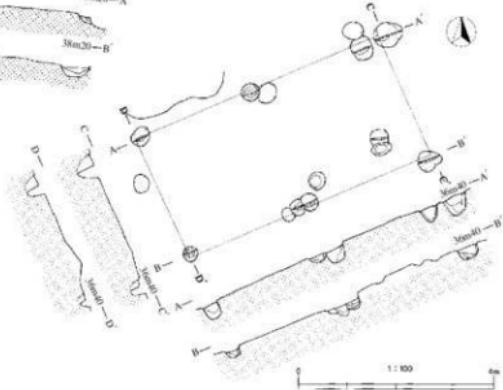
第38図 SB1465掘立柱建物跡



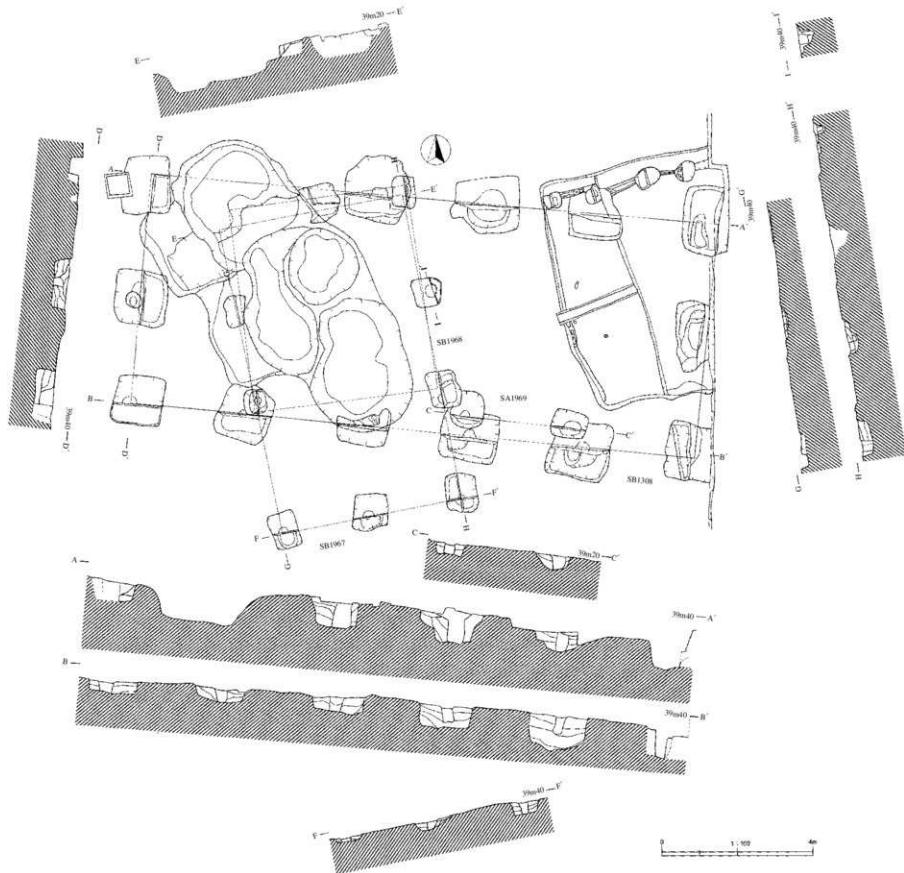
第39図 SB1466掘立柱建物跡



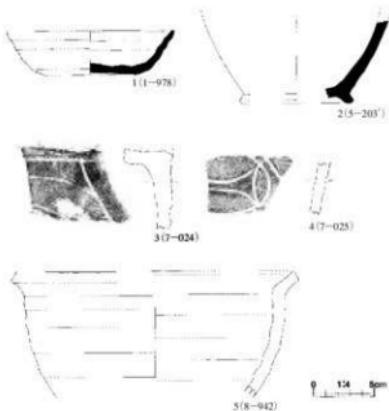
第40図 SB1467掘立柱建物跡



第41図 SB1488掘立柱建物跡



第42図 SB1308・SB1967・SB1968掘立柱建物跡



第43図 萬ノ木地区検出建物跡出土遺物

萬ノ木地区検出建物跡出土遺物一覧表

前面 番号	遺物 番号	種類・器種	出土構造・層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	底部切り離し	調整等	年代
43-1	1-978	須恵器・环	SB487削り方理土	13.9	3.6	7.6	ヘラ切り	底部周縁ケズリ調整	9C第1
43-2	5-203'	須恵器・壺	SB1146削り方理土			9.3	ヘラ切り	ナデ調整	
43-3	7-024	縄文土器・深鉢口縁部	SB1488削り方理土					地文L R单節削縄文沈線文・磨消文	縄文後期 初頭
43-4	7-025	縄文土器・深鉢体部破片	SB1488削り方理土					地文L R单節削縄文沈線文・磨消文	縄文後期 初頭
43-5	8-942	赤褐色土器・鉢	SB1308削り方抜き 取り覆土	23.5	10.4~			口縁部内外面ナデ調整、外 面体部下半ケズリ調整	9C第1

## 2) 中世総柱建物 (第44~48図、図版35・38)

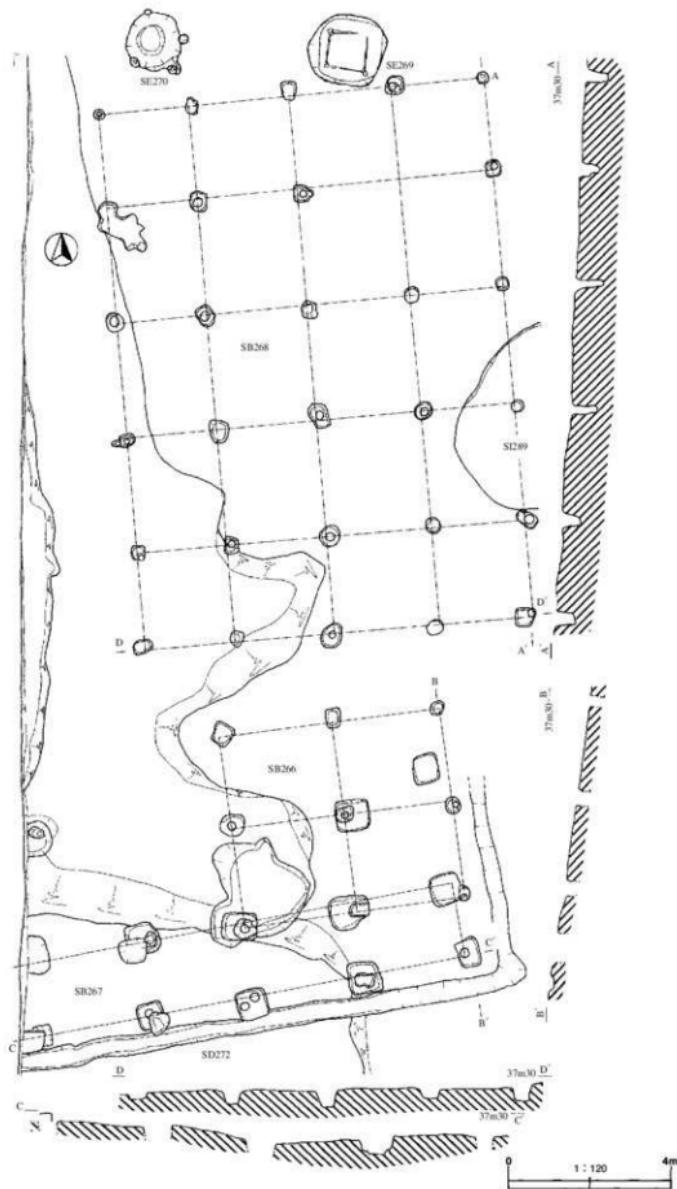
萬ノ木地区検出の掘立柱建物跡のうち、中世整地層面から検出されているものや、柱掘り方の直径50cm以下と小さい総柱式建物で、建物構造が古代と明確に異なる建物を、中世建物として記述する。構造は地区中央部東側のSG1206沼地跡南岸付近、地区中央から北寄りのSG463沼地跡南岸付近にかけて、地区南西部など中世段階で整地事業が行われた付近に、複数棟に井戸を伴う形でまとまりを持ち検出されている。各々建物の重複が検出され、建て替えが確認されていることから、数時期の変遷があると考えられる。

鶴ノ木地区検出中世建物一覧表

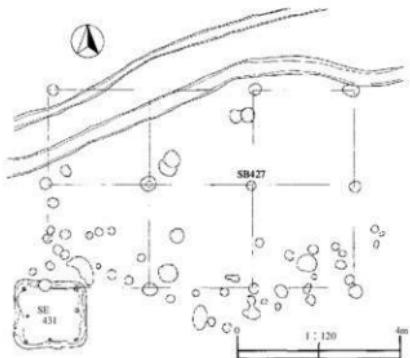
遺構番号	図面番号	調査次数	規模・桁行(m)・梁間(m)	建物構造 および方位	柱据り方・覆瓦 形状・深さ	柱直路・規規 形状・深さ	埋土状況	検出位置・層位 重複関係	備考 (出土遺物等)
SB264	22	18次	桁行4間(5.48) 西北桁→-2.66+2.86+2.90+ 2.64 梁間3間(7.76) 南梁西→-2.60+2.56+2.60	南北椎絆柱 掘立柱建物 N 7° 30' E	直径40~50cm 円形 深さ50cm	不明	赤褐色粘土 しまりなし	地区中央 地山粘土層 (新)SB267	
SB266	44	18次	桁行2間(5.48) 北桁内→-2.68+2.80 梁間2間(4.84) 東梁西→-2.44+2.40	東西椎絆柱 掘立柱建物 N 8° 30' W	一边40~60cm 不整形深さ30~ 40cm	不明	褐色土 しまりなし	地区中央 第5層黒褐色土 (新)SB257· SB262·SB263	
SB268	44	18次	桁行5間(13.14) 東桁北→-2.24+2.86+2.86+ 2.82+2.36 梁間4間(9.66) 南梁西→-2.26+2.48+2.60+ 2.32	南北椎絆柱 掘立柱建物 N 4° 30' W	直径30~50cm 円形 深さ25~60cm	不明	褐色土·黑褐色土 しまりなし	地区中央 第5層黒褐色土 (新)SI289	
SB427	45	26次	桁行3間(7.8) 南桁西→-2.60+2.60+2.60 梁間2間(5.0) 西梁北→-2.40+2.60	東西椎絆柱 掘立柱建物 N 0°	直径30~40cm 円形 深さ40cm	不明確	赤褐色粘土· 暗褐色土 しまりなし	地区中央部 第4層灰褐色土 (新)SE431 (古)SD436	
SB428	14	26次	桁行4間(8.1) 北桁2.7+2.7+2.7 梁間1間(2.6) 東梁北→2.6	東西椎 掘立柱建物 N44° E	直径35~40cm 円形 深さ40cm	10×15cm方形 柱材の痕跡	黄褐色土·暗褐色土· 黄色粘土	地区中央 第4層	中世建物の可能 性高い
SB924	46	48次	桁行4間(9.8) 北桁西→-2.10+2.40+2.40+ 2.9 梁間2間(4.8) 東梁北→-2.50+2.30	東西椎絆柱 掘立柱建物 N15° W	直径20~40cm 円形 深さ30cm	一边20cmの 角材	黄褐色粘土· 明褐色粘土· 暗褐色粘土の 互層	地区西部 第5層赤褐色粘土	
SB925	46	48次	桁行3間(7.7) 北桁西→-2.40+2.40+2.90 梁間2間(4.8) 東梁北→-2.50+2.30	東西椎絆柱 掘立柱建物 N27° W	直径30~50cm 不整形 深さ60cm	一边20cmの 角材	底部に根石または 礎盤	地区西部 第5層赤褐色粘土	
SB926	46	48次	桁行4間(6.6) 北桁西→-2.20+2.20+2.20 梁間2間(3.2) 東梁北→-2.20+2.10	東西椎絆柱 掘立柱建物 N30° W	直径20~40cm 不整形 深さ70cm	一边15~20cmの 角材	黄褐色粘土· 明褐色粘土· 暗褐色粘土の 互層	地区西部 第5層赤褐色粘土	
SB927	46	48次	桁行3間(7.4) 北桁西→-2.30+2.70+2.40 梁間2間(4.1) 東梁北→-2.10+2.00	東西椎絆柱 掘立柱建物 N16° W	直径20~40cm 不整形 深さ70cm	一边15~20cmの 角材	*	地区西部 第5層赤褐色粘土	
SB1150	47	58次	桁行4間(9.6) 北桁西→-2.40+2.40+2.40+ 2.40 梁間2間(4.8) 東梁北→-2.40+2.40	東西椎絆柱 掘立柱建物 N 9° W	直径50cm円形 深さ10~30cm	直径20cm	褐色土	地区南東部第4 層灰褐色土 須恵器环出土 第48図の1	
SB1151	47	58次	桁行3間(9.6) 西北桁北→-2.40+2.40+2.70 梁間2間(4.8) 南梁西→-2.40+2.40	南北椎絆柱 掘立柱建物 N 9° W	直径40cm円形 深さ10~30cm	直径20cm	褐色土	地区南東部第4 層灰褐色土 (古)SX1202 SX1205 (新)SB1152	
SB1152	47	58次	桁行4間(9.6) 西北桁北→-1.80+1.60+1.80 +1.80 梁間2間(4.8) 南梁西→-2.40+2.40	南北椎絆柱 掘立柱建物 N 7° W	直径40cm円形 深さ10~30cm	直径20cm	褐色土	地区南東部第4 層灰褐色土 (古)SX1202 SX1205 (新)SB1152	須恵器甕片出土 第48図の2

鶴ノ木地区検出中世建物跡出土遺物一覧表

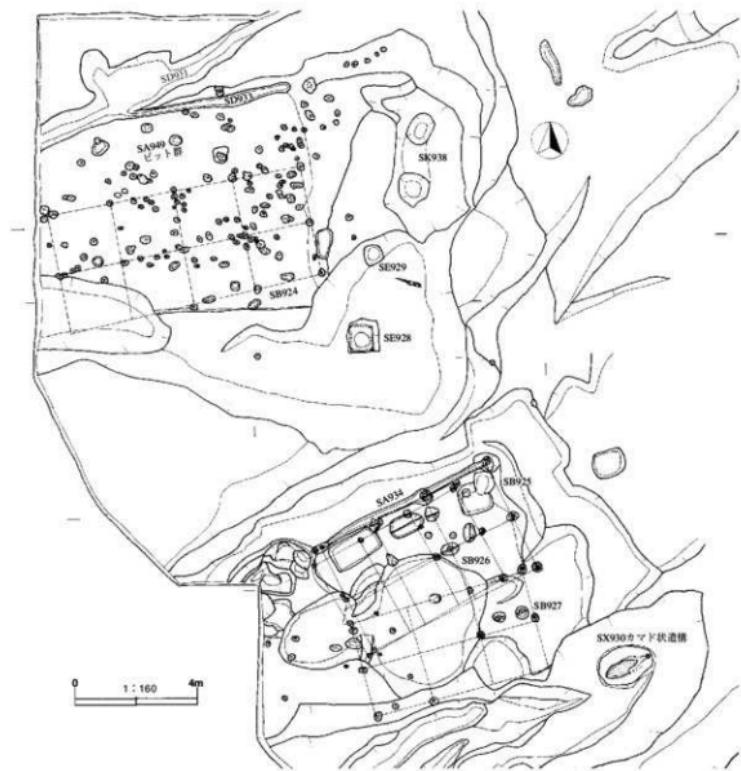
図面番号	遺物番号	種類・器種	出土遺構・層位	L1径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	底部切り離し	調整等	年代
48-1	5-201'	須恵器・台付环	SB1150掘り方理土	14.8	4.7	10.6	ハラ切り	ナデ調整・底部転用観	8 C 第3
48-2	5-202'	珠洲系中世陶器 ・壺体部破片	SB1152掘り方理土					外面叩き・内部無文当て具 痕	



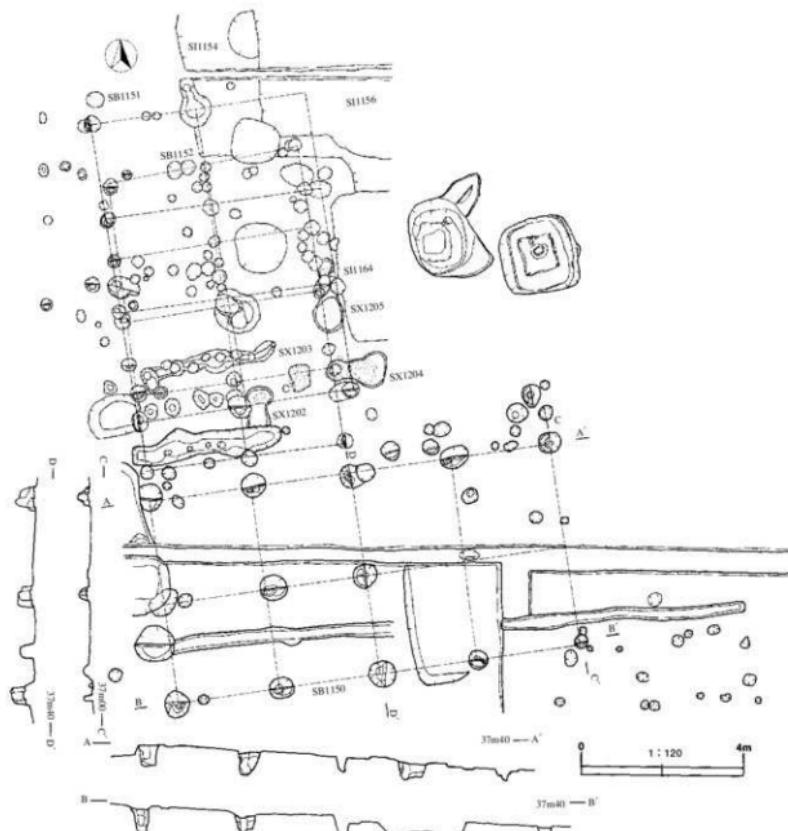
第44図 SB266・SB267・SB268掘立柱建物跡



第45図 SB427掘立柱建物跡



第46図 SB924・SB925・SB926・SB927掘立柱建物跡



第47図 SB1150・SB1151・SB1152掘立柱建物跡



第48図 鶴ノ木地区検出中世建物跡出土遺物

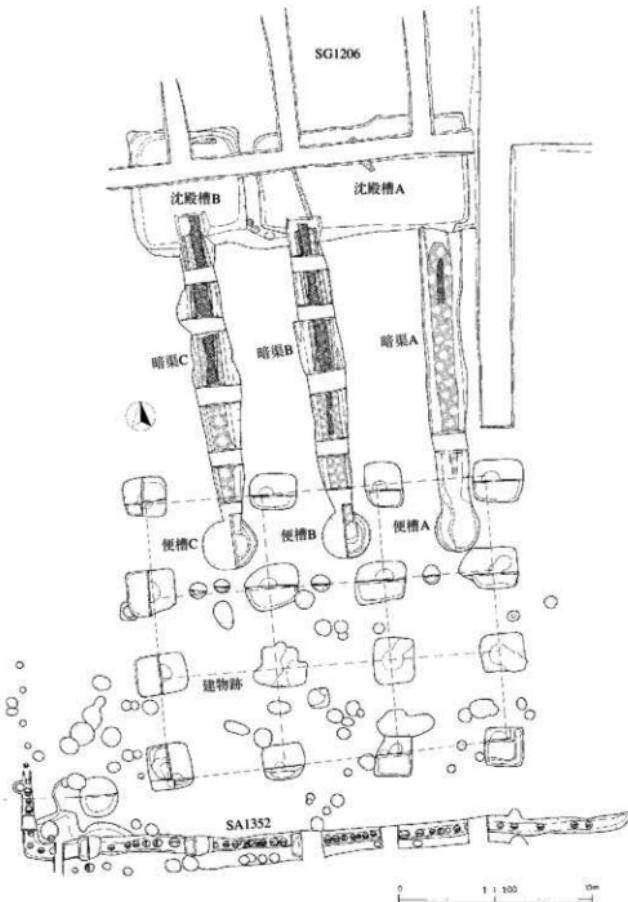
## 2 水洗便所遺構（第49～53図、図版14～17・40・41）

鶴ノ木地区中央北東側の第63次調査で検出された。調査地は SG1206沼地跡の西岸部、鶴ノ木地区中央建物群の北東隅に位置している。便所遺構は掘立柱建物（SB1351掘立柱建物）、便槽、木樋を埋設した暗渠、沈殿槽、目隠し塀（SA1352材木塀）で構成されており、沼地岸辺の傾斜面を整地して

構築されている。遺構は南側の地山粘土層面から北側の沿跡岸辺を整地した地区中央第9層灰黄褐色土層面にかけて検出されている。

### 1) 検出遺構

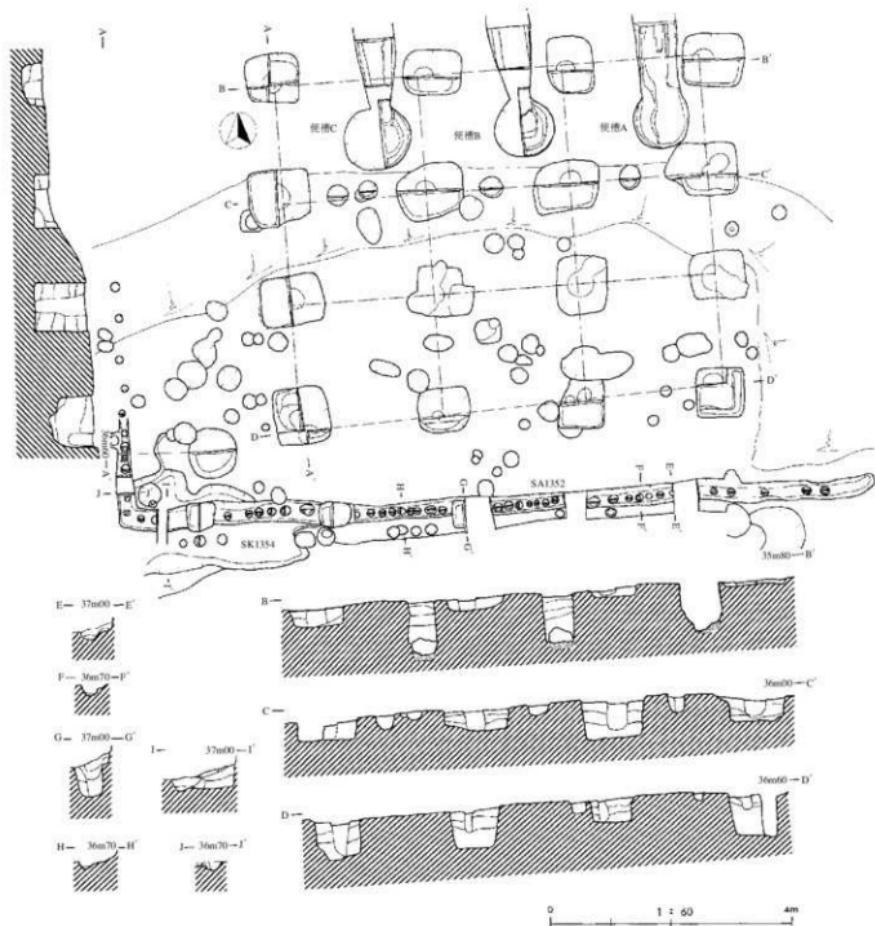
SB1351掘立柱建物跡は桁行3間(2.4m+2.4m+2.4m)、梁間2間(2.1m+2.1m)の身舎に、南側に廂1間(1.8m)が付く南廂東西棟総柱建物である。建物の方位は北で西に約4度振れる。身舎柱掘り方は、一辺0.8~1.2mの方形で、深さ6~85cm、柱痕跡は直径25cmである。削平により北側が極端に浅くなっている。廂柱掘り方は、一辺0.8~1.2mの方形で、深さ40~70cm、柱痕跡は直径12cm



第49図 SB1351便所遺構

であり、底面の深さが身舎より30cm以上深い。全ての柱掘り方には柱抜き取りが行われている。身舎桁行の北から二列目の柱列には、一間ごとに中央から西寄りの位置に直径35cmの小柱掘り方が配されている。この小柱掘り方は扉、或いは遮蔽施設に関連するもので、身舎北側の一間は三室に分かれ、南に扉か仕切りが付いていたと考えられる。三室各々には東寄りの位置に、直径90~100cm・深さ75~95cmの円形の掘り込みに、直径60~80cm・深さ55cm以上の曲物を埋め込んだ便槽（東より便槽A・便槽B・便槽C）が配置される。

各便槽からは北側のSG1206沿地跡に向かって幅60~80cm、長さ約6mの暗渠が伸びており、底面



第50図 SB1351便所遺構建物跡・SA1352木材列堀跡

には一本の丸太材を半割し、内面をくり抜き、合わせた直径30~40cmの木桶が埋設されていた（東より暗渠A・暗渠B・暗渠C）。木桶の傾斜角度は約6度の勾配となっている。沈殿槽は東西に2基並んで沼沢の水際部分に掘り込んだもので、東側と中央の二本の木桶が南北約2.2m、東西約4.3m、深さ約30cmの東側の沈殿槽Aに、西側の木桶のみが南北約2.4m、東西約2.4m、深さ約60cmの一段深い沈殿槽に汚物を流し込み、沈殿した上水を沼地に流す構造となっている。

SA1352材木塚跡は目隠し塚であり、建物廐南柱筋から1.8m、西柱筋から3mに幅約30cmの溝を開け、直径15cm前後の丸太材を埋設している材木列塚である。塚は建物跡の方位に合わせて設置され、鶴ノ木地区中央建物群から便所建物を隠すように、L字状に南と西を遮蔽している。

便所の水洗の給水方法、建物の床の構造については不明であるが、便所に桶を使い給水する施設は周辺を含め検出されておらず、土器の水甕や曲物を各室に設置して水を貯留し、便槽上から流す給水方法などが考えられる。

## 2) 遺構内出土遺物

暗渠B埋土から須恵器蓋が1点、暗渠C埋土から須恵器蓋が1点した。沈殿槽内から、須恵器坏が1点、木製品として曲げ物底板1点と用便後の始末に使用した籌木（クソベラ）が150点出土した。その他沈殿槽内堆積土からは未消化の種実や糞虫の遺体、ハエの蛹の抜け殻が出土した。また、SA1352材木塚跡布堀り溝覆土からは、須恵器坏4点、台付坏1点、蓋1点が出土している。

籌木は、浅い沈殿槽Aから58点、深い沈殿槽Bから92点が出土している。うち完形品は56点、欠損品が94点出土しており、使用時形態が把握される完形品のみを図示した。形態としては断面が三角形・算盤玉形、あるいは板状、棒状のものがあり、完形品で長さ165~297mm、幅は8~29mm、厚さ1.5~10mmの物が出土しており、長さ24cm前後のものが最も多い。断面形態をもとにすると、A類・断面三角形、B類・断面菱形（算盤玉形）、C類・厚さ3mm以下の薄板状、D類・厚さ5mm以下の板状、E類・厚さ5mm以上の角棒状に分類され、D類が60点と最も多い。B類やC類には表面を丁寧に面取りし削り仕上げしているものが多い。

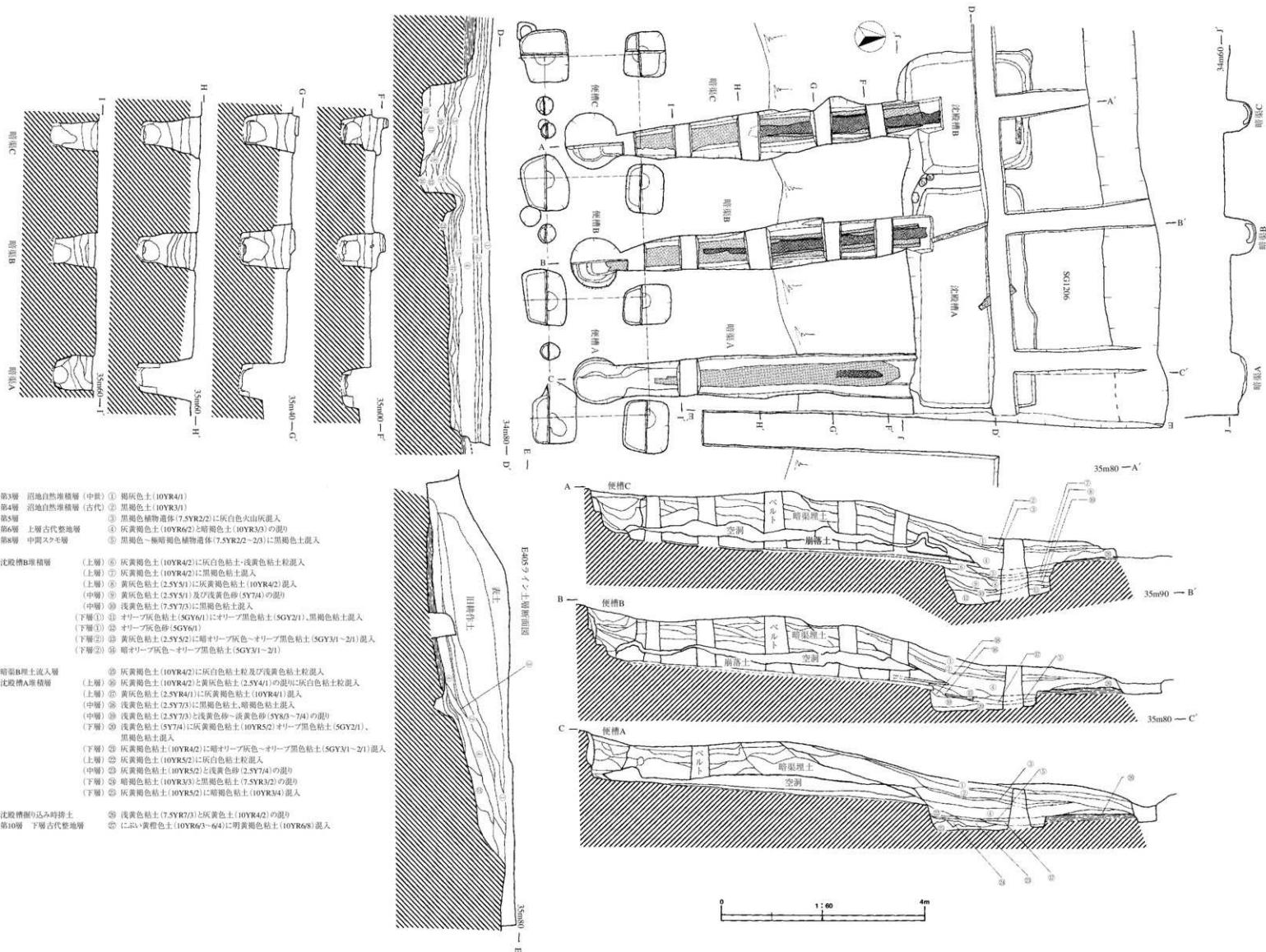
便所遺構の年代については、沈殿槽内出土の手持ちヘラケズリ調整を施す須恵器坏の年代から8世紀第3四半期以降に機能していたことが把握される。また、沈殿槽が地区中央第8層褐色土層により埋め立てられていることや、SA1352材木塚廃絶時の布堀り覆土出土土器より、8世紀末から9世紀初めには機能を停止し、廃絶したと考えられる。

## 3) 自然科学分析

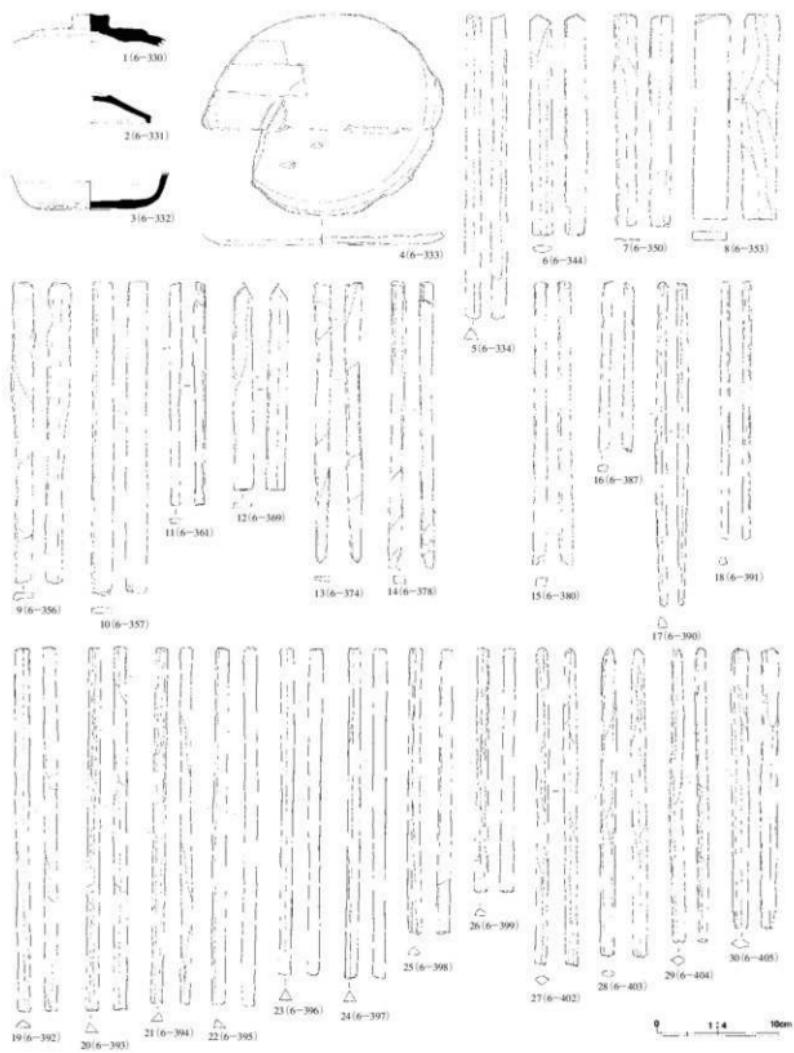
便所遺構については、様々な自然科学分析が実施され、平成6年度と平成7年度秋田城跡調査概報に報告されている。

まず、暗渠に埋設されている木桶については、暗渠Bの木桶について、独立行政法人奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターの光谷拓実氏による年輪年代測定法による分析が行われ、伐採年代が756年以降であることが判明し、便所遺構は秋田「出羽柵」の創建期まで遡る遺構でないことが判明している。また、材質はヒノキアスナロと樹種同定されている（第V章の2木桶年輪年代測定参照）。また、天理大学附属参考館（現奈良教育大）の金原正明氏により、暗渠Aの木桶はスギと樹種同定されている。

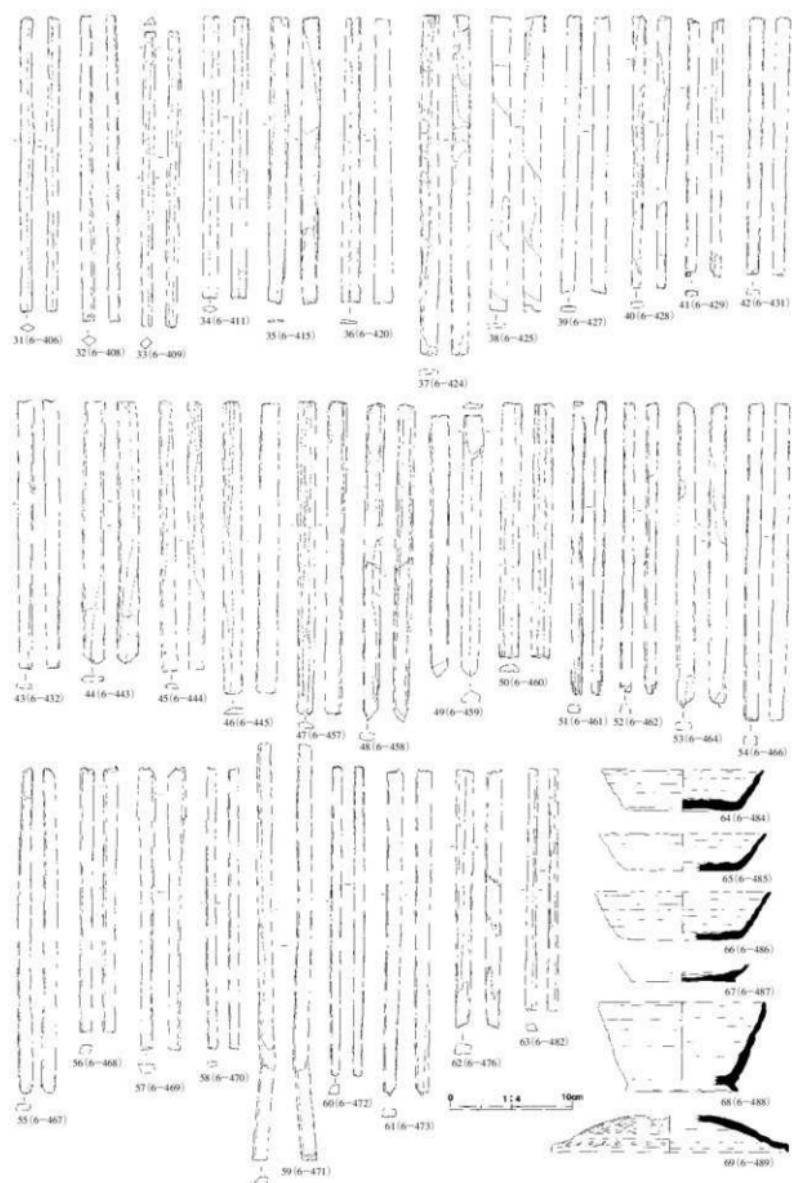
便槽埋土および沈殿槽内堆積土については、帯広畜産大学（現酪農学園大学大学院）の中野益男氏による残存脂肪酸分析を行った結果、糞便に由来する脂肪酸と哺乳動物特有のコプロスタノールとい



第51図 SB1351便所遺構 便槽跡・暗渠跡・沈殿槽跡



第52図 SB1351便所遺構出土遺物



第53図 SB1351便所構・SA1352材木塀跡出土遺物

SB1351便所遺構出土籌木一覧表

面番号	遺物番号	形 状	出土遺構	層 位	長さ (m/m)	最大幅 (m/m)	厚さ (m/m)	形 態	備 考
52-5	6-334	完 形	沈殿槽A	中 層	248	11	10	A1	上・下端斜めの削り
52-6	6-344	完 形	沈殿槽A	中～下層	180	18	6	B2	上端山形に削り、下端を切り折り
52-7	6-350	完 形	沈殿槽A	中～下層	173	19	1.5	C	上・下端切り折り
52-8	6-353	完 形	沈殿槽A	中～下層	167	29	6	D1	上端削り、下端切り折り
52-9	6-356	完 形	沈殿槽A	中～下層	(245)	17	5	D2	上・下端切り折り
52-10	6-357	ほぼ完形	沈殿槽A	中～下層	(256)	17	5	D1	上端切り折り
52-11	6-361	完 形	沈殿槽A	中～下層	182	9	4	D1	上・下端切り折り
52-12	6-369	完 形	沈殿槽A	中～下層	168	15	5	D2	上端山形に削り、下端切り折り
52-13	6-374	完 形	沈殿槽A	中～下層	229	13	5(2)	D3	下端山形に削り
52-14	6-378	完 形	沈殿槽A	中～下層	235	10	7	E4	上端削り、下端薄く削り
52-15	6-380	下欠損	沈殿槽A	中～下層	(231)	10	7	E3	上端切り折り
52-16	6-387	上・下欠損	沈殿槽A	中 层	(137)	8	6.5	E2	上端炭化
52-17	6-390	ほぼ完形	沈殿槽A	中 层	(264)	8	8	E4	
52-18	6-391	ほぼ完形	沈殿槽A	中 层	(211)	7	6	E1	
52-19	6-392	完 形	沈殿槽B	下層②	296	12	6	A2	上・下端、全面削り
52-20	6-393	完 形	沈殿槽B	下層②	297	10	8	A1	上端切り折り、下端全面削り
52-21	6-394	完 形	沈殿槽B	下層②	292	10	7	A2	上・下端削り
52-22	6-395	完 形	沈殿槽B	下層②	294	11	7	A2	上・下端切り折り
52-23	6-396	完 形	沈殿槽B	下層②	266	11	10	A1	上・下端全面削り
52-24	6-397	完 形	沈殿槽B	下層②	268	10	9	A1	上・下端全面削り
52-25	6-398	完 形	沈殿槽B	下層②	233	11	6	A2	上端削り、下端切り折り
52-26	6-399	完 形	沈殿槽B	下層②	200	11	5.5	E5	上端削り、下端切り折り
52-27	6-402	完 形	沈殿槽B	下層②	260	10	8	B1	上端丸く削り、下端削り
52-28	6-403	完 形	沈殿槽B	下層②	252	12	5	B2	上端丸く削り、下端削り
52-29	6-404	完 形	沈殿槽B	下層②	240	11	7	B2	上端丸く削り、下端削り
52-30	6-405	完 形	沈殿槽B	下層②	229	13	7	B2	上端山形に削り、下端切り折り
52-31	6-406	完 形	沈殿槽B	下層②	240	10	7	B1	上端山形に削り、下端切り折り
52-32	6-408	完 形	沈殿槽B	下層②	249	10	8	B1	上端削り、下端切り折り
52-33	6-409	完 形	沈殿槽B	中 层	241	9	9	A1・B1	上・下端切り折り、上端断面三角
52-34	6-411	完 形	沈殿槽B	中 层	230	12	5	B2	上端削り、下端切り折り
52-35	6-415	完 形	沈殿槽B	下層②	234	15	1.5	C	上端切り折り、下端薄く削り
52-36	6-420	完 形	沈殿槽B	下層②	233	13	2.5	C	上・下端切り折り
52-37	6-424	完 形	沈殿槽B	下層②	278	15	5(3)	D3	上・下端削り
52-38	6-425	完 形	沈殿槽B	中 层	240	15	4	D1	上・下端切り折り、両面に墨痕
52-39	6-427	完 形	沈殿槽B	下層②	226	11	4	D1	上・下端切り折り
52-40	6-428	完 形	沈殿槽B	下層②	223	10	5	D1	上・下端切り折り、上端斜めの削り
52-41	6-429	完 形	沈殿槽B	下層②	212	9	4	D1	上・下端切り折り
52-42	6-431	完 形	沈殿槽B	下層②	211	12	4	D2	上・下端切り折り
52-43	6-432	完 形	沈殿槽B	下層②	218	13	4	D1	上・下端切り折り
52-44	6-443	完 形	沈殿槽B	下層②	214	17	5	D2	上端切り折り、下端薄く削り
52-45	6-444	完 形	沈殿槽B	下層②	221	13	4	D2	上・下端切り折り
52-46	6-445	完 形	沈殿槽B	下層②	237	15	5	D2	上・下端切り折り
52-47	6-457	完 形	沈殿槽B	下層②	255	15	6	E5	上端切り折り、下端削り
52-48	6-458	完 形	沈殿槽B	下層②	260	15	6	E2	上・下端削り、下端は刃状
52-49	6-459	完 形	沈殿槽B	下層②	212	15	10	E5	上端へク状、下端側面に削り
52-50	6-460	完 形	沈殿槽B	下層②	207	15	7	E5	上・下端切り折り
52-51	6-461	完 形	沈殿槽B	中 层	239	10	7	E4	上・下端切り折り
52-52	6-462	完 形	沈殿槽B	下層②	286	9	8	E1	上・下端切り折り
52-53	6-464	完 形	沈殿槽B	下層②	247	14	6.5	E2	上・下端削り、全体に炭化
52-54	6-466	完 形	沈殿槽B	下層②	259	11	7.5	E2	上・下端切り折り
52-55	6-467	完 形	沈殿槽B	中 层	266	10	5	D2	上・下端削り
52-56	6-468	完 形	沈殿槽B	中 层	216	11	7	E3	上・下端切り折り
52-57	6-469	完 形	沈殿槽B	下層②	231	12	8	E3	上端斜めの削り折り、下端切り折り
52-58	6-470	完 形	沈殿槽B	下層②	229	8	4	D2	上・下端切り折り
52-59	6-471	完 形	沈殿槽B	下層②	(339)	11	6	E4	上端削り、下端切り折り
52-60	6-472	完 形	沈殿槽B	下層②	253	8	7	E4	上・下端切り折り
52-61	6-473	完 形	沈殿槽B	下層②	265	12	7	E4	上・下端切り折り
52-62	6-476	完 形	沈殿槽B	中 层	(211)	14	8	E3	上端切り折り、下端へク状に削り
52-63	6-482	完 形	沈殿槽B	中 层	(197)	9	6	E4	上・下端切り折り

SB1351便所遺構・SA1352材木塀出土土器一覧表

国版番号	遺物番号	種類・器種	出土遺構・層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	底部切り差し	調整等	年代
52-1	6-330	須恵器・蓋	SB1351暗渠B埋土				ヘラ切り	天井部外面ナデ	9C第1
52-2	6-331	須恵器・蓋	SB1351暗渠B埋土				不明		
52-3	6-332	須恵器・坏	SB1351沈殿槽A埋土			8.6	糸切り	底部周縁手持ちケズリ	8C第3
52-4	6-333	木製品・木皿	SB1351沈殿槽A埋土	19.9	1.0~	17.6			
53-64	6-484	須恵器・坏	SA1352布掘り溝埋土	13.4	3.4	8.8	ヘラ切り	底部ナデ	9C第1
53-65	6-485	須恵器・坏	SA1352布掘り溝埋土	13.8	3.1	9	ヘラ切り	底部ナデ	9C第1
53-66	6-486	須恵器・坏	SA1352布掘り溝埋土	14.6	4	9.2	ヘラ切り	底部丁寧なナデ	8C第4
53-67	6-487	須恵器・坏	SA1352布掘り溝埋土			8.6	糸切り	無調整	8C第4
53-68	6-488	須恵器・坏	SA1352布掘り溝埋土	13.8	7.4	8.8	ヘラ切り	台付け後台周縁ナデ	9C第1
53-69	6-489	須恵器・蓋	SA1352布掘り溝埋土	19.5	3.0~		ヘラ切り	天井部外面ケズリ・外側口縁部ヘラによる切り込み文様	9C第1

う物質を検出し便所跡であることが判明した。また、昆虫遺体についても大阪市立自然史博物館（現関西大学）の宮武頼夫氏により同定が行われ、糞便に集まる昆虫が同定された。

金原正明氏らによる沈殿槽内堆積土の微遺体分析の結果、寄生虫卵、花粉などが検出され、便所使用者の食生活や当時の古環境が明らかとなった（第V章の1微遺体分析参照）。種実にはヒメコウゾ、エゴノキ、キイチゴ、アケビ、マタタビ、サルナシ、ニワトコ、ガマズミ、エゴマ、ナス、ウリ、タデ、シソ、イネ（穀）などがあり、稻や瓜などの栽培植物に加え、食用となる樹木の種実を採取していたことが判る（第154図・第155図の出土種実参照）。

花粉分析ではイネ、エゴマ、シソ、ナス、ウリなどの栽培植物を含む草本類や、クリ・ブナの花粉が多く採取されており、秋田城の周辺地域はクリ・コナラ・ブナの落葉広葉樹林が分布し冷涼な気候であり、これに加えて、スギ林も分布していたことから、やや多湿な気候であったと考えられる。沼地の周辺はハンノキ属の湿地林が形成され、沼地にはイネ科・ガマ属・カヤツリグサ科の水湿地植物が繁茂していたと推定され、当時の環境を復元する資料を得た。

寄生虫卵は1立方センチあたり、2,000個を超える数が検出され、回虫・鞭虫・肝吸虫が多く、他に横川吸虫・有鉤条虫があり、わずかに日本海裂頭条虫が含まれている。これら、寄生虫卵から食生活と廐舎の使用者を推定すると、回虫卵からは野菜をよく洗浄せずに熱処理が不十分な状態で食していたこと、肝吸虫・横川吸虫からはコイ・フナ・アユなどの淡水魚をやはり熱処理しないで食したこと、日本海裂頭条虫が極めて少ないとから、縄文時代からサケ・マスを好んで食した東日本の人間がほとんど使用していないこと、豚を常食する食習慣の人間が感染する有鉤条虫卵がまとまって検出されたことから豚食の習慣のある人間が使用していることが推定された。特に豚食の習慣は当時の日本にはない習慣であることから、分析者の金原正明氏はその習慣のある大陸（渤海）からの来訪者が使用した可能性を指摘している。また、この寄生虫卵が秋田城跡と福岡市の古代の迎賓館・鴻臚館跡の便所遺構以外では検出されていないと述べている。

### 3 三本柱遺構（第54図、図版18）

鵜ノ木地区中央建物群の西側において、三本一組の掘立柱からなる特殊な遺構が、2箇所検出されており、それを三本柱遺構と呼ぶ。遺構の構造は、2基の深い柱掘り方列とその中間の柱筋からややずれた位置に配置した浅い柱掘り方からなる。同種の遺構は秋田城跡では鵜ノ木地区以外で検出されておらず、中央建物群とおよび鵜ノ木地区的機能と性格に直接関係する遺構と考えられる。

### 1) SA963掘立柱遺構 (第54図(1)、図版18)

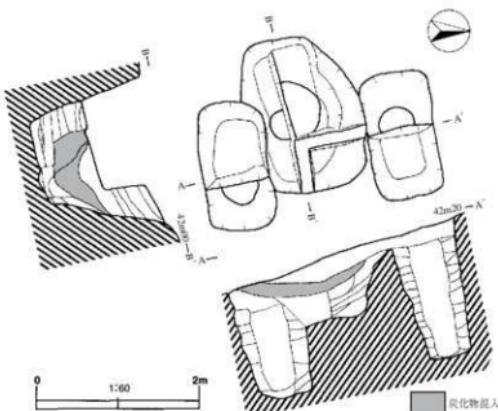
地区中央西側の第51次調査で、地山粘土層面より検出された。三本一組の掘立柱より構成され、二基の柱掘り方が南北に2.1mの距離で並びその柱筋上のはば中間から50cmセンチ西に寄った位置にもう一基の柱掘り方が配置されている。南北2基の柱列の方向は北で約15度西に振れる。直線上の二基の柱掘り方は $0.8 \times 1.5$ mの長方形で、深さ1.6~1.8mと深く、柱痕跡は直径42cmで深さ1.5~1.8mである。中央の柱掘り方は直径1.5mのゆがんだ円形で、深さ0.9m、柱痕跡は直径42cmで深さ0.9mと浅い。柱は全て地山粘土面またはその直上まで埋められ、埋土には明確な版築が行われおり、重量(高さ)のある柱を建てていたと考えられる。また、柱抜き取りを受けており、抜き取り穴覆土には多量の炭化物の混入が認められた。柱掘り方埋土からは遺物の出土はなく、柱抜き取り穴から瓦小片が出土している。

### 2) SA796柱列と SK817土坑 (第54図(2)、図版18)

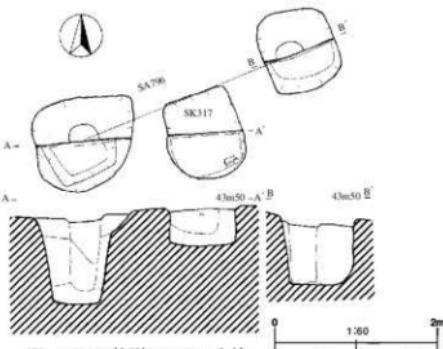
地区中央西寄側の第42次調査で、地山粘土層面より検出された。柱列と土坑の別遺構として報告されているが、SA963と同様に三本柱遺構を構成すると判断される。

SA796は、二基の柱掘り方が東西に2.7mの距離で並びその柱筋上のはば中間から50cmセンチ南に寄った位置にもう一基の柱掘り方となるSK817土坑が配置されている。東西2基の柱列の方向は東で約23度北に振れる。直線上の二基の柱掘り方は一辺 $0.8 \times 1.0$ mの長方形で、深さ0.8~1.0m、柱痕跡は直径35cmで深さ0.8~0.9mである。中央の柱掘り方は一辺 $0.8 \times 1.1$ mの長方形で、深さ0.45m、抜き取りを受けており、柱痕跡は不明だが深さ0.3mと浅い。遺構は全体に削平を受けており、浅くなっている。柱掘り方埋土からは瓦小片が出土している。

三本柱遺構については、県内では北秋田市胡桃館埋没遺跡に



(1) SA963掘立柱遺構



(2) SA796柱列・SK817土坑

第54図 三本柱遺構

類例がある。三本一組の柱遺構が約12m離れて2組現存しており、構造は中央の柱が両端より高く両端頂部抜き材を受ける方孔があり、中央柱を支える控え柱として機能していた。性格については不明とされた（註1）。なお、胡桃館埋没遺跡自体の性格については近年寺院としての性格が指摘されている（註2）。県外では平城宮第2次大極殿の前庭で宮殿を莊厳する宝幢や幡旗のうち、幢竿とその支柱となる3本一組の柱遺構が検出されている（註3）。それらは秋田城跡検出遺構と類似している。また、堂舎の莊嚴に幢や幡を用いることは、文献史料や検出遺構から寺院にも多く認められる。東京都武藏国分尼寺には二本一对を主とする幢幡遺構が（註4）、福島県夏井廃寺には2本柱からなる幢幡遺構が検出されている（註5）。東日本では官衙からの検出例はなく、寺院からの検出例が多いといえる。

これらのことから三本柱遺構は、機能的には胡桃館埋没遺跡や平城京跡の事例から、二基の深い掘り方の柱が控え柱として真ん中の柱を支える、旗竿等の掲揚塔の遺構と考えられる。また、その性格としては平城宮の類例をふまえれば、幢や幡を掲げる堂舎の莊嚴施設の可能性があり、東國の国寺院の類例をふまえれば、寺院堂舎の莊嚴施設あるいは仏教儀式に伴う施設となる可能性が高い。

（註1）秋田県教育委員会「胡桃館埋没建物遺跡第2次発掘調査概報」1969年

（註2）宇田川浩一「元慶の乱」前後の集落と生業」『第31回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』2005年

（註3）独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所「古代の官衙遺跡 I 遺構編」2003年

（註4）国分寺教育委員会「武藏国分尼寺跡I」平成4年度発掘調査概報 1994年

（註5）いわき市教育委員会 財團法人いわき市教育財団『いわき市埋蔵・文化財調査報告第107冊夏井廃寺』2004年

#### 4 区画施設（材木塀・区画溝）（第55～70図、図版10・19～26・30）

区画施設としては、立体的区画施設である材木塀として材木列塀跡2列、柱列塀跡8列、一本柱列塀跡14列などが検出されているが、築地塀は検出されていない。その他に溝跡のうち施設等の区画を意図したと判断される区画溝2条が検出されている。材木塀については、布掘り溝を伴い溝内に材木が密接または近接して立て並べられるものを「材木列塀」、布掘り溝を伴い溝内に間隔をあけて小柱掘り方が掘られ、立てられた材木と横木（板）などにより塀が構築されるものを「柱列塀」、布掘り溝を伴わず独立した一定間隔の柱掘り方により立てられた柱と横木（板）などにより塀が構築されるものを「一本柱列塀」とした。

検出遺構は、原則として調査次数（調査地）および遺構番号ごとに一覧表に示した。各遺構では、基本的に遺構番号・区画施設の構造・方向・方位・規模・柱掘り方及び柱痕跡・検出位置と層位・重複関係・備考（出土遺物等）の順に一覧表に示した。遺構重複や削平などにより推定数値となっているものは（ ）で示した。また、区画施設の方位については、東西と南北の発掘基準線に対する角度を示した。区画施設の遺構からは、年代比定資料はほとんど出土しておらず、重複関係や方位などをに基づき、年代的位置付けや変遷について考察していく必要がある。

鵜ノ木地区検出の区画施設は、構造的には立体的区画施設である材木塀を主体として検出されている。検出位置については、地区中央部から中央東側にかけてのまとまりと、SG463沼地跡およびSG1206沼地跡北側の地区北部のまとまりに大別される。

そのうち前者は第18次・25次・30次・58次・91次調査検出のもので、配置や方位に規則性が認めら

れ、鵜ノ木地区中央建物群に伴う区画施設として把握される。それらは、方位と位置関係にまとまりを持つグループに分けられ、建物群の建て替えなどに対応していると考えられる。大きくは、A類の南北方向の区画施設で北ではほぼ真北方向を示すもの（SA503）、B類の南北方向の区画施設で北で西に6度～10度振れるものや東西の区画施設で西で南に6度～10度振れるもの（SA502・SA1179・SA1180・SA1182）、C類で南北方向の区画施設で北で西に13度～15度振れるものや東西の区画施設で西で南に13度～15度振れるもの（SA284・SA407・SA414・SA500・SA501・SA1142・SA1972）、D類の南北方向の区画施設で北で西に19度～24度振れるものや東西の区画施設で西で南に19度～24度振れるもの（SA1973・SD162・SD163）に分類される。特にC類の区画施設については、位置と方位から、地区中央建物群のSB487掘立柱建物を中心周囲を方形に区画する施設と考えられる。なお、地区南端部の第12次調査で検出されたSD162やSD163は方位では、C類からD類に近いものであり、その位置関係からSB487を中心とする鵜ノ木地区中央建物群の南辺を区画する施設（区画溝）となる可能性が高い。また、SD162には開口部がありその付近にSD163が直交することから、南辺区画施設の出入り口とその通路側溝となる可能性もある。

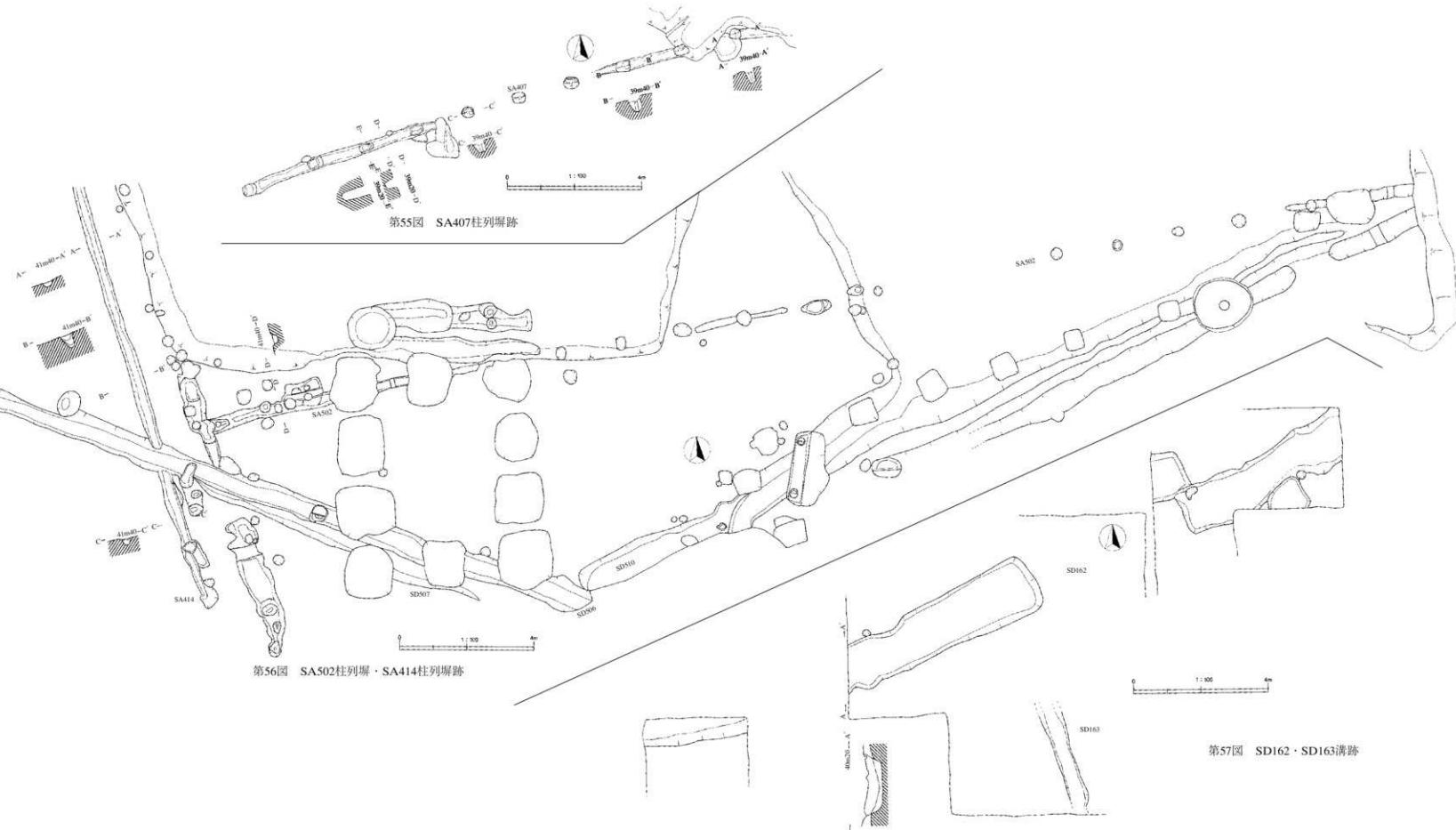
後者の地区北部検出の区画施設のうち、第62次・69次調査検出のものについても、東西方向の一本柱列壙を中心として方位に規則性が認められる。東西方向の区画施設の北側には外郭東門から東側に延びる城外東大路の存在が想定されており、区画施設は大路南側の区画を意図した可能性が高い。特にSA1332・SA1333柱列壙とSA1489木柱列壙は方位と南北の位置関係から東西方向に連続性が認められる。この他に地区東部の第81次調査で検出された区画施設については、SG1206沼地跡東岸の地区東部に区画施設を伴う別の規則性に基づく施設が存在する可能性を示唆している。

鵜ノ木地区検出区画施設一覧表（1）

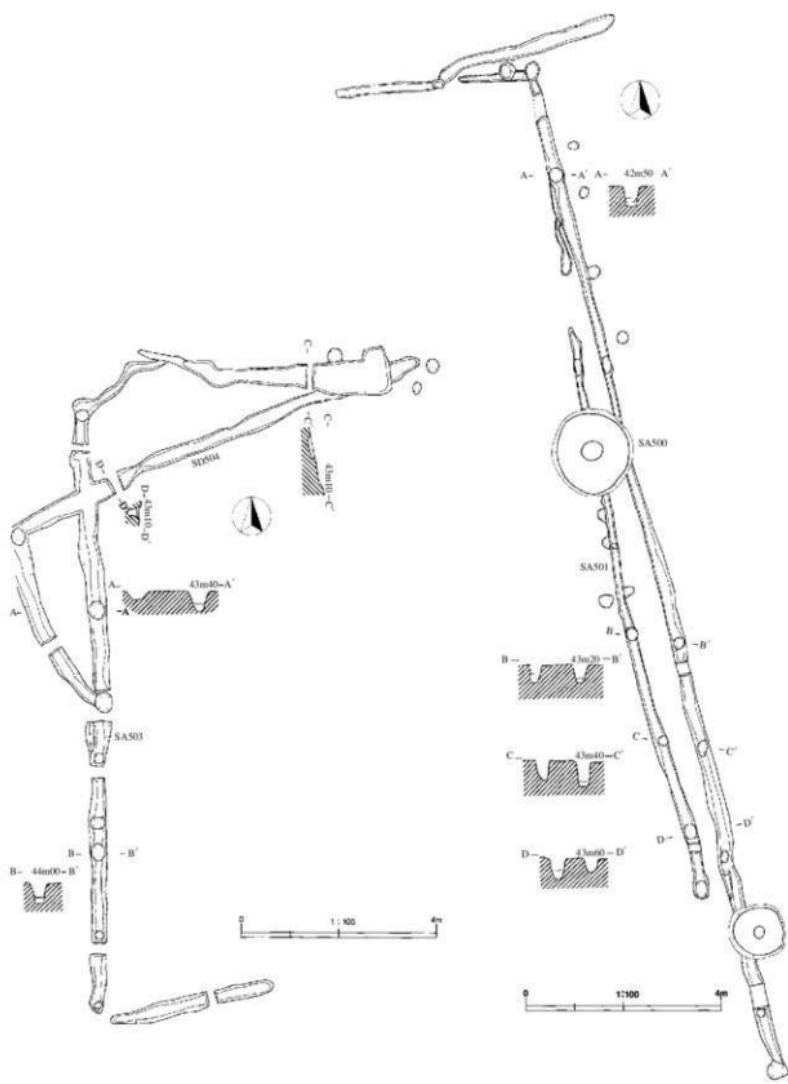
造構番号	団面番号	調査 回数	区画施設構造 方位	概要 布振り溝 柱列	幅×長さ・深さ 柱間	柱振り方 規模・形状	柱痕跡 規模・形状	検出位置・層位 重複関係	備考 (出土遺物等)
SD162	57	12次	溝状造構 (区画溝) 東西方向 W24° S	160cm×18.10m・40cm				地区南端部 地山粘土層	中間2.1m途切れる 箇所あり、開口部 (出入り)が赤褐色 土壊坏・堆出土第70 環-1・2
SD163	57	12次	溝状造構 (区画溝) 南北方向 N19° W	20cm×1.10m・不明				地区南端部 地山粘土層	傾斜部小型造 第70環-3
SD284	22	18次	柱列壙(材木塗) 南北方向 W13° S	布振り溝 25~40cm×5.5m・不明				地区中央 地山粘土層	第25次調査のSA407 に連続
SA407	55	25次	柱列壙(材木塗) 東西方向 W15° S	布振り溝 25~30cm・15.60m・30cm 溝底面小柱割り方 9間以上・柱間1.5~1.75m	直径30~40cm 円形 深さ30~80cm	直径15cmの円 形と3cm×10 cmの板材		地区中央 地山粘土層	第18次調査のSD284 に連続
SA414	56	25次	柱列壙(材木塗) 南北方向 N13° W	布振り溝 30~50cm・8.0m以上・30cm 溝底面小柱割り方 不明	直径30~40cm 円形 深さ10~20cm	不明		地区中央 地山粘土層	
SA500	59	30次	柱列壙(材木塗) 南北方向 N14° W	布振り溝 20~30cm・21m・20~40cm 溝底面小柱割り方 9間以上・柱間1.5~2.4(6.0)m	直径15~20cm 円形 深さ30~40cm	不明		地区中央 地山粘土層	北端部で西に屈曲 25次調査のSA407 に直交
SA501	59	30次	柱列壙(材木塗) 南北方向 N13° W	布振り溝 20~30cm・21m・20~40cm 溝底面小柱割り方 5間以上・柱間1.2~2.4(4.0)m	直径20~30cm 円形か稍円形 深さ35~45cm	不明		地区中央 地山粘土層	第30次調査のSA500 に近接平行
SA502	56	30次	柱列壙(材木塗) 東西方向 W10° S	布振り溝 20~30cm・21m・20~30cm 溝底面小柱割り方 5間以上・柱間1.2~2.4(5.4)m	直径20~30cm 円形 深さ20~40cm	不明		地区中央 地山粘土層 (古)SB019	第30次調査のSA500 に直交 柱間5.4mの箇所開 口部(出入り)か
SA503	58	30次	柱列壙(材木塗) 南北方向 N 0° N	布振り溝 20~30cm・21m・20~30cm 溝底面小柱割り方 5間以上・柱間0.7~2.0m	直径20~30cm 円形 深さ20~40cm	不明		地区中央 地山粘土層 (古)SD504, SI498	北端部で西に屈曲か

鶴ノ木地区検出区画施設一覧表（2）

遺構番号	図面番号	調査次数	区画施設構造方位	規格	横幅×長さ・深さ 柱列・柱間	柱掘り方 規格・形状 柱深	柱抜き 規格・形状 柱深	検出位置・層位 重複関係	備考 (出土遺物等)
SD1188	14	58次	南北方向 N 7° W	区画溝・75cm・南北6.0m→ 18cm		不明確	不明	地区中央東側・地山 粘土層 (新)SI1162・ (古)SI1163	
SA1142	60	58次	柱列掘(材木層) 南北方向 N 14° W	布掘り溝 30cm・25m・14~20cm 溝底面小柱掘り方 不明確		不明確	不明	地区中央東側 地山粘土層 (新)SK1186、SI1153	中間2.1m途切れる 箇所あり。開口部 (出入口)が 鉄錆 出土第70回—4
SA1179	61	58次	一本柱列掘(材木層) 南北方向 N 7° W	柱掘り方9基 南北8間 (北より2.1m+2.1m+2.0m+ 2.1m+2.7m+2.4m+3.0m+3.0m)	一辺0.7~1.0m m隔丸方形 深さ10~40cm	直径25~40cm 南半は柱抜き 取り入る		地区中央東側 地山粘土層 (古)SI1136	
SA1180	14	58次	一本柱列掘(材木層) 南北方向 N 6° W	柱掘り方4基 南北3間 (北より2.1m+2.1m+2.1m)	一辺0.6~0.8m m隔丸方形 深さ40~60cm	直径22~28cm		地区中央東側 地山粘土層 (新)SB1147	
SA1182	61	58次	一本柱列掘(材木層) 南北方向 N 6° W	柱掘り方5基 南北4間 (西より1.6m+1.8m+1.8m+ 1.6m)	直径0.5~0.6m mゆがんだ円形 深さ60cm	直径14~20cm		地区中央東側 地山粘土層	
SA1332	62	62次	一本柱列掘(材木層) 東西方向 W 11° N	柱掘り方6基 東西5間 (西より2.5m+3.0m+3.4m+ 2.5m+3.4m)	直径30~40cm 円形 深さ20~50cm	柱抜き取りに より不明		地区北部 地山飛砂層	
SA1333	63	62次	一本柱列掘(材木層) 東西方向 W 3° N	柱掘り方5基 東西4間 (西より2.4m+2.8m+2.0m+ 3.4m)	直径30~45cm 円形 深さ15~30cm	柱抜き取りに より不明		地区北部 地山飛砂層	
SA1334	64	62次	一本柱列掘(材木層) 東西方向 W 4° N	柱掘り方7基 東西6間 (西より2.4m+2.5m+2.4m+ 1.4m+1.4m+2.0m)	直径35~50cm 円形 深さ20~50cm	柱抜き取りに より不明		地区北部 地山飛砂層 (古)SI1323、SI1324	
SA1335	65	62次	一本柱列掘(材木層) 南北方向 N 27° E	柱掘り方3基 東西2間 (北より2.3m+2.7m)	直径40~60cm 円形 深さ20~30cm	柱抜き取りに より不明		地区北部 地山飛砂層 (新)SI1325 (古)SI1336	
SA1336	65	62次	一本柱列掘(材木層) 東西方向 W 10° N	柱掘り方3基 東西2間 (西より2.0m+1.7m)	直径50~60cm 円形 深さ60cm	柱抜き取りに より不明		地区北部 地山飛砂層 (新)SA1335	
SA1489	66	69次	材木列掘(材木層) 南北方向 E 5° N	布掘り溝 50~65cm・13.3m以上・30~65cm 布掘り溝内に丸太材密着して立 て垂れ設置		直径10~20cm の丸太材・材 抜き取りと切 り取り入る		地区北部 の丸太材・材 第14層 (新)SD1496、 SD 第70回—5・6 1497	純土器出土 第70回—5・6
SA1490	14	69次	一本柱列掘(材木層) 東西方向 W 9° S	柱掘り方3基 東西2間 (西より2.7m+2.4m)	直径35~40cm 円形 深さ15~20cm	直径14cm 柱抜き取り入 る		地区北部 第6層	
SA1491	14	69次	一本柱列掘(材木層) 東西方向 W 22° S	柱掘り方4基 東西3間 (西より2.7m+2.6m+2.7m)	直径35cm前後 円形 深さ20~30cm	直径12cm 柱抜き取り入 る		地区北部 第9層灰褐色土	
SA1492	14	69次	一本柱列掘(材木層) 東西方向 W 2~10° S	柱掘り方4基 東西3間 (西より2.1m+2.5m+1.9m)	直径30~35cm 円形 深さ10~15cm	柱抜き取りに より不明		地区北部 第10層 (新)SE1502	
SA1493	14	69次	一本柱列掘(材木層) 東西方向 W 17° S	柱掘り方4基 東西3間 (西より2.9m+3.0m+3.0m)	直径30~45cm 円形 深さ25~30cm	柱抜き取りに より不明		地区北部 地山飛砂層	
SA1694	14	81次	一本柱列掘(材木層) 南北方向 N 44° W	柱掘り方2基 東西1間以上 (西より1.2m+…)	直径50cm 円形 深さ35cm	直径18~20cm		地区北部 地山飛砂層	
SA1695	67	81次	材木列掘(材木層) 南北方向 W 20° S	布掘り溝 20~60cm・9.0m以上・10~50cm 布掘り溝内に丸太材をやや間隔 (40~80cmをあけ立て垂れ設置)		直径15~20cm の丸太材・材 抜き取り入る		地区東部 地山粘土層 (新)SI1699埋土より 須恵器片・赤褐色土 跡片出土	
SA1972	68	91次	柱列掘(材木層) 南北方向 N 13° W	布掘り溝 25~30cm・東西7.8m以上と南 北1.2m以上・10cm 溝底面小柱掘り方 柱間0.9~ 1.1m	直径15~20cm 円形 深さ10~30cm	直径12cmの丸 太材 柱抜き取り入 る		地区中央東側 第7層 (新)SI1977・SI1978	北端部で西に屈曲第 18次調査の SD264 に連続 須恵器片出土 第70回—7
SA1973	69	91次	柱列掘(材木層) 南北方向 N 24° W	布掘り溝 50~70cm・南北4.7m以上・8 cm 溝底面小柱掘り方 柱間2.4m	直径30cm円形 深さ20cm	直径12cmの丸 太材 柱抜き取り入 る		地区東部 地山粘土層	

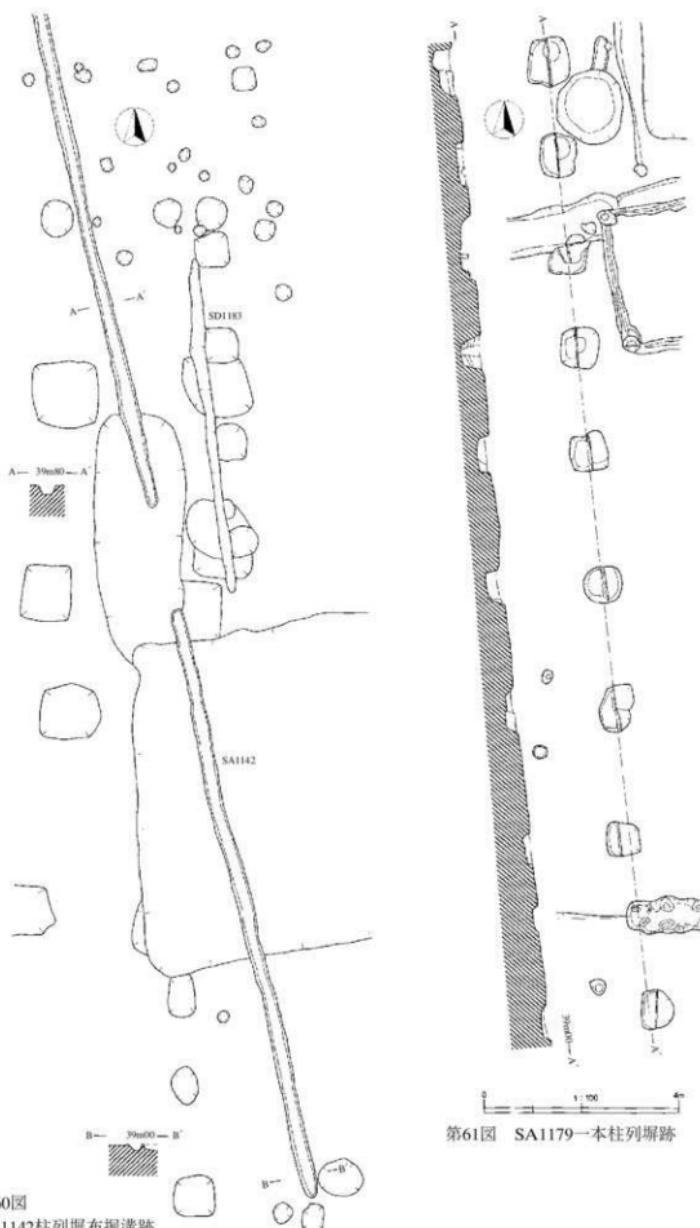


第55~57図 SA407・SA414・SA502柱列塚、SD162・SD163溝跡



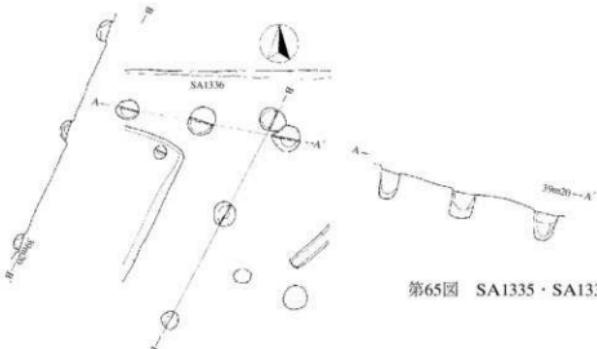
第58図 SA503柱列塗跡

第59図 SA500・SA501柱列塗跡

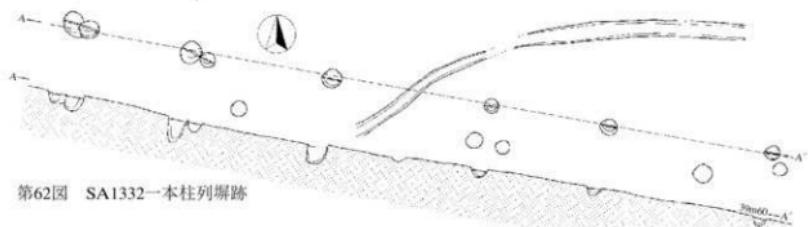


第60図  
SA1142柱列堀布掘溝跡

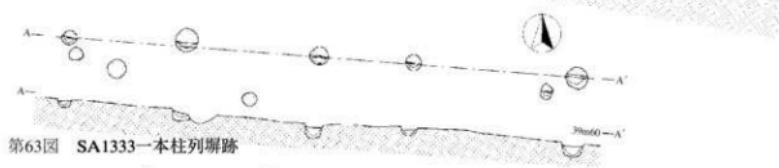
第61図 SA1179一本柱列堀跡



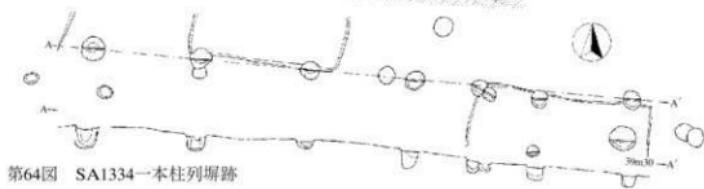
第65図 SA1335・SA1336一本柱列跡



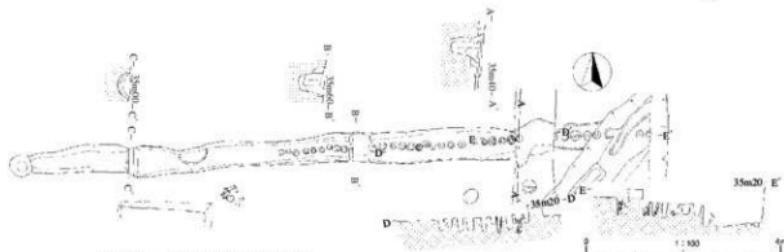
第62図 SA1332一本柱列跡



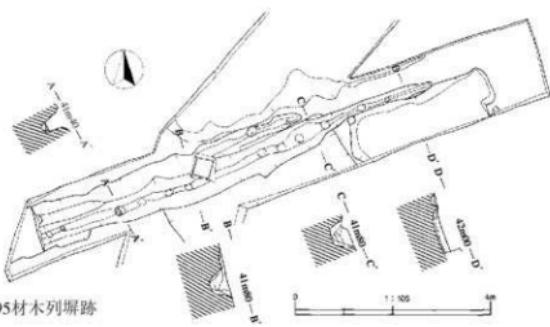
第63図 SA1333一本柱列跡



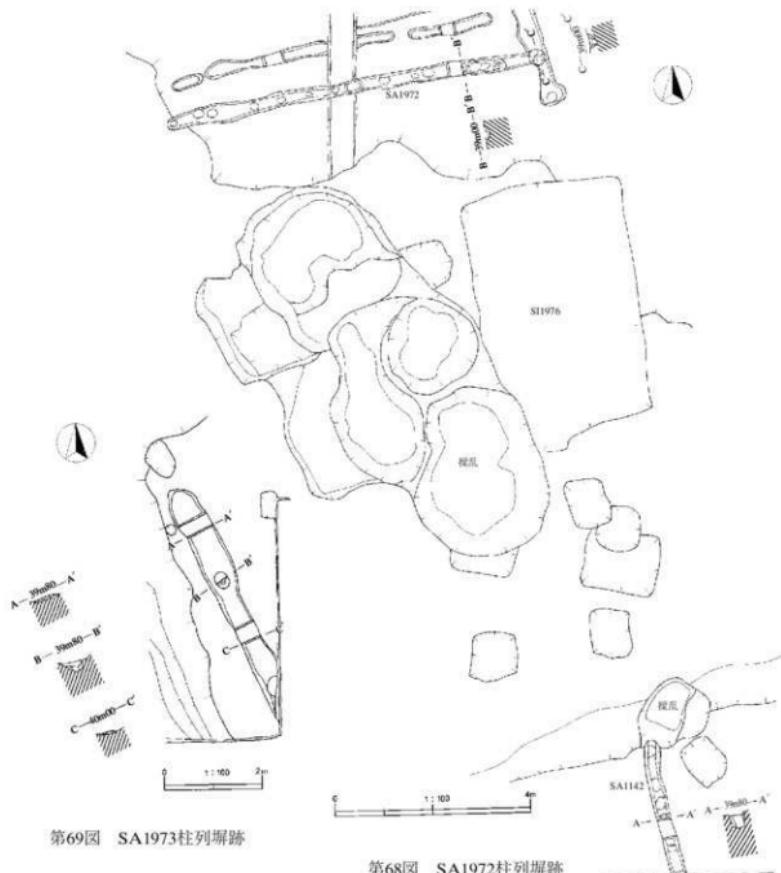
第64図 SA1334一本柱列跡



第66図 SA1489材木列跡

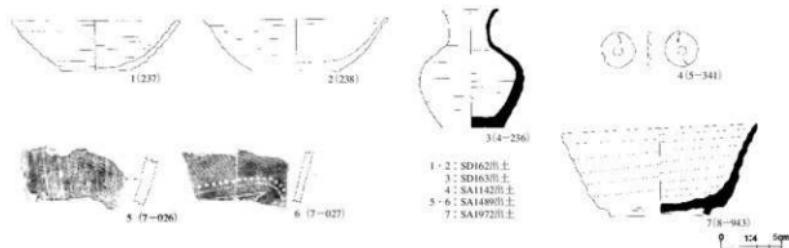


第67図 SA1695材木列壙跡



第69図 SA1973柱列壙跡

第68図 SA1972柱列壙跡



第70図 瀬ノ木地区検出区画施設出土遺物

瀬ノ木地区検出区画施設出土遺物一覧表

回面 番号	遺物番号	種類・器種	出土遺構・層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	底部切り離し	調整等	年代
70-1	237	赤褐色土器・环A	SD162埋土	13.9	4.2	5.8	系切り	無調整	9C 第4
70-2	238	赤褐色土器・环A	SD162埋土	15.3	4.3	7.2	系切り	無調整	9C 第4
70-3	4-236	須恵器・壺	SD163埋土	4.6	9.8	5.1	系切り	無調整	9C 第3
70-4	5-341	鉄製品・鉄鍔か 破片	SA1142材木塚埋土	直徑2.9		厚さ0.2			
70-5	7-026	土器部・壺体部 破片	SA1489材木塚布掘り 埋土					外面叩きの後カキ目調整・ 内面ナデ調整	
70-6	7-027	縞文土器・深杯 体部破片	SA1489材木塚布掘り 埋土					地文L R 単臨斜縞文・沈縞 文・刺突文・滑文	縞文後期初 頭
70-7	8-943	須恵器・台付壺 取り	SA1972材木塚柱抜き	16.2	7.6	8.2	ハラ切り	成形粗雑・軽いナデ調整	9C 第3

## 5 溝跡（第71・72図）

溝跡については、前述の立体的区画施設に伴う布掘り溝跡や区画施設としての機能が明確な溝跡を除き、地区全体で69条が検出されている。それらは、排水を目的とした溝跡、道路側溝となる可能性がある溝跡、区画溝となる可能性がある溝跡、性格不明の溝跡からなっている。

原則として遺構番号順に、方向・方位、規模・機能・性格、検出位置・相達・重複関係、出土遺物、時期の順に一覧表に示した。溝の方位については、東西と南北の発掘基準線に対する角度を示した。なお、出土遺物などから年代の把握が可能なものについては、一覧表に示したが、年代比定資料の出土が少なく、検出層位などから大まかな時期を示したもののが大半を占める。

検出位置や機能・性格については、SG463沼地跡やSG1206沼地跡周辺に排水目的の溝が多く、後述の道路遺構の存在が推定される地区北部に道路側溝の可能性を持つ溝跡が多い。また、地区西部にはSD801、SD921～SD933、SD969など、12世紀末以降の中世前期に位置付けられる区画溝の可能性を持つ溝跡が連続する形で集中して検出されており、周辺を含め何らかの施設の存在が推定される。

鶴ノ木地区検出溝跡一覧表（1）

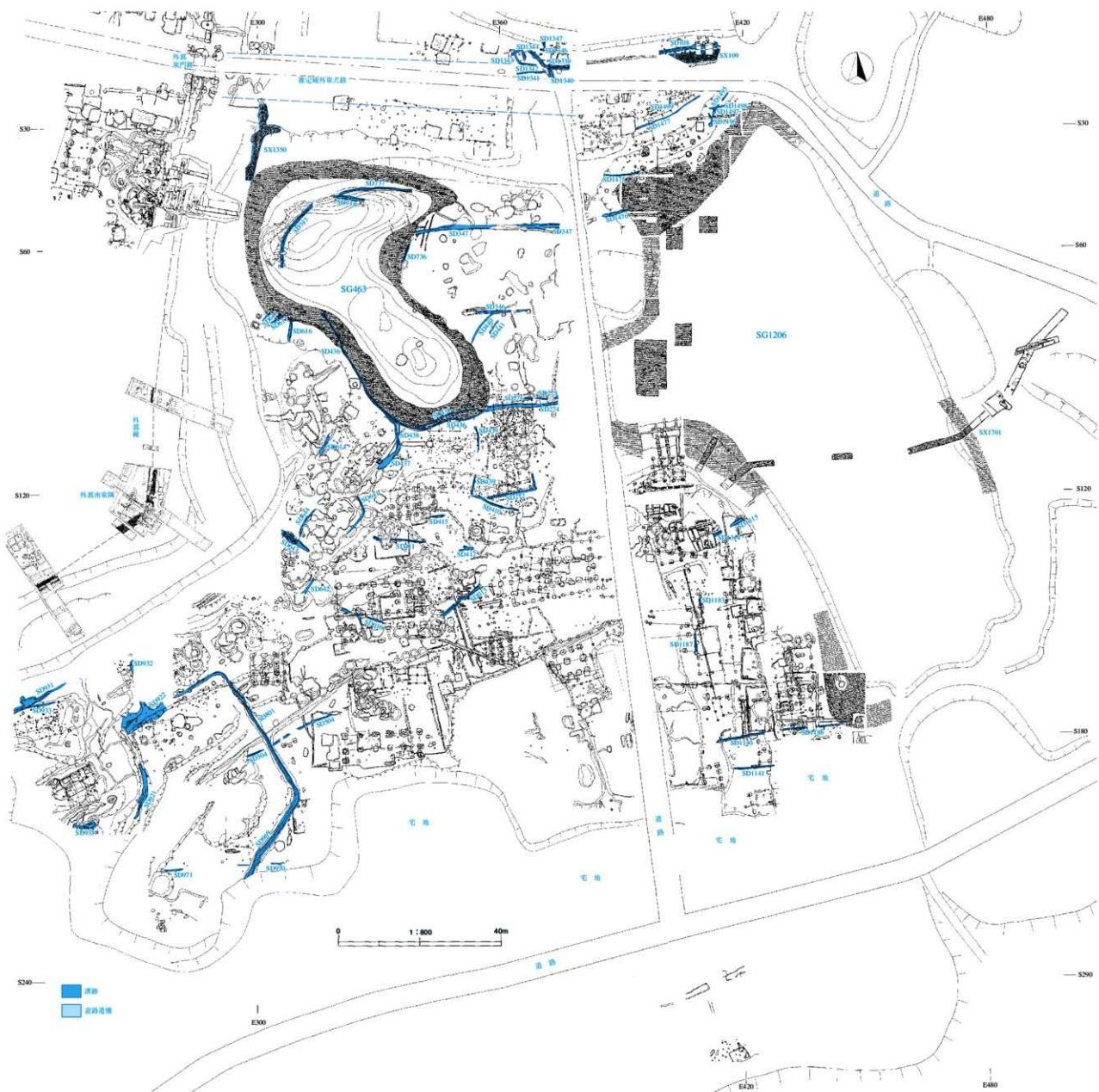
遺構番号	図面番号	調査次数	方 向 方 向	規 模 幅・長さ・深さ	機能等	検出位置・層位 重複関係	出土遺物等	時期
SD108	71	7次	東西方向 W 8° S	64~110cm・東西16.1m・15~50cm	道路舗溝か	地区北部・地山飛砂層 (古)SX109つき圓め遺構		~10世紀前半
SD272	71	18次	南北・東西方向 L字状 W 9° S	40~50cm・南北5.5m・東西13m・10~30cm	不明	地区中央・地山粘土層 (古)SB267		~9世紀
SD274	71	18次	東西方向 W 4° S	70~130cm・東西13m~・不明	排水溝か	地区中央部・第5層 SD436に接続 (古)SA288小柱穴群		12世紀末~13世紀
SD275	71	18次	東西方向 W 3° ~ -13° S	30~40cm・東西13.5m~・20cm	排水溝か	地区中央・第5層 SD436に接続 (古)SD274・SE269		12世紀末~13世紀
SD276	71	18次	東西方向 W 3° ~ -13° S	20cm・東西4.0m~・不明	排水溝か	地区中央・第5層 SD436に接続 (古)SD274・SE269		12世紀末~13世紀
SD346	71	22次	東西方向 W 0° S	30~50cm・東西14.0m~・15~20cm	排水溝か	地区中央・地山粘土層 SD274から北約30mに平行する (古)SK326・SK331		不明
SD347	71	22次	東西方向 W 0° S	80cm・東西19.0m~・30cm	排水溝か	地区中央・地山粘土層	第72回-1 瓦片・赤褐色土器も出土	9世紀前半~
SD015	71	25次	北東~南西方向 N 30° E	70~100cm・東西35.0m~・30~40cm	不明	地区中央・第10層 (新)SB006・SD414		9世紀第2四半期
SD016	71	25次	北西~南東方向 S 16° ~ -78° E	30~70cm・東西12.0m~・30~40cm	不明	地区中央・地山粘土層 (新)SB006・SB395		9世紀~
SD410	71	25次	北西~南東方向 N 20° W	40~60cm・東西8.0m~・20~30cm	不明	地区中央・地山粘土層		不明
SD411	71	25次	北西~南東方向 E 8° S	50cm・東西18.0m~・20~30cm	不明	地区中央・地山粘土層 (新)SI404・SK417		9世紀第2四半期
SD412	71	25次	東西方向 W 12° S	20~40cm・東西3.8m~・不明	不明	地区中央・地山粘土層		不明
SD415	71	25次	東西方向 W 8° S	20~40cm・東西4.5m~・20~30cm	不明	地区中央・地山粘土層 (新)SI400・SI400		9世紀~
SD435	71	26次	東西方向 W 16° S	25~30cm・東西17.2m・10~20cm	排水溝か	地区中央・第4層 (古)SD436		12世紀末~
SD436	71	26次	北西~南東から東西 方向に緩やかに曲がる W 16° S → N 50° W	30~50cm・東西35m~・20~40cm	排水溝か	地区中央・第4層 (新)SD435		12世紀末~
SD437	71	26次	南北~北東から南北 方向に直角に曲がる N 51° E → N 7° W	0.5m~2.0m・東西15m~・10~40cm	排水溝か	地区中央・第4層 (古)SD436	第72回-2	12世紀末~
SD438	71	26次	南北方向 N 23° E ~ N 2° W	30cm・南北6.5m・10~30cm	排水溝か	地区中央・第4層 (古)SD435~SD437		12世紀末~
SD439	71	26次	南北方向 N 9° E	20~30cm・南北17.0m~・20~40cm	排水溝か	地区中央・第7層 (古)SD435~SD437		9世紀第2四半期
SD440	71	26次	南北方向 N 37° E	40cm・南北9.4m~・10~20cm	SG463への排水 溝か SD441と平行	地区中央・地山粘土層		不明
SD441	71	26次	南北方向 N 37° E	40cm・南北3.6m~・10~20cm	SG463への排水 溝か SD440と平行	地区中央・地山粘土層		不明
SD504	71	30次	南北・東西方向 L字状 W 20° S	30cm・南北4.0m・東西9.3m~・10~20cm	不明	地区中央・地山粘土層 (新)SA503		9世紀第2四半期
SD614	71	34次	南北方向 N 26° E	30~40cm・南北8.2m~・10~20cm	SG463への排水 溝か	地区中央・第5層		10世紀中頃~
SD616	71	34次	南北方向 N 4° E	30~40cm・南北6.0m~・10~20cm	SG463への排水 溝か	地区北部・第7層		10世紀~
SD617	71	34次	南北方向 N 54° E	30~40cm・南北4.0m~・10~20cm	SG463への排水 溝か	地区北部・第7層		10世紀~
SD618	71	34次	南北方向 N 42° E	30~40cm・南北3.2m~・10~20cm	SG463への排水 溝か	地区北部・第7層		10世紀~

鶴ノ木地区検出溝跡一覧表（2）

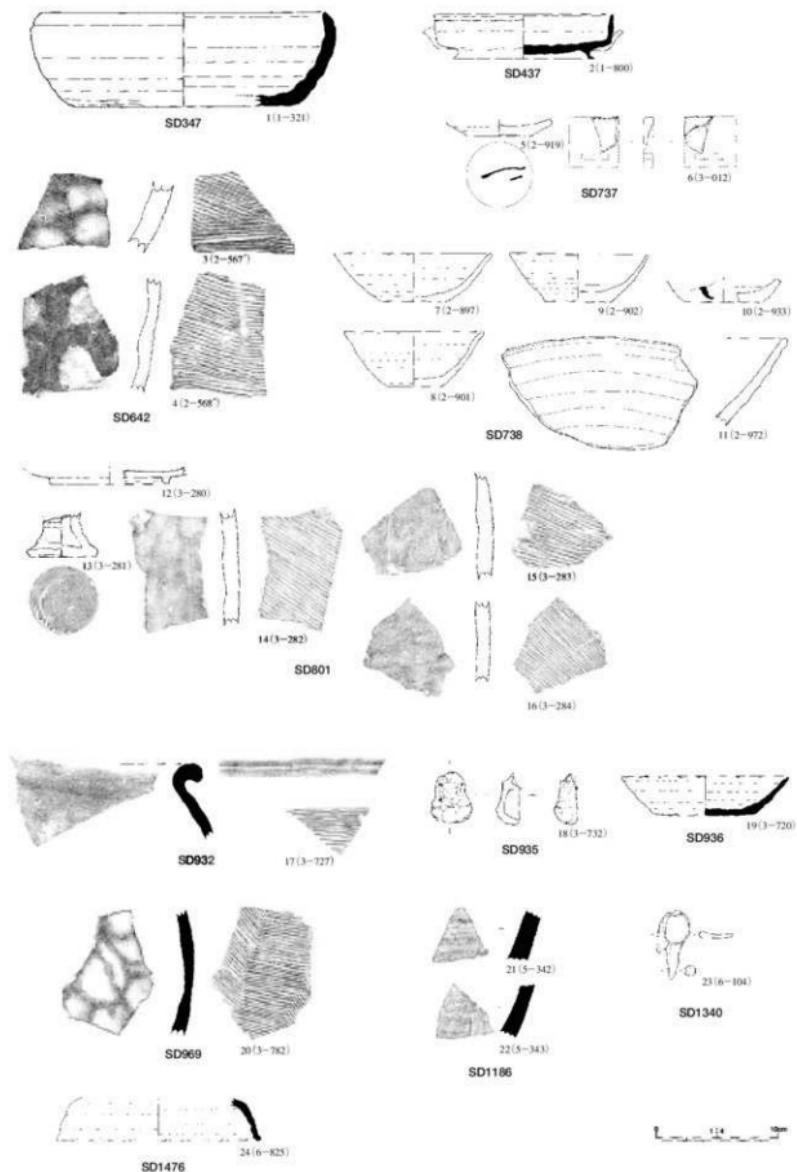
遺構番号	図面番号	調査次数	方 向 方 位	規 模 幅・長さ・深さ	機能等	検出位置・層位 重複関係	出土遺物等	時期
SD641	71	35次	南西—北東から南北—北西方向 L字状 N40° E → N24° W	40~60cm・南西—北東7.0m、南東—北西5.5m~、 20~30cm	不明	地区西部・第4層 SD436に連続 (新)SK651		12世紀末~
SD642	71	35次	南西—北東から南北—北西方向 L字状 N37° E → N35° W	40~60cm・南西—北東7.5m~、南東—北西3.0m~、 20~30cm	不明	地区西部・第4層 (新)SK651	第72回—3~4	12世紀末~
SD643	71	35次	東西方向 W54° N	0.8m~1.2m・東西17.2m・40cm 溝底面に柱振り方	不明	地区西部・第4層 (新)SK651		12世紀末~
SD644	71	35次	南北方向 N34° E	40~60cm・南北8.2m~、 20~30cm	不明	地区西部・第4層 (新)SK651		12世紀末~
SD736	71	39次	南北方向 N17° E	40cm・南北5.0m・15cm	不明	地区北西部・地山粘土層		不明
SD737	71	39次	南北から東西方向へ 緩やかに曲がる N27° E → E 0° N	40~60cm・全長40m~、 30cm	排水溝か	地区北西部・第7層 SD436に連続	第72回—5、6	10世紀~
SD738	71	39次	東西方向 W 8° N	0.8m~1.2m・東西17.2m・40cm 溝底面に柱振り方	土留め杭列 帯振り溝か	地区北西部・第6層	第72回—7~11	10世紀中頃~
SD801	71	42次	南東—北西から南北方向に直角に曲がる W22° S → N29° W	1.5~2.0m・東西32.5m、 南北12.5m~、40~50cm	区画溝か	地区西部・地山粘土層	第72回—12~16	14世紀
SD921	71	46次	北東—南東方向 W30° S	2.0m・東西14m~、40~50cm	区画溝か	地区西部・地山粘土層 SD922に連続		14世紀
SD922	71	46次	北東—南西方向 W22° S	2.0m・南北14m~、20~30cm	区画溝か	地区西部・地山粘土層 SD801に連続		14世紀
SD931	71	48次	東西方向 W28° S	0.8m~1.2m・東西14.5m・40cm	区画溝か	地区西部・第4層		12世紀末~
SD932	71	48次	東西方向 N22° W	2.0m・東西11.0m・30cm	区画溝か	地区西部・第4層 SD922に直接接続	第72回—17	12世紀末~
SD933	71	48次	東西方向 W12° S	40~60cm・東西6.5m・ 20~30cm	区画溝か	地区西部・第4層 SB924と同方向		12世紀末~
SD935	71	48次	東西方向 W10° S	0.7~1.5m・東西6.5m・ 40~50cm	排水溝	地区西部・第4層 SK946の排水溝	第72回—18の懇 仏出土	12世紀末~
SD969	71	51次	南西—北東方向 N35° E	1.5~2.0m・東西24.0m、 1.1m	区画溝か	地区中央・第4層 SD801に連続	第72回—19~20	14世紀
SD970	71	51次	東西方向 W 5° S	10~30cm・東西11.0m~、 10~20cm	区画溝か	地区中央・地山粘土層 SD971に連続		不明
SD971	71	51次	東西方向 W 5° S	10~30cm・東西5.4m~、 10~20cm	区画溝か	地区中央・地山粘土層 SD970に連続		不明
SD1140	71	57次	東西方向 W11° S	30~40cm・東西13.0m~、 20cm	不明	地区中央東側・地山粘土層 (新)SI138A		9世紀第1四半期~
SD1141	71	57次	東西方向 W 5° S	25~30cm・東西13.0m~、 28~48cm	不明	地区中央東側・地山粘土層		不明
SD1183	71	58次	南北方向 N 6° W	20~30cm・南北5.6m~、 15cm	区画溝か	地区中央東側・地山粘土層 (新)SB1147, SA1180		9世紀第2四半期
SD1186	71	58次	東西方向 W 7° S	30~50cm・東西14.0m~、 40cm	区画溝か	地区中央東側・第4層 (新)SE1176・(古)SK1199・(不明)SB1163	第72回—21~22	12世紀末~
SD1187	71	58次	南北方向 N 7° W	45cm・南北6.3m~、18cm	不明	地区中央東側・地山粘土層 (新)SI1153, SB1148		9世紀第2四半期
SD1314	71	61次	東西方向 W26° S	25~50cm・東西5.7m~、 18cm	排水溝か	地区中央東側・地山粘土層 SD1315に連続 (新)SI1309, SI1310, SI1311, SI1312		9世紀第2四半期
SD1315	71	61次	東西方向 W26° S	35~50cm・東西3.8m~、 10~35cm	排水溝か	地区中央東側・地山粘土層 SD1314に連続 (新)SI1309, SI1310, SI1311, SI1312		9世紀第2四半期

鶴ノ木地区検出溝跡一覧表（3）

遺構番号	図面番号	調査次数	方 向 方 位	規 模 幅・長さ・深さ	機能等	検出位置・層位 重複関係	出土遺物等	時期
SD1339	71	62次	東西・南北方向 L字状 W 1° S → N 32° E	80~100cm・東西6.0m・ 南北5.0m~・45~70cm	道路側溝か	地区・北部・地山飛砂層 SD108に接続か (新)SI1328、SD1340		9世紀初~10世紀前半
SD1340	71	62次	南北方向 N 32° W	1.2~1.6m・南北3.0m~・ 30cm	不明	地区・北部・地山飛砂層 (新)SD1341・(古)SD1339		~10世紀前半
SD1341	71	62次	東西方向 W 9° S	35~40cm・南北7.2m~・ 24cm	道路側溝か	地区・北部・地山飛砂層 (古)SD1340		~10世紀前半
SD1342	71	62次	東西・南北方向 L字状 W 7° N → N 24° W	35~50cm・東西4.5m・ 南北4.0m~・27cm	道路側溝か	地区・北部・地山飛砂層 (新)SD1343		不明
SD1343	71	62次	東西方向 W 28° S	50cm・東西2.8m~・30cm	不明	地区・北部・地山飛砂層 (新)SD1344・(古)SD1342		不明
SD1344	71	62次	南北方向 N 21° W	40~60cm・南北3.0m~・ 27cm	不明	地区・北部・地山飛砂層 (古)SD1343		不明
SD1346	71	62次	東西方向 W 16° N	40cm・東西1.1m~・28cm	不明	地区・北部・地山飛砂層 (古)SI1331		~9世紀第1四半期
SD1347	71	62次	南北方向 N 7° W	50cm・南北1.5m~・24cm	不明	地区・北部・地山飛砂層 (新)SI1331		9世紀第1四半期
SD1475	71	67次	東西方向 E 4° S → E 11° N	20~35cm・東西9.0m~・ 10cm	排水溝か	鶴ノ木地区北部 第6層		10世紀中頃~
SD1476	71	67次	東西方向 E 16° N	45~80cm・東西11.0m~・ 10~20cm	排水溝か	地区・北部・第5層	第72図~24	12世紀末~
SD1477	71	67次	東西方向 E 16° N → E 31° N	25~28cm・東西18.5m~・ 10cm	区画溝か	地区・北部・地山飛砂層		不明
SD1495	71	69次	南北方向 N 15° E → N 37° E	20~25cm・南北8.4m~・ 6~10cm	排水溝か	地区・北部・第10層上層		9世紀第4四半期
SD1496	71	69次	南北方向 N 28° W	20cm・南北2.5m~・10cm	排水溝か	地区・北部・第10層 (新)SA1489		9世紀第2~第3四半期~
SD1497	71	69次	南北方向 N 50° W	20cm・東西0.8m~・15cm	排水溝か	地区・北部・第10層 (新)SA1489		9世紀第2~第3四半期
SD1498	71	69次	東西方向 E 10° N	15~25cm・東西4.3m~・ 10cm	区画溝か	地区・北部・第11層		8世紀末~9世紀第1四半期
SD1499	71	69次	南北方向 N 10° E	20~30cm・東西1.6m~・ 20cm	不明	地区・北部・地山飛砂層		不明



第71図 鶴ノ木地区検出溝跡・道路遺構位置図



第72図 鶴ノ木地区検出溝跡出土遺物（集成図）

鶴ノ木地区検出溝跡出土遺物一覧表

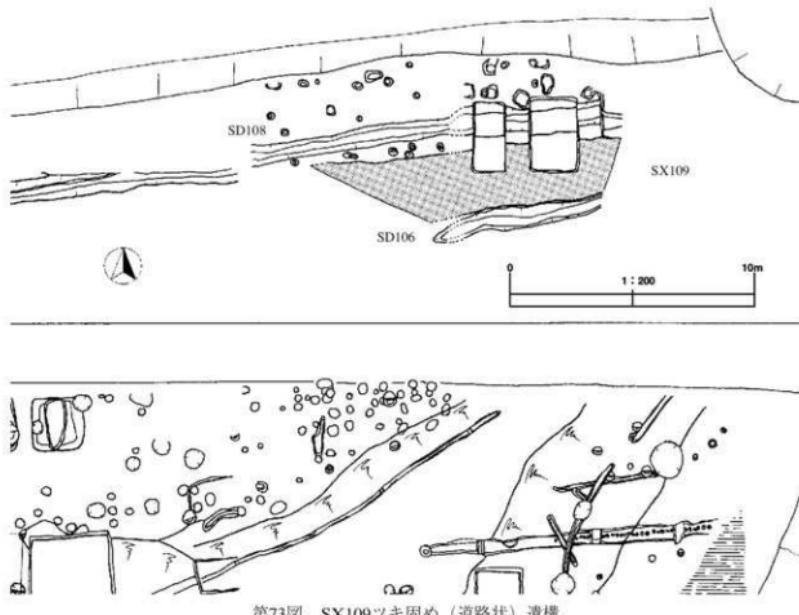
図面番号	遺物番号	種類・器種	出土遺構・層位	口径等 (cm)	高さ等 (cm)	底径等 (cm)	底部切り差し	調整等	時期
72-1	I-321	須恵器・鉢	SD347埋土赤褐色土	23.2	不明	不明	静止系切り	体下端手持ちケズリ	9C前半
72-2	I-800	須恵器・台付壺	SD437埋土	14.6	3.7	11.5	不明	底部全周回転ヘラケズリ	8C第3四
72-3	2-567'	珠洲系中世陶器・壺破片	SD642埋土	不明	不明	不明	不明	外表面平行柔線タキ 内面無文当て具痕	12C後半~
72-4	2-568'	珠洲系中世陶器・壺破片	SD642埋土	不明	不明	不明	不明	外表面平行柔線タキ 内面無文当て具痕	12C後半~
72-5	2-919	赤褐色土器・壺A	SD737埋土	不明	不明	5.4	系切り	無調整、墨書「□」	9C後半~
72-6	3-012	阿帝金具(遼方)石製	SD737埋土	不明	不明	厚さ0.8	不明	石英斑岩、黒雲母 石英含む	不明
72-7	2-897	赤褐色土器・壺A	SD738大溝埋土	13	4	5.6	系切り	無調整	9C第4四
72-8	2-901	赤褐色土器・壺A	SD738大溝埋土	11.6	4.5	4.4	系切り	無調整、内外面塗状 炭化物付着	9C第4四
72-9	2-902	赤褐色土器・壺A	SD738大溝埋土	11.5	3.9	5.5	系切り	無調整	9C第4四
72-10	2-933	赤褐色土器・壺A	SD738大溝埋土	不明	不明	6.4	系切り	無調整、体部墨書「□」	9C第4四
72-11	2-972	赤褐色土器・鉢 破片	SD738大溝埋土	不明	不明	不明	不明	割れ口にアスファルト状 付着物あり	9C後半
72-12	3-280	縦釉陶器・台付 皿	SD801埋土	不明	不明	9.2	ヘラ切り	付高台後回転ヘラケズリ K15号窓式	9C前半
72-13	3-281	古瀬戸・花器脚 部	SD801埋土	不明	不明	5.5	系切り	底部無調整、外面部灰積 かかっている。古瀬戸期か	14Cか
72-14	3-282	珠洲系中世陶器・壺破片	SD801埋土	不明	不明	不明	不明	外表面平行柔線タキ 内面無文当て具痕	12C後半~
72-15	3-283	珠洲系中世陶器・壺破片	SD801埋土	不明	不明	不明	不明	外表面平行柔線タキ 内面無文当て具痕	12C後半~
72-16	3-284	珠洲系中世陶器・壺破片	SD801埋土	不明	不明	不明	不明	外表面平行柔線タキ 内面無文当て具痕	12C後半~
72-17	3-727	珠洲系中世陶器・壺	SD932埋土	不明	不明	不明	不明	外表面平行柔線タキ 内面無文当て具痕	12C後半~
72-18	3-732	懸柱(銅製)	SD935埋土	幅2.5	不明	厚さ0.4	不明		13C~
72-19	3-720	須恵器壺	SD936埋土	13.7	3.3	8.2	ヘラ切り	無いナデ	9C第1四
72-20	3-782	珠洲系中世陶器・壺	SD969埋土	不明	不明	不明	不明	外表面平行柔線タキ(鍛杉状) 内面無文当て具痕	12C後半~
72-21	5-342	珠洲系中世陶器 破片・擂鉢	SD1186埋土	不明	不明	不明	不明	外表面平行柔線タキ 内面無文当て具痕	12C後半~
72-22	5-343	珠洲系中世陶器 破片・擂鉢	SD1186埋土	不明	不明	不明	不明	外表面平行柔線タキ 内面無文当て具痕	12C後半~
72-23	6-104	鉄鉢	SD1340埋土	幅2.6	不明	厚さ0.3	不明	刃部の一部と茎部欠損	不明
72-24	6-825	須恵器蓋	SD1476埋土	16.6	不明	不明	不明		9C

## 6 道路遺構 (第71・73~76図、図版29・30)

鶴ノ木地区における道路遺構としては、「つき固め(道路状)遺構」と報告されている粘土質の土を版築し硬化面を造成している遺構が、地区北部で2箇所 (SX109・SX1350) 検出されている。また、沼地岸辺付近に板材を敷設し木道としている遺構が地区東部で1箇所 (SX1701) 検出されている。この他にも道路面自体は検出されないが、推定城外東大路のように遺構が検出されない空閑地に道路の存在が想定されている箇所が、地区北部で把握されている。

### 1) SX109つき固め遺構 (第73図、図版29)

地区北部の第7次調査において、外郭東門跡から城外東側に延びる緩やかな尾根状地形の東端部で検出された。遺構は、幅約2m、東西13m以上のつき固められた灰褐色の硬化面として地山飛砂層面より検出された。西側は削平により不明となっている。硬化面は粘土と砂を混ぜ版築状につき固めており、厚さは最大で20cmである。その南北両側には平行して溝跡が検出されている。溝跡の方向は西で南に約5度振れる。道路面と側溝からなる道路遺構と考えられる。覆土となっている黒褐色土層からは、年代の下限資料として底径比が大きく縮小した底部系切り無調整の赤褐色土器壺破片が出土していることから、10世紀前半以前の古代の遺構と考えられる。



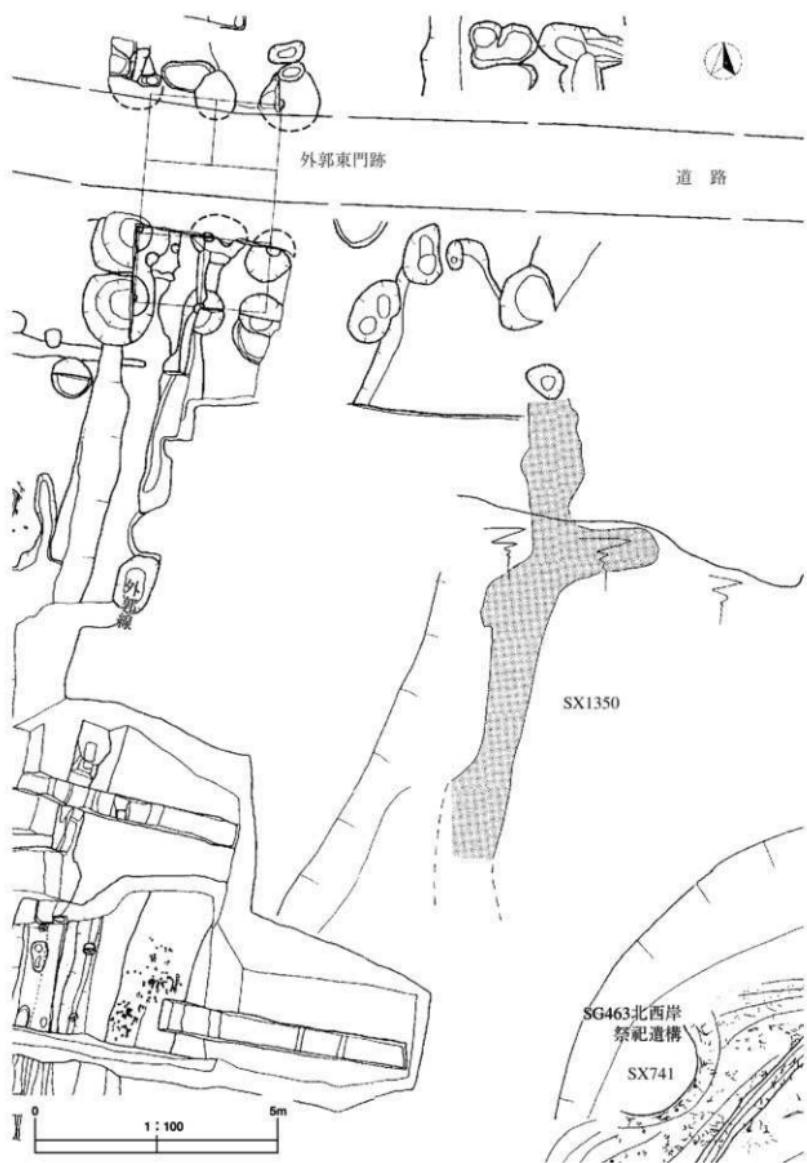
第73図 SX109ツキ固め（道路状）遺構

### 2) SX1350つき固め遺構（第74・76図、図版29）

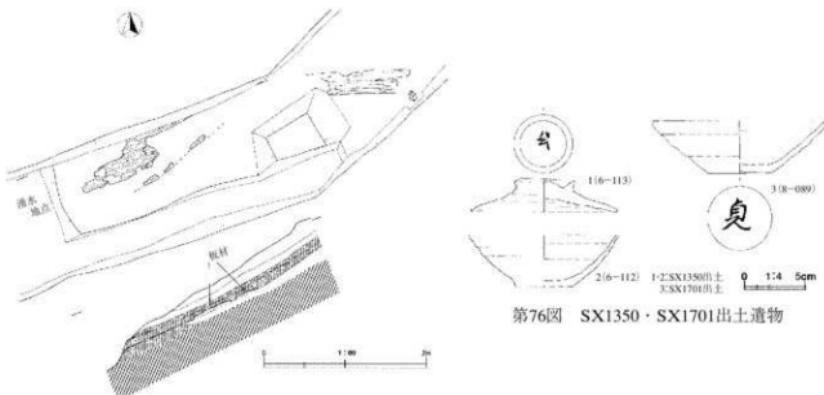
地区北部の第62次調査において、外郭東門跡付近から SG463沼地跡北西岸に至る南斜面で、地区北部第10層灰褐色土・暗褐色土・黄褐色土層面で東西3m以上丁字状につき固められたにぶい黄褐色の硬化面として検出された（幅約1.5～3.0m、南北に約17m）。第10層による整地事業が行われた年代と、後述の SG463北西岸の祭祀遺構の年代もふまえると、9世紀第2四半期頃に外郭東門から祭祀の場に至る道路として、造成整備された遺構と考えられる。また、出土遺物として、遺構上面のくぼみ内から9世紀後半に位置付けられる墨書きされた赤褐色土器蓋と壺が重なり合い埋設された形で出土しており、道路上において祭祀行為が行われたものと考えられる。

### 3) SX1701木道跡（第75・76図、図版30）

地区東部の第81次調査において、SG1206沼地跡東岸部の汀線付近から上方の斜面にかけて、汀線付近を整地している SG1206周辺の第7層灰黄褐色土層面より検出された。斜面に対し幅30～60cm×長さ1.1～1.6m以上、厚さ5cm前後の長い板材を2枚くの字状に、直接敷設した簡易な構造の木道である。斜面上方の生活域から沼地岸辺の湧水地点に至るための木道と考えられる。木道脇から9世紀後半に位置付けられる墨書きされた赤褐色土器壺が出土している。第7層による整地事業が行われた年代をふまえると、9世紀第2四半期に設置され、9世紀後半にかけて機能した遺構と考えられる。また、墨書き土器の出土から、9世紀後半に湧水点付近で水辺の祭祀行為が行われた可能性がある。



第74図 SX1350ツキ固め（道路状）遺構



第75図 SX1701木道路

第76図 SX1350・SX1701出土遺物

道路遺構出土遺物一覧表

図面番号	遺物番号	種類・器種	出土遺構・層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	底部切り離し	調整等	年代
76-1	6-113	赤褐色土器・蓋	SX1350上面窪み内	12.1	2.7	4.9	系切り	天井部外側ナタ調整	9C第4
76-2	6-112	赤褐色土器・环A	SX1350上面窪み内	12.3	4.2	4.7	系切り	無調整	9C第4
76-3	8-089	赤褐色土器・环A	SX1701木道路	14.3	4.3	5.2	系切り	無調整	9C第3

#### 4) 城外東大路について（第71図）

鶴ノ木地区で、道路面自体が検出されないが、遺構が検出されない空闊地に道路の存在が想定されている場所として、外郭東門跡から城外東側に延びる緩やかな尾根状地形付近があげられる。外郭東門周辺については、城内側の第54次調査で東門から政庁に至る8世紀代は幅12m、9世紀代は幅9mとなる東西道路の側溝が検出されており、城外東側にも同様に城外側へ伸びる道路遺構、城外東大路が存在すると考えられた。第62次調査、第67次調査、第68次調査では、直接大路に関係する道路遺構は検出されなかつたが、道路推定範囲に8世紀代に利用規制が存在していたことや、東西方向に連続性が認められる区画施設が検出され、道路南側の区画を意図した可能性が高いことなどから、東西道路の存在が推定される。前述のSX109つき固め遺構はその推定範囲内にあり、9世紀以降道路幅が縮小した後の東西道路の一部となる可能性が指摘される。

#### 7 壇穴住居跡・壇穴遺構（第77～91図、図版31・32）

壇穴住居跡については、鶴ノ木地区全体で73軒検出されており、縄文時代の住居が2軒、古代が71軒検出されている。壇穴遺構としては、規模や構造等から住居跡とならない古代の壇穴遺構が1基、中世の壇穴遺構が2基検出されている。

建物構造が明確に異なる縄文時代と古代以降の壇穴住居跡、壇穴状遺構を地区ごとに区分し、原則として遺構番号順に遺構および遺物集成図と一覧表に示した。遺構については、基本的に遺構番号・規模・平面形・壁高・方向・カマドの有無や付属施設・検出位置と層位・重複関係・出土遺物・年代の順に一覧表に示した。住居の方針については、壁の方針が東西と南北の発掘基準線に対する角度を

示した。なお、出土遺物などから年代の把握が可能なものについては表に示した。

検出位置について、古代の堅穴住居跡は、地区中央から東側にかけてのまとまりと、地区北部のSG1206沿地跡北岸部のまとまりに大別される。前者については、方位や規模に規則性が認められ、鶴ノ木地区中央建物群に対応する形でまとまりを持つグループに分けられ、それらは地区中央部の遺構変遷と画期を反映していると考えられる。また、後者については、前述した城外東大路周辺にあたり、同様に位置と方位に規制が存在していると考えられる。なお、古代の堅穴状遺構（SI622）と中世の堅穴状遺構（SI609・SI610）は地区北西部第34次調査地に、縄文時代の堅穴住居跡（SI834・SI835）は地区西部第42次調査地周辺に集中して検出されている。

地区中央部から東側の住居跡群は、壁の方向が、A類の南北方向で北ではほぼ真北～西に約3度振れる住居や、東西方向での西ではほぼ真西～南に約3度振れる住居、B類の南北方向で北で西に4度～10度振れる住居や東西方向で西で南に4度～10度振れる住居、C類の南北方向で北で西に12度～15度振れる住居や東西方向で西で南に12度～15度振れる住居、D類の南北方向で北で西に19度～24度振れる住居や東西方向で西で南に19度～24度振れる住居に分類される。B類の住居については、一辺約5m以上となる大型住居が多く、C類の住居については、一辺約3～4mの小型住居が多い特徴が指摘される。

この他に地区東部の第81次調査で検出された堅穴住居跡については、SG1206沿地跡東岸の地区東部にも秋田城に関係する居住域が存在したことを示している。

鶴ノ木地区検出堅穴住居跡一覧表（1）

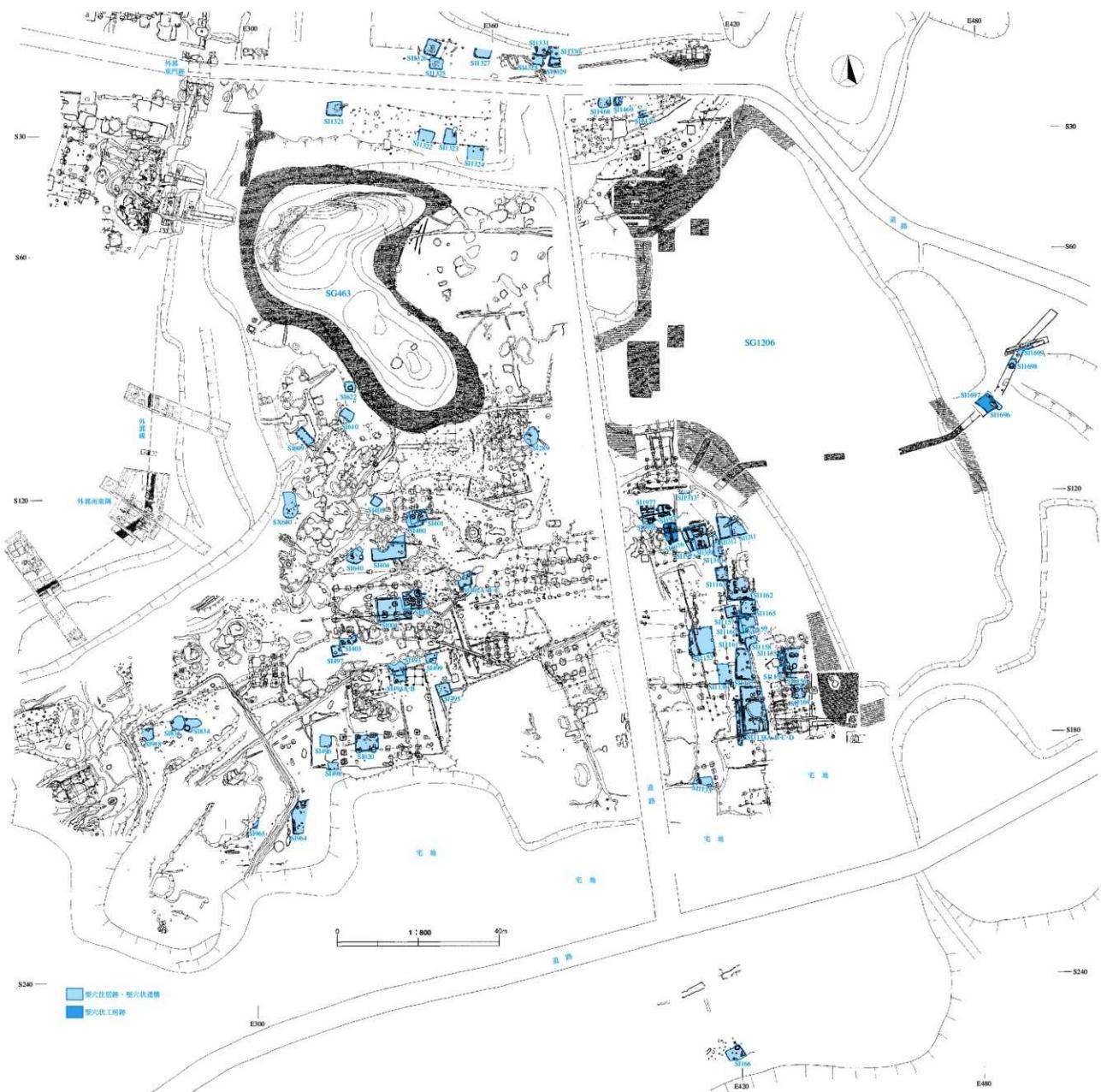
遺構番号	画面番号	調査次数	規模・平面形	壁高	方向	カマド・開溝・ピット等	検出位置・層位・重複関係	出土遺物	時期
SI604	78-1	25次	東西約9m×南北約6m・長方形	約50cm	N3° W	カマド無・周溝幅30cm・深さ15cm、壁無	地山粘土層 〔不明〕SB605 〔古〕SB606	第86回-1	8世紀後2四半期
SI605	78-2	25次	東西約5m×南北約4.5m・ほぼ方形	約40cm	N5° W	カマド有・周溝幅30cm・深さ15cm・ピット直徑約20cm、四隅、各邊各	地山粘土層 〔不明〕SK604 〔新〕SK604 〔古〕SB695		9世紀第1四半期～
SI620	78-3	30次	東西5.7m×南北3.8m・方形	20～30cm	N4° W	カマド無・周溝幅無・ピット無	地区中央地山粘土層 〔不明〕SB618・484		9世紀第1四半期～
SI166	78-4	12次	東西4.30m×南北3.73m・方形	約40cm	N21° W	カマド有・北壁東側・周溝幅無・ピット無	地区南部地山粘土層	第86回-2	9世紀後2四半期
SI289	78-5	18次	東西3.3m×南北4.6m・歪ん地形	約10cm	不明	カマド無・周溝幅無・ピット無	地区中央地山粘土層 〔新〕SK271	第86回-13～22	9世紀第2四半期
SI400	78-6	25次	東西約4m×南北約3.4m・ほぼ方形	約30cm	N13° W	カマド無・周溝幅10cm・深さ8cm、ピット直徑約40～50cm、四隅	地区中央地山粘土層 〔新〕SB396、397 〔古〕SI401	第86回-3～10	9世紀第2四半期
SI401	78-7	25次	東西約4.2m×南北約3.1m・長方形	約30cm	N12° W	カマド無・周溝幅約20cm、深さ約10cm、ピット直徑約30～40cm、四隅	地区中央地山粘土層 〔新〕SB396、397・SI400・SD415	第86回-11、12	9世紀第2四半期
SI402A	78-8	25次	東西約3.5m×南北約3.5m・方形	約20cm	N10°～19° W	カマド有・東壁南側・周溝幅無・ピット無	地区中央地山粘土層	第86回-23、24、25、28、29、30	9世紀第2四半期
SI402B	78-9	25次	東西約3.8m×南北約3.5m・ほぼ方形	約50cm	N10°～19° W	カマド有・南壁・周溝無・ピット無	地区中央地山粘土層		9世紀第2～第3四半期
SI402C	78-10	25次	東西約3.8m×南北約3.5m・ほぼ方形	約70cm	N10°～19° W	カマド有・東壁北側・周溝幅10～20cm、深さ約10cm、ピット直徑約30cm、四隅	地区中央地山粘土層	第86回-26、27	9世紀第2～第3四半期
SI403	79-11	25次	東西約4.5m×南北約4m・方形	約30cm	N16° W	カマド有・南壁東側・周溝幅20cm・深さ約15cm、ピット直徑約60cm・深さ約60cm、四隅	地山粘土層 〔不明〕SB606	第86回-31～38	9世紀第3四半期
SI404	79-12	25次	東西約8.8m×南北約6m以上・方形	約30cm	N2° W	カマド無・周溝幅約20cm・深さ約20cm、ピット無	地山粘土層 〔古〕SD411・SK416		8世紀～
SI405	79-13	25次	東西約2.4m×南北2.1m・方形	不明	N24° E	カマド無・周溝幅無・ピット無	地山粘土層		不明
SI493	79-14	30次	東西約3.5m×南北2.6m以上・方形	約60cm	N17° W	カマド有・南壁東側・周溝幅無・ピット無	地山粘土層 〔古〕SI494	第86回-39～45	9世紀第2四半期
SI494A	79-15	30次	東西3.2m×南北3m前後・ほぼ方形	30～40cm	N14° W	カマド有・西壁中央・周溝幅・ピット・四隅、各邊中央	地山粘土層 〔新〕SI493・SI494B	第86回-46～52	9世紀第2四半期
SI494B	79-16	30次	不明	不明	N14° W	小明	地山粘土層 〔新〕SI493・SI494A	第86回-53～62	9世紀第2～第3四半期

鶴ノ木地区検出堅穴住居跡一覧表（2）

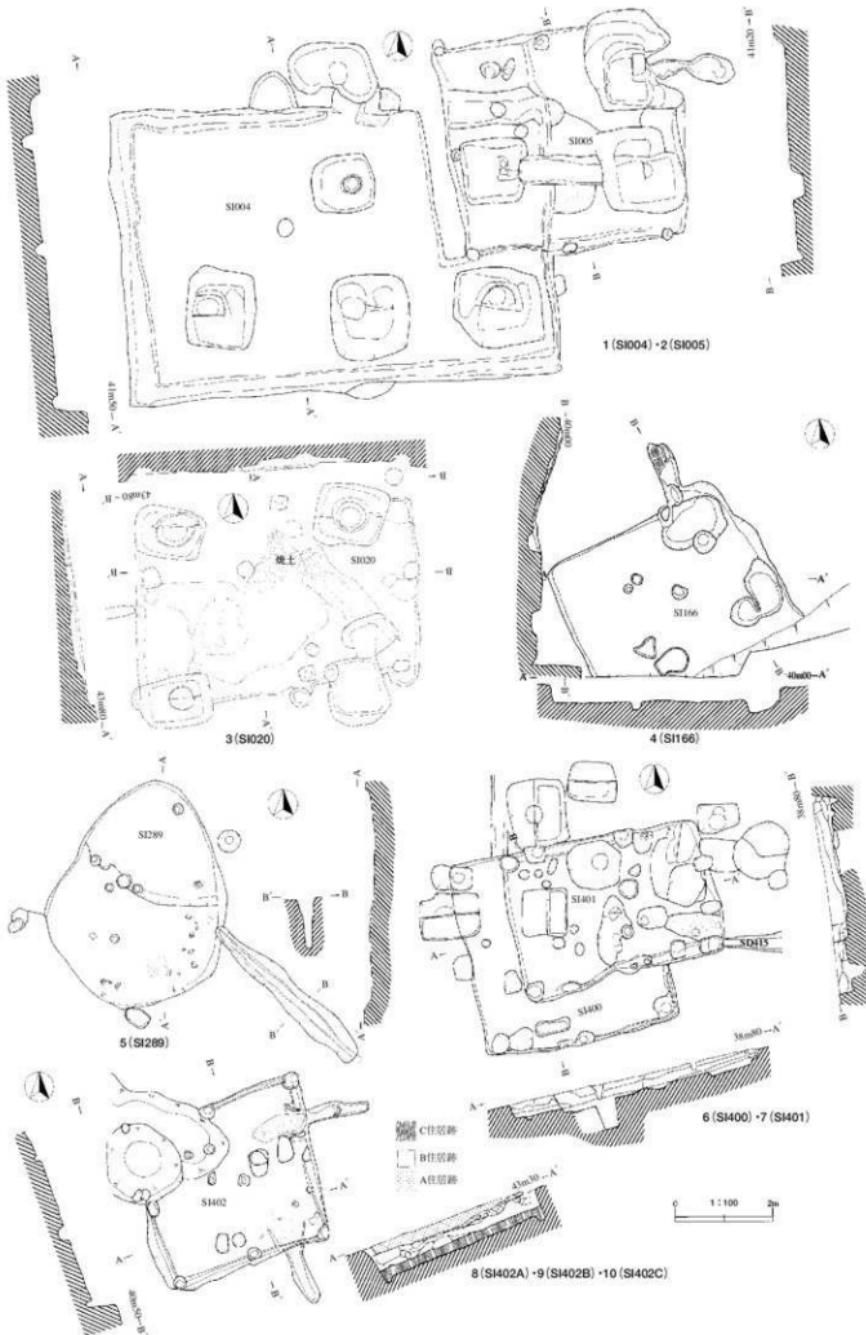
構造番号	面番号	調査次数	規模・平面形	概高	方向	カマド・周溝・ピット等	検出位置・層位・複雑関係	出土遺物	時期
S1495	79-17	36次	東西3.3m×南北3.1m・方形	約70cm	N16°W	カマド無・周溝無・ピット無	地山粘土層 (新)SD508・509	第86回～63～75	9世紀後半期
S1496	79-18	36次	東西2.8m×南北2.8m・方形	約45cm	N 0°N	カマド無・周溝無・ピット無	地山粘土層	第87回～76～90	9世紀後半期
S1497	79-19	36次	東西2.4m×南北2.7m・方形	35～45cm	N 3°N	カマド無・周溝無・ピット無 柱直径約20cm、深さ20cm、四隅	地山粘土層	第87回～91～96	9世紀後半期
S1498	79-20	36次	東西2.6m×南北1.8m・方形	15～20cm	N 2°W	カマド無・周溝無・ピット各壁各辺	地山粘土層 (新)SA503	第87回～97～99	9世紀後半期
S1499	79-21	36次	不明	約10cm		カマド無・周溝無・ピット無	地山粘土層		不明
S1600	79-22	34次	堅穴造構・東西約2.4m×南北約4.8m・長方形	約50cm	N45°W	カマド無・周溝無・ピット・主柱穴約40cm、東西2.4m×南北4間、添柱直径20cmを伴う	地山粘土層		13世紀
S1610	79-23	34次	堅穴造構・東西約2.2m×南北約3.3m・長方形	約40～50cm	E35°S	カマド無・周溝無・ピット無	地区北西部第7層	第87回～100	13世紀第3四半期
S1622	80-24	34次	堅穴造構・東西約2.5m×南北約2.5m・方形	約20～40cm	N 6°W	カマド無・周溝無・ピット無	地山粘土層	第87回～101～104	9世紀後半期
S918	80-25	46次	東西2.3m以上×南北約2.7m・方形	10cm	N 4°W	カマド有・北壁中央・周溝幅15cm～20cm、深さ約5cm・ピット無	地区西部地山粘土層		カマド袖材に段段瓦使用
S964	80-26	51次	東西5m以上×南北約7.8m・方形	約40cm	N 4°W	カマド無・周溝幅10cm、深さ5cm・ピット直徑約40cm、深さ50～60cm、南北端付近	地区中央地山粘土層	第87回～105～106	9世紀第1四半期
S965	80-27	51次	東西1m以上×南北2.5m以上	10～15cm	N14°E	不明	地区中央地山粘土層		
SII135	80-28	57次	東西4.3m以上×南北2.5m以上・長方形	30～40cm	N10°W	カマド無・周溝無・ピット無	地区中央東側地山粘土層 (古)SB1130		～9世紀第1四半期
SII136	80-29	58次	東西3.6m以上×南北4.8～5.0m・方形	30cm	N 6°W	カマド有・南壁東側・周溝無・ピット・西側・北端中央	地区中央東側地山粘土層 (新)SA1179	第87回～107～110	9世紀第1～第2四半期
SII137	80-30	58次	東西4.3m以上×南北8.0m・長方形	45cm	N 3°E	カマド無・周溝幅20～40cm・ピット無	地区中央東側地山粘土層 (古)SB1158	第87回～111～113	8世紀末～9世紀初四半期
SII138	81-31	57次	東西5.8m×南北6.5m・長方形	40cm	N 6°W	カマド無・周溝幅50～80cm・周溝と各壁中央・南側・東西2箇所に南北2箇所に柱立柱跡を伴う	地区中央東側地山粘土層 (新)SB1146～1147・SK1189 (古)SD1187・1142		9世紀第1～第2四半期
SII138A	81-32	57次	東西1.4m以上×南北約11.5m・長方形	30cm	N 4°W	カマド無・壁直下周溝幅約10cm・ピット無	地区中央東側地山粘土層 (古)SB1138B・C・D		9世紀第1四半期
SII138B	81-33	57次	東西6.0m以上×南北11.6m・長方形	60cm	N 3°～30°W	カマド無・壁直下周溝幅15～25cm、深さ5～10cm・ピット無	地区中央東側地山粘土層 (新)SI1138・D		9世紀第1四半期
SII138C	81-34	57次	東西5.6m×南北8.1m・長方形	不明	N 3°～30°W	カマド無・壁直下周溝幅内直徑3～4cmの小ピットが20～40cm間隔で並ぶ・堅穴内に西軒3cm、南梁間2cmの南北棟骨を作り	地区中央東側地山粘土層 (新)SI1138A～B (古)SI1138D		9世紀第1四半期
SII138D	81-35	57次	東西3.7m以上×南北6.0m以上・長方形	不明	不明	カマド無・周溝幅30～40cm、深さ15cm前後・ピット無	地区中央東側地山粘土層 (新)SI1138A・B・C	第87回～114	9世紀第1～第2四半期
SII154	82-36	58次	東西2.0m以上×南北7.8m・長方形	15cm	N 6°W	カマド無・周溝幅20cm・ピット無	地区中央東側第9層 (古)SI1149・SI1155・1156・SI192	第87回～115～119	8世紀末～9世紀第1四半期
SII155	82-37	58次	東西2.7m以上×南北3.4m・長方形	30cm	N 0°N	カマド無・周溝無・ピット無	地区中央東側第9層 (新)SI1149	第87回～115～119	9世紀第1四半期
SII156	82-38	58次	東西3.5m以上×南北7.5m・長方形	40cm	N 6°W	カマド無・壁直下周溝幅10～30cm・ピット無	地区中央東側第9層 (新)SI1149・SI1154・1155	第87回～120～125	9世紀第1四半期
SII157	82-39	58次	東西2.8m×南北3.0m・はづき方	20cm	N13°W	カマド有・東壁南寄り・周溝幅下周溝幅18～22cm・ピット無	地区中央東側地山粘土層 (新)SA1182	第88回～126～134	9世紀第2四半期
SII158	82-40	58次	東西2.8m以上×南北3.2m・はづき方	25cm	N12°W	カマド無・壁直下周溝幅15～20cm・ピット無	地区中央東側地山粘土層 (新)SI1137・1161	第88回～135～138	9世紀第2四半期
SII159	82-41	58次	東西3.5m×南北3.5m・方形	18cm	N12°W	カマド不明・周溝無・ピット無	地区中央東側地山粘土層 (新)SI1160・1161	第88回～139～143	9世紀第2四半期
SII160	82-42	58次	東西5.0m×南北5.8m・長方形	30cm	N 6°W	カマド有・南壁東寄り・周溝無・ピット南西隅	地区中央東側地山粘土層 (新)SI1161・1165 (古)SI1159	第88回～144～145	9世紀第1～第2四半期
SII161	82-43	58次	東西3.8m×南北6.8m・長方形	30cm	N 5°W	カマド有・東壁中央・壁直下周溝幅12～30cm・ピット無	地区中央東側地山粘土層 (古)SI1158～1159・1160	第88回～146	9世紀第1四半期
SII162	82-44	58次	東西5.5m×南北5.4m・はづき方	50cm	N 5°W	カマド有・南壁東寄り・西壁・油壁にピットと周溝幅10～20cm	地区中央東側地山粘土層 (新)SI1165 (古)SI1188	第88回～147～171	9世紀第1～第2四半期

鶴ノ木地区検出堅穴住居跡一覧表 (3)

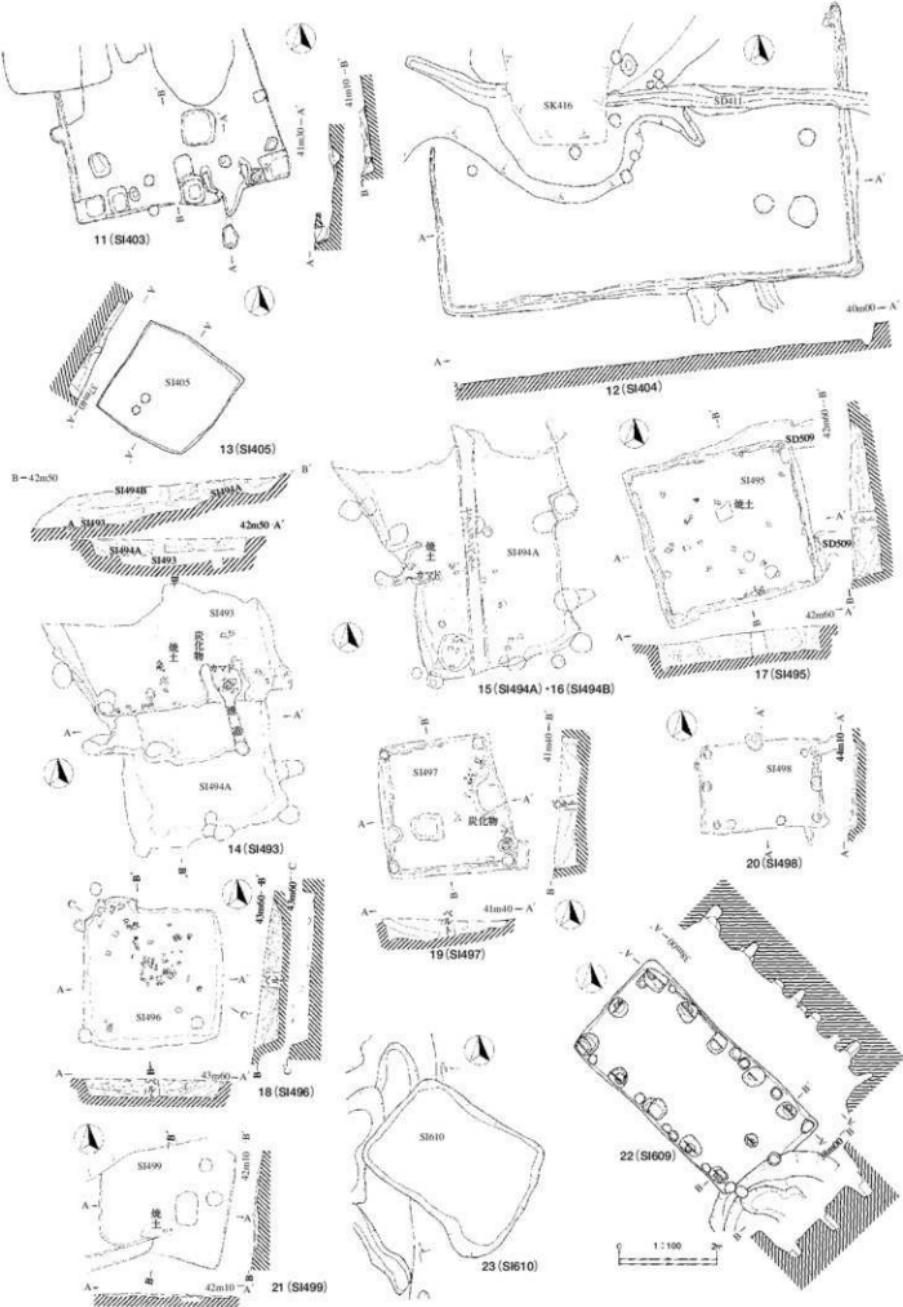
造構番号	面番号	調査次数	規模・平面形	壁高	方向	カマド・圓溝・ピット等	検出位置・層位・重複関係	出土遺物	時期	
SI1163	82-45	58次	東西3.1m以上×南北3.3m・方形	40cm	N12° W	カマド無・北側・南壁直下。周溝幅12~18cm、ピット無	地区中央東側地山粘土層 第88回~172 ~182	9世紀第2四半期		
SI1164	83-46	58次	東西3.0m×南北3.6m・長方形	14cm	N9° W	カマド有・南壁東寄り・北壁・西壁直下。周溝幅20cm、ピット無	地区中央東側地山粘土層 第89回~183 ~185	9世紀第1~第2四半期		
SI1165	83-47	58次	東西3.8m×南北4.0m・はば方形	80cm	N1° W	カマド有・東壁南寄り・南壁・西壁直下。周溝幅16~26cm、ピット無	地区中央東側地山粘土層 第89回~186 ~207	9世紀第2四半期		
SI1309	83-48	61次 91次	東西4.0m以上×南北6.3m・長方形	10cm	N15° W	カマド有・南壁東寄り・各辺周溝幅16cm、深さ14cm・ピット無	地区中央東側第7層 第89回~213、 214 (新)SB1308 (古)SI1975	9世紀第2四半期		
SI1310	83-49	61次	東西5.5m×南北6.0m・はば方形	約30cm	N4° W	カマド無	地区中央東側地山粘土層 第89回~217 (新)SD1317 (古)SD1314~SD1388	9世紀~		
SI1311	83-50	61次	東西4.0m以上×南北5.0m・長方形	40cm	N5° W	カマド無・各辺周溝幅3~4cmの小ピットが並ぶ壁支柱柱桂	地区中央東側地山粘土層 SI1312 (古)SD1315			
SI1312	83-51	61次	東西3.4m以上×南北5.6m・長方形	40cm	N9° W	カマド無・各辺周溝幅28cm、深さ15cm、ピット無	地区中央東側地山粘土層 (古)SI1311~SD1315	赤褐色土器片 出土	9世紀~	
SI1313	83-52	61次	東西3.0m×南北1.5m・長方形	20cm	不明	カマド無・周溝無・ピット無	地区中央地山粘土層		不明	
SI640	83-53	35次	直径約4.5m・不整円形	20cm~ 25cm	不明	カマド無・周溝無・ピット無	地区西側地山粘土層 第89回~217 ~219	9世紀第2四半期		
SI834	83-54	42次	東西4.5m以上×南北2.5m・楕円形	15cm~ 20cm	不明	カマド無・周溝無・ピット無	地区西側地山粘土層 绳文時代後期			
SI835	83-55	42次	東西約3.5m×南北約3.5m・不整円形	約25cm	不明	カマド無・周溝無・ピット無(底に3本、約20cmの深さ)、中央に向かって傾斜した埋込み	地区西側地山粘土層 (新)SI834~SK836 ~230	绳文時代後期		
SI1321	84-56	62次	東西4.0m×南北3.5m・長方形	53cm	N7° E	カマド有・東壁北寄り・周溝無・ピット無	地区北部地山飛砂層 第90回~231 ~244	9世紀第3四半期		
SI1322	84-57	62次	東西4.0m×南北2.7m・長方形	22cm	N22° E	カマド無・周溝無・ピット無	地区北部地山飛砂層 第90回~245, 246	9世紀第4四半期		
SI1323	84-58	62次	東西3.4m×南北3.9m・長方形	18cm	N11° E	カマド有・東壁北寄り・周溝無・ピット無	地区北部地山飛砂層 第90回~247 ~254	9世紀第4四半期		
SI1324	84-59	62次	東西4.0m×南北3.5m以上・方形	20cm	N6° E	カマド無・周溝無・ピット無	地区北部地山第11層 9世紀~			
SI1325	84-60	62次	東西3.4m×南北2.9m・長方形	22cm	N8° E	カマド無・周溝無・ピット無	地区北部地山飛砂層 (古)SD1345	9世紀第4四半期		
SI1326	84-61	62次	東西3.4m×南北3.9m・長方形	40cm	N26° E	カマド無・周溝無・ピット無	地区北部地山第11層 第90回~256 ~258	9世紀第1四半期		
SI1327	84-62	62次	東西4.2m×南北2.2m以上・方形	38cm	N13° E	カマド無・周溝無・ピット無	地区北部地山飛砂層 第90回~259, 260	9世紀第2四半期		
SI1328	84-63	62次	東西4.7m×南北2.4m以上・方形	30cm	N16° E	カマド無・周溝無・ピット無(底30cm、直径30cm) (新)SI1331~(古)SD1339	地区北部地山飛砂層 第90回~261	9世紀第2四半期		
SI1331	84-64	62次	東西3.0m×南北2.3m以上・方形	38cm	N11° E	カマド有・東壁南寄り・周溝無・ピット無	地区北部地山飛砂層 (新)SD1346 (古)SI1328~1330, SD1347	第90回~269 ~277	9世紀第1四半期	
SI1329	85-65	62次	東西3.0m以上×南北2.5m以上・方形	58cm	N13° E	カマド無・南壁直下周溝幅20cm・ピット・南西隅	地区北部地山飛砂層 (古)SI1330	9世紀第2四半期		
SI1330	85-66	62次	東西2.5m以上×南北3.0m以上・方形	40cm	N3° W	カマド無・周溝無・ピット無	地区北部地山飛砂層 (新)SI1329~SI1331	9世紀第2四半期		
SI1468	85-67	67次	東西3.3m×南北2.6m以上・鍋丸形	15cm	N9° W	カマド無・周溝無・ピット無	地区北部地山飛砂層 第90回~278, 279	9世紀第3四半期		
SI1469	85-68	67次	東西2.0m×南北2.2m・方形	20cm	N0° N	カマド無・周溝無・ピット無	地区北部地山飛砂層 (古)SI1486	9世紀第3四半期		
SI1470	85-69	67次	東西2.0m以上×南北1.6m以上・方形	15cm	N6° W	カマド無・周溝無・ピット無	地区北部地山飛砂層 不明			
SI1696	85-70	81次	東西2.2m以上×南北1.5m以上・方形、北西隅約60cmの低出	8~15cm	N50° W	カマド無・周溝無・ピット無	地区東部地山粘土層 (新)SI1697	9世紀第1四半期~		
SI1698	85-71	81次	東西2.1m×南北2.5m・方形	50cm	N17° W	カマド有・南東隅・北東及び北東に周溝無・幅8cm前後、深さ5cm前後	地区東部地山粘土層 第90回~281 ~283	9世紀第1四半期		
SI1699	85-72	81次	東西3.8m×南北2.0m以上・方形	35cm	N40° W	カマド不明・周溝無・ピット無・北西隅及び北東隅、北北中央	(古)SA1695	9世紀第4四半期		
SI1705	85-73	91次	東西2.4m以上×南北2.5m・方形	約12cm	N23° W	カマド不明・周溝無・ピット無	(新)SI1309 (古)SD1974	第91回~286	9世紀第2四半期	
SI1707	85-74	91次	東西3.4m×南北2.1m以上・方形	約12cm	N4° W	カマド無・周溝無・壁際の床面に不規則な隙間で柱穴桂を残す	地区中央第7層 (新)SI1979	第91回~287 ~292	9世紀第2四半期	
SI1708	85-75	91次	東西3.0m×南北2.1m以上・方形	約12cm	N4° W	カマド有・東壁北寄り・周溝を除き周溝が残る・ピット無	地区中央第8層 (新)SK1983 (古)SI1977	第91回~293 ~325	9世紀第2四半期	
SI1709	85-76	91次	東西2.9m×南北3.0m・はば方形	約18cm	N3° W	カマド有・東壁北寄り・カマド周辺を除き周溝が残る・ピット無	地区中央第8層 (新)SK1982 (古)SA1970	第91回~326 ~336	9世紀第1~第2四半期	



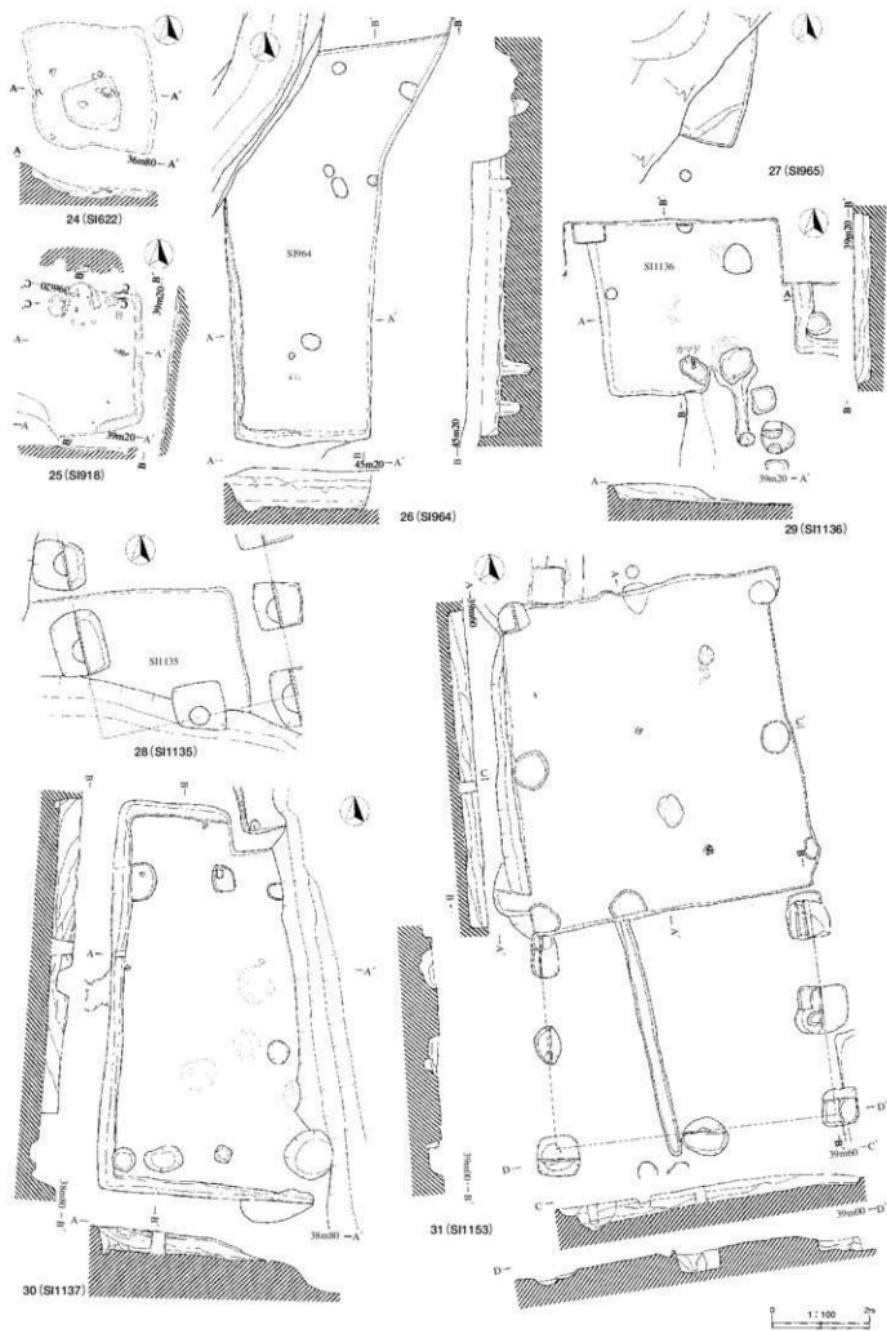
第77図 鶴ノ木地区検出堅穴住居跡・堅穴状工房跡位置図



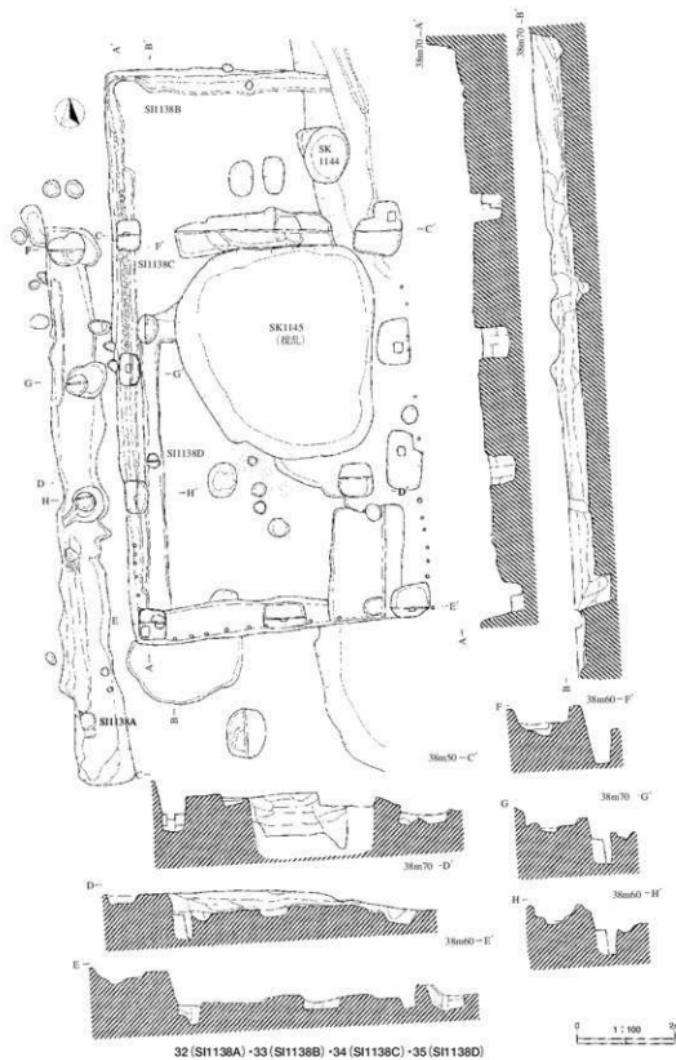
第78図 鶴ノ木地区検出堅穴住居跡①



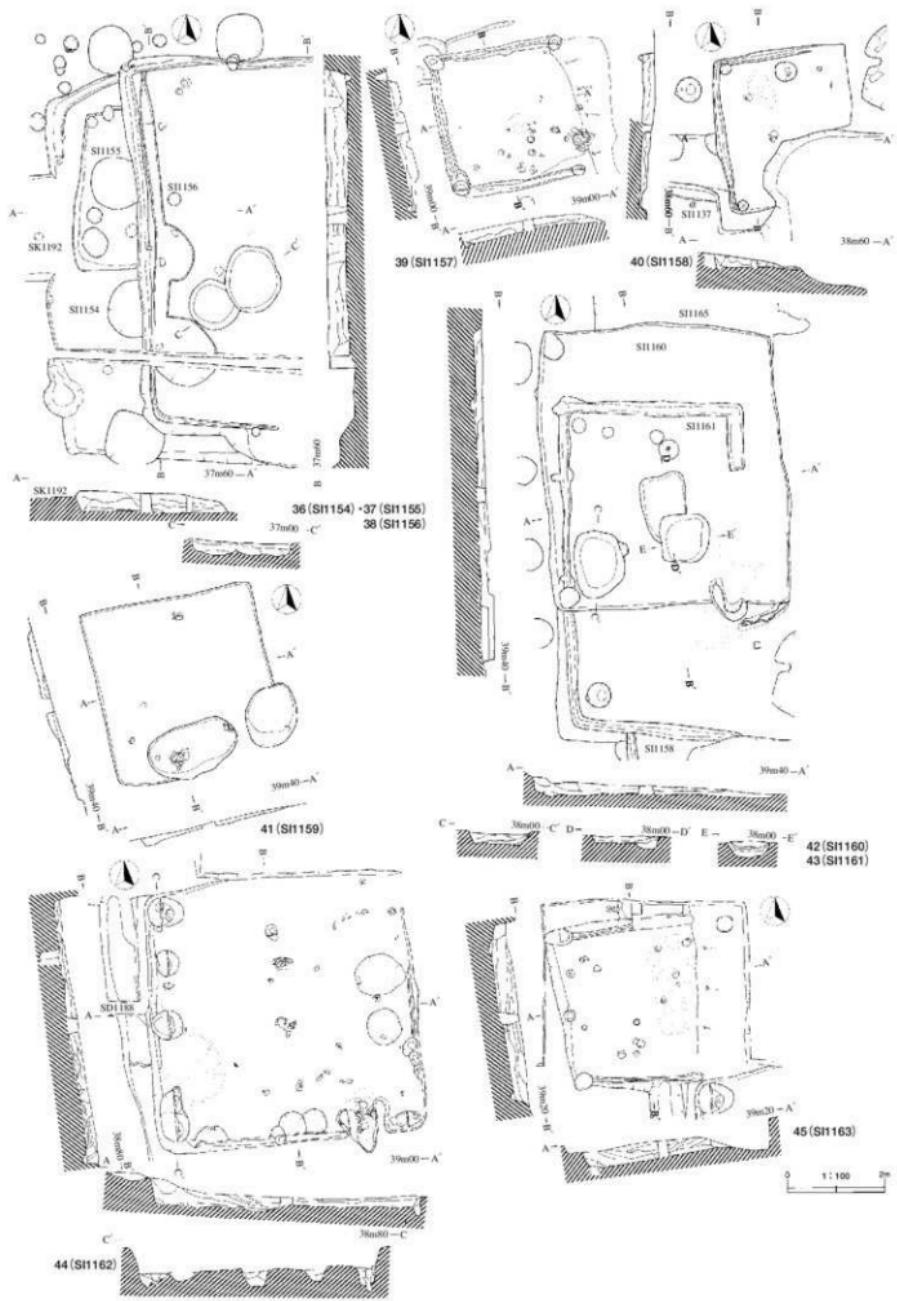
第79図 鶴ノ木地区検出縦穴住居跡②



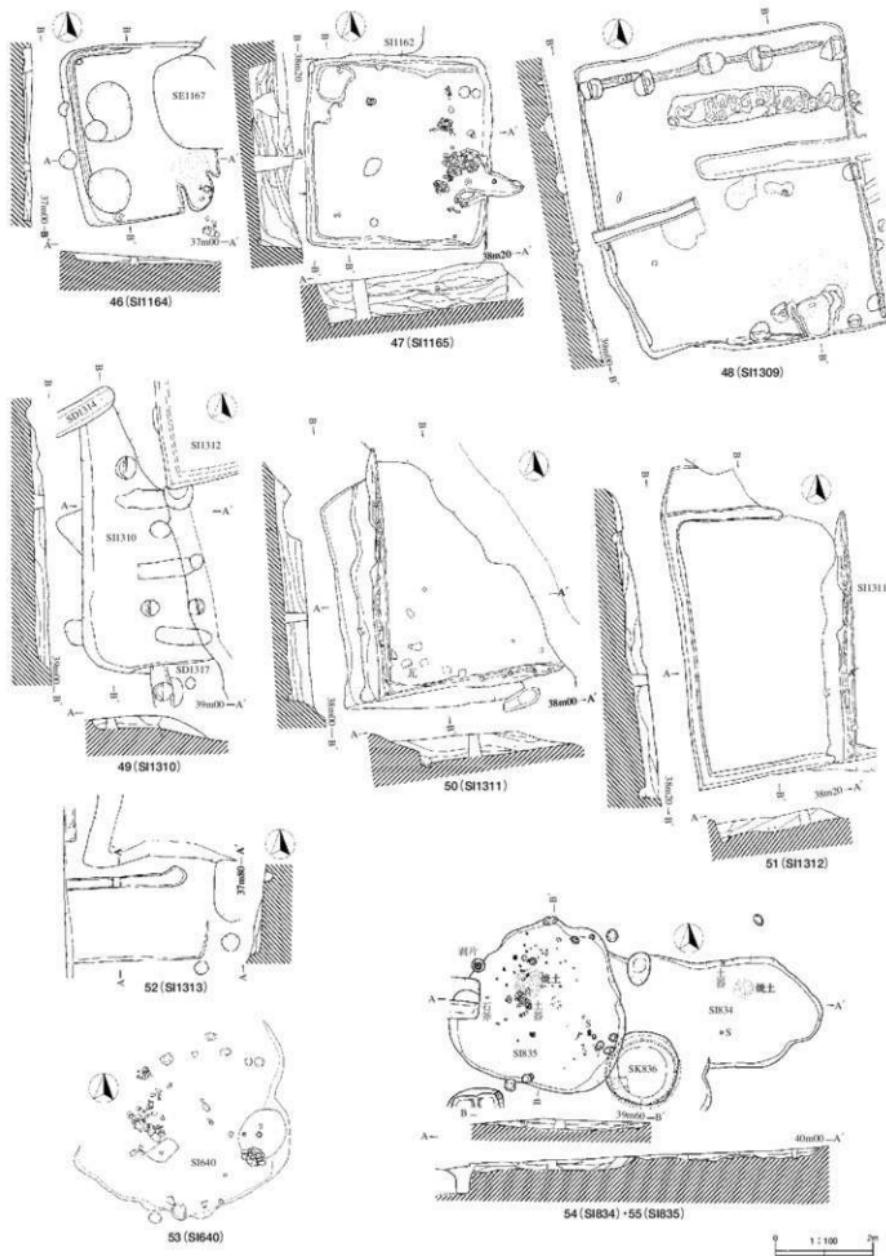
第80図 鶴ノ木地区検出竪穴住居跡③



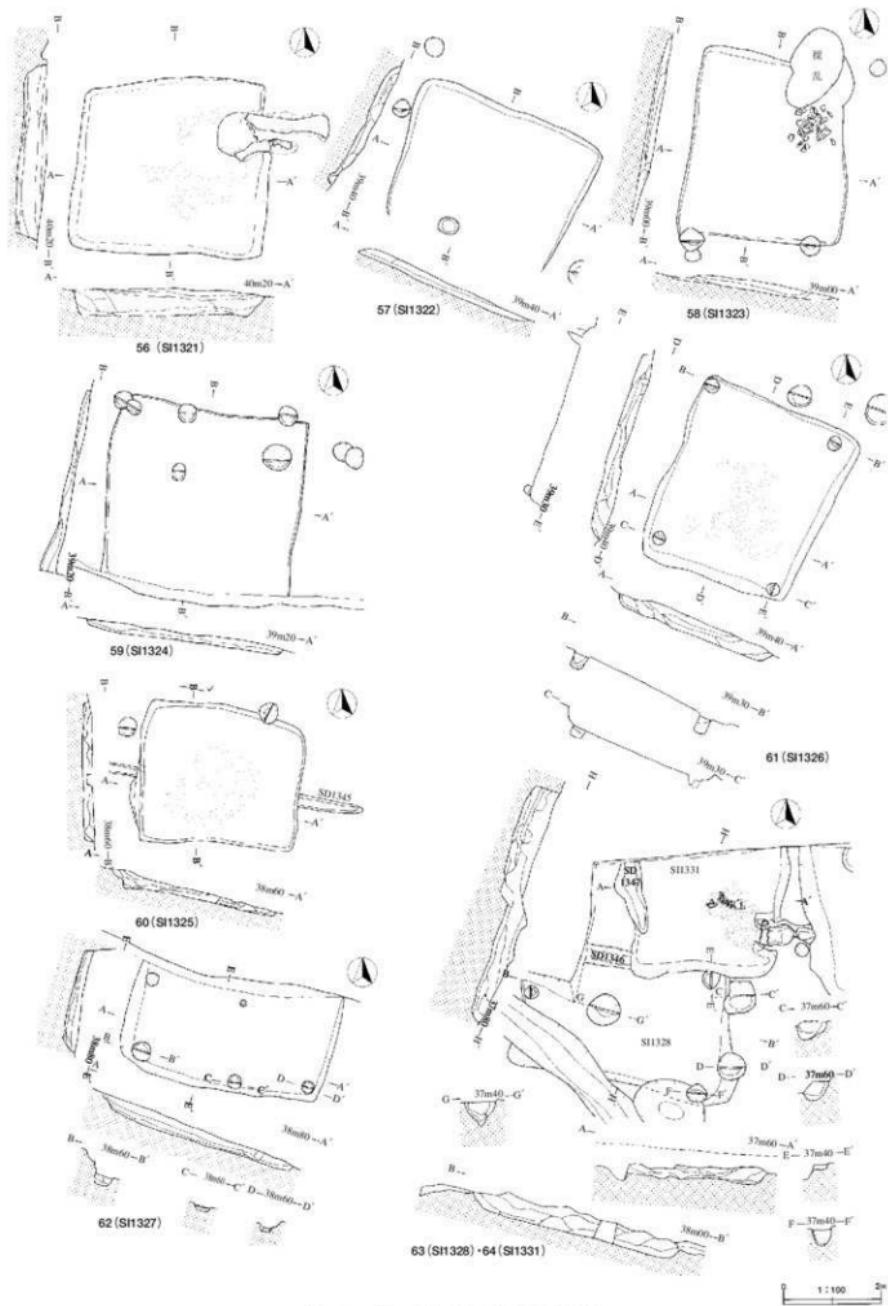
第81図 鶴ノ木地区検出竪穴住居跡④



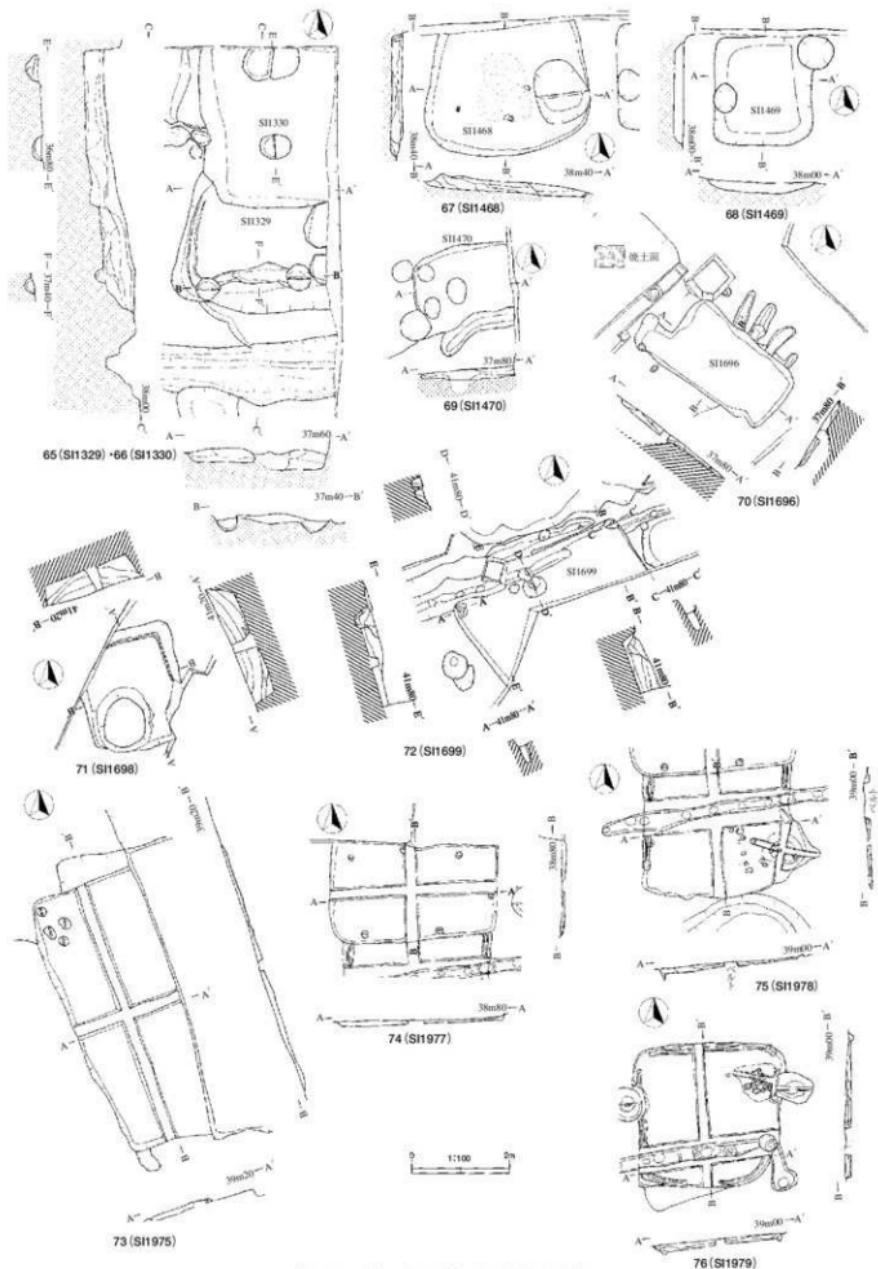
第82図 鶴ノ木地区検出堅穴住居跡⑤



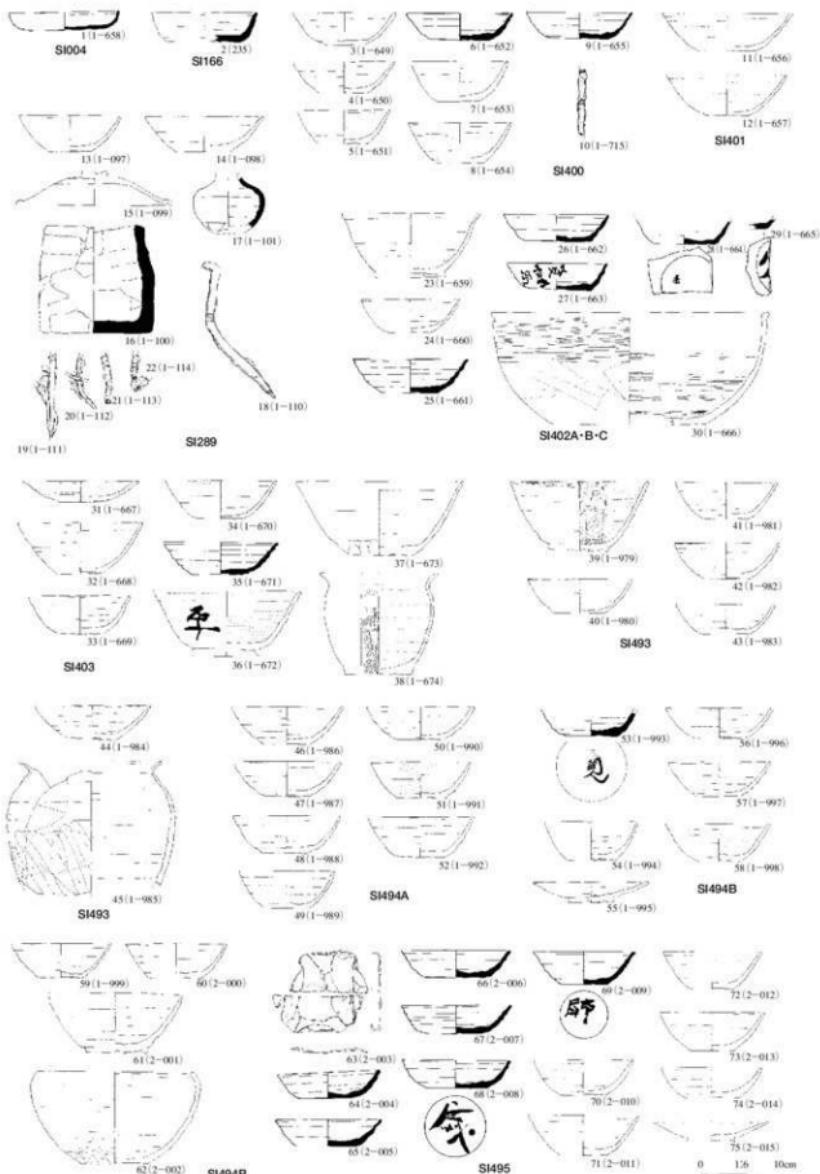
第83図 鶴ノ木地区検出堅穴住居跡⑥



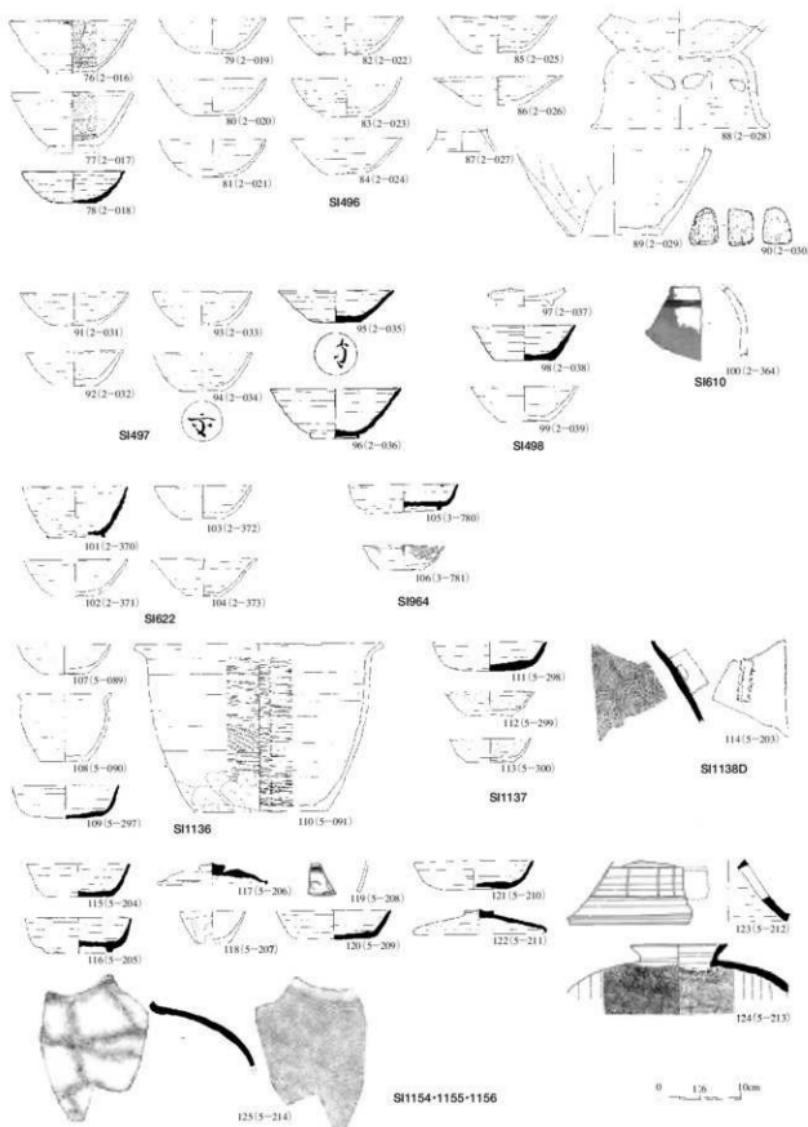
第84図 鶴ノ木地区検出堅穴住居跡⑦



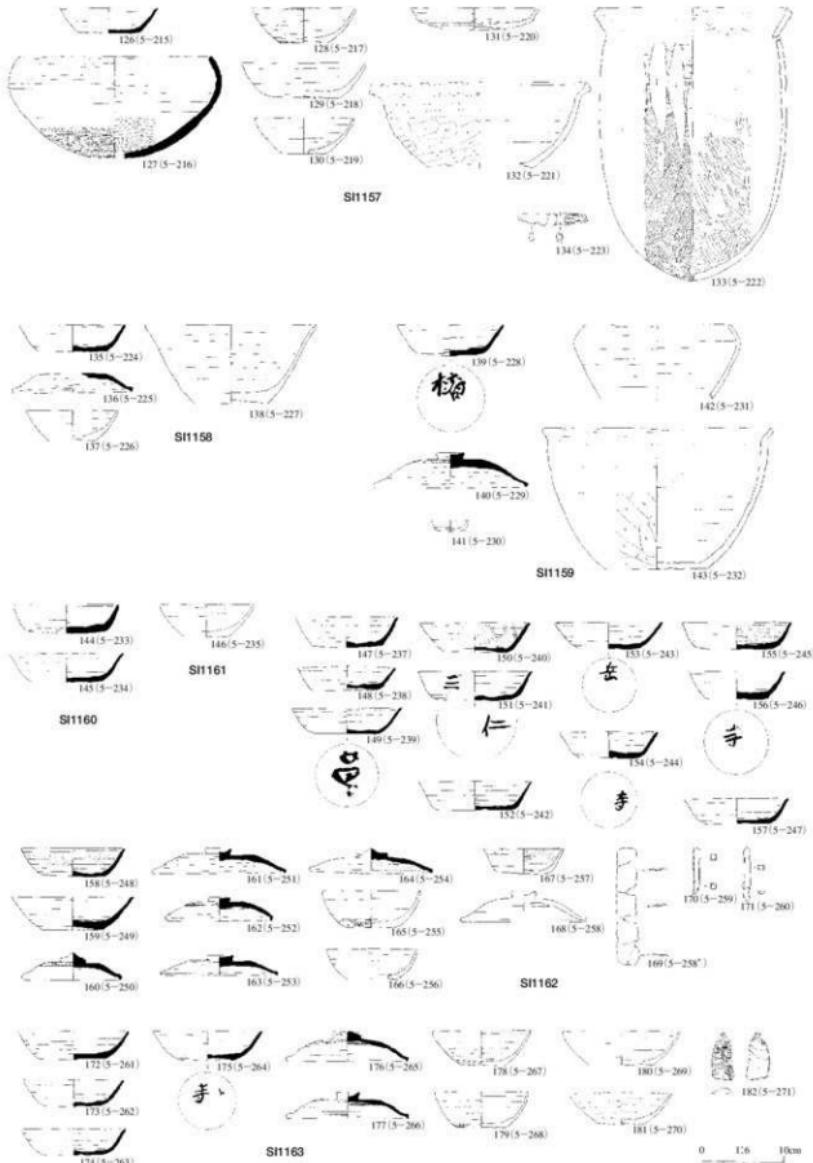
第85図 羽ノ木地区検出堅穴住居跡⑧



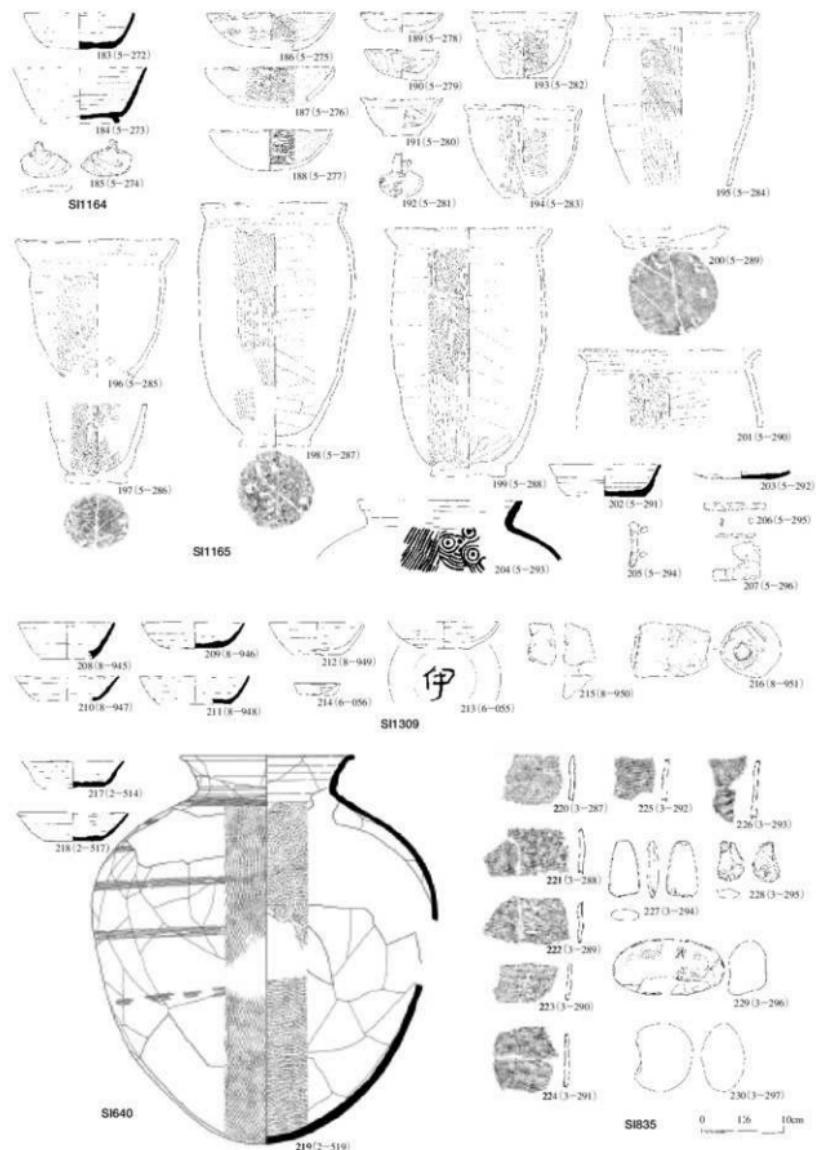
第86図 鶴ノ木地区検出竪穴住居跡出土遺物①



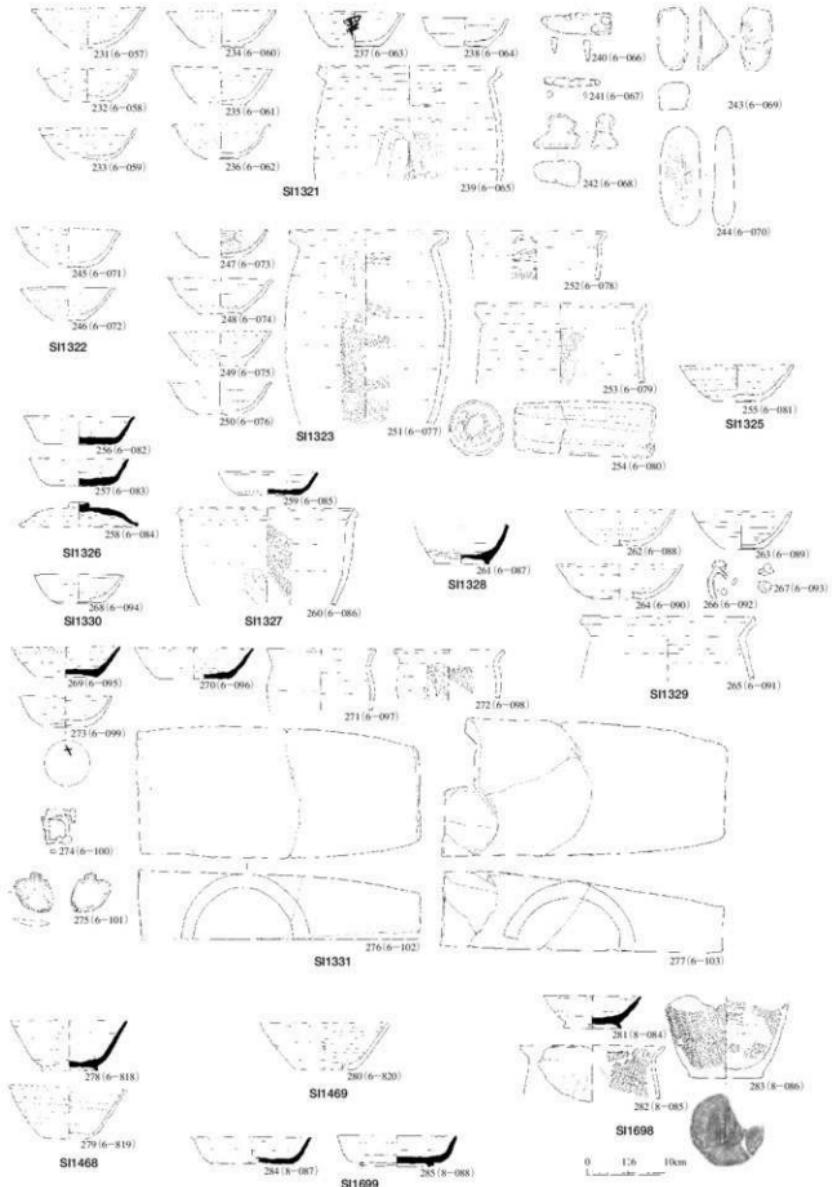
第87図 鶴ノ木地区検出竪穴住居跡出土遺物②



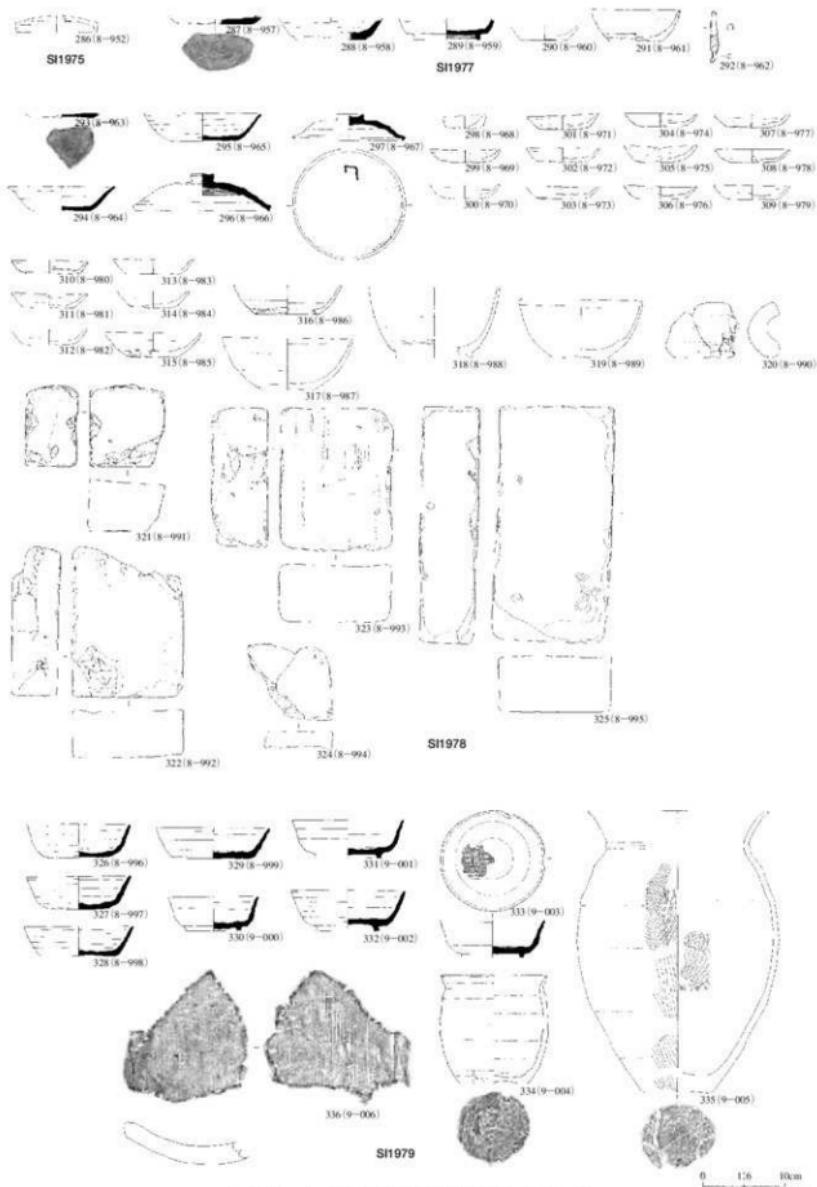
第88図 鶴ノ木地区検出竪穴住居跡出土遺物③



第89図 鶴ノ木地区検出縦穴住居跡出土遺物④



第90図 鶴ノ木地区検出竪穴住居跡出土遺物⑤



第91図 鶴ノ木地区検出竪穴住居跡出土遺物⑥

縄ノ本地区検出堅穴住居跡 出土遺物一覧表（1）

固面番号	遺物番号	種類・器種	出土遺構・層位	口径等(㎝)	高さ等(㎝)	底径等(㎝)	追跡切り廻し	調 整 等	時期
86-1	1-658	須恵器・环	S100A北壁焼土内	13.6	2.3	10.7	ヘラ切り?	底部全面回転ケズリ	8C 第2
86-2	235	須恵器・环	S100E環土	12.9	3.7	9	ヘラ切り	底面丁寧なナデ	9C 第2
86-3	1-649	赤褐色土器・环A	S100環土	12.7	4	4.5	赤切り	無調整	9C 第2
86-4	1-650	赤褐色土器・环A	S100環土	12.4	3.8	5.8	赤切り	無調整	9C 第2
86-5	1-651	赤褐色土器・环A	S100環土	11.4	4.1	5.6	不明	掌裏が激しい	9C 第2
86-6	1-652	須恵器・环	S100B環土下	13.1	3.3	7.4	ヘラ切り	無調整	9C 第1
86-7	1-653	赤褐色土器・环A	S100B環土下	11.7	4.9	5.4	赤切り	無調整	9C 第2
86-8	1-654	赤褐色土器・环A	S100B環土下	12.6	4.9	5.6	赤切り	無調整	9C 第2
86-9	1-655	須恵器・环	S100環土	13	3.1	7.3	ヘラ切り	無調整	9C 第1
86-10	1-715	鉢	S100B環土下	8.0	長さ残存7.5			先端部と基部欠損	
86-11	1-656	赤褐色土器・环A	S100I灰土上	16	4.6	7.1	赤切り	無調整	9C 第2
86-12	1-657	赤褐色土器・环A	S100I灰土上	13.7	4.8	5.4	赤切り	ナメあり	9C 第2
86-13	1-697	赤褐色土器・环A	S239環土	11.5	4.4	5.3	赤切り	無調整	9C 第2
86-14	1-098	赤褐色土器・环A	S239E面	14.5	4.3	6.5	赤切り	無調整	9C 第2
86-15	1-099	内黒土器・釜	S239環土	19	3.9			クロロ使用 内面黒かいヘマギキ	9C 第2
86-16	1-100	土器器・支脚	S239環土	11	13.2	13.4	不明	各面全面に火熱を受ける	不明
86-17	1-101	須恵器・瓶	S239環土	不明	不明	不明	不明	体部下端手持ちヘラケズリ	9C 第2
86-18	1-110	鉢	S239環土	幅1	大さ20.5				
86-19	1-111	鉢	S239環土	長さ	残存10.0			3本の鉄錆が跡着	
86-20	1-112	鉢	S239環土	長さ	残存6.8			3本の鉄錆が跡着	
86-21	1-113	鉢	S239環土	長さ	残存5.2			先端部と基部欠損	
86-22	1-114	鉢	S239環土	長さ	残存3.0			2本の鉄錆が跡着	
86-23	1-659	赤褐色土器・台付片	S100A カマド	16.8	7.4	8.7	不明	底部ナデ	9C 第2
86-24	1-660	赤褐色土器・环A	S100A 球土	12.1	3.9	5	赤切り	無調整	9C 第2
86-25	1-661	須恵器・环	S100A 球土	14	4	7	赤切り	無調整	9C 第2
86-26	1-662	須恵器・环	S100C カマド付片	13	3.2	8.4	ヘラ切り	底部ナデ	9C 第2
86-27	1-663	須恵器・环	S100C カマド付片	12.4	3.2	7.7	ヘラ切り	無調整、体部凹凸あり	9C 第2
86-28	1-664	須恵器・环	S100D カマド付片	不明	不明	7.6	ヘラ切り	無調整、底部墨書きあり「岳」	9C
86-29	1-665	須恵器・环	S100D 球土	不明	不明	6.8	ヘラ切り	無調整、底部破片、底部墨書きあり	9C
86-30	1-666	土器器・瓶	S100D カマド縁	34.1	13.8	18.6	不明	外周面より下見いケイアリ	9C 第2
86-31	1-667	土器・台・台付片	S100D カマド内	14.3	2.5	6.2	赤切り	台付片はナデあり	9C 第4
86-32	1-668	赤褐色土器・环A	S100D カマド内	15.2	6	5.7	赤切り	無調整	9C 第4
86-33	1-669	赤褐色土器・环A	S100E面	12.5	4.6	5.7	赤切り	無調整	9C 第3
86-34	1-670	赤褐色土器・环A	S100Sカマド内	13.6	4.6	5.8	赤切り	無調整	9C 第3
86-35	1-671	須恵器・环	S100S カマド内	14.1	3.9	6.9	ヘラ切り	無調整	9C 第2
86-36	1-672	土器器・台付片	S100S 坂穴上縁	18.3	8	8.2	赤切り	底部無調整、体外部東方尚ミガキ	9C 第3
86-37	1-673	赤褐色土器・环	S100S 坂穴上縁	20.4	8.9	7.5	不明	体部下端手持ちヘラケズリ	9C 第3
86-38	1-674	土器器・要	S100S 坂穴上縁ビット	14.4	12.4	8.2	木彫刻	ナタ方向にカキ目	9世紀
86-39	1-709	土器器・台付楕	S100S 坂穴上縁	17	8.4	7.2	赤切り	内面と外周1縁にヘマギキ	9C 第2
86-40	1-980	赤褐色土器・环A	S100S 坂穴上縁	12.8	4.2	6	赤切り	無調整	9C 第2
86-41	1-981	赤褐色土器・环A	S100S 坂穴上縁	12.3	4.5	5	赤切り	無調整	9C 第2
86-42	1-982	赤褐色土器・环A	S100S 坂穴上縁	12.9	4.4	5.8	赤切り	無調整	9C 第2
86-43	1-983	赤褐色土器・环A	S100S 坂穴上縁	12.3	3.7	5.7	赤切り	無調整	9C 第2
86-44	1-984	赤褐色土器・环A	S100S 坂穴上縁	14	4	5.8	赤切り	無調整	9C 第2
86-45	1-985	赤褐色土器・要	S100S カマド	不明	不明	不明	不明	体部下端手持ちヘラケズリ	9C 第2
86-46	1-986	赤褐色土器・环A	S100SA 土坑内	13.6	4.7	5.6	赤切り	無調整	9C 第2
86-47	1-987	赤褐色土器・环A	S100SA 底面	13.2	4.2	5.5	赤切り	無調整、内面炭化物付着	9C 第2
86-48	1-988	赤褐色土器・环A	S100SA 底面	13.2	4.5	5.4	赤切り	無調整	9C 第2
86-49	1-989	赤褐色土器・环A	S100SA カマド	11.6	4.4	5.4	赤切り	無調整、上縁部炭化物付着(縦明脈)	9C 第2
86-50	1-990	赤褐色土器・环A	S100SA 底面	13.2	3.9	5.7	赤切り	無調整、底面に×の印	9C 第2
86-51	1-991	赤褐色土器・环A	S100SA 底面	12.2	4.4	5.9	赤切り	無調整、上縁部炭化物付着(縦明脈)	9C 第2
86-52	1-992	赤褐色土器・环A	S100SA 底面	13	4.9	5.7	赤切り	無調整、上縁部炭化物付着(縦明脈)	9C 第2
86-53	1-993	須恵器・环	S100SA 球土	不明	不明	6	ヘラ切り	無調整、底部墨書きあり「良」	9C 第2
86-54	1-994	赤褐色土器・环A	S100SB 球土	11.3	4.7	5.9	赤切り	調査は外表面落し不規則	9C 第2
86-55	1-995	赤褐色土器・台付楕	S100SB 球土	14.1	2.5	5.5	赤切り	無調整、高台ケズリ	9C 第3
86-56	1-996	赤褐色土器・环A	S100SB 底面	13.2	3.6	5.8	赤切り	無調整、上縁部炭化物付着(縦明脈)	9C 第2
86-57	1-997	赤褐色土器・环A	S100SB 底面	12.5	4.2	5.5	赤切り	無調整、上縁部炭化物付着(縦明脈)	9C 第3
86-58	1-998	赤褐色土器・环A	S100SB 球土	12.8	4.6	5	赤切り	無調整、上縁部炭化物付着(縦明脈)	9C 第3
86-59	1-999	赤褐色土器・环A	S100SB 球土	12.3	4.2	5.3	赤切り	無調整	9C 第2
86-60	2-000	赤褐色土器・环A	S100SB 球土	12.4	4.3	6.2	赤切り	無調整、上縁部炭化物付着(縦明脈)	9C 第2
86-61	2-001	赤褐色土器・台付楕	S100SB 球土	16.5	7.4	6.4	赤切り	無調整、高台ケズリ出し	9C 第2
86-62	2-002	赤褐色土器・环	S100SB 球土	19	11.3	8.1	赤切り	体下端回転ヘラケズリ後手持ちヘラケズリ	9C 第2
86-63	2-003	範疇桂竹器	S100SC底面	幅8.2	長さ19	厚さ3mm			
86-64	2-004	須恵器・环	S100SC底面	12.6	3.1	6.5	ヘラ切り	無調整、塗面微痕あり	9C 第2

羽ノ木地区検出堅穴住居跡 出土遺物一覧表（2）

画面番号	遺物番号	種類・器種	出土遺物・部位	口径等(㎝)	器高等(㎝)	底径等(㎝)	追跡切り廻し	調査等	時期
86-65	2-005	堅底器・环	SII495底面	13	3.3	7.5	ヘラ切り	無調整。底端は生焼け	9C第2
86-66	2-006	堅底器・环	SII495底面	13.5	3.4	7.3	ヘラ切り	無調整。火ダスキあり	9C第1
86-67	2-007	堅底器・环	SII495底面	13.6	3.5	6.2	ヘラ切り	無調整	9C第1
86-68	2-008	堅底器・环	SII495底面	13.2	3.4	7.5	ヘラ切り	無調整。底部に墨書きあり「城」	9C第1
86-69	2-009	堅底器・环	SII495底面	12.5	4.1	5.7	ヘラ切り	底部軽いナザ。底部に「城」墨書きあり	9C第2
86-70	2-010	赤褐色土器・环A	SII495底面	12.2	4.3	5.4	糸切り	無調整	9C第2
86-71	2-011	赤褐色土器・环A	SII495底面	13.6	4.4	6.3	糸切り	無調整	9C第2
86-72	2-012	赤褐色土器・环A	SII495底面	12	4.5	5.3	糸切り	無調整	9C第2
86-73	2-013	赤褐色土器・环A	SII495底面	12.7	4.7	5.4	糸切り	無調整。口縁部油脂状の付着物あり（證明版）	9C第2
86-74	2-014	赤褐色土器・环A	SII495底面	12.2	3.8	6.4	糸切り	無調整。口縁部油脂状の付着物あり（證明版）	9C第2
86-75	2-015	赤褐色土器・环	SII495底面	14.2	2.3	6	不明	高さケズり出し。口縁内面に油脂状の付着物あり（證明版）	9C第3
87-76	2-016	土師器・台付环	SII496底面	14.5	6.4	6.2	糸切り	高さケズり出し。ミガキあり（内面磨擦、外面部磨擦）	9C第4
87-77	2-017	土師器・台付环	SII496底面	15	不明	不明	不明	台部剥落で不明	9C第4
87-78	2-018	堅底器・环	SII496底面	12.6	3.9	5.3	糸切り	無調整。茎ねじ痕あり	9C第4
87-79	2-019	赤褐色土器・环A	SII496底面	13	4.3	4.7	糸切り	無調整。口縁部に保状炭化物付着（證明版）	9C第4
87-80	2-020	赤褐色土器・环A	SII496底面	13.2	4.5	5.4	糸切り	無調整。内面白口縁部に保状炭化物付着（證明版）	9C第4
87-81	2-021	赤褐色土器・环A	SII496底面	13	4.6	5.1	糸切り	無調整。口縁部に保状炭化物付着（證明版）	9C第4
87-82	2-022	赤褐色土器・环A	SII496底面	14	4.6	6.7	糸切り	無調整。内面白口縁部に保状炭化物付着（證明版）	9C第4
87-83	2-023	赤褐色土器・环A	SII496底面	13.4	4.7	5.8	糸切り	無調整。内面白口縁部に保状炭化物付着（證明版）	9C第4
87-84	2-024	赤褐色土器・环A	SII496底面	13.6	4.3	5.2	糸切り	無調整	9C第4
87-85	2-025	赤褐色土器・环A	SII496底面	14.5	4.5	5.8	糸切り	無調整	9C第4
87-86	2-026	赤褐色土器・环A	SII496底面	15.7	3.5	5.7	糸切り	無調整	9C第4
87-87	2-027	赤褐色土器・环合部	SII496底面	不明	不明	8.5	不明	不明	不明
87-88	2-028	赤褐色土器・环・台付环	SII496底面	不明	不明	21.6	不明	不明、壁減盛しい。台部3カ所に窪みあり	不明
87-89	2-029	赤褐色土器・类	SII496底面	不明	不明	11.5	不明	不明、底部下手持ちハケズリあり	不明
87-90	2-030	不明石器品	SII496底面	幅3.1	長24.5	厚±3	輕石、6面削取り		
87-91	2-031	赤褐色土器・环A	SII497底面	13.3	4	5.5	糸切り	無調整	9C第4
87-92	2-032	赤褐色土器・环A	SII497底面	12	4.2	5.1	糸切り	無調整	9C第4
87-93	2-033	赤褐色土器・环A	SII497底面	12	4.2	6	糸切り	無調整	9C第4
87-94	2-034	赤褐色土器・环A	SII497底面	12	4.7	5	糸切り	無調整。底部に「災」墨書きあり	9C第4
87-95	2-035	堅底器・环	SII497底面	14.4	3.8	5	糸切り	無調整。底部に「貞」墨書きあり	9C第4
87-96	2-036	堅底器・台付环	SII497底面	16.1	6.1	5.8	糸切り	高さ削減にて	9C第4
87-97	2-037	風輪陶器	SII498底面	不明	不明	6.3	不明	筋付け高台後回旋によるケズり出し	9C第2~3
87-98	2-038	堅底器・环	SII498底面	12.8	4.3	7	糸切り	無調整	9C第2
87-99	2-039	赤褐色土器・环A	SII498底面	13.2	4.3	5.8	糸切り	無調整。口縁部に油脂状の付着物（證明版）	9C第2
87-100	2-364	古陶口盡・破片	SII610底面	不明	不明	不明	前に4条の沈繩文・古陶口底面基部	13C第3	
87-101	2-370	堅底器・台付环	SII622底面	13.7	6.7	7.7	糸切り	台付环にナザあり	9C第3
87-102	2-371	赤褐色土器・环A	SII622底面	12.4	4.5	5.4	糸切り	無調整	9C第4
87-103	2-372	赤褐色土器・环A	SII622底面	11.9	4	5.5	糸切り	無調整	9C第4
87-104	2-373	赤褐色土器・环A	SII622底面	12.6	4.6	4.3	糸切り	無調整	9C第4
87-105	3-780	堅底器・环	SII664底面	13.4	3.6	10.3	ヘラ切り	台付环にナザ	9C第1
87-106	3-781	赤褐色土器・环A	SII664底面	10.8	3.3	6	糸切り	不明	9C第1
87-107	5-089	赤褐色土器・环A	SII136底面	11.3	3.6	4.7	不明	無調整	9C第2
87-108	5-090	赤褐色土器・小形壺	SII136底面	11.5	8.3	5.7	縦止糸切り	不明	9C第2
87-109	5-297	堅底器・环	SII136底面	13	4.1	8.4	ヘラ切り	底部ナザ	9C第1
87-110	5-091	赤褐色土器・脚	SII136カマド西側ビット内	20.7	20.6	16.1	不明	底面外カマド口調整あり 外面下端手持ちケズリ	9C第1
87-111	5-298	堅底器・环	SII137床面ビット内	14	3.6	8	ヘラ切り	底部ナザ	9C第1
87-112	5-299	赤褐色土器・环A	SII137床面	11	3	5.5	糸切り	調節なし。内外面白口縁部に保状炭化物付着（證明版）	9C第1
87-113	5-300	赤褐色土器・环A	SII137床面	10	2.9	5.9	糸切り	調節なし。内外面白口縁部に保状炭化物付着（證明版）	9C第2
87-114	5-203	堅底器・把手付手彫刻	SII138D床面	不明	不明	不明	肩部、方形有孔の把手が鉢底直下に付く	9C	
87-115	5-204	堅底器・环	SII154~156底面	12.7	4	8	ヘラ切り	底部ナザ	9C第1
87-116	5-205	堅底器・台付环	SII154~156底面	13	4.3	8.4	ヘラ切り	底部ナザ	9C第1
87-117	5-206	堅底器・蓋	SII154~156底面	13.4	2.7	不明	不明	底部ナザ、肩部幅6.0cm	9C第1
87-118	5-207	土師器・小形环	SII155底面	8	3.9	3.6	不明	不明	9C第1

霧ノ本地区検出堅穴住居跡 出土遺物一覧表(3)

国調番号	遺物番号	種類・器種	出土遺物・層位	口径等(㎝)	器高等(㎝)	底径等(㎝)	底部作り難し	調整等	時期
87-119	S-208	青磁・刻花文鏡破片	SH154～1135埋土	不明	不明	不明	不明	青磁片は複数構り混入か	12C後半～13C前半
87-120	S-209	堅底器・环	SH156埋土	14	3.5	9	ヘタ切り	底部ナデ	9C第1
87-121	S-210	堅底器・环	SH156埋土	14.6	3.5	7.3	ヘタ切り	底部ナデ	9C第1
87-122	S-211	堅底器・蓋	SH156埋土	16.2	3	不明	不明	底部ナデ	9C第1
87-123	S-212	圓筒瓶	SH156床面	幅26.2	不明	不明	不明	破片。透かしあり	
87-124	S-213	堅底器・瓶	SH156埋土	11.8	不明	不明	不明		9C第1
87-125	S-214	堅底器・口1壺蓋片	SH156床面	不明	不明	不明	不明	肩部破片	不明
88-126	S-215	堅底器・环	SH157床面	12	3.1	7.5	ヘタ切り	無調整	9C第2
88-127	S-216	堅底器・鉢	SH157カマド	23.7	不明	丸底	不明	外周全体下半回転ケズリ。内面下半ヘタナタつけ	9C第2
88-128	S-217	赤褐色土器・环B	SH157床面	12.5	4.2	5.8	系切り	底面下部回転ケズリあり。口縁炭化物付着(證明用)	9C第2
88-129	S-218	赤褐色土器・环A	SH157カマド	15.1	4.3	8.7	系切り	無調整	9C第2
88-130	S-219	赤褐色土器・环A	SH157床面	12	4.4	5.3	不明	不明。もろく透落している	9C第2
88-131	S-220	赤褐色土器・直	SH157床面	15.6	2.6	7.7	系切り	無調整	9C第2
88-132	S-221	赤褐色土器・鉢	SH157床面	26.4	不明	不明	不明	外周下半に横模の手持ちケズリあり	9C第2
88-133	S-222	赤褐色土器・長柄匙	SH157カマド支脚	23	33.4	丸底	不明	丸底。壁端部。外内面口縁部のカキ目	9C第2
88-134	S-223	刀子	SH157床面	不明	不明	厚さ3mm	系切り	底部欠損	9C第2
88-135	S-224	堅底器・环	SH158床面	12.9	3.2	8.2	ヘタ切り	底部ナデ	9C第2
88-136	S-225	堅底器・蓋	SH158床面	14.5	不明	不明	不明	底部ナデ	9C第2
88-137	S-226	赤褐色土器・环A	SH158埋土	11.2	3.7	5.5	系切り	不明	9C第2
88-138	S-227	赤褐色土器・环	SH158床面	20.8	9.7	8.8	系切り	底部ナデ	9C第2
88-139	S-228	堅底器・环	SH159埋土	12.9	3.8	7.7	ヘタ切り	底部ナデ。内面内外炭化物付着(證明用)	9C第2
88-140	S-229	堅底器・蓋	SH159埋土	18.5	4.3	不明	不明	削除ケズリ。調整あり	9C第2
88-141	S-230	赤褐色土器・小型壺	SH159埋土	4.3	1.4	3.3	不明	手くね。證明用。使用印。内外炭化物付着	9C第2
88-142	S-231	赤褐色土器・直	SH159埋土	17.7	不明	不明	不明	全面化ラボ痕あり	9C第2
88-143	S-232	赤褐色土器・鉢	SH159埋土	28	17.4	12.3	不明	体部下半手持ちケズリ	9C第2
88-144	S-233	堅底器・环	SH160埋土	12.7	3.5	10	ヘタ切り	底部ナデ。底部に直線的なハラ記号あり	9C第2
88-145	S-234	堅底器・环	SH160埋土	14.2	3.5	8	ヘタ切り	底部ナデ	9C第1
88-146	S-235	赤褐色土器・环A	SH161埋土	11.5	3.9	5.3	系切り	不明。内面一部塗装状化物付着(證明用)	9C第1
88-147	S-237	堅底器・环	SH162床面	12.5	3.7	8.6	ヘタ切り	底部ナデ	9C第1
88-148	S-238	堅底器・环	SH162カマド支脚	12	3	8	ヘタ切り	底部ナデ。陶面墨書きあり判読不能	9C第1
88-149	S-239	堅底器・环	SH162床面	13.5	3.1	7.8	ヘタ切り	底部ナデ。外周一部陶面状化物付着	9C第1
88-150	S-240	堅底器・环	SH162床面	13.5	3.6	7.5	ヘタ切り	底部ナデ。外周一部陶面状化物付着	9C第1
88-151	S-241	堅底器・环	SH162埋土	14	3.5	8.1	ヘタ切り	底部ナデ。底面。無墨書き	9C第1
88-152	S-242	堅底器・环	SH162埋土	13.8	3.5	9	ヘタ切り	底部ナデ	9C第1
88-153	S-243	堅底器・环	SH162埋土	13.2	3.2	7.1	ヘタ切り	底部ナデ。底面墨書き「街」	9C第1
88-154	S-244	堅底器・环	SH162埋土	12	3.2	7.1	ヘタ切り	底部ナデ。底面墨書き「寺」	9C第2
88-155	S-245	堅底器・环	SH162埋土	13.3	3.3	7.5	ヘタ切り	底部ナデ。内面塗装状化物付着(證明用)	9C第1
88-156	S-246	堅底器・环	SH162埋土	11.8	3.4	7.8	ヘタ切り	底部ナデ。底面墨書き「寺」	9C第2
88-157	S-247	堅底器・环	SH162埋土	12.7	3.1	8	ヘタ切り	底部ナデ。外周一部。内面口縁全体漆付(證明用)	9C第2
88-158	S-248	堅底器・环	SH162埋土	12.7	3.4	7.8	ヘタ切り	底部ナデ。内外面塗装状化物付着	9C第2
88-159	S-249	堅底器・环	SH162埋土	14.9	4.1	7.4	系切り	無調整	9C第2
88-160	S-250	堅底器・蓋	SH162埋土	11.7	3.4	不明	不明	削除ケズリ調整	9C第2
88-161	S-251	堅底器・蓋	SH162カマド埋土	16.3	3.1	不明	不明	丸底部ナデ	9C第1
88-162	S-252	堅底器・蓋	SH162埋土	12.6	2.9	不明	不明	削部ケズリ調整	9C第1
88-163	S-253	堅底器・蓋	SH162埋土	14.1	2.2	不明	不明	底部ナデ	9C第1
88-164	S-254	堅底器・蓋	SH162床面	14.8	3	不明	不明	内面黑色処理	9C第2
88-165	S-255	赤褐色土器・环B	SH162埋土	11.9	4.5	6.1	ヘタ切り	底部手持ちヘタケズリ体下端回転ヘタケズリ	9C第1
88-166	S-256	赤褐色土器・环A	SH162カマド西ピット埋土	11	3.7	5.7	不明	1口面内外面塗装状化物付着(證明用)	9C第1
88-167	S-257	赤褐色土器・环A	SH162埋土	9.7	3	6	ヘタ切り	無調整、内面一部塗装状化物付着	9C第2
88-168	S-258	赤褐色土器・盖	SH162床面	15.2	3.8	不明	不明	(要証のため)	9C第2
88-169	S-258	跳鼠晶(不明)	SH162床面	幅2.3	長さ14.4	厚さ2mm	不明	板状板品	
88-170	S-259	跳鼠	SH162埋土	不明	不明	厚さ5mm	不明	丸底部と掌指欠損	
88-171	S-260	跳鼠	SH162埋土	不明	不明	厚さ5mm	不明	丸底部と掌指欠損	
88-172	S-261	堅底器・环	SH163床面	13.4	3.5	7.5	ヘタ切り	底部ナデ	9C第1
88-173	S-262	堅底器・环	SH163埋土	12.3	3.3	7	ヘタ切り	底部ナデ	9C第2
88-174	S-263	堅底器・环	SH163埋土	12.8	3.2	7	ヘタ切り	底部ナデ	9C第2

霧ノ本地区検出堅穴住居跡 出土遺物一覧表(4)

画面番号	遺物番号	種類・器種	出土遺構・層位	口径等(㎝)	高さ等(㎝)	底径等(㎝)	追加寸法等	調査等	時期
88-175	S-264	須恵器・环	SH163埋土	13.3	3.6	6.5	系切り	無調整。底部墨書き有り「寺」	9C第1
88-176	S-265	須恵器・蓋	SH163埋土	14.5	3.7	不明	ハラ切り	底部ケズリ調整あり。後に転用	9C第1
88-177	S-266	須恵器・蓋	SH163埋土	14.9	3.2	不明	ハラ切り	底部ケズリ調整あり	9C第1
88-178	S-267	赤褐色土器・环B	SH163床面	11.9	4.2	5.2	系切り	体外ケズリ調整あり。内部焼状化物付着	9C第2
88-179	S-268	赤褐色土器・环B	SH163床面	11.4	4.4	6	系切り	体外ケズリ調整あり。内部焼状化物付着	9C第2
88-180	S-269	赤褐色土器・环A	SH163埋土	14.3	4.1	7.9	系切り	無調整。内部焼状化物付着(銀明細)	9C第2
88-181	S-270	赤褐色土器・环A	SH163埋土	12.4	3.9	5.4	系切り	無調整	9C第2
88-182	S-271	石器(礫型)	SH163埋土	報2.3	長さ5.9	厚さ8mm		縄文時代	縄文時代
89-183	S-272	須恵器・环	SH164床面	13.5	4.4	8	ハラ切り	底部ナデ。内外面一部擦付着	9C第1
89-184	S-273	須恵器・古付环	SH164埋土	16.4	6.8	9.4	ハラ切り	底部ナデ。内面一部擦付着	9C第1
89-185	S-274	石器(礫型)	SH164埋土	報6	長さ24.4	厚さ6mm		縄文時代	縄文時代
89-186	S-275	土師器・环	SH165床面	15.7	4.3	6.3	不明	丸底。内面黒色処理外面手跡ちケズリ。ミガキ	8C前半
89-187	S-276	土師器・环	SH165床面	15.7	不明	不明	不明	丸底。内面黒色処理外面ミガキ。口唇部ナデ	8C前半
89-188	S-277	土師器・环	SH165床面	14.9	5	6	不明	丸底。内面黒色処理外面のため調整せり	8C前半
89-189	S-278	土師器・环	SH165埋土	10.2	2.4	4.6	不明	内面直。底面をナデ焼状化物付着(銀明細)	8C前半
89-190	S-279	土師器・环	SH165埋土	9	3.5	5	不明	手くね。非クロ。素内黒外面手跡ちケズリ	8C前半
89-191	S-280	土師器・环	SH165床面	10	4.4	4.3	不明	手くね。非クロ。素内黒内面手跡ミガキ	8C前半
89-192	S-281	土師器・小皿	SH165カマド付近	不明	不明	不明	不明	丸底。肩部に孔。部分的にミガキ	8C前半
89-193	S-282	土師器・小形鉢	SH165床面	12.7	8	7	木表面	素クロ。内面こまかいミガキ外面幅のみミガキ	8C前半
89-194	S-283	土師器・小形皿	SH165カマド支脚	14.3	11.5	5	不明	素クロ。内面横。剥めミガキ外面幅方ミガキ	8C前半
89-195	S-284	土師器・类	SH165カマド北ソダ	18.7	不明	不明	不明	口・彌振はナデ。内面ナデ外面上部幅せりキド。下はミガキ	8C前半
89-196	S-285	土師器・小形皿	SH165床面	19.7	不明	不明	不明	内面ていねいなナデ外面ミガキ。縁状瓦状物付着	8C前半
89-197	S-286	土師器・类	SH165埋土	不明	不明	7.5	木表面	内面ヘラナデ。外面上ミガキ。	8C前半
89-198	S-287	土師器・类	SH165カマド前	18.1	29.6	8.9	木表面	頭に一段接あり横ナデ外面ミガキ。内面ナデ	8C前半
89-199	S-288	土師器・类	SH165カマド北ソダ	20.2	30.3	9.2	木表面	頭に一段接あり。外面上ミガキ内面横ナデ	8C前半
89-200	S-289	土師器・壺破片	SH165床面	不明	不明	11.9	狭伏木葉瓶	内面ナデ	8C前半
89-201	S-290	土師器・壺残片	SH165床面	12.2	不明	不明	不明	頭に2条の沈凹による段外露ミガキ。内面横ナデ	8C前半
89-202	S-291	須恵器・环	SH165埋土	13.5	3.9	9.5	ハラ切り	底部ナデ。内面漆付着	9C第2
89-203	S-292	須恵器・环破片	SH165床面	不明	不明	7.4	不明	底部削痕ヘラケズリ。内面ナデ	8C第2
89-204	S-293	須恵器・壺口縁部	SH165床面	20.4	不明	不明			8C第2
89-205	S-294	灰烬	SH165灰面土坑	不明	不明	厚さ7mm	先端部と茎部欠損		
89-206	S-295	刀子	SH165床面	不明	不明	厚さ3mm	刃部と茎部欠損		
89-207	S-296	不明鉄製品	SH165床面	不明	不明	厚さ5mm	板状製品		
89-208	S-297	須恵器・环	SH165床面	11.8	4.5	6.2	ハラ切り	不明	9C第2
89-209	S-298	須恵器・环	SH165床面	12.7	3.3	5.8	ハラ切り	底部ナデあり	9C第2
89-210	S-297	須恵器・环	SH165床面	16.4	3	6.8	ハラ切り	不明	9C第2
89-211	S-298	須恵器・环	SH165床面	13.4	3.5	9	ハラ切り	底部ナデあり	9C第2
89-212	S-299	赤褐色土器・环B	SH169床面	11.6	4	5.8	赤切り	無調整	9C第1
89-213	S-300	赤褐色土器・环A	SH169床面	13.5	3.2	6.1	赤切り	無調整。底部墨書き「伊」	9C第2
89-214	S-301	赤褐色土器・小型环	SH169カマド周縁土坑内	5.7	1.5	4.3	不明	ナデあり。保状化物付着(銀明細)	9C第2
89-215	S-302	壺	SH169埋土	不明	不明	不明			
89-216	S-303	斐イブ羽口	SH169埋土	報6.5	不明	不明			
89-217	S-314	須恵器・环	SH169埋土	12.4	3.2	7.4	ハラ切り	無調整	9C第2
89-218	S-317	須恵器・环	SH169埋土	13.6	3.5	6.8	ハラ切り	無調整	9C第1
89-219	S-219	須恵器・类	SH169埋土	21	48.1	不明	丸底	口縁横ナデ。頭部-外面カキ日	9C第2
89-220	S-287	縄文土器片	SH169床面	不明	不明	不明	不明	破片	縄文後期
89-221	S-288	縄文土器片	SH169床面	不明	不明	不明	不明	破片	縄文後期
89-222	S-289	縄文土器片	SH169床面	不明	不明	不明	不明	破片	縄文後期
89-223	S-290	縄文土器片	SH169床面	不明	不明	不明	不明	破片	縄文後期
89-224	S-291	縄文土器片	SH169床面	不明	不明	不明	不明	破片	縄文後期
89-225	S-292	縄文土器片	SH169床面	不明	不明	不明	不明	破片	縄文後期
89-226	S-293	縄文土器片	SH169床面	不明	不明	不明	不明	破片	縄文後期
89-227	S-294	削制石斧	SH169床面	報3.4	長さ6.8	厚さ1.3cm	刃部破損		縄文後期
89-228	S-295	錘	SH169床面	報2.9	長さ4.8	厚さ1.1cm			縄文後期

羽ノ木地区検出堅穴住居跡 出土遺物一覧表（5）

国名 番号	遺物 番号	種類・器種	出土遺物・層位	口径等 (cm)	高さ等 (cm)	底径等 (cm)	追跡等	調 整 等	時期
89-229 3-296	石門	SII835陶面	幅6.8	長さ13.7	厚さ4.4cm				
89-230 3-297	磨り石	SII835陶面	幅6.3	長さ6.5	厚さ5.2cm				
90-231 6-057	赤褐色土器・环A	SII321陶土下層	13.9	4.9	4.7	系切り	無調整	9C 第3	
90-232 6-058	赤褐色土器・环A	SII321陶土	12.1	4	5.9	系切り	無調整	9C 第3	
90-233 6-059	赤褐色土器・环A	SII321カマド	11.6	3.9	5.7	系切り	無調整	9C 第3	
90-234 6-060	赤褐色土器・环A	SII321陶土	13.3	4.5	5.3	系切り	無調整	9C 第3	
90-235 6-061	赤褐色土器・环A	SII321陶土下層	12.4	4.6	5.8	系切り	無調整	9C 第3	
90-236 6-062	赤褐色土器・环A	SII321陶面	12	4.2	4.3	系切り	無調整	9C 第3	
90-237 6-063	赤褐色土器・环A	SII321陶土上層	12	4.3	6	系切り	無調整。体部墨書き「田中」	9C 第3	
90-238 6-064	赤褐色土器・环A	SII321陶土下層	10.4	3.5	5.6	系切り	無調整	9C 第3	
90-239 6-065	赤褐色土器・壺	SII321カマド被破痕材	22	不明	不明	不明	外面上半斜方向のケズリ内面体部上半 から縦き裂き目	9C 第3	
90-240 6-066	刀	SII321陶土	幅2.5	不明	厚さ5mm		刀頭破片		
90-241 6-067	刀子	SII321陶土	幅1	不明	厚さ2.5mm		茎部欠損		
90-242 6-068	砾石	SII321陶土	幅5.7	長さ4.1	厚さ5.7		凝灰岩性、上部をツマミ状に加工		
90-243 6-069	砾石	SII321陶土	幅3.8	長さ7.9	厚さ3.4		凝灰岩性。4面を面取り		
90-244 6-070	砾石	SII321陶土	幅4.9	長さ12.1	厚さ2.3		塊状。片面の面に擦痕多数あり		
90-245 6-071	赤褐色土器・环A	SII322陶土	12.8	4.9	4.8	系切り	無調整	9C 第4	
90-246 6-072	赤褐色土器・环A	SII322陶土	11.5	4.1	3.9	系切り	無調整	9C 第4	
90-247 6-073	土器	SII323陶土	不明	不明	5.5	系切り	無調整、内面ニギキ、黒色処理	9C 第4	
90-248 6-074	赤褐色土器・环A	SII323カマド支撑	12.8	4.3	5.4	系切り	無調整内面底部体下平保状況化物付着	9C 第4	
90-249 6-075	赤褐色土器・环A	SII323床面	12.5	4.2	5.9	系切り	無調整	9C 第4	
90-250 6-076	赤褐色土器・环A	SII323床面	12.6	4	5.7	系切り	無調整	9C 第4	
90-251 6-077	赤褐色土器・壺	SII323床面	19	不明	不明	不明	外面部から斜下平緩のカキ目内面下平 緩のカキ目殻心	9C 第4	
90-252 6-078	赤褐色土器・壺	SII323陶土	16.7	不明	不明	不明	外面部から斜下平緩のカキ目内面下平 緩のカキ目殻心	9C 第4	
90-253 6-079	赤褐色土器・壺	SII323床面	20.8	不明	不明	不明	外面部から斜下平緩のカキ目内面下平 緩のカキ目殻心	9C 第4	
90-254 6-080	フィゴボウ1	SII323カマド支撑	幅6.6	長さ17.2					
90-255 6-081	赤褐色土器・环A	SII325陶土	13.8	4.5	5.9	系切り	無調整	9C 第4	
90-256 6-082	服飾器・环	SII326陶土	13.5	3.5	8.3	ハラ切り	底部ナデ	9C 第1	
90-257 6-083	服飾器・环	SII326陶土	12	3.4	8	ハラ切り	底部ナデ	9C 第2	
90-258 6-084	服飾器・革	SII326陶土	14.1	3	不明	不明	天面部ケズリ	9C 第1	
90-259 6-085	服飾器・环	SII327陶土	12	2.8	7.6	ハラ切り	底部ナデ	9C 第2	
90-260 6-086	赤褐色土器・壺	SII327陶土	21.4	不明	不明	不明	外面部上半ナデ。下半から底部手持ち ナデ。内面ナデ。カキ目	9C 第2	
90-261 6-087	服飾器・台付环	SII328陶土	不明	不明	6.8	ハラ切り	無調整。下端ケズリ	9C 第2	
90-262 6-088	赤褐色土器・环A	SII329陶土	13.3	4.4	5.5	系切り	無調整	9C 第2	
90-263 6-089	赤褐色土器・环A	SII329陶土	11.9	4.6	4.7	系切り	無調整	9C 第2	
90-264 6-090	赤褐色土器・环A	SII329陶土	15.5	4.3	6.8	系切り	無調整	9C 第2	
90-265 6-091	赤褐色土器・壺	SII329床面	21	不明	不明	不明	内外面口縁部から体上半ナデ	9C 第2	
90-266 6-092	不明鉄製品	SII329陶土	不明	不明	厚さ5mm				
90-267 6-093	不明鉄製品	SII329陶土	不明	不明					
90-268 6-094	赤褐色土器・环B	SII330陶土	10.7	3.5	5.6	系切り	底部から体下回転ヘラケズリ	9C 第2	
90-269 6-095	服飾器・环	SII331陶土	13.2	3.7	7.5	系切り	無調整	9C 第1	
90-270 6-096	服飾器・环	SII331床面	14.5	3.8	8.5	ハラ切り	底部ナデ	9C 第1	
90-271 6-097	土器	SII331カマド前床面	13.2	不明	不明	不明	内外面ナデ	9C 第1	
90-272 6-098	土器	SII331カマド前床面	13.3	不明	不明	不明	外面部のカキ目。内面体上半カキ目。 上口ナデ	9C 第1	
90-273 6-099	赤褐色土器・环B	SII331陶土	11.1	3.8	5.6	系切り	底部から体下回転ヘラケズリ外縁付 着(證明用)	9C 第1	
90-274 6-100	不明鉄製品	SII331	不明	不明	不明				
90-275 6-101	石器	SII331	幅5	長さ5.4	厚さ5.7mm			縄文時代	
90-276 6-102	丸瓦	SII331	幅15.7	長さ34.4	厚さ1.7				
90-277 6-103	丸瓦	SII331	幅16.1	長さ34.5	厚さ2.0				
90-278 6-818	服飾器・台付环	SII468床面	14.2	6.6	7	ハラ切り	無調整	9C 第3	
90-279 6-819	赤褐色土器・环A	SII468床面	14.5	6.3	5.5	系切り	無調整	9C 第3	
90-280 6-820	赤褐色土器・环A	SII469陶土	15.9	5.7	7.1	系切り	無調整。	9C 第3	
90-281 6-824	服飾器・台付环	SII469陶土	11.8	4	7	系切り	底部ナデ	9C 第1	
90-282 6-825	土器	SII469陶土	17.7	幅21.8	9	茎状木葉痕	外面部口縁ナデ。体下カキ目内面口縁ナ ドヒン・横・斜カキ目	9C 第1	
90-283 6-826	土器	SII469陶土	不明	不明	9	茎状木葉痕	外面部カキ目。内面横・斜めのカキ目	9C 第1	
90-284 6-827	服飾器・环	SII469陶土	14.5	3.3	10	ハラ切り	底部ナデ	8C 第4	
90-285 6-828	服飾器・台付环	SII469陶土	14.5	3.8	8	ハラ切り	底部ナデ	8C 第4	
91-286 6-852	灰釉陶器・蓋	SII975陶土	10	不明	不明	不明	不明	9C 第2	
91-287 6-857	服飾器・环	SII977陶土上層	不明	不明	9.4	ハラ切り	底部手持ちケズリ	8C 第2	
91-288 6-938	服飾器・环	SII977陶土	不明	不明	8.2	ハラ切り	底部ナデ	9C 第1	

羽ノ木地区検出堅穴住居跡 出土遺物一覧表（6）

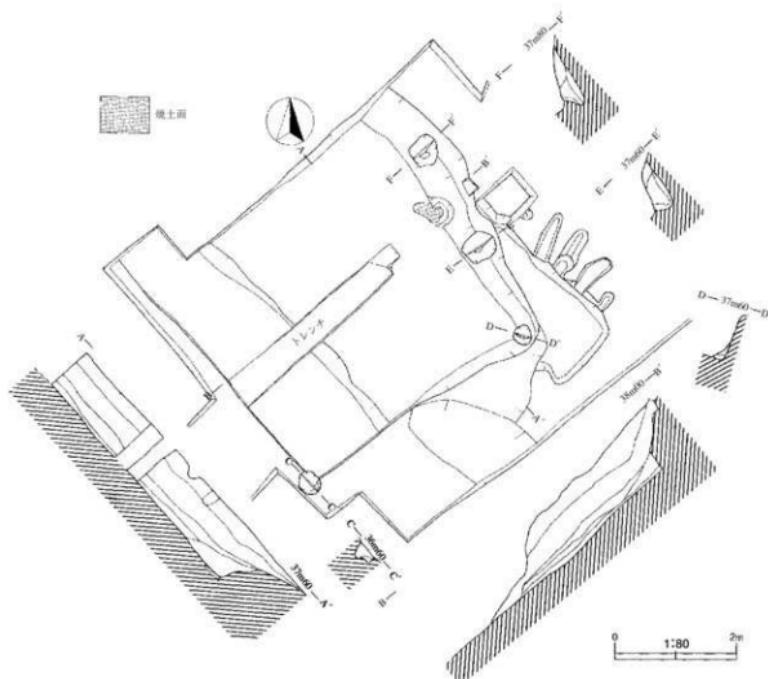
画面番号	遺物番号	種類・器種	出土遺物・層位	口径等(㎝)	器高等(㎝)	底径等(㎝)	追跡切り廻し	調整等	時期
91-289	8-959	灰陶器・台付耳	SH1977堆土上層	不明	不明	8.1	ヘラ切り	縁線にナデ、底部外側「鏡」に転用	9C第1
91-290	8-960	赤褐色土器・小彫环	SH1977堆土	8.2	1.7	5.5	ヘラ切り	底部ナデ	9C第2
91-291	8-961	赤褐色土器・耳付	SH1977堆土堆積土	10.8	3.9	6.2	不明	底部から全体下端ケズリ	9C第2
91-292	8-962	瓦瓦	SH1977堆土上層	報6.7	不明	不明			
91-293	8-963	灰陶器・环	SH1978堆土	不明	不明	7.6	系切り	底部ケズリ	8C第2
91-294	8-964	灰陶器・环	SH1978堆土一括	13.2	3	7	ヘラ切り	ナデ、内外に堅状炭化物付着「鏡明鏡」に転用	9C第2
91-295	8-965	灰陶器・环	SH1978カマド前面床面	14.4	3.5	7.8	ヘラ切り	底部ナデ	9C第1
91-296	8-966	灰陶器・蓋	SH1978床面	16.4	4.6	不明	不明	天端部ヘラ切後ナデ、内面「鏡」に転用	9C第1
91-297	8-967	灰陶器・蓋	SH1978堆土	13.8	3.4	不明	不明	天端部ヘラ切後ナデ、内面「鏡」惡善あり	9C第2
91-298	8-968	赤褐色土器・小彫环	SH1978堆土下層	5.3	1.8	1.6	ヘラ切り	底部ナデ、内外に堅状炭化物付着（鏡明鏡）	9C第2
91-299	8-969	赤褐色土器・小彫环	SH1978堆土下層	8.6	1.6	6	ヘラ切り	底部ナデ、内外に堅状炭化物付着（鏡明鏡）	9C第2
91-300	8-970	赤褐色土器・小彫环	SH1978カマド前面床面	8.6	1.7	6.8	ヘラ切り	底部ナデ	9C第2
91-301	8-971	赤褐色土器・小彫环	SH1978カマド前面堆土	8.8	2	5.8	ヘラ切り	底部ナデ、内外に堅状炭化物付着（鏡明鏡）	9C第2
91-302	8-972	赤褐色土器・小彫环	SH1978カマド前面床面	9	1.7	1.7	ヘラ切り	底部ナデ	9C第2
91-303	8-973	赤褐色土器・小彫环	SH1978カマド	9	1.6	5.4	ヘラ切り	底部ナデ、内外に堅状炭化物付着（鏡明鏡）	9C第2
91-304	8-974	赤褐色土器・小彫环	SH1978カマド	9	1.6	6.2	ヘラ切り	底部ナデ、内外に堅状炭化物付着（鏡明鏡）	9C第2
91-305	8-975	赤褐色土器・小彫环	SH1978カマド	9	2.2	5.6	ヘラ切り	底部ナデ、内外に堅状炭化物付着（鏡明鏡）	9C第2
91-306	8-976	赤褐色土器・小彫环	SH1978カマド	9	1.6	5.8	ヘラ切り	底部ナデ、内外に堅状炭化物付着（鏡明鏡）	9C第2
91-307	8-977	赤褐色土器・小彫环	SH1978カマド前面	9.2	1.7	6.8	ヘラ切り	底部ナデ、内外に堅状炭化物付着（鏡明鏡）	9C第2
91-308	8-978	赤褐色土器・小彫环	SH1978カマド前面床面	9.4	1.6	5.6	ヘラ切り	底部ナデ、内外に堅状炭化物付着（鏡明鏡）	9C第2
91-309	8-979	赤褐色土器・小彫环	SH1978堆土下層面	9.4	1.7	6	ヘラ切り	底部ナデ	9C第2
91-310	8-980	赤褐色土器・小彫环	SH1978床面	9.4	1.7	5.4	ヘラ切り	底部ナデ	9C第2
91-311	8-981	赤褐色土器・小彫环	SH1978カマド前面堆土上層	9.4	1.9	6.2	ヘラ切り	底部ナデ、内外に堅状炭化物付着（鏡明鏡）	9C第2
91-312	8-982	赤褐色土器・小彫环	SH1978カマド前面堆土上層	9.4	1.9	4.6	ヘラ切り	底部ナデ、内外に堅状炭化物付着	9C第2
91-313	8-983	赤褐色土器・小彫环	SH1978堆土一括	9.9	1.8	6.2	ヘラ切り	底部ナデ、内外に堅状炭化物付着（鏡明鏡）	9C第2
91-314	8-984	赤褐色土器・小彫环	SH1978カマド前面堆土上層	8.8	2.1	4.8	ヘラ切り	底部ナデ、内外に堅状炭化物付着、下端スリグ調整	9C第2
91-315	8-985	赤褐色土器・耳付	SH1978堆土上層	11.8	3	5.6	静止系切り	体ハラケズリ	9C第2
91-316	8-986	赤褐色土器・耳付	SH1978カマド	13.2	3.6	7.6	系切り	体ハラケズリ	9C第2
91-317	8-987	赤褐色土器・耳付	SH1978堆土上層	16	6.5	6	不明	底部から全体下端ケズリ	9C第2
91-318	8-988	赤褐色土器・台付耳	SH1978堆土一括	15.8	8.7	9.4	不明	体ハラケズリ調整台縁ナデ	9C第2
91-319	8-989	土器部・瓶	SH1978カマド前面床面	15	7.1	6.7	不明	底部全面回転ケズリ下端ケズリ調整、漆器看	9C第2
91-320	8-990	フィブリル	SH1978床面	不明	不明	厚さ2.3			
91-321	8-991	薄破片	SH1978カマド前面崩壊土	不明	不明	厚さ5.9cm			
91-322	8-992	薄破片	SH1978堆土上層	報13.5	不明	厚さ5.6			
91-323	8-993	薄破片	SH1978床面	13.5	不明	厚さ6.9			
91-324	8-994	薄破片	SH1978堆土上層	不明	不明	不明			
91-325	8-995	薄	SH1978カマド底部	幅14.1	長さ28.6	厚さ6.8			
91-326	8-996	灰陶器・耳	SH1979カマド一括	12.6	4.3	6.8	ヘラ切り	底部ナデ、内面に堅状炭化物付着	9C第2
91-327	8-997	灰陶器・耳	SH1979カマド	12.8	4.2	7.5	ヘラ切り	底部ナデ	9C第2
91-328	8-998	灰陶器・耳	SH1979床面	13.4	9.2	3.6	ヘラ切り	底部ナデ	9C第1
91-329	8-999	灰陶器・耳	SH1979床面	13.8	8.8	3.7	ヘラ切り	底部ナデ	9C第1
91-330	9-000	灰陶器・台付耳	SH1979堆土上層	11	4.2	6.7	ヘラ切り	底部ナデ、台脇り付け後縁にナデ	9C第2
91-331	9-001	灰陶器・台付耳	SH1979堆土上層	13.6	4.7	8	ヘラ切り	底部ナデ	9C第2
91-332	9-002	灰陶器・台付耳	SH1979カマド一括	14	5.1	7.8	ヘラ切り	底部ナデ	9C第1
91-333	9-003	灰陶器・台付耳	SH1979カマド一括	12.8	4.6	7.6	ヘラ切り	底部ナデ、内面堅状炭化物付着、「鏡明鏡」と「鉢」に転用	9C第2
91-334	9-004	土器部・甕	SH1979カマド支撑	13	13.2	8.2	ヘラ切り	底部ナデ、漆クロボト端手持ちケズリ調整	9C第1
91-335	9-005	土器部・甕	SH1979カマド一括	11	34.6	8	ヘラ切り	外面組立台口。内面漆カラ口	9C第1
91-336	9-006	平瓦	SH1979	不明	不明	不明	一枚作り		8C~

## 8 工房跡（第92・94図、図版30）

工房跡としては、竪穴状工房跡が2棟検出されている。地区東部の第81次調査でSI1697竪穴状工房跡が、中央部東側の第91次調査でSI1976竪穴状工房跡が検出されており、ともにカマドを伴わず床面に炉跡を伴い、住居ではなく工房と判断される竪穴状の遺構となっている。

### 1) SI1697竪穴状工房跡（第92・94図、図版30）

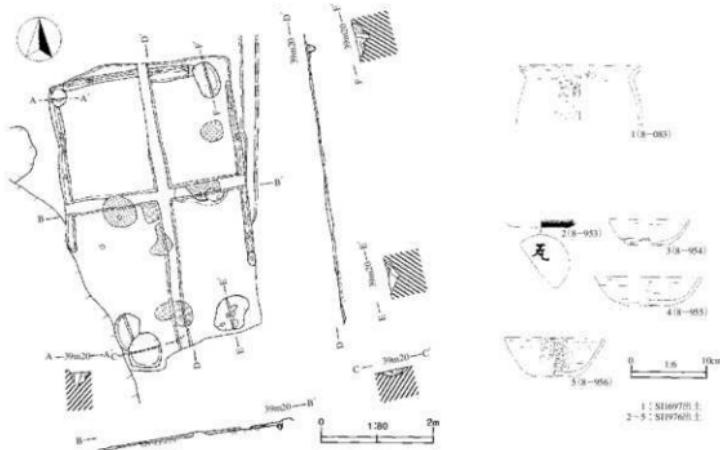
地区東部の第81次調査において、SG1206沼地跡東岸部の斜面中央平場の地山粘土層面で検出された。竪穴は長辺4.6m×短辺4.5mの方形を呈し、南壁が西で約39度南に振れる。北東側斜面を掘り込み平坦面を造り出している。壁高は東壁で1.0mを計るが、本来斜面下方で壁高が低い西壁については削平によりほとんど遺存していない。南東隅と南西隅に柱掘り方を伴う。東壁中央にも2基の柱掘り方を伴い、その柱掘り方間の壁を掘り込むような形で炉跡と考えられる焼土面が検出される。竪穴埋土からは鉄滓が出土するが、鍛造銅片は出土しないことから、精錬などの鉄生産に関わる工房跡と考えられる。SI1696と重複しこれより古い。出土遺物として埋土より赤褐色土器甕が出土している。方位と出土遺物から、8世紀末～9世紀第1四半期の遺構と考えられる。



第92図 SI1697竪穴状工房跡

## 2) SI1976豎穴状工房跡（第93・94図）

中央部東側の第91次調査において、地区中央第8層褐色土層面で検出された。豎穴は東西3.3m×南北5.2mの長方形を呈し、西壁が北で約9度西に振れる。壁高は高い部分で10cmを計るが、全体的に削平を受け浅くなっている。壁際に周溝と壁材と思われる小柱穴が検出される。カマドを伴わず、床面に6箇所の一部還元化した焼土面が検出されることから、鍛冶工房跡と考えられる。方位と出土遺物から、9世紀第2四半期の遺構と考えられる。



第93図 SI1976豎穴状工房跡

第94図 SI1697・SI1976豎穴状工房跡出土遺物

豎穴状工房跡出土遺物一覧表

登録番号	遺物番号	種類・基準	出土遺構・層位	1:100 横幅(cm)	層高 (cm)	底径 (cm)	底部切り離し	調査等	年代
94-1	8-083	赤褐色土器・壺	SI1697埋土	15.3	8.1~	不明		1:100部内外面ナメ調整、外面部～脚部クロ用カキ目調査、体部上半手斧削り調査強度調査、底部内面カキ目調査	9C第1
94-2	8-953	咀匙器・坪	SI1976北面			7.4	ヘラ切り	ナメ調整	9C第2
94-3	8-954	赤褐色土器・坪B	SI1976北東隅柱内	10.9	3.6	5.4	系切り	底部無調査体部下端カズリ調査	9C第2
94-4	8-955	赤褐色土器・坪A	SI1976北面	14.6	2.8	5.6	系切り	無調査	9C第2
94-5	8-956	土加器・塊	SI1976北東隅柱内	13.4	5.2	6	系切り	底部無調査、外面部上半と内面ミガキ調査、内面黒色処理	9C第2~第3

## 9 井戸跡（第95～110図、図版33～35）

井戸跡については、地区全体で32基検出されており、古代の井戸跡が7基、中世の井戸跡が23基、時期不明が2基検出されている。検出位置については、地区中央建物群に付属する大型で深いSE406や、地区西部の傾斜面下の湧水地点付近に設置されたSE626、SE928、SE929を除き、多くが地下水を得やすいSG463沼地跡やSG1206沼地跡の岸辺付近に位置している。

古代の井戸跡は地区北部のSG1206沼地跡北岸部に4基が集中する他は、地区中央部にSE406、地区南東部にSE1176、地区北西部にSE621と分散しており、機能した時期も異なっている。地区中央とその周辺に限ってみれば、同時期に1基程度しか使用されなかつたと推定される。これは建物群からなる中心施設が存在し、居住域とは異なり施設に付属する井戸として設置され、その利用に管理と規制が存在したという地区的性格と特徴を反映していると考えられる。それに対し、SG1206沼地跡北岸部では重複または近接した位置で検出されており、居住域に伴う井戸として継続的に作り替えが行われ、利用されていたと考えられる。

井戸の構造としては、井戸に覆屋を伴うものが前述のSE406とSE1176の2基のみであり、ともに施設に付属する主要な井戸であることを裏付けている。井側の構造については、SE626の井籠組式や抜き取りにより不明なSE406除き他は隅柱横桟式である。構造からはSG463沼地跡北西岸祭祀遺構に近接するSE626の利用目的が特殊であった可能性が考えられる。

中世の井戸跡は検出数も多く、SG1206沼地跡北岸部、SG1206沼地跡南岸部、SG463沼地跡南岸部、地区北西部と検出位置にもまとまりを持つ。その付近には中世の縦柱建物跡が検出されており、1棟ないしは2棟の建物と井戸のセット関係が把握される。中世段階では、建物ごとに井戸を持ち、短期間で作り替えを行っていたと考えられる。これらは、古代と中世の井戸利用のあり方の差異もあるが、中世の鶴ノ木本地区には大規模な施設が存在せず、居住域として利用されていたという地区全体の利用状況の変化と差異を反映するものといえる。

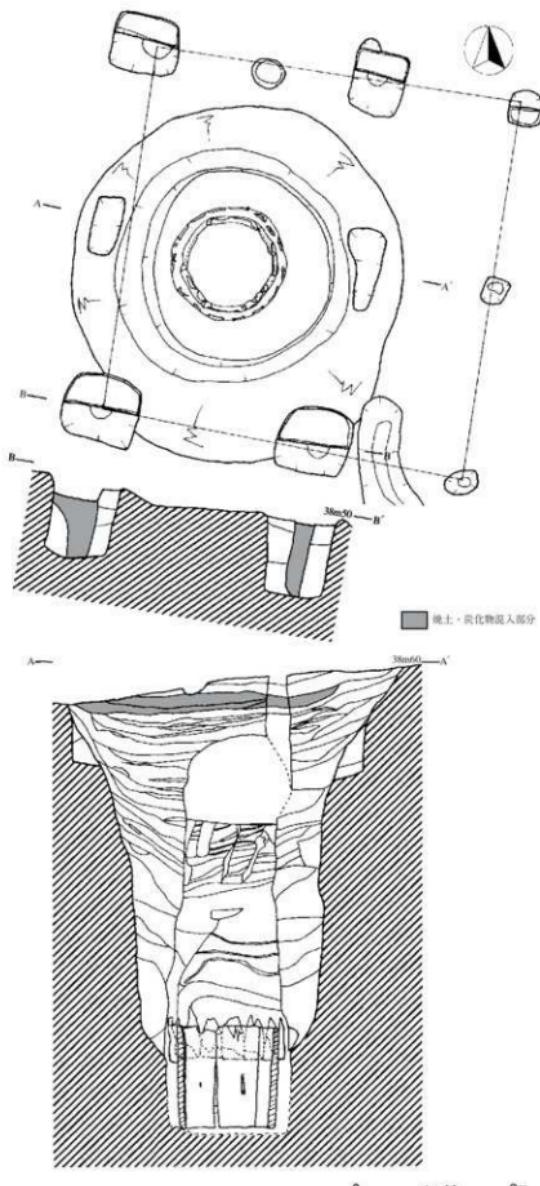
井戸の構造としては、覆い屋を伴うではなく、井側が確認されるものについては、全て隅柱横桟式またはその可能性が高い井戸となっている。

以下、規模が大きく、構造や出土遺物にも特徴を持つ、各時期の主要な井戸跡であるSE406とSE1176、SE621とSE1171については、個別に報告し、その他の井戸跡については、遺構および遺物集成図と一覧表に示した。

### 1) SE406井戸跡（第95・97・102・103図、図版33・42～44）

地区中央部の第25次調査の地山粘土層面で検出された。位置関係から地区中央建物群に付属する井戸と判断される。規模は、掘り方は上面で直径約4.5mの円形で、深さ約1.5m下で直径約2.2mにすばり、深さ2.7mで井筒の上面に達する。井戸の深さは検出面から約5.5mである。井筒は、杉の厚い板を手斧で弧状に削り出した厚さ10cm、幅52～67cm、高さ1.23mの計6枚の部材で円形に組まれている。井筒の内径は1.05mである。それぞれの材は、はずれないように側面の上・中・下段に深さ約6cm前後の柄穴を穿ち、長さ約13cmの太柄で接合されている。井筒底面には埠、瓦、石が約三段に、敷き並べられている。さらに、井筒の外面に接して、厚さ約9cm、幅約28cmの井側材が検出されている。井側は本来、地上まで伸びていたものと考えられるが、腐食のため高さ50cm前後のみが残存している。

地上部には、井戸覆屋となる桁行2間（2.7m+2.7m）×梁間1間（2.7m）で東庇付（1.8m）の南北棟掘立柱建物跡が検出されている。建物方位は南北桁行が北で約8度東に振れる。柱掘り方柱痕跡



第95図 SE406井戸跡



第96図 鶴ノ木地区検出井戸跡位置図

には、焼土炭化物が混入する。また、その建物範囲内の井戸掘り方周辺からは敷石造構と考えられる拳大の川原石群が検出されたことから、井側周辺は玉石敷きであったと判断される。

出土遺物のうち土器としては、井戸跡上面覆土から、9世紀第1四半期～第2四半期に位置付けられる赤褐色土器壺2点と須恵器壺3点・壺1点が出土している。井戸埋土中位からは須恵

器壺3点・蓋1点が出土し、壺類は8世紀第4四半期～9世紀第1四半期に位置付けられる。それら年代比定資料から、井戸は8世紀末から9世紀第1四半期までに埋め立てられ、機能を停止し、その後浅いくぼみとなっていた周辺が9世紀第2四半期に整地されたと考えられる。井戸埋土上位には焼土炭化物が多量に混入している。井筒内からは8世紀第2四半期に位置付けられる手づくね土器や小型の特殊な須恵器壺が出土しており、井戸機能段階での祭祀行為に伴い廃棄された可能性が高い。

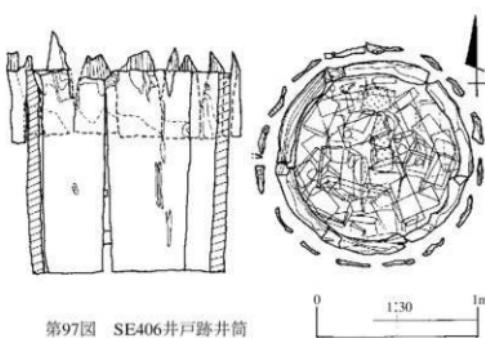
瓦は井戸埋土、底面より平瓦、丸瓦が130点出土した。丸瓦のうち秋田城跡出土例から8世紀末以前の年代に位置付けられている有段丸瓦は、埋土中位より出土している。瓦の詳細については、別に第3節の2項で述べる。

塼については、井戸底面より完形39点、破片27点が出土している。底面に三段敷きにされた最下段から「人物」および「龍」の絵を墨書きした墨書塼が2点出土している。井戸完成時の祭祀行為に伴い設置されたものと考えられる。龍の絵は上半分に顔は右向き、頭部に三角状の突起、胴部は屈曲し列点で鱗を表現し、胴部下部には足状のものが見られるが判然としない。また、下半部にも墨痕が認められ、戯れている鳥か花のようにも見えるが詳細不明である。人物絵は中央に服を纏って立ち、顔は不鮮明で左・右或いは正面と見方によっていざれを見て見るよりも取れる。足は左右に小さく開き、つま先は二つに割れている。体の左、下方から矢をつがえた六張りの弓矢が狙い、そのうち三本は頭、腹、膝のあたりを貫通して突き刺さった状態で描いている。この二枚の塼に描かれた絵は、龍は水の神を意味し、人物はつま先の割れていることから悪霊を意味すると考えられる。このことから、井戸がいつまでも清らかな清水が湧くように、そして下界から悪いものが入ってこないように、との願いを込めた呪いと考えられる。

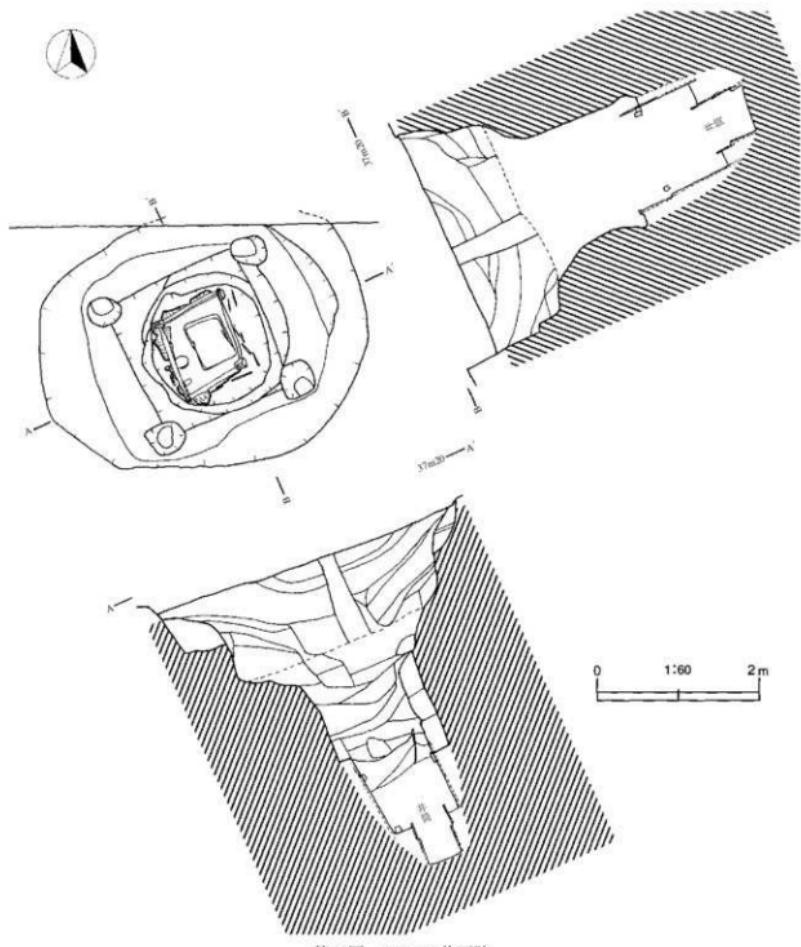
井戸筒内埋土からは木製品として曲物底板、皿、箸、箆、棒状製品、串状製品、木筒が出土している。木筒のうち、1点からは「天平六年月」と釘書きされた紀年が確認され、井戸および鶴ノ木地区建物群、さらには秋田城跡自体の創建年代が、「統日本紀」の天平5年(733)条に記載のある「出羽櫛秋田村高清水岡遷置…」という秋田高清水における出羽櫛(秋田城)の創建期に遡ることを裏付ける資料となっている。出土木筒の詳細については、別に第3節1項で述べる。

## 2) SE1176井戸跡 (第98・99・104・105図、図版34・44)

地区中央南東側の第58次調査で、SG1206沼地跡南岸付近の第7層灰褐色土層面で検出された。掘



第97図 SE406井戸跡井筒



第98図 SE1176井戸跡

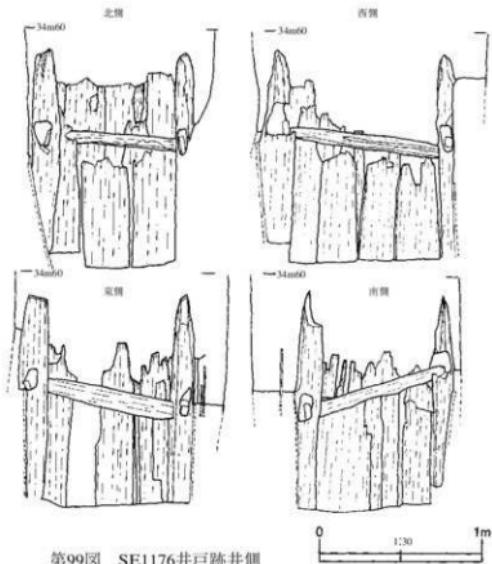
り方の平面形は上面で東西4.1m×3.3の楕円形で、確認面より深さ0.7m下と1.2m下で段をつけて掘り下げられ、深さ1.2mの段部分は四隅に直径35~40cmの円形の柱掘り方が掘られ、井戸覆屋となる東西1間(1.8m)×南北1間(1.8m)の掘立柱建物跡を伴う。建物方位は南北桁行が北で約8度東に振れる。井戸掘り方はそこから直径約1.7mの円形にすばまり底部に至る。検出面から底部までの深さは約5.5mである。掘り方には一辺1mの方形の隅柱横桟式の井側を埋設している。井側は本来、井戸覆屋付近まで伸びていたものと考えられるが、腐食のため高さ1.7m前後のものが残存している。井側内の井戸底部には大型で方形の曲物を二段重ねて井筒として埋設している。

出土遺物として、井戸内埋土、井戸底面、井筒裏込めや井側裏込めからは、須恵器壺、赤褐色土器壺、木製品、木筒ケズリ屑が出土している。そのうち、井筒裏込めから9世紀第1四半期に位置付けられる「寺」が墨書きされた須恵器壺が出土しており、井側裏込めからは9世紀第2四半期に位置付けられる土師器壺が出土していることから、9世紀第1四半期以降に構築され、9世紀第2四半期段階で改修された可能性が考えられる。また、木製品のうち、側面を面取りし上面方をロクロ仕上げした台状製品が井筒裏込めより出土しており、小型の仏像台座となる可能性がある。規模構造から9世紀代における地区中央部建物群に伴う主要な井戸の一つであり、出土遺物からは寺院との関連性が考えられる。

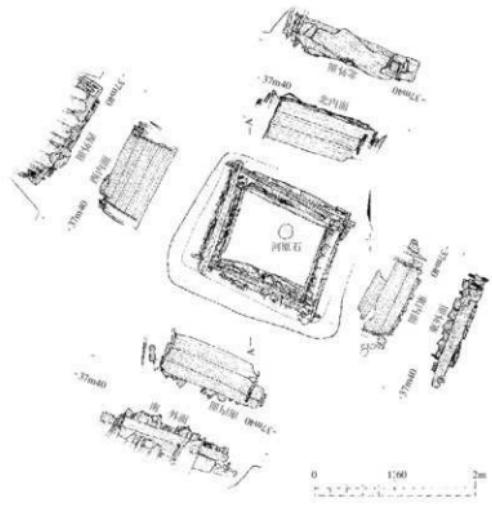
### 3) SE621井戸跡 (第100・106 図、図版34)

地区西部の第34次調査で、SG463沿地跡西岸部の第7層黄褐色砂層面で検出された。深さ約50cm、東西2.2m×南北1.8mの掘り方内に東西1.4m×南北1.6mの方形に井側材が遺存していた。掘り込みは井側設置に伴うもので、井戸の南西側斜面から堆積する飛砂に含まれた水が地山粘土層に遮蔽され湧き上がる湧水地点に井戸を構築したものと考えられた。

井側は基本的に井籠組を主体とした四重の構造からなっており、最も内側は三～四段の横板材の端



第99図 SE1176井戸跡井側



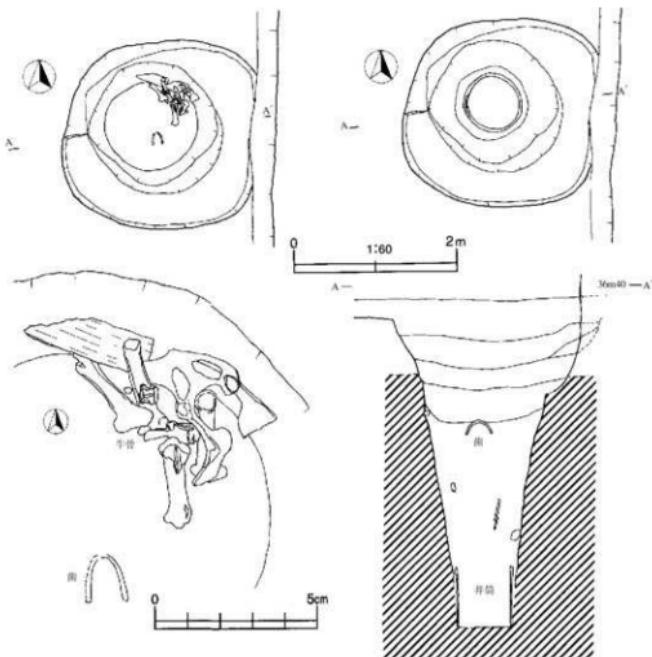
第100図  
SE621井戸跡

部を合い欠きにして組み合わせる井籠組で、その外側に縦板材を隙間なく二～三重に立て並べている。さらに、二段の横板材で井籠組にし外側に縦板、横板を並べている。内外の井籠組の四隅の合わせ目には厚い板材を杭として打ち込み横板材を固定する構造となっている。北側井側材には、くりこみが認められ、転用材を使用している。底面のほぼ中央には水の汲み上げの際に漏水を防ぐため、直径25cmの川原石を置いている。

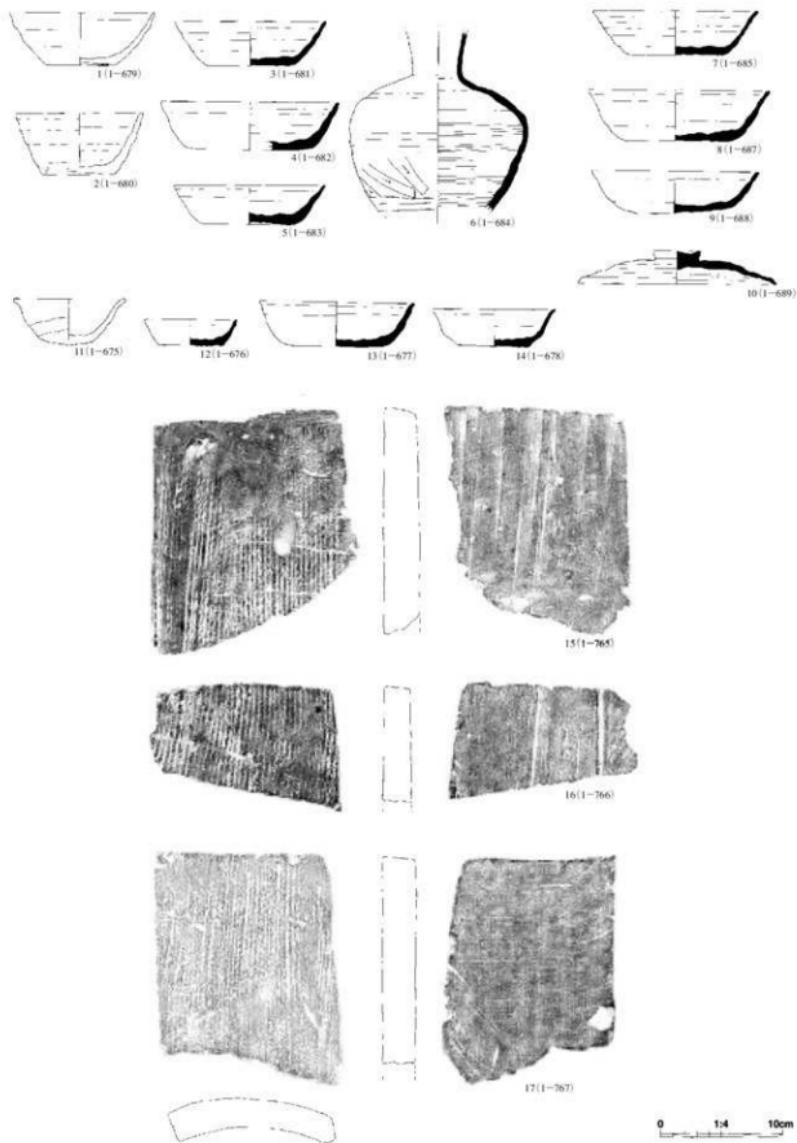
出土遺物として井戸跡内、井戸跡の掘り方埋土からは「井」、「川」と墨書きされた須恵器坏、赤褐色土器坏、挽物の皿・椀、曲物の底板等が出土している。井側裏込めから出土した赤褐色土器坏の年代から9世紀第3四半期頃に構築され、井戸埋土から出土した赤褐色土器坏の年代から9世紀内で廃棄されたと考えられる。9世紀後半段階における地区西側の主要な井戸の一つである。

#### 4) SE1171井戸跡 (第101・107図、図版34・44)

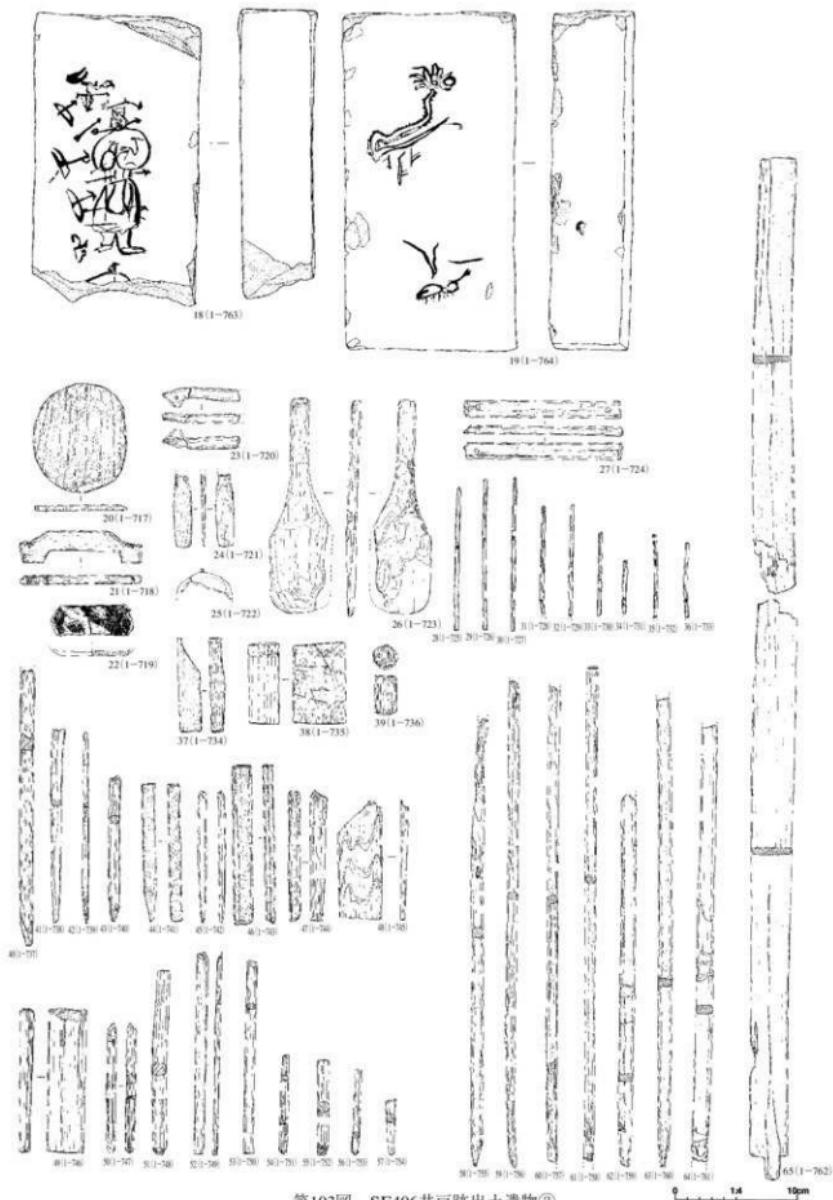
地区中央南東側の第58次調査で、SG1206沼地跡南岸の中世整地層である第4層灰褐色土層面で検出された中世の井戸跡である。掘り方の平面形は上面で直径2.3mの円形で、深さ1.0m下で直径1.6mの円形にすばまる。確認面より底部までの深さは4.0mである。底部には直径72cmの円形で高さ60cmの大型曲物が井筒として埋設されている。井側痕跡は明確ではないが、埋土より板材が出土していることなどから、井側を有した可能性がある。埋土中位より牛骨類が一括で出土した。井戸廃棄時の祭



第101図 SE1171井戸跡



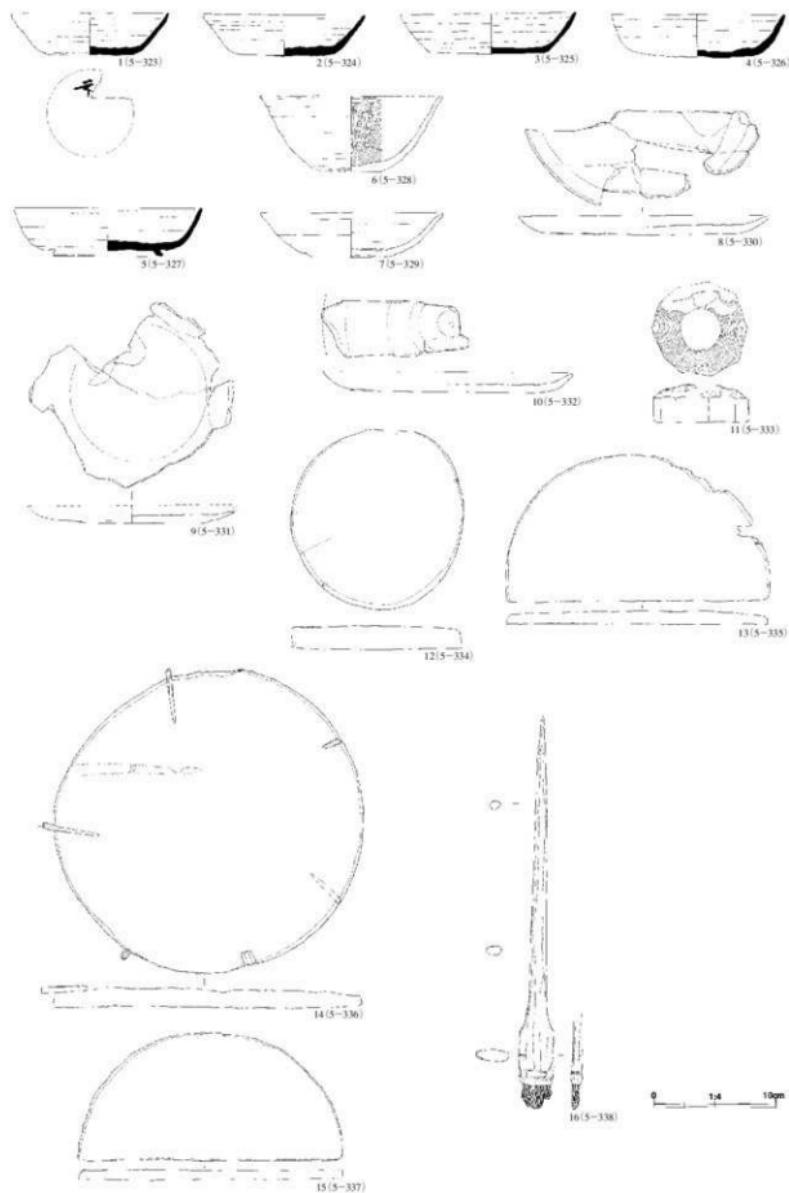
第102図 SE406井戸跡出土遺物①



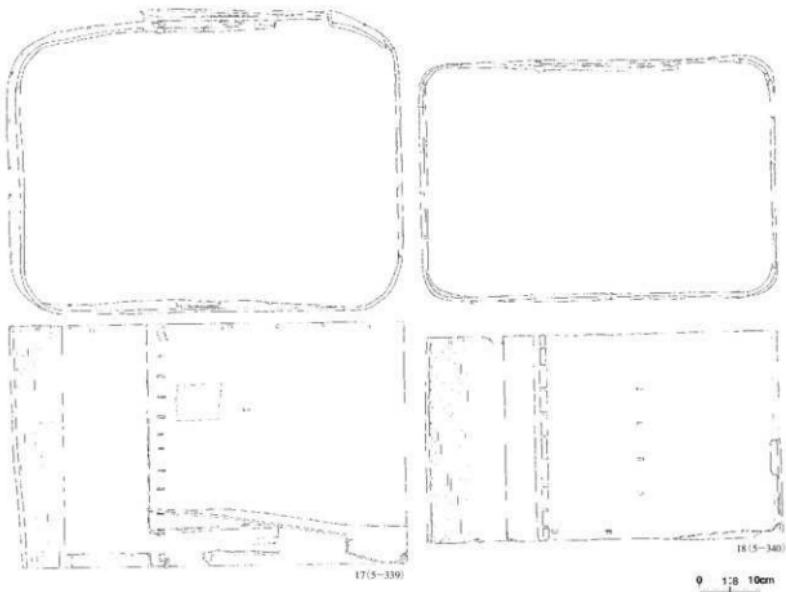
第103図 SE406井戸跡出土遺物②

## SE406井戸跡出土遺物一覧表

国際 番号	遺物 番号	種類・器種	出土遺物・部位	上径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	底部切り面	調整 等	時期
102-1	1-679	赤褐色土器・环A	SE406堆土上面	11.9	4.3	5.5	系切り	無調整	9C 第2
102-2	1-680	赤褐色土器・环B	SE406堆土上面	10.4	5.1	5.8	系切り	底部下端ケズリ	9C 第2
102-3	1-681	環状器・环	SE406堆土上面	12.4	3.6	6.7	ヘラ切り	無調整、内面に溝状及び炭化物付着	9C 第2
102-4	1-682	環状器・环	SE406堆土上面	14.6	3.9	10.3	ヘラ切り	底部ナデ	8C 第4
102-5	1-683	環状器・环	SE406堆土上面	12.4	3.2	7.5	ヘラ切り	底部解けナデ	9C 第2
102-6	1-684	環状器・瓦塊	SE406堆土上面	不明	不明	不明	不明	外側底部下端斜、横ヘラケズリあり 内部削部横方向カキ目	9C 第2
102-7	1-685	環状器・环	SE406堆土中位層	13.6	3.2	7.5	ヘラ切り	底部解けナデ	9C 第1
102-8	1-687	環状器・环	SE406堆土中位層	14.8	4.3	8.6	ヘラ切り	底部ナデ	8C 第4
102-9	1-688	環状器・环	SE406堆土中位層	13.7	3.5	7.3	ヘラ切り	底部天井部ケズリ 内面底部に縦状 炭化物付着	8C 第4
102-10	1-689	環状器・蓋	SE406堆土中位層	16.4	2.7		不明		8C 第3
102-11	1-675	土器類・鋤頭皿	SE406井筒内	9.2	3.3	3	丸底	手づくね土器、巻上げ痕有り 内外面焦状炭化物付着(鋤頭皿)	8C
102-12	1-676	鋤頭器・环	SE406井筒内	7.5	2.1	5.4	ヘラ切り	無調整、内面底部に炭化物付着(鋤頭皿)	8C 第2
102-13	1-677	鋤頭器・环	SE406井筒内	12.7	3.6	7.3	ヘラ切り	底部ナデ	8C 第2
102-14	1-678	鋤頭器・环	SE406井筒内	10.2	3	5.7	不明	底部全面ヘラケズリ。内外に炭化物付着(鋤頭皿)	8C 第2
102-15	1-765	平瓦	SE406井筒内					表面凹凸き。裏面布目と横合痕、桶巻 き合せ	8C
102-16	1-766	平瓦	SE406堆土中位					表面凹凸き。裏面布目と横合痕、桶巻 き合せ	8C
102-17	1-767	平瓦	SE406埋土					表面凹凸き。裏面布目と糸切り痕。一 枚作り	8C
103-18	1-763	埴	SE406井筒内底部	幅13.7	長さ24.8	厚さ5.5		人物絵墨書きあり	8C 第2
103-19	1-764	埴	SE406井筒内底部	幅14.2	長さ28.1	厚さ7		動物墨書きあり	8C 第2
103-20	1-717	木製品・フタ(板版?)	SE406井筒内	幅15.0	長さ17.4	厚さ0.58			8C
103-21	1-718	木製品・把手	SE406井筒内	幅3.2	長さ19.8	厚さ0.6			8C
103-22	1-719	木製品・木皿	SE406井筒内	不明	不明	10.3		口クロ挽、赤漆塗布、内面一部伏化	8C
103-23	1-720	木製品	SE406井筒内	不明	不明	不明			不明
103-24	1-721	木製品・ヘラ	SE406井筒内	幅2.9	不明	不明	不明		不明
103-25	1-722	瓢箪	SE406井筒内	幅8.9				器として使用。汲取りよう柄杓か	不明
103-26	1-723	木製品・ヘラ	SE406井筒内	幅10.1	長さ35.6	厚さ1.6	不明		不明
103-27	1-724	木製品・不明	SE406井筒内	幅2.6	不明	厚さ0.8	不明		不明
103-28	1-725	木製品・箸	SE406井筒内	幅0.7	長さ26.0			両端面取り、両面は楕円形	不明
103-29	1-726	木製品・箸	SE406井筒内	幅0.5	長さ24.4			両端面取り、両面は楕円形	不明
103-30	1-727	木製品・箸	SE406井筒内	幅0.6	長さ25.2			両端面取り、両面は楕円形	不明
103-32	1-728	木製品・箸	SE406井筒内	幅0.7	不明			両端面取り、両面は楕円形	不明
103-32	1-729	木製品・箸	SE406井筒内	幅0.6	不明			両端面取り、両面は楕円形	不明
103-33	1-730	木製品・箸	SE406井筒内	幅0.6	不明			両端面取り、両面は楕円形	不明
103-34	1-731	木製品・箸	SE406井筒内	幅0.6	不明			両端面取り、両面は楕円形	不明
103-35	1-732	木製品・箸	SE406井筒内	幅0.5	不明			両端面取り、両面は楕円形	不明
103-36	1-733	木製品・箸	SE406井筒内	幅0.5	不明			両端面取り、両面は楕円形	不明
103-37	1-734	木製品・不明	SE406井筒内	幅1.8	長さ7.7			不明	不明
103-38	1-735	木製品・不明	SE406井筒内	幅2.5	長さ6.6			不明	不明
103-39	1-736	木製品・不明	SE406井筒内	幅1.8	長さ3.1			不明	不明
103-40	1-737	木製品・半状製品	SE406井筒内	数個 省略					不明
103-45	1-742	木製品・半状製品	SE406井筒内	数個 省略					不明
103-46	1-743	木製品・棒状製品	SE406井筒内	数個 省略					不明
103-65	1-762	木製品・棒状製品	SE406井筒内	数個 省略					不明



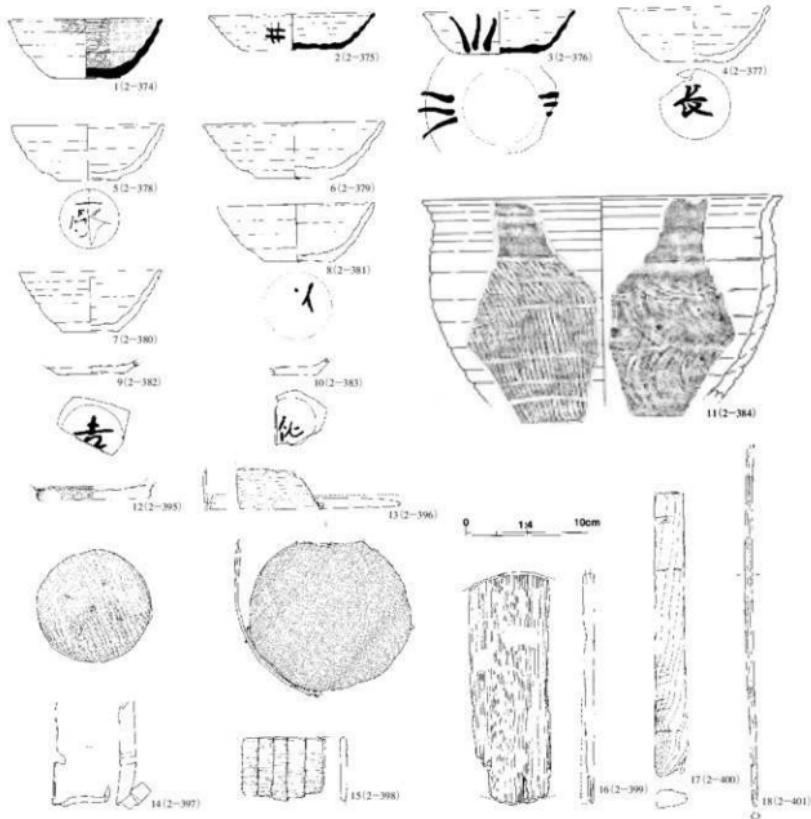
第104図 SE1176井戸跡出土遺物①



第105図 SE1176井戸跡出土遺物②

SE1176井戸跡出土遺物一覧表

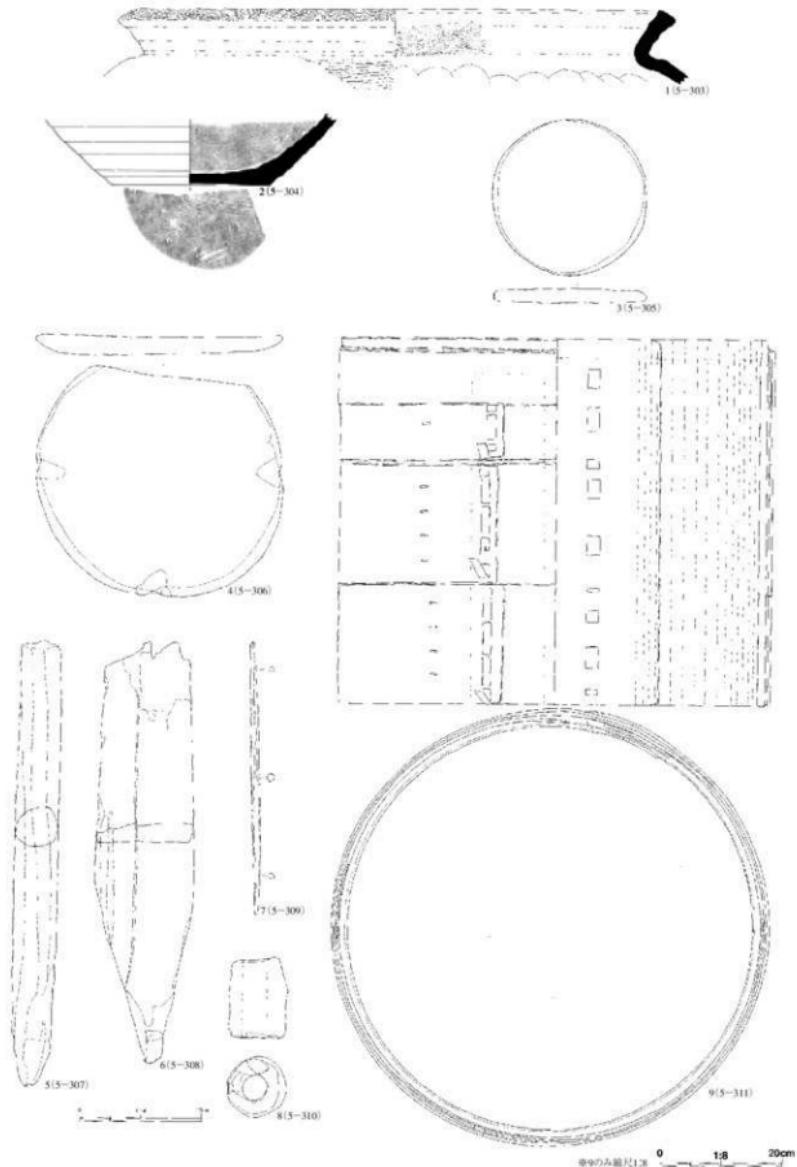
回面 番号	遺物 番号	種類・器種	出土遺構・層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	底部切り廻し	調整等	時期
104-1	5-323	瓶底器・环	SEI1176理土裏込め土	12.9	3.4	7.3	へラ切り	底部軽いナデ、底部墨書き「寺」縦明打	9C第2
104-2	5-324	瓶底器・环	SEI1176理土	13.2	3.4	7.3	へラ切り	底部軽いナデ	9C第2
104-3	5-325	瓶底器・环	SEI1176理土	14.3	3.3	9.5	不明	底部全面へラケズリ	8C第2
104-4	5-326	瓶底器・环	SEI1176理土	14.2	3.5	8.5	へラ切り	底部でいねいなナデ、内面1線部擦状 貯物付着帶明打に転用	8C第3
104-5	5-327	瓶底器・台付环	SEI1176理土	15.3	4	8.8	へラ切り	底部ナデ	8C第3
104-6	5-328	土脚器・環	SEI1176理土裏込め土	15	6.2	5		底部から全体縦縫軒へラケズリ内面黒 色處理タタ、ヨコゴザキあり	9C第2
104-7	5-329	赤陶色器・环A	SEI1176理土	14.9	3.6	6.8	糸切り	無調整	9C第2
104-8	5-330	木製品・挽物皿	SEI1176理土裏込め土	20.5	1.6	15	不明		不明
104-9	5-331	木製品・挽物皿	SEI1176底面	不明	不明	9.6	不明		不明
104-10	5-332	木製品・挽物皿	SEI1176底面	20.5	1.6	14	不明		不明
104-11	5-333	台状木製品	SEI1176方形容器裏込め土	径27.7	高さ3.1				不明
104-12	5-334	曲物底板	SEI1176理土裏込め土	径14	厚さ2.0				不明
104-13	5-335	板状木製品	SEI1176理土裏込め土	径21.2	厚さ1.1				丸い板状
104-14	5-336	曲物底板	SEI1176理土裏込め土	径25.7	厚さ1.5				右側所木釘うち5ヶ所現存部分的に 漆付着
104-15	5-337	曲物底板	SEI1176理土裏込め土	径21.6	厚さ0.7				1ヶ所に木釘穴残る
104-16	5-338	漆油り刷毛	SEI1176理土裏込め土	幅2.7	長さ31.6	厚さ1.0		漆油穴っている。身は平坦。柄を張つ て毛を笠着粋糸で縫付け	不明
105-17	5-339	方形曲物	SEI1176井筒使用	幅44	長さ62	高さ40	長辺7~9方に木釘やその痕跡あり		不明
105-18	5-340	方形曲物	SEI1176井筒使用	幅38	長さ58	厚さ2.5	高さ34	短辺5ヶ所木釘やその痕跡あり	不明



第106図 SE621井戸跡出土遺物

SE621井戸跡出土遺物一覧表

回収番号	遺物番号	種類・器種	出土遺構・層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	底部切り離し	調査等	時期
106-1	2-374	土器部・環	SE621廻り方埋土	12.5	4.9	5.4	舟切り	底部無調整、内里、体上半周1ガキ内里上半横、底部收斂状ミガキ	9C第3
106-2	2-375	環底器・环	SE621廻り方埋土	13.6	3	7.7	ハラ切り	無調整、体外側面2カ所墨書きあり「井」	9C第2
106-3	2-376	環底器・环	SE621廻り方埋土	12.5	3.5	6.3	ハラ切り	無調整、体外側面2カ所墨書きあり「井」	9C第2
106-4	2-377	赤褐色土器・环A	SE621廻り方埋土	12.3	4.4	5.4	舟切り	無調整、底部外周墨書き「長」	9C第3
106-5	2-378	赤褐色土器・环A	SE621廻り方埋土	12.3	4.6	4.8	舟切り	無調整、外周底部墨書き「井」	9C第3
106-6	2-379	赤褐色土器・环A	SE621廻り方埋土	14.8	4.6	6.4	舟切り	無調整	9C第3
106-7	2-380	赤褐色土器・环A	SE621廻り方埋土	11.6	5	4.5	舟切り	無調整	9C第3
106-8	2-381	赤褐色土器・环A	SE621廻り方埋土	12.8	4.7	5.6	舟切り	無調整、底部墨書き「□」判読不能	9C第3
106-9	2-382	赤褐色土器・环破片	SE621廻り方埋土	不明	不明	5.4	舟切り	無調整、底部外周墨書き「吉」	9C第3
106-10	2-383	赤褐色土器・环破片	SE621廻り方埋土	不明	不明	不明	舟切り	無調整、底部外周墨書き「□」判読不能	9C第3
106-11	2-384	環底器・环	SE621廻り方埋土	29.4	不明	不明	不明	外周斜の印より、内アテ板痕 壁口打痕明確	9C第3
106-12	2-395	木製品挽物・圓底部	SE621廻り方埋土	不明	不明	9.1	不明	舟口クロツメ痕跡あり	9C
106-13	2-396	木製品・曲物底部	SE621廻り方埋土	径13.2	不明	不明	不明	4カ所に木軋が残存	不明
106-14	2-397	木製品・曲物板檻	SE621廻り方埋土	不明	不明	不明	不明	不明	不明
106-15	2-398	木製品・曲物板檻	SE621廻り方埋土	不明	不明	不明	不明	不明	不明
106-16	2-399	木製品・曲物板檻底版	SE621廻り方埋土	径13.2	不明	不明	不明	木軋2カ所に残存	不明
106-17	2-400	楕状木製品	SE621廻り方埋土	不明	幅2.5	不明	不明	不明	不明
106-18	2-401	枝状木製品	SE621廻り方埋土	径0.7	長さ30.6	不明	不明	不明	不明



第107図 SE1171井戸跡出土遺物

SE1171井戸跡出土遺物一覧表

図面番号	遺物番号	種類・器種	出土遺構・層位	口径(cm)	深さ(cm)	底径(cm)	底面切り妻なし	調査等	時期
107-1	S-303	珠洲系中世陶器・类型	SE1171埋土	45.6	不明	不明	不明	口縁部	12C後半
107-2	S-304	珠洲系中世陶器・縦跡	SE1171埋土	不明	不明	12.8	断面系切口	かすかに脚あり	12C後半
107-3	S-305	木製品・曲物底部	SE1171埋土	径12.6	不明	厚さ1.1	不明	不明	12C前半
107-4	S-306	木製品・曲物底部	SE1171埋土	径20.1	不明	厚さ1.4	不明	不明	不明
107-5	S-307	丸状木製品	SE1171埋土	径3.4	長さ36.2	不明	不明	不明	不明
107-6	S-308	木製品・井口枠	SE1171埋土	幅8.0	長さ34.2	不明	不明	不明	不明
107-7	S-309	椎状木製品	SE1171埋土	不明	長さ22.2	厚さ0.7	不明	不明	不明
107-8	S-310	土鉢	SE1171埋土	幅4.8	長さ6.4	不明	不明	孔径2cm	不明
107-9	S-311	曲物	SE1171井筒として使用	径72	高さ62	厚さ1.3		一枚板を出げる。外は曲物3段その上段に高9cmの曲物回す。	不明

祀行為に関係すると考えられる。

出土遺物として井筒内、埋土、覆土より珠洲系中世陶器や木製品、土鉢等が出土している。井筒内からは、13世紀前半に位置づけられる珠洲系中世陶器擂鉢が出土しており、整地層の年代をふまえると、12世紀末から13世紀前半にかけて構築され、機能した井戸と考えられる。

### 5) その他の井戸跡（第108～110図、図版35・38）

上記以外の鶴ノ本地区検出の井戸跡については、遺構および遺物集成図を一覧表に示した。遺構については原則として遺構番号順に、規模・平面形・深さ・構造・検出位置・層位・重複関係・出土遺物・時期の順に一覧表に示した。また、出土遺物などから年代の把握が可能なものについては表に示した。

鶴ノ本地区検出井戸跡一覧表（1）

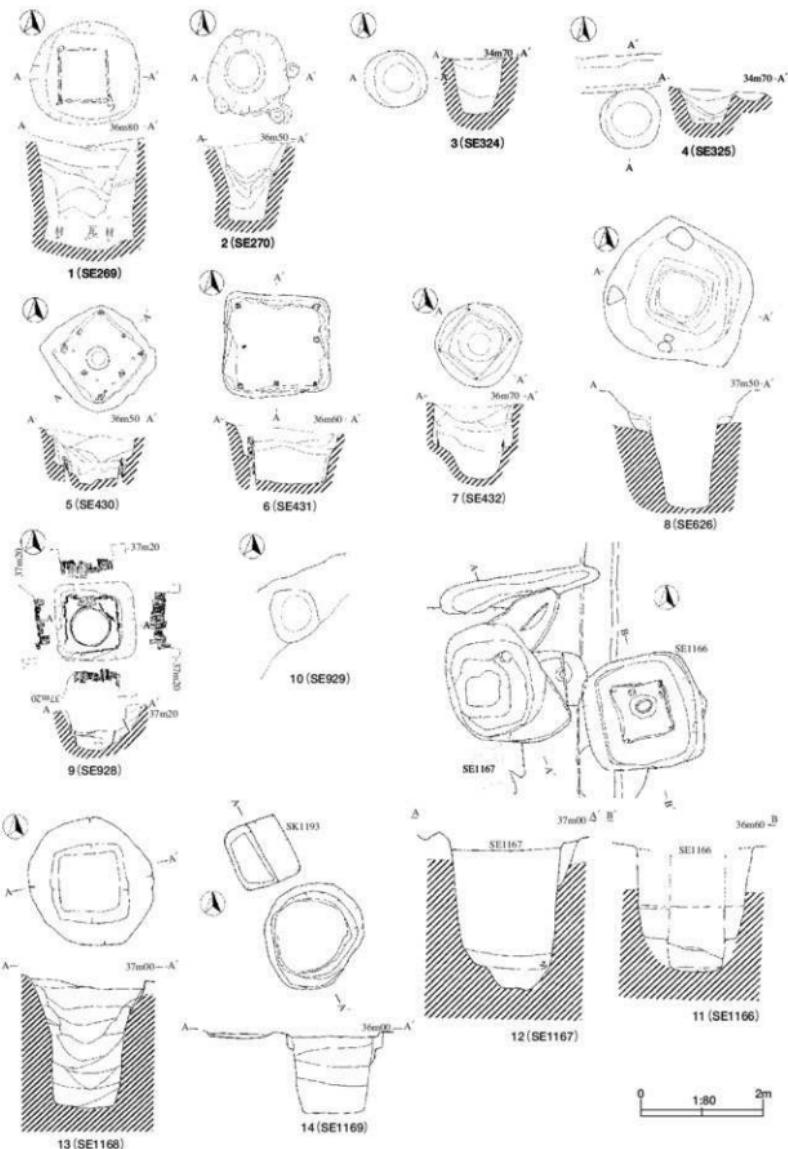
造情番号	図面番号	調査次数	規模・平面形	深さ	構造	検出位置・層位・重複関係	出土遺物	時期
SE269	108-1	18次	(側り方) 直径1.8m・円形 (井戸跡) 一边83cm・方形	1.8m	隔壁横柱式	地区中央・第5層	第110図-1、 2	13世紀前半
SE270	108-2	18次	(側り方) 上面直徑1.3m・円形 底面直徑0.6m・円形	1.3m	井戸口付小建式	地区中央・第5層		12世紀末～
SE324	108-3	22次	(側り方) 上面直徑1m・12辺円形 底面直徑約45cm・12辺円形	約1.1m	素掘り井戸	地区中央・地山粘土層		不明
SE325	108-4	22次	(側り方) 上面直徑約90cm・円形 底面直徑約50cm・円形	60cm	素掘り井戸	地区中央・地山粘土層		不明
SE430	108-5	26次	(側り方) 一边約1.65m・方形 底面一边約1.1m・方形	約90cm	四辺石片坊・板下打 ち込み簡易構造	地区中央・第4層		12世紀末～
SE431	108-6	26次	(側り方) 一边約1.65m・方形 底面一边約1.1m・方形	約97cm	四辺石片坊・板下打 ち込み簡易構造	地区中央・地山粘土層 (新) SB427		12世紀末～
SE432	108-7	26次	(側り方) 直径約1.4m・円形 (井戸跡) 一边75cm・方形	約60cm	隔壁横柱式	地区中央・地山粘土層		12世紀末～
SE626	108-8	35次	(側り方) 直径約2.3m・不規則円形 (井戸跡) 一边1.1m・前面直徑70cm・方形	約2m	井戸直徑80cm	地区西部・第4層 (SK 651号取り穴埋土上面)		12世紀末～
SE928	108-9	48次	(側り方) 東西1.3m×南北1.3m・楕円形 底面直徑約80cm・円形	70cm	隔壁横柱式	地区西部・第4層 (SN950粘土壁)	第110図-3～ 7	12世紀末～
SE929	108-10	48次	(側り方) 直径80cm・12辺円形	約70cm	不明	地区西部・第4層		12世紀末～
SE166	108-11	58次	(側り方) 東西1.9m×南北1.9m・方形 (井戸跡) 一边75cm・方形	2m	隔壁横柱式	地区中央東側・第4層	第110図-8、 9	12世紀末～
SE167	108-12	58次	(側り方) 東西1.5m×南北1.8m・楕円形 底面直徑90cm・方形	2.4m	素掘り井戸	地区中央東側・第4層		12世紀末～
SE168	108-13	58次	(側り方) 直径2.0m・円形 底面一边1.1m・方形	2.1m	井側材抜き取りか	地区中央東側・第4層		12世紀末～
SE169	108-14	58次	(側り方) 東西1.6m×南北1.7m・やや歪んだ楕円形 底面直徑約1m・円形	1.3m	素掘り井戸	地区中央東側・第4層 ～第5層		12世紀末～

鶴ノ木地区検出井戸跡一覧表（2）

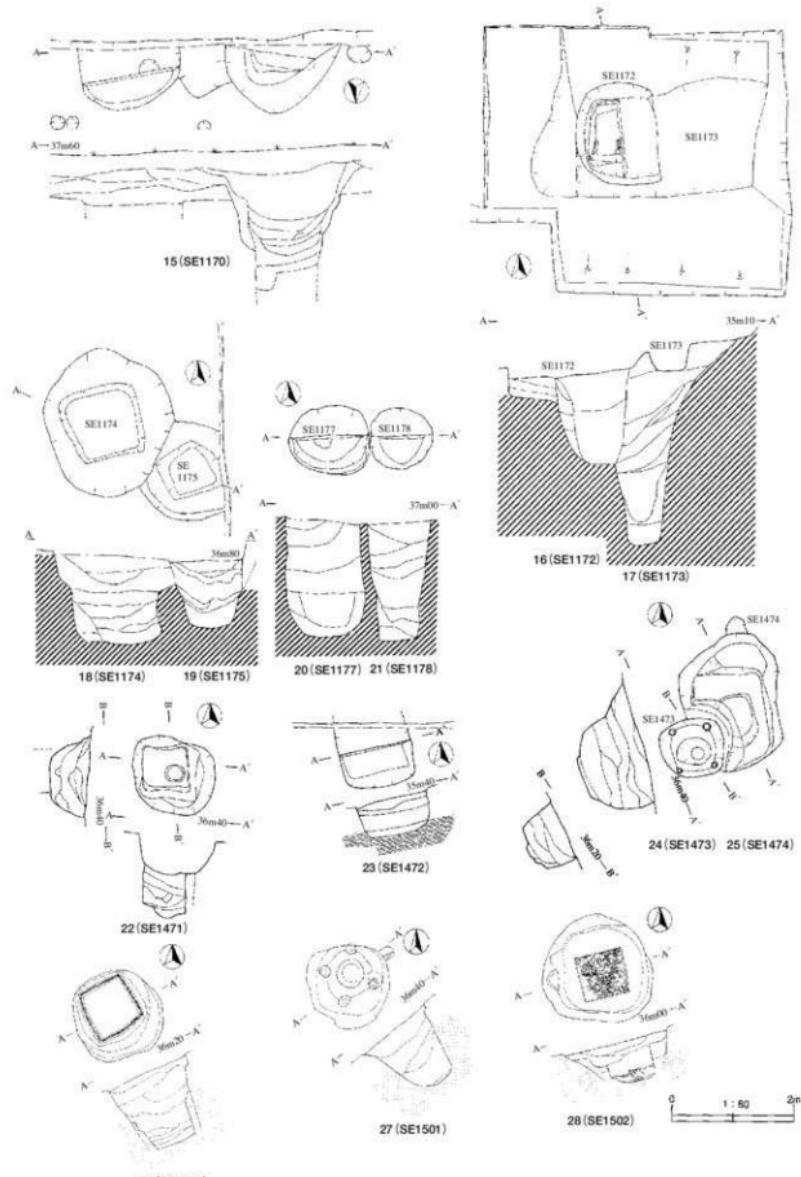
遺構番号	図面番号	調査次数	規模・平面形	深さ	構造	検出位置・層位・複数回発見	出土遺物	時期
SEI170	109-15	58次	(掘り方) 直径2m・円形	2m	素掘り井戸	地区中央東側・黄土下の旧耕作土・第4層		12世紀末~
SEI172	109-16	58次	(掘り方) 東東西1.3m×南北2.7m・丸味をもった方形 底面東西40cm×南北50cm・方形	2m	井筒材抜き取り	地区中央東側・第4層		13世紀前半
SEI173	109-17	58次	(掘り方) 東東西3.0m以上×南北1.7~1.9m・長方形 底面東西40cm・不明	3.3m	素掘り井戸	地区中央東側・第4層 (古) SEI171~1172	第110回~10 18	9世紀後半 14世紀
SEI174	109-18	58次	(掘り方) 東東西2.1m×南北2.4m・歪んだ楕円形	1.5m	井筒材抜き取りか	地区中央東側・第4層 (古) SEI175	第110回~19, 20	12世紀末~ 13世紀前半
SEI175	109-19	58次	(掘り方) 直径1.3m・円形 底面東西1.0m×南北0.8m・長方形	1.2m	井筒材抜き取りか (新) SEI174	地区中央東側・第4層 (新)		13世紀前半
SEI177	109-20	58次	(掘り方) 直径1.0m・円形 底面東西約80cm・円形	1.9m	素掘り井戸	地区中央東側・第4層 (不明) SEI177		12世紀末~ 13世紀中葉
SEI178	109-21	58次	(掘り方) 直径1.0m・円形 底面東西約80cm・円形	1.9m	素掘り井戸	地区中央東側・第4層 (不明) SEI177		12世紀末~ 13世紀中葉
SEI179	109-22	67次	(掘り方) 東東西1.5m×南北1.2m・歪んだ楕円形 底面東西約90cm・円形	1.2m	井筒材抜き取り	地区北部・第7層	第110回~21, 22	12世紀末~ 13世紀中葉
SEI182	109-23	67次	(掘り方) 東東西1.2m×南北1.1m・以上・方形 底面東西約80cm・方形	70cm	井筒材抜き取りか	地区北部・第7層下層		9世紀第4 4年半期
SEI173	109-24	67次	(掘り方) 東東西1.1m×南北1.0m・円形に寄り-偏丸方形 (井筒) 直径約40cmの円形の曲物	70cm	隔壁柱式	地区北部・第10層	第110回~23	9世紀第3 4年半期
SEI174	109-25	67次	(掘り方) 東東西1.6m×南北約2.0m・不整方形 (井筒) 東西約60cm×南北約70cm偏丸方形の曲物	1.0m	井筒材抜き取りか SEI147	地区北部・第10層 (古)	第110回~24	9世紀第2 4年半期
SEI180	109-26	69次	(掘り方) 直径約1.4m・円形 (井筒) 一辺85cm・底面直径90cm・方形	約1.3m	隔壁柱式	地区北部・第7層	第110回~25, 26	12世紀末~ 13世紀前半
SEI181	109-27	69次	(掘り方) 東東西1.35m×南北1.4m・歪んだ内円形 底面東西約80cm・方形	約1.1m	井戸底部隔壁	地区北部・第9層	第110回~27, 28	12世紀末~ 13世紀前半
SEI182	109-28	69次	(掘り方) 東東西1.85m×南北約1.8m・やや歪んだ円形 (井筒) 一辺約75cm・底部玉石敷き・方型	約60cm	井筒材抜き取り	地区北部・第11層 (古) SA1492	第110回~29, 30	9世紀末~半 紀後1年半期

鶴ノ木地区検出井戸跡出土遺物一覧表

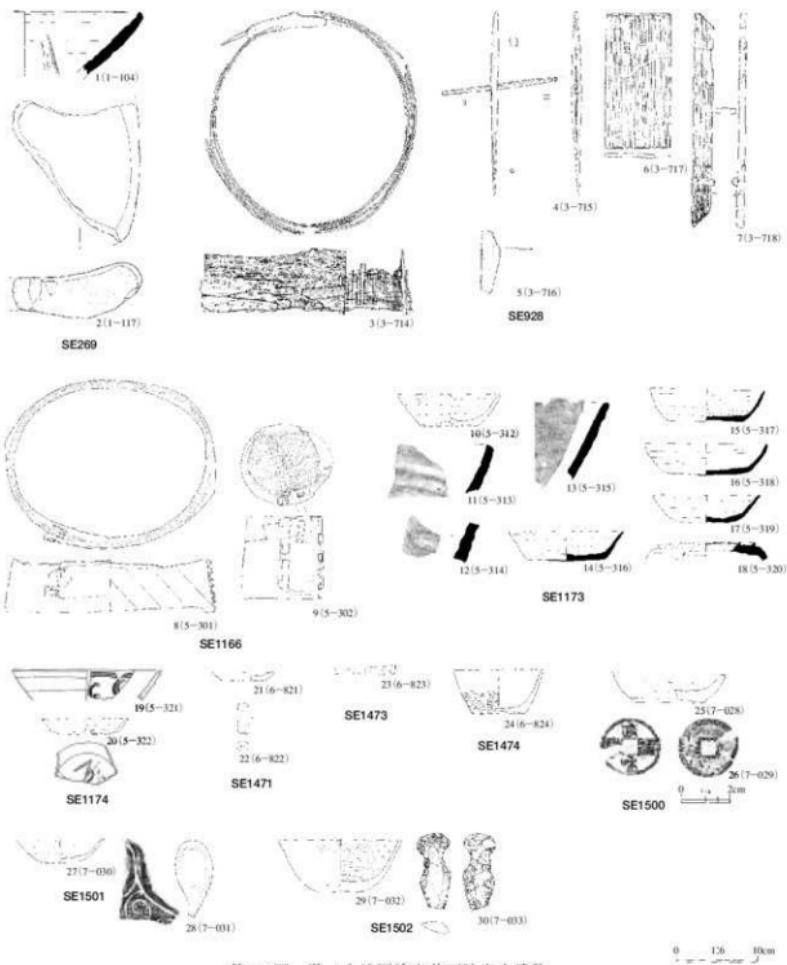
図面番号	遺物号	種類・部機	出土遺物・層位	目録番号	厚さ(㎝)	裏表(㎝)	荒筋裏に轟	調査等	時期
110-1	1-104	須洲系中世陶器・櫛鉢	SEI269井筒内埋土	不明	不明	不明	不明	柔板1枚轟認。須洲Ⅱ期	13世紀前半
110-2	1-117	石皿	SEI269井筒内埋土	不明	不明	厚5.2	不明		圓文時代
110-3	3-714	木製品・曲物	SEI928底面	径70	高さ20.5	厚5.0		井筒として井戸底盤に設置	不明
110-4	3-715	木製品・不規	SEI928曲物内埋土	約60.8	長さ22.8	厚±0.9	不明	单状の木製品を中で振り1本を差し込んでる	不明
110-5	3-716	木製品・不明	SEI928曲物内埋土					板状になってる。破片	不明
110-6	3-717	板状木製品	SEI928曲物内埋土			厚±0.4		板状になっている。正日板破片	不明
110-7	3-718	木製品・不明	SEI928曲物内埋土		長さ25.9	厚±0.7		木軒垂路3ヵ所、木軒1本あり被損品	不明
110-8	5-301	曲物	SEI1166底面	幅25.6			高さ6.3	直面に津浦布痕跡あり	不明
110-9	5-302	曲物	SEI1166底面	幅9.5			高さ10	小形の柄杓か、方形のが時計位置にある	不明
110-10	5-312	赤褐色土器・环B	SEI173底面	12.5	3.9	6.7	赤切り	体下端ケズリ。外面部状化物付着痕明	9世紀第1
110-11	5-313	須洲系中世陶器・環鉢II層	SEI173底土上層	不明	不明	不明	不明	鉢口あり。須洲Ⅱ期	12世紀後半~
110-12	5-314	須洲系中世陶器・環鉢II層	SEI173底土上層	不明	不明	不明	不明	須洲Ⅱ期	13世紀前半
110-13	5-315	須洲系中世陶器・環鉢II層	SEI173底土上層	不明	不明	不明	不明	須洲Ⅱ期	13世紀前半
110-14	5-316	須恵器・环	SEI173底土	14	3.6	9.4	へラ切り	軽いナデ	9世紀第1
110-15	5-317	須恵器・环	SEI173底土	14	4	9	へラ切り	軽いナデ	9世紀第1
110-16	5-318	須恵器・环	SEI173底土	14.9	3.9	10	へラ切り	ナデ調整	8世紀第3
110-17	5-319	須恵器・环	SEI173底土	13.2	3.4	7	へラ切り	ナデ調整	9世紀第1
110-18	5-320	須恵器内面鏡	SEI173底土	11.8	不明	不明	赤切り	上面に重に凹凸がまわる尖部に属する 縦脚部方形透かし	8世紀
110-19	5-321	須洲系土器青磁・刷毛文瓶	SEI174底土	18	不明	不明	赤切り	刷毛文瓶	13世紀後半~ 13世紀中葉
110-20	5-322	同安窯青磁・刷毛文瓶	SEI174底土	10.6	1.9	6	不明	底部屈曲ケズリ調整。刷毛文瓶	12世紀末~ 13世紀前半
110-21	6-821	赤褐色土器・环A	SEI1500底土	不明	不明	5.4	赤切り	無調整	10世紀~
110-22	6-822	土罐	SEI1471底土	径1.3	長さ3.8			孔径0.4cm	不明
110-23	6-823	灰釉陶器・底屈部	SEI1473底土	不明	不明	7.2	不明	高台底面まで輪郭着K09号式	9世紀後半
110-24	6-824	赤褐色土器・环B	SEI1474底土	11	5.2	6.2	不明	外面部横から下端ケズリ 11縁一部保状化物付着	9世紀第2
110-25	7-028	かわらけ大皿	SEI1500底土	不明	不明	8.2	赤切り	無調整	12世紀末~ 13世紀前半
110-26	7-029	赤陶	SEI1500底土		径2.4	厚5.0		政和通宝(初跡北宋1111年)	12世紀~
110-27	7-030	赤褐色土器・环A	SEI1501底土	不明	不明	4.5	赤切り	無調整	9世紀第4
110-28	7-031	須洲系土器破片	SEI1501底土	不明	不明	不明	把手部分		圓文後期 初期
110-29	7-032	土師器・壺	SEI1502底土	14.9	6.4	5.6	赤切り	底部ナメ・内面横・放射状ミガキ黒色 処理・外面ナデ	9世紀後半
110-30	7-033	石碗(瓶形)	SEI1502底土	径2.4	不明	幅0.9	貞貢		圓文時代



第108図 薩ノ木地区検出井戸跡①



第109図 薩ノ木地区検出井戸跡②



第110図 猬ノ木地区検出井戸跡出土遺物

## 10 土坑（第111～116図、図版37）

土坑については、地区全体で78基検出されており、後述の古代の祭祀遺物や土器の一括廃棄により祭祀構造として報告される2基を除き、縄文時代および弥生時代の土坑が7基、古代の土坑が20基、中世以降の土坑が21基、時期不明が28基検出されている。

原則として遺構番号順に遺構および遺物集成図と一覧表に示した。遺構については平面形・規模、深さ、検出状況・用途、検出位置・層位・重複関係、出土遺物、時期の順に一覧表に示した。出土遺物などから年代把握が可能なものについては、一覧表に示したが、年代比定資料の出土自体が少なく、検出層位などから大まかな時期を示したもののが大半を占める。

土坑の性格と用途については、不明のものが多いが、縄文時代および弥生時代の土坑は貯蔵穴と推定されるものが多く、地区中央西寄り一帯から検出されている。地区中央西寄りから西部からは、墓壙となる可能性が高い土坑が検出されている。その他に廃棄土坑となるものがいくつか検出されているが、土器等が多量に出土するなど、性格が明らかになるものは少ない。

鶴ノ木地区検出土坑一覧表（1）

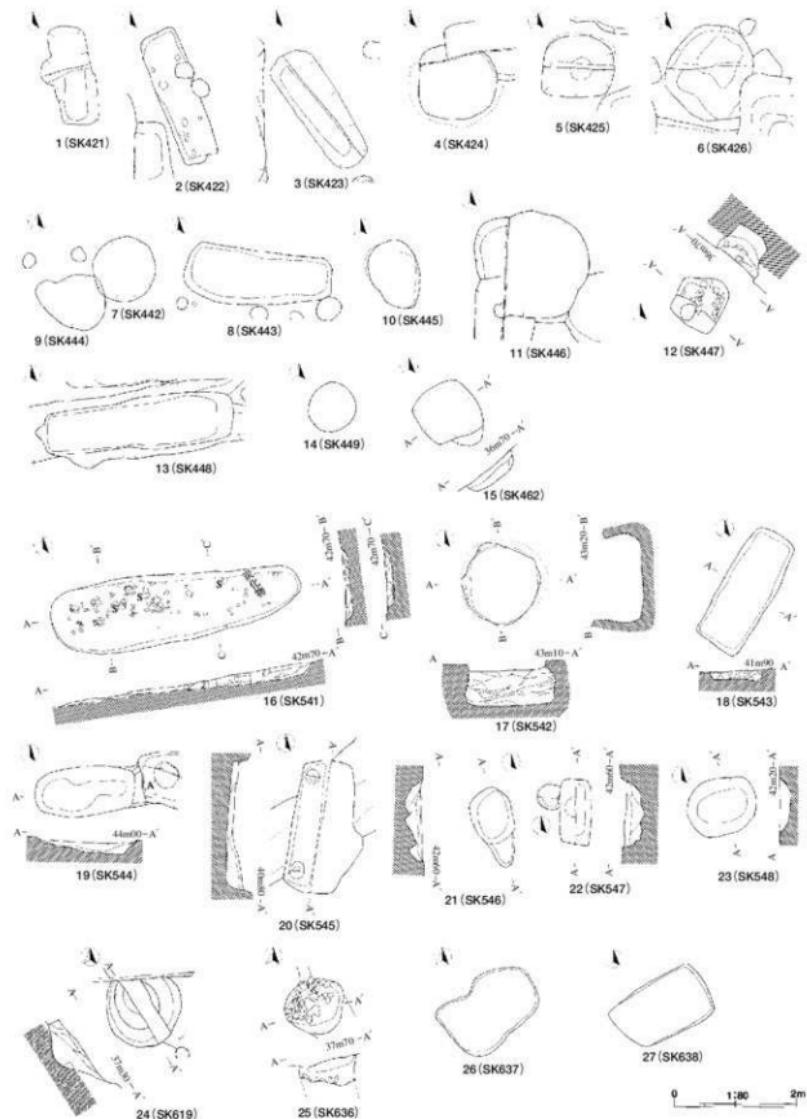
遺構番号	前面番号	調査次数	平面形・規模	深さ	検出状況・用途	検出位置・層位・重複関係	出土遺物	時期
SK421	112-1	25次	長方形・東西70cm×南北162cm	約4~15cm	不明	地区中央・地山粘土層		不明
SK422	112-2	25次	隅丸長方形・東西約60cm×南北約2.2m	10cm	不明・壁土は黒色の炭化物質で、燒土を含んでいる	地区中央・地山粘土層		不明
SK423	112-3	25次	隅丸長方形・東西約80cm×南北約2.2m	約30cm	不明	地区中央・地山粘土層		不明
SK424	112-4	25次	円形・直径約1.2m	約1.3m	弥生時代の土坑 貯蔵穴	地区中央・地山粘土層 (古) SB395	第116図-1 埋土より弥生時代の 土器片出土	弥生中期
SK425	112-5	25次	ほぼ円形・直径約1.1m	約90cm	弥生時代の土坑 貯蔵穴	地区中央・地山粘土層	埋土より弥生時代の 土器片出土	弥生中期
SK426	112-6	25次	ほぼ円形・直径約1.1m	約40cm	弥生時代の土坑 貯蔵穴	地区中央・地山粘土層	埋土より弥生時代の 土器片出土	弥生中期
SK442	112-7	26次	円形・直径約1.1m	約30cm	不明	地区中央・第7層		9世紀第2四半期~
SK443	112-8	26次	方形・東西約2.5m×南北約1m	約20~30cm	不明	地区中央・第7層		9世紀第2四半期~
SK444	112-9	26次	不整円形・直径約1.1m	約40cm	不明	地区中央・地山粘土~ 泥炭		不明
SK445	112-10	26次	椭円形・東西約90cm×南北約1.1m	約40cm	埋土より6枚の銅 鏡が出土・骨質な どからなるも津の 籠網と考える	地区中央・第7層 (新) SB396	第116図-2~5	14世紀~
SK446	112-11	26次	円形・直径約1.8m	約30cm	不明	地区中央・地山粘土~ 泥炭	(新) SB397	9世紀~
SK447	112-12	26次	方形・一边約75cm	約55cm	師政の屋土内から 多量の二・三し大の 石と赤褐色土器が 出土	地区中央・第7層	第116図-6~10	9世紀第4四半期
SK448	112-13	26次	長方形・東西約3.2m×南北約1m	約64cm	不明	地区中央・地山粘土層 ~泥炭	(新) SD346	不明
SK449	112-14	26次	円形・直径約80cm	約50cm	不明	地区中央・地山粘土層		不明
SK462	112-15	26次	方形・一边約95cm	約25cm		地区中央・第7層		9世紀第2四半期~
SK541	112-16	30次	長椭円形・東西約4.15m×南北 約90cm~1.1m	約10~20cm	燒土が混入。口一 くまでもある た。多量の上 部片と割りこぶし の大石も出土。 土器焼成遺構の可 能性あり	地区中央・地山粘土層	第116図-11, 12	9世紀第4四半期
SK542	112-17	30次	ほぼ円形・底部直径約1.2~1.3m	約70cm	25次調査地のSK 424土坑との類似 する形状六ヶ所	地区中央・地山粘土層	縄文施釉の土器小破 片が埋土内より数点 出土。	弥生中期か
SK543	112-18	30次	ほぼ長方形・東西約86cm×南北 約2.1m	約1.4~ 1.8m	不明	地区中央・地山粘土層	赤褐色土器環破片出 土	9世紀~
SK544	112-19	30次	隅丸長方形・東西約1.65m×南 北約30cm	約10~20cm	埋土上部に多量の 燒土灰化物混入	地区中央・地山粘土層		不明

鶴ノ木地区検出土坑一覧表（2）

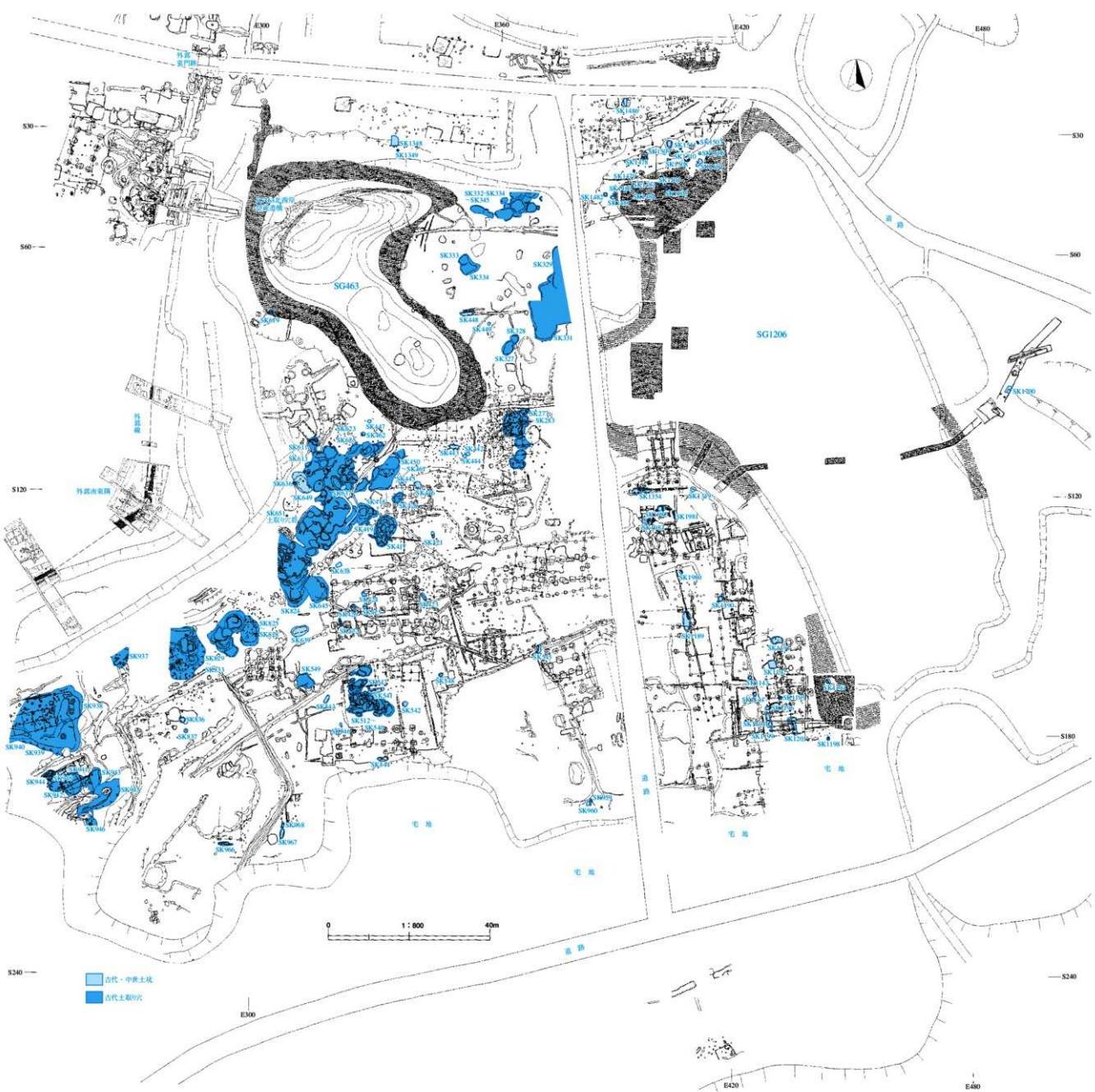
遺構番号	前面番号	調査次数	平面形・規模	深さ	検出状況・用途等	検出位置・層位・重複関係	出土遺物	時期
SK545	112-20	30次	一部張り出したある隅丸長方形・東西約1m×南北約2.2m	約25~45cm	南側と北側にピットを検出	地区中央・地山粘土層 (新) SD510	不明	
SK546	112-21	30次	卵形・東西約60~70cm×南北約1.3m	約30cm	不明	地区中央・地山粘土層	不明	
SK547	112-22	30次	不整長方形・東西約55cm×南北約1.05m	約35cm	不明	地区中央・地山粘土層 (新) SB491	9世紀~	
SK548	112-23	30次	梢円形・直径約95cm~1.1m	約15cm	不明	地区中央・地山粘土層	不明	
SK619	112-24	34次	円形・直径約1.2m	約60cm	不明	地区北部・第10層	9世紀第2四半期~	
SK636	112-25	35次	円形・直径約1m	約0.5m	埋土には直径約30cmの河原石をはじめ、こぶし大の石塊が大量に充填されていた。	地区西部・第4層		12世紀末~
SK637	112-26	35次	不整方形・東西約1.6m×南北約1.1m	約20cm	不明・埋土に埴土、炭化物が認められる。墓覆か。	地区西部・第4層		12世紀末~
SK638	112-27	35次	方形・東西約1.5m×南北約1m	約15cm	不明	地区西部・第4層		12世紀末~
SK639	113-28	35次	不整円形・直径約4.8m	約24~41cm	埋土内より、近世以降の盗器片などが出土している。	地区西部・第4層 第116回~19	17世紀~	
SK649	113-29	35次	不整円形・直径約6.7m	約50cm	西側底面には9本の打ち込みの杭を検出。木造埋構か。	地区西部・第4層	埋土より珠鋼系中世陶器破片出土。	12世紀末~
SK836	113-30	42次	円形・直径約1.5m	約1.2m	フラスト状土壠・底面には埋設的に深さ約10cm幅約7cmの開口がまわっている。	地区西部・地山粘土層	第116回~12~13 底部付近より、漆鉢土器の大きな破片と石器、同レバウで漆塗の破瓶をなす赤色顔料を検出した。	縄文後期
SK837	113-31	42次	円形・直径約30cm	約30cm	底面には直徑約30cm×高さ約5cmのピットが開け込まれており、柱状のもののが立っていた可能性が考案される。	地区西部・地山粘土層		縄文後期か
SK948	113-32	46次	方形・東西約20.5m×南北約11m	約50cm~1m	不明・SB926・S A934と同一方向・ SB926付埴設ほか	地区西部・第4層 (SX950點・整地上面)		12世紀~
SK959	113-33	50次	梢円形・直径約95cm	約75cm	柱振り方か	地区中央・旧表土		近世
SK960	113-34	50次	梢円形・直径約1.3cm	約55cm	柱振り方か	地区中央・旧表土		近世
SK966	113-35	51次	溝状・梢円形・東西約3.7m×南北約0.9m	約1m	Tピット・周辺調査で縄文時代の堅穴住居跡・Tピットを検出。同時期のものと判斷される。	地区西部・地山粘土層		縄文後期か
SK967	113-36	51次	長楕円形・東西約1.1m×南北約2.3m	約0.5m	土壙窓か	地区西部・地山粘土層		不明
SK968	113-37	51次	長方形・東西約0.6m×南北1.4m	約0.4m	土壙窓か	地区西部・地山粘土層		不明
SK1143	113-38	57次	円形・直径約1.0m	約30cm	廢棄土塹か	地区中央東側・地山粘土層・(古) SI1137	第116回~20、21	8世紀末・9世紀初
SK1144	113-39	57次	梢円形・東西90cm×南北1.2m	約35cm	不明	地区中央東側・地山粘土層・(不明) SI1138B		不明
SK1189	113-40	58次	梢円形・東西1.9m×南北5.3m	約30m	不明	地区中央東側・地山粘土層・(新) SB1146 (古) SI1153・SD1142		9世紀第1四半期
SK1190	114-41	58次	円形・直径約1.4m	約18cm	不明	地区中央東側・地山粘土層		不明
SK1191	114-42	58次	梢円形・東西1.3m×南北1.9m	30~35m	廢棄土塹か	地区中央東側・地山粘土層	瓦片出土	8世紀~
SK1192	114-43	58次	長方形・東西1.85m×南北2.2m	約15cm	不明	地山粘土層・(新) SI 1154~1155		9世紀前半~
SK1193	114-44	58次	方形・東西1.0m×南北1.1m	約10cm	不明	地区中央第4層・第6層		12世紀末~13世紀中葉
SK1194	114-45	58次	歪んだ長方形・東西1.0~1.2m×南北3.3m	約40cm	不明	地区中央東側・地山粘土層・(新) SB1150		12世紀末~13世紀中葉
SK1195	114-46	58次	梢円形・東西1.2m×南北1.0m	約35cm	不明	地区中央東側・地山粘土層・(新) SB1151・1152		12世紀末~13世紀中葉
SK1196	114-47	58次	梢円形・東西1.35m×南北1.0m	約15cm	不明	地区中央東側・地山粘土層・(新) SB1150		12世紀末~13世紀中葉

鶴ノ木地区検出土坑一覧表（3）

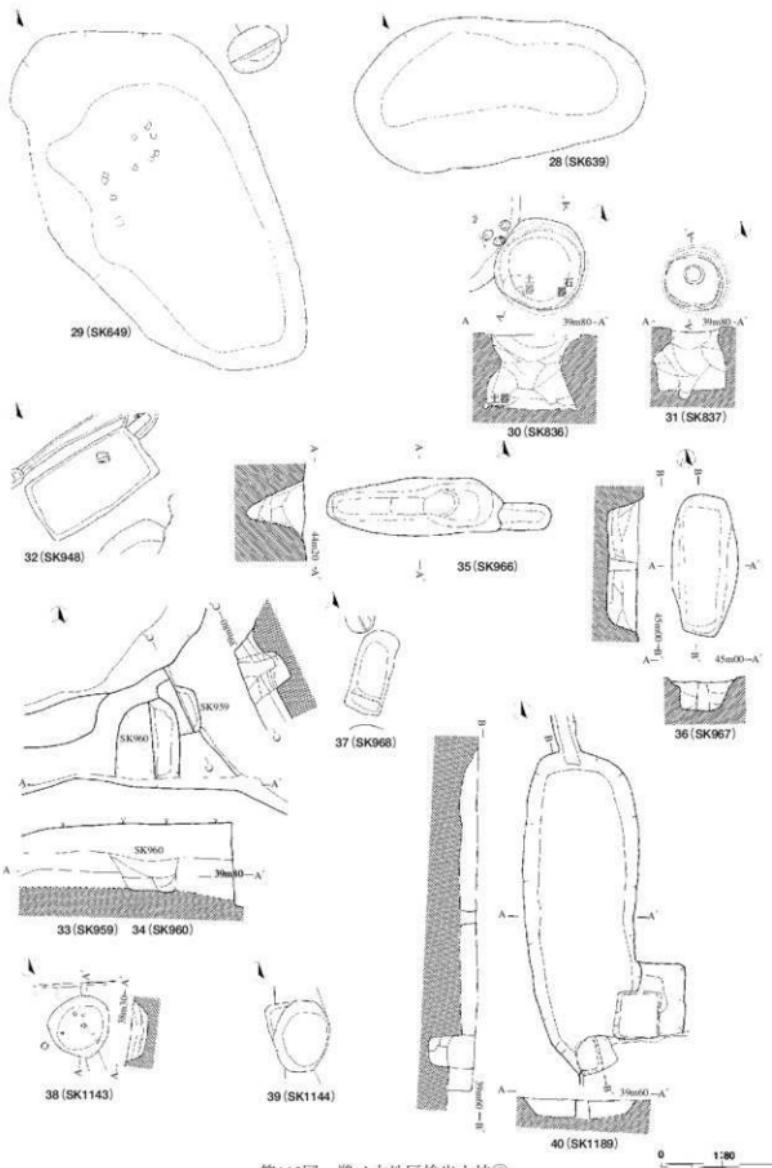
遺構番号	前面番号	調査次数	平面形・規模	深さ	検出状況・用途等	検出位置・層位・重複関係	出土遺物	時期
SK1198	114-48	58次	楕円形・東西0.9m×南北1.0m	約60cm	底部は内側に直径6cmの小掘り方と中央に40cm×50cmの方形のくぼみを有する。井戸跡等	地区中央東側・第4層		12世紀末～13世紀中葉
SK1199	114-49	58次	円形・直徑90cm	約25cm	不明	地区中央東側・地山粘土層		12世紀末～13世紀中葉
SK1201	114-50	58次	長方形・東西2.2m以上×南北4.8m	45～60cm	不明	地区中央東側・第4層 (古) SE1176・SD1183・ SB1150	第116回～22	12世紀末～13世紀前葉
SK1319	114-51	61次	楕円形・東西約1.4m×南北約1.25m	約32～49cm	不明	地区中央東側・地山粘土層		不明
SK1348	114-52	62次	不整形形・東西2.0m×南北2.7m	25cm	不明	地区北端地山飛砂層面から第9層	第116回～23	9世紀第4四半期
SK1349	114-53	62次	楕円形・東西30cm×南北40cm	20cm以上	埋納土塙か	地区北端・第9層	第116回～24～29 埋土上部より鐵鏃が1件出土した。	9世紀第4四半期
SK1354	114-54	63次	走んだ楕円形・東西約4.5cm×南北約1.6m	約25cm	不明	地区中央東側・地山粘土層・(古) SA1352		8世紀第2四半期
SK1478	115-55	67次	走んだ楕円形・東西1.35m×南北1.0m	約35cm	不明	地区北端・第9層		9世紀第4四半期
SK1479	115-56	67次	楕円形・東西45cm×南北70cm	約10cm	不明	地区北端・第9層	第116回～30、31	9世紀第4四半期
SK1480	115-57	67次	走んだ楕円形・東西80cm×南北65cm	約30cm	不明	地区北端・第5層		12世紀末～13世紀初
SK1481	115-58	67次	走んだ楕円形・東西1.3m×南北1.0m	約30cm	不明	地区北端・第5層		12世紀末～13世紀初
SK1482	115-59	67次	楕円形・東西1.2m×南北1.0m	約55cm	不明	地区北端・第5層	第116回～32	12世紀末～13世紀初
SK1483	115-60	67次	楕円形・東西30cm×南北60cm	約50cm	不明	地区北端・第5層		12世紀末～13世紀初
SK1484	115-61	67次	楕円形・東西55cm×南北45cm	約15cm	不明	地区北端・第5層		12世紀末～13世紀初
SK1486	115-62	67次	走んだ楕円形・東西0.4m×南北1.1m	約15cm	不明	地区北端・地山飛砂層・(新) SH1468		9世紀第4四半期～
SK1503	115-63	69次	走んだ楕円形・東西45cm×南北1m	約15cm	不明	地区北端・第9層		9世紀第4四半期～
SK1504	115-64	69次	不整形・東西2.2m×南北0.7～1.3m	約15cm	不明	地区北端・第5層		12世紀末～13世紀初
SK1505	115-65	69次	不整形・東西1.3m×南北1.25m	約15cm	不明	地区北端・第5層	第116回～33	12世紀末～13世紀初
SK1506	115-66	69次	走んだ楕円形・東西70cm×南北65cm	約10cm	不明	地区北端・第8層		10世紀第1四半期～
SK1507	115-67	69次	楕円形・東西100cm×南北90cm	約10cm	不明	地区北端・第8層		10世紀第1四半期～
SK1508	115-68	69次	楕円形・東西60cm×南北50cm	約10cm	不明	地区北端・第10層		9世紀第2～第3四半期
SK1509	115-69	69次	走んだ楕円形・東西1.5m×南北2.0m	約55cm	不明	地区北端・第10層		9世紀第2～第3四半期
SK1510	115-70	69次	楕円形・東西45cm×南北60cm	約20cm	不明	地区北端・第10層		9世紀第2～第3四半期
SK1511	115-71	69次	楕円形・東西60cm×南北50cm	約20cm	不明	地区北端・第10層		9世紀第2～第3四半期
SK1700	115-72	81次	不整形・東西1.1m以上×南北2.1m以上	約35cm	不明	地区東部・地山粘土層		不明
SK1980	115-73	91次	楕円形・東西78cm×南北100cm	約25cm	埋土より骨片と炭化物が出土した。 火葬墓か	地区中央東側・地山粘土層面		9世紀～
SK1981	115-74	91次	不整形・東西60cm以上×南北200cm	10cm前後	不明	地区中央東側・第10層		8世紀第2四半期～
SK1982	115-75	91次	不整形・東西205cm×南北110cm以上	10～20cm	不明	地区中央東側・第8層 (古) SH1979		8世紀末～9世紀初
SK1983	115-76	91次	L字の溝状の不整形・東西260cm以上×南北40～80cm	20～40cm	土器断面観察から は、一度掘り直さ れていますと推定さ れる。	地区中央東側・第8層 (古) SH1978		8世紀末～9世紀初



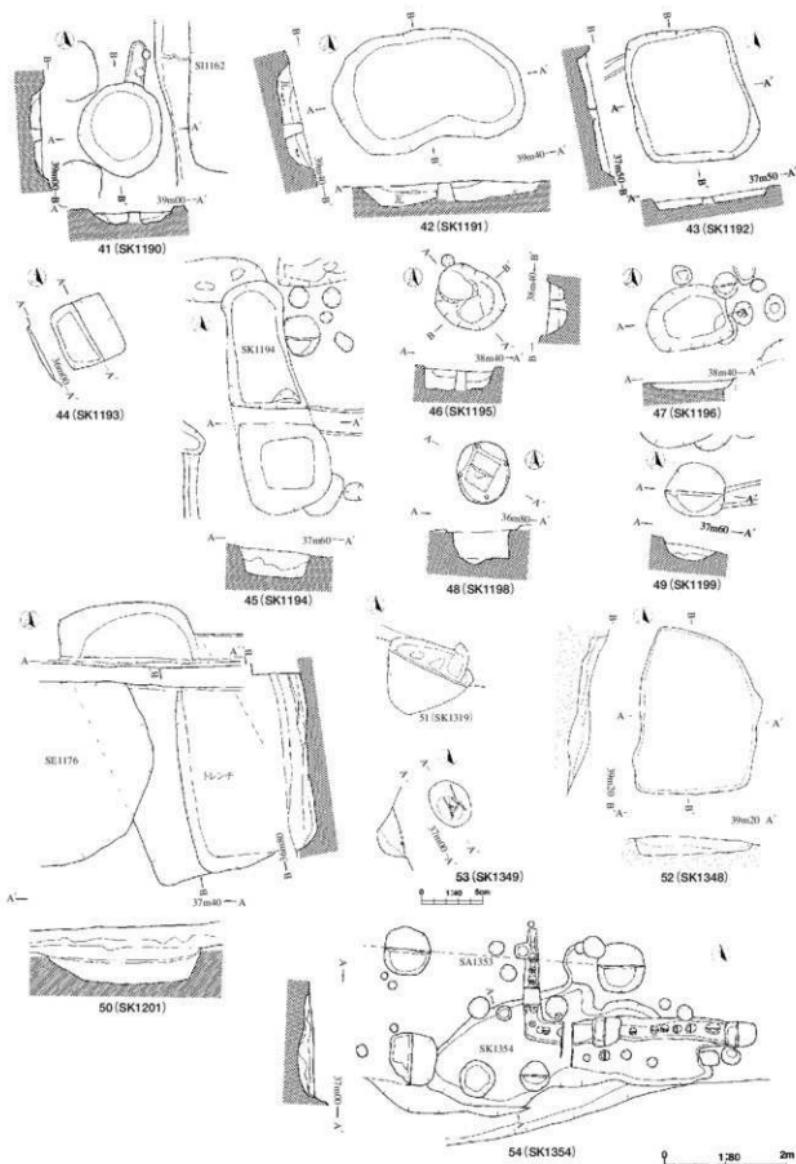
第111図 箕ノ木地区検出土坑①



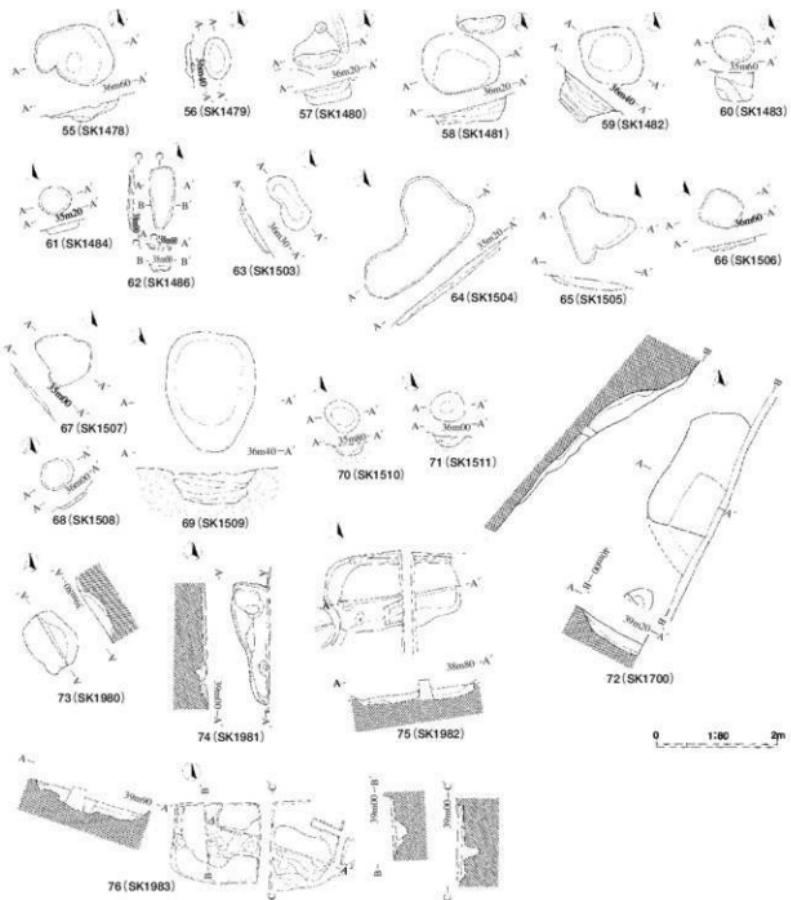
第112図 鶴ノ木地区検出土坑・土取り穴位置図



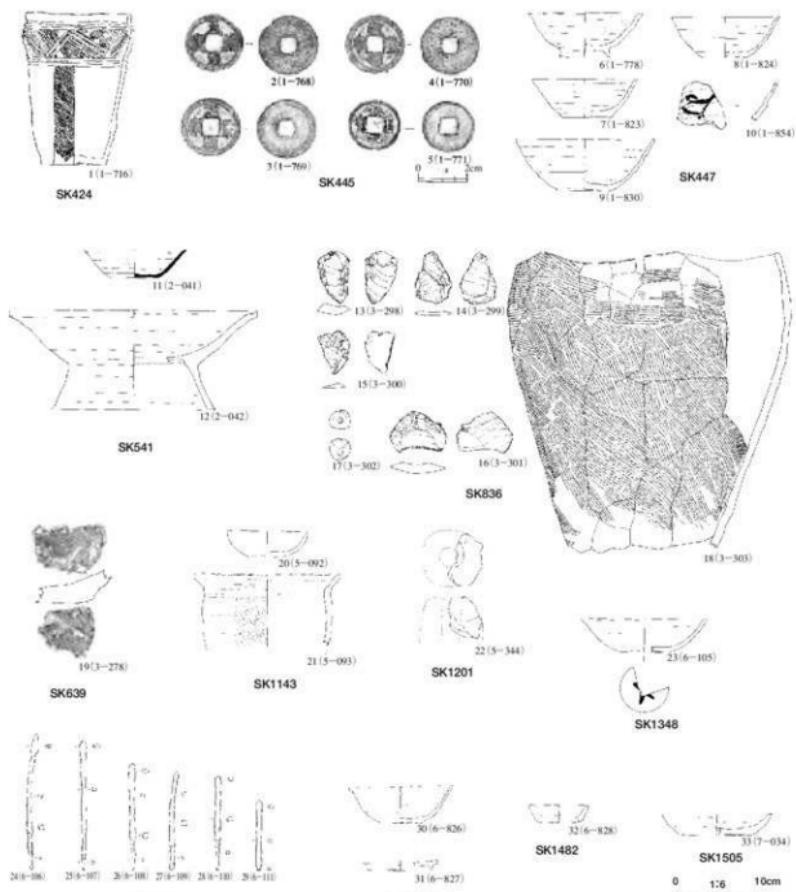
第113図 鶴ノ木地区検出土坑②



第114図 猿ノ木地区検出土坑③



第115図 鶴ノ木地区検出土坑④



第116図 蜂ノ木地区検出土坑出土遺物一覧表（1）

蜂ノ木地区検出土坑出土遺物一覧表（1）

回面 番号	遺物 番号	種類・器種	出土遺物・層位	口径等 (cm)	器高等 (cm)	底径等 (cm)	底部切り離し	調査等	時期
116-1	1-716	圓生式土器・鋤	SK424土坑埋土	14	18.3		不明	口部に沈没文めぐるあいだに変形工 字文	弥生中期
116-2	1-768	鉢	SK445土坑埋土	2.42	方孔0.65			天保通宝（初期北宋1017年）	積書
116-3	1-769	鉢	SK445土坑埋土	2.45	方孔0.66			元豐通宝（初期北宋1078年）裏面	
116-4	1-770	鉢	SK445土坑埋土	2.41	方孔0.61			元豐通宝（初期北宋1078年）	
116-5	1-771	鉢	SK445土坑埋土	2.11	方孔0.67			洪武通宝（初期明1368年）	積書
116-6	1-778	土師器・呑付壺	SK447土坑埋土	13.3	5.5	6	系切り	無調整、内面黒色処理	9C第4四
116-7	1-823	赤褐色土器・环A	SK447土坑埋土	12.8	4.8	6.1	系切り	無調整	9C第4四
116-8	1-824	赤褐色土器・环A	SK447土坑埋土	13.1	5	5.6	系切り	無調整	9C第4四
116-9	1-830	赤褐色土器・环A	SK447土坑埋土	16.9	6.3	6.7	系切り	無調整	9C第4四
116-10	1-854	赤褐色土器底部破片	SK447土坑埋土	6.7				底面外側墨書き。判読不能	
116-11	2-041	環形器・环	SK341土坑埋土	12.5	3.4	5.9	系切り?	無調整	9C第4四

鶴ノ本地区検出土坑出土遺物一覧表（2）

画面番号	遺物番号	種類・器種	出土遺構・層位	口径等 （cm）	器高等 （cm）	底径等 （cm）	底部切り離し	調整等	時期
116-12	2-042	赤褐色土器・円付环	SK1541土抗理土	30.4	12.2	20	不明		9C後半
116-13	3-298	石器・球器	SK1536土抗理土	幅3.9	長5.6	厚2.9			9C後半
116-14	3-299	石器・球器	SK1536土抗理土	幅4.5	長5.6	厚2.4			9C後半
116-15	3-300	石器・球器	SK1536土抗理土	幅3.0	長5.0	厚2.5			9C後半
116-16	3-301	石器・球器	SK1536土抗理土	幅6.8	長5.4	厚2.1			9C後半
116-17	3-302	有孔石製（珪組）	SK1536土抗理土	幅2.6					9C後半
116-18	3-303	圓文土器・深鉢	SK1536土抗理土						9C後半
116-19	3-278	蓆跡中世陶器・要疣瓦片	SK1539土抗理土				不明		12C後半～
116-20	5-092	赤褐色土器・环B	SK1143土抗理土	9.7	3.3	4.2	不明	底部手持ちケズリ	8C末～9C初
116-21	5-093	土師器・壺	SK1143土抗理土	17.9	不明	不明	不明	口横ナギ、外面部ミガキ擦部に横裂の多茎状縫合あり	8C後半
116-22	5-344	フイゴ組I	SK1209土抗理土	不明	不明	不明	不明	破片	不明
116-23	6-105	赤褐色土器・环A	SK1348土抗理土	15.3	4.1	6	系切り	無調整。底部に墨書き「十」+	
116-24	6-106	鉢	SK1349土抗理土	幅6.6	長21.6	厚2.5		定期品	
116-25	6-107	鉢	SK1349土抗理土	幅6.5	長21.5	厚2.5		定期品	
116-26	6-108	鉢	SK1349土抗理土	幅6.6	長21.3	厚2.5		定期品	
116-27	6-109	鉢	SK1349土抗理土	幅6.7	長21.2	厚2.6		定期品	
116-28	6-110	鉢	SK1349土抗理土	幅6.7	長21.5	厚2.6		定期品	
116-29	6-111	鉢	SK1349土抗理土	幅6.6	長21.5	厚2.5		定期品	
116-30	6-826	赤褐色土器・环A	SK1479土抗理土	12.9	4.5	5	系切り	無調整	9C後半
116-31	6-827	灰釉荷葉（台付）	SK1479土抗理土	不明	不明	7.8	不明	K90号空式	9C後半
116-32	6-828	かわらけ・小皿	SK1482土抗理土	7.3	2.1	4.9	不明		12C末～13C初半
116-33	7-034	かわらけ・大皿	SK1505土抗理土	不明	不明	8.3	系切り	無調整	12C末～13C初半

## 11 土取り穴跡（第111・117図・118図、図版36・37）

土坑のうち、土取りを目的として不規則重複して掘り込まれた規模の大きいな穴を土取り穴とした。地区全体で97基報告されているが、第35次調査地のように土取り穴群として一括で報告されているものや複雜に重複して掘り込まれたものもあり、基數自体はさらに増える。

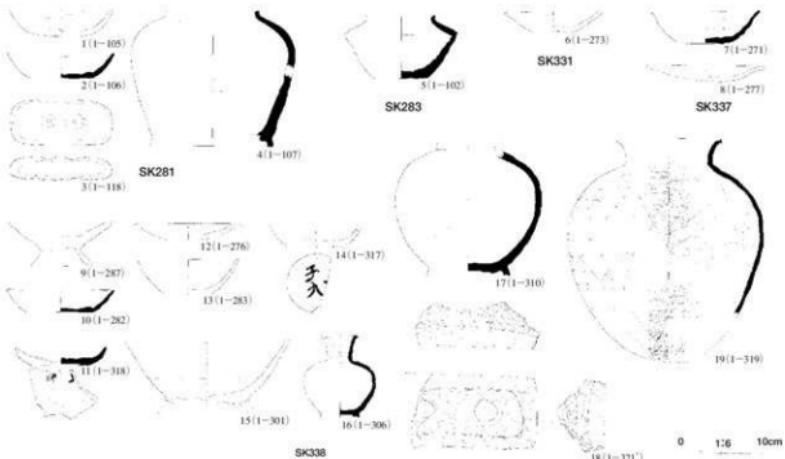
原則として遺構番号順に遺構および遺物集成図と一覧表に示した。遺構については基數・平面形・規模・深さ、検出位置・層位・重複関係、出土遺物、時期の順に一覧表に示した。出土遺物等から年代把握が可能なものについては表に示した。

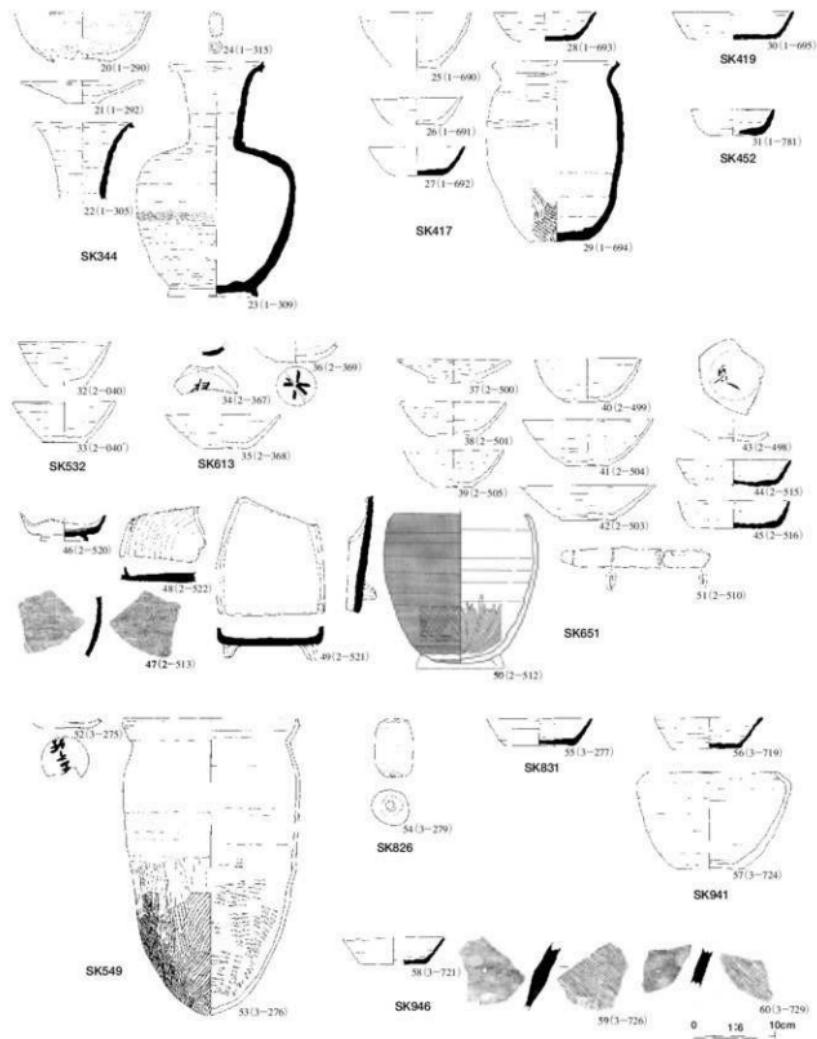
検出位置については、SC463沿地跡東側にあたる地区中央北側や、小規模な谷地形が入り込む地区中央西寄りから地区西部など、地山粘土が露出していたと推定される付近を中心に集中して検出されている。複数から十数基の土取り穴がまとまって複雜に重複しながら掘り込まれており、時間差はなく一時期に掘り込まれたと判断される。時期的には平安時代の9世紀第2四半期以降に位置づけられるものが大半を占める。特に、地区中央東寄りに建物群が存在した段階の西側周辺のものは、9世紀第2～第3四半期頃に掘り込まれ、埋ったと考えられるものが多い。土取り後に一時期に完全に埋め戻されるものは少なく、地区西部などでは窪み状地形として残り、そこに黒褐色土を主体とする自然堆積層が堆積した状況が把握されている。第18次調査地や第48次調査地付近は、古代の土取り穴が中世になり整地地業により本格的に埋め戻され、利用されている。

なお、地区南部から中央東側にかけては、近世以降に土取りが盛んに行われ、遺構面が破壊されている。

鶴ノ木地区検出土取り穴一覧表（1）

遺構番号	因縁番号	調査実数	土取穴基數・平面形・規模	深さ	検出位置・層位・複重開拓	出土遺物等	時期
SK277～SK283	111	18次	7基・歪んだ四形・直径2.5～6.0m	15～60cm	地区中央部・地山粘土層面(新) SB268	SK281出土第117回～1～4 SK281出土第117回～5底部 より炭化瓦	9世紀第2四半期～
SK327～SK328	111	22次	2基・歪んだ四形・直径2.2～4.0m	20～40cm	地区中央部北側・地山粘土層面		不明
SK329～SK331	111	22次	2基・不整形・一辺10.0～13.0m	20～40cm	地区中央部北側・地山粘土層面(新) SD346	SK331出土第117回～6	9世紀第4四半期～
SK333～SK334	111	22次	2基・不整形・一辺2.0～5.0m	20～40cm	地区中央部北側・地山粘土層面		不明
SK332～SK336～SK345	111	22次	13基・歪んだ四形・直径1.5～5.5m	70～223cm	地区中央部北側・地山粘土層面	SK337出土第117回～7～8 SK338出土第117回～9～19 SK344出土第117回～20～24	9世紀第2四半期～
SK417～SK420	111	25次	4基・歪んだ四形・直径2.2×長径8.2m、歪んだ四形・直径1m	50～100cm	地区中央部・地山粘土層面(新) SB396(古) SD411	SK417出土第117回～25～29 SK418出土第117回～30	9世紀第2四半期～
SK450～SK461	111	26次	11基・不整形・一辺2.0～4.0m、歪んだ四形直 径1.6～3.6m	20～110cm	地区中央部・地山粘土層面(古) SB428、SE432、SD437	SK452出土第117回～31	9世紀第2四半期～
SK512～SK540	111	30次	28基・不整形・一辺0.4×1.0m～一辺2.0×3.2 m	20～80cm	地区中央部・地山粘土層面	SK552出土第117回～32、33 33基以上瓦片・工具類・鐵器等 片岩土	9世紀第2四半期～
SK549	111	30次	1基・不整形・一辺3.5×4.5m	20～80cm	地区中央部・地山粘土層面	SK549出土第118回～52、53	9世紀第3四半期～
SK611～SK613	111	34次	3基・不整形四形・直径3.0～4.0m	50～100cm	地区中央部・地山粘土層面	SK613出土第118回～34～36	9世紀第3四半期～
SK623～SK625	111	34次	3基・不整形四形・直径2.0～4.0m	30～50cm	地区中央部・地山粘土層面	埋土より瓦片・壊破片・赤褐色 土器片出土	9世紀～
SK651 土取り穴群	111	35次	35基・不整形四形・直径1.0～5.0m・幅8.2m×長 さ30mの範囲にまとめて検出	50～100cm	地区西部・地山粘土層面	SK651出土第117回～34～51	9世紀第1四半期～9世紀 第4四半期
SK824	111	42次	1基・東西6m×南北5.5m	150cm	地区西部・地山粘土層面	第131回～1～8 祭祀遺跡で詳細報告	9世紀第3四半期～
SK825～SK828	111	42次	4基・不整形四形・直径4.5～6.5mを東西約13m ×南北約12mの範囲に段状に重ねて掘り下げる	100cm	地区西部・地山粘土層面	SK826出土第118回～54 地山土より瓦片・壊破片・ 赤褐色土器片出土	9世紀～
SK829～SK833	111	42次	4基・不整形四形・直径2.0～5.0mを東西約9m ×南北約12mの範囲に段状に重ねて掘り下げる	150cm	地区西部・地山粘土層面	SK831出土第118回～55 地山土より瓦片・赤褐色土 器片出土	9世紀第2四半期～
SK937～SK946～ SK948	111	48次	11基・不整形四形・直径3.0～5.0mや橢円形直径 3.0～7.0m×長径6.0～10.0mを東西約20m× 南北約33mの範囲に段状に重ねて掘り下げる	50～100cm	地区西部・地山粘土層面	SK946出土第118回～58～60 地山土より瓦片・赤褐色土 器片出土	9世紀第2四半期～





第118図 薩ノ木地区検出土取り穴出土遺物②

鶴ノ木地区検出土取り穴出土遺物一覧表

図面 番号	遺物 番号	種類・器種	出土遺物・部位	口径等 (cm)	高さ等 (cm)	底径等 (cm)	追跡切り離し	調 整 等	時期
117-1	1-105	土師器・环(漆内里)	SK281土拭環面	12.5	3.2	4.7	不明	内外面ミガキ無し	9C前半
117-2	1-106	銀忠器・环	SK281土拭環	12.9	3.1	7.7	ヘラ切り	ナデ、底部思慮あるが判読不能	9C第2
117-3	1-118	四石	SK281土拭環土	幅8.5	長さ12.6	厚さ2.8	—	鏡文	9C第2
117-4	1-107	銀忠器・壺	SK281土拭環面	11.5	16.7	15	不明	—	9C第2
117-5	1-102	銀忠器・壺	SK283土拭環土	—	—	6.5	不明	底部から全体縦まで手持ちケズリあり	9C第2
117-6	1-273	赤褐色土器・瓶	SK331土拭環土	13.1	3.3	7.4	系切り	無調整、底部から全体縦まで手持ちケズリあり	9C第4
117-7	1-271	銀忠器・环	SK337土拭環土	13.3	4.2	4.3	系切り	無調整	9C第4
117-8	1-277	赤褐色土器・瓶	SK337土拭環土	13.6	1.9	4.5	系切り	無調整	9C第4
117-9	1-287	土師器・台付环	SK338土拭環面	12.7	5.4	7.3	系切り	底部外側に「×」刻文、内側ミガキ、黒色処理	10C後半
117-10	1-282	銀忠器・环	SK338土拭環面砂利土	13.3	2.8	8	ヘラ切り	無調整、底部思慮「ノ上」二字墨書き	9C第1
117-11	1-318	銀忠器・环	SK338土拭環面砂利土	—	—	6.9	系切り	無調整、底部思慮「ノ上」二字墨書き	9C第1
117-12	1-276	赤褐色土器・瓶	SK338土拭環土	13.3	2	5	系切り	無調整	9C第4
117-13	1-283	赤褐色土器・环	SK338土拭環面砂利土	12.5	4.3	6	系切り	無調整	9C第3
117-14	1-317	赤褐色土器・台付环	SK338土拭環土	—	—	7.3	系切り	無調整、底部墨書き「子、久」	9C第3
117-15	1-301	赤褐色土器・台付环	SK338土拭環面砂利土	19.8	3.9	不明	不明	底部ナデ調整	9C第4
117-16	1-306	銀忠器・小形壺	SK338土拭底面	4.6	10	4.9	系切り	底部に墨書き口印	9C第2
117-17	1-310	銀忠器・壺	SK338土拭底面	—	—	10.3	不明	底部全面ナデ、体部下半からケズリ	9C第2
117-18	1-321	銀忠器・壺	SK338土拭底面	—	—	不明	不明	所持に安樂でないケズリ合子状容器の蓋?	不明
117-19	1-319	銀忠器・大壺	SK338土拭底面	26	54.6	不明	不明	外側叩き、内面ナメ板根柢底部カキ目	9C第2
117-20	1-290	土師器・壺	SK344土拭黒色砂	16.7	6	7.3	系切り	底部調整、体部下端ヘラケズリ内側黒色処理	9C第4
117-21	1-292	赤褐色土器・瓶	SK344土拭灰褐色土	15	2.7	4.2	系切り	無調整	9C第4
117-22	1-305	銀忠器・長脚鋸頭部	SK344土拭灰褐色土	11.9	不明	不明	不明	鏡部に一段程より部分的に自然軸体部半手持ちケズリ、下半回転ケズリ片端に自然軸、鏡に縫	9C第4
117-23	1-309	銀忠器・長脚鋸	SK344土拭灰褐色土	11.3	28.8	11	不明	—	9C第4
117-24	1-315	土錐	鏡1.6	長さ2.9	—	—	—	孔径最大7mm	不明
117-25	1-690	赤褐色土器・台付环	SK417土拭環土	13.5	不明	不明	系切り	無調整	9C第2
117-26	1-691	赤褐色土器・环A	SK417土拭環土	11.2	3.3	5.9	系切り	無調整	9C第2
117-27	1-692	銀忠器・环	SK417土拭環土	11.8	3.5	5.8	ヘラ切り	斜いナデ	9C第2
117-28	1-693	銀忠器・环	SK417土拭環土	12.5	3.5	6.8	ヘラ切り	斜いナデ	9C第2
117-29	1-694	銀忠器・壺	SK417土拭環土	14.9	22.1	7.3	不明	底部にもタクミあり。体下半タクミ内側巻上げ型あり	9C第2
117-30	1-695	銀忠器・环	SK419土拭環土	14.7	3.4	10.4	ヘラ切り	底部回転ヘラケズリ	9C第2
117-31	1-781	銀忠器・环	SK452土拭環土	10.1	3.2	5.8	系切り	無調整	9C第2
117-32	2-040	赤褐色土器・环A	SK332土拭	11.2	5.4	5.2	系切り	無調整	9C第2
117-33	2-047	赤褐色土器・环A	SK332土拭	12.5	5	5.3	系切り	無調整	9C第3
117-34	2-367	銀忠器・环破片	SK313土拭環土	—	—	不明	ヘラ切り	斜いナデ、底部墨書き「漆」、「林」記号	9C
117-35	2-368	赤褐色土器・环A	SK613土拭環土	14	4.2	5.3	系切り	無調整	9C第3
117-36	2-369	赤褐色土器・环A	SK613土拭環土	—	—	4.8	系切り	無調整、底部墨書き「w」記号	9C第4
117-37	2-500	赤褐色土器・台付皿	SK651土拭環土	13.8	2.8	6.3	系切り	無調整、内側墨書き	9C第4
117-38	2-501	赤褐色土器・环A	SK651土拭環土	12.7	4.2	6	系切り	無調整	9C第2
117-39	2-505	赤褐色土器・环A	SK651土拭環土	12.5	4.5	4.7	系切り	無調整	9C第4
117-40	2-499	赤褐色土器・环A	SK651土拭環土	13.1	5.4	5.5	系切り	無調整	9C第3
117-41	2-504	赤褐色土器・环A	SK651土拭環土	16	5.7	5.5	系切り	無調整	9C第4
117-42	2-503	赤褐色土器・环A	SK651土拭環土	16.4	4.3	6.8	系切り	無調整	9C第4
117-43	2-498	赤褐色土器・环A破片	SK651土拭環土	—	—	5.8	系切り	無調整、底部に墨書き	9C
117-44	2-515	銀忠器・环	SK651土拭環土	14	3.2	9	ヘラ切り	斜いナデ、内面に保状	9C第1
117-45	2-516	銀忠器・环	SK651土拭環土	13.7	3.4	9.3	ヘラ切り	斜いナデ	9C第1
117-46	2-520	銀忠器・台付环	SK651土拭環土上層	—	不明	5.6	ヘラ切り	内側墨書き、鏡に軋印	9C第1
117-47	2-513	銀忠器破片	SK651土拭環土	—	不明	不明	不明	不明	不明
117-48	2-522	銀忠器破片	SK651土拭環土	—	不明	不明	不明	底部は回転ヘラケズリ	不明
117-49	2-521	銀忠器・風字錠	SK651土拭環土	幅13.0	長さ不明	厚さ1.0	不明	鏡八面に墨書き、鏡周縁ケズリ	9C
117-50	2-512	土師器・風字錠	SK651土拭環土	—	—	—	不明	外側黒色処理、体部回転ヘラケズリ下方はヘラミガキ	不明
117-51	2-510	刀子	SK651土拭環土	幅2.2	長さ不明	厚さ0.5	不明	鏡面	不明
117-52	3-275	赤褐色土器・环A	SK549土拭環土	—	—	5.7	系切り	無調整、上横ヨナデ、体部下平行	9C
117-53	3-276	赤褐色土器・長脚彌	SK549土拭環土	22	36	—	—	底部上ヨナデ、体部下平行	9C第3
117-54	3-279	土錐	SK262土拭環土	幅4.7	7.3-9.4	不明	不明	丸目3cm	不明
117-55	3-277	銀忠器・环	SK331土拭環土	13	3.3	8.2	ヘラ切り	斜いナデ	9C第2
117-56	3-719	銀忠器・环	SK941土拭環土	13.4	3.8	8.3	ヘラ切り	黒色斜いナデ	9C第2
117-57	3-724	赤褐色土器・环	SK941土拭環土數丁厚	15.9	1.2	8.1	不明	コロヘ瓦に残る	9C第2
117-58	3-721	銀忠器・环	SK946土拭環土	12.3	3.3	7.8	ヘラ切り	斜いナデ調整	9C第2
117-59	3-726	陶器系器物要破片	SK946土拭環土	—	—	不明	不明	外側平行条線タタキ内面無文当て具痕	12C後半~
117-60	3-729	陶器系器物要破片	SK946土拭環土	—	—	不明	不明	外側平行条線タタキ内面無文当て具痕	12C後半~

## 12 祭祀遺構（第119～134図、図版20・24～26・37）

鵜ノ木地区一帯は、秋田城跡のなかでも祭祀遺構と遺物が特に多く、集中して検出されている。前述したSE406内の墨書埠等を除き、祭祀遺構と遺物は主に平安期を中心に検出され、出土している。SG462沼地跡北西岸では主に律令祭祀、「祓」に関係する水辺の祭祀遺構が検出されている。他に墨書土器の廃棄遺構や祭祀用の特殊な小型土器の一括廃棄遺構が検出されている。また、明確な遺構を伴わないが、SG462沼地跡やSG1206沼地跡岸辺付近では、祭祀行為に伴い一括廃棄された土器類が出土している。鵜ノ木地区については、秋田城跡の他地区に比して祭祀遺物と遺構が特に多く検出、出土する特殊性が指摘される。

### 1) SG463沼地跡北西岸祭祀遺構（第119～128図、図版24～26・45～51）

地区北西部の第39次調査においてSG462沼地跡北西岸部分で検出された祭祀遺構である。北西岸に周辺の沼地部分からは遺構としてSD738大溝やしがらみを組んだ土留めと思われるSA739、SA740A・B杭列が検出された。さらにその内側の北西岸では、SX741テラス状遺構とされたステップ状の張り出し部が人工的に造成されており、その張り出し部と周囲の沼地部分から、人面墨書土器、人形・馬形・矢羽根形等の形代類、斎串・刺串、絵馬状木製品、呪符木簡等の木製祭祀具、さらに多量の土器類と曲物・挽物皿等の木製品類が出土した。人面墨書土器や人形・馬形・矢羽根形等の形代類、斎串類等は、律令祭祀遺物と呼ばれ、都城をはじめとして全国の官衙遺跡において出土例がある。それらのセットは「祓」の祭祀行為に用いられたと考えられる。それら水辺の遺構と祭祀遺物の様相から、SG462沼地跡北西岸が、域内またはその場でとり行われた「祓」の祭祀の道具類を水に流す「流し」の場所いわゆる「祓所」であったと判断される。

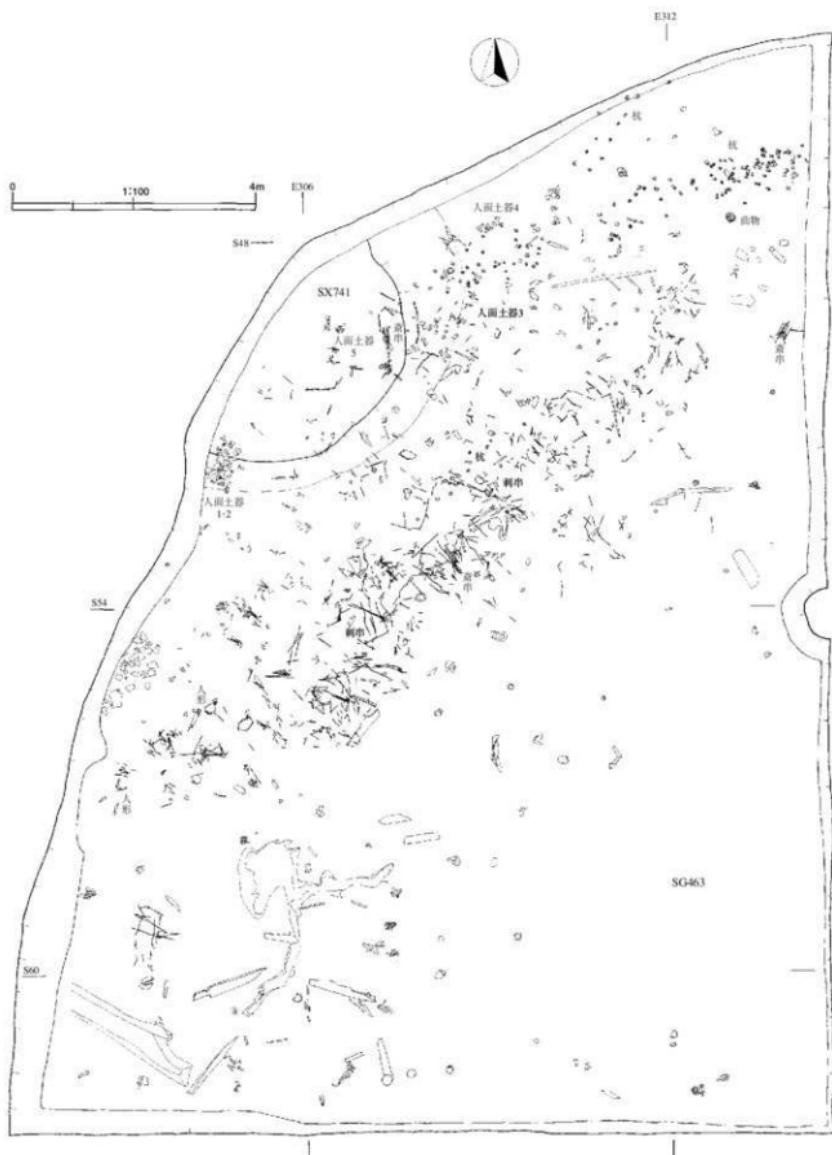
祭祀遺物のうち、人面墨書土器としては、赤褐色土器平底小型壺が3個体、平底中型壺が2個体が出土した。いずれの人面にも髪が描かれているのが最大の特徴である。また、特徴的なものとして、体部外面に目玉のみを描いた赤褐色土器壺2点が出土した。

形代類のうち人形は8点出土しており、うち1点は全長36cmを超える大型である。いずれも薄板で、人面を確認できるものが3点で、うち1点には鬚を表し、垂れた眉毛、やや曲がった鼻、口は歯が描かれている。大部分は腕、足、頭部の一部が折れているか欠損しているのが多く、完形品はない。人型についてはこの他に、国営調査時にSG1206沼地跡から1点の出土が報告されている。

馬形は1点のみの出土で、薄板を欠き込みなどにより頭・足・尾を抽象的に表現したものである。地面に差し込むための棒を突き刺す穴を穿つ例もあるが、ここでは認められない。矢羽根型として9点が報告されているが、うち7点は幅広の鍔刃部、2点は無茎式の鍔形の可能性がある。なお、板状製品の上部に穿孔したものが1点出土しており、墨書きは認められないが、絵が消失したか、当初より描かれていなかった形で絵馬として祭祀に使用された可能性が高い。

斎串については100点以上が出土している。奈良文化財研究所の斎串分類に基づけば、C類、E類、F類のタイプが認められるが、そのうち上端部を主頭状にし、下端部を劍先状または主頭状にするC類が最も多い。C類、E類、F類ともほとんどが頂部に板に対して平行あるいはやや直行するように切り込みがある2類タイプのもので、御幣が挟み込めるように加工してある。なお、斎串類のうち、従来の報告では上端に切り込みを伴わない串状製品を「刺串」と呼称している。

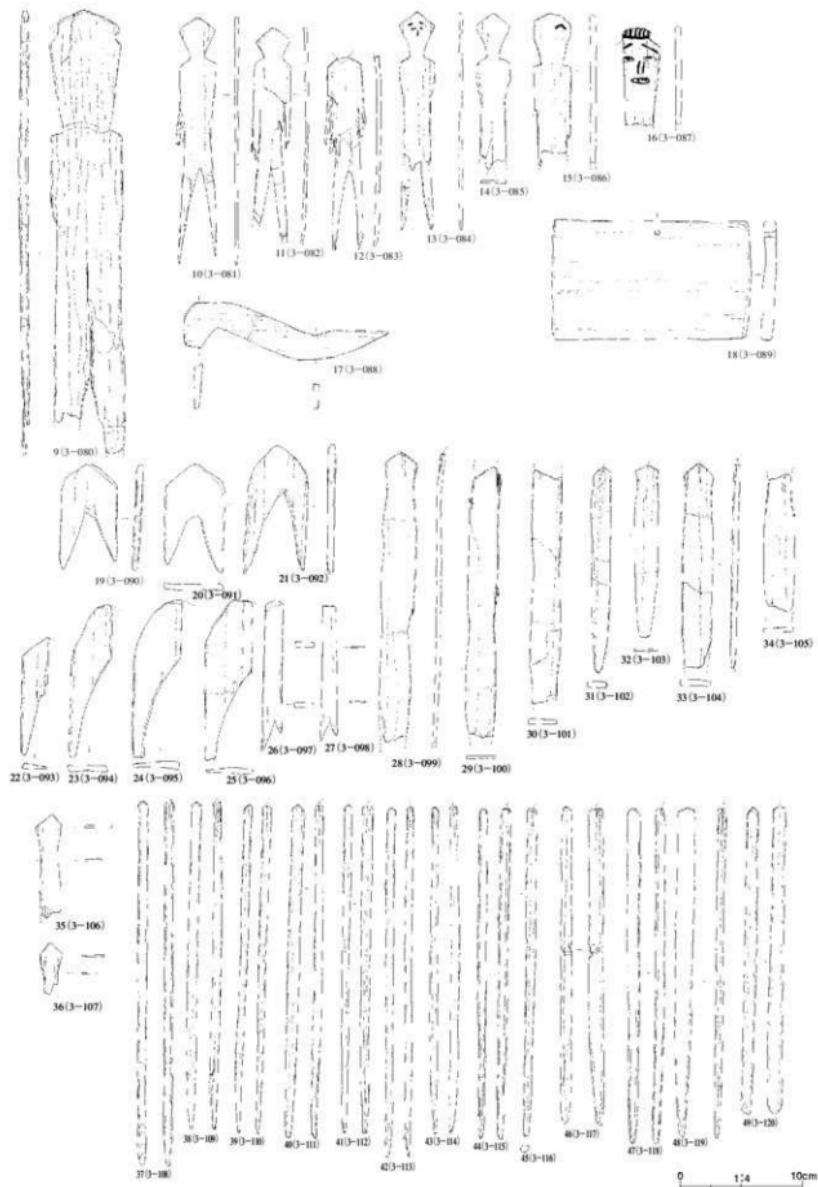
「祓」の祭祀行為に用いたと考えられる人面墨書土器や形代類、斎串類のセットについては、同じ出羽国内では、山形県俵田遺跡等に水辺において各祭祀具のセット関係や配置までが詳細に把握され



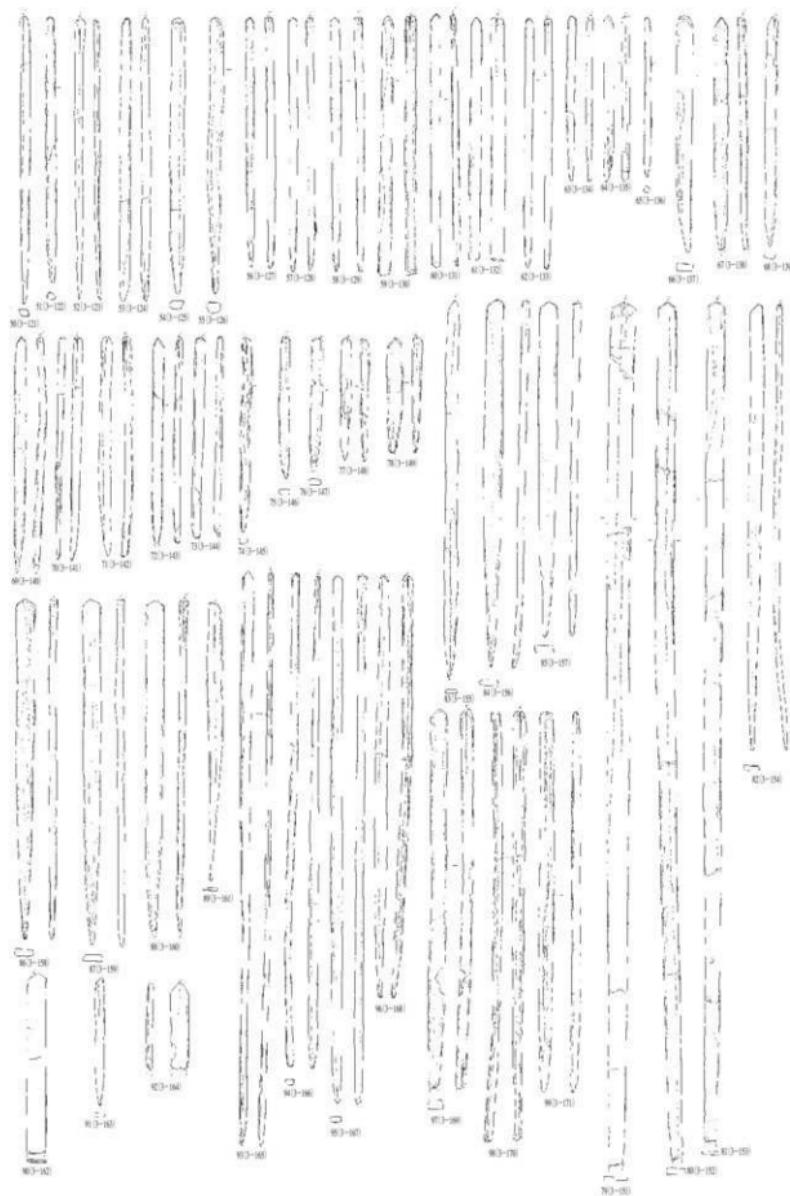
第119図 SG463沼地跡北西岸祭祀遺構



第120図 SG463沿地跡北西岸祭祀遺構出土遺物①

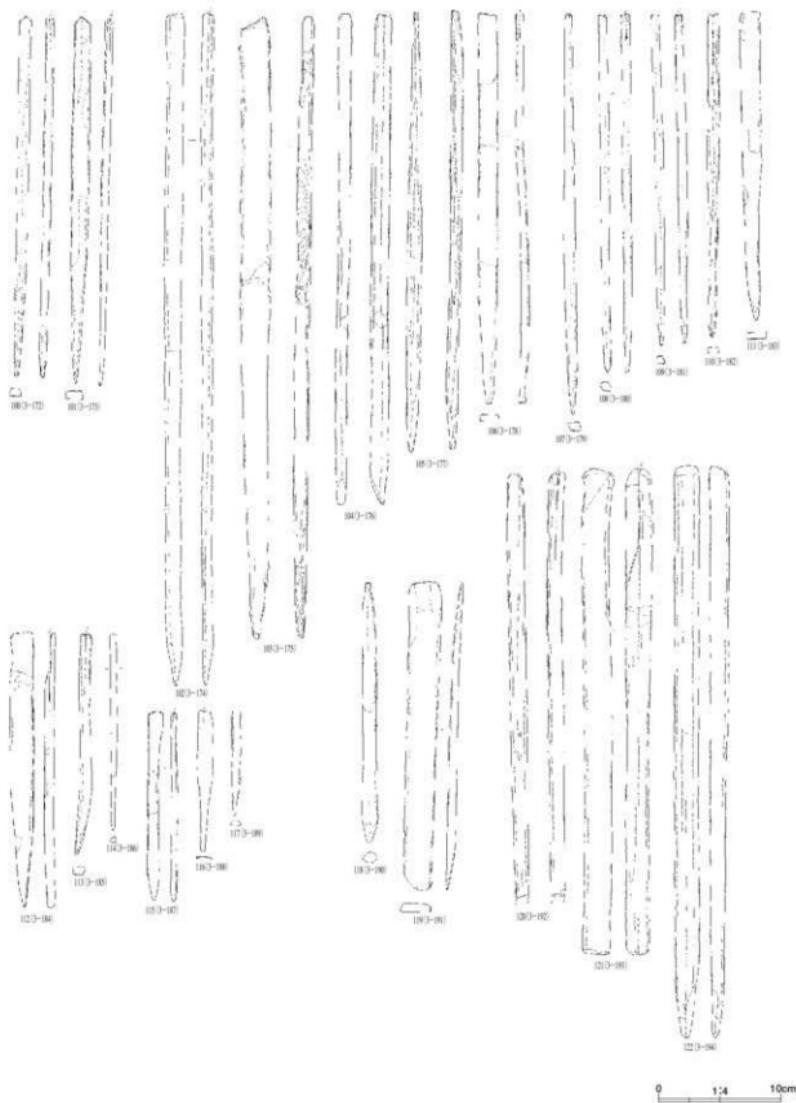


第121図 SG463沼地跡北西岸祭祀遺構出土遺物②

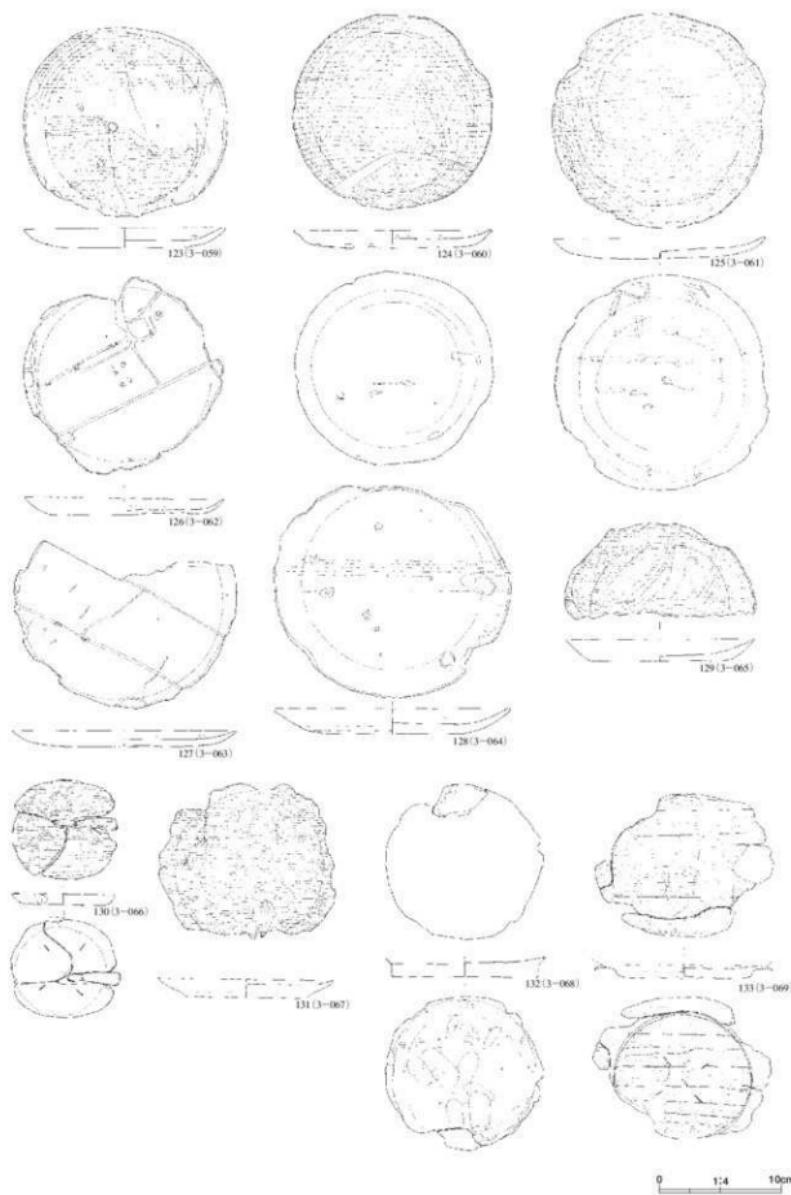


第122図 SG463沼地跡北西岸祭祀遺構出土遺物③

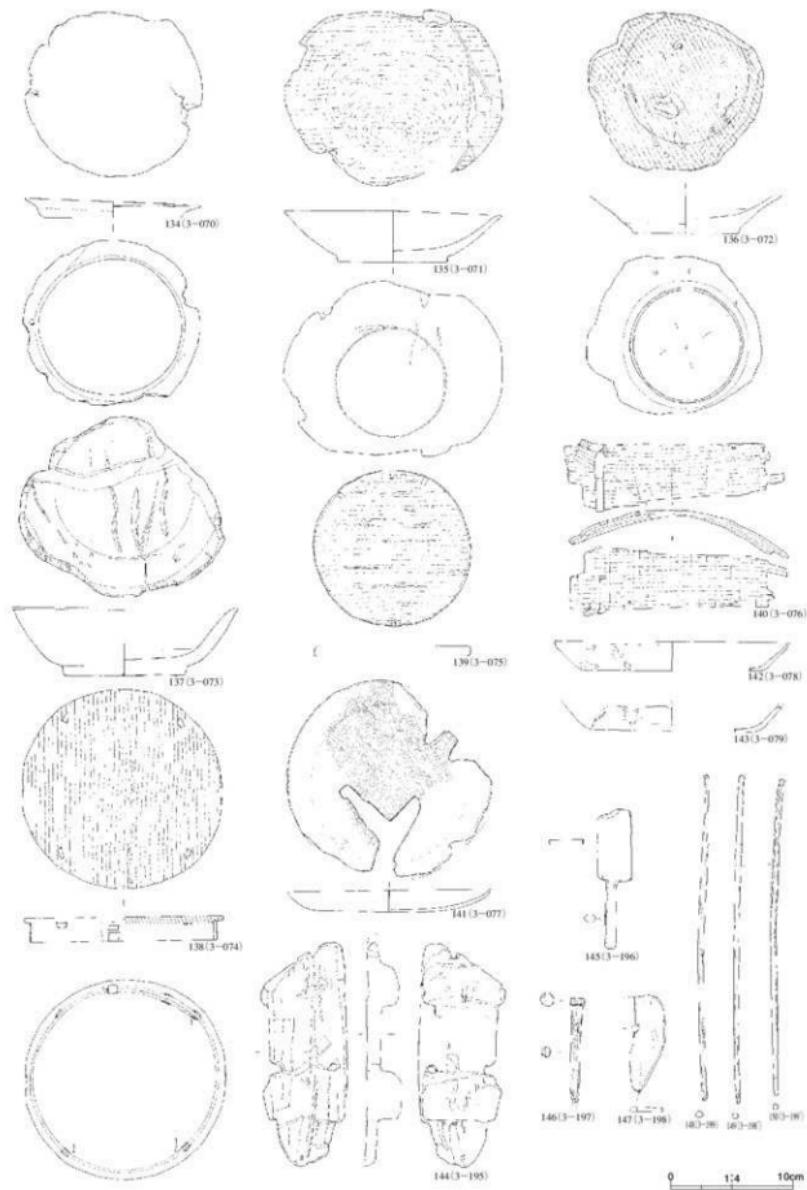
0 1.4 10cm



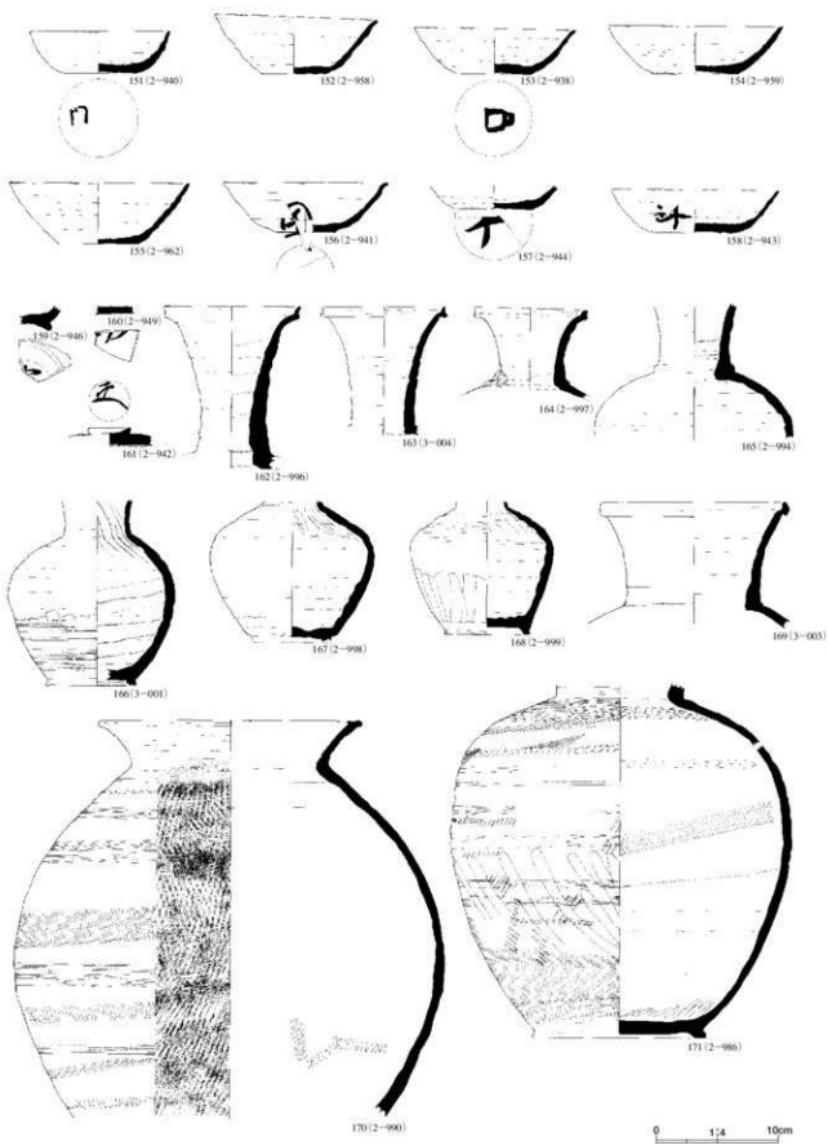
第123図 SG463沼地跡北西岸祭祀遺構出土遺物④



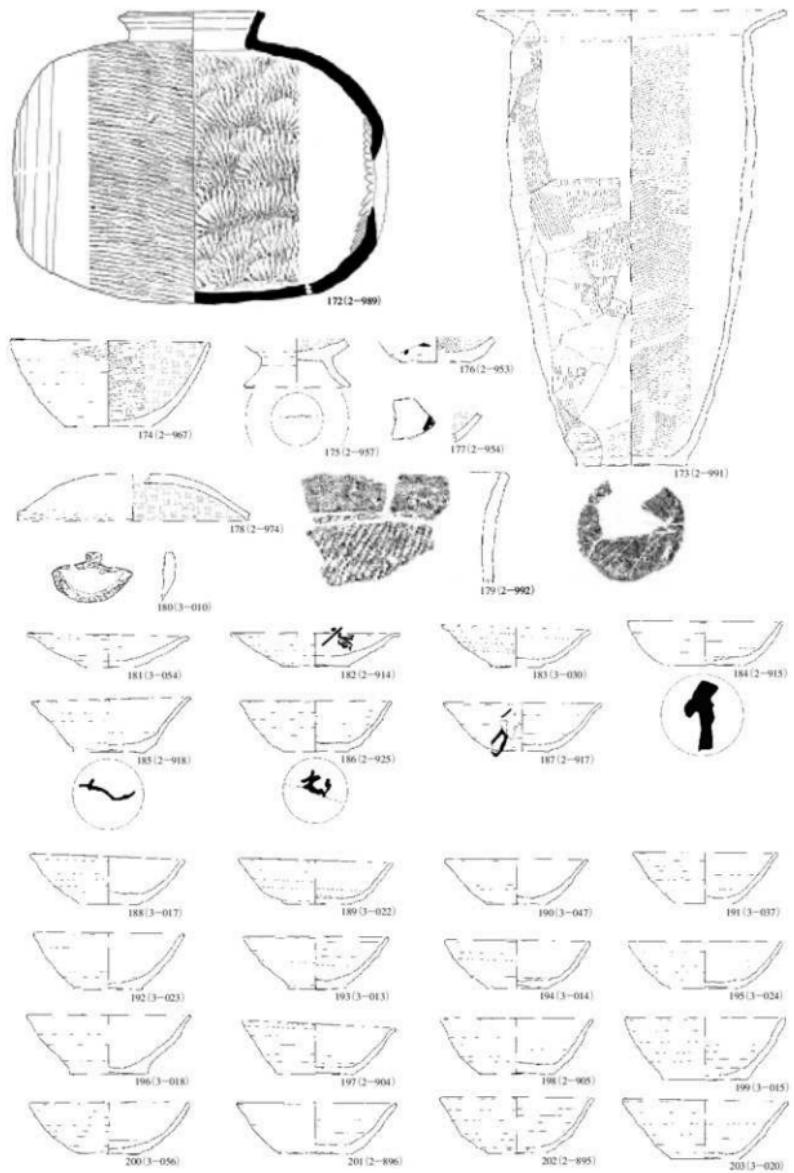
第124図 SG463沿地跡北西岸祭祀遺構出土遺物⑤



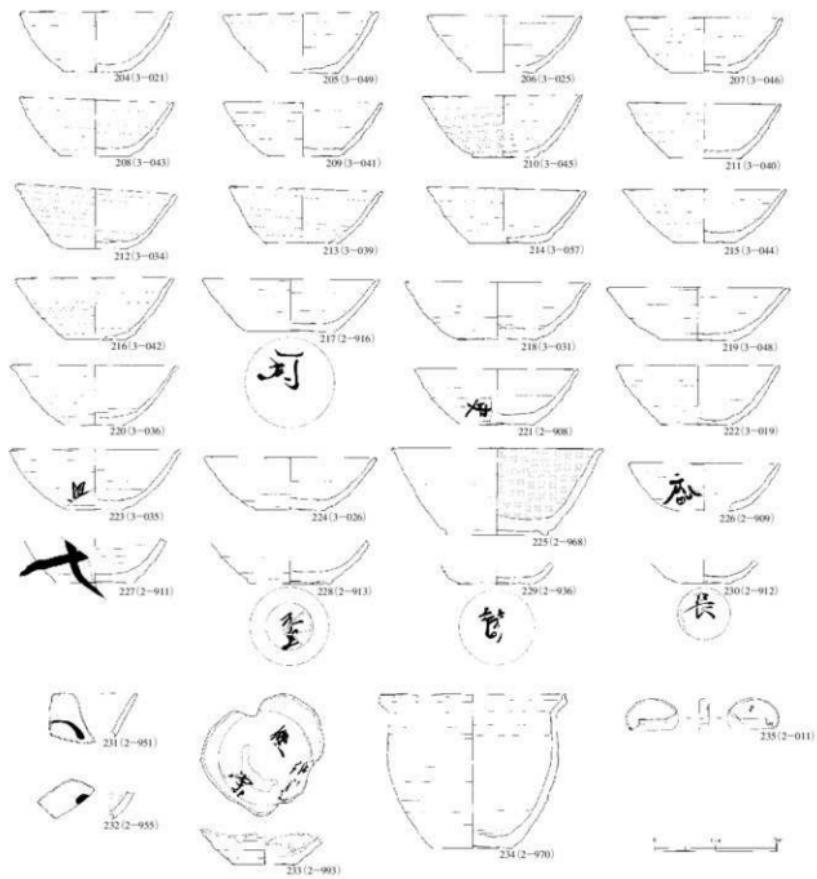
第125図 SG463沼地跡北西岸祭祀遺構出土遺物⑥



第126図 SG463沼地跡北西岸祭祀遺構出土遺物⑦



第127図 SG463沿地跡北西岸祭祀遺構出土遺物⑧



第128図 SG463沼地跡北西岸祭祀遺構出土遺物⑨

SG463沼地跡北西岸祭祀遺構出土遺物一覧表(1)

器種 番号	器物 番号	種類・器種	出土遺物・層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	底部切り離し	調査等	時期
120-1	6-320	赤褐色土器・环	地区北部第11層	12	4.1	5.5	未切り	底部から体下端ケズリ。外表面全体3面に人面の墨書きあり。	8 C 末 - 9 C 初
120-2	6-254	赤褐色土器・壺	地区北部第9層	14.1	13.8	8.9	未切り	底部が孔状のため不明胴部4面に人面の墨書きあり。	9 C 第4
120-3	2-906	赤褐色土器・壺	地区北部第10層・SG463泥炭層	15	不明	不明	不明	外表面全体いっぽんに目上が塗かれる墨書きあり。	9 C 第4
120-4	2-982	赤褐色土器・小形壺	地区北部第10層・SG463泥炭層	13.5	13	7.1	未切り	体下端断続ケズリ。外表面3面に人面の墨書きあり。	9 C 第2
120-5	2-903	赤褐色土器・小形壺	地区北部第10層・SG463泥炭層	12.8	13.8	7.1	未切り	体下端断続ケズリ。外表面3面に人面の墨書きあり。	9 C 第2
120-6	2-984	赤褐色土器・壺	地区北部第10層・SG463泥炭層	18.8	23.6	8.9	不明	底部が付着。外上部ケズリ。外表面半面に人面の墨書きあり。	9 C 第2
120-7	2-985	赤褐色土器・壺	地区北部第10層・SG463泥炭層	21	22.6	9.1	不明	外上部ケズリ。下叩き。外表面半面に人面の墨書きあり。	9 C 第3
120-8	2-981	赤褐色土器・小形壺	地区北部第10層・SG463泥炭層	14	9.5	6	未切り	体下端手持ちケズリ。外表面5面に人面の墨書きあり。	9 C 第2
121-9	3-080	祭祀遺物・人形	地区北部第10層・SG463泥炭層	865.9	長さ36cm以上	厚さ0.7		冠状のかぶり物を表現する切り込みがある。	

SG463沼地跡北西岸祭祀遺構出土遺物一覧表（2）

国名 番号	番号	種類・器種	出土遺物・層段	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	底盤切り離し	調整等	時期
121-10	3-081	祭祀遺物・人形	地区北部第10層・SG463泥灰層	962.9	長さ20.5	厚さ0.3		表裏削面残る。腕のあたりに切り込みあり。板状	
121-11	3-082	祭祀遺物・人形	地区北部第10層・SG463泥灰層	963.0	長さ17.5	厚さ0.3		表裏削面残る。腕のあたりに切り込みあり。板状	
121-12	3-083	祭祀遺物・人形	地区北部第10層・SG463泥灰層	962.7	長さ18.8	厚さ0.4		頭欠損。表裏削面残る。腕のあたりに切り込みあり。板状	
121-13	3-084	祭祀遺物・人形	地区北部第10層・SG463泥灰層	962.9	長さ17.9	厚さ0.3		頭欠損。表裏削面残る。腕のあたりに切り込みあり。板状	
121-14	3-085	祭祀遺物・人形	地区北部第10層・SG463泥灰層	962.7	長さ12.8 以上	厚さ0.3		頭部で脚を接着している	
121-15	3-086	祭祀遺物・人形	地区北部第10層・SG463泥灰層	963.0	長さ19.5 以上	厚さ0.4		片方の肩のみ墨書き残る	
121-16	3-087	祭祀遺物・人形	地区北部第10層・SG463泥灰層	962.7	長さ7.9±3.1 以上	厚さ0.4		墨書きで顔、腕にかぶり物を描いている	
121-17	3-088	祭祀遺物・馬形	地区北部第10層・SG463泥灰層	962.5	長さ16.8	厚さ0.5		下腹部に単手を差込む穴はない	
121-18	3-089	祭祀遺物・木札	地区北部第10層・SG463泥灰層	961.3	長さ2.8	厚さ1.0		上部中央に小孔を穿っている	
121-19	3-090	祭祀遺物・人形状骨質品	地区北部第10層・SG463泥灰層	964.4	長さ8.7	厚さ0.6			
121-20	3-091	祭祀遺物・人形状骨質品	地区北部第10層・SG463泥灰層	965.0	長さ9.0 (幅)	厚さ0.4			
121-21	3-092	祭祀遺物・人形状骨質品	地区北部第10層・SG463泥灰層	965.0	長さ10.8	厚さ0.5			
121-22	3-093	祭祀遺物・人形状骨質品	地区北部第10層・SG463泥灰層	962.1	長さ9.8	厚さ0.4		半分に削れた物である	
121-23	3-094	祭祀遺物・人形状骨質品	地区北部第10層・SG463泥灰層	963.3	長さ12.7	厚さ0.5		半分に削れた物である	
121-24	3-095	祭祀遺物・人形状骨質品	地区北部第10層・SG463泥灰層	964.7	長さ13.2	厚さ0.5		半分に削れた物である	
121-25	3-096	祭祀遺物・人形状骨質品	地区北部第10層・SG463泥灰層	965.8	長さ13.4	厚さ0.5		半分に削れた物である	
121-26	3-097	祭祀遺物・人形状骨質品	地区北部第10層・SG463泥灰層	962.5	長さ9.12 以上	厚さ0.8		先端部切り込み入り削れる	
121-27	3-098	祭祀遺物・人形状骨質品	地区北部第10層・SG463泥灰層	961.2	長さ13.3	厚さ0.2		先端部切り込み入り削れる	
121-28	3-099	祭祀遺物・車輪	地区北部第10層・SG463泥灰層	962.8	長さ23.8 以上	厚さ0.4	(分類) C型	上部と中周縁部2カ所を削ぐし両側面5 カ所以上をさくざくれ状にしている	
121-29	3-100	祭祀遺物・車輪	地区北部第10層・SG463泥灰層	962.5	長さ22.3 以上	厚さ0.5	*	上部と中周縁部2カ所を削ぐし両側面6 カ所以上をさくざくれ状にしている	
121-30	3-101	祭祀遺物・車輪	地区北部第10層・SG463泥灰層	962.4	長さ19.2 以上	厚さ0.4	*	上部と中周縁部2カ所を削ぐし両側面7 カ所以上をさくざくれ状にしている	
121-31	3-102	祭祀遺物・車輪	地区北部第10層・SG463泥灰層	961.6	長さ16.7	厚さ0.5	*	上部と中周縁部2カ所を削ぐし両側面8 カ所以上をさくざくれ状にしている	
121-32	3-103	祭祀遺物・車輪	地区北部第10層・SG463泥灰層	961.9	長さ14.1	厚さ0.1	*	上部と中周縁部2カ所を削ぐし両側面9 カ所以上をさくざくれ状にしている	
121-33	3-104	祭祀遺物・車輪	地区北部第10層・SG463泥灰層	962.5	長さ16.6	厚さ0.5	*	上部と中周縁部2カ所を削ぐし両側面10 カ所以上をさくざくれ状にしている	
121-34	3-105	祭祀遺物・車輪	地区北部第10層・SG463泥灰層	962.6	長さ14.2 以上	厚さ0.4	*	上部と中周縁部2カ所を削ぐし両側面11 カ所以上をさくざくれ状にしている	
121-35	3-106	祭祀遺物・車輪	地区北部第10層・SG463泥灰層	961.7	長さ8.4 以上	厚さ0.10	*	上部と中周縁部2カ所を削ぐし両側面12 カ所以上をさくざくれ状にしている	
121-36	3-107	祭祀遺物・車輪	地区北部第10層・SG463泥灰層	961.6	長さ4.3 以上	厚さ0.2	*	上部と中周縁部2カ所を削ぐし両側面13 カ所以上をさくざくれ状にしている	
121-37	3-108	祭祀遺物・車輪	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.8	長さ29.8		(分類) F型	上端部切頭、頭を入れている 下端部を尖らせる。棒状	
121-38	3-109	祭祀遺物・車輪	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.8	長さ26.8	厚さ0.7	(分類) C型	上端部切頭、頭を入れている 下端部を尖らせる。板状	
121-39	3-110	祭祀遺物・車輪	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.7	長さ26.7	厚さ0.7	*	上端部切頭、頭を入れている 下端部を尖らせる。板状	
121-40	3-111	祭祀遺物・車輪	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.9	長さ27.3	厚さ0.6	*	上端部切頭、頭を入れている 下端部を尖らせる。棒状	
121-41	3-112	祭祀遺物・車輪	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.6	長さ27	厚さ0.8	(分類) F型	上端部切頭、頭を入れている 下端部を尖らせる。棒状	
121-42	3-113	祭祀遺物・車輪	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.6	長さ28.7	厚さ0.5	(分類) C型	上端部切頭、頭を入れている 下端部を尖らせる。板状	
121-43	3-114	祭祀遺物・車輪	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.5	長さ26.8	厚さ0.7	*	*	板状
121-44	3-115	祭祀遺物・車輪	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.7	長さ27.0		(分類) F型	*	棒状
121-45	3-116	祭祀遺物・車輪	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.8	長さ26.9	厚さ0.5	*	*	板状
121-46	3-117	祭祀遺物・車輪	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.9	長さ26.0		*	*	棒状
121-47	3-118	祭祀遺物・車輪	地区北部第10層・SG463泥灰層	961.0	長さ27.5		*	*	棒状
121-48	3-119	祭祀遺物・車輪	地区北部第10層・SG463泥灰層	961.5	長さ27.0	厚さ0.6	(分類) C型	*	板状
121-49	3-120	祭祀遺物・車輪	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.9	長さ28.4 以上	厚さ1.1	(分類) F型	*	棒状
122-50	3-121	祭祀遺物・車輪	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.8	長さ23.9	厚さ0.5	(分類) C型	上端部切頭、頭を入れている 下端部を尖らせる。板状	
122-51	3-122	祭祀遺物・車輪	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.7	長さ22.3	厚さ0.5	*	*	
122-52	3-123	祭祀遺物・車輪	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.6	長さ23.1	厚さ0.4	*	*	
122-53	3-124	祭祀遺物・車輪	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.8	長さ23.5	厚さ0.8	(分類) F型	上端部切頭、頭を入れている 下端部を尖らせる。棒状	
122-54	3-125	祭祀遺物・車輪	地区北部第10層・SG463泥灰層	961.1	長さ22.8	厚さ0.7	*	*	
122-55	3-126	祭祀遺物・車輪	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.9	長さ22.9	厚さ0.9	*	*	
122-56	3-127	祭祀遺物・車輪	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.7	長さ23.7	厚さ0.6	*	*	
122-57	3-128	祭祀遺物・車輪	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.7	長さ23.0	厚さ0.5	*	*	
122-58	3-129	祭祀遺物・車輪	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.8	長さ21.1	厚さ0.6	*	*	

SG463沼地跡北西岸祭祀遺構出土遺物一覧表（3）

図面番号	番号	種類・器種	出土遺物・層段	上径 (cm)	下径 (cm)	底径 (cm)	底盤切り出し	調整等	時期
122-59	3-130	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.9	長 21.5	長 9.8	(分類) F型	*	
122-60	3-131	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.8	長 21.0 11.5	厚 9.6		上端部平頂、削を入れている 下端部を尖らせる。形状	
122-61	3-132	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.9	長 20.0	厚 9.1	*	*	
122-62	3-133	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.7	長 20.8	厚 9.4	*	*	
122-63	3-134	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.7	長 23.6	厚 9.5	*	*	
122-64	3-135	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.8	長 23.6	厚 9.6	*	*	
122-65	3-136	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.6	長 23.2	厚 9.5	*	*	
122-66	3-137	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.3	長 19.0	厚 9.6	(分類) C型	上端部平頂、削を入れている 下端部を尖らせる。形状	
122-67	3-138	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.2	長 19.2 以上	厚 9.6	*	上端部平頂、削を入れている 下端部を尖らせる。形状	
122-68	3-139	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.8	長 19.1	厚 9.3	*	*	
122-69	3-140	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.9	長 19.8 以上	厚 9.6	*	*	
122-70	3-141	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.5	長 18.4	厚 9.8	*	*	
122-71	3-142	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.9	長 18.1	厚 9.8	*	*	
122-72	3-143	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.9	長 17.0 以上	厚 9.5	*	*	
122-73	3-144	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.8	長 17.6	厚 9.7	*	*	
122-74	3-145	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.8	長 16.1	厚 9.4	*	*	
122-75	3-146	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.8	長 11.9	厚 9.5	*	*	
122-76	3-147	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.0	長 10.3 以上	厚 9.5	*	*	
122-77	3-148	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.9	長 9.8	厚 9.5	*	*	
122-78	3-149	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	961.2	長 9.5	長 9.7	*	*	
122-79	3-151	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	961.9	長 9.1 以上	厚 9.3	*	*	
122-80	3-152	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	961.5	長 9.5	厚 9.4	*	*	
122-81	3-153	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	961.4	長 9.6 以上	厚 9.3	*	*	
122-82	3-154	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	961.1	長 9.6	厚 9.3	*	*	
122-83	3-155	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.0	長 9.9	厚 9.4	*	*	
122-84	3-156	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	961.5	長 9.8	厚 9.5	*	*	
122-85	3-157	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	961.5	長 9.2	厚 9.5	*	*	
122-86	3-158	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	961.5	長 9.7	厚 9.5	*	*	
122-87	3-159	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	961.5	長 9.8	厚 9.5	*	*	
122-88	3-160	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	961.5	長 9.2	厚 9.6	*	*	
122-89	3-161	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	961.3	長 9.2	厚 9.3	*	*	
122-90	3-162	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	961.6	長 9.4	厚 9.3	(分類) C型	上端部平頂、削を入れている 下端部を尖らせる。形状	
122-91	3-163	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.8	長 10.5	厚 9.3	*	*	
122-92	3-164	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.7	長 7.2 以上	厚 9.5	*	*	
122-93	3-165	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.9	長 4.7	厚 9.4	*	*	
122-94	3-166	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.6	長 9.6	厚 9.5	*	*	
122-95	3-167	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.8	長 9.4	厚 9.5	*	*	
122-96	3-168	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	961.0	長 9.6	厚 9.7	*	*	
122-97	3-169	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	961.2	長 9.1 以上	厚 9.7	*	*	
122-98	3-170	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.7	長 9.5	厚 9.9	(分類) F型	上端部平頂、削を入れている 下端部を尖らせる。形状	
122-99	3-171	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	961.2	長 9.1	厚 9.7	*	*	
123-100	3-172	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.9	長 9.9	厚 9.7	(分類) C型		
123-101	3-173	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	961.4	長 9.0	厚 9.6	*	*	
123-102	3-174	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	961.5	長 9.5	厚 9.9	(分類) E型	上端部平頂、削を入れている 下端部を尖らせる。形状	
123-103	3-175	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	962.3	長 9.5	厚 9.1	(分類) E型	E端部平頂、削を入れている 下端部を尖らせる。形状	
123-104	3-176	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	961.0	長 9.0	厚 9.4	*	*	
123-105	3-177	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.9	長 9.8	厚 9.1	*	*	
123-106	3-178	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	961.5	長 9.1	厚 9.6	(分類) E型	上端部平頂、削を入れている 下端部を尖らせる。形状	
123-107	3-179	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.0	長 9.2	厚 9.7	(分類) E型	上端部平頂、削はなし。 下端部を尖らせる。形状	
123-108	3-180	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.8	長 9.9	厚 9.8	(分類) E型	上端部平頂、削を入れている 下端部を尖らせる。形状	
123-109	3-181	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.7	長 9.1	厚 9.6	*	*	
123-110	3-182	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.9	長 26.6	厚 9.5	(分類) E型	上端部平頂、削はなし。 下端部を尖らせる。形状	
123-111	3-183	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	961.6	長 25.3	厚 9.7	*	*	
123-112	3-184	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	962.0	長 22.7	厚 9.7	(分類) E型	上端部平頂、削を入れている 下端部を尖らせる。形状	
123-113	3-185	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.9	長 18.1	厚 9.4	(分類) E型	上端部平頂、削はなし。 下端部を尖らせる。形状	
123-114	3-186	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.5	長 16.1	厚 9.4	*	*	
123-115	3-187	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	960.91	長 15.4	厚 9.5	(分類) E型	上端部平頂、削を入れている 下端部を尖らせる。形状	
123-116	3-188	祭祀遺物・壺形	地区北部第10層・SG463泥灰層	961.2	長 11.6	厚 9.2	*	*	

SG463沼地跡北西岸祭祀遺構出土遺物一覧表（4）

図面番号	番号	種類・器種	出土遺物・層段	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	底盤切き離し	調整等	時期
123-117	3-189	祭祀遺物・壺串	地区北部第10層・SG463泥灰層	90.8	長さ8.6	厚さ0.4	(分類) E類	上端部平坦、削はない。 下端部を尖らせる。瓶状	
123-118	3-190	祭祀遺物・壺串	地区北部第10層・SG463泥灰層	73.1	長さ21.3	厚さ0.81	(分類) E類	上端部平坦、削はない。 下端部を尖らせる。瓶状	
123-119	3-191	祭祀遺物・壺串	地区北部第10層・SG463泥灰層	92.4	長さ28.7	厚さ0.7	(分類) E類	上端部平坦、削を入れている。 下端部を尖らせる。瓶状	*
123-120	3-192	祭祀遺物・壺串	地区北部第10層・SG463泥灰層	74.4	長さ34.5	厚さ1.2	*		
123-121	3-193	祭祀遺物・壺串	地区北部第10層・SG463泥灰層	92.3	長さ39.9	厚さ1.9	*		*
123-122	3-194	祭祀遺物・壺串	地区北部第10層・SG463泥灰層	74.9	長さ47.0	厚さ1.5	(分類) E類	上端部平坦、削をいれない。 下端部を尖らせる。瓶状	
124-123	3-059	祭祀物	地区北部第10層・SG463泥灰層	16.8	1.6	10.7		ロクソフメ形跡あり	9C第2-3
124-124	3-060	祭祀物	地区北部第10層・SG463泥灰層	16.2	1.4	10		木口舟形に残る	9C第2-3
124-125	3-061	祭祀物	地区北部第10層・SG463泥灰層	17.5	1.6	8		複合資料	9C第2-3
124-126	3-062	祭祀物	地区北部第10層・SG463泥灰層	16.4	1.4	12.5			9C第2-3
124-127	3-063	祭祀物	地区北部第10層・SG463泥灰層	18.5	1.4	11			9C第2-3
124-128	3-064	祭祀物	地区北部第10層・SG463泥灰層	18.2	2	11.1			9C第2-3
124-129	3-065	祭祀物	地区北部第10層・SG463泥灰層	15.6	1.8	11.2			9C第2-3
124-130	3-066	祭祀物付組	地区北部第10層・SG463泥灰層	8.5	0.9	6.8		内側を行わない高台 ロクソフメ痕跡あり	9C第2-3
124-131	3-067	祭祀物付組	地区北部第10層・SG463泥灰層	不明	不明	不明		内側を行わない高台	9C第2-3
124-132	3-068	祭祀物付組	地区北部第10層・SG463泥灰層	不明	不明	12.2		内側を行わない高台	9C第2-3
124-133	3-069	祭祀物付組	地区北部第10層・SG463泥灰層	不明	不明	10.9		内側を行わない高台	9C第2-3
125-134	3-070	祭祀物付組	地区北部第10層・SG463泥灰層	14.4	1.4	11.3		内側を行わない高台	9C第2-3
125-135	3-071	祭祀物付柵	地区北部第10層・SG463泥灰層	17.8	9	4.2		内側を行わない高台	9C第2-3
125-136	3-072	祭祀物付柵	地区北部第10層・SG463泥灰層	不明	不明	8.7		内側を行わない高台	9C第2-3
125-137	3-073	祭祀物付柵	地区北部第10層・SG463泥灰層	18.4	5.6	9.8		ロクソフメ痕跡あり	9C第2-3
125-138	3-074	曲物	地区北部第10層・SG463泥灰層	16.2	2	15.2		圓筒に長い段を造らず 板棒も大きめに結合	9C第2-3
125-139	3-075	曲物底板	地区北部第10層・SG463泥灰層	不明	不明	13		5方所に木釘痕跡あり	9C第2-3
125-140	3-076	曲物側板	地区北部第10層・SG463泥灰層	不明	不明	不明			9C第2-3
125-141	3-077	漆塗り製品機物	地区北部第10層・SG463泥灰層	16.7	1.7	10		黒漆塗り	9C第2-3
125-142	3-078	漆塗り製品機物	地区北部第10層・SG463泥灰層	不明	不明	不明		黒漆塗り、漆膜のみ遺存	9C第2-3
125-143	3-079	漆塗り製品機物	地区北部第10層・SG463泥灰層	19.2	2.4	14.8		黒漆塗り、漆膜のみ遺存	9C第2-3
125-144	3-195	木製品ゲタ	地区北部第10層・SG463泥灰層	96.3	長さ18.4	厚さ1.1		縦身の通角ゲタ、縄縫出歯欠損	9C第2-3
125-145	3-196	通鏡	地区北部第10層・SG463泥灰層	92.8	長さ21.5	厚さ0.4			9C第2-3
125-147	3-197	木製状木製品	地区北部第10層・SG463泥灰層	不明	長さ8.7	厚さ0.8		上部に凸部作りだし、断面内彌の木針状孔のものである	9C第2-3
125-148	3-198	木製木製品	地区北部第10層・SG463泥灰層	不明	不明	不明		中央部に小孔で穿ったハラクのものである	9C第2-3
125-149	3-199	箸	地区北部第10層・SG463泥灰層	民管26.9	厚さ0.4			両端を研ぐ削った箸である	9C第2-3
125-150	3-200	箸	地区北部第10層・SG463泥灰層	民管26.7	厚さ0.5			両端を研ぐ削った箸である	9C第2-3
126-151	2-940	皿容器・環	地区北部第10層・SG463泥灰層	11.4	3.5	5.9	ハラ切り	無調整、内側當付着、底部に墨書「門」	9C第2
126-152	2-958	皿容器・環	地区北部第10層・SG463泥灰層	13.4	4.8	5.4	系切り	無調整	9C第3
126-153	2-938	皿容器・環	地区北部第10層・SG463泥灰層	13.2	3.8	6	系切り	無調整、内側當付着、底部に墨書「□」	9C第2
126-154	2-959	皿容器・环	地区北部第10層・SG463泥灰層	14.2	4	7	系切り	無調整、底付着	9C第2
126-155	2-962	皿容器・环	地区北部第10層・SG463泥灰層	14.6	5.1	6.5	系切り	無調整	9C第3
126-156	2-941	皿容器・环	地区北部第10層・SG463泥灰層	13.4	4.1	4.9	系切り	無調整、底部に墨書「□」	9C第3
126-157	2-944	皿容器・环	地区北部第10層・SG463泥灰層	不明	不明	6.4	ハラ切り	斜けナビア。底部に墨書「□」	9C第2
126-158	2-943	皿容器・环	地区北部第10層・SG463泥灰層	13.6	3.5	6.6	ハラ切り	無調整、底部に墨書「□」	9C第2
126-159	2-946	皿容器・环	地区北部第10層・SG463泥灰層	不明	不明	不明	系切り	底部に墨書「□」	不明
126-160	2-949	皿容器・环破片	地区北部第10層・SG463泥灰層	不明	不明	不明	ハラ切り	底部に墨書「□」	不明
126-161	2-942	皿容器・壺破片	地区北部第10層・SG463泥灰層	不明	不明	不明	不明	瓦片型輪軸ハケズリ、ママミ部に墨書「□」、内面は輪軸狀	9C第2
126-162	2-996	皿容器・長脚壺	地区北部第10層・SG463泥灰層	11.2	不明	不明		全面に自然釉	9C第2
126-163	3-004	皿容器・長脚壺	地区北部第10層・SG463泥灰層	10	不明	不明		全面に自然釉	9C第3
126-164	2-997	皿容器・壺破片	地区北部第10層・SG463泥灰層	9.2	不明	不明		頭部に突舌が彫り、この部分に飾付着	9C第3
126-165	2-994	皿容器・長脚壺	地区北部第10層・SG463泥灰層	不明	不明	不明		頭部に突舌が彫る。瓦輪陶器？	9C第3
126-166	3-001	皿容器・長脚壺	地区北部第10層・SG463泥灰層	不明	不明	7.7	不明	底部ナナガ。外側當手から下手持ち ケズリ後回転ハケズリ、台付	9C第2
126-167	2-998	皿容器・小壺	地区北部第10層・SG463泥灰層	不明	不明	6.4	角切り	台付、頭部に突舌が彫る	9C第3
126-168	2-999	皿容器・小壺	地区北部第10層・SG463泥灰層	不明	不明	6.9	不明	底部ナナガ。外側當手から下手持ち ケズリ、台付	9C第2
126-169	3-003	皿容器・壺	地区北部第10層・SG463泥灰層	15.1	不明	不明		頭部にわざわざした突舌が彫る。	9C第4
126-170	2-990	皿容器・大型壺	地区北部第10層・SG463泥灰層	21.4	不明	不明		外側手引き施コロによるナナガ。	9C第4
126-171	2-986	皿容器・壺	地区北部第10層・SG463泥灰層	不明	不明	14.2	不明		9C第3
127-172	2-989	皿容器・横瓶	地区北部第10層・SG463泥灰層	10.3	24.2	21	不明	儀形の横瓶。下端ロク12 成形抜き跡を認めめる。	9C第2

SG463沼地跡北西岸祭祀遺構出土遺物一覧表（5）

図面番号	番号	種類・器種	出土遺物・層位	上径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	底面切り離し	調整等	時期
127-173	2-991	土器器・甕	地区北部第10層・SG463泥灰層	25.4	37.3	9.2	木蓋底	外表面テクスチャ付。内側のカキ目。下方熱と爆発状火候付着。	9C第3
127-174	2-967	土器器・环	地区北部第10層・SG463泥灰層	16.4	7.1	7.2	素切引	内面黒色処理。瓶口部のカギ目	9C第3
127-175	2-957	土器器・台付环	地区北部第10層・SG463泥灰層	不明	不明	8.6	不明	底部「—」のヘラ書きあり 内黒色処理	9C第4
127-176	2-953	土器器・环	地区北部第10層・SG463泥灰層	不明	不明	6	素切引	無調整。底部に墨書き「□」内黒色処理	9C第4
127-177	2-954	土器器・环体部 破片	地区北部第10層・SG463泥灰層	不明	不明	不明	体部に墨書き「□」内黒色処理	不明	
127-178	2-974	土器器・釜	地区北部第10層・SG463泥灰層	19.1	不明	不明	内面黒色処理	9C第2	
127-179	2-992	陶土器片	地区北部第10層・SG463泥灰層	不明	不明	不明	11縁部、大木10式か	調文印跡未	
127-180	3-010	石器(砾石)	地区北部第10層・SG463泥灰層	96.8	長2.4	厚2.0		調文印跡未	
127-181	3-054	赤褐色土器・釜	地区北部第10層・SG463泥灰層	13.2	2.7	4.2	素切引	無調整	9C第4
127-182	2-914	小褐色土器・釜	地区北部第10層・SG463泥灰層	13.9	2.7	5.5	素切引	無調整、内面黒色付着、墨書き「□」	9C第2
127-183	3-030	小褐色土器・釜	地区北部第10層・SG463泥灰層	12.3	3.3	4.3	素切引	無調整	9C第4
127-184	2-915	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	12.8	3.6	6.5	素切引	無調整、底部に墨書き「イ」状の記号か?	9C第2
127-185	2-918	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	13	4.4	5.8	素切引	無調整、底部に墨書き「□」	9C第4
127-186	2-925	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	12.5	4.2	5.5	素切引	無調整、底部に墨書き「□」	9C第4
127-187	2-917	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	13	4.1	4.5	素切引	無調整、底部に墨書き「□」	9C第4
127-188	3-017	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	12.5	4	4.9	素切引	無調整	9C第4
127-189	3-022	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	12.6	3.6	5.5	素切引	無調整	9C第4
127-190	3-047	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	11.5	3.7	5	素切引	無調整	9C第4
127-191	3-037	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	11.9	4.2	4.8	素切引	無調整	9C第4
127-192	3-023	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	12.2	4.7	5.6	素切引	無調整	9C第3
127-193	3-013	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	11.8	4	5.1	素切引	無調整	9C第4
127-194	3-014	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	14.6	5.1	6.5	素切引	無調整	9C第4
127-195	3-024	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	12.6	3.9	5.8	素切引	無調整	9C第4
127-196	3-018	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	13.3	4.9	6.4	素切引	無調整	9C第4
127-197	2-904	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	12.5	4.1	6.4	素切引	無調整、内面に焦状炭化物付着	9C第2
127-198	2-905	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	12.5	4.6	6.1	素切引	無調整	9C第3
127-199	3-015	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	13	5.2	6.9	素切引	無調整	9C第3
128-200	3-056	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	13	4.2	4.9	素切引	無調整	9C第3
127-201	2-896	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	13.1	4.1	6	素切引	無調整	9C第3
127-202	2-895	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	12.5	4.6	4.7	素切引	無調整	9C第4
127-203	3-020	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	13.4	4.9	5.6	素切引	無調整	9C第3
128-204	3-021	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	12.3	5	4.9	素切引	無調整	9C第2
128-205	3-049	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	12.7	4.9	5.9	素切引	無調整	9C第3
128-206	3-025	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	12.5	4.8	5.3	素切引	無調整	9C第3
128-207	3-046	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	12.8	4.5	5.5	素切引	無調整	9C第3
128-208	3-043	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	12.5	4.6	5.8	素切引	無調整、内面底部に漆付着	9C第3
128-209	3-041	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	12.8	4.5	5.8	素切引	無調整、内面底部に漆付着物あり	9C第3
128-210	3-045	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	13.1	5.1	5.1	素切引	無調整	9C第4
128-211	3-040	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	12.5	4.5	6	素切引	無調整	9C第3
128-212	3-034	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	13	4.9	5.2	素切引	無調整	9C第4
128-213	3-039	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	12.5	4.5	6.2	素切引	無調整	9C第4
128-214	3-057	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	12.9	4.5	5.7	素切引	無調整	9C第4
128-215	3-044	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	13.3	4.3	5	素切引	無調整	9C第4
128-216	3-042	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	12.8	5	5	素切引	無調整	9C第4
128-217	2-916	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	14.5	4.2	7.4	素切引	無調整、底部に墨書き「崩」	9C第2
128-218	3-031	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	15.1	4.7	6.5	素切引	無調整	9C第2
128-219	3-048	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	14.8	4.4	6.1	素切引	無調整	9C第2
128-220	3-036	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	13.6	5	4.9	素切引	無調整	9C第3
128-221	2-908	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	13.3	4.6	6	素切引	無調整、外体部に墨書き「史」か「史」か「少」	9C第2
128-222	3-019	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	13.2	4.9	5.8	素切引	無調整	9C第2
128-223	3-035	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	13.9	5	4.7	素切引	無調整、外体部に墨書き「□」	9C第2
128-224	3-026	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	14	4.4	5.7	素切引	無調整	9C第2
128-225	2-968	土器器・台付环	地区北部第10層・SG463泥灰層	17.1	7.2	8.3		底部削減、内面黒色処理 外側底盤部のカギ	9C第3
128-226	2-909	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	12.3	4	4.1	素切引	無調整、外体部に墨書き「□」	9C第3
128-227	2-911	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	不明	不明	6.4	素切引	無調整、外体部に墨書き「□」	9C第3
128-228	2-913	小褐色土器・台付环	地区北部第10層・SG463泥灰層	不明	不明	6.4	素切引	底部に墨書き「足」	9C第3
128-229	2-936	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	不明	不明	6.1	素切引	無調整、底部に墨書き「□」	9C第3
128-230	2-912	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	不明	不明	4.4	素切引	無調整、底部に墨書き「長」	9C第4
128-231	2-951	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	不明	不明	6.4	素切引	墨書き「□」	不明
128-232	2-955	土器器・环	地区北部第10層・SG463泥灰層	不明	不明	不明	不明	墨書き「□」、内面黒色処理	不明
128-233	2-993	小褐色土器・环-A	地区北部第10層・SG463泥灰層	不明	不明	5.1	素切引	無調整、内面に漆付着	9C第4
128-234	2-970	小褐色土器・要	地区北部第10層・SG463泥灰層	15.1	12.7	6.5	素切引	無調整	9C第2
128-235	3-011	石器	地区北部第10層・SG463泥灰層	不明	不明	厚5.0.8	不明	花崗岩質(石英斑岩、黒雲母含む)	S.C.

る事例があるが、SG462沼地跡北西岸の場合、人面墨書き土器や壺串類がややばらけながら張り出し部周辺に弧を描くようにベルト状に出土しており、城内またはその場でとり行われた一回の祭祀行為ごとのセットが水辺に運ばれてから水に流され動いた状況を示すもので、原位置を示していない可能性が高く、1回ごとのセット関係の把握も困難となっている。

また、人面墨書き土器や木製祭祀具と同じ泥炭層より、土器類として墨書き土器に加え長頸瓶類をはじめとする須恵器貯蔵具が、また、曲物・挽物皿等の木製品容器が多く出土しており、それらも祭祀具として組み合わせた形で、在地性と多様性を持つ「祓」祭祀が行われていた可能性がある。呪符木簡の出土からは、陰陽師や陰陽道による祭祀が想定される。

SG462沼地跡北西岸部は、北側斜面整地層（地区北部第10層）出土遺物の年代などから、SX741テラス状遺構が9世紀第2四半期頃に造成され本格的に祓所として整備されたと考えられる。人面墨書き土器や形代類や壺串類等の木製祭祀遺物は、北西岸の沼地部分に堆積する泥炭層（地区北部第10層が北側斜面より黄褐色砂層や赤褐色粘土層として断続的に流れ込み植物遺体層と互層をなす）から出土しており、人面墨書き土器や共伴する土器の年代から、9世紀第2四半期から第3四半期にかけての時期を中心としてそれらを用いた祭祀が行われたと考えられる。また、図面掲載の対象外としたが、泥炭層の上層に堆積する灰白色砂層と黄褐色砂層は9世紀第4四半期から10世紀第1四半期にかけて堆積したと考えられ、その土層からも人面墨書き土器、墨書き土器や須恵器壺などが出土しており、水辺祭祀の下限年代はさらに下ると考えられる。一方で、第39次調査地の北側に隣接する第62次調査地ではSX741テラス状遺構が造成される以前にも岸辺の堆積層内より8世紀末～9世紀第1四半期に位置付けられる「目」墨書き土器や、小型の特殊な赤褐色土器壺Aが出土しており、水辺でそれらを使用した祭祀が行われていたと考えられる。そのことから、水辺祭祀の場としての利用は8世紀末まで遡るものと考えられる。

### 2) SK824土坑（第129・133図、図版37・52）

地区西部の第42次調査において地山粘土層面で検出された。北東側第35次調査地のSK651に連続している。東西6m×南北4.5m以上、深さ約1.5mのゆがんだ楕円形を呈すると推定されるが、北西側の一部が調査区外となっている。段状に掘り下げられており、土取りに伴う掘り下げ時の工具痕を残す。埋土から、9世紀第2四半期から第3四半期に位置づけられる須恵器壺1点、赤褐色土器の壺4点と平底の中型壺1点および同一個体と思われる破片2点が出土している。そのうち赤褐色土器中型壺の外側部には、法相蓮華文と推定される花弁状の文様を主体とする墨書きが認められる。その文様は秋田県大仙市の払田橋跡に近接する平安期の祭祀遺跡である厨川谷地遺跡に類似が認められる。他に「道」の墨書き土器も出土している。土取り穴跡に、それら墨書き土器類を用いた祭祀を行った後、またはそれ自体を祭祀行為の一環として、廃棄した遺構と考えられる。

### 3) SK961土坑（土器一括廃棄遺構）（第130・133図・52）

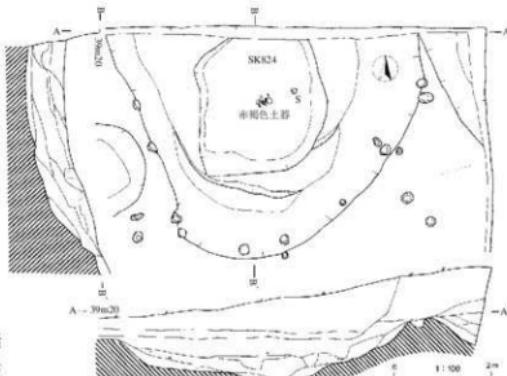
地区中央部南側の第50次調査において地山粘土層面で検出された。プランが不明瞭な土取り穴跡である埋土より、赤褐色を呈し小型軟質で底部ヘラ切りの特殊な壺形土器が一括で出土した。土取り穴跡に祭祀用小型土器を一括廃棄した遺構と考えられる。

出土土器は、形態や成形技法は須恵器壺に類似するが、酸化炎焼成されており、須恵器を祭祀用にミニチュア化した可能性がある。焼成・色調から赤褐色土器として分類した。類似する土器が、鶴ノ木地区のSI1309やSI1978等近接する住居からも出土しており、古代の特殊な祭祀用小型土器として、

9世紀第2四半期を中心とする年代に位置づけられる。第50次調査では珠洲系中世陶器破片も埋土より出土と報告されているが、出土状況や伴遺物の時期を含めて検討した結果、上層からの混入として一括資料からは除外した。

4) SI1978カマド周辺（土器一括廃棄遺構）（第91・131図、図版20・53・54）

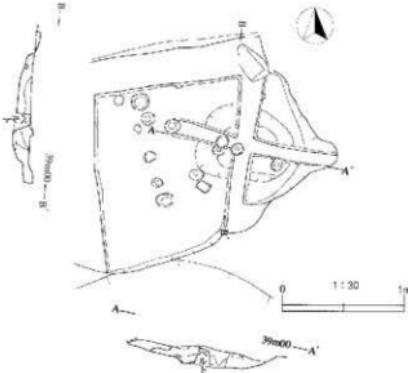
SI1978は地区中央部東の第91次調査で第8層暗褐色土層面より検出された。住居は東辺南寄りにカマドを伴うが、崩壊したカマド内からカマド前面にかけて、赤褐色を呈し小型軽質で底部へラ切りの特殊な坏形土器が一括廃棄される形で出土した。出土土器はほとんどが燈明皿として使用されていた。形態や成形技法は須恵器坏に類似するが、小型で酸化炎焼成されており、須恵器を祭祀用にミニチュア化したと考えられる。焼成・色調から赤褐色土器として分類した。住居廃絶時に、祭祀行為に



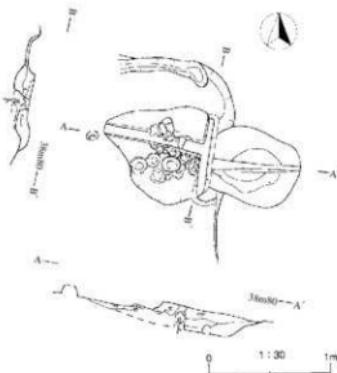
第129図 SK824土取り穴



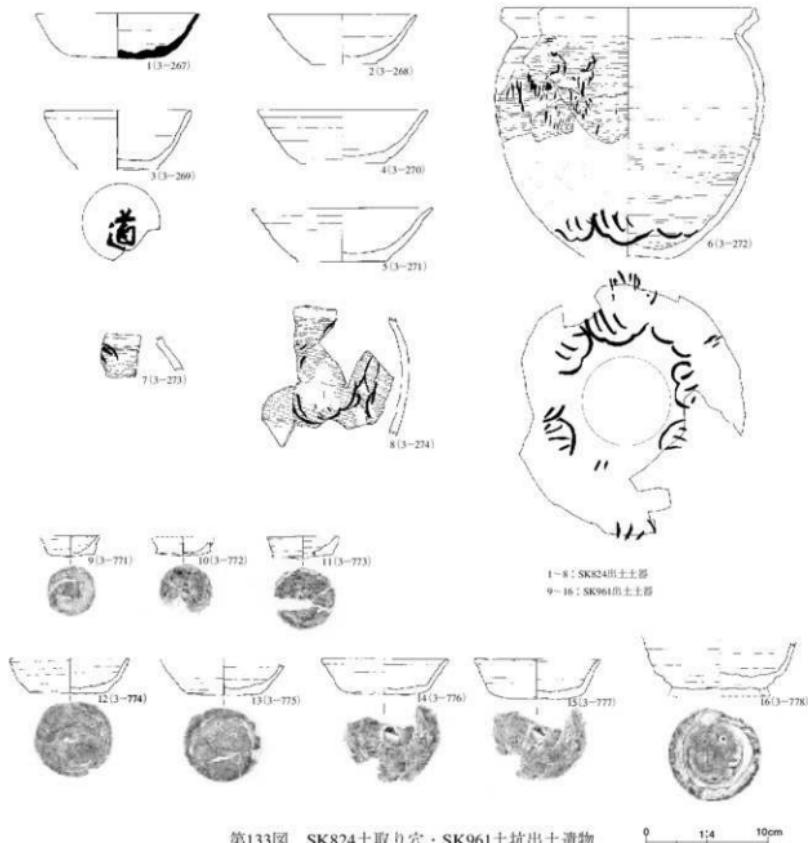
第130図 SK961土取り穴



第131図 SI1978竪穴住居跡カマド跡  
土器一括廃棄遺構



第132図 SI1979竪穴住居跡カマド跡  
土器一括廃棄遺構



第133図 SK824土取り穴・SK961土坑出土遺物

0 1/4 10cm

SK824土取り穴・SK961土坑出土遺物一覧表（1）

回収 番号	遺物 番号	次数	種類・器種	出土遺物・層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	底面切り離し	調査等	時期
133-1	3-267	第42次	須恵器・环A	SK824土取り穴埋土	13.4	3.7	7.8	ヘラ切り	無調査	9C第2
133-2	3-268	第42次	赤褐色土器・环A	SK824土取り穴埋土	12.2	4.1	5.4	赤切り	無調査、内面ナデ	9C第2
133-3	3-269	第42次	赤褐色土器・环A	SK824土取り穴埋土	12	4.9	6.5	赤切り	無調査、底部に墨書「道」	9C第2
133-4	3-270	第42次	赤褐色土器・环A	SK824土取り穴埋土	14	4.4	7	赤切り	無調査、内面ナデ	9C第2
133-5	3-271	第42次	赤褐色土器・环A	SK824土取り穴埋土	14.8	4.4	7.5	赤切り	無調査、内面ナデ	9C第2
133-6	3-272	第42次	赤褐色土器・素	SK824土取り穴埋土	21.4	不明	不明	不明	外表面目盛ナデ、体部横方向カキ目横筋に絶歎状（人頭か）の墨書きあり	9C第2
133-7	3-273	第42次	赤褐色土器・夷鏡片	SK824土取り穴埋土	不明	不明	不明	不明	3-272と同一個体の可能性高い 外表面に絶歎状の墨書きあり	
133-8	3-274	第42次	赤褐色土器・夷鏡片	SK824土取り穴埋土	不明	不明	不明	不明	3-272と同一個体の可能性高い 外表面に絶歎状の墨書きあり	
133-9	3-771	第50次	赤褐色土器・小型环	SK961土取り穴整地層	4.8	1.7	3.7	ヘラ切り	軽いナデ、赤褐色で軟質	9C第2
133-10	3-772	第50次	赤褐色土器・小型环	SK961土取り穴整地層	5.2	1.5	4.5	ヘラ切り	軽いナデ。赤褐色で軟質	9C第2

SK824土取り穴・SK961土坑出土遺物一覧表(2)

国名 番号	遺物番号	次数	種類・器種	出土遺構・層位	口径	基高	底径	底面切り盛し	調査等	時期
133-11	3-773	第50次	赤褐色土器・小型杯	SK961土取り穴整地層	5.9	1.9	5	へラ切り	軽いナデ。赤褐色で軟質	9C第2
133-12	3-774	第50次	赤褐色土器・小型杯	SK961土取り穴整地層	9.8	2.9	6.4	へラ切り	ナデ	9C第2
133-13	3-775	第50次	赤褐色土器・小形杯	SK961土取り穴整地層	10.4	3	6	へラ切り	ナデ、外側赤褐色、内面 火ダス跡かくらや硬質	9C第2
133-14	3-776	第50次	赤褐色土器・小形杯	SK961土取り穴整地層	10.5	3	6.6	へラ切り	軽いナデ。赤褐色で軟式	9C第2
133-15	3-777	第50次	赤褐色土器・小形杯	SK961土取り穴整地層	10.4	3.3	6.5	へラ切り	軽いナデ。赤褐色で軟式	9C第2
133-16	3-778	第50次	赤褐色土器・台付杯	SK961土取り穴整地層	不明	不明	8.4	赤切り	貼り付け高台欠落。台周縁 軽いナデ	9C第2

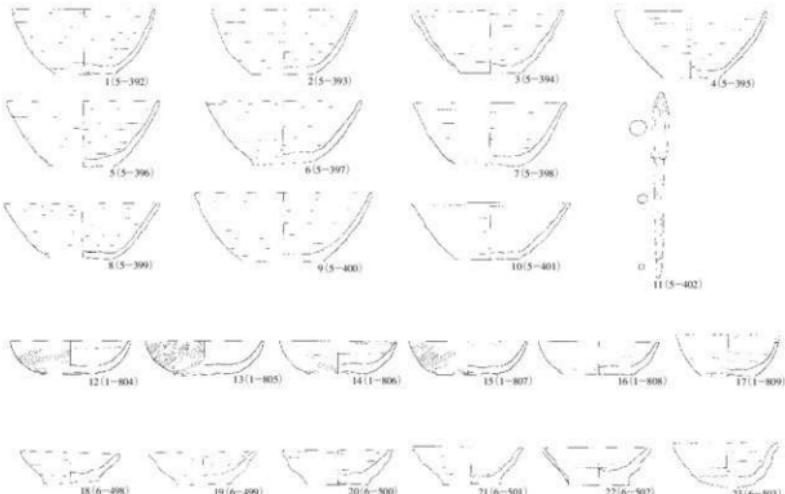
使用した祭祀専用の小型土器を一括廃棄した遺構と判断された。

#### 5) SI1979カマド周辺(土器一括廃棄遺構)(第91・132図、図版20)

SI1979は地区中央部東の第91次調査で第8層暗褐色土層面より検出された。住居は東辺中央にカマドを伴うが、崩壊したカマド燃焼部の窓み内から、須恵器壺・台付壺計8点が一括廃棄される形で出土した。住居廃絶に伴う祭祀として土器を一括廃棄した遺構と判断された。

#### 6) 第58次調査 SG1206沼地跡南岸第6層一括出土土器類(第134図、図版52)

地区南東部の第58次調査でSG1206沼地跡南岸の第6層上層スクモ層より、赤褐色土器壺10点と木製鉢形が一括出土した。明確な遺構を伴わないが、土器供膳具と木製祭祀遺物のセットを用いた祭祀を行った後、または祭祀行為の一環として、それらを水辺に廃棄したものと考えられる。出土土器の年代から、9世紀第4四半期頃に木製祭祀具を用いた祭祀を行ったと考えられる。



1~11: SG1206南岸第6層出土 12~17: SG463南岸第7層出土 18~23: SG1206南西岸第5層出土

0 154 100cm

第134図 鶴ノ木地区沼地岸辺付近一括出土土器類

## 7) 第26次調査 SG463沼地跡南岸第7層(整地Ⅲ層)一括出土土器(第134図・図版53)

地区中央部南側のSG463沼地跡南岸部の整地層である第7層より、他の土器類とともに齊一性の強い灰色を呈し小型軟質の特殊な壺形土器が出土した。ほとんどが燈明皿として使用されており、明確な造構を伴わないが祭祀用小型土器を一括廃棄した資料として抽出した。整地層の堆積時期や出土土器の形態などから、9世紀第2四半期頃に使用・廃棄したと考えられる。

## 8) 第63次調査 SG1206沼地跡南西岸第5層一括出土土器(第134図・図版53)

地区中央部北東側の第63次調査でSG1206沼地跡南西岸、古代水洗便所跡沈殿槽付近の第5層黒色土層より、赤褐色土器小口壺5点と手づくね土師器の小型壺1点が一括出土した。明確な造構を伴わないが、小型土器を用いた祭祀を行った後、または祭祀行為の一環として、それらを水辺に廃棄したものと考えられる。

出土土器は、法量的には秋田城跡出土の古代壺型土器としては最も小型の一群に属し、セット関係では台付壺等が欠落しており、成形では特に厚手に作られている。それらの特徴から、古代の土器様式の終末段階から中世の土器様式への過渡期の土器と考えられ、11世紀前半に位置づけられる。日常供膳具ではなく儀礼や祭祀用の土器に特化した土器群と考えられる。

鶴ノ木地区沼地岸辺付近一括出土土器群一覧表

図面番号	遺物番号	次数	種類・器種	出土遺構・層位	上口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	底部切り離し	調整等	時期
134-1	5-392	第57次	赤褐色土器・环A	SG1206・地区中央第8層上層スカラ	11.7	5.3	4.9	希切引	無調整	9C第4
134-2	5-393	第58次	赤褐色土器・环A	SG1206・地区中央第8層上層スカラ	11.9	5.3	5.4	希切引	無調整	9C第4
134-3	5-394	第58次	赤褐色土器・环A	SG1206・地区中央第8層上層スカラ	12	5.1	4.9	希切引	無調整	9C第4
134-4	5-395	第58次	赤褐色土器・环A	SG1206・地区中央第8層上層スカラ	12.4	5.5	4.6	希切引	無調整	9C第4
134-5	5-396	第58次	赤褐色土器・环A	SG1206・地区中央第8層上層スカラ	12.6	5.4	5.6	希切引	無調整	9C第4
134-6	5-397	第58次	赤褐色土器・环A	SG1206・地区中央第8層上層スカラ	12.9	5.2	5	希切引	無調整	9C第4
134-7	5-398	第58次	赤褐色土器・环A	SG1206・地区中央第8層上層スカラ	12.6	5.1	5.8	希切引	無調整	9C第4
134-8	5-399	第58次	赤褐色土器・环A	SG1206・地区中央第8層上層スカラ	12.9	4.5	5.3	希切引	無調整	9C第4
134-9	5-400	第58次	赤褐色土器・环A	SG1206・地区中央第8層上層スカラ	14.6	5.7	6.6	希切引	無調整	9C第4
134-10	5-401	第58次	赤褐色土器・环A	SG1206・地区中央第8層上層スカラ	13.1	4.7	5.5	希切引	無調整	9C第4
134-11	5-402	第58次	漆器遺物・漆器	SG1206・地区中央第8層上層スカラ	長さ 15.2	幅0. 8	厚さ 0.7		木製漆器遺物、形代	
134-12	1-804	第26次	赤褐色土器・小型坪	地区中央第7層	10	2.7	4.6	希切引	外函キヨ、内函ナデ、口縁に煤状炭化物付着、灯明皿	9C第2
134-13	1-805	第26次	赤褐色土器・小型坪	地区中央第7層	9.8	2.8	4.7	静止系切引	*	9C第2
134-14	1-806	第26次	赤褐色土器・小型坪	地区中央第7層	9.6	2.7	4.5	静止系切引	*	9C第2
134-15	1-807	第26次	赤褐色土器・小型坪	地区中央第7層	9.7	2.8	5	静止系切引	*	9C第2
134-16	1-808	第26次	赤褐色土器・小型坪	地区中央第7層	9.9	2.7	5.9	不明	無調整、輪模み痕みられる口縁に煤状炭化物付着、灯明皿	9C第2
134-17	1-809	第26次	赤褐色土器・小型坪	地区中央第7層	8.5	3.4	4.4	不明	木部外表面ナデ、輪模み痕みられる口縁に煤状炭化物付着、灯明皿	9C第2
134-18	6-98	第63次	赤褐色土器・小型坪	地区中央第5層	7.4	2.2	4.2	希切引	無調整、厚手の作り	11C前半
134-19	6-499	第63次	赤褐色土器・小型坪	地区中央第5層	8.9	2.7	4.4	希切引	厚手の作り	11C前半
134-20	6-500	第63次	赤褐色土器・小型坪	地区中央第5層	9	2.8	5.1	希切引	無調整、厚手の作り	11C前半
134-21	6-501	第63次	赤褐色土器・小型坪	地区中央第5層	9	3.1	4.6	希切引	無調整、厚手の作り	11C前半
134-22	6-502	第63次	赤褐色土器・小型坪	地区中央第5層	8.2	3	4.9	希切引	厚手の作り	11C前半
134-23	6-503	第63次	手作土器・小型坪	地区中央第5層	8.7	3.7	3.8	不明	体外面にミガキ痕あり、巻上模と思われる沈縫あり	11C前半

### 13 墓壙群（第135～137図、図版36）

地区西部の低位部である第35次調査地と第42次調査地では墓壙群が検出され、中世から近世にかけての墓域としての利用が把握されている。墓壙群は古代の土取り穴群を整地した面や土取り穴が完全に埋まりきらない窪地を利用している。

第35次調査地では11基の墓壙、ST627～ST635、ST653、ST656が、古代のSK651土取り穴群の凹みを整地した中世整地層である地区西部第4層面から検出されている。その形態は直径65～80cmの円形、あるいは長軸1.3～1.6m、短軸25～60cmの長楕円形で、深さは10～30cmである。中にはST627墓壙のように、内部に多量の炭化物が認められるものもあることから、火葬も行われたものと考えられる。円形の墓壙は調査地南東側に、長楕円形の墓壙は、調査地中央にまとまって検出された。また、長楕円形の墓壙には、長軸の方向が北で45度前後西に振れる共通性が認められた。両者は時期差などを反映している可能性があるが、副葬品の内容からは把握されなかった。

出土遺物の副葬品としては、銭貨と釘や毛抜き等の鉄製品が出土した。銭貨は中世以降の渡来銭として宋銭や明銭の洪武通宝（初銭1368年）や永楽通宝（初銭1411年）が出土するが、寛永通寶等近世の銭貨は出土していない。渡来銭については腐食により明確でないが模鉄錠となる可能性もある。墓壙群の年代については、検出面の第4層の年代や出土銭後の年代から、12世紀末以降に位置付けられ、15世紀以降となる可能性が高く、継続期間が不明であるが、終末が近世初頭以前となると考えられる。

第42次調査では、ST808～ST813、ST838～ST840の8基の墓壙が、土取り穴群整地した中世整地層である地区西部第4層面や、第4層が流れ込んだ土取り穴凹みから検出されている。検出層位と出土遺物から、8基のうち、7基が中世、1基は近世と考えられる。その形態は直径0.8～1.0mの円形、あるいは長軸0.9～1.6m、短軸60～65cmの長方形か楕円形で、深さは5～30cmである。骨壺を用いたST838近世墓を除くほとんど墓壙内部に多量の炭化物と骨片が認められ、焼土面を伴うものもあることから、火葬が行われたものと考えられる。なお、この他に古代の遺構として報告された焼土遺構が2基検出されている。

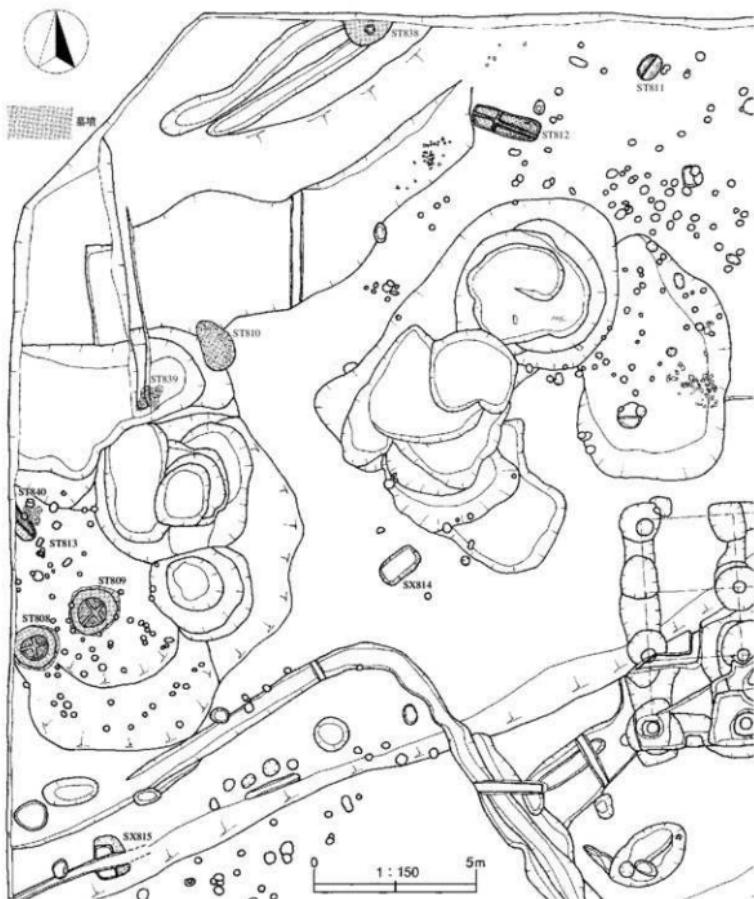
出土遺物の副葬品としては、ST838から骨壺と肥前系染付け皿が、ST838からは腐食により図示不可能だった副葬銭3枚が出土している。

鶴ノ木地区西部検出墓壙群一覧表（1）

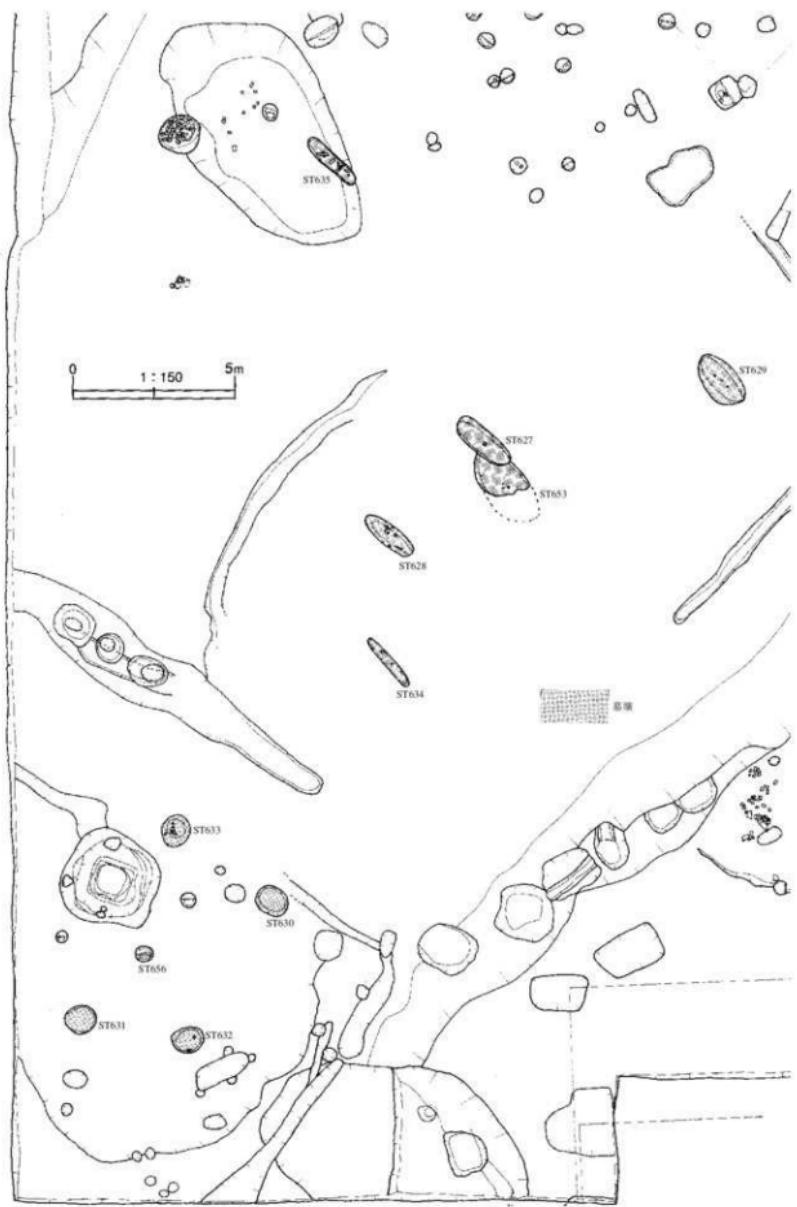
番号 番号	平面 番号	調査 次数	規模・平面形	深さ	方向	用土等	出土遺物
ST627	135	35次	長軸1.62m×短軸0.6m、長楕円形	10cm以上	N30°W	多量の炭化物混入、骨片出土	元豐通宝（1）、嘉定堆宝（1）、洪武通宝（2）、永樂通宝（1）、成化光宝（1）、貨銀不明（5）、鉄釘6本、第137回—1～17
ST628	135	35次	長軸1.45m×短軸0.45m、長楕円形	10cm以上	N50°W		無名銭（6）・第137回—18～20
ST629	135	35次	長軸1.32m×短軸0.55m、長楕円形	10cm以上	N45°W		淳祐光宝（1）、祥符通宝（1）、祥符光宝（1）、聖宋元宝（1）、成化光宝（1）、貨銀不明（1）・第137回—21～26
ST630	135	35次	直径約80cm、円形	20cm以上			
ST631	135	35次	直径約70cm、円形	30cm以上			鉄製毛抜き（1）
ST632	135	35次	直径約65cm、円形	20cm以上			
ST633	135	35次	直径約75cm、円形	30cm以上		骨片多量出土	
ST634	135	35次	長軸1.5m×短軸0.25m、長楕円形	20cm以上	N45°W	多量の炭化物混入	鉄釘1本・第137回—31
ST635	135	35次	長軸1.55m×短軸0.36m、長楕円形	10cm以上	N45°W	多量の炭化物混入	政和通宝（1）、熙寧通宝（1）、無名銭（1）・第137回—27～29
ST633	135	35次	長軸1.6m以上×短軸1m、長楕円形	20cm以上	N40°W		洪武通宝（2）、貨銀不明（2）、鉄釘6本・第137回—32～38
ST656	135	35次	直径約50cm、円形	30cm以上			開元通宝（2）、天聖光宝（2）、熙寧通宝（1）、聖宋元宝（3）、貨銀不明（1）・第137回—39～47
ST811	136	42次	長軸90cm×短軸60cm、楕円形	20cm以上	N40°E	多量の炭化物混入、骨片出土	

鶴ノ木地区西部検出墓壙群一覧表（2）

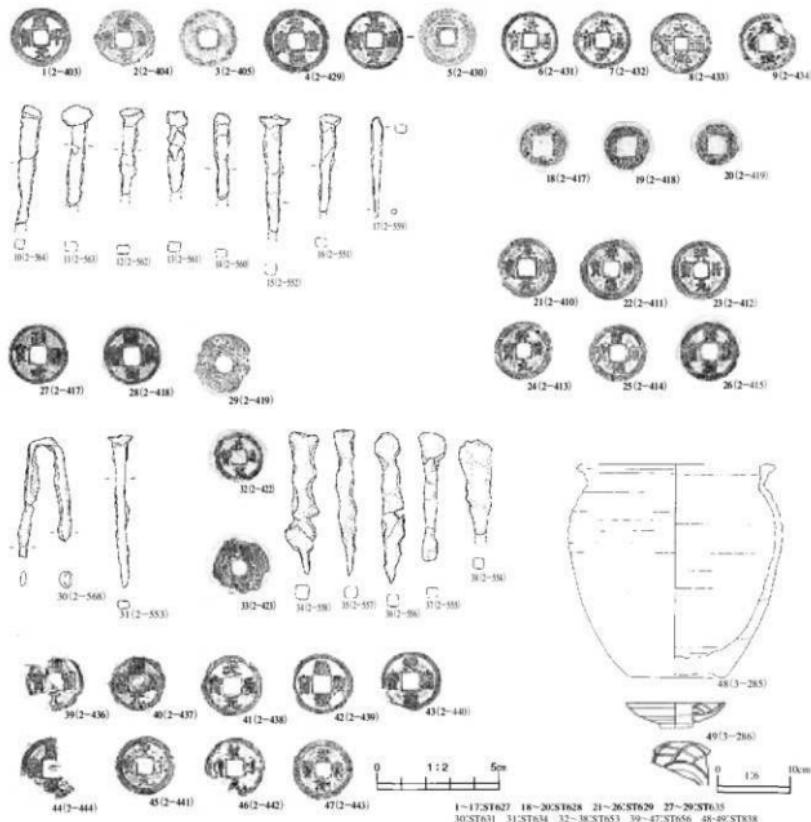
選択番号	回収番号	調査次数	規模・平面形	深さ	方向	堆土等	出土遺物
ST7812	136	42次	長辺2.2m×幅辺6cm・隅丸方形	30cm以上	W20° N	多量の炭化物混入・骨片出土	
ST7813	136	42次	長辺1m以上×幅辺60cm・隅丸方形	20cm以上		多量の炭化物混入・骨片出土	
ST7808	136	42次	直径約1.5m・円形	10cm以上		多量の炭化物混入・骨片出土	
ST7809	136	42次	直径約1.6m・円形	10cm以上		多量の炭化物混入・骨片出土	
ST7810	136	42次	長軸1.6m×短軸1m・楕円形	20cm以上	N40° E	多量の炭化物混入・骨片出土・骨盆不明(3) 回収未記載	
ST7839	136	42次	長軸0.1m×短軸0.8m・不整形	10cm以上		多量の炭化物混入・骨片出土	
ST7840	136	42次	長軸0.8m×短軸0.7m・不整形	10cm以上		多量の炭化物混入・骨片出土	
ST7838	136	42次	直径約1.5m・円形	80cm以上		骨壇埋設	素焼き壺(1)、肥前系系縁付皿(1)



第135図 第42次調査検出墓壙群



第136図 第35次調査検出墓壙群



第137図 第35次調査・第42次調査検出墓壙出土遺物

#### 14 その他の遺構（第46・47図）

##### 1) カマド状遺構（第46図）

地区西部の第48次調査地南側の第4層中世整地層面より SX930カマド状遺構が検出されている。焚口部は幅約70cmで、焚口から煙道部までの長さが約1.5mであり、全体が粘土で構築されている。直接付随する遺構は認められず、隣接し方向が一致する SB926・SB926に関係する屋外カマドと考えられ、中世の遺構と考えられる。

##### 2) 焼土遺構（第47図）

地区中央東側の第58次調査地南側の第4層中世整地層面より、SX1202～SX11205の4基の焼土遺構が集中して検出されている。SX1202は東西45～80cm×南北90cmで南北に長く中央がくびれる形を

呈し、深さ15~20cmで北側の円形の主体部がやや低い。SX1203は東西45cm×南北65cmの歪んだ楕円形を呈し、深さ20cmである。SX1204は東西145cm×南北40~95cmで東西に長く中央がくびれる形を呈し、深さ5~20cmで西側の円形の主体部がやや低い。SX1205は東西25~75cm×南北180cmで南北に長く3つの円形が連続し間がくびれる形を呈し、深さ8~10cmで北側の円形の主体部がやや低い。構造的には主体部と思われる円形部分に炭化物が集中し、円形部分やくびれ部分の壁に焼土を伴う。それらの部分には粘土による上部構造を伴った可能性が高い。鉄滓や鍛造剥片は出土しておらず鍛冶炉ではないが、焼成・加熱により何らかの製造や加工を行った生産施設と考えられる。焼土遺構群はSB1151・SB1152と重複しそれより新しいが、検出面から中世の遺構と考えられる。

### 第3節 出土遺物（遺構外出土遺物および特徴的出土遺物）

鶴ノ木地区における出土遺物のうち、遺構外から出土した遺物を中心として、種別ごとに報告する。なお、古代の土器・陶磁器類や中世貿易陶磁器およびかわらけ等、特徴的な遺物については、地区全体の出土傾向把握のため、遺構内出土遺物についても実測図を一部分重複して掲載することとした。また、遺物種別ごとの出土傾向については、遺構内出土遺物も含めた内容で記述した。

#### 1 土器・陶磁器類（第138図、図版55）

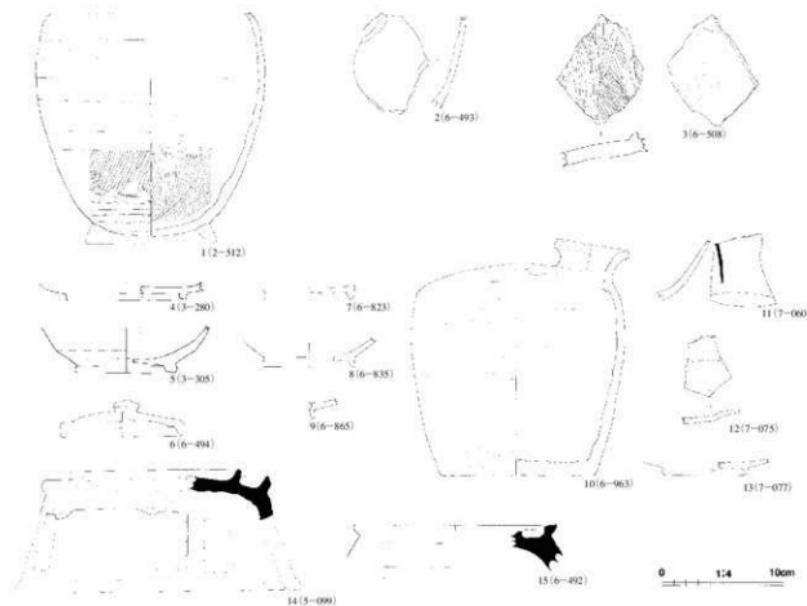
古代の土器類としては、須恵器、土師器、赤褐色土器が、遺構内では堅穴住居跡、遺構外では沼地岸辺付近の整地層を中心に出土している。遺構内出土土器については、第2節で報告し、遺構外の遺物包含層出土土器のうち年代比定資料となるような土器については、第1節で報告した。そのため本節では、鶴ノ木地区における特徴的な土器の一群について掲載報告する。

第138図の1~3はミガキ調整を伴う土器群であるが、焼成が通常の黒色処理を施す土師器とは異なりことなり、やや堅密な瓦質に近い色調・焼成となっている。特に1と3は器面に炭素の吸着が認められ、焼成による色調と質感が認められる。須恵器や赤褐色土器には基本的にミガキ調整を伴わず、黒色処理を施さないことから、特殊な瓦質土器として把握した。器形的にも1は壺形土器で丸底に輪高台が付き、3についても器種類不明で外面に高台とは異なるリング状の凸帯が付き、秋田城跡出土の須恵器や土師器には類例がないものとなっている。出羽国域でも類例はなく、他地域から搬入品の可能性が高いが、焼成・胎土・色調については払田柵跡第122次調査 SKII484B 出土土器瓦質土器に類似性が指摘される（註1）。土器の年代については、共伴遺物から1は9世紀第2四半期、出土層位の堆積年代から3は9世紀第4四半期に位置づけられるが、形態等からの検討は困難である。

古代の陶磁器としては、灰釉陶器7点（遺構内出土1点を含む）、綠釉陶器3点（遺構内出土1点を含む）が出土している。灰釉陶器のうち產地と型式が把握されるものとしては、黒笠14号（K14）窯式から黒笠90号（K90）窯式のものが認められ、年代としては9世紀第2四半期から9世紀第3四半期を中心とする年代に位置づけられる。その出土傾向は城内と一致する。

第138図の10は特殊器形の灰釉壺で、猿投窯の黒笠14号（K14）窯式である。平成7年度には秋田大学医学部の吉岡尚文氏により壺内の白色固着物質の分析が行われ、尿由来物質の可能性が示されており、機能としては涙瓶となる可能性がある。

土器類のうち侃類については、地区全体で円面侃6点、風字侃3点の出土があるだけで、城内に比較して極めて少ないことが指摘される。転用侃についても同様の傾向が指摘される。



第138図 脇ノ木地区出土土器・陶磁器

脇ノ木地区出土土器・陶磁器一覧表

図面番号	遺物番号	次数	種類・器種	出土遺跡・層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	底部切り離し	調査等	時期
138-1	2-512	第35次	土師器・台付壺	SK651土取り穴 鉢底土	不明	不明	不明	不明	外腹に赤褐色の黒色施墨。体部中程 底部ケズリ。後体部と底部腹方向ミガキ。底部先底でミガキ により切り離し等不明	不明
138-2	6-493	第63次	土師器・帯脚体部破片	表深	不明	不明	不明	不明	外腹ミガキ。墨書き[口]	不明
138-3	6-508	第63次	土師器・容器不明	地区中央第6層	不明	不明	不明	不明	外腹に赤褐色の黒色施墨。外腹ミガキ 底部保状化現象あり。外腹にリング状の凸部が付く。高台の可能性もあり	不明
138-4	3-280	第42次	縁輪陶器・台付壺	SD801埋土	不明	不明	9.2	へり切り	動付高台。底部外腹露削	9C前半
138-5	3-305	第42次	縁輪陶器・台付壺	表土	不明	不明	8.1	不明	外腹から底部底軸ケズリ。縁輪かかっている。	9C後半
138-6	6-494	第63次	灰輪陶器・瓶形壺	表土	9.9	3	5.6	不明	外腹に灰オリーブ色の輪付壺	9C前半
138-7	6-823	第67次	灰輪陶器・台付壺	SE1473埋土	不明	不明	7.1	不明	底面まで研磨面で施釉。K90号窯式	9C後半
138-8	6-835	第67次	灰輪陶器・台付壺	表土	不明	不明	7.5	不明		10C前半
138-9	6-865	第67次	灰輪陶器・台付壺	地区北部第5層	不明	不明	不明	不明	K90号窯式	9C後半
138-10	6-963	第67次	灰輪陶器・壺	地区北部第10層	5.7	不明	12.9	19.5	全体に緑色の釉かかる。体全体にケズリ 体斜面に漆付有り。平盤を高くしたような特殊器型の壺。内 部より屋久島の白色結晶石複数	9C第2
138-11	7-060	第69次	縁輪陶器・輪花碗破片	地区北部第5層	不明	不明	不明	不明	修外面に割花文	不明
138-12	7-075	第69次	灰輪陶器・段頭破片	地区北部第5層	不明	不明	不明	不明	外腹表面毛丸り。高台に施着痕。K90号窯式	9C後半
138-13	7-077	第69次	灰輪陶器・台付壺	地区北部第6層	不明	不明	7	不明	外腹表面毛丸り。K14号窯式	9C第2
138-14	5-099	第57次	領邊器円筒	表土	18.4	不明	不明	不明	方形透かし5カ所につく。外腹全体に自然釉かかる	不明
138-15	6-492	第63次	領邊器円筒	表深	16.5	不明	不明	不明	底面白を呈す	不明

註1 秋田県教育委員会払田柵跡調査事務所『払田柵跡調査事務所年報2003』 2004

SK11484B 出土瓦質土器については渤海産の可能性が指摘されている。

## 2 瓦・埴類（第139図、図版56）

瓦については、平瓦、丸瓦が出土しているが、軒丸瓦、軒平瓦は出土していない。鶴ノ木地区における瓦の出土は少なく、遺構内出土は、地区中央のSE406井戸跡（井戸底面に敷設）や地区北部の堅穴住居（カマドの補強材として使用等）に限られる。SE406井戸跡内からは130点が出土しており、鶴ノ木地区においては特異な出土例となっている。大規模建物群が存在する地区中央部とその周辺についても、瓦溜め等の廃棄遺構が検出されておらず、遺物包含層からの出土報告も少ない。そのことから、地区中央建物群を構成する建物は非瓦葺きもしくは、部分的な瓦葺きとなる可能性が高い。

平瓦については、凹面に布目压痕を残し、凸面は縄目タキを基本としている。製作技法については模骨痕がみとめられる桶巻き作りのものが、8世紀第2四半期の創建期に遡るSE406井戸跡から出土しているのみで（第102図-15・16）、ほとんどが粘土塊からの切り出し時の糸切り痕が認められる一枚作りのものである（第102図-17、第139図-2・3）。丸瓦については無段丸瓦と有段丸瓦が出土し、凹面に布目压痕を残し、凸面は縄目タキを基本としている。8世紀末以降の年代に位置付けられている有段丸瓦は、SE406井戸跡埋土中位や地区中央第7層の古代整地層からの出土が認められる（第139図-1）。

埴については、長方形の型枠作りで、無文である。瓦と同様出土は少なく、基壇や埴敷き等建物に伴う遺構としての検出もない。遺構に伴う出土は、SE406井戸跡で井戸底面に敷設されているものと堅穴住居のカマド補強材としての使用のみである。瓦と同様に遺物包含層からの出土としては、地区中央第7層の古代整地層Ⅲからの出土が認められる（第139図-4～8）。地区中央第7層は天長7年（830）の大地震の復興整地層と考えられ、それ以前の鶴ノ木地区的施設が震災を受け、使用されていた瓦・埴類が廃棄された可能性がある。

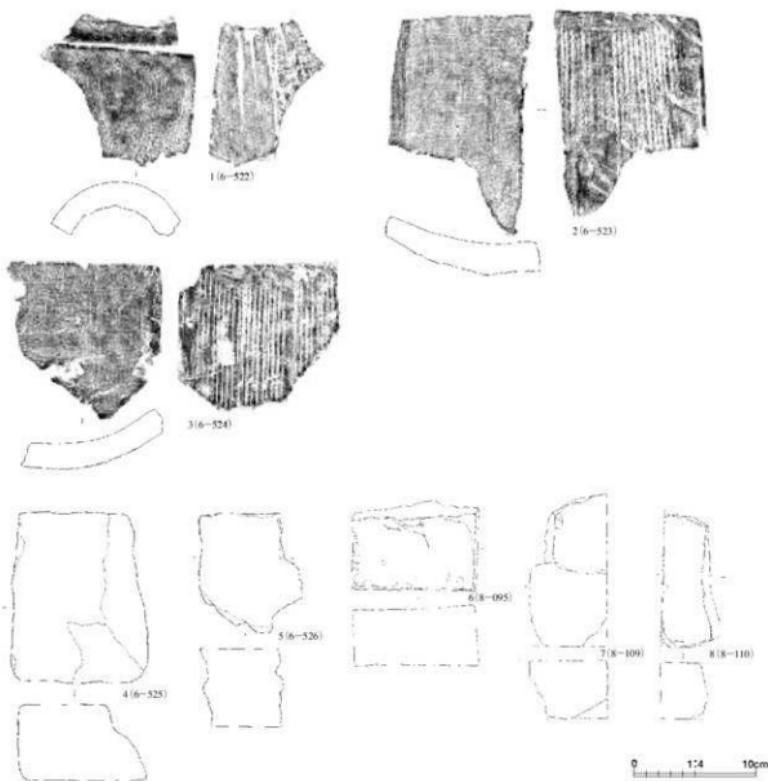
## 3 木製品類（第140図、図版50）

鶴ノ木地区出土の木製品は、遺構内では井戸跡、遺構外では沼地岸辺より出土している。

井戸跡では、8世紀第2四半期から9世紀後半にかけて機能した地区の主要な井戸跡であるSE406から45点、SE621から7点、SE1176から12点の木製品が出土している。種類としては挽物皿・椀、曲物蓋・底板、折敷き・箸等の容器や供膳具類の他、刷毛、ヘラ状製品等の工具類、機能の不明な棒状製品や串状製品が出土している（第103図-20～65、第104図-8～16）。これらは井戸使用時に誤って投棄されたものか、井戸廃絶時に廃棄されたと考えられるものが大半を占める。

沼地岸辺では、SG463沼地北西岸祭祀遺構から集中的に出土している。人面墨書き器や他の木製祭祀遺物と併せて挽物皿・椀、漆塗挽物皿、曲物蓋・底板、下駄、題籜軸、木針状製品、箸が出土しているが、これらは祭祀遺物として用いられたものと判断される（第124図-123～133、第125図-134～150）。

他の遺構外出土では、SG463沼地跡やSG1206沼地跡岸辺から、散在して出土しており、報告数も全体で18点と少ない。ほとんどが岸辺付近の植物遺体層（スクモ層）やその直下または直上の土層より出土しており、時期的にも井戸跡と同様に8世紀第2四半期から10世紀第1四半期にかけて、各時期のものが出土しており、時期的特徴は指摘されない。種類としては挽物皿・椀、曲物底板等の容器や供膳具類の他、下駄、楕、ヘラ状製品等類、曲物製作用の桜櫛が出土している。これらは沼地周辺の生活域での使用後に廃棄されたものと考えられる。なお、桜櫛の出土は小量ではあるが、城内を含めた鶴ノ木地区周辺で曲物製作が行われていたことを示唆している（第140図-1～18）。



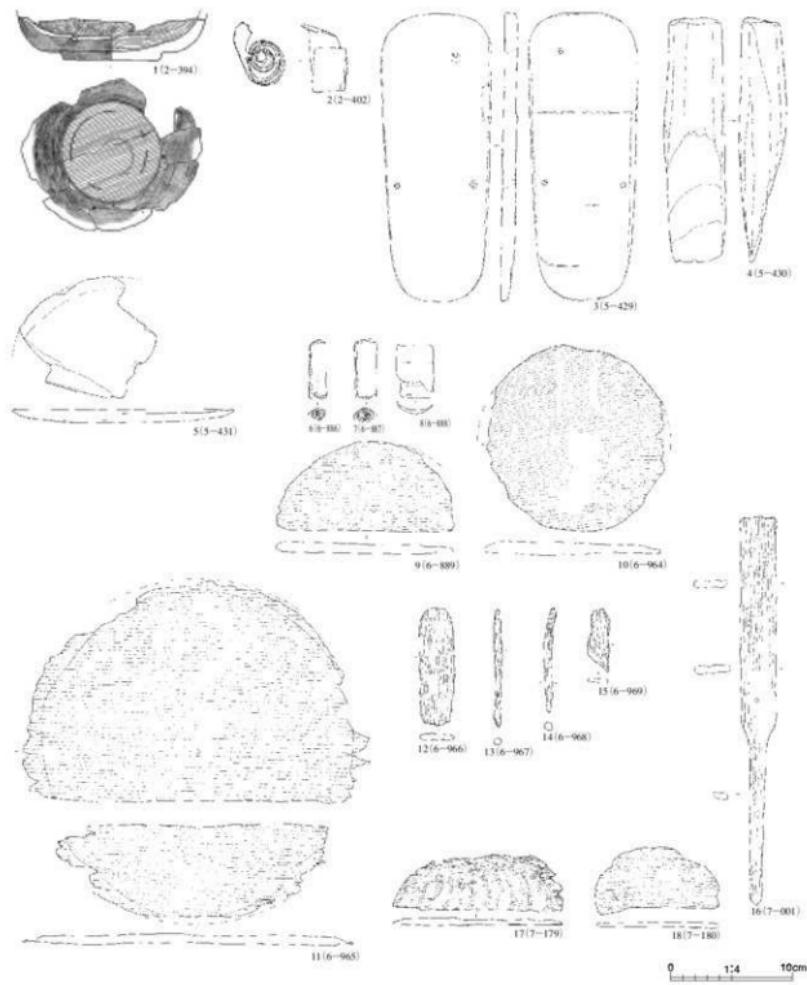
第139図 萩ノ木地区遺構外出土瓦・埴類

萩ノ木地区遺構外出土瓦・埴類一覧表

回収番号	遺物番号	次数	種類・器種	出土遺構・層位	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	調査等	時期
139-1	6-522	第63次	瓦・有段瓦	地区中央部6層	—	—	—	凸面綱目印き、凹面布目、一枚作り	8C末~9C第1
139-2	6-523	第63次	瓦・平瓦	地区中央部6層	—	—	—	凸面綱目印き、凹面布目、一枚作り。硬質	8C末~9C第1
139-3	6-524	第63次	瓦・平瓦	地区中央部6層	—	—	—	凸面綱目印き、凹面布目、一枚作り。硬質	8C末~9C第1
139-4	6-525	第63次	甕	地区中央部6層	13.6(幅)	10.4(長さ)	6(厚さ)	灰白色を呈す。軟質	~9C第2
139-5	6-526	第63次	甕	地区中央部6層	9.8(幅)	6.5(長さ)	6.3(厚さ)	灰白色を呈す。軟質	~9C第2
139-6	8-095	第81次	甕	地区東部第5層	~(幅)	7.3(長さ)	5(厚さ)	灰褐色を呈す。	~9C第4
139-7	8-109	第81次	甕	地区東部第6層	6.3(幅)	12.4(長さ)	4.8(厚さ)	灰褐色を呈す。軟質	~9C第2
139-8	8-110	第81次	甕	地区東部第6層	3.9(幅)	不明	4.7(厚さ)	灰褐色を呈す。軟質	~9C第2

#### 4 金属製品（第141図、図版57）

萩ノ木地区出土の金属製品は全て鉄製品であり、遺構内では主に竪穴住居跡、土坑、溝跡等から出土し、遺構外では主に地区北部の第62次調査地南側斜面の遺物包含層より出土している。



第140図 鶴ノ木地区遺構外出土木製品

地区中央東側や地区北部の居住域の堅穴住居跡からは、刀子、鉄鎌、不明鉄製品等が出土しているが、全体で16点と住居数に比して出土数は少なく、城内の出土状況とは相違している。土坑では地区北部の第62次調査地南側斜面のSK1349より完形品の鉄鎌が一括で出土しており、祭祀的な目的による埋納の可能性がある。遺構外からの出土は、ほとんどが地区北部の第62次調査地、外郭東門跡から城外東側に延びる緩やかな尾根状地形のうちSG463沼地跡北岸にむけて傾斜する南側斜面一帯の遺

鶴ノ木地区遺構外出土木製品一覧表

画面番号	遺物番号	次数	種類・器種	出土遺構・層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	調査等	時期
140-1	2-394	第34次	漆器桶	SG403 - 地区北部第10層泥炭面	不明	不明	7.8	内外面黒漆塗布、内は腐殖着しい	9C第2~第3
140-2	2-402	第34次	漆桶	地区北部第10層泥炭面	不明	不明	—	—	—
140-3	5-429	第58次	下軸(左足)	SG1206 - 地区中央東山スクモ面	23.4 (長さ)	8.8 (幅)	1.1 (厚さ)	舟軸が指折より寄る	8C第2
140-4	5-530	第58次	上軸(右足)	SG1206 - 地区中央東山スクモ面	19.9 (長さ)	5.0 (幅)	3.9 (厚さ)	—	8C第2
140-5	5-531	第58次	挽物	SG1206 - 地区中央追山スクモ面	18.1	1.1	10	—	8C第2
140-6	6-886	第67次	縄錬	SG1206 - 地区北尾第7層 上層スクモ層	—	—	—	—	9C第4~ 10C第1
140-7	6-887	第67次	縄錬	SG1206 - 地区北尾第7層 上層スクモ層	—	—	—	—	9C第4~ 10C第1
140-8	6-888	第67次	縄錬	SG1206 - 地区北尾第7層 上層スクモ層	—	—	—	—	9C第4~ 10C第1
140-9	6-889	第67次	曲物板	SG1206 - 地区北尾第7層 上層スクモ層	不明	不明	0.8 (厚さ)	腐殖着しい	9C第4~ 10C第1
140-10	6-964	第67次	曲物板	SG1206 - 地区北尾第9層	不明	不明	1.0 (厚さ)	竹釘1カ所に残っている	9C第4
140-11	6-965	第67次	曲物蓋	SG1206 - 地区北尾第9層	不明	不明	0.7 (厚さ)	腐殖着しい	9C第4
140-12	6-966	第67次	不明木製品	SG1206 - 地区北尾第9層	不明	不明	0.4 (厚さ)	板状	9C第4
140-13	6-967	第67次	稚伏木製品	SG1206 - 地区北尾第9層	不明	不明	0.5 (厚さ)	—	9C第4
140-14	6-968	第67次	稚伏木製品	SG1206 - 地区北尾第9層	不明	0.6 (幅)	0.6 (厚さ)	—	9C第4
140-15	6-969	第67次	不明木製品	SG1206 - 地区北尾第9層	不明	不明	0.3 (厚さ)	—	9C第4
140-16	7-001	第67次	ヘラ状木製品	SG1206 - 地区北部第10層	31.6 (長さ)	2.9 (幅)	0.6 (厚さ)	ヘラの広い部分にさき所竹釘が認められるが欠損している。	9C第2~第3
140-17	7-179	第69次	曲物板	SG1206 - 地区北部第10層	不明	不明	0.4 (厚さ)	—	9C第2~第3
140-18	7-180	第69次	曲物板	SG1206 - 地区北部第10層	不明	不明	0.4 (厚さ)	—	9C第2~第3

物包含層からの出土で、遺構外出土全68点のうち64点と集中している。製品としては刀子、鉄鎌、小札、鉄釘、不明鉄製品等が出土しているが、鉄鎌が48点と突出して多い。年代的にはほとんどが9世紀第4四半期に堆積した地区北部の第9層から出土している。前述のSK1349も第9層面の検出である。第9層は焼土炭化物が多量に混入し、元慶の乱に伴う火災により生じた焼土炭化物層に比定されている。第62次調査では鍛冶工房は検出されておらず、周辺からの検出もないことから、城内で生産、管理されていた鐵鎌などの武器を中心とする鉄製品が、元慶の乱の混乱に伴い、多量に遺棄された可能性が高いと考えられる。

その他遺構外からの主な出土品としては、地区西部の第48次調査地の中世整地層である第4層から鉄製整が、地区北部の第67次調査地表土からは鉄製鎧が出土している。

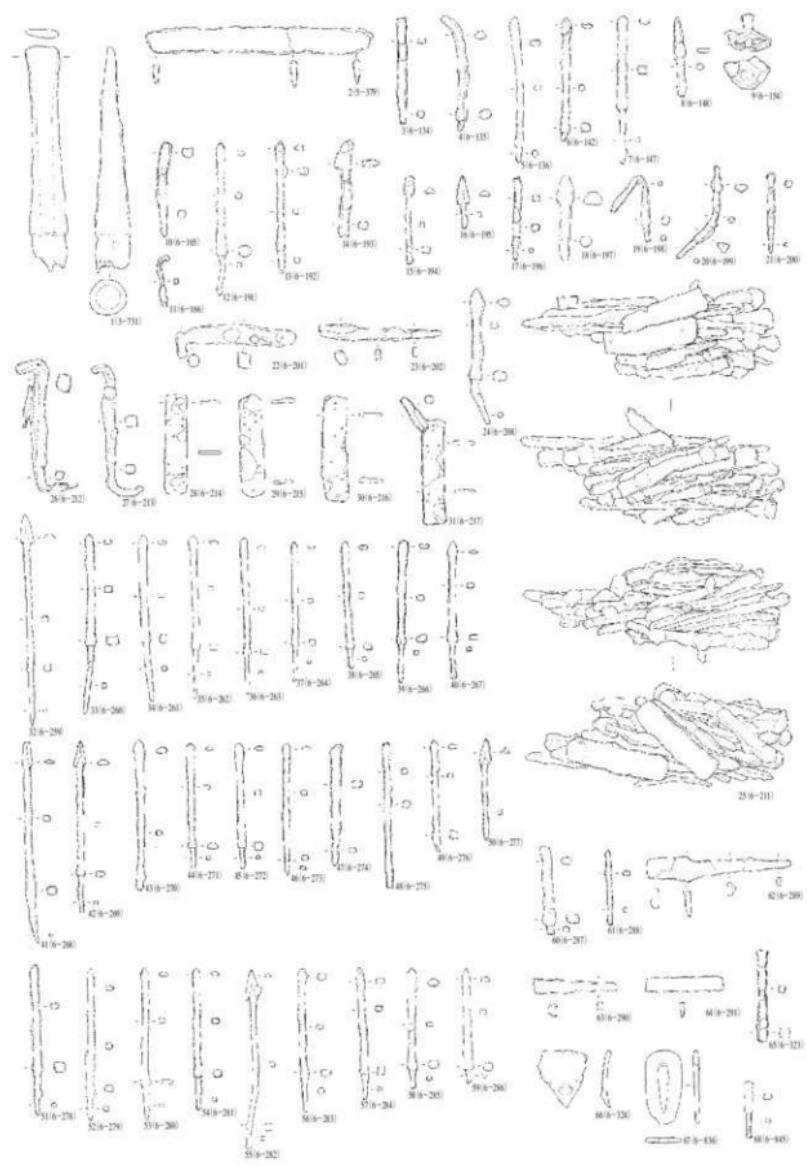
## 5 石製品（第142図）

鶴ノ木地区出土の石製品は、遺構内では主に竪穴住居跡、土坑、溝跡等から出土し、遺構外では地区北部や西部の遺物包含層より出土しているが、縄文時代の石器類を除けば、地区全体で15点と古代における出土数は極めて少なく、城内の出土状況とは相違している。SI1321竪穴住居跡からは砥石が出土し、SG463沼地跡北西岸のSD737溝跡からは石帶（巡方）が出土している。遺構外では、地区北部や西部の9世紀以降堆積した遺物包含層から砥石が出土している。砥石の石質はほとんどが凝灰岩製である。

地区中央に建物群、地区中央東側や地区北側に居住域が存在するにもかかわらず、砥石類の出土数が少ないとからは、鶴ノ木地区居住域における官人・兵士層の居住者が少ないと示唆するものといえる。

## 6 土製品（第142図）

鶴ノ木地区出土の土製品としては、フイゴ羽口、紡錘車、土錐が出土しているが、地区全体でフイゴ羽口5点、紡錘車2点、土錐6点、計13点と出土数は極めて少なく、近接する城内東側大畠地区的



第141図 猿ノ木地区遺構外出土鉄製品

0 1:4 10cm

図版ノ本地区遺構外出土鉄製品一覧表

図面 番号	番号	次数	種類・器種	出土遺構・層位	目徑等 (cm)	肩高等 (cm)	底径等 (cm)	調整等	時期
141-1	3-731	第48次	鉄削	地区北部第4層 (SN80E地)	18.5 (長さ)	3.2 (幅)	3.0 (径)	本質部残る	12C末~13C初
141-2	5-379	第58次	刀	地区中央部第4層	18.5 (長さ)	2.3 (幅)	0.6 (厚さ)		12C末~13C中葉
141-3	6-134	第62次	鉄破片	旧耕土	不明 (長さ)	0.7 (幅)	0.4 (厚さ)		
141-4	6-135	第62次	鉄	旧耕土作土	9.5 (長さ)	0.8 (幅)	0.4 (厚さ)	完形品	
141-5	6-136	第62次	鉄	旧耕土	12.0 (長さ)	0.5 (幅)	0.4 (厚さ)	完形品	
141-6	6-142	第62次	鉄	地区北部第7層	10.7 (長さ)	0.5 (幅)	0.4 (厚さ)	中面部欠損	10C前半~中頃
141-7	6-147	第62次	鉄	地区北部第7層	12.3 (長さ)	0.8 (幅)	0.3 (厚さ)	刃部欠損	10C前半~中頃
141-8	6-148	第62次	鉄	地区北部第7層	不明 (長さ)	0.6 (幅)	0.3 (厚さ)	中面部欠損	10C前半~中頃
141-9	6-154	第62次	不規則乳品	地区北部第7層	不明	不明	不明		10C前半~中頃
141-10	6-165	第62次	鉄	地区北部第7層	7.8 (長さ)	0.7 (幅)	0.6 (厚さ)		10C前半~中頃
141-11	6-166	第62次	不規則乳品	地区北部第7層	不明 (長さ)	0.3 (幅)	0.4 (厚さ)		10C前半~中頃
141-12	6-191	第62次	鉄	地区北部第9層	12.5 (長さ)	0.6 (幅)	0.4 (厚さ)	完形品	9C第4
141-13	6-192	第62次	鉄	地区北部第9層	10.8 (長さ)	0.5 (幅)	0.4 (厚さ)	完形品	9C第4
141-14	6-193	第62次	鉄	地区北部第9層	不明	0.8 (幅)	0.3 (厚さ)	刃部・中面部欠損	9C第4
141-15	6-194	第62次	鉄	地区北部第9層	不明	0.4 (幅)	0.4 (厚さ)	刃部・中面部欠損	9C第4
141-16	6-195	第62次	鉄	地区北部第9層	不明	0.4 (幅)	0.4 (厚さ)	中面部欠損	9C第4
141-17	6-196	第62次	鉄	地区北部第9層	不明	0.6 (幅)	0.4 (厚さ)	刃部欠損	9C第4
141-18	6-197	第62次	鉄	地区北部第9層	不明	0.8 (幅)	0.7 (厚さ)	中面部欠損	9C第4
141-19	6-198	第62次	鉄	地区北部第9層	不明	0.7 (幅)	0.5 (厚さ)	中経から先端部「折れ曲がっている」中面部欠損	9C第4
141-20	6-199	第62次	鉄	地区北部第9層	不明	0.6 (幅)	0.4 (厚さ)	刃部欠損	9C第4
141-21	2-200	第62次	鉄	地区北部第9層	8.7 (長さ)	0.6 (幅)	0.4 (厚さ)	刃部欠損	9C第4
141-22	6-201	第62次	不規則乳品	地区北部第9層	9.7 (長さ)	1.5 (幅)	1.0 (厚さ)		9C第4
141-23	6-202	第62次	刀子	地区北部第9層	不明 (長さ)	1.3 (幅)	0.2 (厚さ)	刃部欠損	9C第4
141-24	6-208	第62次	鉄	地区北部第9層	11.2 (長さ)	0.7 (幅)	0.6 (厚さ)	完形	9C第4
141-25	6-211	第62次	鉄削品	地区北部第9層	長さ (長さ)	不明	不明	扇開闢 (小札、鉄族、錐状製品) 捜査したもの	9C第4
141-26	6-212	第62次	鉄	地区北部第9層	長さ (長さ)	1.1 (幅)	1.2 (厚さ)	171より分離	9C第4
141-27	6-213	第62次	鉄削品	地区北部第9層	長さ (長さ)	0.9 (幅)	0.8 (厚さ)	171より分離	9C第4
141-28	6-214	第62次	鉄削品	地区北部第9層	8.1 (長さ)	1.8 (幅)	0.3 (厚さ)	171より分離	9C第4
141-29	6-215	第62次	鉄削品	地区北部第9層	8.4 (長さ)	1.9 (幅)	0.2 (厚さ)	171より分離	9C第4
141-30	6-216	第62次	鉄削品	地区北部第9層	8.6 (長さ)	2.0 (幅)	0.3 (厚さ)	171より分離	9C第4
141-31	6-217	第62次	鉄削品	地区北部第9層	8.6 (長さ)	1.8 (幅)	0.3 (厚さ)	171より分離	9C第4
141-32	6-259	第62次	鉄	地区北部第9層	17.5 (長さ)	0.5 (幅)	0.4 (厚さ)	完形品	9C第4
141-33	6-260	第62次	鉄	地区北部第9層	14.9 (長さ)	0.6 (幅)	0.5 (厚さ)	完形品	9C第4
141-34	6-261	第62次	鉄	地区北部第9層	13.3 (長さ)	0.6 (幅)	0.3 (厚さ)	完形品	9C第4
141-35	6-262	第62次	鉄	地区北部第9層	13.5 (長さ)	0.4 (幅)	0.3 (厚さ)	完形品、踏なし	9C第4
141-36	6-263	第62次	鉄	地区北部第9層	12.8 (長さ)	0.5 (幅)	0.3 (厚さ)	完形品、踏なし	9C第4
141-37	6-264	第62次	鉄	地区北部第9層	11.6 (長さ)	0.4 (幅)	0.3 (厚さ)	完形品、踏なし	9C第4
141-38	6-265	第62次	鉄	地区北部第9層	10.8 (長さ)	0.4 (幅)	0.5 (厚さ)	完形品	9C第4
141-39	6-266	第62次	鉄	地区北部第9層	11.7 (長さ)	0.6 (幅)	0.4 (厚さ)	刃部先端欠損	9C第4
141-40	6-267	第62次	鉄	地区北部第9層	11.5 (長さ)	0.5 (幅)	0.4 (厚さ)	完形品、踏なし	9C第4
141-41	6-268	第62次	鉄	地区北部第9層	10.6 (長さ)	0.6 (幅)	0.4 (厚さ)	刃部先端欠損	9C第4
141-42	6-269	第62次	鉄	地区北部第9層	14.2 (長さ)	0.4 (幅)	0.3 (厚さ)	完形品	9C第4
141-43	6-270	第62次	鉄	地区北部第9層	12.5 (長さ)	0.5 (幅)	0.4 (厚さ)	中面部欠損	9C第4
141-44	6-271	第62次	鉄	地区北部第9層	10.4 (長さ)	0.5 (幅)	0.4 (厚さ)	完形品	9C第4
141-45	6-272	第62次	鉄	地区北部第9層	10.4 (長さ)	0.5 (幅)	0.4 (厚さ)	完形品	9C第4
141-46	6-273	第62次	鉄	地区北部第9層	11.0 (長さ)	0.5 (幅)	0.4 (厚さ)	完形品	9C第4
141-47	6-274	第62次	鉄	地区北部第9層	10.9 (長さ)	0.5 (幅)	0.4 (厚さ)	刃部先端欠損	9C第4
141-48	6-275	第62次	鉄	地区北部第9層	12.0 (長さ)	0.6 (幅)	0.5 (厚さ)	刃部先端欠損・茎端部欠損	9C第4
141-49	6-276	第62次	鉄	地区北部第9層	9.3 (長さ)	0.4 (幅)	0.4 (厚さ)	刃部欠損	9C第4
141-50	6-277	第62次	鉄	地区北部第9層	8.5 (長さ)	0.5 (幅)	0.5 (厚さ)	中面部欠損	9C第4
141-51	6-278	第62次	鉄	地区北部第9層	12.4 (長さ)	0.6 (幅)	0.4 (厚さ)	完形品	9C第4
141-52	6-279	第62次	鉄	地区北部第9層	10.9 (長さ)	0.5 (幅)	0.4 (厚さ)	先端部欠損	9C第4
141-53	6-280	第62次	鉄	地区北部第9層	12.6 (長さ)	0.5 (幅)	0.4 (厚さ)	完形品	9C第4
141-54	6-281	第62次	鉄	地区北部第9層	11.7 (長さ)	0.6 (幅)	0.4 (厚さ)	完形品	9C第4
141-55	6-282	第62次	鉄	地区北部第9層	14.9 (長さ)	0.5 (幅)	0.4 (厚さ)	完形品	9C第4
141-56	6-283	第62次	鉄	地区北部第9層	11.8 (長さ)	0.6 (幅)	0.4 (厚さ)	完形品	9C第4
141-57	6-284	第62次	鉄	地区北部第9層	10.9 (長さ)	0.5 (幅)	0.4 (厚さ)	完形品	9C第4
141-58	6-285	第62次	鉄	地区北部第9層	10.0 (長さ)	0.6 (幅)	0.5 (厚さ)	完形品	9C第4
141-59	6-286	第62次	鉄	地区北部第9層	9.5 (長さ)	0.5 (幅)	0.4 (厚さ)	中面部欠損	9C第4
141-60	6-287	第62次	鉄	地区北部第9層	7.3 (長さ)	0.8 (幅)	0.6 (厚さ)	刃部先端欠損・中面部欠損	9C第4
141-61	6-288	第62次	鉄	地区北部第9層	6.2 (長さ)	0.6 (幅)	0.4 (厚さ)	刃部欠損	9C第4
141-62	6-289	第62次	刀子	地区北部第9層	11.9 (長さ)	2.1 (幅)	0.4 (厚さ)	刃部欠損	9C第4
141-63	6-290	第62次	刀子	地区北部第9層	6.9 (長さ)	1.0 (幅)	0.3 (厚さ)	刃部欠損	9C第4
141-64	6-291	第62次	刀子	地区北部第9層	6.3 (長さ)	1.2 (幅)	0.2 (厚さ)	刃部・茎欠損	9C第4
141-65	6-323	第62次	鉄	地区北部第1層	7.6 (長さ)	0.5 (幅)	0.4 (厚さ)	刃部先端欠損・中面部欠損	8C末~9C初
141-66	6-324	第62次	不明鉄製品	地区北部第1層	不明	不明	0.3 (厚さ)		8C末~9C初
141-67	6-836	第67次	鉄削	表土	6.0 (長さ)	2.9 (幅)	0.4 (厚さ)	刀の跡に思われる。	8C末~9C初
141-68	6-845	第67次	鉄	地区北部第5層	4.7 (長さ)	0.5 (幅)	0.5 (厚さ)	黒鉛が欠損	

出土状況とは相違している。遺構内では主に竪穴住居跡、土坑、土取り穴等から出土し、遺構外では地区全域の遺物包含層より出土しているが、フイゴ羽口が竪穴状鍛冶工房跡近辺より出土する以外は出土傾向に特徴はない。

地区を通じたフイゴ羽口や紡錘車類の出土数の少なさは、臨時の鍛冶工房の操業を除き、鶴ノ木地区における恒常的な生産施設・活動がほとんどなかったことを示唆するものといえる。

## 7 銭貨（第142図、巻頭図版8）

鶴ノ木地区出土の古代の銭貨としては、和同開珎銀銭が1枚出土している。銀銭は平成6年度第62次調査地の旧耕作土層内、地表下約50cmから出土している。出土地点は、地区北部の一画で外郭東門の東側城外にあたる場所で、調査前は畠の土手であった。秋田大学鉱山学部（現工学資源学部）泰松齊昭氏により材料科学的調査が行われ、分析の結果、銀の純度約98パーセントであることが判明した。「和同開珎」銀銭は全国でも38枚しか出土しておらず、そのほとんどが近畿地方を中心とした地域から出土している。東日本では千葉県我孫子市で五分の二に裁断したものが1枚発見されているだけである。このように完成品としては関東以北では初めての出土であり、中央との直接的な経済・文化的なつながりを持っていたことを示す遺物である。遺構外出土であり、廃棄の背景は不明であるが、外郭東門に接することから地鎮などの祭祀行為に伴い埋納された可能性などが想定される。

他に銭貨としては、地区西部の中世墓壙群から副葬品として渡来銭が出土している。また、地区北西部のSE1500井戸跡からは、同じ渡来銭の政和通宝（初鑄1111年）が出土している。

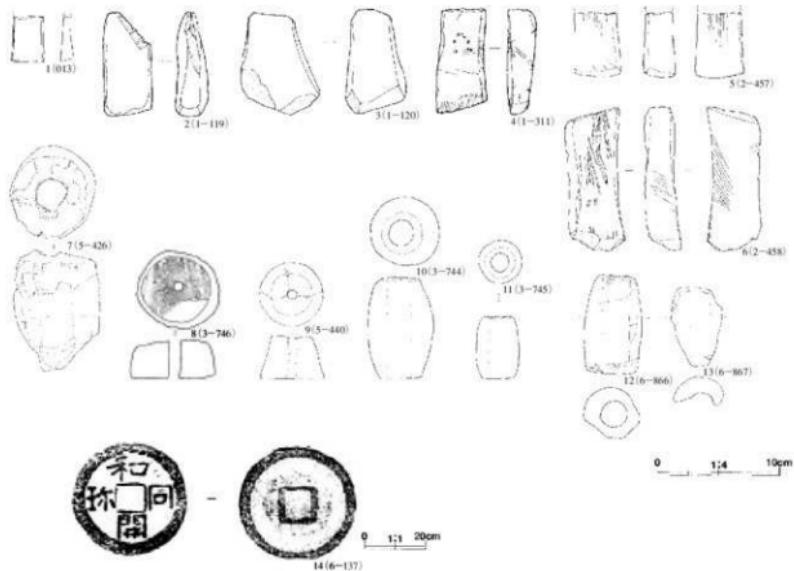
## 8 かわらけおよび貿易陶磁器（第143・144図、図版58）

### 1) かわらけ

秋田城跡では、土師器や赤褐色土器とは形態、製作技法の異なる酸化炎焼成で厚手の土器群、古代末から中世にかけて使用された「かわらけ」が出土している。かわらけは鶴ノ木地区から外郭外南辺周辺の大小路地区にかけて確認される中世の生活域から出土するが、出土数は鶴ノ木地区が特に多い。そのほとんどが沼地跡岸辺付近の整地層から他の遺物と混在して出土しており、井戸跡、土坑等の遺構からの出土は若干である。

ロクロ成形のかわらけと手づくり成形のかわらけ両方が出土しているが、手づくりかわらけは小皿1点の出土のみで、ロクロかわらけがほとんどを占めており、組成上の特徴を示している。

ロクロかわらけには、口径14~16cm台の大皿と口径7~9cm台の小皿の大小2法量がある。形態分類では、從来から存在した塊形ロクロかわらけが12世紀後半に平泉を中心に導入された手づくり大皿の影響を受けて変化した皿形の範疇に入ると考えられ、凹凸や段を形成するような成形時の強いナデ技法が認められる。これは東北地方の12世紀後半以降のかわらけに特徴的である（註1）。大皿には①成形時のナデ技法により生じる明確な段（二~三段）を形成するやや低い皿形タイプ（1、10~12、17、24）、②やはりナデ技法による段（二~三段）を形成する深みのある塊形に近いタイプ（2~5、13、19）、③底径比が小さくなり軽いナデ技法により軽く内彎する塊形に近いタイプ（6、16、18、20~22、25）が認められる。底面切り離しは回転糸切りで、底部外周から下端部に軽いナデを施す。底面には乾燥時についた、平行スノコ状圧痕と考えられる圧痕が認められる（註2）。作りは全体に粗雑なものが多く、底部周縁には傷のようなくぼみが特徴的に認められる。小皿には、①ナデ技法による明確な段を有する擂鉢形や皿形タイプ（27、32、33、36~38、41、45、46）から、②ナデ技法の



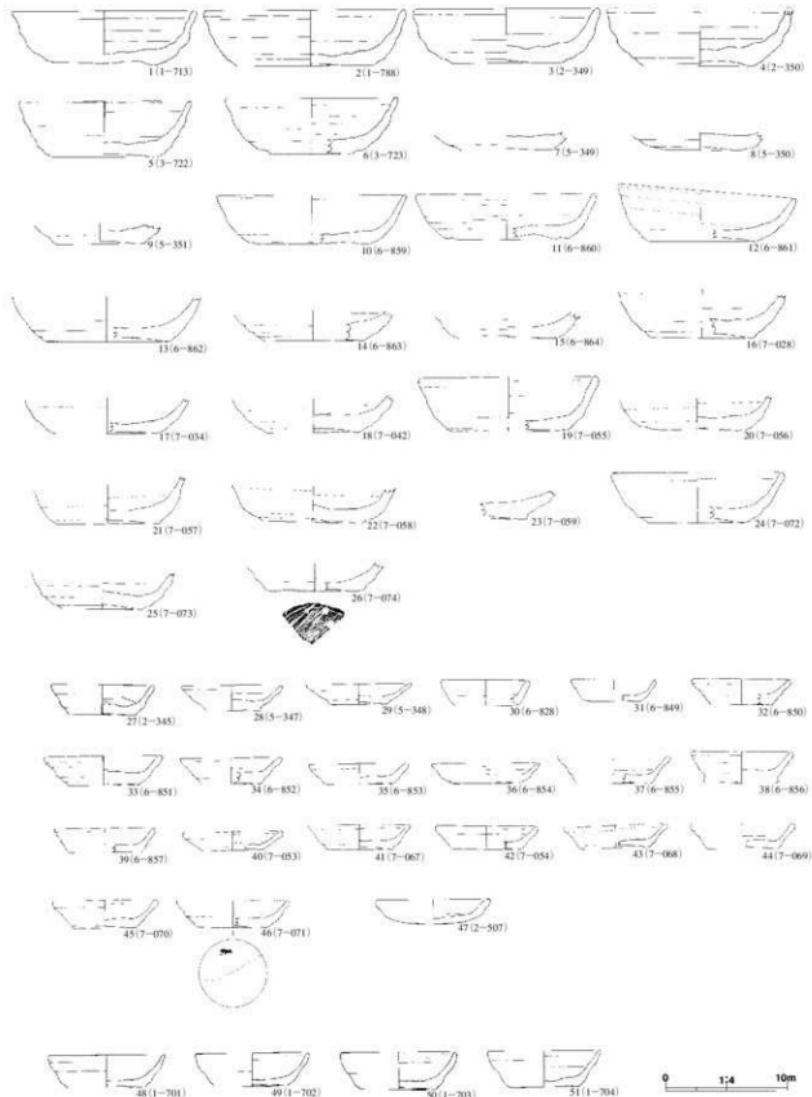
第142図 福ノ木地区遺構外出土石製品・土製品・銭貨

福ノ木地区遺構外出土石製品・土製品・銭貨一覧表

同番 番号	遺物 番号	次 数	種類・器種	出土遺構・層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	調 査 等	時 期
142-1	013	第7次	砥石	地区北部第7層	不明	2.5 (幅)	0.7 (厚さ)	4面使用。繩文岩製。	10C前半～中頃
142-2	1-19	第18次	磨削石器	表土	8.4 (長さ)	3.9 (幅)	2.3 (厚さ)		縄文時代
142-3	1-20	第18次	砥石	表土	8.0 (長さ)	4.5 (幅)	3.4 (厚さ)	4面使用。繩文岩製。	
142-4	1-311	第22次	砥石	地区北部第7層	8.1 (長さ)	3.5 (幅)	2.2 (厚さ)	3面使用。繩文岩製。	
142-5	2-357	第35次	砥石	地区西部第6層	不明	3.6 (幅)	2.3 (厚さ)	4面使用。	9C第2～4
142-6	2-458	第35次	砥石	地区西部第6層	11.6 (長さ)	4.1 (幅)	2.3 (厚さ)	4面使用。繩文岩製。	9C第2～4
142-7	5-26	第56次	ワゴ引口	地区中央第7層	不明	7.0 (往)	不明	中心に径2.5cmの孔が穿たれる	9C第2～3
142-8	3-746	第48次	紡錘車	表土	不明	6.7 (往)	3.0 (厚さ)	中心に径1.8cmの孔が穿たれる 平瓦軸用。	
142-9	5-440	第56次	紡錘車	表土	不明	5.6 (往)	3.5 (厚さ)	中心に径0.8cmの孔が穿たれる 土製紡錘車。	
142-10	3-744	第48次	土鍬	表土	8.3 (長さ)	5.7 (往)	不明	中心に径3.5cmの孔が穿たれる	
142-11	3-745	第48次	土鍬	表土	5.1 (長さ)	3.6 (往)	不明	中心に径2.5cmの孔が穿たれる	
142-12	6-866	第67次	土鍬	地区北部第5層	8.0 (長さ)	4.5 (往)	不明	中心に径2.3cmの孔が穿たれる	12C末～13C初
142-13	6-867	第67次	土鍬	地区北部第6層	6.5 (長さ)	4.1 (往)	不明	破片	10C中～12C
同番 番号	遺物 番号	次 数	種類・器種	出土遺構・層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	調 査 等	時 期
142-14	6-137	962次	和同開珎銭	旧耕作土	2.3 (外径)	0.55 (孔径)	0.198 (厚さ)	銀銭	初期708年

退化した扁平な皿形タイプ（28～31、34、35、39、40、42～44）等がある。成形技法は観察から器高、口縁部の低いものはロクロワ挽き成形と考えられ、底面切り離しは回転糸切りで無調整である。

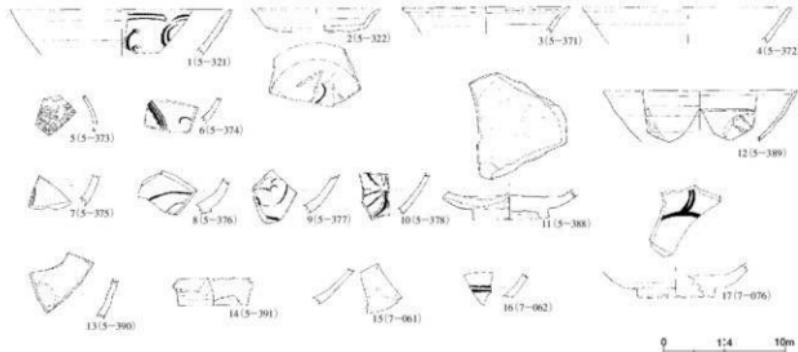
手づくね小皿については、出土例が一点のみであり、成形技法は、切り込みを入れた円盤からロクロを使用せずに、回転やナデにより成形する技法と考えられる。成形時に口縁部を作り出すための強いナデ技法により二段の段が認められる。



第143図 萌ノ木地区出土かわらけ

鶴ノ本地区出土かわらけ一覧表

図面番号	遺物番号	次数	種類・器種	出土遺構・層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	底部切り離し	調整等	時期
143-1	I-713	第25次	かわらけ・大皿	SH1401北東 pit	15.2	4.3	8.7	赤切り	I1縦部・体部横ナデ	12C末~13C初
143-2	I-788	第26次	かわらけ・大皿	地区中央窓7層	16.7	4.6	11.3	赤切り	I1縦部・体部横ナデ、底部周縁軽いナデ	13C前半
143-3	2-349	第34次	かわらけ・大皿	地区北部窓5層	15.4	4.5	9.1	赤切り	I1縦部・体部横ナデ	13C前半
143-4	2-350	第34次	かわらけ・大皿	地区北部窓5層	15.3	4.6	9.1	赤切り	I1縦部・体部横ナデ	13C前半
143-5	3-722	第48次	かわらけ・大皿	地区西窓5層	14.2	4.6	8.8	赤切り	I1縦部・体部横ナデ、底部周縁軽いナデ	13C前半
143-6	3-723	第48次	かわらけ・大皿	地区西窓5層	14.2	4.6	6.8	赤切り	I1縦部・体部横ナデ	13C前半
143-7	3-549	第58次	かわらけ・大皿	地区中央窓4層	不明	不明	7.6	赤切り		12C末~
143-8	3-550	第58次	かわらけ・大皿	地区中央窓4層	不明	不明	7.4	赤切り		12C末~
143-9	3-551	第58次	かわらけ・大皿	地区中央窓4層	不明	不明	7.4	赤切り		12C末~
143-10	6-859	第67次	かわらけ・大皿	地区北部窓5層	15.7	4	9.4	赤切り	I1縦部・体部横ナデ。外縫煤状の物付着内面漆黒状の付着物あり	12C末~13C初
143-11	6-860	第67次	かわらけ・大皿	地区北部窓5層	14.9	3.8	9.9	赤切り	I1縦部・体部横ナデ、底部に状況の付着物あり	12C末~13C初
143-12	6-861	第67次	かわらけ・大皿	地区北部窓5層	14.7	4.2	8.8	赤切り	I1縦部・体部横ナデ	12C末~13C初
143-13	6-862	第67次	かわらけ・大皿	地区北部窓5層	不明	不明	10.5	赤切り	I1縦部・体部横ナデ	12C末~13C初
143-14	6-863	第67次	かわらけ・大皿	地区北部窓5層	不明	不明	8.4	赤切り	I1縦部・体部横ナデ	12C末~13C初
143-15	6-864	第67次	かわらけ・大皿	地区北部窓5層	11.9	2	8	赤切り	I1縦部・体部横ナデ、底部周縁軽いナデ	13C前半
143-16	7-028	第69次	かわらけ・大皿	SE1500埋土	13.8	不明	8.2	赤切り	I1縦部・体部横ナデ、底部周縁軽いナデ	13C前半
143-17	7-034	第69次	かわらけ・大皿	SK1505埋土	不明	不明	8.4	赤切り	I1縦部・体部横ナデ、底部周縁ナデ	12C末~13C初
143-18	7-042	第69次	かわらけ・大皿	表土	不明	不明	7.8	赤切り	I1縦部・体部横ナデ、底部周縁軽いナデ内面漆黒状付着物あり	13C前半
143-19	7-055	第69次	かわらけ・大皿	地区北部窓4層	14.7	4.4	9.4	赤切り	I1縦部・体部横ナデ、底部周縁軽いナデ	13C前半
143-20	7-056	第69次	かわらけ・大皿	地区北部窓4層	不明	不明	7.6	赤切り	I1縦部・体部横ナデ、底部周縁軽いナデ	13C前半
143-21	7-057	第69次	かわらけ・大皿	地区北部窓4層	不明	不明	8.5	赤切り	I1縦部・体部横ナデ、底部周縁軽いナデ	13C前半
143-22	7-058	第69次	かわらけ・大皿	地区北部窓4層	不明	不明	8	赤切り	I1縦部・体部横ナデ、底部周縁軽いナデ	13C前半
143-23	7-059	第69次	かわらけ・瓶	地区北部窓4層	不明	不明	赤切り		円形	12C末~13C初
143-24	7-072	第69次	かわらけ・大皿	地区北部窓5層	14.3	4.1	8.1	赤切り	I1縦部・体部横ナデ、底部周縁軽いナデ	12C末~13C初
143-25	7-073	第69次	かわらけ・大皿	地区北部窓5層	不明	不明	6.6	赤切り	I1縦部・体部横ナデ、底部周縁軽いナデ	13C前半
143-26	7-074	第69次	かわらけ・大皿	地区北部窓5層	不明	不明	8.1	赤切り	底部に木口状工具によるナデ剥離あり	13C前半
143-27	2-345	第34次	かわらけ・小皿	地区北部窓5層	8.5	2.5	5.5	赤切り	I1縦部・体部強い横ナデ	12C末~13C初
143-28	3-547	第58次	かわらけ・小皿	地区中央窓4層	8.3	2.1	4.6	赤切り	I1縦部・体部軽い横ナデ	13C前半
143-29	3-548	第58次	かわらけ・小皿	地区中央窓4層	8.7	1.7	4.8	赤切り	I1縦部・体部軽い横ナデ	13C前半
143-30	6-828	第67次	かわらけ・小皿	SK1482埋土	7.3	2.1	5	不明	I1縦部・体部横ナデ	13C前半
143-31	6-849	第67次	かわらけ・小皿	地区北部窓5層	7.1	1.8	4.5	赤切り	I1縦部・体部軽い横ナデ	13C前半
143-32	6-850	第67次	かわらけ・小皿	地区北部窓5層	8.3	2.3	5.1	赤切り	I1縦部・体部軽い横ナデ	12C末~13C初
143-33	6-851	第67次	かわらけ・小皿	地区北部窓5層	9.8	2.4	5.9	赤切り	I1縦部・体部強い横ナデ	12C末~13C初
143-34	6-852	第67次	かわらけ・小皿	地区北部窓5層	8.5	2.2	5.1	赤切り	I1縦部・体部強い横ナデ	13C前半
143-35	6-853	第67次	かわらけ・小皿	地区北部窓5層	8.2	1.7	5.5	赤切り	I1縦部・体部強い横ナデ	13C前半
143-36	6-854	第67次	かわらけ・小皿	地区北部窓5層	8.9	1.6	5.5	赤切り	I1縦部・体部強い横ナデ	12C末~13C初
143-37	6-855	第67次	かわらけ・小皿	地区北部窓5層	9.3	2.3	6.3	赤切り	I1縦部・体部強い横ナデ。内面焼成化物有	12C末~13C初
143-38	6-856	第67次	かわらけ・小皿	地区北部窓5層	8.5	2.1	6	赤切り	I1縦部・体部強い横ナデ	12C末~13C初
143-39	6-857	第67次	かわらけ・小皿	地区北部窓5層	8.3	2	6	赤切り	I1縦部・体部強い横ナデ	12C末~13C初
143-40	7-053	第69次	かわらけ・小皿	地区北部窓4層	8.2	1.5	5	赤切り	I1縦部・体部軽い横ナデ。付着物	13C前半
143-41	7-067	第69次	かわらけ・小皿	地区北部窓4層	8.4	2.1	5.4	赤切り	I1縦部・体部軽い横ナデ	13C前半
143-42	7-054	第69次	かわらけ・小皿	地区北部窓4層	8.4	1.9	5.6	赤切り	I1縦部・体部軽い横ナデ	13C前半
143-43	7-068	第69次	かわらけ・小皿	地区北部窓5層	8.6	1.8	5.8	赤切り	I1縦部・体部軽い横ナデ	13C前半
143-44	7-069	第69次	かわらけ・小皿	地区北部窓5層	8.6	2.1	5.8	赤切り	I1縦部・体部軽い横ナデ	13C前半
143-45	7-070	第69次	かわらけ・小皿	地区北部窓5層	8.7	2.3	5.1	赤切り	I1縦部・体部強い横ナデ	12C末~13C初
143-46	7-071	第69次	かわらけ・小皿	地区北部窓5層	9.3	2.2	5.6	赤切り	I1縦部・体部強い横ナデ。底部に擦痕あり	12C末~13C初
143-47	2-507	第38次	手づくね	地区西窓5層	9.5	2	8.1		手づくね。底部へラグゼリ。内面ナデ	12C末~13C初
143-48	1-701	第25次	かわらけ・小皿	地区中央窓7層	9.7	2.7	6.5	ヘラ切り		14C
143-49	1-702	第25次	かわらけ・小皿	地区中央窓7層	9.5	2.7	6.2	ヘラ切り	内外面I縦部に僅、漆状付着物あり明瞭	14C
143-50	1-703	第25次	かわらけ・小皿	地区中央窓7層	7.6	3.1	6.3	ヘラ切り	内外面I縦部に僅状況化物付着物あり明瞭	14C
143-51	1-704	第25次	かわらけ・小皿	地区中央窓7層	9.1	3	5.8	ヘラ切り	内外面I縦部に僅状況化物付着物あり明瞭	14C



第144図 脚ノ木地区出土貿易陶磁器類

脚ノ木地区出土貿易陶磁器類一覧表

回面 番号	遺物 番号	次数	種類・器種	出土遺構・層位	1(群) 高さ(cm)	既往(cm)	底部切り離し	調査等	時期
144-1	5-321	58次	青磁・碗	SE1174地土	18.1	不明	不明	鹿児島系青磁鉢花文鏡(14a類)	12C後半~13C初
144-2	5-322	58次	青磁・皿	SE1174地土	10.5	1.9	5.6	同安窯系青磁盤花文鏡(116類)	12C後半~13C初
144-3	5-371	58次	白磁・碗	地区中央第4層	13.6	不明	不明	白磁口沿(鏡)(五輪)	13C中葉~後半
144-4	5-372	58次	青磁・碗	地区中央第4層	17.1	不明	不明	不明	不明
144-5	5-373	58次	青白磁・ 洋子焼片	地区中央第4層	不明	不明	不明	鹿児島系青白磁合子	12C後半~13C前葉
144-6	5-374	58次	青磁・碗破片	地区中央第4層	不明	不明	不明	鹿児島系青白磁合子(12類)	12C後半~13C前葉
144-7	5-375	58次	青磁・碗破片	地区中央第4層	不明	不明	不明	鹿児島系青白磁合子(12類)	12C後半~13C前葉
144-8	5-376	58次	青磁・碗破片	地区中央第4層	不明	不明	不明	鹿児島系青白磁合子(12類)、内面に片切離弓の文様見込み	12C後半~13C前葉
144-9	5-377	58次	青磁・碗	地区中央第4層	不明	不明	不明	鹿児島系青白磁合子(12類)、内面に片切離弓の文様見込み	12C後半~13C前葉
144-10	5-378	58次	青磁・碗破片	地区中央第4層	不明	不明	不明	鹿児島系青白磁合子(12類)	12C後半~13C前葉
144-11	5-388	58次	青磁・碗	地区中央第4層	6.1	不明	不明	鹿児島系青白磁合子(14類)	12C後半~13C前葉
144-12	5-389	58次	青磁・碗	地区中央第4層	15.8	不明	不明	同安窯系青磁盤花文鏡(116類)、外側脚部に工具による平行な擦痕	12C後半~13C前葉
144-13	5-390	58次	青磁・碗	地区中央第6層上面	不明	不明	不明	鹿児島系青白磁合子(14類)、内面に初期脚部による擦痕	12C後半~13C前葉
144-14	5-391	58次	青磁・碗	地区中央第6層上面	5.6	不明	不明	鹿児島系青白磁合子(14類)、内面に初期脚部による擦痕	12C後半~13C前葉
144-15	7-061	69次	青磁・碗破片	地区北部第4層	不明	不明	不明	鹿児島系青白磁合子(15a類)	13C前葉
144-16	7-062	69次	青磁・碗破片	地区北部第4層	不明	不明	不明	鹿児島系青白磁合子(14類)	12C後半~13C初
144-17	7-076	69次	青磁・碗破片	地区北部第5層	6.3	不明	不明	鹿児島系青白磁合子(14類)、内面に片切離弓の文様あり、高台付近露胎	12C後半~13C初

各類かわらけは、観察の結果、内面の器面は平滑で、使用痕はほとんど認められず、何度も繰り返しの使用があったとは考えられない。證明皿としての利用も認められない。作り自体が粗雑なものが多いことも考慮した場合、各類かわらけは非日常的な用途に一時的に使用され廃棄されたと考えられる。

かわらけの年代について、供伴する陶磁器類を見ると、珠洲系中世陶器では吉岡編年のI-2期からII-2期に該当する擂鉢、壺などがあり、主体はII期と考えられる。また、貿易陶磁では龍泉窯系青磁I-2・4・5a類に同安窯青磁に加え、白磁碗II類が1点のみ出土している。これらの供伴遺物の様相は12世紀末から13世紀前葉を中心として、13世紀中葉まで幅をもつと考えられる(註3)。

ロクロかわらけには、口径など法量の大きさやナデ技法による明確な段形成が認められる皿形タイプの大皿や、擂鉢形の小皿などに古い要素が認められ、手づくねかわらけ小皿とともに平泉跡遺群の

12世紀後半のかわらけに継続して12世紀末から13世紀初めに位置づけられる一群（前述タイプ①）がある。また、深みのある壺形タイプやナデ技法が退化した塊形タイプの大皿、扁平化により法量が縮小した小皿など新しい要素を示し、13世紀前葉以降に位置づけられる一群（前述タイプ②・③）がある。前述の貿易陶磁器類の下限年代を考慮した場合、後者の一群は13世紀中葉まで幅をもつと可能性がある。

また、ロクロかわらけには、全く別の一群が存在する。地区中央の第25次調査で出土した土師質土器は、ヘラ切りのロクロかわらけで底部に、特異「の」の字状の木口工具によるヘラ切り痕を残す。画一的な形態で、全て證明皿として使用されている。類似するヘラ切り痕のかわらけは、14世紀代の新潟県阿賀北地方の出土資料に類例が求められる（註4）。鶴ノ木地区における中世出土遺物の下限年代を考慮すれば14世紀代に位置づけられる資料となる。いずれにしても祭祀目的の済一的な器形を持つ證明皿として生産・使用されたものと考えられる。

## 2) 貿易陶磁器

貿易陶磁器類は、かわらけと同様に鶴ノ木地区から外郭南辺周辺の大小路地区にかけて確認される中世の生活域から出土するが、出土数は鶴ノ木地区が特に多い。井戸跡などの遺構や沼地跡岸辺付近の整地層などから他の遺物と混在して出土している。貿易陶磁の種類としては、中国産の青白磁、白磁、青磁があり、青磁がほとんどを占める。青白磁としては合子蓋一点があり、青磁としては龍泉窯系青磁劃花碗（I-2・4類）、蓮弁文碗（5a類）、同安窯系櫛描文碗（I類）、皿（I類）、白磁としては口禿げの白磁碗（IX類）等がある。これらは、貿易陶磁としての出現期と、増加期を考慮した場合、12世紀後葉から13世紀中葉の年代幅が考えられる（註5）。地区全体で17点が出土しており、秋田城が所在する中世前期の秋田平野においては、最も出土数が多い。

註1 松本達速『柳之御所におけるかわらけ存在の意味』『（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』X 1992

松本達速『一二世紀代東北地方におけるかわらけ存在の意味』『中近世土器の基礎研究』X 日本中世土器研究会編 1998

『柳之御所跡』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1995

註2 平泉町教育委員会『志羅山遺跡第35次調査報告書』 1995

註3 吉岡康暢『中世須恵器の研究』吉川弘文館 1994

横田賢次郎・森田勉『太宰府出土の輸入中国陶磁器について』『九州歴史資料館研究論集』4 1978

山本信夫『中世前期の貿易陶磁器』『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 1995

註4 八藤後順子ほか『越後阿賀北地方の中近世土器編年』『東北地方の在地土器・陶磁器Ⅱ』東北中世考古学第4回研究大会資料 1998

註5 註3に同じ

## 第4節 出土文字資料

秋田城跡からは出土文字資料として木簡、漆紙文書、墨書き土器等が出土している。そのうち鶴ノ木地区からは、木簡24点と削り屑、墨書き土器262点が出土している。種別ごとの出土状況と概要は以下

のとおりである。なお、文字資料の写真や実測図などについては、別編2の2鶴ノ木地区出土木簡集成と別編1の2鶴ノ木地区出土墨書き器集成に示した。

## 1 木簡（別編2の2 鶴ノ木地区出土木簡集成参照）

鶴ノ木地区出土木簡は、地区中央の第25次調査のSE406井戸跡から16点、同じく地区北西部の第39次調査のSG463沼地跡北西岸から8点、同じく地区中央東の第58次調査のSE1176井戸跡から削り屑が出土している。井戸跡については中央建物群に付属する井戸と考えられる。なお、鶴ノ木地区に近接する第54次調査地では、外郭東門南西に位置するSG1031土取り穴埋土から約300点の木簡が出土しているが、政府や大畠地区の実務官衙城を含むその他の城内外地区では木簡は出土していない。鶴ノ木地区一帯は丘陵状であるものの湧水点や沼地が存在し、地下水位も高く、木製遺物の遺存度が高いことや、地区的機能・性格が出土の背景にあると考えられる。

### 1) SE406井戸跡出土木簡

地区中央検出のSE406井戸跡は中央建物群に伴うもので、井戸枠周囲は玉石敷きで井戸館を伴う。井戸底面には井筒が据えられ、木簡はこの井筒の埋土最下層で出土した。出土木筒16点のうち、9点は墨痕がほとんど認められない。『秋田城跡出土文字資料集II』に掲載され、木簡番号が付されている7点を、別編の出土木簡集成に報告した。

第一号木簡は「天平六年月」の釘書きがあり、「続日本紀」の天平5年（733）条の出羽樋の秋田村高清水岡への移遷記事を裏付ける重要な資料といえる。併伴した第二号・第四・五号木簡の天平勝宝年間の紀年とは年代差があるが、木簡紀年の上には鉄釘が残存しており、創建以来一定期間井戸館に打ち付けられていたものが、落下または廃棄されたことにより、時間差が生じたと考えられる。井戸が付属する中央建物群の創建年代も、天平5年の秋田出羽樋創建期に遡ると判断される。

第二号木簡は「勝宝五年調米」と記された、微視に閃わる「調」の付札である。調庸の付札は原則として貢進された最終地で荷ほどきされ、廃棄されるものであり、鶴ノ木地区を含む秋田城が「調」の貢進先、つまり国府であった可能性が高いことを示す。

第三号木簡は出羽国の飽海・最上の郡名を習書した習書木簡、第六号木簡は「文選」「洛神賦」の一節を習書した習書木簡が出土しており、識字層、内容からは官人層の存在が推定される。また、第七号木簡は、人の貢進を示す「解」の上申書式の木簡であり、同様に役所的な機能と官人層の存在が推定される。

第四号・五号木簡（同一木筒と判明）は、願文と推定され、下野国河内郡の人物が願主となり、「父母二柱御為」、「眷属」や「菩薩」等の記載から、先祖などを供養する仏教的祭祀が行われていたことを示す。また、「天平勝寶四年」（752）の紀年銘があり、8世紀中葉段階での秋田城と下野国をはじめとする板東諸国との密接な関わりも示している。

井戸井筒埋土最下層で出土した木筒の廃棄年代については、まず、紀年銘の上限が天平5年（733）、下限が天平勝宝4年（752）となっている。一方、井戸廃絶と埋め立てに伴う井戸埋土中位からは8世紀第4四半期から9世紀第1四半期の土器が出土しており、8世紀中頃の土器は出土していないため、井戸自体の廃絶年代は8世紀末～9世紀初め頃まで下ると考えられる。それらのことから、木筒は井戸が機能している創建期である8世紀第2四半期から8世紀第4四半期の間に廃棄された可能性が高い。さらに、前述の第一号木筒の特殊性に起因する木筒紀年銘の年代差を考慮した場合、

第一号木簡以外の木簡群の廃棄年代は紀年の下限である天平勝宝年間以降となる可能性が高い。

## 2) SG463沼地跡北西岸出土木簡

地区北西部の SG463沼地跡北西岸祭祀遺構周辺の泥炭層（地区北西部第10層）から8点の木簡が出土している。木簡は、「祓」の祭祀に伴う祭祀具の流しの場所として利用された SX741テラス状遺構の張り出し部を周辺の地区北部第10層泥炭層（スクモ層）から、木製祭祀具や人面墨書き土器、木器類、土器類等の祭祀遺物と共に出土した。

出土木簡にも祭祀行為に伴うものが認められ、第八号木簡は陰陽道祭祀に用いるほぼ完形の呪符木簡であり、「符錄…如律令カ」の呪文が記されている。第九号木簡は解文に関するもの、第十号木簡は食料の授受に関係するものであり、祭祀行為に関係しないものも出土している。他の第十一号から第十五号木簡は、断片で数字しか判読できないものか、削り屑であり内容は不明である。

木簡の廃棄年代は共伴する第10層出土土器の年代から、9世紀第2四半期から第3四半期と考えられる。

## 2 墨書き土器（別編1の2 鶴ノ木地区出土墨書き土器集成参照）

秋田城跡からは平成19年度までに1,770点の墨書き土器が出土している。字種は300種を越え、その内容は施設名・地名・官職名・吉祥句・人名・記号等多種にわたっている。

鶴ノ木地区出土墨書き土器の総数は262点である（今回報告対象とした高野地区・児桜地区の一部を含む）。その内訳は須恵器98点（38.6%）、赤褐色土器140点（55.1%）、土師器15点（5.9%）である。年代的には9世紀第1四半期～第3四半期の土器が最も多い。出土位置としては地区北部と地区中央部に多い。

出土墨書き土器のうち判読可能なものは159点である。その内容は秋田城跡全城と同様に施設名・地名・官職名・人名・吉祥句・祭祀関係・記号等が認められる。「カ」として可能性を持つ文字も含め、施設名としては「寺」が16点と最も多く、地区中央部から集中して出土している。次に「厨」が14点と多く、他に「門」・「剣」等が出土している。地名としては「下毛」が3点、「毛」が1点地区北部から出土している。官職名としては「掾」・「目」が各1点出土しているのみである。人名としては「田中」・「子万呂」・「伴」・「橋」が出土している。吉祥句としては「千」・「万」・「五万」・「十万」・「上」・「長」等典型的な文字が全体で12点出土している。それとは別に祭祀関係と考えられる文字として「井」・「淨」・「災」・「鬼」・「貞」・「巾」・「真」等が出土している。特異なものとしては「京迎」などがある。

鶴ノ木地区における文字内容の特徴としては、「寺」と「厨」の墨書き土器の多さが指摘される。そのうち「寺」については、他の城内外域ではほとんど出土しておらず、鶴ノ木地区からの出土は突出している。「厨」については城内外域で広く出土しており、共通して最も多い文字、施設名となっているため、鶴ノ木地区の特徴とは指摘しえないが、地区に「厨房」を持つ施設が存在した可能性が考えられる。「寺」については地区中央部からの出土の集中傾向とあわせ、地区中央建物群の性格に直接的に結びつくものといえる。また、他の文字内容に比して、吉祥句の多さと多様な祭祀関係文字の出土が指摘される。これは、第3節で前述した祭祀遺構のあり方とあわせ、鶴ノ木地区の特徴である祭祀的・宗教的性格を反映するものと考えられる。

## 第V章 自然科学分析

秋田城跡鶴ノ木地区では、発掘調査に伴いつかの自然科学分析が実施されている。代表的なものは、第63次調査検出のSB1351便所遺構を対象とした分析であり、平成6年度に天理大学附属天理参考館（現奈良教育大）の金原正明氏らにより寄生虫卵・花粉・種実同定の分析が実施されている（同定された種実については第154図・第155図参照）。また、帯広畜産大学（現酪農学園大学大学院）の中野益男氏により沈殿槽堆積土の残存脂肪酸分析が行われ、ともに自然化学分析の結果より便所遺構としての裏付けを得ることができた。平成6年度には、金原正明氏らにより再度詳細な微遺体分析や木柵の樹種同定が行われ、大阪市立自然史博物館（現関西大学）の宮武頼夫氏により出土昆虫遺体の同定がおこなわれている。また、木柵については奈良国立文化財研究所の光谷拓実氏により年輪測定が行われている。

その他に平成6年度には、第62次調査出土の和同開珎銀鏡について秋田大学鉱山学部（現工学資源学部）の秦松齊氏により材料科学的調査が行われている。平成7年度には秋田大学医学部の吉岡尚文氏により第67次調査出土の灰釉陶器壺内付着物質の分析が行われ、尿由来物質の可能性が示された。平成9年度には、パリノ・サーヴェイ株式会社によりSG1206沼地跡採取の火山灰について、十和田a火山灰（降下年代西暦915年）との分析と同定がなされている（以上の分析者については所属のみを示し、役職等は省略した）。

一連の自然科学分析成果のうち、本報告では、鶴ノ木地区検出の重要遺構であるSB1351便所遺構を対象とした金原正明氏による微遺体分析と、光谷拓実氏による年輪年代測定の報告について、平成7年度秋田城跡調査概報より、書式や図面などについて一部再編集のうえ、以下に再掲載した（その他の自然科学分析結果のデータ等の詳細については、平成6年度～平成8年度秋田城跡調査概報を参照）。

### 1 秋田城跡便所遺構における微遺体分析

天理大学附属天理参考館 金原正明

古環境研究所 金原正子

#### 1. はじめに

秋田城跡においては昨年度の自然科学分析によって古代便所遺構が確認された。今回は遺構の堆積物を含んで連続してサンプリングを行い、また周囲の堆積物も採取して、基礎的データの抽出を行った。加えて、周囲の植生および環境の変遷の復原を行った。なお、多面的な定量的分析に時間がかかり、試料数もやや多かったため、微遺体分析を主に報告する。

#### 2. 試料

試料はSB1351に付設されたSX02、SX03、SX04、と遺構外の壁面から採取した33試料である。以下に採取試料を示す。なお、採取層準は花粉分析結果の図にそれぞれ示した。

- SX02 上位より、古代整地層一試料1、中間植物遺体層一試料2、堆積土上層一試料3、堆積土中層一試料4、堆積土下層一試料5で、他に木柵底の上面一試料7、下面一試料8である。堆積土は遺

構に伴うものであり、それより上位は遺構の埋没段階ないし埋没後の堆積層である。以下、SX03、SX04も同様である。

- ・SX03 上位より、池沼堆積物（中世）一試料1、池沼堆積物（古代）一試料2、植物遺体・火山灰混入層一試料3、古代整地層（上層）一試料4、堆積土上層一試料5、堆積土中層一試料6、堆積土下層一試料7で、他に円形堀り込み一試料8である。
- ・SX04 上位より、池沼堆積物（中世）一試料1、池沼堆積物（古代）一試料2、植物遺体・火山灰混入層一試料3、古代整地層（上層）一試料4、中間植物遺体層一試料5、堆積土上層一試料6、堆積土中層一試料7、堆積土下層一試料8である。
- ・E405ライン ベルトとの交差地点で採取を行った。上位より、池沼堆積物（中世）一試料1、池沼堆積物（古代）一試料2、植物遺体・火山灰混入層一試料3、古代整地層（上層）一試料4、地山植物遺体層一試料5である。他にライン上でベルト上方地山植物遺体層一試料1'、ベルト堀り込み地山植物遺体層一試料2'を採取した。
- ・E395ライン 上位より、池沼堆積物（中世）一試料1、植物遺体・火山灰混入層一試料2、古代整地層（下層）一試料3、地山植物遺体層一試料4である。

### 3. 寄生虫卵分析

#### 1) 方法

寄生虫卵の抽出には次ぎの順で処理を施し分析を行った。i) サンプルを採量する。

ii) 脱イオン水を加え搅拌する。iii) 篩別により大きな砂粒や木片等を除去し沈殿法を施す。iv) 25% フッ化水素酸を加え30分放置（2・3度混和）。v) 水洗後サンプルを2分する。vi) 片方にアセトリシス処理を施す。vii) 両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製する。viii) 検鏡・計数を行う。以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

#### 2) 結果と考察

各地点の分析結果は表と図に示す。SX02では堆積土上層（試料3）、堆積土中層（試料4）からやや高い密度で寄生虫卵が検出された。SX03とSX04では堆積土下層（それぞれ試料7、試料8）から他の層準よりは高い密度の寄生虫卵が検出された。水洗便所であるためか極めて高い密度を示す層準はなかった。E405ライン、E395ラインおよび各遺構の上部においても低密度の寄生虫卵が検出される。これは汚染的なものと考えられる。

寄生虫卵組成においてはやや密度の高いSX02堆積土上層（試料3）、堆積土中層（試料4）とSX03堆積土下層（試料7）でみると、回虫卵、鞭虫卵が多く、肝吸虫卵、有・無鉤条虫卵が出現する。寄生虫卵から推定される食生活は金原・金原（1955）の分析でも考察したように野菜類やコイ科の主とする淡水魚の摂食が推定される。

有・無鉤条虫卵は前回のSX02の分析においても出現しており、普遍的に含まれているとみなせる。有・無鉤条虫卵はブタの摂食で感染する有鉤条虫とウシの摂食で感染する無鉤条虫があり識別はできないが、草食動物の摂食によって一過的に排出される可能性のある他の寄生虫卵が検出されないため、有鉤条虫である可能性が高いとみられる。よって、便所を使用していた人々がブタをかなり常食的に食べていたと考えられよう。ブタ食を食習慣とするため、その食習慣のある人々、すなわち、大陸か

らの外米者である可能性が示唆され、便所遺構が外米者用の便所であったことが考えられる。なお、現状で日本において同様のブタ食を示す分析結果は福岡市の鴻臚館跡の便所遺構しか類例がない。

#### 4. 花粉分析

##### 1) 方法

試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。i) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。ii) 水洗した後、0.5mmの篩で繅などの大きな粒子を取り除き、沈殿法を用いて砂粒の除去を行う。iii) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。iv) 水洗した後、水酢酸によって脱水し、アセトトリス処理（無水酢酸9:1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。v) 再び水酢酸を加えた後、水洗を行う。vi) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレラートを作製する。以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。検鏡はプレラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。

##### 2) 結果と考察

花粉分析結果では、各遺構の壁面から採取した試料は風媒花の花粉が主に構成され、食物に関連するものは読みとれない。植生については以下の別項に記す。SX02木桶底の2試料とSX03円形掘り込みは他試料と異なる特殊な花粉が優占し特異性を示す。SX02木桶底ではアザ科—ヒュ科、アブラナ科、ナス科が優占し、SX03円形掘り込みではアザ科—ヒュ科、アブラナ科が優占する。これらは他試料と花粉群集の構成に相違があり自然堆積として周辺の植生を反映しているとは明らかにみなすことはできず、今まで各遺跡で得られている糞便のデータと類似性があり、遺構に残存していた糞便に由来すると考えられる。アザ科—ヒュ科のアザとヒュは野菜であり、アブラナ科にも栽培植物が含まれる。ナス科は種実も検出されておりイヌホオズキなどが野菜として用いられていた可能性がある。興味深いのは同試料から寄生虫卵が検出していないことである。寄生虫卵はこれらの試料において堆積保存環境からみて分解してしまったと考えられる。よって、寄生虫卵が分解して失われていても、花粉組成特徴から糞便の堆積を示唆できる場合があろう。以上からみて木桶のと円形掘り込みには遺構廃絶時に多くの糞便が残存していた可能性がある。このことは、本遺構が使用時においても、常に糞便が残存せずに流れきるような状況であったのかどうか疑問をもたせる。

##### 3) 周囲の植生の変遷

花粉分析の結果、周囲の植生の変遷が追えたので下位の時期から順に記す。

###### i) 遺構構築以前—地山植物遺体層の時期

周辺は森林状態であり、クリ、ナラ類（コナラ属コナラ亜属）、ブナ属の落葉広葉樹林が分布していた。E405ラインではクリ、ナラ類（コナラ属コナラ亜属）が優勢であり、E395ラインではブナ属が優勢であり、同じ地山でも層準が異なるとみなされる。

###### ii) 本遺構の時期

周囲は樹木の生育するところと草木の分布する裸地が存在する。樹木ではクリ、ナラ類、ブナ属、スギが生育している。スギは地山植物層の時期より多くなる。

日当たりのよい裸地にはヨモギ属のような乾燥を好む草本が分布していた。SX02、SX03、SX04にはカヤツリグサ科、ガマ属—ミクリ属、ミズアオイ属などの水湿地植物が生育していた。上位の中間

植物層でも大きな変化はないが、クリ、ナラ類、ブナ属の広葉樹が減少傾向を示すが地点によって異なる。

iii) 古代整地層（下層・上層）・植物遺体・火山灰混入層—古代

こちらの層位においてはばらつきはあるものの、クリ、ナラ類、ブナ属が減少し、ヨモギ属が増加する。周囲で樹木が減少し裸地が多くなったとみなされる。スギ林は減少せずに残存し、広葉樹の分布する比較的低いところが開発されたものとみなされる。古代整地層上層から上位は栽培植物のソバ属が出現するようになり、周辺でソバ属などの畑作が盛んに営まれだした。

iv) 池沼堆積物—古代

よりクリ、ナラ類、ブナ属の広葉樹が減少する。堆積地はガマ属—ミクリ属などの生育する池沼ないし水湿地になる。

v) 池沼堆積物—中世

スギ林も減少し、周辺にはヨモギ属の繁茂する乾燥した裸地がより多くなる。継続してソバ属が出現するため、周辺で畑地が拡大したことが考えられる。

## 5. 摘要

- 1) 秋田城跡においてSB1351に付設されたSX02、SX03、SX04、E405ライン、E395ラインにおいて寄生虫卵分析と花粉分析を行った。
- 2) 寄生虫卵の出現密度はSX02、SX03、SX04の下部堆積物でやや高い密度を示した。
- 3) 有鉤条虫卵とみなされる寄生虫卵の出現から、便所の使用者がブタ食を食習慣とすることが考えられる。ブタ食を食習慣とするため、その食習慣のある人々、すなわち、大陸からの外来者である可能性が示唆され、便所遺構が外来者用の便所であったことが考えられる。
- 4) 花粉分析では、SX02木桶底でアカザ科—ヒュ科、アブラナ科、ナス科が優占し、SX03円形堀り込みではアカザ科—ヒュ科、アブラナ科が優占した。いずれの分類群も野菜となる植物を含み糞便に由来すると考えられる。本例は寄生虫卵が分解して失われていても、花粉組成の特徴から糞便の堆積を示唆できる場合があることを示唆する。
- 5) このことからみて木桶と円形堀り込みには遺構廃絶時に多くの糞便が残存していた可能性があり、使用時においても、常に糞便が残存せずに流れきるような状況であったのかどうか疑問がもたれる。
- 6) 花粉分析より植生の変遷が明らかになった。遺構構築以前はクリ、ナラ類（コナラ属コナラ亜属）、ブナ属の落葉広葉樹林が分布していた。本遺構の時期（奈良時代）はクリ、ナラ類、ブナ属、スギの樹木も生息するが、ヨモギ属の生える日当たりのよい裸地も増加する。SX02、SX03、SX04にはカヤツリグサ科、ガマ属—ミクリ属、ミズアオイ属などの水湿地植物が生息していた。古代整地層（下層・上層）・植物遺体・火山灰混入層・池沼堆積物（古代・中世）の時期にかけてはクリ、ナラ類、ブナ属の広葉樹そしてスギと段階的に森林が減少し、ヨモギ属の分布する乾燥した裸地が増加する。これらの現象はソバ属の出現からみて畑作が盛んになり畑地が増加したためと考えられる。

## 参考文献

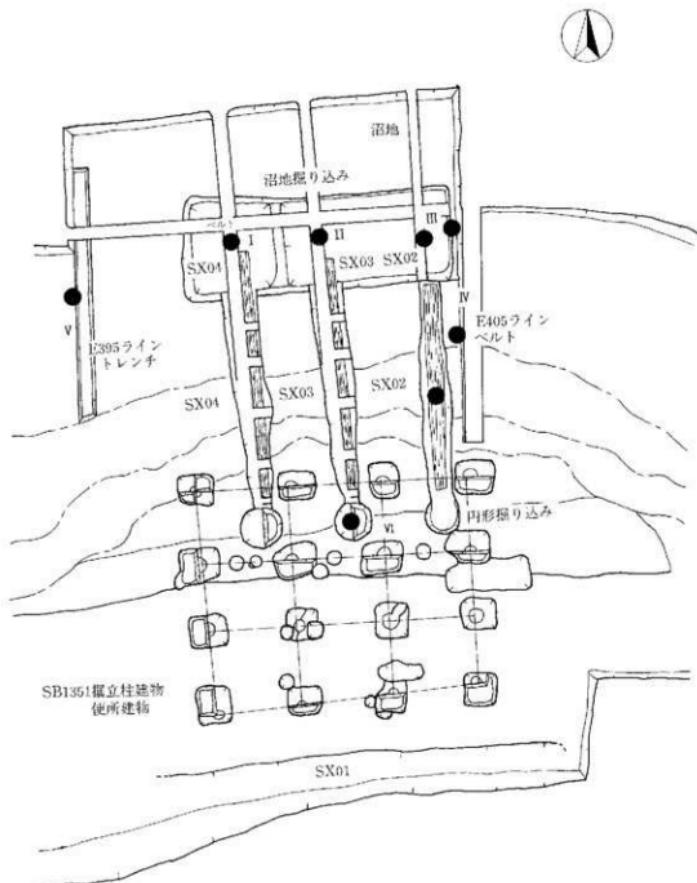
金原正明・金原正明（1995）秋田城における自然科学分析、秋田城跡（平成6年度）、秋田市教育委員会

Peter J. Warnock and Karl J. Reinhard (1992) Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. Journal of Archaeological Science, 19.

金原正明・金原正子 (1992) 花粉分析および寄生虫。藤原京跡の便所遺構—藤原京7条1坊—、奈良国立文化財研究所。

金原正明 (1994) 便所堆植物からさぐる古代人の食生活、助成研究の報告4、味の素食の文化センター。

金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原、新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法、角川書店。



第145図 便所遺構土壤資料採取関係位置図

表1 秋田城遺跡における寄生虫卵分析結果(1)

学名	分類群 (試料0.1cc中)	SX02					
		1	2	3	4	5	6
Helminth eggs	寄生虫卵						
Ascaris	回虫卵	1	32	88			
Trichuris	鞭虫卵	2	24	73	1		
Clonorchis sinensis	肝吸虫卵	1	3	14	1		
Taenia	有・無鉤条虫		4	1			
Diphyllobothrium nihonkaiense	日本游离吸虫卵			1			
Unknown eggs	不明虫卵	1	1				
Total	計	5	64	177	2		
	(試料1cc中に算定)	50	640	1770	20		

表2 秋田城遺跡における寄生虫卵分析結果(2)

学名	分類群 (試料0.1cc中)	SX03							
		1	2	3	4	5	6	7	8
Helminth eggs	寄生虫卵								
Ascaris	回虫卵					3	27		
Trichuris	鞭虫卵			1	1	1	27		
Clonorchis sinensis	肝吸虫卵						13		
Metagonimus-Heterophyes	異形吸虫卵				1				
Taenia	有・無鉤条虫						8		
Total	計		1	2		4	75		
	(試料1cc中に算定)		10	20		40	750		

表3 秋田城遺跡における寄生虫卵分析結果(3)

学名	分類群 (試料0.1cc中)	SX04							
		1	2	3	4	5	6	7	8
Helminth eggs	寄生虫卵								
Ascaris	回虫卵						2	20	
Trichuris	鞭虫卵							25	
Clonorchis sinensis	肝吸虫卵					4		7	
Metagonimus-Heterophyes	異形吸虫卵				2				
Capillaria	毛膚虫類卵								
Unknown eggs	不明虫卵								
Total	計		2		4		2	52	
	(試料1cc中に算定)		20		40		20	520	

表4 秋田城遺跡における寄生虫卵分析結果(4)

学名	分類群 (試料0.1cc中)	E405ライン						E395				
		1	2	3	4	5	1'	2'	1	2	3	4
Helminth eggs	寄生虫卵											
Trichuris	鞭虫卵					2	1					
Clonorchis sinensis	肝吸虫卵								1			
Capillaria	毛膚虫類卵					1						
Total	計		1	2	1				1			
	(試料1cc中に算定)		10	20	10				10			

表1 秋田城跡における花粉分析結果(1)

学名	和名	SX02					
		1	2	3	4	5	6
Arboreal pollen	樹木花粉						
<i>Abies</i>	モミ属	1	1				
<i>Tsuga</i>	ツガ属						
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複被管束亞属		2	1	4	1	3
<i>Pinus</i> subgen. <i>Strobiloidea</i>	マツ属單被管束亞属	1					
<i>Cryptomeria japonica</i>		68	45	23	34	5	4
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	1					
<i>Juglans</i>	クルミ属	2	1		2		
<i>Pterocarya rhoifolia</i>	サワグルミ	5	2		3		
<i>Platycarya strobilacea</i>	ノグルミ	1					
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	28	25	25	32	3	5
<i>Betula</i>	カバノキ属	6	5	7	3	1	
<i>Corylus</i>	ハシバミ属				2		
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシテ属-アサダ	14	15	6	23	1	
<i>Castanea crenata</i>	クリ	93	148	165	152	27	10
<i>Castanopsis</i>	シイ属		1		1		
<i>Fagus</i>	ブナ属	42	75	31	30	5	4
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亞属	54	71	37	83	11	4
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亞属	9	2		4		
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ	10	4	5	5		
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ	4		1			
<i>Zanthoxylum</i>	サンショウ属	9			2		
<i>Ilex</i>	モチノキ属		1	4	1		
Celastraceae	ニシキギ科		1		1		
<i>Acer</i>	カエデ属			1		1	
<i>Aesculus turbinata</i>	トデノキ	2	2		8		
Oleaceae	モクセイ科	7					
<i>Prunus</i>	トネリコ属	2	1	1	1		
<i>Clethra barbinervis</i>	リョウブ	11	2		1		
Eriaceae	ツツジ科				1		
<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニワトコ属-ガマズミ属	14	1		3		
<i>Lonicera</i>	スイカズラ属	1	1				
Arboreal · Nonarboreal pollen	樹木 · 草本花粉						
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イクラサ科	35	12	3		1	
Rosaceae	バラ科	14		1	3		
Leguminosae	マメ科	4	6		1		
Nonarboreal pollen	草本花粉						
<i>Typha-Spartanium</i>	ガマ属-ミクリ属	2	4		1		
<i>Alisma</i>	サジオモダカ属	1	1				
Gramineae	イネ科	21	8	12	19	9	4
<i>Oryza</i> type	イネ属	2	2	1		1	
Cyperaceae	カヤツリグサ科	11	4	3	6	2	19
<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属			3	2		
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>	タデ属サナニタデ属	1	2	4		2	
<i>Rumex</i>	ギンジン属	3					
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	2	5	11	1	78	10
Caryophyllaceae	ナデシコ科	1					
<i>Ranunculus</i>	キンポウゲ属	21	1		8		
<i>Thlaspiatum</i>	カラマツソウ属					2	
Cruciferae	アブラナ科	2	6		5	105	22
<i>Impatiens</i>	ツリフネソウ属	3	1		1		
<i>Ampelopsis brevipedunculata</i>	ノブドウ	1				1	
<i>Holaraxis-Myriophyllum</i>	アリノトウガサ属-フサモ属						
Umbelliferae	セリ科	3			1		
Solanaceae	ナス科	5		3	1	48	4
<i>Plantago</i>	オオバコ属	3			1		
Lactucidae	タンボホモ科	2					
Asteridae	キク科	2				1	
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	95	52	11	33	5	6
Fern spore	シダ疎始胞子						
Monolete type spore	単孔孢子	6	4	8	16	3	4
Trilete type spore	三葉胞子	87	6	6	23	3	3
Arboreal pollen	樹木花粉	385	405	308	396	54	31
Arboreal · Nonarboreal pollen	樹木 · 草本花粉	53	18	4	4	1	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	181	86	48	79	268	49
Total pollen	花粉数	619	509	360	479	323	80
	(試料1cc中に算定)	32188	57008	46080	12454	4845	600
Unknown pollen	未同定花粉	4	3	3	6	5	1
Fern spore	シダ疎始胞子	93	10	14	39	6	7

表2 秋田城跡における花粉分析結果(2)

学名	分類群	和名	SX03						円形割り
			1	2	3	4	5	6	
ArboREAL pollen		樹木花粉							
Picea		トウヒ属			1				
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>		マツ属複種管束葉属	4	1	1		1	2	
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ	56	69	117	71	47	27	1
Taxaceae-Cephalotaxaceae	-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科 -ヒノキ科	1			1			
<i>Myrica</i>		ヤマモモ属				1			
<i>Juglans</i>		クルミ属	1	2	3	4			
<i>Pterocarya rhoifolia</i>		サワグルミ	1	1	3	1	3	2	
<i>Alnus</i>		ハンノキ属	4	6	3	13	12	21	1
<i>Betula</i>		カバノキ属	8	3	6	6	3	3	2
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>		クマシデ属-アサダ	6	4	1	5	2		1
<i>Castanea crenata</i>		クリ	13	6	4	46	42	117	1
<i>Castanopsis</i>		シイ属				3		1	
<i>Fagus</i>		ブナ属	7	19	39	20	29	85	
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>		コナラ属コナラ属	18	22	14	33	24	66	1
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>		コナラ属アカガシ属	1	2	6		5		6
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>		ニレ属-ケヤキ	2	7	10	5	2	12	1
<i>Celtis-Aphanius aspera</i>		エノキ属ムクノキ	1			1			
<i>Zanthoxylum</i>		サンショウ属			1	5	1		
<i>Ilex</i>		モチノキ属			1	2	3		1
<i>Acer</i>		カエデ属	1	1					
<i>Aesculus turbinata</i>		トチノキ		2	1	1	2	2	
<i>Vitis</i>		ブドウ属	3		15	4			
Oleaceae		モクセイ科				217	1		
<i>Fraxinus</i>		トネリコ属			1	3			
<i>Clethra barbigervis</i>		リヨウブ			2		4		
<i>Sambucus-Viburnum</i>		ニワトコ属-ガマズミ属	31	3	4	4	4	3	
<i>Lonicera</i>		スイカカラ属			1	4	2		
ArboREAL · NonarboREAL pollen		樹木・草木花粉							
Moraceae-Urticaceae		クワ科-イラクサ科	5	11	29	97	21	5	1
Rosaceae		バラ科			4	2	2		
Leguminosae		マメ科	1	1				1	
Araliaceae		ウコギ科				4			
NonarboREAL pollen		草木花粉							
<i>Type-Spartanium</i>		ガマ属-ミクリ属	14	6	1			2	
<i>Alisma</i>		ザンジョモダカ属		3	5	2	1		
<i>Sagittaria</i>		オモダカ属		2	1	1			
Gramineae		イネ科	69	88	88	15	54	7	9
<i>Oryza</i> type		イネ属	1	4	2		4	1	
Cyperaceae		カヤツリグサ科	54	41	98	14	4		1
<i>Anemone keiskei</i>		イボクサ			1				
<i>Monocchoria</i>		ミズアオイ属			1		1		1
Liliaceae		ユリ科							2
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>		タデ属サナエクサデ節	1	1			2	2	
<i>Rumex</i>		ギシギシ属				2			
<i>Fagopyriaceae</i>		ゾバ属	1						
Chenopodiaceae-Amaranthaceae		アカザ科-ヒユ科	4	4	4	4	1		67
Caryophyllaceae		ナデシコ科		1	1				
<i>Nuphar</i>		コウホネ属			5				
<i>Ranunculus</i>		キンポウゲ属	1	4			15	2	
<i>Thlaspiatum</i>		カラマツソウ属	8	4	1				
Cruciferae		アブラナ科		1	1	2	3	3	15
<i>Impatiens</i>		シリフネソウ属	4	2	10	2			
<i>Ampelopsis brevipedunculata</i>		ノブドウ		1					
<i>Holarraga-Myriophyllum</i>		アリノトウダギ属-フサモ属	3		18				
Umbelliferae		セリ科	6	8	2	3	2	1	
Labiateae		シソ科	3	1			1		
Solanaceae		ナス科				5	5		1
<i>Plantago</i>		オオバコ属				1			
Lactucoideae		タンボポ科	1			2			
Asteroidae		キク科	8	4	12	2	3		1
<i>Xanthium</i>		オナモミ属			1				
<i>Aureomisia</i>		ヨモギ属	292	261	99	110	78	14	2
Fern spore		シダ植物胞子							1
Monolete type spore		单壁孢子	22	20	7	6	17	4	8
Trilete type spore		三急壁孢子	202	32	145	135	52.00	4.00	2
ArboREAL pollen		樹木花粉	127	176	233	450	187	346	3
ArboREAL · NonarboREAL pollen		樹木花粉	6	12	33	103	23	6	0
NonarboREAL pollen		草木花粉	470	436	351	160	175	39	96
Total pollen		花粉總数	603	624	617	713	385	391	7
		(試料1cc中に算定)	12060	14976	7404	31372	43120	43792	46
Unknown pollen		未同定花粉	4	6	4	5	6	3	1
Fern spore		シダ植物胞子	224	52	152	141	69	8	0
									10

表3 秋田城跡における花粉分析結果(3)

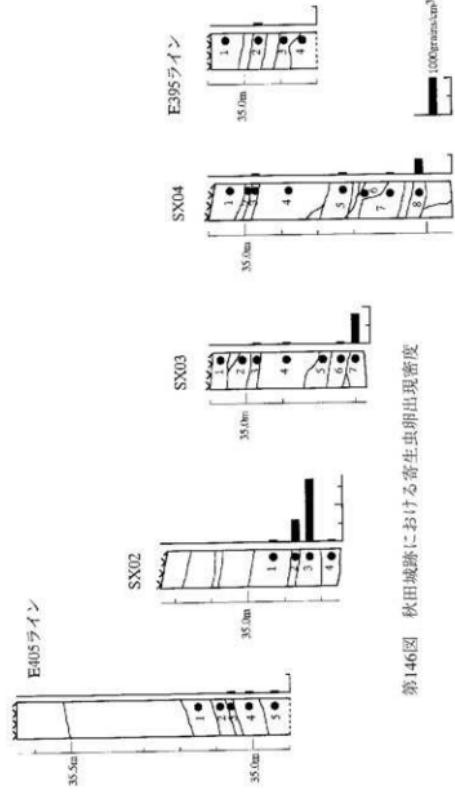
学名	分類群	和名	SX04							
			1	2	3	4	5	6	7	8
ArboREAL pollen		樹木花粉								
<i>Abies</i>		モミ属								1
<i>Tsuga</i>		ツガ属								
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>		マツ属複種皆東亜属	2	1	7	2	1	1		3
<i>Pinus subgen. Haploxylo</i>		マツ属单種日本東亜属			3	2				
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ	18	122	228	106	38	33	7	13
Taxaceae-Cephalotaxaceae	-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科 -ヒノキ科				1				
<i>Myrica</i>		ヤマモキ属	1	1	1	1				
<i>Juglans</i>		クルミ属		2	7	4	3	1		1
<i>Pterocarya rhoifolia</i>		サワグルミ	1	2	5	2	3		1	
<i>Alnus</i>		ハンノキ属	4	14	15	20	7	3	7	3
<i>Betula</i>		カバノキ属	1	12	16	9	6	2		1
<i>Corylus</i>		ハシバミ属			2					
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>		クマシデ属-アサダ	1	2	9	10	4	4	4	1
<i>Castanea crenata</i>		クリ	3	8	11	46	37	26	148	64
<i>Castanopsis</i>		シイ属			1					
<i>Fagus</i>		ブナ属	4	29	44	31	20	15	25	29
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>		コナラ属コナラ東亜属	7	23	29	34	14	22	8	29
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>		コナラ属カガシ東亜属	1	9	8	9	4	1		
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>		ニレ属-ケヤキ	4	5	10	15	7	6	1	3
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>		エノキ属-ムクノキ			2	1				
<i>Zanthoxylum</i>		サンショウ属			3	7	31			1
<i>Ilex</i>		モチノキ属		1	2	5		1		
<i>Rhus</i>		ウルシ属			1					
<i>Acer</i>		カエデ属		1		2				1
<i>Aesculus turbinata</i>		トチノキ	1	2	2	6	4	1		2
<i>Vitis</i>		ブドウ属	6	55	86	2				
Oleaceae		モクセイ科			1	11			4	
<i>Fraxinus</i>		トネリコ属			3	2	2	1		3
<i>Clethra barbinervis</i>		リヨウブ				1				
<i>Tilia</i>		シナノキ属			1					
<i>Sambucus-Viburnum</i>		ニワトコ属-ガマズミ属	6	7	4		4	1	2	
<i>Lonicera</i>		スイカズラ属			3	10	1			
ArboREAL · Nonarboreal pollen		樹木·草木花粉								
Moraceae-Urticaceae		クワ科-イラクサ科	9	18	38	135	80	19	2	3
Rosaceae		バラ科	2		6	2	2			
Leguminosae		マメ科		1		2	1			
Araliaceae		ウコギ科					1		1	2
Nonarboreal pollen		草木花粉								
<i>Typha-Spartanium</i>		ガマ属-ミクリ属	13	2	13	6				
<i>Alisma</i>		サジオモダカ属	1	1	1	3		1		
<i>Sagittaria</i>		オモダカ属			1					
Gramineae		イネ科	17	149	217	34	14	20	3	4
Oryza type		イネ属	1	6	6	10	3	2		1
Cyperaceae		カヤツリグサ科	29	47	115	45	6	2	1	
Monochoria		ミズアオイ属			2	1				
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>		タデ属-ナナエタケデ	2		1	1	1	1		1
Rupest		ギンゼン属				1				
Eragrostidium		ソバ属	1		1	1				
Chenopodiaceae-Amaranthaceae		アカザ科-ヒユ科	2	1	6	9	1			1
Caryophyllaceae		ナデシコ科	2	1	2	2				
Nuphar		コウボウゲ属			6					
Ranunculus		キンポウゲ属	2	3	4		2	4		
Thlaspium		カラマツソウ属	5	3						
Cruciferac		アブラナ科			4	5	2			1
Impatiens		ツリフネソウ属			14	10				
<i>Ampelopsis brevipedunculata</i>		ノブドウ				4				
<i>Haloragis-Mitriophyllum</i>		アリトウクサ属-フサモ属	1	1	13	1				
Umbelliferae		セリ科	1	3	6	4	6	2		
Labiatae		シソ科		2	3	1	1	1		3
Solanaceae		ナス科								
<i>Sesamum indicum L.</i>		ゴマ								
<i>Plantago</i>		オオバコ属	1			2	1	2		
Valerianaceae		オミナエシ科			1					
<i>Actinostemma lobatum</i>		ゴキヅル								1
Lactucoideae		タンボポ亜科			1					
Asteroidae		キク亜科	4	7	8	9	1	1		1
<i>Artemisia</i>		ヨモギ属	201	332	172	171	70	72	3	14
Fern spore		シダ植物孢子								
Monolete type spore		單孔帶孢子	10	51	14	10	12	7	14	6
Trilete type spore		三舌帶孢子	83	56	116	189	32	32	4	2
ArboREAL pollen		樹木花粉	54	295	502	340	191	127	205	154
ArboREAL · Nonarboreal pollen		樹木·草木花粉	11	19	44	139	84	39	3	5
Nonarboreal pollen		草木花粉	276	559	595	324	111	113	7	25
Total pollen		花粉總數	341	873	1141	803	386	259	215	184
	(試料1cc中に算定)		7502	20952	54768	35332	64848	43512	27520	29440
Unknown pollen		未定同花粉	1	5	5	6	7	5	0	0
Fern spore		シダ植物孢子	93	107	130	199	44	39	18	8

表4 秋田城跡における花粉分析結果(4)

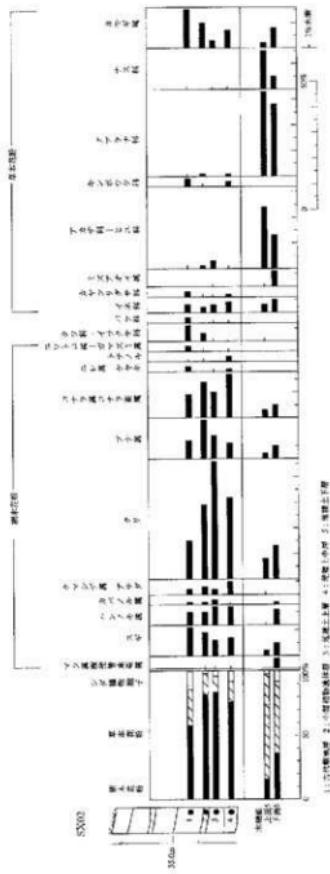
学名	和名	E405ライン						
		1	2	3	4	5	1'	2'
ArboREAL pollen	樹木花粉							
Abies	モミ属			1				
Picea	トウヒ属				1			
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属-堆球型	2	8	9	7	3	1	1
<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxylo</i>	マツ属-单球型		2	1	2			
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	52	301	255	183	30	21	11
Taxaceae-Cephalotaxaceac	イチイ科-イヌガヤ科 -Cupressaceae	1	1					
<i>Myrica</i>	ヤマモモ属			2				
<i>Juglans</i>	クルミ属	2		3	5	2	1	
<i>Pterocarya rhoifolia</i>	サワグルミ属		5	3	4	3	4	2
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	5	22	15	31	22	21	23
<i>Betula</i>	カバノキ属	7	14	13	8	9	3	
<i>Corylus</i>	ハシバミ属				1	1		
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ	3	9	9	5	37	12	4
<i>Castanea crenata</i>	クリ属	3	12	8	31	315	154	95
<i>Castanopsis</i>	シイ属					3		
<i>Fagus</i>	ブナ属	6	55	79	115	45	21	3
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属-コナラ属	9	54	48	86	286	68	163
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属-アカガシ属	2	14	12	12	3	2	1
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ	4	12	13	9	10	7	
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ	2	5	4	2	8	4	1
<i>Zanthoxylum</i>	サンショウ属			1	1			
<i>Ilex</i>	モチノキ属		1		4	1		19
<i>Acer</i>	カエデ属	1		1			1	
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ	3	2	1	3	5	3	
<i>Vitis</i>	ブドウ属		1	7	1			
<i>Tilia</i>	シナノキ属		2					
Oleaceae	モクセイ科			1	21			
<i>Fraxinus</i>	トネリコ属	1		1	2	8	2	
<i>Clethra barbinervis</i>	リヨウヅ		1		5	1	1	
Eriacae	ツヅジ科			1	1			
<i>Sembucus-Viburnum</i>	ニワトコ属-ガマズミ属	4	11	5	5	3	1	1
<i>Lomniera</i>	スイカズラ属	1		3				
ArboREAL - Nonarboreal pollen	樹木-草本花粉							
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	1	7	36	63	9	2	
Rosaceae	バラ科		1	1	16			
Leguminosae	マメ科		2		8	4		2
Araliaceae	ウコン科		1	2	2	2		1
Nonarboreal pollen	草本花粉							
<i>Typha-Spartanium</i>	ガマ属-ミクリ属	3	1	10	2			
<i>Alisma</i>	シオジモダカ属	7	1	2				
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属			1				
Gramineae	イネ科	66	261	195	30	11	14	17
Oryza type	イネ属型	2	20	12	2			
Cyperaceae	カヤツリグサ科	60	86	118	27	6	10	1
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	タデ属-ナエタデ節		1	1	2	1	1	2
<i>Rumex</i>	ギンジン属			2				
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	1		1	1			
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アザガ科-ヒユ科	1	3	7	10		1	
Caryophyllaceae	ナデシコ科	3	1	2	3	1		
Nuphar	コウネリ属			1	2			
<i>Ranunculus</i>	キンボウゲ属	3		1				
<i>Thalictrum</i>	カラマツソウ属	6	10	4				1
<i>Cruciferas</i>	アブラナ科	1	1			1		
<i>Sanguisorba</i>	ワレモコウ属		1	2	1			
<i>Impatiens</i>	ツリフネソウ属			4	7			
<i>Ampelopis brevipedunculata</i>	ノブドウ		1	1	8			
<i>Geranium</i>	フランソウ属			4	4			
<i>Haloragis-Myriophyllum</i>	アリノトウガサ属-フサモ属	1	1	4	4			
Umbelliferae	セリ科	3	9	5	12			
Labiatae	シソ科		2	2				
Solanaceae	ナス科		2	1	13			
<i>Plantago</i>	オオバコ属	1		1				
Valerianaceae	オミナエシ科	1						
Lactucae	タンポポ科	2	1		1			
Asteroidae	キク科	12	10	8	3			1
Xanthium	オナモミ属			2				
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	241	412	188	275	5	3	7
Fern spore	シダ植物孢子							
Monolete type spore	単孔隙孢子	11	65	25	24	2	25	
Trilete type spore	三线条孢子	82	71	111	107	3	6	
ArboREAL pollen	樹木-草本花粉	104	536	492	548	795	327	324
Nonarboreal pollen	樹木-草本花粉	1	10	38	89	15	2	3
Total pollen	花粉总数	414	824	572	408	25	32	30
(試料1cc中に算定)		519	1370	1102	1045	835	361	357
Unknown pollen	未同定花粉	5	6	3	7	1	4	3
Fern spore	シダ植物孢子	93	136	136	131	5	31	0

表5 秋田城跡における花粉分析結果(5)

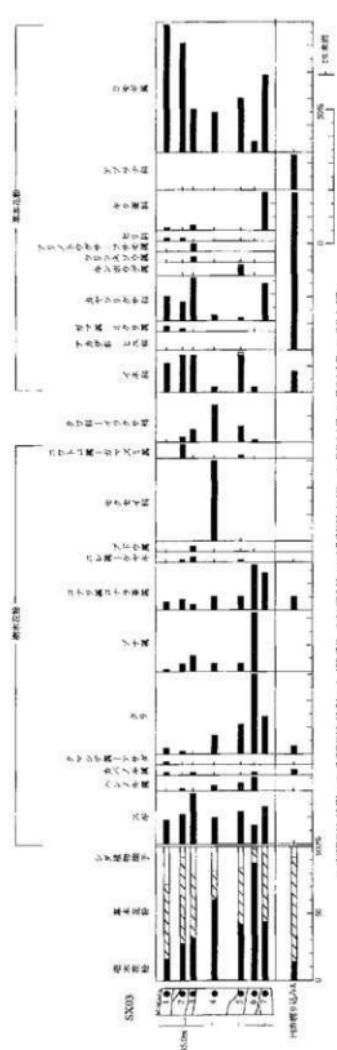
学名	和名	E395 ライン			
		1	2	3	4
ArboREAL pollen	樹木花粉				
<i>Abies</i>	モミ属			1	1
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属裸管束葉属		1		1
<i>Pinus subgen. Haploxyylon</i>	マツ属細管束葉属		1		
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	13	136	33	35
<i>Myrica</i>	ヤマモモ属		1	2	
<i>Juglans</i>	クルミ属	1		4	4
<i>Pterocarya rhoifolia</i>	サワグルミ		3	5	1
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	1	14	57	27
<i>Betula</i>	カバノキ属	3	4	9	11
<i>Corylus</i>	ハシバミ属		1	1	
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサガ	1	11	32	29
<i>Castanea crenata</i>	クリ	7	22	392	35
<i>Fagus</i>	ブナ属	5	46	87	238
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ属	13	43	112	161
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アガシ属	1	2	4	6
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属ケヤキ	1	12	11	12
<i>Ulmus-Aphananthe aspera</i>	エノキ属ムクノキ		3	3	2
<i>Zanthoxylum</i>	サンショウ属		6		
<i>Ilex</i>	モチノキ属			1	2
<i>Rhus</i>	ウルシ属			3	1
<i>Acer</i>	カエデ属			6	1
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ			9	1
<i>Vitis</i>	ブドウ属	2	5	2	
<i>Fraxinus</i>	トネリコ属	1	2	9	4
<i>Clethra barbinervis</i>	リヨウブ		1		
<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニワトコ属-ガマズミ属	2	8	1	2
ArboREAL - Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉				
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イライクサ科	7	48	5	2
Rosaceae	バラ科	2	3		
Leguminosae	マメ科			5	1
Araliaceae	ウコギ科		1	1	1
Nonarboreal pollen	草本花粉				
<i>Typha-Sparganium</i>	ガマ属-ミクリ属	8	10		
<i>Alisma</i>	サジオモダカ属	2	1		
Gramineae	イネ科	28	101	19	5
Oryza type	イネ属型		6		
Cyperaceae	カヤツリグサ科	15	101	3	1
Monochoria	ミズアオイ属		2		
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	タデ属サナエタデ館				1
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	2	1		
Caryophyllaceae	ナデシコ科		2		
<i>Nuphar</i>	コウホネ属		1		
<i>Ranunculus</i>	キンポウゲ属	2	1		
<i>Thalictrum</i>	カラマツソウ属		3		
Cruciferae	アブラナ科		1		
<i>Impatiens</i>	ツリフネソウ属		5		
<i>Haloragis-Myriophyllum</i>	アリノトウガサ属-フサモ属		11		
Umbelliferae	セリ科	3	4	3	
Labiatae	シソ科				1
Solanaceae	ナス科		1		
<i>Plantago</i>	オオバコ属		1		
Asteroideae	キク科	8	2		
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	372	145	37	3
Fern spore	シダ植物胞子				
Monocolate type spore	單果溝胞子	8	6	6	2
Trilete type spore	三條溝胞子	55	71	5	1
ArboREAL pollen	樹木花粉	51	322	783	574
ArboREAL - Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	9	52	11	4
Nonarboreal pollen	草本花粉	440	399	62	11
Total pollen	花粉總数	500	773	856	589
	(試料1cc中に算定)	11000	34012	82176	122512
Unknown pollen	未同定花粉	5	6	6	4
Fern spore	シダ植物胞子	63	77	11	3



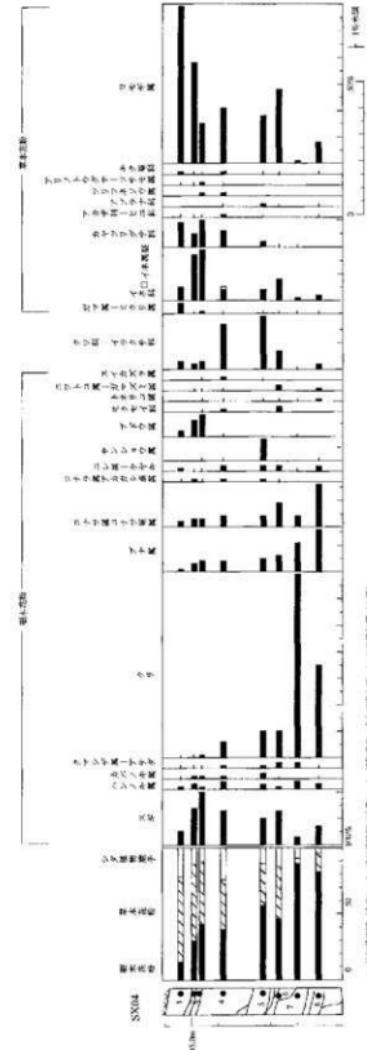
第146図 秋田城跡における寄生虫卵出現密度



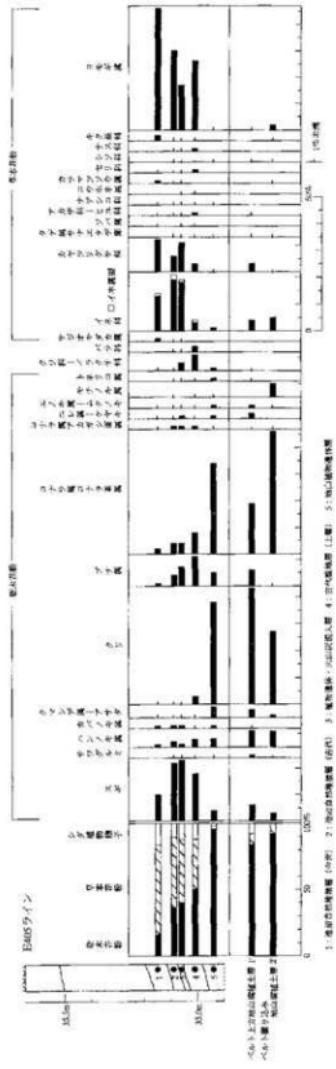
第147図 秋田城跡 SX02における主要花粉組成図（花粉数が基準）



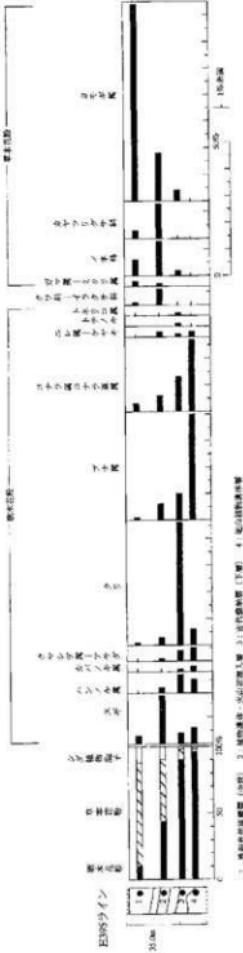
第148図 秋田城跡 SX03における主要花粉組成図（花粉総数が基準）



第149図 秋田城跡 SX04における主要花粉組成図（花粉総数が基準）

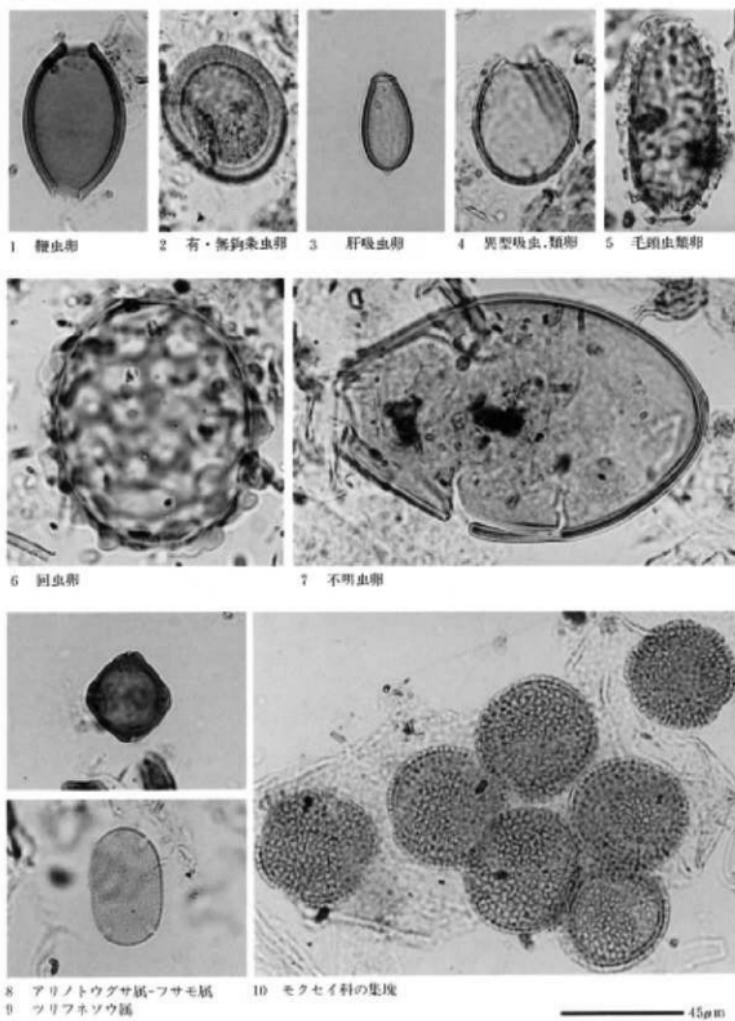


第150図 秋田城跡E405ラインにおける主要花粉組成図（花粉粒数が基数）

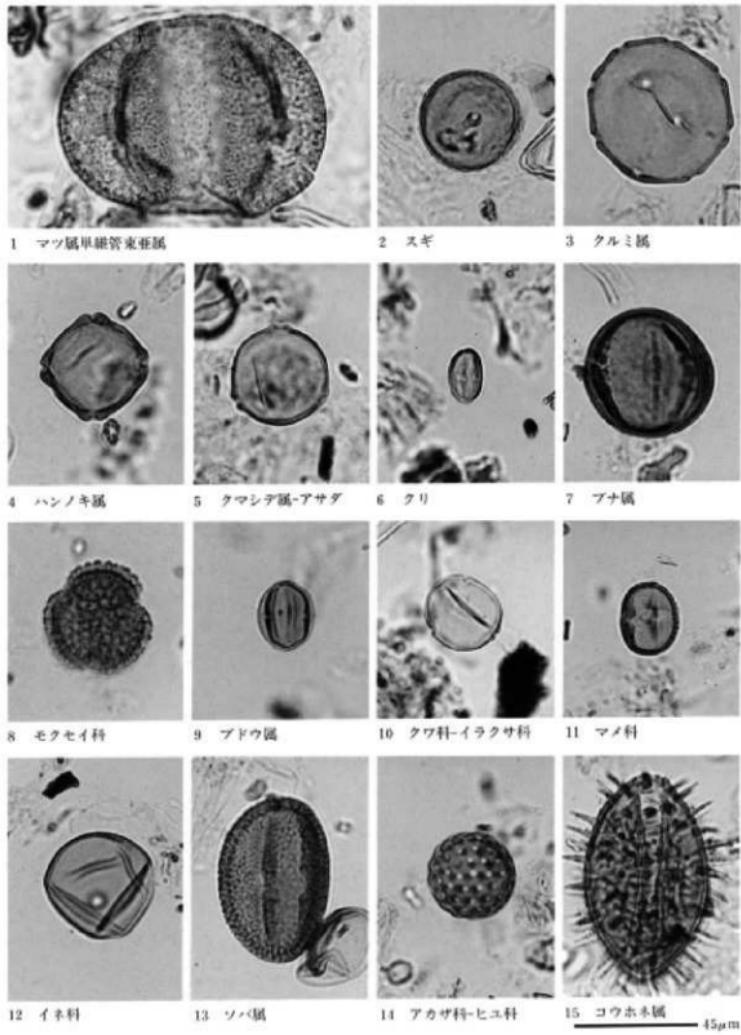


第151図 秋田城跡E395ラインにおける主要花粉組成図（花粉総数が基数）

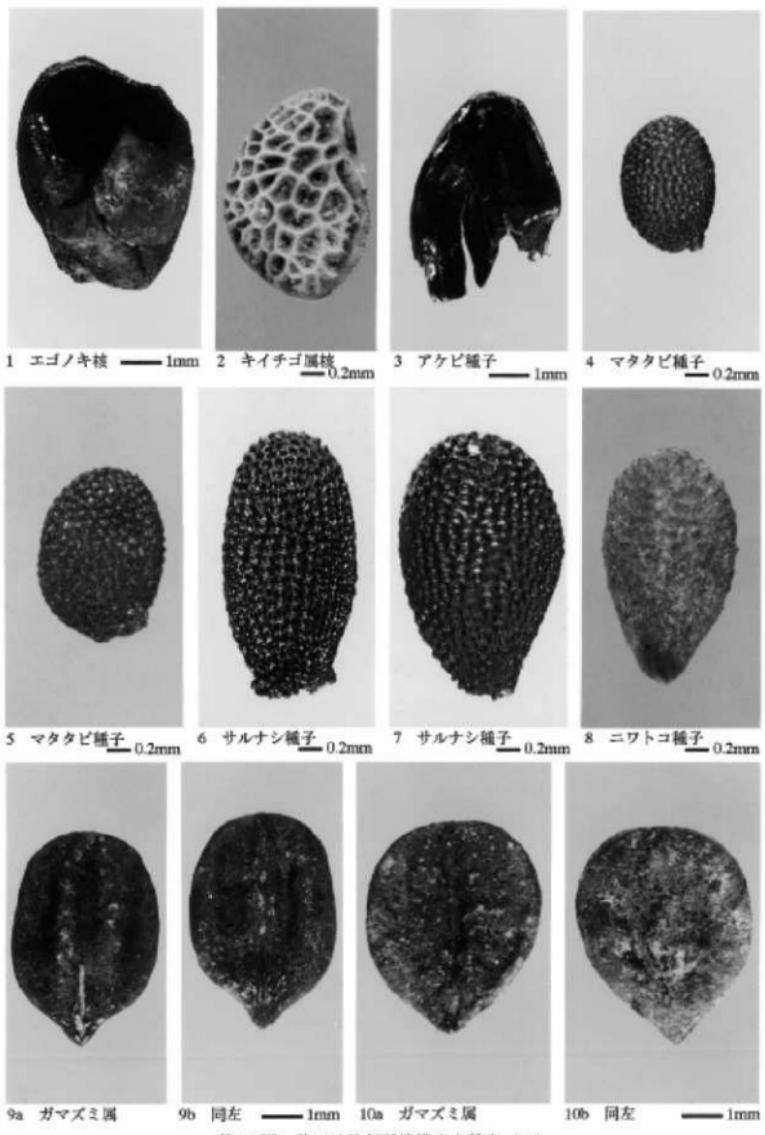
秋田城跡の寄生虫卵・花粉



第152図 秋田城跡検出の寄生虫卵・花粉



第153図 秋田城跡検出の花粉



第154図 秋田城跡便所遺構出土種実（1）



第155図 秋田城跡便所遺構出土種実（2）

## 2 トイレ遺構に伴う木樋の年輪年代

奈良国立文化財研究所理藏文化財センター  
光谷拓実

秋田城跡調査事務所より、トイレ遺構に伴って出土した木樋の年輪年代法による年代測定の依頼を受けた。以下にその概略を報告する。

### (1) 試料と方法

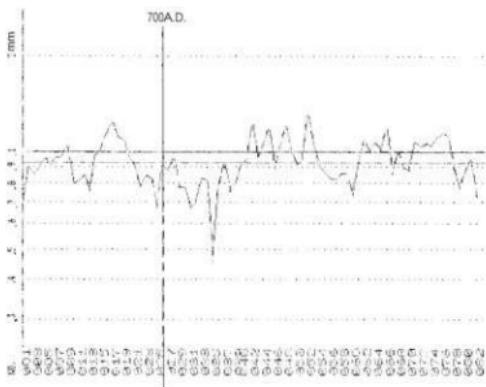
送付されたサンプルは、木樋の端の一部を切断したもので、遺存状態は悪く、しかも辺材（白太）は確認できなかった。材種は木材組織による同定の結果、ヒノキ科（ヒノキアスナロの可能性が高い）ものであることが判明した。年輪幅の計測は、測定箇所をカッターナイフで平滑にしてから胡粉を塗布し、専用の読み取り器を使用した。（0.01ミリまで計測）。

計測した年輪パターンと標準暦年パターンとの照合には、払田柵跡出土のスギの柵木で作成した503年分（405年～907年）のものを使用した。コンピューターによる年輪パターンの照合は相互相関分析手法によった。

### (2) 結果

木樋1点の計測年輪数は、82年分と少なかったが、スギの暦年標準パターンとの照合は成立し、試料パターン（図-1）は675年～756年にかけて形成された年輪であることが確定した。（このときのt値は5.3であった）。これより木樋の原材の伐採年は756年を決してさかのほることはなく、この年輪年代より新しくなることが判明した。

この年輪年代をもとに、正確なトイレ遺構の造られた年代を求めるることは極めて難しいことであるが、少なくとも秋田城創建当初のものでないことが確定したことになる。



第156図 木樋の年輪バターングラフ



第157図 木樋先端試料採取部分  
(暗渠B木樋)

## 第VI章 考察

### 第1節 検出遺構について

#### 1 遺構期の設定と変遷

##### (1) 各遺構の概要と遺構の分類

検出した主な遺構は、建物跡、水洗便所遺構、三本柱遺構、区画施設（材木塀跡・区画溝跡）、溝跡、道路遺構、堅穴住居跡、工房跡、井戸跡、土坑、土取り穴、祭祀遺構等である。遺構群が検出された鶴ノ木地区は秋田城の南東側隣接地であり、遺構群は城に付属する施設と判断されることから、各遺構は一定の規制に基づき、時期ごとに方位や配置に規則性を持ち変遷すると考えられ、遺構期の設定が可能である。また、大規模な整地事業が画一的に行われ、変遷上の画期となると考えられる。

遺構期設定の根拠としては、検出層位、遺構の方位、遺構の規模と構造、遺構の重複関係等がある。建物跡、区画施設（材木塀跡・区画溝跡）、溝跡、堅穴住居跡等はそれらに基づき遺構分類が可能であり、その遺構分類は、遺構期の構成要素となっている。方位などにより遺構分類が困難な井戸跡、道路遺構、工房跡、土坑、土取り穴、祭祀遺構等についても、検出層位や重複関係、最終的には出土遺物の年代により、新旧関係の把握および遺構期の設定が可能である。

検出層位については、古代と中世の整地層が確認されている。古代整地層については、遺構群が集中する丘陵上にはほとんど確認されず、一部の遺構が SG463・SG1206 沿地岸辺付近で整地層面より検出されるにとどまっている。一方で中世整地層については、沿地岸辺付近や地区西部で確認され、その整地面に建物や井戸などの遺構が集中しており、古代と中世の時期区分や遺構期設定上の根拠となっている。

以下、各遺構種別ごとに、検出状況の概要と遺構分類を示し、重複関係などから分類間の新旧関係についても考察を加えていくこととする。

##### 1) 建物跡

建物跡については、第IV章第2節で述べたとおり、建物構造が明確に異なる①古代の建物と②中世建物に区別される。中世建物については、その多くが中世整地層面から検出されており、検出層位においても明確に区分される。

①古代の建物は、構造的にはすべて掘立柱建物である。検出位置からは、地区中央部のまとまりと、地区北部の SG1206 沿地跡北岸部のまとまりに大別される。前者については、規模の大きい建物で構成され、建物配置や建物方位に規則性が認められ、鶴ノ木地区中央建物群として把握される。建物群を構成する建物は、建物方位から、南北柱筋が北では真北（北で 0 ~ 1 度東）~ 4 度西に振れる A 類、西に 6 度 ~ 11 度振れる B 類、西に 13 度 ~ 15 度振れる C 類、東に 2 度 ~ 6 度振れる D 類に分類される。各類に分類される建物は以下のとおりである。

A 類	SB006・SB261・SB395・SB396・SB397・SB398・SB399・SB429・SB018・SB484・SB019・SB485・SB491・SB021A・SB021B・SB1129A・SB1129B・SB1147・SB1149・SB1307・SB962A・SB962B
B 類	SB258・SB262・SB486・SB488・SB492・SB795・SB1132・SB1133・SB1967・SB1968
C 類	SB263・SB487・(SB1130)・SB1131・SB1134
D 類	SB1146・SB1308・SB259・SB490・SB256 (SE406 井戸建物)

A類のうち、国営調査で秋田城に付属する四天王寺を構成するとされた主要建物には、ほぼ同位置での建て替えが認められ、2時期の変遷がある。新しい建物の柱痕跡には多量の焼土・炭化物が混入しており、火災により焼失したと判断される。A類には他にも柱痕跡に焼土・炭化物が混入する建物が認められ、火災は建物群全体に及んだと考えられる。主要建物については、建て替えられた建物の方位が旧建物より西に振れる（3度以上）傾向が指摘される。SB006（3°）→SB395（3° 30'）、SB018（3°）→SB484（3°）、SB485（2°）→SB019（3° 30'）、SB021B（不明）→SB021A（3°）、SB397（2°）→SB396（3°）。建物群東側の東西棟建物跡には4度以上西に振れる傾向が明確である。

それら2時期の変遷と柱痕跡への焼土・炭化物の混入、建物方位の振れ等に基づき、A類を細分すると以下のようになり、A-1類→A-2類の新旧関係が把握される。

A-1類	SB395・SB397・SB018・SB019・SB021B・SB962A・SB962B
A-2類	SB257・SB261・SB006・SB396・SB398・SB399・SB429・SB484・SB485・SB490・SB491・SB021A・SB1129A・SB1129B・SB1147・SB1149・SB1307

B類についても、SB1968→SB1967のように、同位置や近接した位置での建て替えが認められることがあるから、さらに2小期に区分される可能性がある。

各分類間の新旧関係については、SB018・SB484（A類）→SB486（B類）、SB257（A-2類）→SB258（B類）、SB1308（D類）→SB1968（B類）等の重複関係から、A-2類→B類、D類→B類の新旧関係が把握される。A類とD類については、SB1146とSB1147が位置的に重複するものの、直接の切り合いがない。検出層位から見た場合、地区中央北東側において、SB1308（D類）が、後述の北側に隣接するSB1351便所遺構（A-2類）と同じ地区中央第8層（古代整地Ⅱ層）面より検出されており、A-2類とD類が同一遺構間に属することを示唆している。また、D類のうちSE406井戸館建物のようにA-2類と同様に柱痕跡に焼土・炭化物が混入するものがあることからも、A-2類とD類が並存していた可能性が高いと判断される。

古代建物のうち、地区北部のSG1206沼地跡北岸部のまとまりについては、棟数も少なく明確さを欠くが、建物方位から、南北柱筋が北で真北から7度西に振れるA類（SB1466）、西に約17度から24度振れるB類（SB1465・SB1488）、東に約7度から12度振れるC類（SB1467）に分類される。

②中世建物については、中世整地層面から検出されているもの、柱掘り方の直径50cm以下と小さい総柱式建物で、建物構造が古代と明確に異なる建物を、中世建物として区分している。遺構は地区中央部東側のSG1206沼地跡南岸付近、地区中央から北寄りのSG463沼地跡南岸付近にかけて、地区南西部など中世段階で整地事業が行われた付近に検出されている。

それらの建物方位は、南北柱筋が真北から9度西に振れるA類（SB266、SB268、SB427、SB1150、SB1151、SB1152）、西に約15度から30度振れるB類（SB924、SB925、SB926、SB927）、東に約7度30分振れるC類（SB264）に分類される。各分類間に直接の重複関係ではなく、A類は地区中央部の沼地岸辺付近に、B類は地区西部などにまとまりを示していることから、時期差を示すではなく、地区内のブロックごとに一定の規制が存在したことを示すと考えられる。地区西部のブロックの中では、直接の切り合い関係はないものの、SB925、SB926、SB927の3棟間に建て替えがあり、3時期の変遷が認められる。また、地区中央東側ではSB1152→SB1151への建て替えがあり、2時期の変遷が認められる。それらのことから、中世段階で少なくとも3時期以上の変遷があると考えられる。

## 2) 水洗便所遺構

地区中央北東側の第9層（古代整地Ⅰ層）面より検出されている。便所遺構を構成するSB1351建物跡の建物方位は南北柱筋が北で約4度西に振れる方向であり、建物方位に基づけば、前述のA—2類に属する。

## 3) 三本柱遺構

三本柱遺構を構成する柱列の柱筋を見れば、SA963柱列については南北柱筋で北で約15度西に振れる方向となり、SA796柱列については東西柱筋で東で約23度北に振れる方向となる。南北方向と東西方向でともに近い方位の振れを示し、同時に計画的に配置された可能性が高い。柱筋の方位については建物C類に近いが、SA963柱抜き取り覆土からは多量の炭化物が検出されており、付近の建物では前述のA—2類から同様に炭化物が検出されている。柱掘り方埋土から遺物がほとんど出土せず、瓦片がわずかに出土する状況もA—2類に類似している。そのことからA—2類の時期に属する可能性が高いと考えられる。

## 4) 区画施設遺構

区画施設は、第Ⅳ章第2節で述べたとおり、検出位置からは、地区中央部から中央東側にかけてのまとまりと、SG463沼地跡およびSG1206沼地跡北側の地区北部のまとまりに大別される。

前者は配置や方位に規則性が認められ、鶴ノ木地区中央建物群に伴う区画施設として把握される。区画施設の方位からは、南北方向で北ではほぼ真北方向を示すA類、南北方向で北で西に6度～10度振れるか、または東西方向で西で南に6度～10度振れるB類、南北方向で北で西に13度～15度振れるか、または東西方向で西で南に13度～15度振れるC類、南北方向で北で西に19度～24度振れるか、または東西方向で西で南に19度～24度振れるD類に分類される。各類に分類される区画施設は以下のとおりである。

A類	SA503
B類	SA502・SA1179・SA1180・SA1182
C類	SA284・SA407・SA414・SA500・SA501・SA1142・SA1972
D類	SA1973・SD162・SD163

各分類間の新旧関係については、区画施設間に直接の重複関係がなく、出土遺物や他遺構を含めた新旧関係の把握が必要となっている。中央建物群の区画施設として方位規制が建物と共にすると考えられるため、建物A類→B類に対応して、区画施設A類→B類の変遷が把握される。

検出層位と分類の関係を見た場合、地区中央北東側の第91次調査において層位が良好に把握され、SA1972（C類）が地区中央第7層（古代整地Ⅲ層）面より検出されている。

建物と区画施設の重複関係から見た場合、SB1146（建物D類）→SA1142（区画施設C類）の新旧関係が認められ、建物分類に対応させると建物D類→建物C類の変遷が把握される。

地区北部のまとまりについては、第Ⅳ章第2節で述べたとおり方位と南北の位置関係から、SA1332・SA1333柱列塀とSA1489材木列塀は東西方向に連続性が認められ、同時期となる可能性が高い。

## 5) 溝跡

溝跡については、整地層などの検出層位により古代と中世の時期区分が可能であり、また、一部は区画溝や排水溝として周辺遺構と共に方位等に規則性を持つため、時期区分が可能である。しかし、それ以外の多くの溝跡は根拠に欠け、時期区分や遺構期への設定が困難となっている。

中世の溝跡について、検出層位から見た場合、地区中央北西側・SG463沼地跡南西岸付近の SD435、SD436、SD437、SD438は地区中央第4層面検出、地区西部の SD641、SD642、SD643、SD644および地区南西部の SD931、SD932、SD933、SD935、SD969は地区西部第4層面検出であり、中世整地層面検出遺構として中世に位置づけられる。溝跡の方向から見た場合、地区中央北側・SG463沼地跡南岸付近の SD274、SD275、SD276は方向が中世建物A類と同じであり、同遺構期と判断される。

古代の溝跡について、方向や重複関係から見た場合、地区中央の SD272は西で南に4度振れる方向から、また、SD1188は北で西に7度振れる方向から、区画施設B類と同時期と判断される。SD1183は、区画施設B類の SA1180より新しい重複関係から、区画施設C類の SA1142と同時期と判断される。地区北西部では、検出層位より SD1498（地区北部第11層面検出）→SD1496・SD1497（同第10層面検出）→SD1495（同第10層面上面検出）のように新旧関係が把握される。

## 6) 道路遺構

道路状遺構とされる地区北部検出の SX109・SX1350つき固め遺構のうち、SX1350については地区北部第10層面で検出されている。また、地区東部の SG1206沼地跡岸辺付近の SX1701木道跡は地区東部第7層面より検出されている。SX1350と SX1701ともに9世紀第2四半期に設置され、9世紀後半にかけて機能した遺構と考えられる。

## 7) 壺穴住居跡・壺穴遺構

壺穴住居跡・壺穴遺構については第Ⅳ章第2節で述べたとおり、構造・形態により、縄文時代の壺穴住居跡、古代の壺穴住居跡、古代の壺穴遺構、中世の壺穴遺構に区分される。それらの時期区分は遺構一覧に示したとおり、検出層位や出土遺物によっても裏付けられる。

古代の壺穴住居跡は、検出位置から、地区中央から東側にかけてのまとまりと、地区北部のまとまりに大別される。前者については、方位や規模に規則性が認められ、鶴ノ木地区中央建物群に対応する形で分類が可能である。

地区中央検出の住居跡は、南北方向の壁が北ではほぼ真北～西に約3度振れるか、または東西方向の壁が西ではほぼ真西～南に3度振れる大型の住居からなるA類、南北方向の壁が北で西に4度～10度振れるか、または東西方向の壁が西で南に4度～10度振れるB類、南北方向の壁が北で西に12度～16度振れるか、または東西方向の壁が西で南に12度～16度振れるC類、南北方向の壁が北で西に21度～23度振れるか、または東西方向の壁が西で南に21度～23度振れるD類、南北方向の壁が北ではほぼ真北～西に6度振れるか、または東西方向の壁が西ではほぼ真西～南に6度振れる小型の住居からなるE類に分類される。A・B類の住居については、一辻約5m以上となる大型住居が多く、C・E類の住居については、一辻約3～4mの小型住居が多い特徴が指摘される。各類に分類される壺穴住居は以下のとおりである。

A類	SI004・SI404・SI1165
B類	SI005・SI020・SI918・SI964・SI1135・SI1136・SI1138A・SI1138B・SI1138C・SI1153・SI1154・SI1155・SI1156・SI1160・SI1161・SI1162・SI1164・SI1310・SI1311・SI1312・SI1326・SI1331・SI1696・SI1698・SI1978・SI1979
C類	SI400・SI401・SI402A・SI402・SI402C・SI403・SI493・SI1494AB・SI1494B・SI495・SI1157・SI1158・SI1159・SI1163・SI1309・SI1321・SI1324・SI1327・SI1328・SI1329・SI1330・SI1468・SI1469・SI1975・SI1977
D類	SI116・SI1975
E類	SI496・SI497・SI498・SI622・SI1322・SI1323・SI1325

上記の分類内においても遺構の重複が認められ、同位置や近接した位置での建て替えが認められることから、各分類間でさらに小間に区分される可能性がある。B類は特に建て替えが多く、SI1312→SI1311・SI1154→SI1155→SI1156・SI1138D→SI1138C→SI1138B→SI1138A のように、1～3回の重複があり、居住域としての利用頻度の高さと一定期間の存続が認められるが、ばらつきもあり地区中央全体で明確に小間に区分できない。C類には、SI400→SI401・SI402A→SI1402→SI402C・SI493→SI1494A→SI1494B のように、1～2回の重複があるが、B類に比して居住域としての利用頻度は高くない。

各分類間の新旧関係については、SI1165（A類）→SI1161（B類）→SI1159・SI1157（C類）、SI1309（C類）→SI1975（D類）等の重複から、A類→B類→C類→D類の新旧関係が把握される。D類とE類間については、出土遺物の年代から、D類→E類の新旧関係が把握される。

検出層位と分類の関係を見た場合、地区中央北東側の第91次調査において層位が良好に把握され、SI1978・SI1979（C類）が地区中央第8層（古代整地Ⅱ層）面より検出されている。また、重複するSI1309（C類）・SI1975（D類）が同一の地区中央第7層（古代整地Ⅲ層）面より検出されており、C類とD類間には大きな時期差は存在しないと考えられる。住居出土遺物の年代からも、同一遺構期内の時期差となる可能性が高い。

建物と堅穴住居の重複関係から見た場合、SI004（住居A類）→SB006（建物A－1類）→SI020（住居B類）の新旧関係が認められるため、創建期において中央建物群建築前に一時的に堅穴住居が構築・使用されていたことがわかる。

区画施設と堅穴住居の重複関係から見た場合、SI1153（住居B類）→SA1142（区画施設C類）の新旧関係が認められるため、建物分類に対応させると建物B類→建物C類の変遷が把握される。

地区北部のまとまりについては、ほとんどの住居が南北方向の壁が北で東に振れる方向となり、一定の規制が存在したと判断されるが、方位にはばらつきがあり、明確に分類するに至らない。そのため、出土遺物や他遺構を含めた新旧関係の把握が必要となる。

## 8) 工房跡

地区東部の第81次調査で SI1697堅穴工房跡が、中央東側の第91次調査で SI1976堅穴工房跡が検出されている。SI1976については、重複関係から SB1968→SB1967（建物B類）→SI1976→SA1972（区画施設C類）の順に変遷している。方位は堅穴住居B類に近い値を示すが、重複関係では堅穴住居C類に属すると判断され、B類→C類への改修過程で一時的に営まれた仮設的工房と考えられる。SI1697については出土遺物などに基づく遺構期への対比が必要である。

## 9) 井戸跡

井戸跡については、古代の井戸跡が7基、中世の井戸跡が23基検出されている。

井戸の構造からの分類は、井側材の抜き取りを受けているものが多いことと、井籠組式のSE626を除き他はすべて隅柱横桟式であることから、困難である。付属施設見ると、井戸館建物を伴うタイプ（SE406・SE1176）とその他に大別される。井戸館の建物方位からは、南北柱筋がSE406は北で東に8度振れ、SE1176は北で西に14度振れることから、建物分類に対応すればSE463は建物D類、SE1176は建物C類に該当することとなる。SE406については、出土木簡の紀年と相違するが、井戸館が建物D類段階に改修または新たに付設された可能性が指摘される。また、前述した井戸館柱痕跡の他に、井戸埋土上位に焼土・炭化物が混入することから、廃絶がA—2期建物と同時期の可能性が高いと判断される。

検出層位から見た場合、古代の井戸跡はほとんどが古代の整地層面、中世の井戸跡は多くが中世整地層面から検出されており、それにより時期が大きく区分される。その他の検出層位による区分が困難な井戸跡も含め、周辺建物との組み合わせや遺構内出土遺物により、時期が把握され、遺構期への対比が可能である。中世整地層面からの検出により中世に時期区分される井戸跡は以下のとおりである。

地区中央第4層面検出	SE1166・SE1167・SE1168・SE1169・SE1172・SE1173・SE1174・SE1177・SE1178
地区西部第4層面検出	SE626・SE928・SE929

なお、地区中央北側ではSE269・SE270が、地区北東部ではSE1471・SE1472・SE1500・SE1501が古代遺構面から検出され、SE430～432が地山粘土層面より検出されているが、出土遺物から中世に位置づけられる。

古代の井戸跡については、SE1473・SE1474が地区北部第7層面より、SE1502が地区北部第11層面より検出されている。

## 10) 土坑・土取り穴跡

土坑については、遺構の規模や形態が多様で、特に規則性が認められず、それらに基づく分類は困難である。検出層位についても、地山面検出が多いため、一部の中世整地層面検出遺構や古代整地層面検出遺構を除き、各土坑の遺構重複関係や遺構内出土遺物により、時期と該当する遺構期が把握される。土坑の遺構数は多数であるため、第Ⅳ章第2節の土坑遺構一覧表に示した各遺構の遺構重複関係や遺構内出土遺物の詳細に基づき、後述する遺構期や時期区分に対応させることとする。土取り穴についても、遺構構造に規則性は認められず、ほとんどが地山面検出となっていることから、土坑と同様に、第Ⅳ章第2節の土取り穴遺構一覧表に示した各遺構の遺構重複関係や遺構内出土遺物の詳細に基づき、後述する遺構期に対応させることとする。

### （2）遺構分類と検出層位などに基づく遺構期の設定

遺構分類を行った遺構群のうち、規則性と遺構種別間の共通性が明確に把握された地区中央建物群とその周辺遺構群を中心として、遺構分類間の新旧関係や遺構変遷上の画期となる整地事業との関係に基づき、遺構期を設定すると次のようになる。

	I期	II期	III期	IV期	V期	VI期
建物跡	A—1類 N 0° W～ N 4° W  柱痕跡に焼土炭化物混入	A—1類 N 0° W～ N 4° W D類 N 2° E～ N 6° E	B類 N 6° W～ N 11° W	C類 N 13° W～ N 15° W		中世 A～C
区画施設	A類 N 0° W		B類 N 6° W～ N 10° W	C類 N 13° W～ N 15° W D類 N 19° W～ N 24° W		
堅穴住居跡	A類 N 0° W～ N 3° W (大型)		B類 N 4° W～ N 10° W (大型)	C類 N 12° W～ N 16° W D類 N 21° W～ N 23° W	E類 N 0° W～ N 6° W (小型)	
整地事業	古代整地 I層 (地区中央第9層)	古代整地 II層 (地区中央第8層)	古代整地 III層 (地区中央第7層) (焼土・炭化物層)			中世整地層 (地区中央・地区西部第4層)

### (3) 地区全域における遺構期の変遷とその年代

地区中央の遺構分類と整地層を基に設定した遺構期については、第Ⅳ章第2節で示した各遺構出土の年代比定資料および第V章で示した構築材の年輪年代から把握される遺構分類の年代、第Ⅳ章第1節で示した各整地層の年代などから、各期年代の把握が可能である。さらに地区北部・東部・西部の整地層についても、第Ⅳ章第1節で示した年代に基づき地区中央の整地層に対比させ、地区全体に共通する変遷上の画期として位置づけることが可能である。それらから把握される地区全体に共通する遺構期とその年代を示すと次頁の表のようになる。

表に年代を示した各遺構分類のうち、堅穴住居跡は遺構数と出土遺物数が最も多いが、その出土遺物の年代は、分類の新旧関係や他の遺構分類との対比においても矛盾は認められない。C類とD類については、出土遺物の年代に大きな差ではなく、同遺構期内の小期としてC類からD類へ、9世紀第3四半期以降の変遷が考えられる。なお、区画施設D類については、下限の年代根拠としたSD162は、V期にまたがり、9世紀第4四半期まで機能した可能性がある。

建物跡については、年代比定資料が少ないが、A—2類に属するSB1351便所遺構木樁の年輪年代測定による西暦756年以降の伐採年代や、便槽内出土土器の年代が根拠となっている。また、建物D類については、年代比定資料としてSB1308柱掘り方抜き取り覆土出土土器があり、建物廃絶後再整地などを行う際の遺物と判断され、D類終末以降の古代整地II層の年代を示すと考えられる。それにより、重複関係では分類間の新旧関係把握が困難であったA—1類とD類については、A—1類→D類の新旧関係が把握されることとなる。さらに、検出層位の関係で見た場合、A—2類とD類が同一面で検出されていること、A—2類の主要建物が火災により焼失しているとともに、D類の一部にも柱痕跡に焼土・炭化物が混入するものがあること、古代整地II層には焼土・炭化物が混入しているこ

とから、A—2類の建物については遺構期Ⅱ期の終末までD類と平行して存続していたと考えられる。それらのことからも、D類はⅡ期内の小期変遷を示す建物としてとらえられる。

地区全体の検出層位・整地層から見た場合、地区中央の古代整地Ⅱ層と古代整地Ⅲ層に対応する形で、地区北部と東部にも同時期に整地事業が認められることや、中世においてはほぼ全城において同時に整地事業が認められることなどから、地区全体に共通する利用状況の変化、画期が認められる。また、地区北部では第9層として焼土・炭化物層が検出されており、出土土器の年代からは9世紀第4四半期に位置づけられる。その土層は元慶の乱（878）による火災に伴う焼土炭化物層となると考えられ、地区北部においては、地区中央とは別に遺構変遷の画期となると判断される。

	I期	II期	III期	IV期	V期	VI期
建物跡	A—1類 天平6年(734) 紀年木簡	A—1類 8世紀第3四半期 ※年輪年代756～ D類 ※～9世紀第1四半期	B類	C類		中世A～C類
区画施設	A類	(SA1352) 8世紀末～ 9世紀初	B類	C類 ～ 9世紀第3四半期 D類 9世紀第3四半期～第4四半期		
堅穴住居跡	A類 8世紀第2四半期		B類 8世紀末～ 9世紀第1四半期	C類 9世紀第2四半期 ～第3四半期 D類 9世紀第3四半期	E類 9世紀第4四半期	
整地事業	古代整地0層	古代整地I層 (地区中央第9層)	古代整地II層 (地区中央第8層)	古代整地III層 (地区中央第7層)		中世整地層 (地区中央第4層)
			地区東部第8層	地区東部第7層		
			地区北部第11層	地区北部第10層	地区北部第9層 焼土・炭化物層	地区北部第5層
				地区西部第6層		地区北部第4層
	8世紀第2四半期	8世紀第3四半期	8世紀末～ 9世紀初	9世紀第2四半期	9世紀第4四半期	12世紀末～ 13世紀第中葉
遺構期年代	8世紀第2四半期	8世紀第3四半期 ～ 8世紀末・9世紀初	8世紀末・9世紀初 ～ 9世紀第2四半期	9世紀第2四半期 ～ 9世紀第3四半期	9世紀第4四半期 ～	12世紀末～ 13世紀第中葉

#### (4) 遺構変遷表と各遺構期の遺構配置図（第158～163図・付図2）

上記のように鶴ノ木地区中央における遺構分類や変遷上の画期となる地区各部の整地層などを基に設定した地区全体の遺構期に、地区中央検出で分類が困難なタイプの遺構や、地区西部・地区北部・地区東部検出で、検出層位や重複関係、出土遺物の年代に基づき、遺構期に対応させることができた遺構群を加え、鶴ノ木地区全体の遺構変遷表および各期遺構配置図として示すと次のようになる。

図ノ本地区遺構変遷表①

	創建以前	I期	II期	III期
地区中央		SI404		→
		SI004 → SB006	SB395	→ SI005
		SB018 → SB484	→ SI020 · SB486	SD272 →
		SB485 → SB019	→ SA502	
		SB021B → SB021A	SB488	→
		SB397 → SB396		→
	SK424	SK1354 → SB1351 · SA1352		
	SK425	SB429 → SB398	→ SB262	→
	SK426	SE406 → SB399	SB490	
	SK542		SB491 → SB492	→
地区中央東側		SA503	SB261	→
			SB257	SB258
		SB962B → SB962A	SA963 → SB259	SI1979 · SI1978
			SA796 · SK817	→
	SK966	SD970	SB1308	→ SB1968 → SB1967
				→ SA1180
		SB1147 → SB1146	→ SK1189 → SI1153	→
		SB1129B → SB1129A	SB1132	→
			SB1133	
		SB1307	→ SI1162 → SD1188	→
地区西侧			SI1310 → SI1135 → SB1130	
			SE1176	→
		SB1149	→ SI1154 → SI1155 → SI1156	→
			→ SI1164	
		SI1165	→ SI1161 → SI1160	→
			SA1179 → SI1136	
			SA1182	→
			SI1137 → SK1143	
			SI1138A → SI1138B → SI	
			1138C → SI1138D	
地区西側	SK834 → SK835		SI1132 → SI1131	
	SK836		SE1173	→
	SK837			
SX650			→ SI918 → SB795	→
			SI964	

縄ノ木地区遺構変遷表②

	IV期	V期	VI期
地区中央	→SK417 SI403 SI640 SK277～SK289 SB267 SK442 SK443 SK462	SI497 SI496 SI498	→SB264・SB266・SB268 SA288・SE269・SE270 SB427・SA464・SA465 SE431 SD274 SD275 SD276 SD435 SD436
地区中央東側	→SB487 →SI400→SI401 →SK420 SI402 SI495 →SB263 SA414 SD413 →SA500 SA501 SA407 SD284 →SI493→SI494A→SI494B →SK512～SK540 SK549 →SA1972 →SI1977 →SI1309→SB1975 →SI1976 →SD1183 →SA1142 (→) SA1973 →SB1131 →SB1134 →SI1163 →SK1192 →SI1159 SK1191 →SI1158 →SI1157	SK541	SX1202～SX1205 SK1196↓ →SB1152→SB1151 SK1194↓ →SB1150 SD1186 SK1199↑ →SE1178→SE1177 →SE1167 SE1166 SE1168 SE1175→SE1174 SE1169 SE1193
	SK961 SD162・SD163 SI166		SK1201 SK1198 SE1171 →SE1172
	SK937 SK938～SK940 SK941～SK946・SK948 SK450～SK455 SK456～SK460 SK611～SK613 SK651 SK645・SK824 SK825～SK828 SK829～SK833	SI622 SK447	→SD801 SD920～SD922 SD969 →SD932 →SB924・SE929・SE928 SA949・SD931・SD933 →SB925・SB926・SB927 SX930 SK948 SD935 →SB428 SE430 SE432 →SD437→SD438 SI609 →SA652 SK637 SI610 →SD641～SD644 SA615 →SK649→ST627～ST653・656 →SE626 SK636 SK638 SA797 ST811 ST812 ST639 →ST808～ST813・ST838～ST840

鶴ノ木地区遺構変遷表③

	創建以前	I期	II期	III期
地区 北 西 部				SI1331 → SI1326
地区 北 部				SA1332～SA1334 → SA1489 SD1498 → SB1467 SE1502
地区 東 部			SI1699 → SI1697 → SI1698	SA1695

## 2 鶴ノ木地区中央建物群について

### (1) 各遺構期の建物配置 (第164～167図)

前述した遺構期および遺構変遷の検討に基づき、鶴ノ木地区の中心施設である地区中央建物群の建物配置とその変遷についてまとめると以下のようになる。なお、建物群を構成する建物は、全期を通じ全て掘立柱建物であり、構造上の差異は認められない。

(I期) SI004住居を埋め立て地区中央丘陵部に整地を行い、建物群を構築する。主要建物として大型建物を南北に列をなすよう配置し、その2棟の南北軸線を中心として、東西対称に縦柱建物を配置する。南北建物列としては、北側に東西7間×南北3間の身舎に南北廊を伴う SB006建物、南側に東西7間×南北2間以上の身舎に北廊を伴う(国営調査時には東西7間×南北3間の身舎に南北廊を伴う建物として確認) SB018建物を配置する。東西対称の縦柱建物としては、東側に東西2間×南北3間の身舎に西廊を伴う SB485建物、西側に東西2間×南北3間の身舎に東廊を伴う SB021B建物を配置する。その他の付属の建物として SB006建物の北北東に東西2間×南北3間の SB397建物、SB018建物の南西に東西2間×南北2間以上の SB962A・B建物を配置する。これらの主要建物の建物方位は、南北方向柱筋が北ではほぼ真北(北で0度～東に1度)から西に4度振れる方向となる。建物群はさらに南側に広がると判断されるが、SB018建物より南側は土取りにより大きく削平されており、実態が不明となっている。また、建物群に付属する井戸として SE406井戸が SB006建物の北東に設けられる。

(II期) I期における主要建物の構成と配置は維持され、ほぼ同位置で建て替えられる。新たに多数の建物が配置され、全期を通じて最も建物群が拡大し充実する。

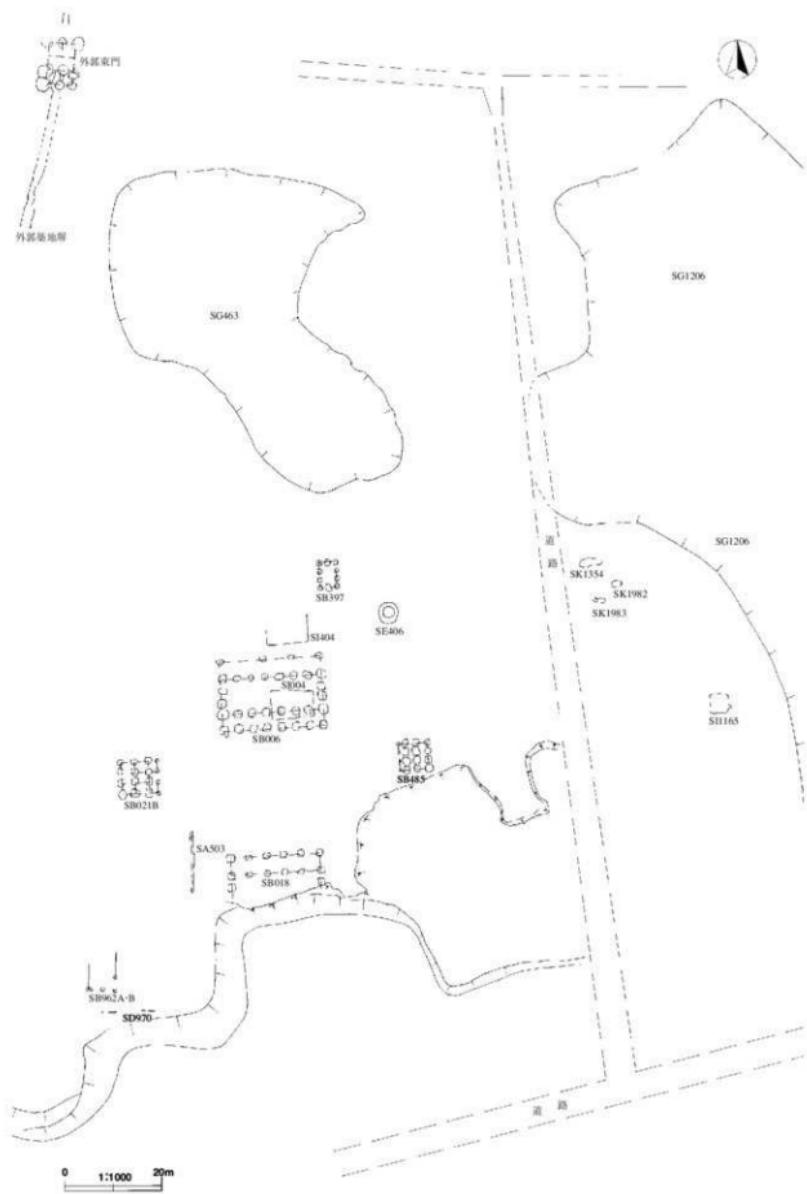
図ノ木地区遺構変遷表④

	IV期	V期	VI期
地区北西部	SK332・SK336～SK345 SX741 (SA740A・B) SX1350 SE621 SK619  SI1327 →SI1328 SI1329 → SI1330 SI1321 →SI1324 SI1468 SI1469 →SD1496 SD1467  SE1474⇒SE1473 SK1509 SK1510 SK1511 SK1508 SD1475 SA1492  →SI1696 SX1701	SK329・SK331  (SX109) SI1322 SI1323 SI1325 SK1348 SK1349 SK1486	
地区北部		SB1465 SB1466 SB1488 SA1491 →SK1478 SK1479 SK1503 SK1506 SK1507 SD1475 SD1495	SE1500 SE1501 SE1471 SE1472 SD1476 SK1480～SK1484 SK1505 SK1509
地区東部			

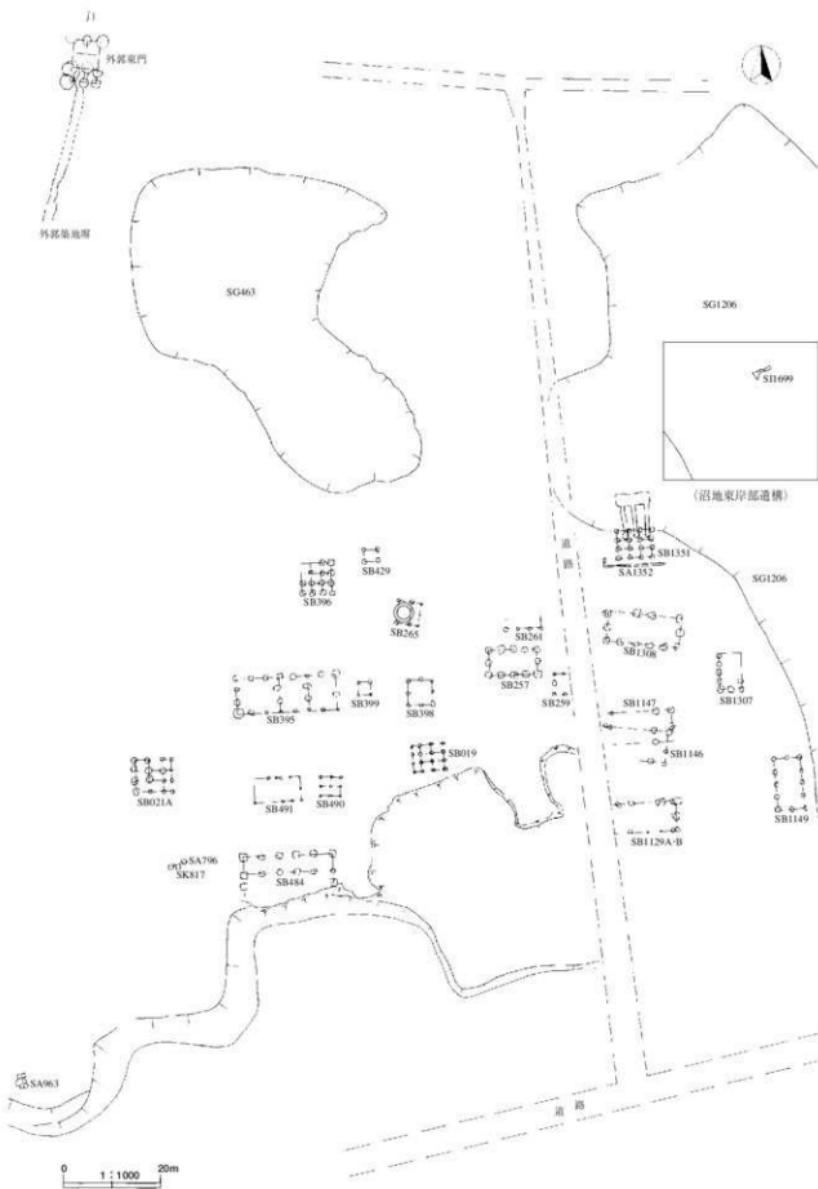
主要建物の周辺には新たに小型建物5棟が配置される。また、主要建物の東側に新たに東西棟4棟と南北棟2棟の大型建物、東西棟1棟と南北棟1棟の小型建物からなる建物群が配置される。東側建物群のうち東西棟が南北に建物列をなす北側、主要建物からは北東側に、建物群に対する目隠し塀を伴う古代水洗便所が造成・建築される。これら新たに配置された建物群と建て替えられた主要建物の建物方位は、南北方向柱筋が北で西に約3～4度振れる方向となる。また、建て替えられた主要建物は柱痕跡に焼土・炭化物が多量に混入し、炭化柱材が検出されるものがあることから、火災により焼失したと判断され、東側建物などの新設建物の多くも同様に火災により焼失した可能性が高い。

II期のある段階から、建物方位が北で東に約1～6度振れる方向となる建物が、主要建物側に1棟、東側に2棟配置される。そのうち東側のSB1146建物は、SB1147に対して建て替えられており、その南側に隣接するSB1129建物の建て替えを含め、東側建物群には2小期が存在することとなる。また、SB265建物 (SE406井戸館建物) がこの段階で新たに付設されると考えられる。その他には、主要建物群の西側と南北側に3本柱からなる櫛竿支柱が新たに付設されることが注目される。

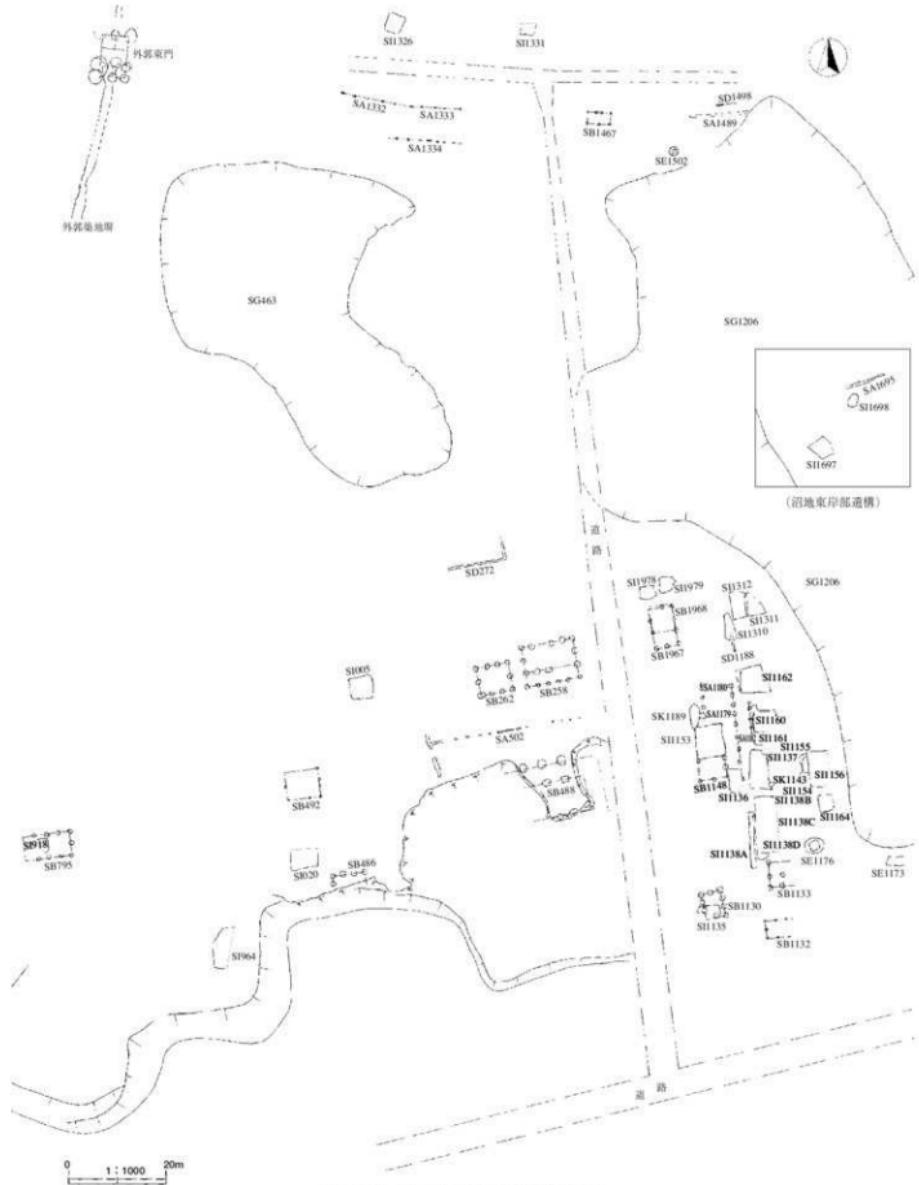
ほぼ同位置で建て替えられた主要建物の構造としては、南北建物列北側のSB395建物は南北の扉がなくなり、東から2間目と4間目に間仕切りを伴うようになる。南側のSB484建物には構造上変化がない。東西対称の総柱建物のうち東側のSB019建物と、西側のSB021A建物にも構造上変化がない。SB395建物の北北東建物であるSB396建物は東西3間×南北3間の総柱建物となる。主要建物に付属する周辺の小型建物については、SB491建物が東西5間×南北2間の東西棟である以外は、SB399建物とSB429建物が東西1間×南北1間、SB398建物とSB490建物が東西2間×南北2間ではほぼ方形の倉庫風の建物プランを持つという特徴がある。



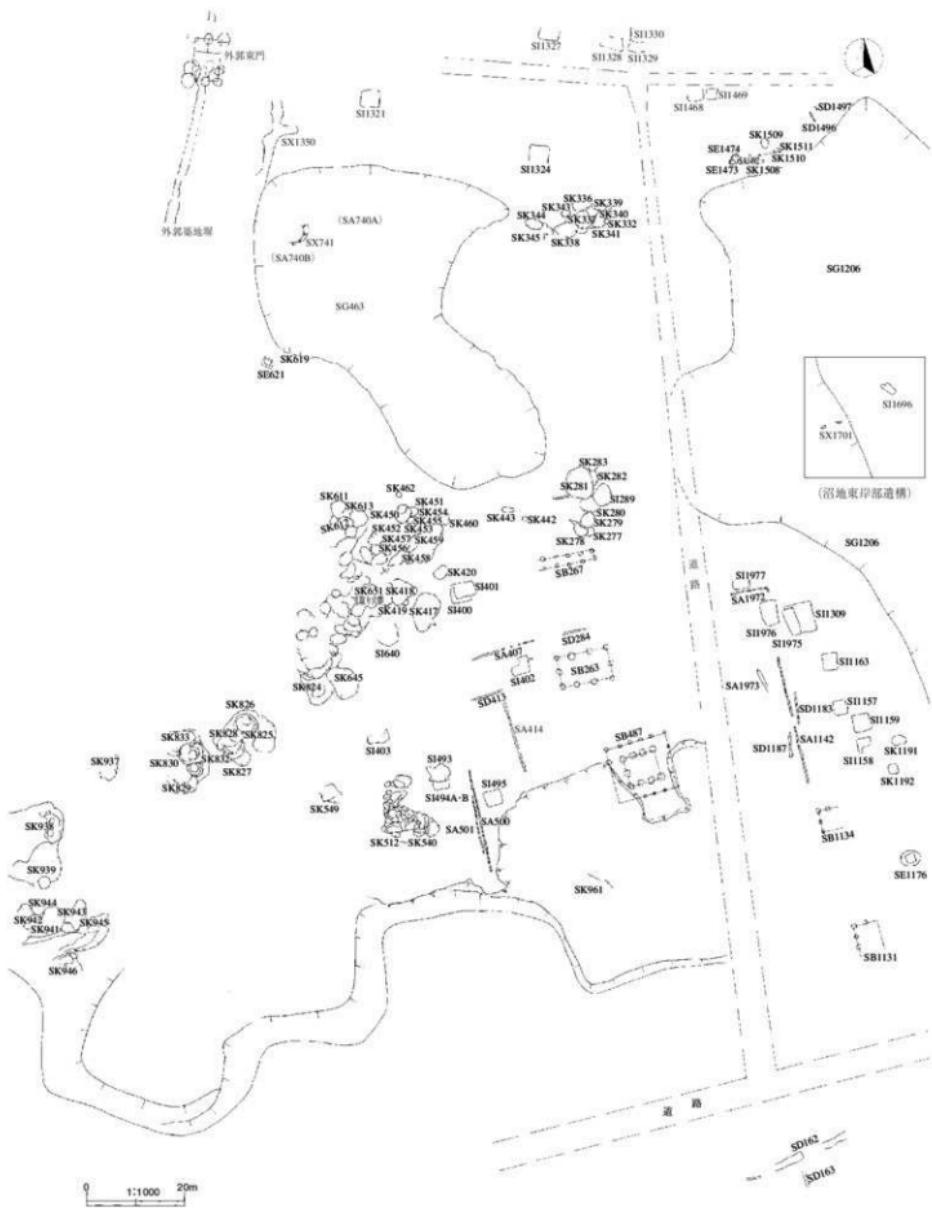
第158図 猿ノ木地区 I 期造構配置図



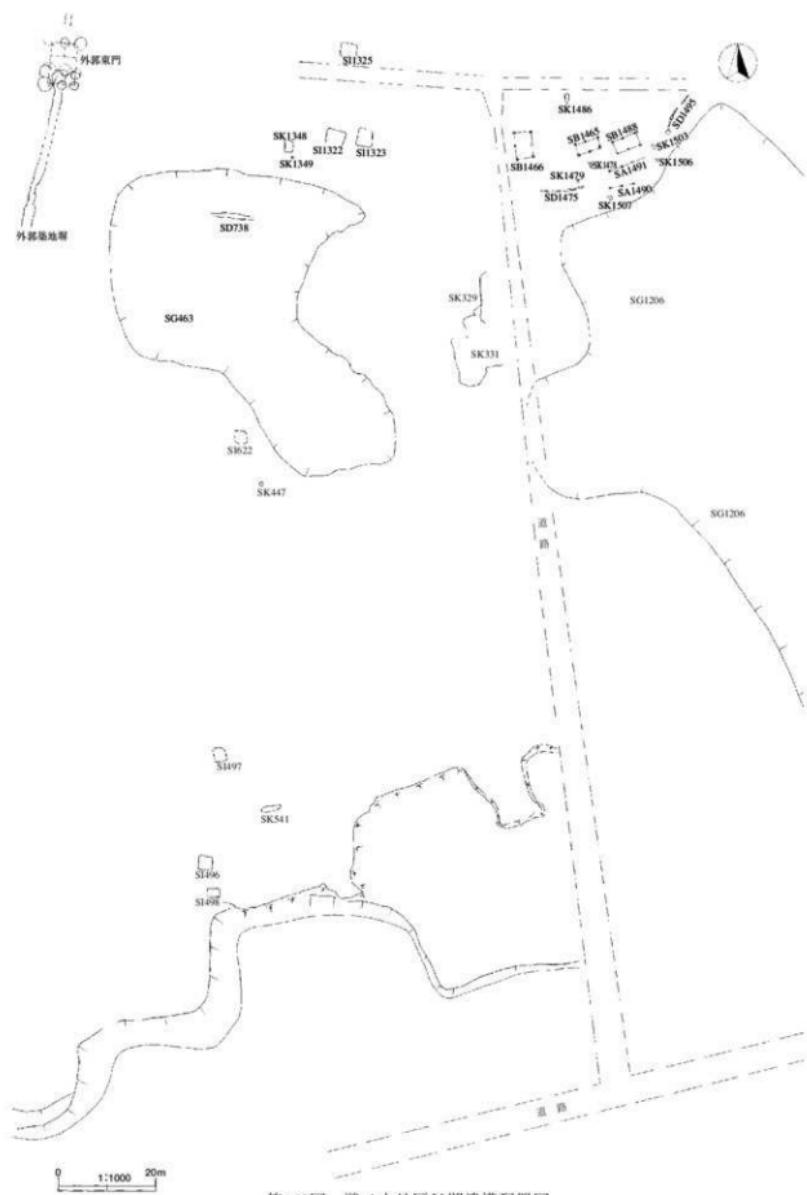
第159図 猿ノ木地区Ⅱ期遺構配置図



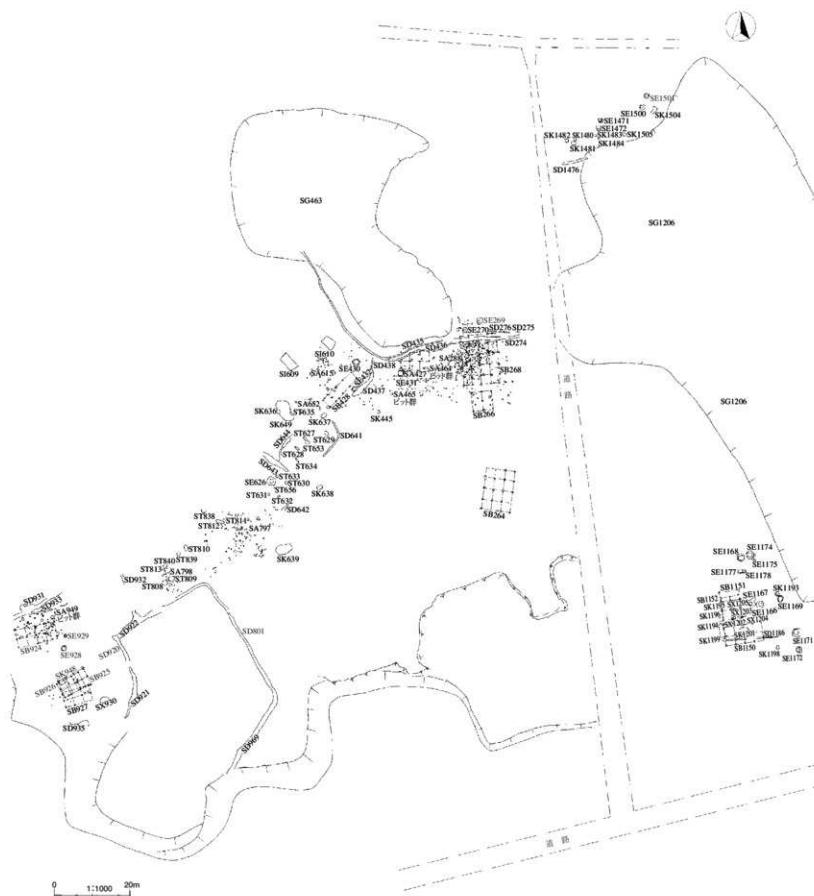
第160図 鶴ノ木地区Ⅲ期遺構配置図



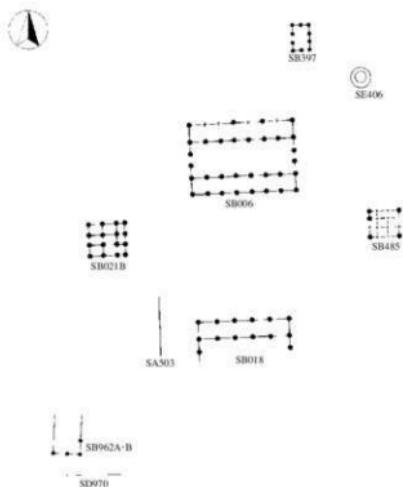
第161図 鶴ノ木地区Ⅳ期遺構配置図



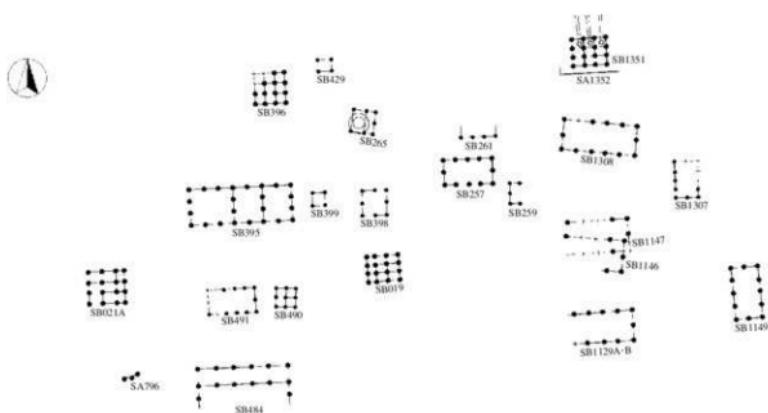
第162図 獅ノ木地区V期遺構配置図



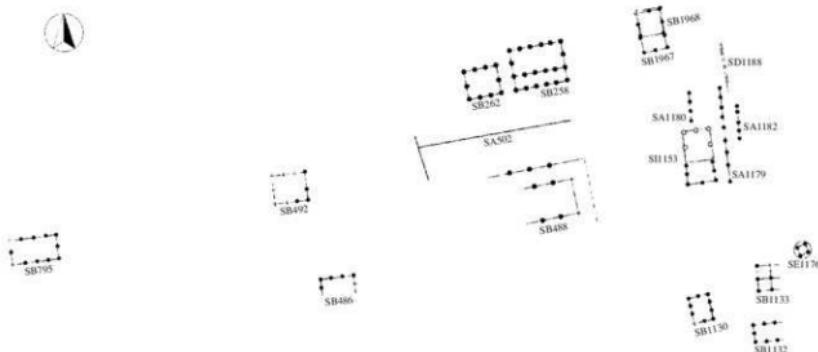
第163図 鶴ノ木地区VI期遺構配置図



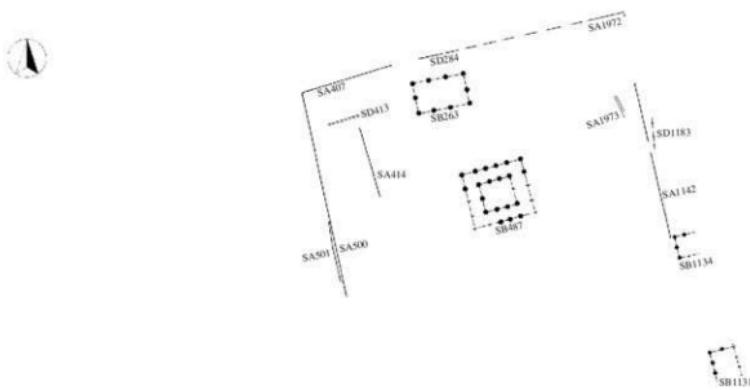
第164図 繩ノ木地区中央建物群Ⅰ期建物配置図



第165図 繩ノ木地区中央建物群Ⅱ期建物配置図



第166図 羽ノ木地区中央建物群Ⅲ期建物配置図



第167図 羽ノ木地区中央建物群Ⅳ期建物配置図

新たに配置された東側建物群の構造としては、南北に建物列をなす建物である SB1308建物跡が東西5間×南北2間、SB1146・SB1147建物跡と SB1129AB 建物跡が東西4間以上×南北2間であり、東西棟ではほぼ同規模と考えられる。東端部に配置される SB1307建物と SB1149建物は、ともに東西2間×南北4間の南北棟である。東側建物群の配置や構造にも一定の規則性が認められるといえる。

以上のようにⅡ期においては、Ⅰ期の主要施設に付属施設を加え充実を図るとともに、新たに東側に建物群を増設・配置し、建物群全体に新たな機能を付加したものと考えられる。

(Ⅲ期) 建物群全体の基本プランが大きく変更され、建物の構成、配置、方位が変わる。建物群の中心が地区中央西寄りから地区中央東寄りに移動し、四面廟堂風建物と推定される SB488建物を中心とする配置に変わる。建物方位はさらに西に振れるようになり、南北方向柱筋が北で西に約6~10度振れる方向となる。依然として建物群全体を囲む区画施設はないが、主要建物間を区画する SA502柱列塀や、主要建物と東側の堅穴住居群間を区画する SA1179・SA1182一本柱列塀が設置される。

主要建物は東西2間以上×南北2間の身舎に北廟を伴い四面廟堂風建物になると推定される SB488建物、その北側に東西5間×南北2間の身舎に南廟を伴う SB258建物を、それに東西に並列するように東西2間×南北3間の SB262建物を配置する。また、SB488建物の北東側に東西2間×南北2間の SB1968建物とそれを東西2間×南北3間に建て替えた SB1967建物が、さらに南東側に東西2間×南北3間の SB1130建物が規則的に配置される。それら主要建物が位置する中央部より南半は土取りにより削平されており、全体の建物配置などは不明となっている。その他に SB488建物の東側に掘立柱建物と堅穴住居を組み合わせた SI1153住居が位置し、南東側にやや離れて小型の SB1133建物と SB1134建物が位置するが、建物方位がやや異なり、主要建物に先立ち住居群とともに構築された可能性もある。また、主要建物の西側には小規模な建物として、SB486建物、SB492建物、SB795建物が散在するが、西側までが建物群として機能的にまとまりをもつものは検討を要する。なお、建物群に付属する井戸として、新たに井戸戸を伴う SE1176井戸が建物群東端部に設けられる。

(Ⅳ期) 四面廟堂風建物を中心とする基本プランが踏襲される。中心建物である SB487建物を中心として一帯が柱列塀の区画施設により方形のプランで区画されるようになる。建物方位はさらに西に振れるようになり、南北方向柱筋が北で西に約13~15度振れる方向となる。建物数は減少し、中央西寄りには建物が配置されなくなり、中央東寄りに建物が集約される。

中心建物である SB487建物が前段階の SB488建物より、やや北に位置をずらして建て替えられ、東西3間以上×南北2間の身舎に東西南北の廟を伴う四面廟堂風建物となる。その北側には東西3間×南北2間の SB263建物を配置する。SB487建物を中心として西辺が SA500・SA501柱列塀、北辺が SA407・SD(A)264・SA1972柱列塀、東辺が SA1142柱列塀により区画される。SA1142の中央部は東辺の出入り口となる可能性が高い。それら主要建物と区画施設の南半部はやはり土取りにより削平され、全体の配置等は不明となっている。また、東辺区画施設の東側区画外に隣接するように小型の SB1134建物と SB1131建物が位置している。

出土遺物等からⅣ期後半以降またはⅤ期以降に属する可能性があるとした区画施設の SA1973柱列塀と中央南端部の SD162・SD163溝跡は、南北基準線が北で西に16~24度大きく振れる方向を示している。SA1973柱列塀は東辺区画施設、SD162・SD163溝跡は南辺区画溝となり、南辺の出入り口となる可能性が高い。それらの区画施設の存在からは、中心建物を維持しつつ区画施設の方位を変更した可能性と、新たなプランの建物群が南半の削平部分を中心にⅤ期以降に存在した可能性が考えられる。いずれにせよ、南半部の実態が不明であり、明確な判断は困難である。

## (2) 建物群の各期における配置計画について（第168～171図）

中央建物群については、全期において南北部の実態が不明であり、全体の配置計画について、明確に把握することは困難である。中央から北側にかけての構造群から配置と方位の規則性を抽出し、可能な範囲で配置計画について検討を加えると以下のとおりとなる。

**(Ⅰ期)** 配置計画の東西軸線（計画基準線）を、SB018建物の北側廊柱行柱筋に設定し、その行中心点から柱筋に直交する建物中軸線を南北軸線（計画基準線）として設定すると、一定の配置計画が読み取れる。南北軸線は南北基準線（真北および真南）に対し北で約3度西に振れ、東西軸線は東西基準線（真東および真西）に対し西で約3度南に振れる。

南北軸線に基づけば、南北軸線から西に9mの南北線にSB018建物とSB006建物の西廊柱行柱筋が一致する。南北軸線から西に27mの南北線にSB021B建物の身舎中央廊柱行柱筋がほぼ一致し、南北軸線から東に27mの南北線にSB485建物の西廊柱行柱筋がほぼ一致し、大きくは東西対象の配置をとる。南北軸線から東に27mの南北線上には、SE406井戸が位置する。また、南北軸線から西に18mの南北線付近には、SA503柱列塀が、西に36mの南北線付近には、SB962建物跡が位置する。

東西軸線に基づけば、東西軸線から北に27mの東西線にSB006建物の南側廊柱行柱筋がほぼ一致する。その東西線から南に約6mの東西線にSB021B建物とSB485建物の北側梁間柱筋がほぼ一致し、また、南に12mの東西線にSB021B建物の南側梁間柱筋が一致する。東西軸線から北に54mの東西線にはSB397建物の南側梁間柱筋が一致する。

以上から、東西軸線（計画基準線）を、SB018建物の北側の廊柱行柱筋に設定した場合、大きくは27m（1/4町）を基本単位として、小さくは9m（1/12町）を基本単位として、建物が計画的に配置されていると考えられる。

**(Ⅱ期)** 従来の主要建物に加えて新たに建物が増設されることに伴い、やや変則的かつ、段階的な配置計画がとられると考えられる。また、規則性がやや緩むと考えられる。主要建物がほぼ同位置で建て替えられることを前提に、南北軸線をSB484建物の北側廊柱行柱筋中心点に設定し、主要建物や東側建物における前期に対する建物方位の振れを前提に、さらに1度西に振れる形で設定し、南北軸線は南北基準線に対し北で約4度西に振れ、東西軸線は東西基準線に対し西で約4度南に振れる方位で設定すると、一定の配置計画が読み取れる。

南北軸線に基づけば、南北軸線から東に12mの南北線にSB395建物とSB396建物の東梁間柱筋が、東に27mの南北線にSB398建物の西梁間柱筋が一致する。さらに東側に増設された建物群を見ると南北軸線から東に54mの南北線にSB257建物の東梁間柱筋が、東に81mの南北線にSB1129AB建物とSB1147建物の東梁間柱筋がほぼ一致する。その南北線から西に9mの南北線にSB1351建物の西梁間柱筋が、東に9mの南北線にSB1307建物の西梁柱行柱筋が、ほぼ一致する。

東西軸線に基づけば、東西軸線上にSB1129AB建物南側廊柱行柱筋とSA796三本柱が位置する。しかし、中央のSB398建物や東側SB1147建物より北側の建物については、東西軸線を基準とせず、SB395建物の廊柱行柱筋を基準とした南北の配置がとられている。建物群の北端に関しては、東西軸線から北に60mの東西線とSB396建物北側廊柱行柱筋、SB429建物南側廊柱行柱筋、SB1351建物身舎南側廊柱行柱筋が一致しており、建物群全体としては軸線に基づく配置をとっていると考えられる。

以上から、北で約4度西に振れる南北軸線と西で約4度南に振れるSB484建物の北側廊柱行柱筋を中心に設定した場合、東西については新たに増設された東側建物を主として大きくは27m（1/4町）を基本単位として、小さくは9m（1/12町）を基本単位として、計画的に配置されていると考えられる。

えられる。しかし、南北については建物群北半は北側の主要建物 SB395建物の桁行を基準とした変則的な配置が取られている。

なお、Ⅱ期後半に建て替え、付設されたD類建物については、SB265建物（SE406井戸館建物）およびSB1308建物の南側柱筋と、SB1308建物とSB1146建物の東側柱筋を結ぶL字状の線上に、別個に変則的に配置されると考えられる。

（Ⅲ期） 新たな配置計画に基づき、建物群の基本プランが大きく変更される。中心建物のSB488建物に基準線を求める一定の配置計画が読み取れる。東西軸線をSB488建物の身舎南側桁行柱筋に設定し、建物身舎および廟の東から2間目の柱を中心点に設定し、そこから柱筋に直交する南北軸線として設定すると、一定の配置計画が読み取れる。南北軸線は南北基準線に対し北で約11度西に振れ、東西軸線は東西基準線に対し西で約11度南に振れる。

南北軸線に基づけば、南北軸線上にSB258建物西梁間柱筋が位置し、東に27mの南北線にSB1130建物とSB1967建物の西桁行柱筋がほぼ一致する。さらに大きく配置を見れば、南北軸線から東に54mの南北線に接してSE1176井戸が、西に54mの南北線に接してSB492建物が、西に108mの南北線に接してSB795建物が配置されている。東側のSA1178・SA1182一本柱列塀は、柱筋方位が軸線からややぶれており、東側の住居群と同じ基準で、建物群に先立ち配置された可能性がある。

東西軸線に基づけば、東西軸線から北に27mの東西線にSB258建物南廂西桁行柱筋とSB262建物南桁行柱筋が一致する。東西軸線から南に27mの東西線にSB1130建物南梁間柱筋がほぼ一致する。SB488建物とSB258建物およびSB262建物間に区画するSA502柱列塀は、SB488建物身舎北桁行柱筋から北に12mの東西線に一致する。なお、SB1130建物については建物方位が他とやや異なるが、配置からはⅢ期に該当すると考えられる。

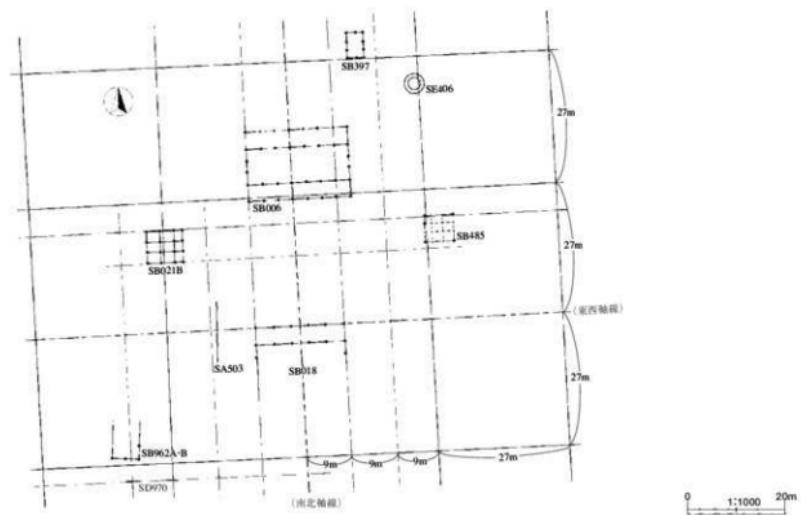
以上から、東西軸線を、SB488建物の身舎南側桁行柱筋に設定した場合、27m（1/4町）を基本単位として、計画的に配置されていると考えられる。

（Ⅳ期） 前段階と同様に中心建物のSB487建物に基準線を求める一定の配置計画が読み取れるが、全体に規則性が緩む傾向が指摘される。東西軸線をSB487建物の身舎梁間中心点をつなぐ線とし、身舎桁行中心点を通りその線に直交する線を南北軸線として設定すると、一定の配置計画が読み取れる。南北軸線は南北基準線に対し北で約14度西に振れ、東西軸線は東西基準線に対し西で約14度南に振れる。

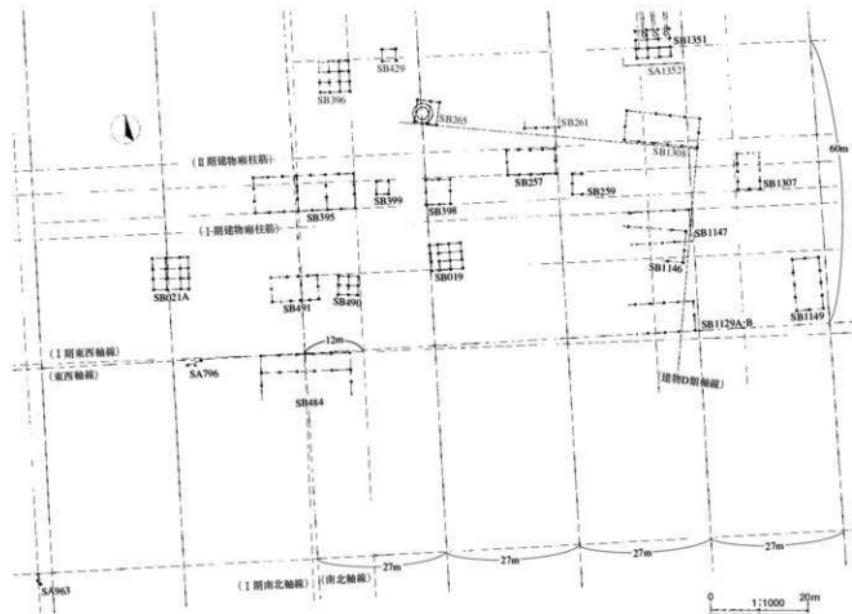
南北軸線に基づけば、南北軸線と軸線から西に12mの南北線に挟まれる位置にSB263建物が配置される。軸線に基づき区画施設を見れば、南北軸線から東に32mの南北線にSA1142柱列塀の柱筋が一致し、西に34.5mの南北線にSA500柱列塀の柱筋が一致するが、厳密な東西対象ではない。東西軸線から北に30mの南北線付近にSA407・SA1972柱列塀の柱筋が通る形で配置されている。

以上から、全体的に軸線を基準として、方位と配置におおよその規則性を持ち配置されているが、明確な基本単位はなく、部分的には12m（1/9町）が配置単位とも考えられる。

なお、Ⅳ期後半以降またはV期以降に属する可能性があるとした区画施設のD類は、北で西に24度振れる南北軸線を基準としている可能性があり、SD162の開口部にその中心軸線を求めれば、その方向はSB487建物よりやや南よりを指しており、その位置にD類に区画される中心建物が存在する可能性も考えられる。



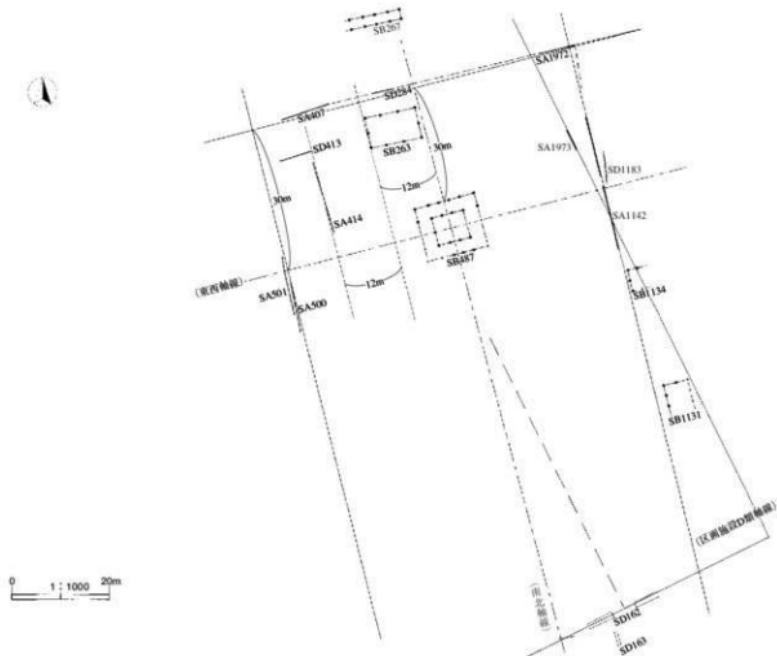
第168図 萩ノ木地区中央建物群Ⅰ期配置計画図



第169図 萩ノ木地区中央建物群Ⅱ期配置計画図



第170図 猿ノ木地区中央建物群Ⅲ期配置計画図



第171図 猿ノ木地区中央建物群Ⅳ期配置計画図

### (3) 建物群の構造・配置と性格について

鶴ノ木地区中央建物群の構造や配置について、国営調査時ではⅠ・Ⅱ期とⅢ・Ⅳ期の前後関係が相違していたものの、建物配置を重視して秋田城の付属寺院である『類聚国史』天長7年(830)条の出羽国大地震で倒壊した四天王寺跡との解釈と性格付けを行っている。しかし、寺院説に対しては、第2章第1節の研究史の項で述べたように、構造論的な見地を中心に、基壇を伴わず礎石建物でない点、非瓦葺きである点、築地塀等の区画施設を伴わないこと、南面する伽藍配置とすれば金堂の後方にある講堂や鐘楼、経蔵とする建物群が正面(南)から見えないと立地条件等の問題点が示され、建物配置や出土木簡から官衙建物群とする考察も行われている(註1)。また、近年は水洗便所遺構検出の寄生虫卵分析結果をふまえた客観説も示されている(註2)。

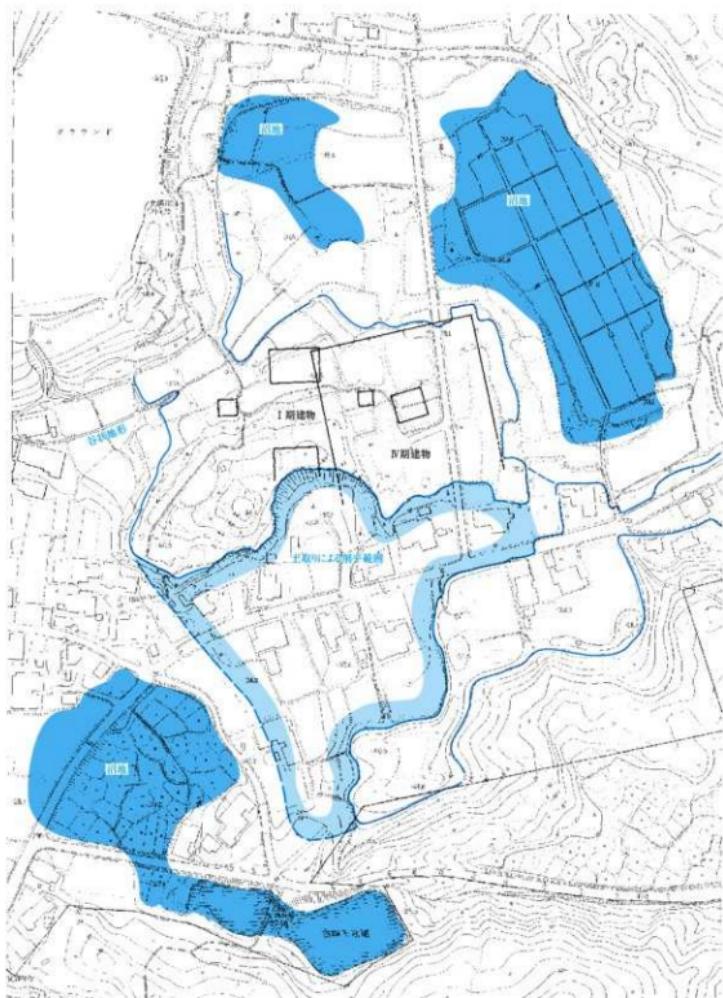
構造や配置について検討を加えると、Ⅲ・Ⅳ期の建物群については、周囲に区画施設を伴い四面廟堂風建物を中心には数少な付属建物を伴う配置であり、仏堂を中心とした一堂寺院形態と考えられ、寺院としての性格はⅢ期以降明確化すると考えられる。後述する「寺」墨書土器、仏教関係遺物、祭祀用小型土器(燈明皿)等の出土遺物の様相は、Ⅲ・Ⅳ期段階の平安時代における寺院としての機能、性格を裏付けるものと考えられる。

I・II期の建物群については、I・II期についても建物配置が伽藍配置として解釈可能であること、II期とIII期への移行に際して、配置計画において27m(1/4町)の基本単位が継承されることから、建物群(施設)の機能・性格は継続する可能性が高いと判断される。そのようにI・II期とIII・IV期の建物群の機能・性格が連続するすれば、奈良時代のI・II期建物群も寺院として位置づけられることとなる。

そこで問題となるのが、I・II期における構造上の見地からの問題点である。基壇を伴わず礎石建物でない点については、東日本における掘立柱式の寺院遺構の検出例があることや(註3)、鶴ノ木地区I期に併行する政府I期においても全てが掘立柱建物であることをはじめとして、秋田城跡では政府最終末期を除き礎石式建物が検出されておらず、基壇を伴う建物は全く検出されていないことなどから、建物構造における地域的特性として理解される。また、基壇を伴わない点については、国営調査においては、建物が丘陵頂上部に位置し基壇を要しなかったという指摘がなされている。築地塀等の区画施設を伴わない点については、伽藍配置に基づけば築地塀や回廊が廻る可能性があるI期のSB006建物とSB018建物付近が削平を受けていることや、SB018建物より南が削平により完全に失われていることから、その部分に築地塀が存在した可能性が考えられる。また、第I章第1節で行った旧地形検討から、建物群が立地する小高い丘は、南側が急斜面、それ以外は沼地や沢状地形で囲まれ、独立した小丘陵の地形となっていたことがわかり、その地形的な独立性から区画施設を要しなかった可能性も考えられる(第172図参照)。

上記のようにI・II期を寺院とした場合の構造上の問題点についても、一定の解釈、理由付けが可能と考えられる。またさらに、憧竿支柱として寺院の莊嚴施設となる可能性が高い三本柱遺構の存在や、出土木簡の内容からもI・II期における寺院としての機能、性格を裏付ける要素が指摘されるが、それらについては別に後述することとする。また、II期における伽藍配置に該当しない東側建物群については、新たに別の機能・性格を持つ施設が付設されたものと考えられるが、それについては、当該期の重要な遺構である水洗便所遺構の性格も含め検討し、後述する。

以上のように構造や配置を中心とした検討からは、III期以降は寺院としての性格が明確化すると考えられ、I・II期についても寺院の可能性が高いと考えられる。それを前提としてI・II期の建物配



第172図 鶴ノ木地区旧地形上建物群位置図(1:2,000)

置について、伽藍配置の見地から検討を加えると以下のようになる。

まず、国営調査時の見解では SB018・SB484建物を金堂、SB006・SB395建物を講堂、SB485・SB019建物と SB021B・SB021A建物を鐘楼、経蔵としている（註4）。南側に金堂、北側に講堂が南北の直線上に配置される伽藍配置は、四天王寺式や、薬師寺式等の奈良時代初期の寺院に認められるが、その場合はほとんどが、鐘楼と経蔵は講堂の後方に配置されるため、SB485・SB019建物と SB021B・

SB021A 建物は変則的な配置をとることとなる。国分寺式伽藍配置では金堂・講堂間に鐘楼と経蔵が配置されるが、国分寺式はその創建時期において鶴ノ木Ⅰ期とはややずれがある。それに対し、同時期で同様の性格を持つ奈良時代前半の城柵付属寺院である陸奥国多賀城廃寺は、出土遺物から名称が「觀音寺」となる可能性が高いとされ、伽藍配置も觀世音寺式に基づいている。その多賀城廃寺の事例と觀世音寺式伽藍配置に基づき、Ⅰ・Ⅱ期建物群を解釈すれば、SB018・SB484建物は講堂、SB006・SB395建物は僧坊、SB485・SB019建物は経蔵、SB021B・SB021A 建物は鐘楼となり、鐘楼、経蔵の変則配置は解消されることとなる。なお、薬師寺式にならえば SB018・SB484建物は講堂、SB006・SB395建物は食堂となる。出羽・陸奥両国における奈良時代前半の城柵設置状況を見た場合、陸奥国府設置城柵である多賀城と出羽国府設置の可能性が高い秋田出羽柵においてはその立地や基本構造等に共通点が多く（註5）、その観点では城柵付属寺院においても広域の共通性が指摘される可能性がある。

問題となる SB006・SB395建物の性格を検討する上では、Ⅱ期における SB395建物構造の変化が重要となる。SB395建物段階では、南北の扉がなくなり、桁行東から2間目と4間目に新たに間仕切りが入る。伽藍の中核建物である講堂の扉がなくなり縮小化し、機能的には講堂に適さず、居住性を重視することとなる間仕切りが入ることから、SB395建物を講堂とする上で大きな問題となり、伽藍配置を変えず建物機能が組変わることも考え難い。それに対し、南側の SB018・SB484建物はⅠ・Ⅱ期を通じ扉が維持され、中枢堂舎として構造と規模が維持される。それらのことから、SB018・SB484建物を講堂、SB006・SB395建物を講堂ではなく僧坊または食堂とする方がより妥当性が高いと考えられる。また、建物群を南面する伽藍配置とすれば金堂の後方にある講堂や鐘楼・経蔵とする建物群が正面（南）から見えないという立地条件上の問題についても、丘陵頂部に位置する SB018・SB484建物を講堂とすれば、中枢伽藍の金堂・講堂については正面から見えることとなり、解消されると考えられる。なお、鐘楼、経蔵については、東西で丘陵がやや低くなる所に立地し、高さを持つ建物であることを踏まえれば、正面からの視界には入るものと推定される。

以上のように、伽藍配置の見地からⅠ・Ⅱ期建物群に検討を加えた結果、国営調査以来の見解とは別に、SB018・SB484建物は講堂、SB006・SB395建物は僧坊または食堂、SB485・SB019建物は経蔵、SB021B・SB021A 建物は鐘楼となる可能性が考えられた。しかし、伽藍配置上、最も重要な南半部の実態が不明であることから、国営調査時の金堂・講堂説の可否も含め、最終的な判断は困難といえる。

（註1）秋田市教育委員会『秋田城跡』昭和52年度調査概報 1978年

秋田市教育委員会『秋田城跡』昭和53年度調査概報 1979年

（註2）新野直吉『歴史学研究と考古学成果』『政治経済史学』 1996年

（註3）奈良文化財研究所『地方官衙と寺院』独立行政法人文化財研究所 2005年

（註4）文化財保護委員会『秋田城跡第四次調査概要』 1962年 国営調査成果の概報。正式報告書は未刊行

（註5）岡田茂弘ほか「東日本における古代城柵遺跡の研究」『昭和五九年度科学的研究費補助金総合研究（A）研究成果報告書』 1985年

### 3 特徴的構造について

#### (1) 古代水洗便所跡について

第63次調査で鶴ノ木地区中央北東側のSG1206沼地跡南西岸で検出された便所遺構は、第IV章第2節の2で詳細を述べたとおり、特殊な構造の水洗式便所となっている。SB1351掘立柱建物内に配置された3基の便槽から、木桶を埋設した暗渠が沼地側に延び、木桶排出口の沼地を掘り込み沈殿槽を設置している。沈殿槽からは沈殿・自然浄化された上水を沼地に流す構造となっている。

水洗便所は、鶴ノ木地区中央建物群のうち8世紀後半段階のII期建物群に付属し、寺院の可能性の高い地区中央西寄りの主要建物に加え中央東側に新たに増設された建物群とともに構築されている。便所遺構の年代は、使用された暗渠木桶が年輪年代測定法分析により伐採年代が756年以降に位置づけられ、沈殿槽内出土の須恵器壺の年代からは8世紀第3四半期以降に機能していたことが把握される。また、沈殿槽が地区中央第8層により埋め立てられることや、SA1352材木塗廃絶時の布掘り覆土出土土器の年代より、8世紀末から9世紀初めには廃絶したと考えられる。

構造から見れば、古代において同様の構造を持つ便所遺構は、検出されていない。同時期の都城においても道路側溝の流水を屋敷内に引き込んだ木桶を跨ぐ簡易な水洗構造の「桶殿」型式や、汲み取り式であるのに対して、建物内に便槽が並び暗渠による水洗式で沈殿槽まで備える鶴ノ木地区水洗便所は極めて特異かつ優れた構造の便所と判断される（註1）。

沈殿槽内堆積土から検出された種実類と寄生虫卵からは、使用者の食生活・食習慣から、使用者層が推定される。稲穀と瓜の種の出土からは、米を主食とし、瓜を食べる当時においては高級な食生活が想定され、秋田城に関係する官人層や僧侶などの使用を想定させる。寄生虫卵としては、回虫、鞭虫、肝吸虫、横川吸虫、有・無鈎条虫、日本海裂頭条虫、毛頭虫類等が検出されている。そのうちサケ・マスを中心宿主として感染する日本海裂頭条虫がわずかしか検出されていないことからは、サケ・マスを好んで食した東日本の人間がほとんど使用していないことが指摘される。寄生虫卵を分析した金原正明氏は「食生活が地域に依存したものすなわち風土的な食生活ではなく、畿内の食生活をしていた可能性」を推察している。さらに、有鈎条虫は豚、無鈎条虫はウシを中心宿主として感染するが、虫卵だけでは両者の識別はほとんど困難としながら、「草食動物の摂食によって一過的に排出される可能性のある他の寄生虫卵が検出されない」ことから豚を常食する習慣を持つ人間へ寄生する有鈎条虫卵の可能性が高いことを指摘している（第V章の1参照）。中国大陆においては、早くから豚の飼育が知られ、日本にも西日本の弥生時代の遺跡から出土例があるが、古墳時代以降はほとんど事例が認められないことから（註2）、古代日本では豚食の食習慣はないと考えられる。そうした中で、有鈎条虫卵が検出されることからは、豚食習慣のある大陸からの来訪者が鶴ノ木地区水洗便所を使用した可能性が指摘される。分析者の金原正明氏は、有・無鈎条虫卵が秋田城跡と中国大陆や朝鮮半島から来航する使節の迎賓館であった筑紫の鴻臚館の便所遺構以外では検出されていないことも指摘し、豚食習慣のある大陸からの来訪者が使用した可能性があると述べている。そのことはまた、秋田城が鴻臚館と同様の役割を果たしていた可能性を示唆することとなる。

中国大陆との交流について見た場合、律令国家は8世紀から9世紀にかけて中国大陆東北部の渤海国と外交交流を行っており、8世紀代には神亀4年（827）の第一回使から延暦14年（795）の第十三回使までのうち、六回も日本海側の出羽国域（「蝦夷地」を含む）に来着していることが史料から把握される（資料編別編2の1参照）。外国使節に対する初期の対応は、来着地の国府が行うのが通例

であり、奈良時代に出羽国府が存在したと考えられ、最北の律令国家の枢要官衙であった秋田城は、來着した渤海使節の対応を行った可能性が高いと判断される。

新野直吉氏は、上記の鶴ノ木地区水洗便所の調査成果を踏まえ、出羽櫛の秋田北進の背景には、国府移転を前提として、当時渤海使の来航があった出羽國の北に国府を作らる城柵、中央政府に直結した枢要施設を北進させ、直接的に渤海使や北方民族への対応にあたる外交施設としての役割も担わせたとする説を示している（註3）。また、延暦17年（798）の第十四回使以降は、出羽國への渤海使来航はなくなり、能登以西の西日本方面に移ることから、古畠徹氏は渤海側が出羽を経由する北回り航路に代わり日本海中央を横断する航路を選択したと推定している。それにより9世紀以降は、秋田城の対渤海国外交施設としての役割は変化したと考えられる。

以上のことから、渤海使節などの大陸からの来航者が、鶴ノ木地区中央建物群を迎賓館施設として使用し、水洗便所を使用した可能性が指摘される。それにより、前述したような全国的にも類例のない特異かつ優れた構造の水洗便所が、最北の城柵官衙である秋田城に存在することの理由も理解されるといえる。鶴ノ木地区中央建物群の機能と変遷という観点から見た場合、Ⅱ期における東側建物群の増設は、従来の建物群の機能に新たな施設・機能を付加したものと判断される。前述したようにⅠ期・Ⅱ期を通じ中央西寄りの主要建物を寺院とした場合、それにⅡ期段階で客館（迎賓館施設）としての機能が付加されたと考えられ、Ⅱ期の地区中央建物群には、寺院兼客館としての性格と機能を持つ可能性が指摘されるのである。また、Ⅲ期における地区中央東側建物群の消滅と堂風建物を中心とする建物群への集約は、秋田城の対渤海国外交施設としての役割は変化により、客館（迎賓館施設）を要しなくなり、一堂形態の寺院へ機能が変化、集約した可能性を示唆している。

（註1）奈良文化財研究所『古代の官衙遺跡 I 遺構編』独立行政法人文化財研究所 2003年

（註2）朝日新聞社刊 国立歴史民俗博物館編『新弥生紀行』 1999年

（註3）新野直吉『古代日本と北の海みち』 高科書店 1994年

新野直吉『古代東北と渤海使』 歴史春秋社 1994年

## （2）三本柱遺構について

鶴ノ木地区中央建物群の西側において、三本一組の掘立柱からなる特殊な遺構が、SA963とSA796・SK817三本柱遺構として2箇所検出されている。遺構の構造は、2基の深い柱掘り方列とその中间の柱筋からややずれた位置に配置した浅い柱掘り方からなる。機能的には、第Ⅳ章第2節の3で述べたとおり、秋田県胡桃館埋没遺跡や平城京跡第2次大極殿前庭に認められる三本一組の柱遺構の類例から（註1）、二基の深い掘り方の柱が控え柱として真ん中の柱を支える、旗竿等の掲揚塔的遺構と判断される。

遺構の時期については、柱列の柱筋方位がともに近い方位の振れを示しており、同時期に計画的に配置された可能性が高い。柱筋の方位については建物C類に近いが、配置計画上は地区中央建物群Ⅱ期の東西軸線上や軸線に直交する南北基準線上に位置することや、SA963柱抜き取りからは多量の炭化物が検出され、柱掘り方埋め土から遺物がほとんど出土せず、瓦片がわずかに出土する状況などがA-2類に類似していることから、A-2類の時期に属すると判断された。

遺構の性格については、同種の遺構が秋田城跡では鶴ノ木地区以外では検出されていないことから、中央建物群とおよび鶴ノ木地区的機能と性格に直接関係するものと考えられる。

第Ⅳ章第2節の3で述べた平城宮第2次大極殿前庭の類例をふまえれば、幢や幡を掲げる幡竿支柱

となり官衙堂舎の莊嚴施設となる可能性がある。また、東京都武藏国分尼寺と福島県夏井廃寺等の東国寺院における二本一組の幡竿支柱の類例をふまえれば（註2）、寺院堂舎の莊嚴施設あるいは仏教儀式に伴う施設となる可能性が高い。なお、東国諸寺院の幡竿支柱の類例が二本一組であるのに対し、三本一組の類例である胡桃館埋没遺跡についても、近年は寺院としての性格が指摘されている（註3）。幡竿支柱については、現状では東日本では官衙・政府城からの検出例ではなく、寺院からの検出例のみとなっている。官衙の莊嚴施設であれば、秋田城においても同時期に機能し、蝦夷の朝貢儀礼等を初めとして諸儀式が執り行われていた城内の政府に存在してしかるべき遺構であるが、周辺を含めた政府城では検出されていない。

これらのことから、三本柱遺構は寺院堂舎の莊嚴施設あるいは仏教儀式に伴う幡竿支柱などの施設となる可能性が高いと考えられる。

（註1）秋田県教育委員会「胡桃館埋没建物遺跡第2次発掘調査概報」 1969年

独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所『古代の官衙遺跡 I 遺構編』 2003年

（註2）国分寺市教育委員会「武藏国分尼寺跡Ⅰ」 平成4年度発掘調査概報 1994年

いわき市教育委員会 財団法人いわき市教育財団『いわき市埋蔵文化財調査報告第107冊夏井廃寺

—陸奥国磐城郡古代寺院跡の調査』 2004年

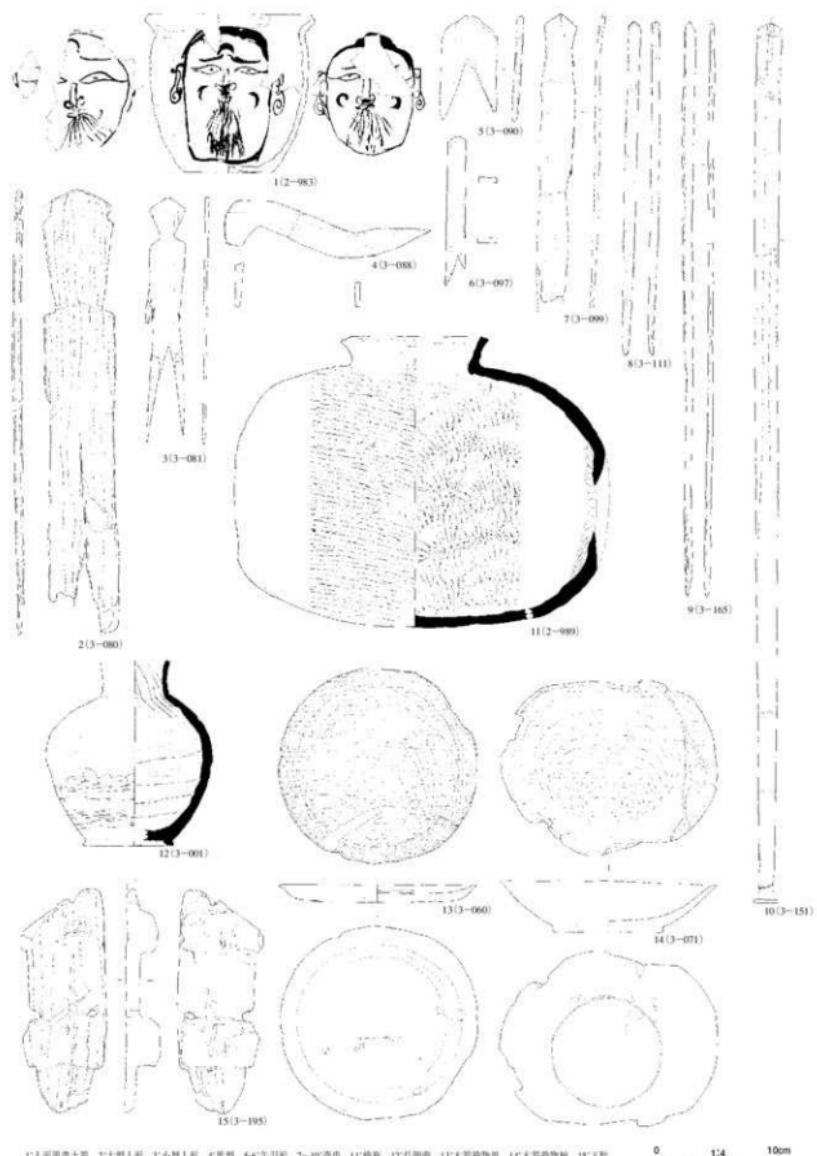
（註3）宇田川浩一 「元慶の乱」前後の集落と生業』『第31回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』 2005年

### （3）祭祀遺構について

鶴ノ木地区一帯は、秋田城跡のなかでも祭祀遺構と遺物が特に多く、集中して検出されており、地区的特殊性として指摘される。SE406内の墨書埠などを除き、祭祀遺構と遺物は主に平安時代を中心として検出され、出土している。SG462沼地跡北西岸では、「祓」に関係する水辺の祭祀遺構が検出されている。他に一時的な祭祀遺構として、墨書土器や祭祀用小型土器の一括廃棄遺構が検出されている。また、明確な遺構を伴わないが、SG462沼地跡や SG1206沼地跡岸辺付近では、祭祀行為に伴い一括廃棄された土器類が出土している。

SG462沼地跡北西岸祭祀遺構は、水辺の祭祀場として一定期間利用されている。第62次調査地では、岸辺の堆積層内より8世紀末～9世紀第1四半期に位置付けられる「目」墨書土器や小型の特殊な赤褐色土器坏Aが出土しており（第120図参照）、水辺でそれらを使用した祭祀が行われていたと考えられる。その後、9世紀第2四半期に沼地岸辺に SX741テラス状遺構が人工的に造成され、水辺の祭祀場として本格的に整備される。張り出し部と周囲の沼地部分からは、人面墨書土器、大小の人形・馬形・矢羽根形などの形代類、斎串、絵馬状木製品、呪符木簡などの木製祭祀具、さらに多量の土器類と曲物・挽物皿・下駄等の木製品類が出土し、それらが祭祀遺物としてセットを構成すると考えられる（第173図参照）。人面墨書土器や共伴する土器の年代から、9世紀第2四半期から第3四半期にかけての時期を中心としてそれらを用いた祭祀が行われたと考えられる。人面墨書土器や形代類、斎串類等は律令祭祀遺物と呼称され、そのセットは主として「祓」の祭祀行為に用いられたと考えられる。SG462沼地跡北西岸が城内またはその場でとり行われた「祓」の祭祀の道具類を水に流す「流し」の場所いわゆる「祓所」として使用されたと判断される。

周辺では第54次調査 SG1013土取り穴跡で、律令祭祀遺物が出土している。外郭東門付近城内側の築地塀構築に伴う土取り穴が開口し湿地化した場所で、廃棄土坑としても使用されていた場所から、刀形・馬形・鎌形・矢羽根形・舟形・琴柱・斎串が出土しており、その使用・廃棄年代は、延暦年間



第173图 SG463沿地跡西岸祭祀遺構出土祭祀遺物集成圖

の紀年銘が記された木簡と併存することから、8世紀末から9世紀初め頃となる。現状では出羽国域で最も古い律令祭祀遺物の出土例であり、木製祭祀具のうち形代を中心とし、斎串を伴う祭祀行為が行われている。これとはほぼ同時期に城外の第62次調査地で水辺祭祀が行われており、8世紀末以降、外郭東門周辺、城内外が祭祀の場として利用されていたと考えられる。

出羽国全域を対象として広域における律令祭祀具、木製祭祀具を用いる祭祀の展開を見ると、8世紀末頃に形代類等の木製祭祀具を中心に城柵・官衙に律令的「祓」の祭祀が導入され、9世紀中葉までに人形などの形代類や斎串と人面墨書き土器によるセットが成立すると考えられる。それらのセットによる祭祀は国府と城柵やその周辺に限られる傾向がある（註1）。出羽北部における8世紀末頃の導入段階の遺跡としては、秋田県五城目町の中谷地遺跡があげられる（註2）。また、9世紀中葉の祭祀遺物のセット成立段階の遺跡としては、山形県酒田市俵田遺跡が知られている（註3）。秋田城跡東門周辺における祭祀の展開は、出羽国域の状況とおおよそは期を一にしているといえる。

しかし、セット関係を詳細に見ていくと、9世紀前半～中葉段階では、庄内地方では土師器砲弾型長胴壺の人面墨書き土器と平底小型壺のセット関係が認められるのに対し、出羽北部の秋田城跡では平底中・小型壺の人面墨書きや、壺の「目」墨書き土器であり、出羽国内でも地域差が存在するともいえる。

また、全国的にみると、祭祀遺物のうち、細長い棒状の斎串（刺串）、「目」墨書き土器、長胴壺の人面墨書き土器等は出羽国地域の特徴を示す可能性がある。また、形代類を用いる「祓」の祭祀が盛行する9世紀中葉段階では、祭祀具の構成に木器類や須恵器貯蔵具類を伴うという特徴が指摘され、以後地域性として残ることが指摘される。そのことから地域での受容・拡大段階に地域性が生じている可能性も考えられる（註4）。

SG463沼地跡北西岸部が、9世紀第2四半期頃に造成され本格的に祓所として整備される契機としては、秋田城の官舍並びに四天王寺や周辺村落にも被害を与えた『類聚国史』天長7年（830）条の出羽国大地震が考えられる。出羽国において人面墨書き土器や形代類、斎串類を用いた「祓」祭祀が盛行する背景については、出羽国の地域的事情として、天災に伴い祭祀が行われたとする考察や指摘がある（註5）。出羽国では、天長7年の大地震、嘉祥3年（850）の出羽国大地震など天災が重なる状況の中、嘉祥3年に全国に先駆け、国司の定員として陰陽師が派遣配置されており、地鎮や除災を目的とした陰陽道による祭祀が、国衙をはじめとする「官」において執り行われていたと考えられる（資料編別編2の1-25参照）。秋田城跡 SG463沼地跡北西岸祭祀遺構においても呪符木簡（資料編別編2の2-8参照）が出土しており、陰陽師や陰陽道による祭祀が想定される。また、秋田城と同様に地方官衙で検出される形代や斎串を多様する「祓」祭祀の多くについては陰陽祓であるとする指摘もある（註6）。

鞠ノ木地区で本格的に祓所を整備して行われた「祓」祭祀は、地域的要因に基づいて行われた可能性が高く、天災に伴い地鎮や除災を目的として、陰陽祓としての祭祀の要素を加え行われたと考えられる。天災に伴い地鎮や除災を目的とした祭祀という面では、地域に先駆けて行われ、それが出羽国において制度化された可能性もある。鞠ノ木地区と SG463沼地跡北西岸祭祀遺構は、出羽国における律令祭祀、「祓」祭祀の展開を考えるうえでも極めて重要な地域・遺構として位置づけられるといえる。

鞠ノ木地区における木製祭祀遺物を用いた祭祀については、SG1206沼地跡南岸付近で9世紀第4四半期ごろに、鐵形と赤褐色土器壺を一括廃棄する祭祀が行われる。出羽国においては、9世紀第4四半期以降に、人面墨書き土器と木製祭祀遺物のセット関係も崩れ、人面墨書き土器は欠落する。木製祭

祀遺物の構成からは、斎串以外の形代類が欠落していく事例が増え、在地性が強まることが指摘される。その段階の出羽北部の遺跡としては大仙市厨川谷地遺跡があげられる（註7）。鶴ノ木地区における9世紀第4四半期以降の祭祀の様相についても、やはり出羽国の動向と一致していると考えられる。

この他に鶴ノ木地区において多く認められる特徴的な祭祀として、祭祀用小型土器の一括廃棄遺物があげられる。これについては、土器の検討が主となることから、出土遺物の項で考察を加えることとする。

（註1）伊藤武士「出羽国における古代祭祀—木製祭祀具を中心として—」平成19年度環日本海文化交流史調査研究集会資料集 2007年

（註2）秋田県教育委員会『中谷地遺跡』秋田県埋蔵文化財調査報告書第316集 2001年

（註3）山形県教育委員会『依田遺跡』秋田県埋蔵文化財調査報告書第77集 1984年

（註4）註1と同じ

（註5）註1および註3と同じ

（註6）篠原祐一「地方官衙と祭祀」『季刊考古学第87号』 2004年

（註7）秋田県教育委員会『厨川谷地遺跡』秋田県埋蔵文化財調査報告書第383集 2005年

## 第2節 出土遺物について

### 1 鶴ノ木地区における出土遺物の様相

鶴ノ木地区の構造内外からは、土器、陶磁器、瓦・埠、木製品、金属製品、石製品、土製品、錢貨、木簡等が出土している。それら出土遺物のうち、使用目的が明確な遺物について出土状況を把握し、城内など他地区と比較検討することなどにより、地区の機能と性格に結びつく傾向や特徴の把握が可能と考えられる。

まず、土器類のうち硯については、文字を使用する識字層の活動、官衙およびその周辺においては、官人の存在が想定され、使用目的としては第一に行政実務に伴う使用が考えられる。鶴ノ木地区における硯類の出土状況（出土報告数）を見た場合、地区全体で円面硯6点、風字硯3点、須恵器転用硯26点、計35点が出土している。出土数を地区の中心施設である中央建物群周辺に絞り込めば、円面硯3点、風字硯1点、須恵器転用硯10点、計14点となる。地区全体の調査面積が $62,920\text{m}^2$ に及ぶことや、城柵官衙に隣接し、大規模建物群が存在することを踏まえれば、出土数は少ないと考えられる。城内の中心施設として儀礼の場に加え行政実務機能も有していた政府城と比較すると、政府城（調査面積 $6,221\text{m}^2$ ）では円面硯34点、風字硯8点、須恵器転用硯130点、計173点が出土しており、鶴ノ木地区は城内の出土状況に比しても明らかに出土数が少ないと判断される。それらのことから、鶴ノ木地区、特に中央建物群が行政実務官衙としての機能を継続的に有していたとは、考え難い状況といえる。

また、同じく、「刀筆の吏」に例えられるように、官人の存在に結びつく遺物といえる鉄製品の刀子および石製品の砥石の出土状況について見た場合、地区全体で刀子は8点、砥石は15点が出土している。中央建物群周辺に絞り込めば、刀子は2点、砥石は3点のみの出土となっており、硯と同様に城内と比較して少ない状況となっている。

それに対し、土器類のうち、使用目的として灯火具の他、祭祀行為特に仏教儀式に用いられると思

えられる燈明皿（灯心の使用による煤付着土器）の出土状況を見た場合、鶴ノ木地区全体では、95点が出土している。長期にわたり継続して機能した政府城と比較すると、政府では7点の出土に止まっている。城内の出土状況に比しても明らかに出土数が多いと判断され、城内他地区に比しても突出して多いと考えられる。さらに中央建物群周辺に絞り込めば、77点が出土しており、他の遺物とは逆に中央建物群周辺に集中する傾向が指摘される。そのことは、鶴ノ木地区、特に中心施設の中央建物群が持つ宗教的な性格と機能を示唆しており、祭祀行為特に仏教儀式に用いられることを考えれば、僧侶の存在、寺院としての機能を示唆するものと考えられる。

なお、鍛冶工房等での使用を目的とするフイゴ羽口の出土状況を見た場合、鶴ノ木地区全体で5点の出土に止まっている。地区全体の調査面積を踏まえれば、恒常に生産活動が活発であったとは考え難く、施設の改修期等における臨時の生産活動を反映していると考えられる。他の工具類の出土もほとんど認められない状況も合わせ、恒常的な生産施設の機能は有していないかったと考えられる。

以上のように、遺物の依存率や個別の形態による年代比定が困難であるという制約が存在し、総体的な出土数の比較検討に止まつたものの、鶴ノ木地区的機能と性格に結びつく特定の遺物における出土傾向や特徴が把握されたと考えられる。それらは、鶴ノ木地区に識字層が存在したもの、継続的に行政実務官衙として機能した可能性が低いこと、宗教的な性格が強く、特に仏教儀式が行われる寺院としての機能と性格を有していた可能性が高いことを示唆している。

## 2 特徴的出土遺物の検討

鶴ノ木地区出土の各種出土遺物のうち、墨書土器や木簡等の出土文字資料、土器類を中心に認められる仏教関係・祭祀関係遺物、中世段階のかわらけおよび貿易陶器類等については、特徴的な遺物として、その検討が地区の機能と性格等に直接関係するものと考えられる。以下それぞれに検討を加え、地区の特徴や機能と性格の把握を試みることとする。

### （1）出土文字資料について

鶴ノ木地区からは、第Ⅳ章第4節に報告したように、出土文字資料として木簡や墨書土器が出土している。そのうち特にSE406井戸跡井筒内から出土している木簡や、墨書土器のうち施設名を示す「寺」などの墨書土器については、地区の機能と性格や変遷に直接関係する重要な文字資料と考えられる。以下、それぞれに検討を加えて行くこととする。

#### 1) SE406井戸跡出土木簡について（資料編別編2の2）

SE406井戸跡井筒内理土最下層から16点出土した木簡のうち、第一号木簡、第二号木簡、第七号木簡、第四号・五号木簡は、その記載内容が地区の変遷、機能と性格に直接関係すると考えられる。

第一号木簡は、「天平六年月」の釘書きがあり、『続日本紀』の天平5年（733）条の出羽権の秋田村高清水岡への移遷記事を裏付けるとともに、地区中央建物群の創建年代の根拠ともなっている。併せて第二号・第四・五号木簡の天平勝宝年間の紀年との年代差については、鉄釘により創建以来一定期間井戸館等に打ち付けられていたものが、ある段階で落下または廃棄されたことにより、時間差が生じたと考えられる。しかし、井戸埋土出土遺物の下限年代が8世紀後半期から9世紀前半期であること、井戸埋土上位および井戸館建物柱掘り方柱痕跡への焼土炭化物混入から、井戸がⅡ期建物群終末まで存続、機能したと考えられることを踏まえた場合、井戸の廃絶年代と天平勝宝年間

紀年の木簡にも、さらに時間差が存在していることとなる。仮に段階的に井戸底部が浸れる状況であれば、創建期・天平年間の遺物は遺存していなかったと考えられ、天平勝宝年間の紀年木簡も遺存していなかったと考えられる。そのことから、「天平六年月」の紀年木簡と8世紀第2四半期に位置づけられる土器群、天平勝宝年間の紀年木簡等が、ともに井筒内の井戸底部に長期間遺棄される状態になっていたと考えられる。

天平勝宝年間紀年の木簡またはそれと併存する木簡である、第二号木簡と第七号木簡は行政事務に関わる内容となっている。第二号木簡は「勝宝五年調米」と記された「調」の付札であり、調庸の付札は原則として貢進先の最終地で荷ほどきされ、廃棄されることから、秋田城が「調」の貢進先となる国府であり、井戸が付属する鶴ノ木地区中央建物群自体が国府の官庁であったことを示唆している。調査当初はそれを基に、地区中央建物群を官衙建物、出羽権政府とする考察がなされたが（註1）、その後、城内に創建期に遡る政府が確認され、政府説は否定された。しかし、天平勝宝年間に井戸が付属する城外の鶴ノ木地区中央建物群が官衙機能を有する、また、調庸物が貢進される建物群として機能した可能性は否定できない。さらに第七号木簡は、人の貢進を示す「解」の木簡であり、同様に解の上申先となる官衙機能を有する施設であったことが考えられる。

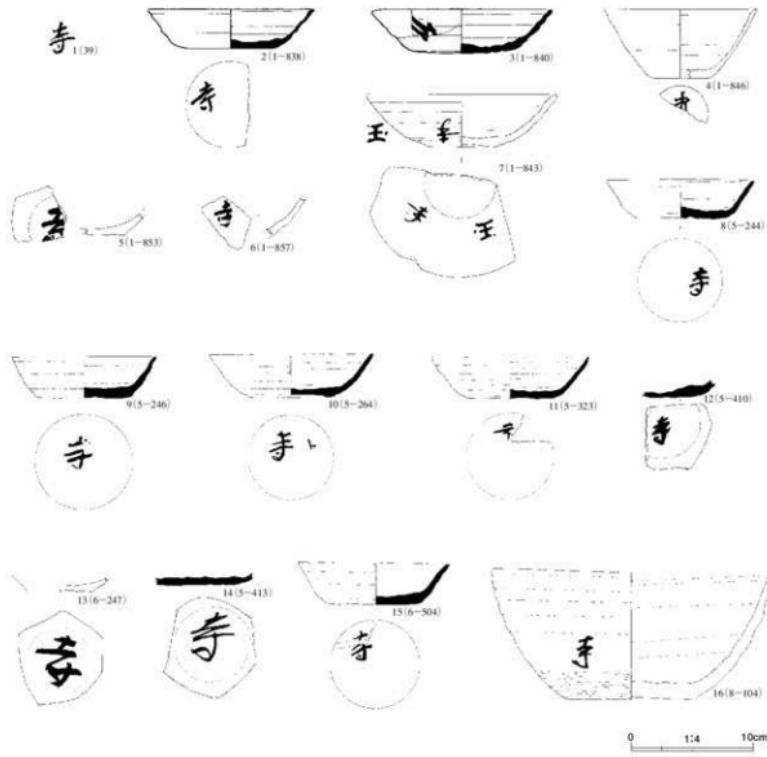
その一方で、第四号・五号木簡（同一木簡と判明）には、「天平勝宝四年」（752）の紀年銘がある。記載内容は願文と推定され、「父母二柱御為」、「眷属」や「菩薩」などの記載から、先祖などを供養する仏教儀式が行われていたことを示している。そのことは、井戸が付属する地区中央建物群が、仏教儀式を行う施設、寺院であった可能性を示唆するとともに、井戸への投棄自体が祭祀行為であった可能性もある。

これら天平勝宝年間の木簡群の記載内容は、天平勝宝年間頃、つまりII期段階の地区中央建物群が、調庸物や人員の貢進先となる官衙機能と、仏教儀式を行う寺院としての機能の双方を持っていた可能性を示唆している。このことは、I・II期が寺院であり、II期段階で新たな施設と機能が付加され、それが客館（迎賓館）機能であった可能性を示した地区中央建物群の変遷や、水洗便所や三本柱造構（笠竿施設）等の付属施設の機能や性格とも必ずしも矛盾しない。そこで、客館が果たした官衙機能が問題となるが、外交使節を含め客人をもてなす公的施設は、宿泊機能だけではなく、宿泊者の管理や物資供給のために行政官衙の機能をも有することは、筑紫の鴻臚館や全国の駅家関連遺跡を見れば明らかである。そのため、II期段階に認められる調庸物（物資）の貢進や貢進された人員が、客館の使用者に供給され、客館における労役に従事した可能性も考えられる。それらのことから、天平勝宝年間の木簡群は、複合的施設としての機能を持つII期建物群の性格を示唆する文字資料となると考えられる。

## 2) 墨書き土器について（資料編別編1の2・第174図）

鶴ノ木地区出土墨書き土器の総数は262点であるが、文字内容としては、施設名としては「寺」が16点と最も多い（第174図参照）。「寺」墨書き土器は他の城内外ではほとんど出土しておらず、地区中央部から14点が集中して出土していることと合わせ、地区中央建物群の性格に直接的に結びつくものと考えられる。

「寺」墨書き土器の器種と年代について見てみると、須恵器壺が10点、赤褐色土器壺4点、赤褐色土器鉢1点、不明1点となっている。不明1点を除き全てが9世紀以降の年代に位置づけられ、年代が明確なものでは、9世紀第2四半期が8点（第174図-2、4、7、8、9、11、12、16）、9世紀第



第174図 瀧ノ木地区出土「寺」墨書土器集成図

1四半期が2点（第174図—3、10）、9世紀第4四半期が1点となっている。

土器における施設名の墨書きは、その器の所属を示すと考えられるため、周辺から「寺」墨書き土器が集中して出土する、9世紀第1四半期から第2四半期にかけてのⅢ・Ⅳ期地区中央建物群については、寺院としての機能と性格を持つ可能性が極めて高い。特に中央建物群北側の地区中央第7層・古代整地Ⅲ層より出土した「□玉寺」については、天長7年（830）条の出羽国大地震の記事に記録のある秋田城付属寺院とされる「四天王寺」の名称に一致するものであり、建物群の寺院としての性格に加え、その名称を示唆する重要な墨書き土器となっている。8世紀代の年代を示す「寺」墨書き土器が出土していない点については、8世紀代の年代を示す墨書き土器が瀧ノ木地区全体でも262点のうち4点と極めて限られており、8世紀代の墨書き土器自体が少ないことが反映しているとも考えられる。なお、瀧ノ木地区出土「寺」墨書き土器の年代的な下限は、9世紀第4四半期となっており、その段階までは瀧ノ木地区に寺院が存在し機能した可能性が高い。

## (2) 仏教関係遺物と祭祀用小型土器について

### 1) 仏教関係遺物 (第175図・図版59)

鶴ノ木地区からは、仏教儀式での使用に関係する古代の遺物として、須恵器・赤褐色土器鉄鉢形土器、須恵器小型長頸壺、須恵器水瓶、須恵器短頸壺、須恵器小型短頸壺、土師器ミニチュア壺が出土している。また、中世の遺物としては銅製懸仏が出土している。

古代の遺物については、ほとんどが地区中央建物群付近から出土しており、遺物の年代は9世紀第1四半期から第2四半期に位置付けられるものが多く、前述した「寺」墨書き土器の出土傾向と類似する。特に鉄鉢形土器に関しては、鶴ノ木地区Ⅲ・Ⅳ期の中央建物群東側に位置する堅穴住居跡群の住居からの出土が多く、仏教儀式に伴い鉄鉢を使用する寺院との密接な関係や、僧侶が居住していた可能性が指摘される。また、その堅穴住居跡群からは前述した燈明皿の出土数も多いことから、やはり同様に寺院との密接な関係や、僧侶居住の可能性が指摘される。

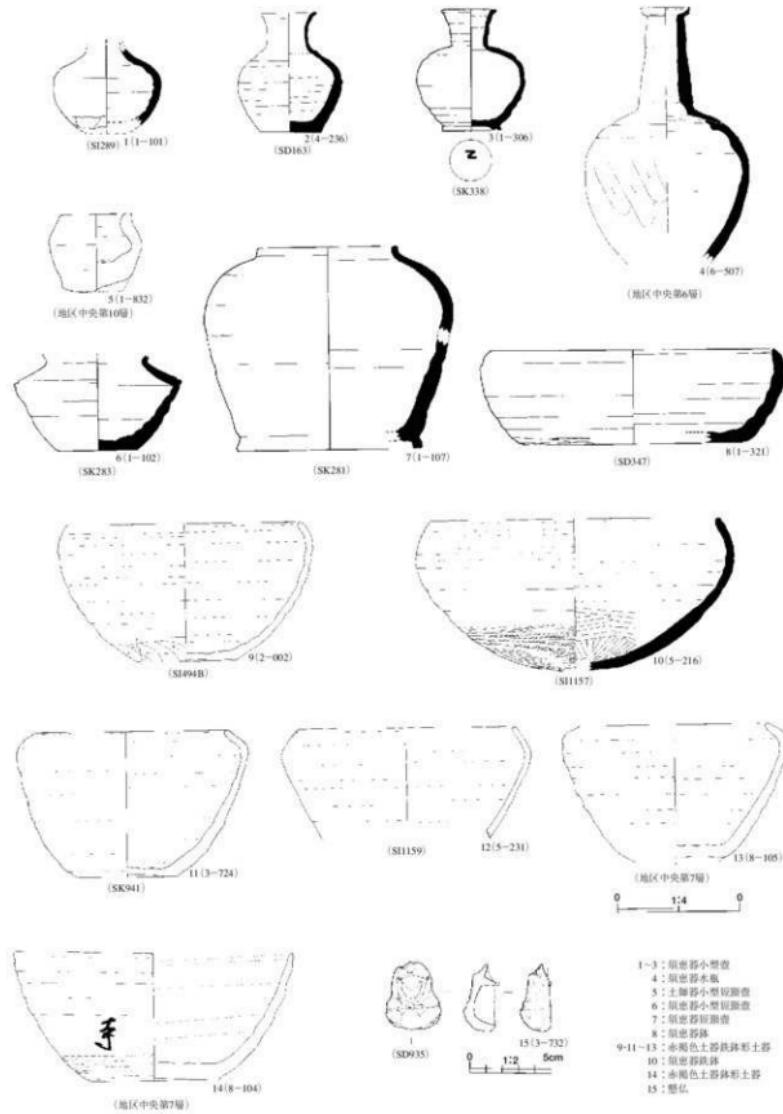
中世の懸仏については、13世紀の年代に位置づけられ、地区西部の墓壙群と合わせ、中世段階にも鶴ノ木地区に寺院が存在した可能性を示唆している。史料上においては、鶴ノ木地区とその近辺について、鎌倉時代に湊三ヶ寺といわれる妙覺寺・光明寺・大悲寺が建立されたとする記録がある（註1）。また、南北朝時代に古代城柵の附属寺院であった四天王寺の流れを汲む「秋田城古四天王寺」が存在したことを示す史料などがある（資料編別編2の1-45・46参照）。墓壙群と懸仏はそれら史料上に認められる寺内一帯と鶴ノ木地区における寺院の存在に結びつくものと考えられる。

### 2) 祭祀用小型土器 (第176図)

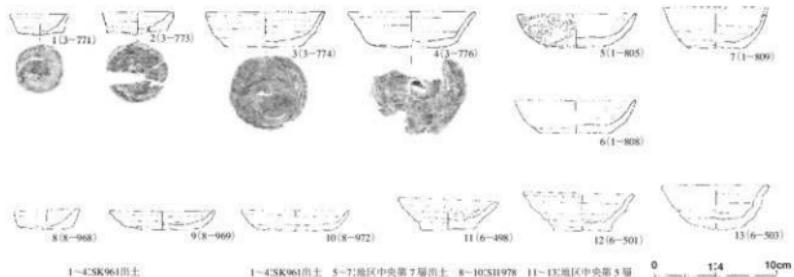
鶴ノ木地区からは、祭祀に使用されたと判断される特殊な小型土器が出土している。それらは酸化炎焼成・ロクロ成形・非内面黒色処理であり、秋田城跡の土器分類では、赤褐色土器に分類される。器形は壺形であるが、同時期の日常供膳具とは法量が明確に異なり小型であり、器形と法量について齊一性が強く、祭祀専用に製作、使用された器種と考えられる。使用目的としては、燈明皿として使用されているものが多い。また、SK824土取り穴やSI1978カマド等遺構の一括出土土器や、第26次調査SG463南岸第7層や第63次調査SG1206南西岸第5層の一括出土土器のように、祭祀行為に使用した後または祭祀行為の一環として一括廃棄されるものが大半を占める。

タイプとしては、①酸化炎焼成・底部ヘラ切りナデ調整・器形と製作技法は須恵器壺に類似し、口径に比して器高がやや高い壺形タイプで、大小2法量がある（第174図-1～4、8）、②酸化炎焼成・底部ヘラ切りナデ調整・器形と製作技法は須恵器壺に類似し、口径に比して器高が低く皿形に近いタイプ（第174図-9～10）、③酸化炎焼成・底部糸切り無調整で、体部から底部にかけて刷毛目調整・器形は須恵器壺、製作技法は赤褐色土器に類似し、口径に比して器高がやや高い壺形タイプ（第174図-5、6）、④酸化炎焼成・底部糸切り無調整・底径が縮小し、口径に比して器高がやや高い壺形タイプとやや低い皿形タイプ（第174図-11、12）がある。この他に③と④には非ロクロの手づくね土器が供伴する。また、一括出土する場合、①の小型タイプと②が供伴するなどして、大型を主体として大小のセットを構成している。

土器の年代については、①が9世紀第2四半期、②・③が9世紀第2四半期～第3四半期に位置付けられ、④は11世紀前半に位置付けられる。①～③の小型土器は、土師質の祭祀専用の小型壺としては、出羽国内で最も古い土器群として位置づけられる。④は10世紀中葉以降の赤褐色土器小型壺の系譜に位置づけられ、古代における鶴ノ木地区出土遺物の年代下限の資料となる（註2）。その段階



第175図 鶴ノ木地区出土仏教関係遺物集成図



第176図 鶴ノ木地区出土小型坏

まで祭祀行為として土器の一括廃棄が行われ、鶴ノ木地区一帯が宗教的な性格を有していたと考えられる。

これらの祭祀用小型土器は、他の城内外地区では出土しておらず、鶴ノ木地区から集中して出土しており、鶴ノ木地区における宗教的性格を強く反映している。また、燈明皿としての使用が多いことからは、仏教儀式との関連性および寺院との関連性が指摘される。

(註1)『古四王神社考』『新秋田叢書(3)』歴史図書社 1971年

(註2)伊藤武士「出羽における10・11世紀の土器様相」『北陸古代土器研究』第7号 1997年

### (3) かわらけおよび貿易陶磁器類について (第143・144図)

鶴ノ木地区における中世の出土遺物の中で特に注目されるのは、かわらけと中世前期の貿易陶磁器類である。秋田県内において一定量のかわらけと貿易陶磁器類が共伴して出土する12世紀から13世紀の遺跡は、大館市矢立庵寺跡、大森町觀音寺庵寺跡、雄勝町館堀城跡等に限られており(註1)、特に13世紀初め前後を中心とする大規模な遺跡は、県内ではほとんど確認されていない。そのような出土遺物全般の様相からも、中世の鶴ノ木・大小路地区にかけての一帯については、出羽北半部における特殊な遺跡として位置付けられる。

出羽国北部におけるかわらけの変遷を見ると、まず、12世紀後半以降、陸奥国の平泉を中心として京都より手づくり成形かわらけが導入され、從来からのロクロ成形かわらけもその影響を受けナデ技法による段を形成する皿形器形が出現するとされる(註2)。出羽北部でも同様の変化・傾向が認められ、12世紀後半には、手づくりかわらけの導入及びナデ技法を伴う皿形かわらけの出現があり、新たな大皿・小皿のセットが成立する。かわらけに白磁壺瓶類や珠洲系中世陶器を伴う矢立庵寺跡のようなわゆる典型的な平泉セットと、觀音寺庵寺のようなやや変則的な平泉セットが認められ、その導入と使用に際し直接的または間接的に平泉の影響を受けたと考えられる(註3)。鶴ノ木地区出土かわらけは、その次段階に位置付けられる。

第IV章第3節の8で述べたように、鶴ノ木地区出土のかわらけには、ロクロかわらけ(大皿・小皿)と手づくり成形のかわらけが出土しているものの、手づくりねは二段ナデの小皿1点のみで、ロクロが組成のほとんどを占めている。ロクロかわらけには、法量の大きさやナデ技法による明確な段、擂鉢

形の小皿など年代的に古い要素が認められ、12世紀末～13世紀初め頃に位置づけられる古い一群と、新たに深みのある壺形タイプや口径が縮小しナデも退化した壺形に近いタイプ、扁平化し法量の縮小した小皿類など新しい要素を示し13世紀前葉を中心に位置づけられる新しい一群がある。それらに併存する陶磁器類は青磁が主体となっている。皿形ロクロかわらけはその系譜において、平泉には製作技術の伝播等で間接的に影響を受けているものと考えられる。また、壺形タイプや壺形に近いタイプ等の新しい一群は、器形等から鎌倉の影響を受けた可能性がある（註4）。

鶴ノ木地区出土のかわらけは、組成上では手づくりねかわらけが激減し、大皿・小皿のセット関係も崩れ、ロクロかわらけの大皿・小皿のセットが組成の主体となるなど大きな変化が認められる。ロクロかわらけの新しい一群では、壺形や塊形タイプが認められ、法量は縮小傾向を示し、ナデ技法は退化し、段形成も軽くなっていく傾向が認められる。それらの新たな変化は出羽国北部全体に共通しており、併行する観音寺廬寺出土の新しい一群にも認められる。この段階のかわらけとしては、他に成形時のナデ技法がさらに退化し、法量も縮小する館堀城跡出土資料があげられ、秋田城跡よりやや新しい13世紀中葉に位置付けられる。そのように出羽北部かわらけの変遷上において、鶴ノ木地区出土かわらけは画期となる重要な資料として位置づけられる。

12世紀末以降の秋田城跡・鶴ノ木地区段階のかわらけは、12世紀後半の平泉以降の皿形の影響を残しつつその技術系譜をベースとして、簡略化と在地性を強め、新たな器形の影響を受けながら変化していったと考えられる。手づくりねかわらけが12世紀末以降減少する背景には、それを使用する目的及び意義の変化と低下、平泉政権の崩壊の影響が想定される。また、陶磁器とのセット関係で見た場合、平泉的な白磁のセット関係よりも新しい、かわらけと青磁といった鎌倉的なセット関係への変化を示していると考えられる（註5）。

なお、鶴ノ木地区出土かわらけとして第Ⅳ章第3節の8で報告したヘラ切りかわらけは、新潟県阿賀北地方の類例や地区における中世出土遺物の下限年代を考慮すれば、14世紀代に位置づけられる。祭祀目的の燈明皿として生産・使用されたものであることから、その段階でも鶴ノ木地区が宗教的性格を有していたことを示すものといえる。

鶴ノ木地区出土の貿易陶磁器としては、中国産青磁がほとんどを占める。青白磁としては合子蓋1点があり、青磁としては龍泉窯系青磁劃花文碗（I-2類、I-4類）、蓮弁文碗（I-5a類）、同安窯系柳搔文碗（I類）、皿（I類）、白磁としては口禿の白磁碗（IX類）等がある。これらは、貿易陶磁としての出現期と増加期を考慮した場合、大きくは12世紀後葉から13世紀中葉の年代幅が考えられる。東日本において龍泉窯系青磁と同安窯系青磁が共存し主体となる組成は、13世紀前後をピークとする12世紀第4四半期から13世紀第1四半期に限られており、それが鎌倉幕府による新たな支配体制の拡大に関連した鎌倉時代初期に隆盛する遺跡から出土するという指摘もある（註6）。

以上のように鶴ノ木地区出土のかわらけと貿易陶磁器類は、鎌倉時代の出羽北半部における鶴ノ木地区一帯の特殊性を示すと共に、平泉を政権の影響から、鎌倉幕府による新たな地域支配の展開という社会的背景の変化を反映していると考えられる。

（註1）秋田県教育委員会『館堀城跡』秋田県文化財調査報告書第320集 2001年

秋田県教育委員会『観音寺廬寺跡』秋田県文化財調査報告書第321集 2001年

大館市市史編さん委員会『大館市松原矢立廬寺発掘調査報告書』1973年

大館市教育委員会『大館市矢立廬寺発掘調査報告書』1987年

- (註2) 松本建速「ロクロかわらけと手づくねかわらけ」『岩手考古学』第6号 1994年  
「一二世紀代東北地方におけるかわらけ存在の意味」『中近世土器の基礎研究』X 1998年
- (註3) 八重樫忠郎「東北における中世初期陶磁器の分布」「都市・平泉—成立とその構成—」日本考古学協会  
2001年度 鎌岡大会研究発表資料集 2001年
- (註4) 伊藤武士「出羽のかわらけ（2）出羽北部—秋田県—」『中世奥羽の土器・陶磁器』東北中世考古学会  
編 高志書院
- (註5) 飯村 均「中世食器の地域性2—東北南部」『国立歴史民俗博物館研究報告第71集—中世食文化の基礎的  
的研究』 国立歴史民俗博物館 1997年
- (註6) 飯村 均・八重樫忠郎「大槻遺跡再考—遺物と遺構から—」『歴史手帳』第24巻10号 名著出版 1996年

### 第3節 鵜ノ木地区の変遷（鵜ノ木地区変遷表①～④・第158～167図・付図2参照）

鵜ノ木地区全体の変遷やその年代について、第1節における遺構期設定に伴う検出遺構の検討と、第2節における出土遺物の検討を踏まえ、遺構期ごとにまとめることとする。

鵜ノ木地区は、前述したように古代以降おおよそ6時期の変遷が把握される。各期の年代についても、前述し、示したとおり、紀年銘資料や年代比定資料により把握が可能である。

変遷上の画期としては、Ⅰ期（創建）からの地区中央建物群に新たな建物群による新たな施設を付設するⅡ期、地区中央建物群のプランを大幅に変更し全体的な改修を行うと共に、地区北部や東部の利用状況も変化したⅢ期があげられる。各遺構期の年代からは、それら鵜ノ木地区中央建物群を中心とする遺構群の変遷と画期が、秋田城の外郭区画施設や政府などの主要施設の変遷およびその画期に対応していることが把握される。またそれらの変遷と画期は、文献史料上の記事に示される事件、政治的・社会的背景や動向に関連するものとなっている。

**（縄文時代・弥生時代）** 秋田「出羽柵」創建以前に、地区中央から西部にかけて縄文時代と弥生時代に生活域が存在する。地区中央北西側から地区西部にかけては、縄文中期末から後期初頭に位置づけられるSI834・SI835堅穴住居やSK836・SK837土坑、SK966Tピット、住居の可能性があるSX650等が認められ、居住域として利用されている。また弥生時代中期に位置づけられるSK424・SK425・SK426・SK542土坑が、地区中央東寄りに存在することから、周囲に生活域があったと考えられる。遺構外出土遺物もこの2時期に該当するものが多い。

**（I期）** 地区中央の丘陵上に建物群が造営される。地区北部には利用規制が存在し、外郭東門から伸びる城外東大路が存在したと考えられる。その他に地区中央東側の一画が居住域として利用される以外は、東部・西部は全く利用されていない。

地区中央では造営直前に存在したSI004・SI404堅穴住居跡を埋め立て丘陵部に整地を行い、規則的配置に基づく地区中央建物群を建設する。主要建物として大型の南北廂建物であるSB006・SB018掘立柱建物を南北掘立柱に列をなすよう配置し、その2棟の南北軸線を中心として、東西対称に総柱建物で西廂のSB485・東廂のSB021B総柱掘立柱建物を配置する。その主要建物周辺に付属建物として北にSB397、南西にSB962A・B掘立柱建物を配置する。区画施設として建物間にSA503・SD

(A) 970柱列壙跡を設置するが、独立した丘陵上に位置するためか、建物群全体を囲む区画施設は確認されない。また、建物群に付属する井戸としてSE406井戸がSB006建物の北東に設けられる。

これらの建物群や区画施設の方位は、南北ではほぼ真北を示す方向から、西に約4度振れる方向となる。北で約3度西に振れる南北軸線を基に、大きさは27m（1/4町）を基本単位とする配置計画を基に建物が配置されていると考えられる。建物群はさらに南側に広がると判断されるが、SB018掘立柱建物跡より南側は土取りにより大きく削平されており、実態が不明となっている。

建物群の創建時期、Ⅰ期の開始の年代根拠としては、SE406井戸底部から「天平六年月」の釘書き木簡が出土している。天平6年（734）は、『続日本紀』の天平5年（733）条の出羽櫛の秋田村高清水岡への移遷（資料編別編2の2-8）の翌年にあたることから、井戸が付属する建物群の開始は、天平5年の秋田「出羽櫛」創建時まで遡ることが把握される。Ⅰ期の終わりは、SB1351水洗便所遺構をはじめとするⅡ期建物群の年代から、8世紀の第3四半期頃となり、想定年代としては、秋田「出羽櫛」から「阿支太城」として初見される「秋田城」への改称と改修がなされた天平宝字年間の西暦760年頃が考えられる。

建物群の性格については、建物配置が寺院の伽藍配置と解釈されることと、次段階における仏教祭祀に伴う木簡出土や仏教儀式に使用する憧竿支柱の存在から、寺院となる可能性が高い。後述する史料には平安期に秋田城の付属寺院として四天王寺が存在したことが知られており、城外東側に隣接する鶴ノ木地区に秋田「出羽櫛」創建当初より、付属寺院が存在した可能性が高い。

(Ⅱ期) 地区中央建物群については前期からの主要建物がほぼ同位置で建て替えられ、その配置と機能は維持される。一方でその周辺と中央東側に新たに多数の建物が配置され、全期を通じて最も建物群が拡大し充実する。前期に引き続き地区北部には城外東大路が存在したと考えられる。地区西部は全く利用されず、地区東部の一画が居住域として利用される以外は、地区中央に機能が集中する。

建て替えられた主要建物のうち、南北建物列北側のSB395掘立柱建物は南北の廟がなくなり、間仕切りを伴うようになる。南側のSB484建物、東西対称の総柱建物である東側のSB019建物と、西側のSB021A建物には構造上変化がない。北北東側のSB396建物は総柱建物となる。主要建物周辺に新たに付属する小型建物5棟については、SB491建物が東西棟である以外は、SB399・SB429・SB398・SB490建物が全て方形の倉庫風の建物プランを持つという特徴がある。建物群付属の井戸としてSE406井戸が引き続き機能する。主要建物の西側と南西側には、3本柱からなる憧竿支柱が新たに付設される。

主要建物の東側に新たに東西棟3棟と南北棟1棟の大型建物、東西棟1棟と南北棟1棟の小型建物からなる建物群が配置される。さらにSB1129A・SB1147建物が南北に建物列をなす北側、主要建物からは北東側に、SG1206沿地岸辺を造成し、建物群に対するSA1352目隠し塀を伴うSB1351水洗便所が建築される。

これら新たに配置された建物群と建て替えられた主要建物の建物方位は、北で西に約3~4度振れる方向となる。北で約4度西に振れる南北軸線を基に、大きさは27m（1/4町）を基本単位とする配置計画を基に建物が配置されていると考えられる。また、建て替えられた主要建物は、柱痕跡への焼土・炭化物混入などから、火災により焼失したと判断され、東側建物などの新設建物の多くも同様に火災により焼失した可能性が高い。

なお、Ⅱ期のある段階から、東側建物群に建物方位が北で東に約1~6度振れる方向となるSB

1308・SB1146建物が追加、建て替えとして配置される。また、SE406井戸館の建物がこの段階で新たに付設されると考えられる。そのため、II期建物群には変遷上2小期が存在することとなる。

以上のようにII期においては、I期の主要施設の一部を改修し付属施設を加え充実を図るとともに、新たに東側に建物群を増設・配置し、建物群全体に新たな機能を付加したことが理解される。

建物群の性格については、中央西寄りの主要建物については、前段階からの配置が維持されることと、建物群に付属するSE406井戸から当該期の天平勝宝年間における仏教祭祀に伴う木簡が出土することや、仏教儀式に使用する憧竿支柱の新設などから、引き続き寺院として機能した可能性が高い。付近の付属建物は物資の管理機能、一部改修は居住性を付加したものと考えられる。新たに増設した東側建物群については、SE406井戸から当該期の天平勝宝年間における物資や人の貢進を示す木簡が出土することや、特異かつ優れた構造のSB1351水洗便所を渤海使節などの大陸からの来訪者が使用した可能性が指摘されることから、官衙機能を持った客館（迎賓館施設）として、新たに付設されたと考えられる。それらのことから、II期においては、従来の寺院としての機能に客館機能を付加した、寺院兼客館としての性格が指摘される。

II期の開始は、SB1351便所遺構木樁の年輪年代測定による西暦756年以降の伐採年代や、便槽内出土土器の年代から、8世紀の第3四半期頃となる。終わりはSA1352目隠し堀材抜き取り出土土器やIII期造営に伴う古代整地II層出土土器の年代から、8世紀末から9世紀初頭に位置付けられる。その開始は、秋田「出羽櫛」から「阿支太城」として初見される「秋田城」への改称と改修がなされた天平宝字年間の西暦760年頃が考えられ（資料編別編2の2-12）、政府・外郭II期の改修に対応すると考えられる。終わりは「日本後紀」延暦23年（804）条に見える秋田城停廃問題が起きた頃と考えられる（資料編別編2の2-20）。

なお、II期建物は火災により焼失し、廃絶していると判断されるが、秋田城の建物火災についての文献史料上の記録は、元慶2年の元慶の乱時以外は見あたらない。しかし、政庁調査や焼山地区建物群の調査では同時期の建物が火災により焼失しており、秋田城全城に火災が及んだ可能性が指摘される。今後火災の背景も含めた検討が必要である。

**(III期)** 地区中央建物群全体の基本プランが大きく変更され、建物の構成・配置・方位等が変わる。建物群の中心が地区中央西寄りから地区中央東寄りに移動し、四面庇堂風の仏堂と推定されるSB488掘立柱建物を中心とする配置に変わり、寺院としての機能に集約される。建物群の東、地区中央東側には比較的大型の堅穴住居による居住域が形成される。地区北部には城外東大路の南側を区画する東西方向の区画施設が設置され、大路北側やSG1206沼地跡北岸部は居住域として利用が始まる。SG1206沼地東岸の地区東部には堅穴住居や工房跡が営まれ、居住域や生産施設として利用が本格化する。地区西部には小規模建物が建てられるが利用は限られる。この段階になり、地区全域に利用区域が広がっていく。

地区中央建物群は、四面庇堂風で仏堂と推定されるSB488掘立柱建物を中心として、その北側に南廂建物のSB258掘立柱建物やそれに並列するSB262掘立柱建物を配置する。SB488掘立柱建物の北東側にSB1968・SB1967掘立柱建物と、南東側にSB1130掘立柱建物が規則的に配置される。それら主要建物が位置する中央部より南半は土取りにより削平されており、全体の建物配置等は不明となっている。建物群に付属する井戸として、建物群東端部に新たに井戸館を伴うSE1176井戸が設けられる。

依然として建物群全体を囲む区画施設はないが、主要建物間を区画する SA502柱列塀や、主要建物とその東側の堅穴住居群を区画する SA1179・SA1182一本柱列塀が設置される。

これら建物群や区画施設の方位は、さらに西に振れるようになり、南北方向柱筋が北で西に約6～11度振れる方向となる。北で約11度西に振れる南北軸線を基に、前期に引き継ぎ、大きさは27m(1/4町)を基本単位として、計画的に配置されていると考えられる。

中央建物群東側には、比較的大型の SI1135～SI1138ABCD・SI1153～SI1156・SI1160～SI1162・SI1164・SI1130～SI1132堅穴住居が営まれ居住域として利用される。住居からは燈明皿や鉄鉢形土器が出土しており、寺院に關係する僧侶が居住していた可能性が高い。その他に小型の SB1133建物とSB1134建物が位置するが、建物方位が主要建物とやや異なり、住居群とともに主要建物に先立ち構築された可能性がある。住居の重複や住居や建物の方位の幅から、2小時間以上に区分されると考えられる。

主要建物の西側には小規模建物として、SB486・SB492・SB795掘立柱建物が散在するが、西側までの全体が建物群として機能的にまとまりをもつものかは検討を要する。

また、地区北西部の SG463沼地北岸は、Ⅲ期当初より水辺祭祀の場として使用され始める。

地区北部では、幅を縮小したと考えられる城外東大路の南側を、東西方向に区画する SA1332～SA1334一本柱列塀や SA1489材木列塀などの区画施設が設置される。大路周辺の利用規制が弱まり、大路北側の SI1131・SI1132堅穴住居跡や、SG1206沼地北岸部の SB1467掘立柱建物、SE1502井戸等が設けられ居住域として利用が始まる。地区東部 SG1206沼地東岸部では、精鍊鍛冶を行った SI167堅穴状工房や、SI1678堅穴住居が営まれ、SA1489材木列塀が設けられるなど、生産区域や居住域としての利用が活発となり、鶴ノ木地区全体に生活域が広がっていく傾向が把握される。

地区的中心施設である中央建物群Ⅲ期段階における、東側建物群の消滅と堂廻建物を中心とする建物群への集約は、秋田城の外交施設としての役割が変化したことにより、客館(迎賓館施設)を要しなくなり、一堂形態の寺院へ機能が変化、集約したためと考えられる。中央建物群北側のⅣ期造営に伴う地区中央第7層・古代整地Ⅲ層より出土した「□玉寺」墨書き器は、天長7年条の出羽国大地震の記事に秋田城付属寺院として記録のある「四天王寺」の名称に一致するものであり、Ⅲ期以前の建物群の寺院としての性格を裏付けるものといえる。

Ⅲ期の開始は、前期の SB1308掘立柱建物柱抜き取り覆土出土土器、Ⅲ期造営に伴う古代整地Ⅱ層出土土器、中央東側の堅穴住居出土土器等の年代から、8世紀末から9世紀初頭に位置付けられる。終わりは次期の SB487掘立柱建物柱掘り方出土土器や次期住居群出土土器の年代等から、9世紀第2四半期頃に位置付けられる。その開始は、外郭区画施設や政府など城内主要施設の大改修が行われた外郭・政府第Ⅲ期の開始、8世紀末から9世紀初頭の大改修に対応すると考えられる。終わりは、「類聚国史」天長7年(830)条に見える天長大地震によるものと考えられ(資料編別編2の2-21)、その地震により倒壊した「四天王寺」にⅢ期建物が該当するものと考えられる。

(IV期) 地区中央建物群は、仏堂である四面庇堂廻建物を中心とする基本プランが踏襲される。中心建物である SB487建物を中心として、一帯が柱列塀の区画施設により方形のプランで区画されるようになる。この段階になり、区画施設により寺域が明確化する。建物群の建物数は減少し、中央西寄りには建物が配置されなくなり、中央東寄りに建物が集約される。区画施設の外側周辺には小型の堅穴住居からなる寺院に關係する居住域が形成される。地区北部は城外東大路の南北両側および SG

1206沼地北岸部の居住域として利用がさらに活発となる。地区東部も、居住域としての利用が継続する。地区北西部から西部、地区中央北側にはこの時期多数の土取り穴が掘り込まれ、地区中央東側を中心に周辺で大規模な造成が行われる。

地区北西部の SG463沼地北西岸は、「祓所」として本格的に造成・整備される。また、外郭東門より北西岸に至る道路も整備される。鶴ノ木地区における宗教的性格がもっとも強まる時期となる。

地区中央建物群は、仏堂である四面庇堂風の SB487掘立柱建物が、前段階の SB488掘立柱建物より、やや北に位置をずらして建て替えられる。その北側には SB263建物を配置する。SB487建物を中心として西辺が SA500・SA501柱列塀、北辺が SA407・SD(A) 262・SA1972柱列塀、東辺が SA1142柱列塀により区画される。SA1142の中央部は東辺の出入り口となる可能性が高い。それら主要建物と区画施設の南半部はやはり土取りにより削平され、全体の配置等は不明となっている。また、東辺区画施設の区画外に隣接するように小型の SB1134建物と SB1131建物が位置している。区画内の北西に SI402堅穴住居、西に SI495堅穴住居が配置されており、寺院の施設として機能していたと考えられる。なお、建物群と区画施設の改修直前には、建物群北東側に仮設住居として SI1177堅穴住居が、改修に伴う臨時の鍛冶工房として SI1176堅穴状工房が営まれる。

これら建物群と区画施設の方位はさらに西に振れるようになり、南北方向柱筋が北で西に約13~15度振れる方向となる。北で約14度西に振れる南北軸線を基に一定の配置計画が存在するが、全体に規則性が緩む傾向が指摘される。

中央建物群区画施設外の東側には小型の SI1157~SI1159・SI1163堅穴住居からなる居住域が前期に引き続き形成される。区画施設外北側と西側にも新たに小型の SI400・SI401・SI403・SI493・SI494AB 堅穴住居からなる居住域が形成される。これらの住居からも燈明皿や鉄鉢形土器が出土しており、寺院に関係する僧侶が居住していた可能性が高い。建物群や居住域に付属する井戸である SE1176に加え地区北西側に新たに SE463井戸が設けられる。

地区西側の沢状地形など地山粘土の採掘に適した周辺部から、大規模な土取りがなされる。地区中央西寄りに SK512~SK540土取り穴が、地区中央北西側から地区西部にかけて SK417~SK420・SK450~SK460・SK611~SK613・SK645・SK651・SK825~SK833・SK937~SK946・SK948等の土取り穴が掘り込まれた。地区中央北側には SK277~SK289土取り穴が、地区 SK332・SK336~SK345土取り穴が掘り込まれる。IV期復興造営に伴う大規模な造成が、地区中央東側を中心に行われることに伴い、IV期当初段階に土取り穴群が掘り込まれ、造成土として供給されたと考えられる。

地区北西部の SG463沼地北西岸は、水辺で「祓」の祭祀を執り行う「祓所」として SX741張り出し部等が造成・整備され、人面墨書き土器や人形、斎串等を用いて祭祀が行われる。また、外郭東門より北西岸に至る SX1350道路も整備される。

地区北部は、城外東大路の南北両側および SG1206沼地北岸部に SI1321・SI1324・SI1327~SI1330・SI1468・SI1469堅穴住居や SE1473・SE1474井戸が営まれ、居住域としてさらに活発に利用される。

地区東部には SG1206沼地東岸に SI16961堅穴住居や SX1701木道が作られ、居住域としての利用が継続する。

地区中央建物群の東辺区画施設と思われる SA1973柱列塀と南辺区画溝と思われる SD162・SD163溝は、北で西に16~24度大きく振れる方向を示しており、IV期当初からの区画施設よりは新しく、IV期後半以降またはV期以降に属する可能性が高い。その存在からは、寺院仏堂を維持しつつ区画施設の方位を変更した可能性と、新たな仏堂とプランの基に南半の削平部分を中心にV期以降寺院が存在

した可能性が考えられる。削平により実態把握が困難となっているが、V期以降の年代に位置づけられる「寺」墨書き土器の出土や、11世紀代や中世段階にも地区の宗教的性格が認められることから、V期以降にも周辺を含め鶴ノ木地区に寺院が存続した可能性は高いと考えられる。

V期の開始は、SB487掘立柱建物柱掘り方出土土器、IV期住居群出土土器、IV期造営に伴う古代整地Ⅲ層出土土器等の年代から、9世紀第2四半期に位置付けられる。終わりは、方位より次期のV期に属すると判断されるSI496・SI498堅穴住出土土器、地区北部ではV期造営に伴う第9層（元慶の乱に伴う焼土炭化物層）出土土器等の年代から、9世紀第4四半期に位置付けられる。その開始については、「類聚国史」天長7年（830）条の天長大地震（資料編別編2の2-21）に伴う被害の復興によるものであり、政府第IV期の開始に対応すると考えられる。地区中央の古代整地Ⅲ層からは、瓦および壇の破片出土が多く認められており、震災復興に伴う整地層であることを裏付けるものと考えられる。その終わりについては、「日本三代実録」元慶2年（878）条に記事のある元慶の乱に際する秋田城主要施設の焼失によるものと考えられ（資料編別編2の2-29）、政府IV期・外郭Ⅲ期の終末に対応すると考えられる。

（V期） 地区中央では、建物や区画施設が確認されなくなるが、削平により不明となっている前期建物群の南半部または周辺に寺院建物が存続した可能性を残す。地区全体でも遺構数が減少し、地区北部と中央の一部を除き利用されなくなる。地区中央を中心とした鶴ノ木地区の利用状況が大きく変化する。地区中央西寄りのわずかな部分が居住域として利用され、地区北部は城外東大路の南北両側およびSG1206沼地北岸部が引き続ぎ居住域として利用される。

地区中央西寄りには小型のSI496～SI498堅穴住居が営まれる。SG463沼地北西岸はこの時期も、水辺祭祀の場として利用される。また、南西岸にも堅穴造構が作られ、利用される。地区北部は、全体的に第9層による整地がなされた後、城外東大路の南北両側にSI1322・SI1325・SI1325住居が営まれ、SG1206沼地北岸には建物を主体とし、SB1465・SB1466・SB1468掘立柱建物と柱列塀からなる居住域が形成される。これらの建物や住居の方位にはややばらつきがあり、地区全体または各部ごとの方位規制が緩む。地区各所に小さな規模でまとまりを持つ居住域が形成される傾向がある。

また、地区中央北側にはSK329・SK331土取り穴が掘り込まれる。

V期の開始は、地区北部のV期利用に伴う第9層（元慶の乱に伴う焼土炭化物層）出土土器、地区北部と地区中央の住居跡出土土器等の年代から、9世紀第4四半期に位置付けられる。終わりは明確ではないが、地区北部における部分的整地層である第7層出土土器の年代より、10世紀前半頃と考えられる。それ以降古代の明確な遺構は検出されないが、SG1206沼地南西岸の第6層の土器一括廃棄が見られるように、宗教的性格を持ち続けながら、地区南半から西部にかけての削平による不明部分などが、利用されていた可能性がある。V期の開始については、「日本三代実録」元慶2年（878）条に記事のある元慶の乱に伴う被害の復興によるものと考えられ、政府第V期・外郭IV期の開始に対応すると考えられる。地区北部のV期利用に伴う第9層には、多量の焼土炭化物が混入しており、火災後復興に伴う整地層であることを裏付けるものと考えられる。その終わりについては、遺構数の少なさや、継続期間の短さから推定すると、10世紀前半代、政府VI期のうちに収まるものと考えられる。

（VI期） 鶴ノ木地区では、10世紀後半以降に明確な遺構は検出されなくなり、平安時代後半の実態や利用状況は不明確となる。これは、古代の秋田城全城に共通している。

その後、中世前期の12世紀末頃から沼地周辺に大規模な埋め立て整地を行い、再び利用が活発化する。地区中央東側の SG1206 沼地南岸付近、地区中央北側から北西側にかけての SG463 沼地南岸付近、地区西部、地区北部の SG1206 沼地北岸付近等で整地事業が行われ、その付近を中心複数棟の総柱式掘立柱建物と井戸のセットで構成される居住域が形成される。地区中央東側には焼土遺構もまとまって検出されており、工房等の生産施設としての機能も付加されていたと考えられる。地区中央北西側から地区西部にかけては、居住域より後に墓壙群による墓域として利用される。中世段階を通じ地区全体として、居住域および生産域や宗教域からなる複合的な利用状況を示している。

中世の建物と井戸は、検出位置や建物方位にまとまりを持ち、建物ごとに井戸を持ち、井戸は短期間で作り替えられていたと考えられる。地区中央東側の SG1206 沼地南岸付近には、SB1150～SB1152 総柱掘立柱建物が建てられ、SE1166～SE1169・SE1172～SE1174・SE1177・SE1178 井戸が伴う。また、SX1202～SX1205 焼土遺構を伴い、火を用いた何らかの生産・加工が行われていたと考えられる。地区中央北側から北西側にかけての SG463 沼地跡南岸付近には、SB266・SB268・SB427 総柱掘立柱建物に SE269・SE267・SE431 井戸が伴い、SB428 掘立柱建物に SE430・SE432 井戸と SI609・SI610 堅穴遺構が伴う。地区西部では SB924・SB925・SB926・SB927 総柱掘立柱建物に SE928・SE929 井戸が伴う。また、地区中央には単独で SB264 が位置している。地区北部の SG1206 沼地跡北岸付近には SE1471・SE1472・SE1500・SE1501 井戸が営まれる。その他に、建物周辺に小ピットが多数検出されており、存在した本来の建物数は更に増えるものと判断される。

これらの各居住域の建物と井戸は、同時期に位置づけられる整地層面検出であり、大きな時期はないが、建物重複から、少なくとも 3 時期以上の小期変遷があると考えられる。なお、整地層内や井戸からは、珠洲系中世陶器、かわらけや貿易陶器等が出土している。

地区西部の浅い谷状地形では、土取り穴群の凹みを整地した中世整地層面や整地層が流れ込んだ凹みに、ST627～ST635・ST653・ST656 墓壙からなる墓域と、ST808～ST813・ST838～ST840 墓壙からなる墓域が形成される。墓壙の年代については、検出層位からは12世紀末以降となるが、継続期間は明確ではない。副葬品に洪武通宝や永楽通宝が混じることから、15世紀以降に位置づけられる可能性もある。また、地区西部には SD801・SD921～SD933・SD969 溝等により囲まれる一画があり、近接する溝から13世紀代に位置づけられる懸仏が出土しており、周辺を含め何らかの宗教施設の存在が推定される。鶴ノ本地區と寺内一帯については、史料上に、鎌倉時代に妙覚寺・光明寺・大悲寺の湊 3ヶ寺が建立された記録、南北朝時代における秋田城古四天王寺の記録があり、墓壙群と懸仏はそれら史料上に認められる寺院の存在に結びつくものといえる。

地区における、居住域及び生産域や宗教域からなる複合的な利用状況についても、寺院と関連を持つ、寺院周辺の居住及び生産区域であった可能性が指摘される。

VI期の開始は、VI期利用に伴う中世整地層および井戸出土の陶磁器やかわらけの年代から、12世紀末頃に位置づけられる。終わりは明確ではないが、建物や井戸からなる居住域については、陶磁器の下限から14世紀代と考えられる。墓域の終末はそれより下ると考えられる。V期の開始については、秋田地方における鎌倉幕府による新たな支配体制拡大期に対応すると考えられる。その終わりについては、南北朝時代における地域支配体制の変化が関係している可能性がある。

## 第4節 鶴ノ木地区の機能と性格

### 1 古代における鶴ノ木地区の機能と性格

鶴ノ木地区は秋田城跡の城外南東側に隣接し、その中心施設である地区中央建物群は、秋田「出羽櫓」としての創建以降、秋田城主要施設と併行して機能している。城に近接する位置関係や出土遺物の様相と合わせ、地区中央建物群については秋田城、つまり城柵官衙の付属施設としての機能と性格が理解される。また、地区における居住域や SG463北西岸の祓所をはじめとする祭祀遺構群についても、秋田城に直接関係し、機能したものと判断される。

城柵付属施設である鶴ノ木地区中央建物群については、国営調査で寺院とする見解が示され、本報告における秋田市教育委員会による調査成果の検討と考察においても、寺院を基本とする機能・性格が把握された。地区全体で古代から中世にかけて大きく6時期にわたる変遷を把握した上で、中央建物群については4時期の変遷を把握した。奈良時代、8世紀第2四半期から8世紀末に該当するⅠ・Ⅱ期については、寺院としての機能・性格を持つ可能性が高く、平安時代前期、8世紀末から9世紀第3四半期に該当するⅢ・Ⅳ期については、寺院としての機能・性格がより明確化するという変遷が把握された。

また新たに、時期により機能・性格に変化が認められることも把握され、Ⅱ期では、客館（迎賓館）としての機能が付加され、寺院兼客館となる可能性が高いことと、Ⅲ期には建物配置や方位などの基本プランが変更され、寺院としての機能に再び集約されることを提示した。中央建物群には從来から官衙説が存在したが、天平勝宝年間の出土木簡等に示された官衙の要素を否定することなく、官衙的機能も持つ客館としての機能・性格の付加、施設における複合性という新たな観点を提示したこととなる。

中央建物群の他に鶴ノ木地区の機能と性格を示す遺構としては、SG463北西岸祭祀遺構の「祓所」や土器一括廐棄遺構等があげられ、城内外を通じ最も祭祀遺構が多い、祭祀の場としての宗教的性格が指摘される。

#### 1) 寺院としての機能・性格の背景

城柵付属施設と理解される鶴ノ木地区における寺院としての機能・性格は、城柵付属寺院として理解されるものである。律令期の地方官衙には寺院が付属している場合が多く、鎮護国家思想のもと、律令国家の安寧を祈願し、官衙の活動に伴う仏教行事を執り行った。

東北の古代城柵官衙にも、陸奥国側では仙台市郡山遺跡に郡山庵寺、多賀城市多賀城跡に多賀城庵寺、大崎市名生館官衙遺跡に伏見庵寺等の付属寺院が存在している（註1）。秋田城については、史料上に「四天王寺」の名称と存在が記録されており、史料からも付属寺院の存在が明らかとなっている。『類聚国史』天長7年（830）正月二十八日癸卯条には、「今日辰刻、大地震動、響如雷霆。登時城塙官舍并四天王寺丈六仏像、四王堂舎等、悉皆顛倒。」と記され（資料編別編2の2-21）、地震により「四天王寺」と「四王堂舎」が倒壊したことがわかる。四天王は仏国土の四方を守護する四神であり、律令国家の北辺に位置する秋田城に鎮護国家の仏神として四天王を祭り、四天王法が執り行われたことが想定され、その四天王信仰により秋田城付属寺院に「四天王寺」の名称が用いられたと考えられる（註2）。また、天平13年（741）の聖武天皇による国分寺および国分尼寺造立の詔勅により、全国に造立された国分寺の正式名称は「金光明四天王護國之寺」であり、奈良時代に出羽国府が置か

れた秋田「出羽柵」に付属する寺院が、天平宝字年間における秋田城への改称・改修段階で、その名称を用いた可能性もある。

秋田城の付属寺院である「四天王寺」に比定される遺構群は、現在までの調査では鶴ノ木地区以外では確認されておらず、建物配置、櫓竿支柱の存在、仏教祭祀木簡や「寺」墨書き土器等の出土文字資料、鉄鉢形土器や燈明皿等出土遺物の様相等から、寺院と判断される鶴ノ木地区中央建物群が、それに比定されると判断される。特に中央建物群北側のⅣ期造営に伴う地区中央第7層・古代整地Ⅲ層より出土した「□玉寺」墨書き土器は、「四天王寺」の名称に一致するものであり、Ⅲ期以前の建物群が付属寺院「四天王寺」であることを示唆するものといえる。

## 2) 客館としての機能・性格の背景

城柵付属施設と理解される鶴ノ木地区における客館としての機能・性格は、最北の城柵である秋田「出羽柵」・秋田城に地域的要因・政治的背景により付加された外交・交流施設としての機能と役割に基づくものとして理解される。

古代日本海側の城柵は、その擬定地を含め海岸沿いに点的に北進する傾向があり、地域性としてより広域かつ北方の蝦夷からの朝貢や蝦夷への賄給・斥候などの役割が重視されていた。秋田「出羽柵」創建前の渡島津輕津司の存在にもそれは示されている（資料編別編2の2-5）。

それに加え、律令国家は中国大陆東北部の渤海国と外交を行っており、8世紀代には神亀4年（727）の第一回使以降、6回も日本海側の出羽国域（「蝦夷地」を含む）に来着していることが史料から把握される。また第一回使は蝦夷地に漂着し、成員の一部を蝦夷に殺害されている（資料編別編2の1参照）。天平5年（733）の秋田への出羽柵移遷は、山形県庄内地方より100km以上大きく北進して行われたと判断される。その北進の背景には、当時渤海使の来航があった出羽國の北に国府を伴う城柵、中央政府に直結した枢要施設を大きく北進させ、直接的に渤海使や北方民族への対応にあたる外交施設としての役割も担わせたとする説が示されている（註3）。いずれにせよ、外国使節に対する初期の対応は、来着地の国府が行うのが通例であり、奈良時代に出羽國府が存在した可能性が高く、最北の城柵であった秋田城は、来着した渤海使節の対応を行った可能性が極めて高いと判断される。

秋田城は、それら律令国家域の最北に位置するという地域的要因、律令国家の北方支配政策・外交政策上の必要性から外交施設としての機能が付加されたと考えられ、使節団を収容する客館を必要としたと考えられる。鶴ノ木地区Ⅱ期の中央建物群には、寺院に増設された建物群や大陸からの来訪者が使用した可能性が高い特異な構造を持つ水洗便所、調庸物や人員が貢進されたことを示す木簡等から、その客館施設に比定される可能性が高い。また、Ⅰ期の創建期についても、古代において寺院が本来客館としての機能を果たしていたことを踏まえた場合、当初からその機能が付加されていた可能性が指摘される。Ⅱ期段階における本格的な施設整備と充実の背景には、当時の外交政策が反映している可能性がある（註4）。

城外南東側に客館が存在する段階における城の構造等を見た場合、鶴ノ木地区から城内への出入り口となる外郭東門から政庁に至る城内東西道路（東大路）は、秋田「出羽柵」創建期段階からほぼ直線となる配置とプランを取ることが把握されている。一方で、外郭西門とそれに至る城内道路は東西対象の位置には存在せず、地形に応じた変則的な配置を取っていると推定される。城の基本構造においても、創建当初より城外東側、鶴ノ木地区からのアプローチと視覚効果の重視が指摘され、創建

段階から鶴ノ木地区の城外付属施設も含めた全体的な基本計画に基づき城の構造・配置が決められていた可能性も指摘される（註5）。

### 3) 祭祀の場としての宗教的性格の背景

鶴ノ木地区におけるSG463北西岸祭祀遺構や土器一括廃棄遺構等の多数の祭祀遺構は、鶴ノ木地区が秋田城における祭祀場としての性格を持っていたことを示している。

城柵遺跡及び官衙関連遺跡では、施設内の一画またはそれに隣接する水辺、小河川や湿地、溝跡等が木製祭祀具を用いた水辺祭祀の場として選定・利用されている。秋田城については、城外南東側に隣接し、沼地の水辺が存在する鶴ノ木地区を祭祀場として選定・利用したと考えられる。

大規模な城柵や国府は専用に祭祀の場を設けていたと考えられ、出羽北部には、前述した厨川谷地遺跡のように城柵遺跡に近接する湧水地周辺を専用の祭祀場としている類例もある。SG463北西岸における本格的な「祓所」としての整備もそれに該当すると考えられる。その契機には天長の大地震が関係し、9世紀中葉段階に天災に伴い地鎮や除災を目的として「祓」祭祀が盛行するという出羽国における祭祀の地域的特徴に結びつくと考えられる。

また、9世紀から11世紀前半にかけて土器一括廃棄のほとんどが沼地岸辺で行われていることからは、鶴ノ木地区の水辺が祭祀の場として継続して利用されたことがわかる。

鶴ノ木地区は、寺院の存在も含めて、秋田城に付属する祭祀場としての機能、宗教的な性格を持つ地区として位置づけられるといえる。

以上のように、古代の鶴ノ木地区においては、寺院、客館、祭祀場としての機能と性格が把握された。それらは、律令国家の鎮護国家思想に基づく辺境における仏教政策や、律令国家の外交政策、地方官衙における祭祀・宗教政策等を反映するものと考えられる。それらは、城柵の基本的機能である行政・軍事・蝦夷への賚給・斥候以外に、地域的要因や政治的背景により付加された秋田城における特徴的な機能であるともいえる。そのことは、それら付加された特徴的な機能と性格を、城外における主要付属施設である鶴ノ木地区に担わせ、周辺施設も含めた形で複合的に機能させるという古代城柵のあり方を示していると考えられる。

（註1）三舟隆之『古代城柵と附属寺院』『歴史手帳』第12巻5号 名著出版 1984年

（註2）三上喜孝『古代辺境国と四天王法』『山形大学歴史・地理・人類学論集』第5号 2004年

鐘ヶ江宏之『秋田城の景観』『秋田市史通史編』第6章第2節二の3 2005年

（註3）新野直吉『古代日本と北の海みち』 高科書店 1994年

新野直吉『古代東北と渤海使』 歴史春秋社 1994年

（註4）新野直吉『古代日本と北の海みち』 高科書店 1994年

恵美押勝政権下における積極的な対渤海外交政策が背景に存在する可能性がある

（註5）秋田市教育委員会『秋田城跡』秋田城跡調査事務所年報2006 2007年

## 2 中世における鶴ノ木地区の機能と性格

鶴ノ木地区には、12世紀末から13世紀中葉を中心として14世紀までの年代に位置づけられる中世遺構群が検出されている。地区中央と北部は総柱式掘立柱建物と井戸からなる居住域が主体で、一部に焼土遺構を伴う。また、地区西側は墓塚群よりなる墓域として利用される。地区全体として、居住

域及び生産域と宗教域からなる複合的な利用状況を示している。

史料上では中世前期に鶴ノ木地区を含む寺内地区に古四天王寺や湊三カ寺といった寺院が存在した記録があり、墓壙群の存在や懸仏の出土等と合わせると、寺院と関連を持つ、寺院周辺の居住及び生産区域としての性格が指摘される。

古代の鶴ノ木地区と密接な関係にあった「秋田城」については、中世にもその名称が継続して認められ、「椎記」長保2年(1000)条の「秋田城立不動可作管符(後略)」、「北山抄」の「出羽城介城務事、給管符、但秋田城事(後略)」、「吾妻鏡」文治6年1月6日条(1190)の「(前略)其路歴川秋田城等(後略)」等、官職名としての出羽城介、施設名としての秋田城の存在を示す史料がある。また、鎌倉時代における安達氏の「秋田城介」への補任記事等の注目される史料もある(資料編別編2の2参照)。しかし、現時点で秋田周辺では古代秋田城跡周辺以外に遺構や出土遺物から中世に行政・軍事的拠点となり得る地域は確認されておらず、鶴ノ木地区を含む高清水丘陵上にも中世秋田城に比定される行政施設や防禦施設は確認されていない(註1)。

その一方で、鶴ノ木地区中世遺構群とそれらに伴う整地層からは、かわらけと青磁を主体とする中國貿易陶磁器類がセットで出土しており、その出土遺物の様相から、出羽北半における特殊な地域として位置づけられる。類似した様相を示す同時期の遺跡である酒田市の大橋遺跡については、鎌倉時代に隆盛する鎌倉幕府による新たな支配体制の拡大に関連した遺跡と考えられている(註2)。それらのことから、鶴ノ木地区における再度の活発な利用や、12世紀末から13世紀中葉を中心とする特徴的出土遺物の様相やその導入使用が、鎌倉幕府による新たな支配体制の拡大、旧支配体制の再編といった政治的・社会的背景や画期を反映している可能性が指摘される。そのことはまた、中世秋田城の有力擬定地周辺でもあるが故に、鎌倉政権下における秋田城や秋田城介の再生といった動き、中世秋田城とも何らかの関連する可能性が考えられる。

鶴ノ木地区周辺には、同様な出土遺物の様相を示す古代秋田城の南側にあたる大小路地区や、城館跡が残る勅使館地区が存在している。地区近辺に存在が推定される中世寺院、さらには中世秋田城についても、周辺部を含めた形で今後も調査検討を加えていく必要がある。

(註1) 小松正夫「中世秋田城跡の行方—高清水岡の考古学的知見から—」『生産の考古学』1997年

(註2) 飯村均・八重樫忠郎「大橋遺跡再考—遺物と遺構から—」『歴史手帳』第24巻10号 名著出版 1996年

## 結語

秋田市教育委員会が昭和47年に秋田城跡発掘調査事務所を開設し調査にあたって35年が経った。この記念すべき年に「秋田城跡—鶴ノ木地区一」の報告書が刊行されたことはまことに慶びにたえない。

秋田城の初見は前身である出羽柵の『続日本記』天平5年（733）12月16日条「出羽柵秋田村高清水岡遷置」で、出羽柵が山形県庄内地方から移転し、秋田村の高清水の岡に遷したことを記載したものである。以来、200年間以上にわたり城は存続している。

昭和47年以降の調査の進展により、外郭線は平城京や多賀城跡のように築地塀であることが判明した。昭和57年から延べ7年間にわたり秋田城の中心部の調査が行われた結果、正殿、東脇殿、北東建物が配置され築地塀で囲まれた政府城が発見された。また、平成元年から2年にかけては八脚門の外郭東門が発見された。このように重要な遺構の発見が相次ぐと同時に、木簡や死亡帳、戸籍計帳などの漆紙文書が出土し、これまでともすれば軍事的な性格が強いと考えられていた城柵の性格は、行政機能を有する古代の官庁であることが確認された。

このたび報告書が刊行された鶴ノ木地区は、昭和34～37年までの国営発掘調査で金堂、講堂、經藏、鐘楼の伽藍からなる四天王寺跡と推定される遺構が発見され注目された地区である。今回の報告では、これに関連する遺構の検出とそれらの機能・性格の確認、また、城外ではあるが東外郭線に隣接する南東部の一段低いこの地区的変遷がどうであったのかを解明する調査を実施した。

以下鶴ノ木地区の変遷と性格をまとめると次のようになる。  
①本地区全体では古代から中世にかけて大きく6時期の変遷を把握した。  
②中央建物群については国営調査で四天王寺と推定されたが、今回の調査でも建物配置や檼竿支柱と思われる三本柱遺構の存在、仏教祭祀木簡や「寺」銘の墨書き土器等の資料などから寺院を基本とする機能・性格が考えられた。建物群には4時期の変遷が把握された。  
③I・II期は奈良時代、8世紀第2四半期から8世紀末に該当し寺院となる可能性が高い。  
④II期には特異な構造をもつ全国初の水洗廻舎跡が発見され、大陸（渤海）からの来訪者が使用した可能性が高く、中央建物群にはこれらの人々をもてなす客館（迎賓館）機能が付加された可能性が高い。  
⑤III・IV期は平安時代、8世紀末から9世紀第3四半期に該当し、四面廟の堂風建物が配され、寺院としての機能と性格がより明確化する。  
⑥SG463沼地の北西岸の祭祀遺構や土器一括廃棄遺構などは本地区が秋田城に關係する祭祀場としての性格を持っていたことを示しており、9世紀から11世紀前半にかけて水辺祭祀の場として継続して利用されていたことが確認された。  
⑦中世には沼地周辺が整地されて再度活発に利用される。総柱の掘立柱建物、井戸からなる居住城として使用され、一部西側は墓域として利用される。時期的には12世紀末から13世紀中葉を中心に14世紀までに位置づけられ、存在が推定される中世寺院周辺の居住城や生産区域として利用された。

以上のように、鶴ノ木地区は古代から中世まで継続して利用されており、特に古代には寺院、客館、祭祀場としての機能、性格が把握された。このことは秋田城に隣接する鶴ノ木地区に秋田城に付加された機能を担わせ、付属施設としての役割をもたらせたことを示しているものと考えられる。

最後に本書の刊行が古代城柵官衙遺跡研究の一助となることを心から願うものである。



国営調査時  
鶴ノ木地区遠景  
(北西から)



国営調査時  
鶴ノ木地区中央部  
調査状況



国営調査時  
推定第2次四天王寺金堂  
SB018掘立柱建物跡  
(西から)



国営調査時  
推定第2次四天王寺講堂  
SB006掘立柱建物跡  
(東から)



国営調査時  
推定第2次四天王寺経蔵  
SB019掘立柱建物跡  
(北から)



国営調査時  
推定第1次四天王寺金堂  
SB488掘立柱建物跡調査状況  
(東から)



第30次調査地全景・地区中央建物群調査状況（東から）



第30次調査地西側全景・建物群区画施設（SA502・SA414・SA500柱列塀）（北東から）



SK512～SK540土取り穴・SB018・SB484掘立柱建物跡（北から）



SB018・SB484・SB486掘立柱建物跡（北から）



SB487・SB488・SB489掘立柱建物跡（北から）



SB257～SB263掘立柱建物跡（西から）



地区中央・第25次調査地全景（北から）



SB006・SB395掘立柱建物跡（南から）



SB019・SB485掘立柱建物跡（北から）



SB021A・B 掘立柱建物跡（東から）



SB484掘立柱建物跡柱掘り方断面



SB484掘立柱建物跡柱掘り方断面



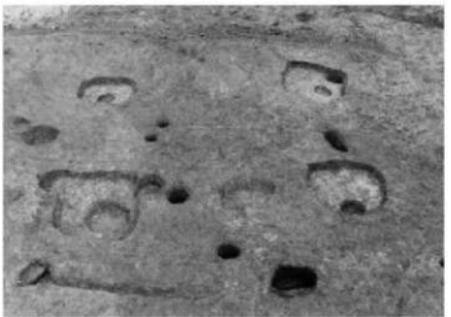
SB006 · SB395掘立柱建物跡柱掘り方断面



SB487掘立柱建物跡柱掘り方断面



SB021A · B 掘立柱建物跡柱掘り方断面



SB429掘立柱建物跡（南から）



SB267掘立柱建物跡（北から）



SB399掘立柱建物跡（東から）



SB398掘立柱建物跡（西から）



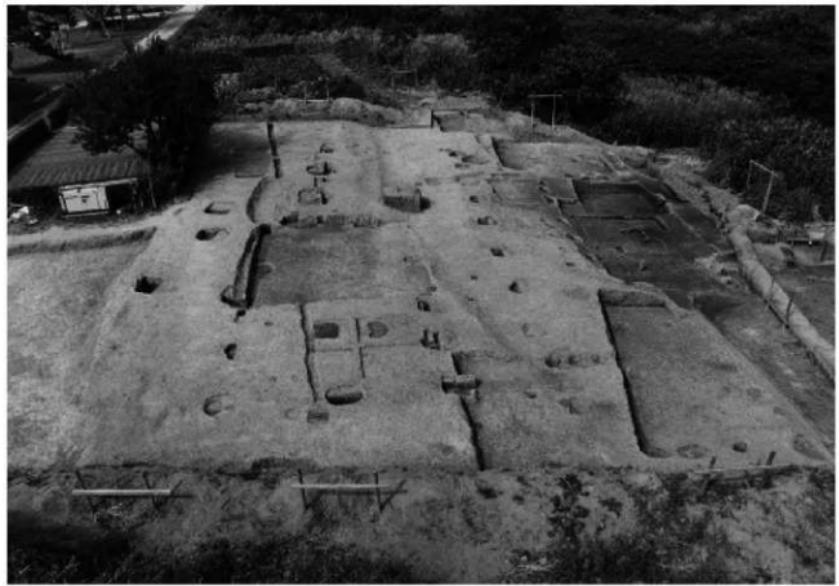
SB396・SB397掘立柱建物跡（南から）



SB490掘立柱建物跡（南から）



地区中央東側・第57次調査地全景（SB1129～SB1134掘立柱建物跡）（北から）



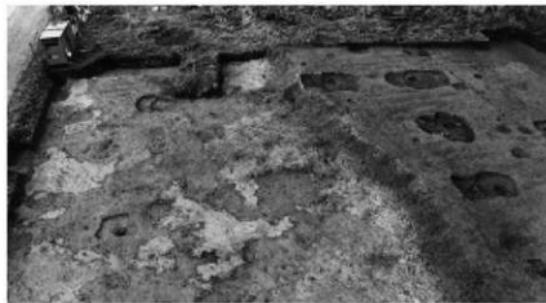
地区中央東側・第58次調査地西側全景（SB1146・SB1147掘立柱建物跡、  
SA1142柱列堀跡、SI1153竪穴住居跡）（南から）



地区中央東側・第61次調査地全景（SB1307掘立柱建物跡、  
SI1163・SI1310～SI1312竪穴住居跡）（南から）



地区中央東側・第91次調査地全景（SB1308・SB1967・SB1968掘立柱建物跡、  
SA1142柱列塀跡）（南から）



SB1129掘立柱建物跡  
(南から)



SB1130掘立柱建物跡  
(東から)



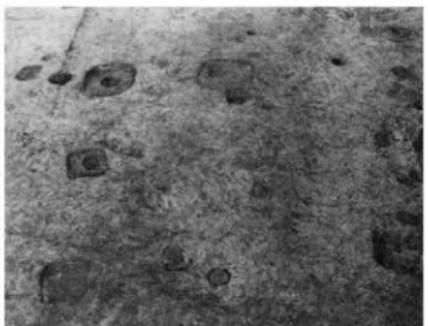
SB1146・SB1147掘立柱建物跡  
(南から)



SB1149掘立柱建物跡  
(南から)



SB1131・SB1132掘立柱建物跡  
(北から)



SB1134掘立柱建物跡（南から）



SB1133掘立柱建物跡（西から）



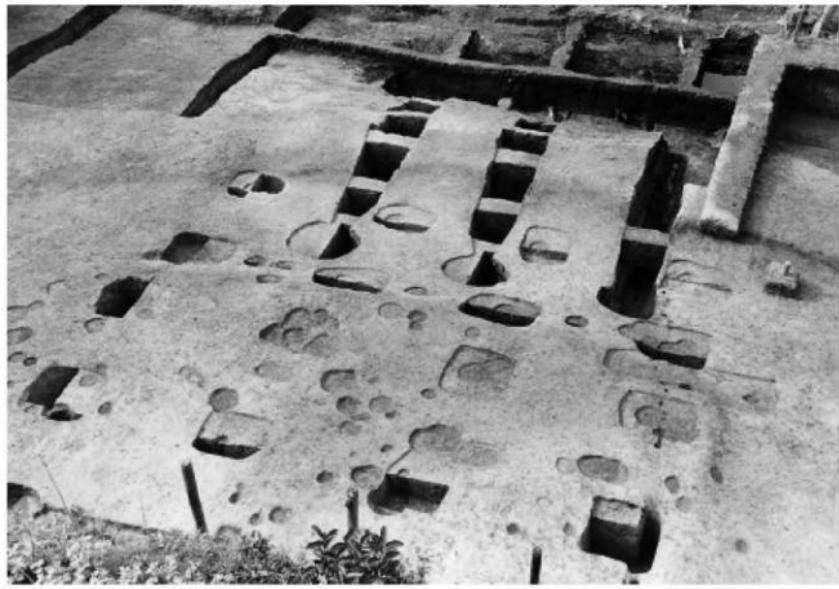
SB795掘立柱建物跡（東から）



SB962掘立柱建物跡



地区中央北東側・第63次調査地全景（SB1351便所遺構）（西から）

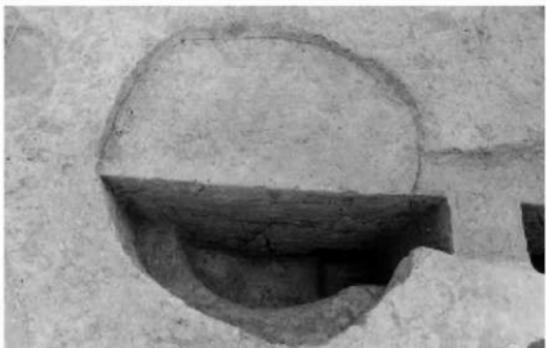


SB1351便所遺構（南から）



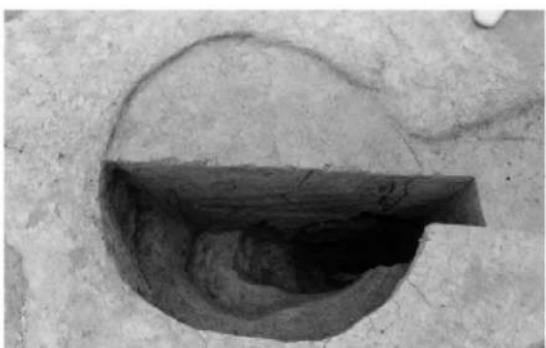
上：SB1351便槽A～C・

暗渠A～C（北から）



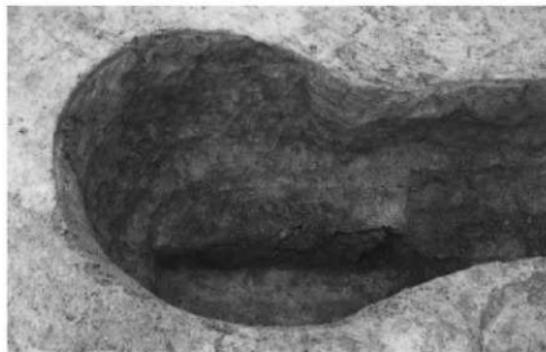
便槽C断面

(東から)



便槽B断面

(東から)



便槽A掘り下げ後状況  
(東から)



SB1351便所遺構  
沈殿槽A・B  
(北から)



SB1351便所遺構暗渠A～C排出口  
(西から)



暗渠B排出口木桶下側材検出状況  
(北から)



SB1351便所遺構  
沈殿槽B  
東西方向土層断面  
(南から)



沈殿槽B  
籌木出土状況  
(南から)



SA1352材木列堆 (西から)



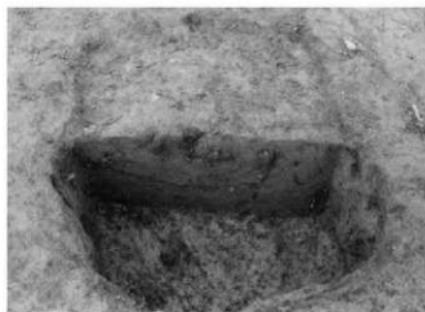
SB963掘立柱遺構（三本柱遺構）（東から）



左上：SA796柱列（三本柱遺構）柱掘り方断面  
（南から）

右上：SA796柱列（三本柱遺構）柱掘り方断面  
（南から）

左下：SK817土坑（三本柱遺構中央）柱掘り方断面  
（南から）





SA414・SA500・SA501柱列堀跡（北から）



SA407柱列堀跡（西から）



SA1142柱列堀跡（南から）



SA1972柱列壙跡

SI1978・SI1979竪穴住居跡  
(西から)



SI1978竪穴住居カマド付近

土器一括廃棄状況  
(南東から)



SI1979竪穴住居カマド内

土器一括廃棄状況  
(西から)



地区南端部・第12次調査地全景（南西から）



SD162溝跡（東から）



地区中央・第18次調査地全景（北から）



地区中央北側・第22次調査地全景（西から）

地区中央北側  
第26次調査地全景  
中世整地層面検出状況  
(南から)



第26次調査地南側  
上層（中世）遺構面検出  
状況（西から）



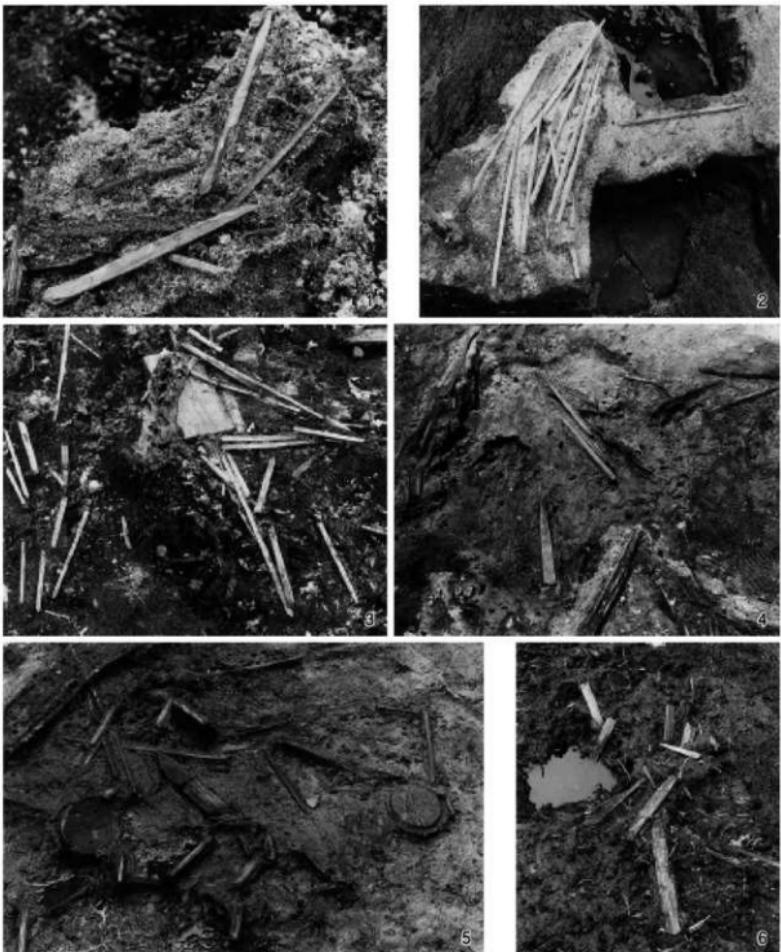
地区中央北側・第26次調査地下層（古代）遺構面・SG463沼地跡検出状況（南から）



地区北西部・第39次調査地全景（SG463北西岸）（西から）



SG463沼地跡北西岸祭祀遺構 人形出土状況



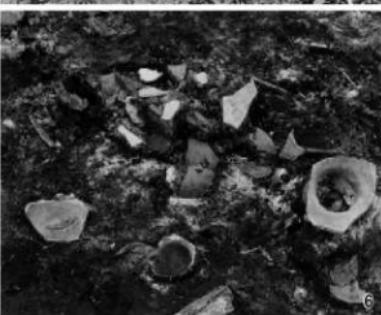
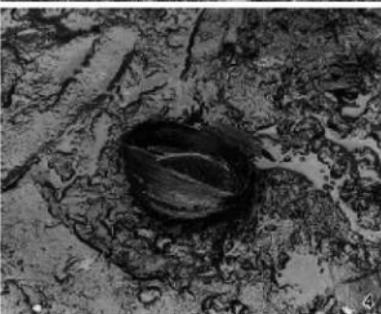
SG463沿地跡北西岸祭祀遺構  
遺物出土狀況

1 ~ 4 : 簋串出土狀況

5 : 簋串・木器出土狀況

6 : 人面墨書土器出土狀況





SG463沼地跡北西岸祭祀遺構

遺物出土狀況

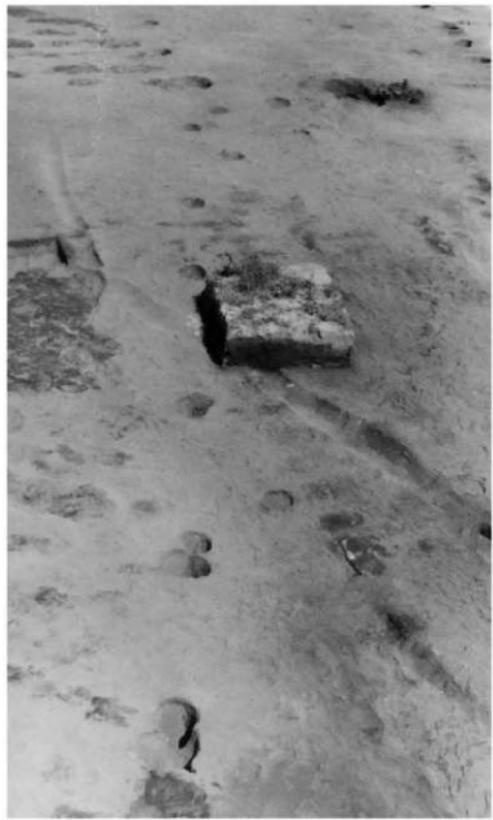
- 1：曲物 2：火鑽白
- 3：下駄 4：曲物
- 5：木器椀 6：長頸瓶
- 7：呪符木筒



地区北部・第62次調査地全景（西から）



地区北部・第69次調査地全景（SG1206北岸部）（西から）



SA1332・SA1333一本柱列堆跡（西から）



右：SA1489材木列堆跡（西から）



SA1489材木列堆跡  
丸太材検出状況  
(西から)



地区北部・第7次調査地  
SX109ツキ固め遺構  
(道路状遺構) 検出状況  
(東から)



地区北部・第62次調査地 SX1350ツキ固め遺構 (道路状遺構)  
検出状況 (北から)



地区東部  
第81次調査地全景  
(西から)



SX1701木道跡  
(東から)



SI1697竪穴状工房跡（西から）



SA1695材木列壠跡  
(東から)



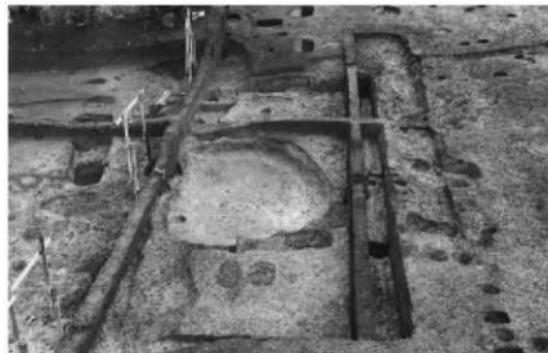
SI1165堅穴住居跡  
(西から)



SI1162堅穴住居跡  
(西から)



SI1157堅穴住居跡  
(西から)



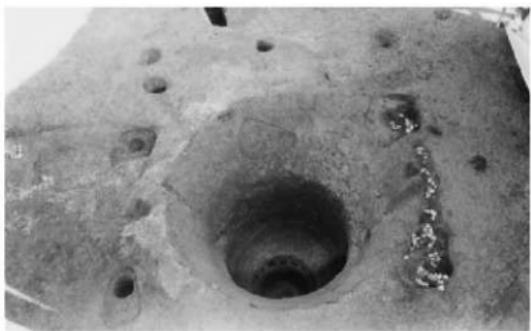
SI1138A・B・C・D  
堅穴住居跡  
(北から)



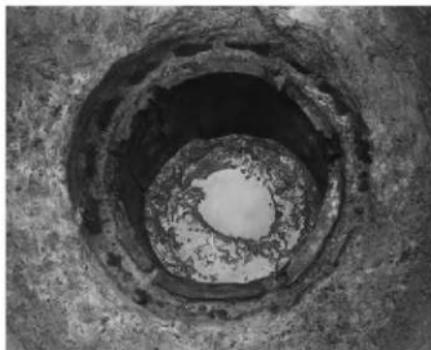
SI1153堅穴住居跡  
(南から)



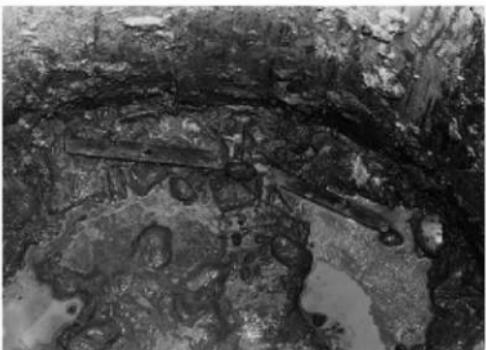
SI1834・SI1835  
堅穴住居跡  
(西から)



SE406井戸跡（西から）



SE406井戸跡井筒検出状況



SE406井戸跡井筒内木筒出土状況



SE406井戸跡井筒底部埴敷検出状況



井戸底部埴敷状況拡大



SE1176井戸跡  
(南から)



SE1176井戸跡  
井戸底部検出状況  
(南から)



SE621井戸跡  
(東から)



上：第18次調査地北側  
SA288小柱掘り方群  
SB266掘立柱建物跡  
(北から)



SE269井戸跡  
(北から)



SI609堅穴状遺構  
(西から)



地区西部  
第35次調査地  
ST627～ST629・ST634・ST635  
墓壙群  
(北から)



ST630～ST633  
墓壙群  
(東から)



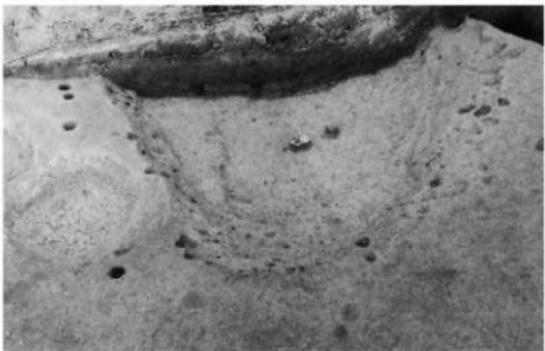
地区西部  
第35次調査地  
SK651土取り穴群  
検出状況  
(南から)



上：地区西部  
第48次調査地全景  
(東から)



地区中央西側  
第51次調査地  
全景（北東から）



SK824土坑  
(南から)



地区中央南東側・第58次調査地東側中世遺構検出状況（東から）



SE1167・SE1166井戸跡（南から）



SB1150掘立柱建物跡・SD1186溝跡



SE1171井戸跡（南から）



SE1171井戸跡井筒検出状況



地区中央北側・第26次調査地 SG463沼地跡南岸整地層土層断面



地区中央北東側・第63次調査地 SG1206沼地跡南西岸整地層土層断面

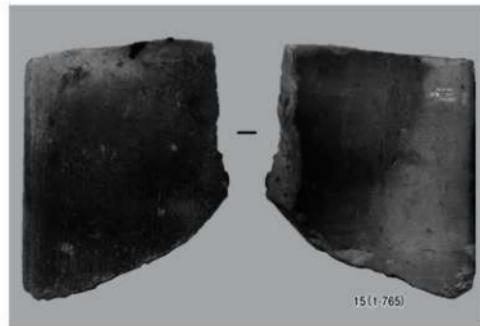


9~15 : SB1351沈殿槽A出土漆木 16~22 : SB1351沈殿槽B出土漆木  
水洗便所構造出土遺物 (1)



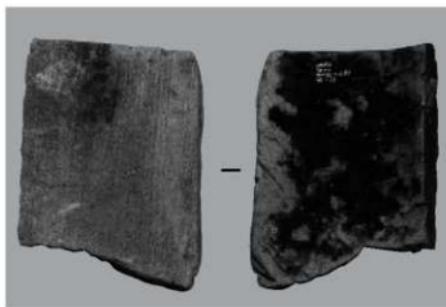
23~35 : SB1351沈殿槽B出土器木

水洗便所遺構出土遺物（2）

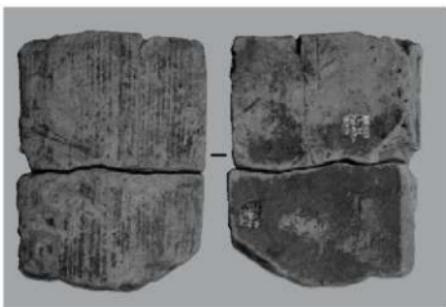


図版42

SE406井戸跡出土遺物（1）



17(1-767)



18



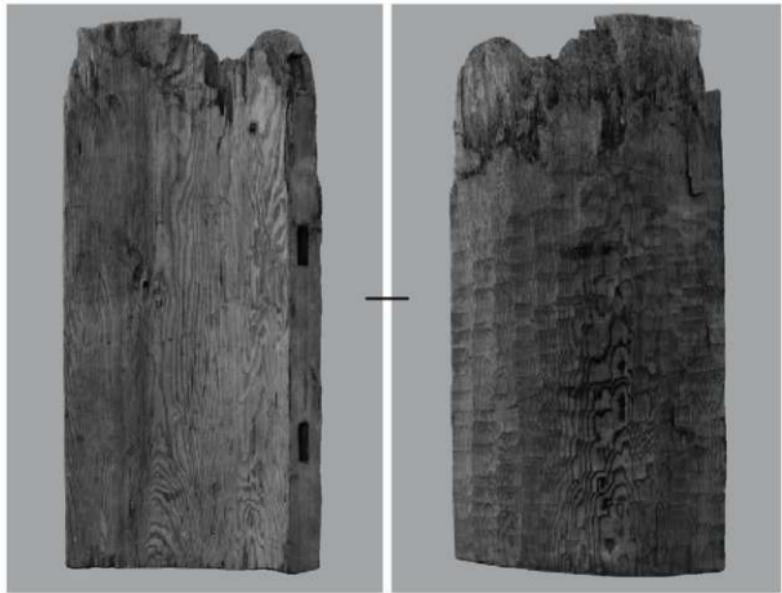
19(1-763)



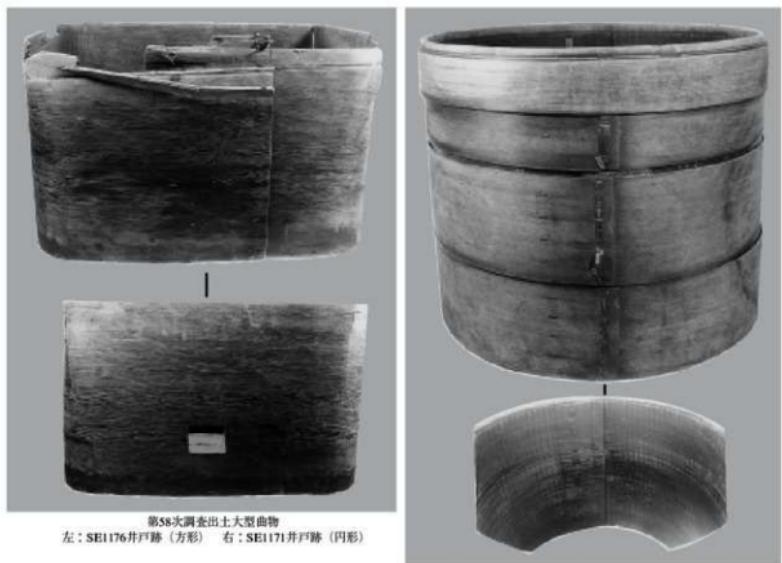
20(1-764)

17：SE406埋土出土平瓦 18：地区中央第7層出土腰斗瓦 19・20：SE406井筒内部出土埴

#### SE406井戸跡出土遺物（2）

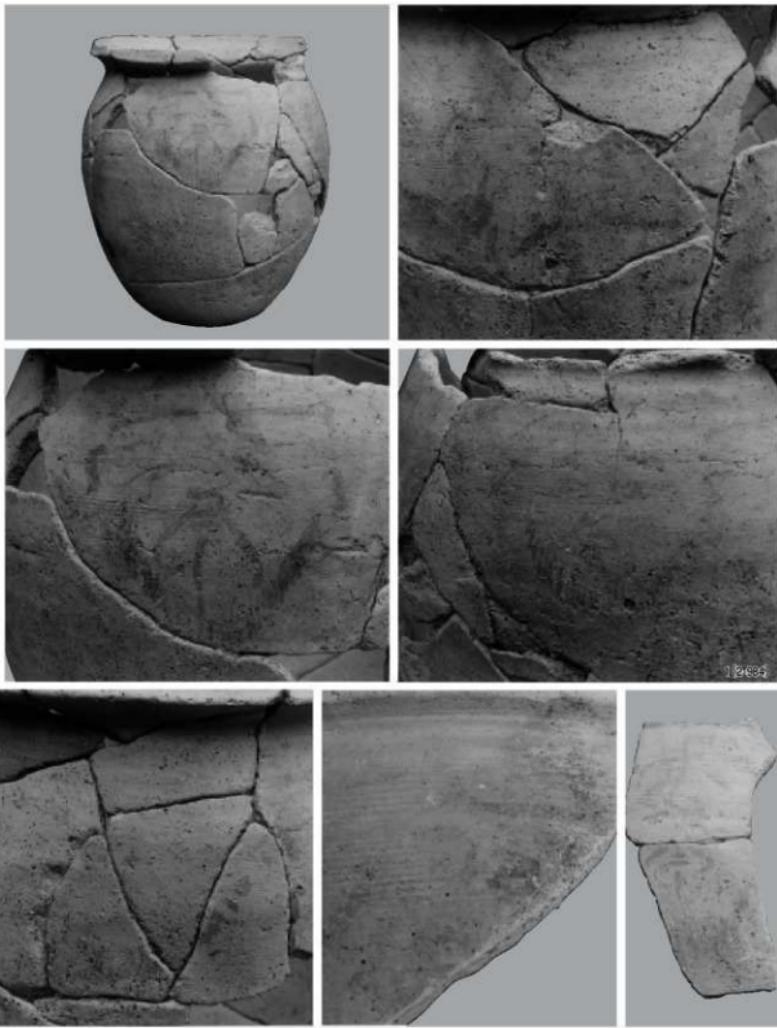


第25次調査 SE406井戸跡井筒材  
(右：外面に手斧 左：内面に鉈による仕上げ削りの痕跡、両側面には三ヶ所に円形に組み合せる太枘穴がある。)



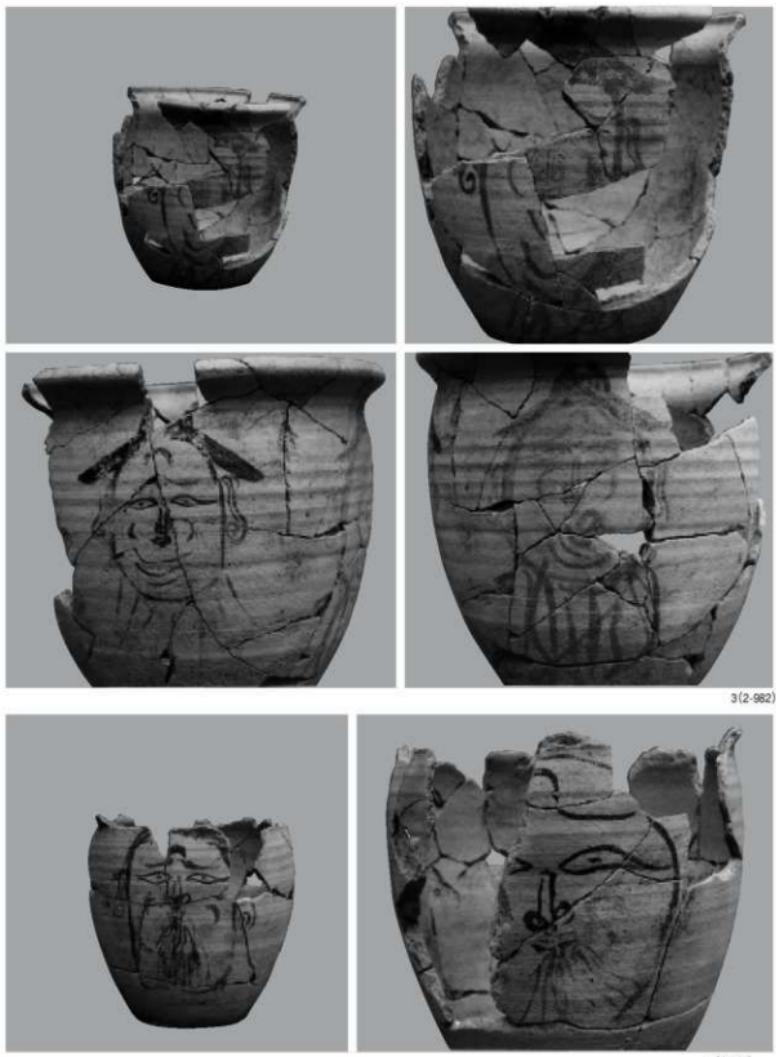
第58次調査出土大型曲物  
左：SE1176井戸跡（方形） 右：SE1171井戸跡（円形）

SE406・SE1171・SE1176井戸跡出土井筒



1·2: SG463泥炭層出土  
人面壺等土器

SG463沼地跡北西岸祭祀遺構出土遺物（1）



3・4 SG463泥炭層出土  
人面圖畫土器

SG463沼地跡北西岸祭祀遺構出土遺物（2）



5 (2-983)

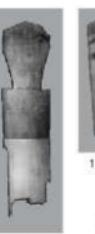
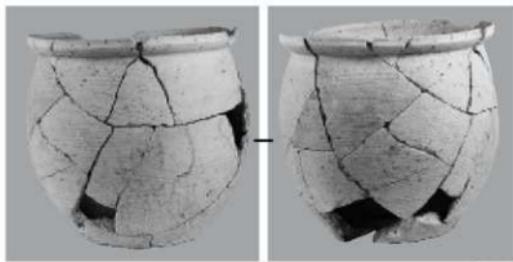
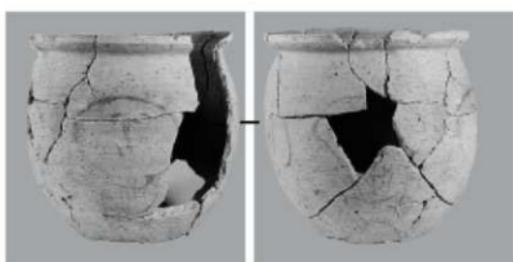


6 (2-981)



5・6: SG463泥炭層出土 人面墨書土器  
7: SG463泥炭層出土 「目」墨書土器

SG463沼地跡北西岸祭祀遺構出土遺物（3）

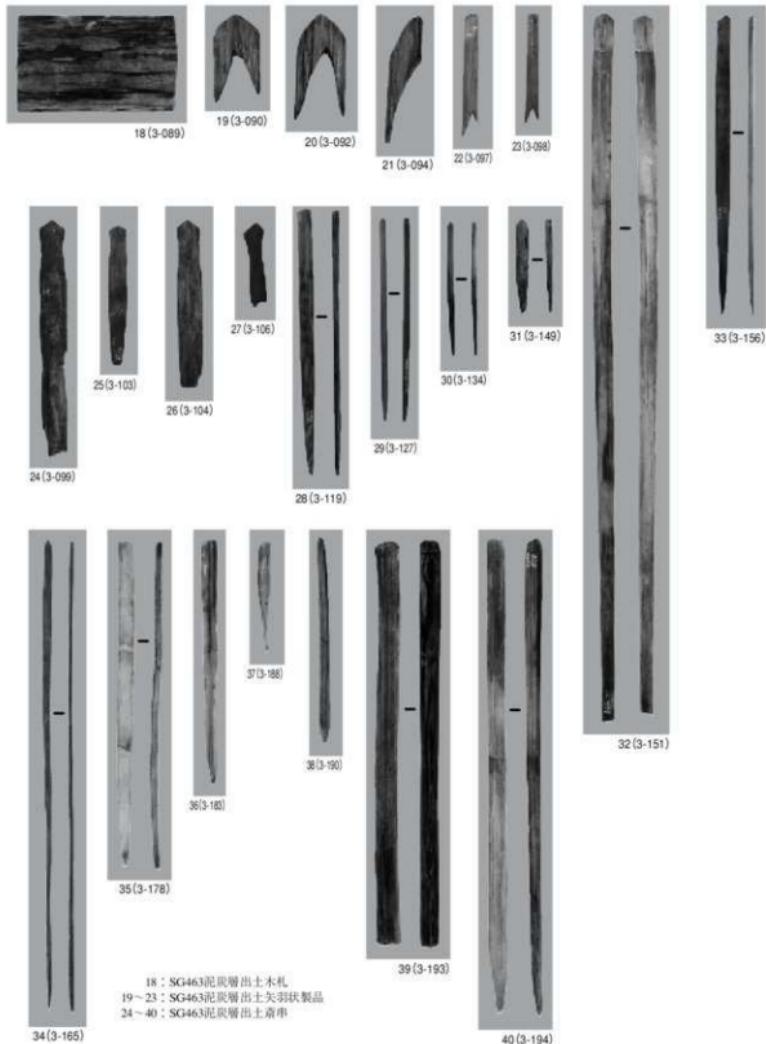


16(3-087)

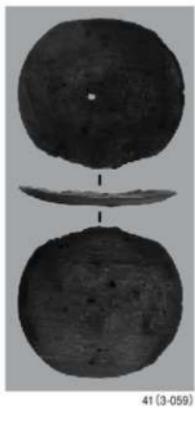
8：地区北部第11層出土「目」墨畫土器  
9：地区北部第9層出土人面墨畫土器  
10～16：SG463泥灰層出土人形  
17：SG463泥灰層出土馬形



#### SG463沼地跡北西岸祭祀遺構出土遺物（4）



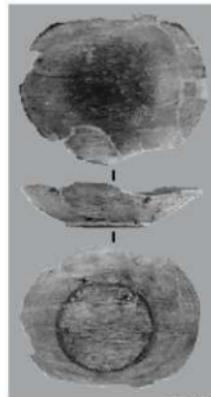
SG463沼地跡北西岸祭祀遺構出土遺物（5）



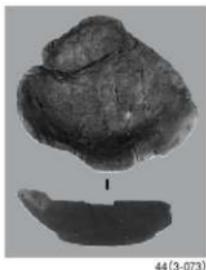
41 (3-059)



42 (3-061)



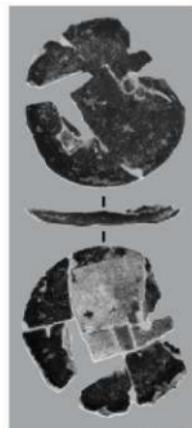
43 (3-071)



44 (3-073)



45 (3-074)



46 (3-077)



47 (3-195)



48 (3-196)

- 41・42 : SG463泥炭層出土挽物皿  
43・44 : SG463泥炭層出土挽物台付椀  
45 : SG463泥炭層出土挽物蓋  
46 : SG463泥炭層出土挽坐り挽物皿  
47 : SG463泥炭層出土下駄  
48 : SG463泥炭層出土題籠

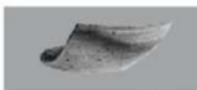
#### SG463沼地跡北西岸祭祀遺構出土遺物（6）



49(2-940)



51(2-958)



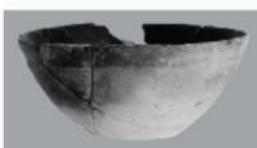
50(2-938)



53(2-986)



52(3-001)



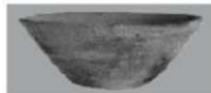
55(2-967)



56(2-914)



57(3-037)



58(3-020)



59(3-031)



60(3-048)



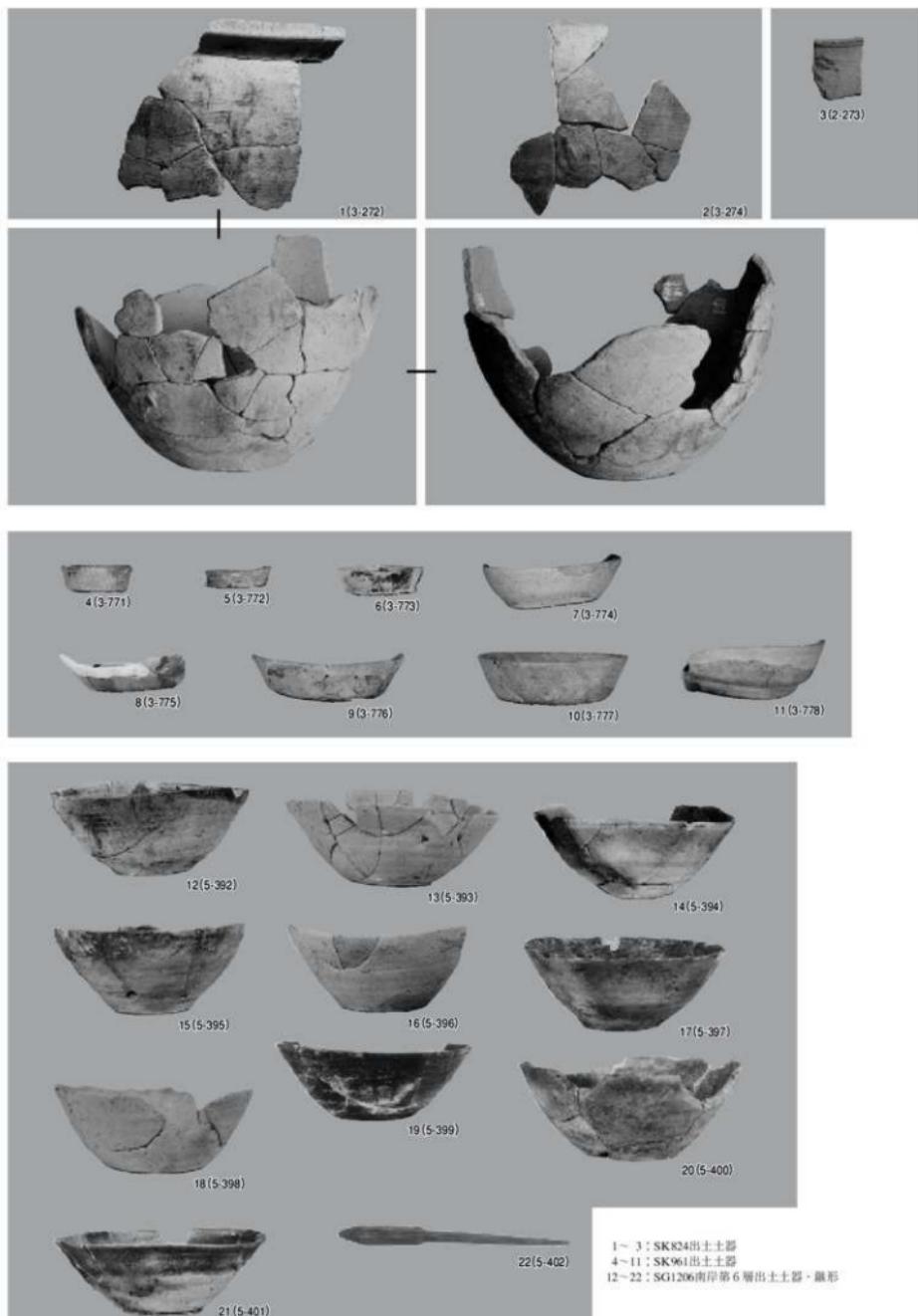
61(3-011)



54(2-989)

49~61：SG463泥炭層出土 49~51：須惠器環 52・53：須惠器長盤裏 54：須惠器横盤 55：土師器壺 56：赤褐色土器皿  
57~60：赤褐色土器环 61：石帶

#### SG463沼地跡北西岸祭祀遺構出土遺物（7）



図版52

鶴ノ木地区祭祀遺構・一括出土土器群（1）

1~3: SK824出土土器  
4~11: SK961出土土器  
12~22: SG1206南岸第6層出土土器・鐵形



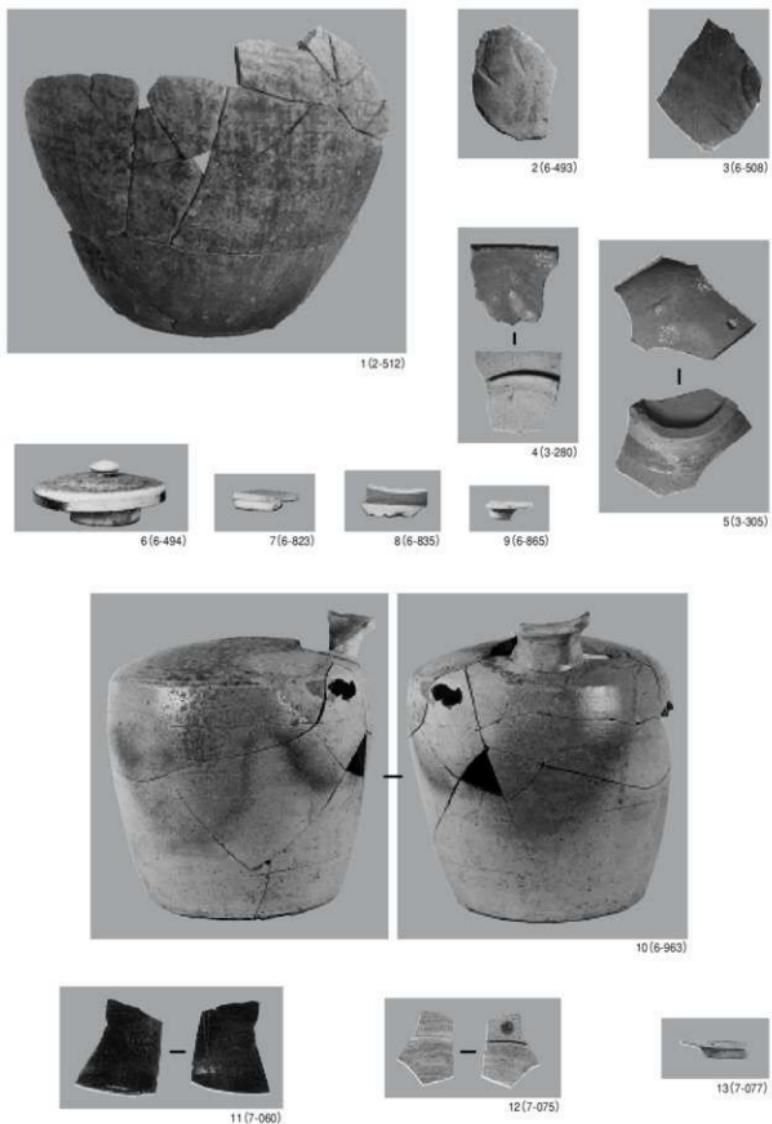
23~28 : SG463南岸第7層出土土器  
 29~34 : SG1206南西岸第5層出土土器  
 35~41 : SI1978カマド一括出土土器

鶴ノ木地区祭祀遺構・一括出土土器群（2）



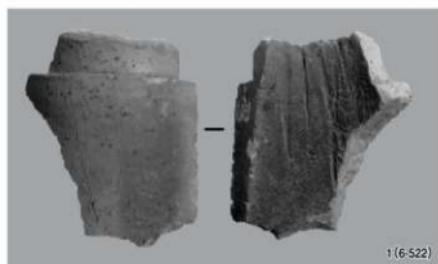
42~57 : SI1978カマド一括出土

鶴ノ木地区祭祀遺構・一括出土土器群（3）

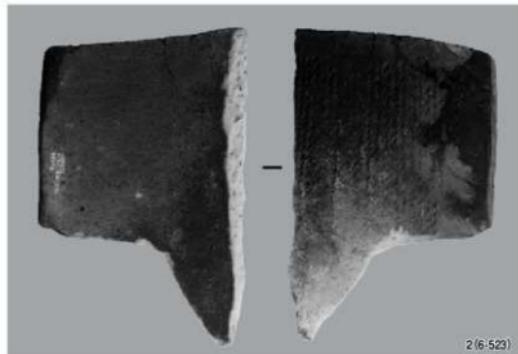


1：土師器台付壺 2：土師器壺 3：土師器器種不明 4：縄軸陶器台付皿 5：縄軸陶器台付壺 6：灰軸陶器瓶頸蓋  
7・9・13：灰軸陶器台付皿 8：灰軸陶器台付壺 10：灰軸陶器壺 11：縄軸陶器輪花壺 12：灰軸陶器段盖

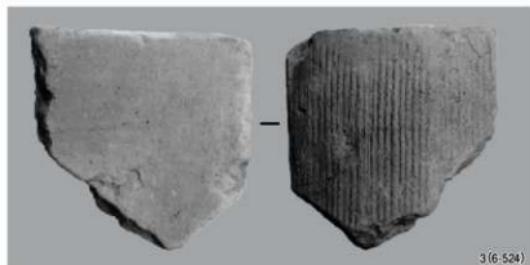
鶴ノ木地区出土土器・陶磁器類



1 (6-522)



2 (6-523)



3 (6-524)



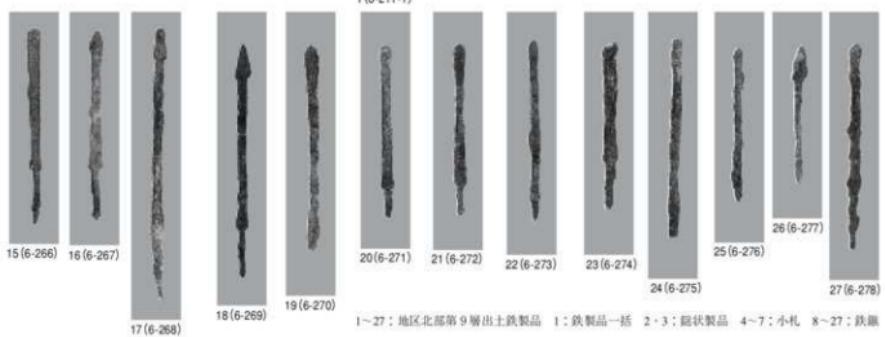
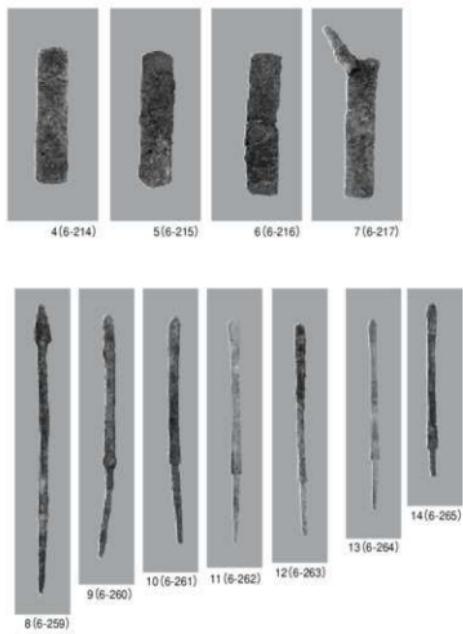
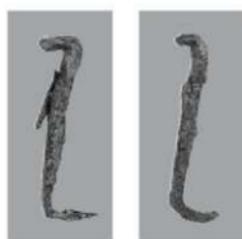
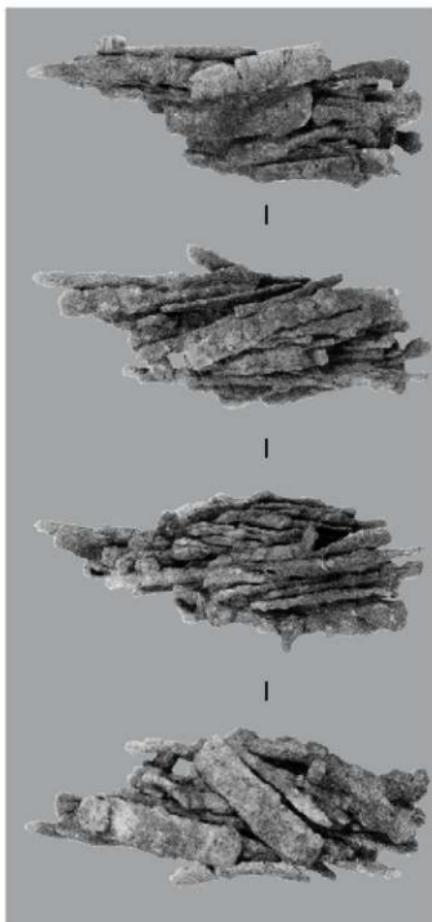
4 (6-525)



5 (6-526)

1：地区中央第6層出土有段瓦  
2・3：地区中央第6層出土平瓦  
4・5：地区中央第6層出土磚

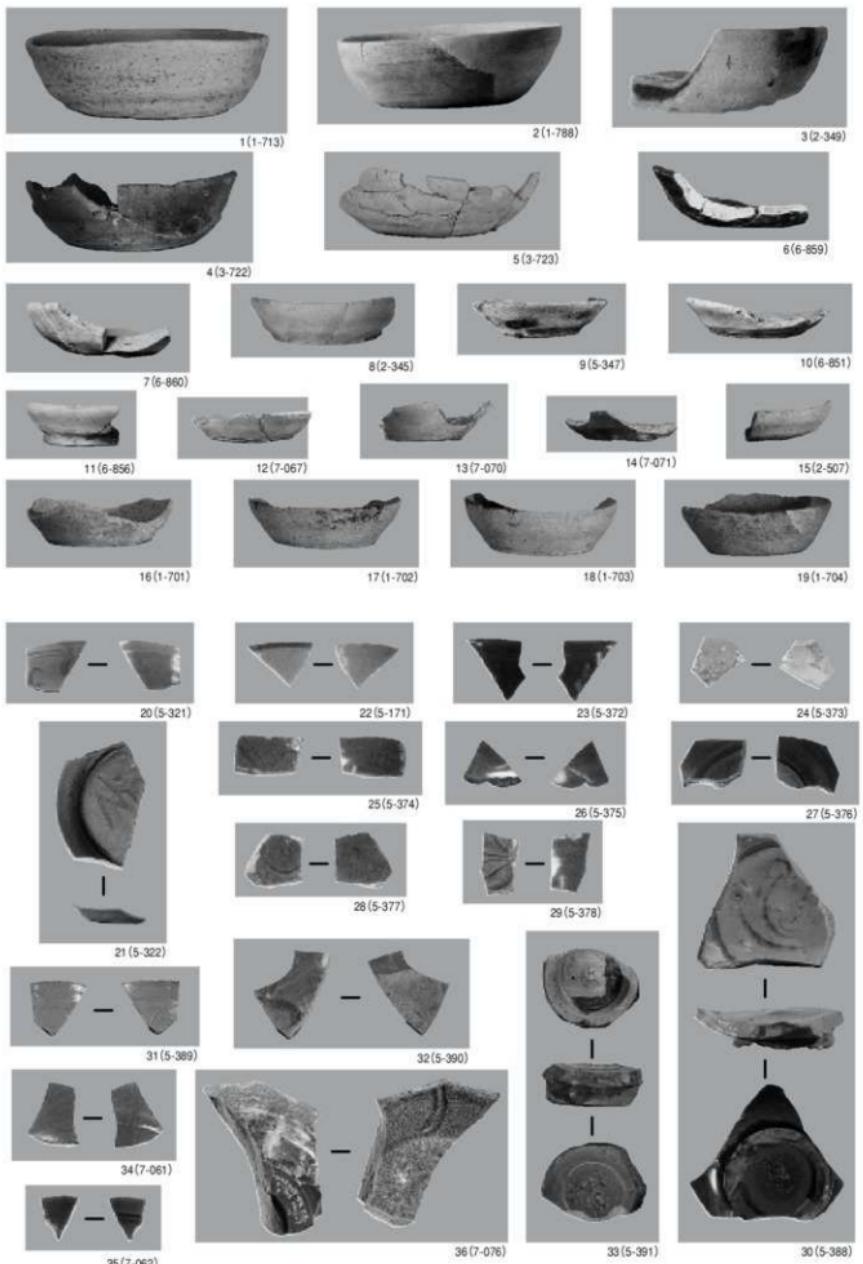
鶴ノ木地区出土瓦・磚類



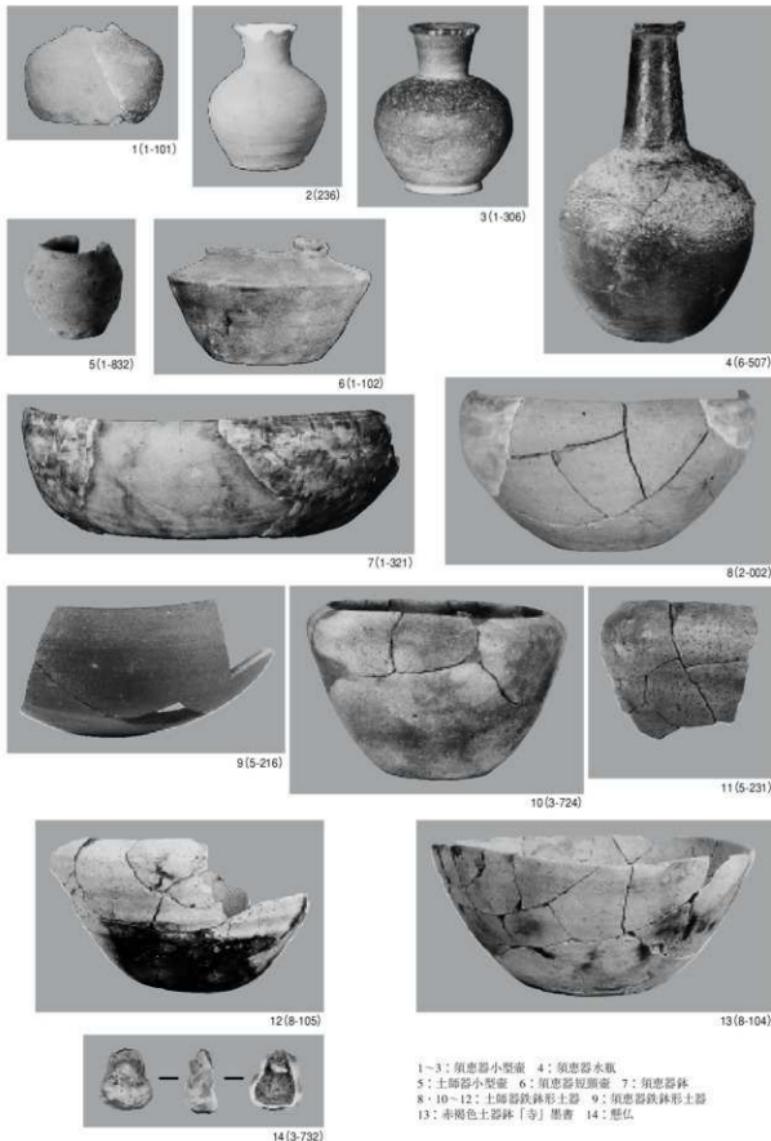
1~27：地区北部第9層出土鉄製品 1：鉄製品一括 2・3：錐状製品 4~7：小札 8~27：鉄筆

鶴ノ木地区出土鉄製品

図版57



1~7: ロクロかわらけ大皿 8~14: ロクロかわらけ小皿 16~19: ヘラ切りかわらけ 20・21・23・25~30: 青磁 22: 白磁 24: 青白磁  
鞠ノ木地区出土かわらけ・貿易陶器類



1~3: 須恵器小型壺 4: 須恵器水瓶  
 5: 土師器小型壺 6: 須恵器瓦蓋壺 7: 須恵器鉢  
 8・10~12: 土師器鉄鉢形土器 9: 須恵器鉄鉢形土器  
 13: 赤褐色土器鉢「寺」墨書き 14: 慈仏

鶴ノ木地区出土仏教関係遺物

## 資料編 別編 1

- 1 秋田城跡の出土土器編年
- 2 秋田城跡鶴ノ木地区出土墨書土器集成

## 1 秋田城跡の出土土器編年

秋田城跡出土土器の編年は、日本考古学協会1997年度秋田大会資料集や平成13年度刊行の秋田市史古代史料編などに提示されている。編年は、第54次調査 SG1031土取り穴出土土器、城内外検出の元慶の乱（878）に伴う焼土炭化物層出土土器、十和田a火山灰（降下年代915）堆積層出土土器、第24次調査検出竪穴住居跡群（SI1367、SI1369～371）などの基準資料をもとに検討構成されている。それら紀年銘資料との併存や、史料に記録のある火災に伴う焼土・炭化物層や降下火山灰堆積層からの出土等により、二百年間以上にわたり精度の高い土器編年が可能となっている。特に SG1031土取り穴出土土器は、約二百年間にわたる層堆積があり、天平宝字年間（794～764）の漆紙文書、延暦十年～十四年（791～795）の木簡などの紀年銘資料と共に、元慶の乱（八七八）に伴う焼土炭化物層の堆積などもあり、紀年銘資料との併存および層序関係を根拠とする中心的な基準資料となっている。また、第54次調査地に隣接し、層位が連続する第60次調査地や第62次調査地出土土器も基準資料の一部を構成している。

**8世紀第2四半期** 秋田出羽創建期段階。供膳具の主体は当初より須恵器である。壺類は法量が大きく、やや丸底と平底の両者があり、底面全面あるいは底部周縁部にケズリ調整を行うものが多い。底部の切り離しは回転ヘラ切りが主体で、わずかに回転糸切りも認められる（以下ヘラ切り・糸切りと表記）。須恵器の多くは搬入品と考えられ、東山道系、北陸系の特徴を持つ土器が認められる。土師器はすべて非クロコ成形の土器である。壺類の形態は、基本的には丸底で、体部中央に明瞭な段や緩い棱を有し、口縁部は緩く内反する。いずれも内外面ともに細かいヘラ磨きを行う。煮炊具はほとんどが在地系の土師器長胴甕で、口縁部から頸部にかけて数条の沈線を入れるものと頸部にのみ段を有する二者がみられる。体部の整形はハケ目で、外面はハケ目後に細かいヘラ磨きを行うのが特徴である。底面は木葉・笹葉の圧痕がある。

**8世紀第3四半期** 供膳具の主体は須恵器である。須恵器の搬入品は前期より減少し、在地産と思われる土器が増加し、主体を占める。壺類には若干法量の縮小化と、平底化の傾向が認められる。北陸系製作技術が主流となり、ヘラ切りが主体を占め、ケズリ調整は減少し、ナデ調整が増加する。土師器壺類は、依然として非クロコ成形のものが大部分であるが、平底化が進み須恵器壺の形態を模した土器が出現する。煮炊具は在地系土師器壺類が依然として主体を占める。

**8世紀第4四半期** 須恵器壺類は法量縮小化が明確になる。底面のケズリ調整はほとんど認められず、ナデ調整が主体を占める。また、柿渋様の液体を塗布する土器群が出現する。製品のほとんどは在地産で供給が安定する。土師器壺類には非クロコ成形とクロコ成形の両者があり、平底化する。この段階で赤褐色土器が出現し、煮炊具として北陸系の特徴を示す砲弾形の丸底長胴甕と平底の小型甕のセットが出現し、壺類の出現もこの段階に遡る可能性がある。

**9世紀第1四半期** この段階まで供膳具の主体は須恵器である。須恵器の壺類はヘラ切りナデ・軽いナデ調整で逆台形のものが増加し主体を占める。法量縮小化が進み、体部外傾度が大きくなる。壺類に柿渋様の液体を塗布した土器が数多く出土する。赤褐色土器は甕類に加え、壺類が出現する。壺類は糸切り主体で器形的には須恵器と互換性がなく、小振りでやや深い壺状である。体部下端から底面にかけてケズリ調整を行うBタイプと、行わないAタイプとあり、Bタイプが主体を占める。この段階で非クロコ成形の土師器壺類はほとんど姿を消す。甕類は大型の丸底長胴甕と平底の小型甕のセットが継続し、出土量が急増し非クロコ成形土師器甕に代わり煮炊具の主体を占める。丸底長胴甕は、

外面体部下半から底部にかけて手持ちヘラケズリ調整、内面は体部全体に丁寧なカキ目調整を行う。小型壺底面は回転糸切りで体部下端にはケズリ調整を行う。

**9世紀第2四半期** 土器全体に対する須恵器の出土量は減少し、代わって赤褐色土器の出土量が増加し、本期の後半には須恵器と並ぶようになる。須恵器の坏類はさらに法量が縮小する。ヘラ切り軽い撫調整で逆台形のタイプが主体を占める。糸切りは少ないが底径の縮小化が目立ち、形態は塊型に近くなる。台付坏は坏身の深いタイプが主体を占める。赤褐色土器の坏類はケズリを行わないAタイプが増加し、器形的に須恵器と互換性を持つようになり、また台付坏も出現する。壺類については丸底長胴壺は整形技法の簡略化が進み、内外面ともタタキ目や当て具痕を残すものが多くなる。小型壺もとともに口縁部が最も発達し、端部を大きく挽き出すようになる。平底の中型壺や大型の鉢が認められる。

**9世紀第3四半期** 供膳具では赤褐色土器が須恵器の出土量を上回り主体を占め、施釉陶器模倣の器種・器形が出現する。土師器にも丁寧に施釉陶器を模倣した塊や台付皿や耳皿が出現する。須恵器にも台付皿が出現し、坏類はこれ以降糸切り無調整の塊型タイプで占められる。赤褐色土器の坏類は糸切り無調整で塊型のAタイプがほとんどを占め、全体的に法量が大きくなり、底径がやや縮小する傾向がみられる。新たに皿及び台付皿や耳皿が出現する。壺類の丸底長胴壺はさらに調整技法の簡略化が進み、体部内面はナデ調整になり、外面のタタキ目、内面の当て具痕とも不明瞭となる。口縁部は端部が単純に内傾するものが多くなり、作りが厚くなってくる。平底小型壺も体部下半へのケズリ調整がほとんど認められなくなる。煮炊具では壺類の他に鍋類が加わる。

**9世紀第4四半期** 供膳具では赤褐色土器が主体を占める。須恵器の出土数はさらに減少し坏や貯蔵具に限定されてくる。赤褐色土器坏類は激増し、成形・整形が粗雑となる。大振りな塊形と小振りな塊形があり、法量的に大小2分化の傾向が認められ、小型タイプでは縮小化の傾向が認められる。また全体に底径の縮小化がより顕著になる。煮炊具としては、壺類の他に鍋類が一定量出土するようになる。鍋類には丸底の鍋と脚付きの鍋がある。丸底砲弾型長胴壺の口縁部は全体に作りがさらに厚ぼつたくなる。土師器は大振りな塊が一定量出土する。

**10世紀第1四半期** 本期以降、須恵器は貯蔵具を除き激減する。供膳具はほとんど赤褐色土器で占められる。皿、坏類は法量及び底径の縮小化が進み、さらに成形・整形が粗雑となる。煮炊具では引き継ぎ壺類、鍋類があると考えられるが出土数は減少する。また、大型の鉢も認められる。

**10世紀第2四半期** 赤褐色土器坏や皿類はさらに法量が縮小化する。本期以降、器種組成において台付皿や台付塊が一定量を占めるようになる。また、第2・3四半期にかけて足高高台皿が認められる。坏や皿の一部には底部が厚みと高さを持ち柱状高台となるものが認められる。煮炊具は本期以降はほとんど認められなくなり、鉄器への移行が想定される。

**10世紀第3四半期** 赤褐色土器坏類については前段階より法量が縮小化した小型坏がみられる。台付皿や台付塊は高台の簡略化や底径の縮小化が著しい。また、一部には高台部分が柱状高台を呈するものもみられる。

**10世紀第4四半期** 赤褐色土器坏類については、法量の縮小、小型化が進み、器高が低くなり、皿形に近い形態のものが主体を占める。皿類については浅形化が進んだほぼ扁平なタイプが出現する。

**11世紀第1・第2四半期** 小型坏、皿のみが認められる。出土数は極めて限られ、古代的な器種構成は失われる。厚手の椀と小皿のセットで構成される中世的土器様式への転換期と考えられる。

表1 秋田城跡出土土器基準資料 須恵器坏法量関係係数

年代	基 準 資 料	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	底径指数	高径指数
8世紀 第2四半期	54次調査 SG1031 土取穴埋土・覆土	10.2~15.9 (15.0)	5.5~11.4 (9.1)	2.3~5.0 (3.6)	0.539~0.769 (0.660)	17.0~31.4 (24.4)
8世紀 第3四半期	54次調査 SG1031 築地崩壊土・瓦層 ~45・46層	9.1~15.8 (13.5)	5.4~11.3 (8.4)	3.0~6.8 (3.9)	0.507~0.758 (0.623)	22.4~49.6 (28.7)
8世紀 第4四半期	54次調査 SG1031 下層スクモ層 ~上層スクモ層	10.1~15.4 (13.1)	5.7~10.0 (7.7)	2.9~5.1 (3.7)	0.441~0.710 (0.592)	21.8~39.8 (28.1)
9世紀 第1四半期	54次調査 SG1031 15・16層~13・14層	10.0~16.2 (13.3)	6.3~9.8 (8.0)	2.9~5.1 (3.6)	0.465~0.750 (0.601)	17.9~38.6 (26.8)
9世紀 第2四半期	54次調査 SG1031 12層~11層	11.1~14.2 (12.8)	5.1~9.0 (7.7)	3.0~4.5 (3.6)	0.3835~0.703 (0.604)	23.4~40.5 (28.0)

表2 秋田城跡出土土器基準資料 赤褐色土器坏法量関係係数

年代	基 準 資 料	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	底径指数	高径指数
9世紀 第1四半期	54次調査 SG1031 15・16層	11.0~12.2 (11.9)	5.2~7.2 (6.0)	3.8~4.3 (4.0)	0.426~0.596 (0.508)	31.1~35.5 (33.8)
9世紀 第2四半期	54次調査 SG1031 12層	12.9~13.2 (13.1)	5.7~7.2 (6.4)	3.5~4.5 (4.1)	0.435~0.545 (0.489)	26.1~34.9 (31.0)
9世紀 第3四半期	54次調査 SG1031 10層	11.0~15.1 (12.2)	5.4~6.6 (6.0)	3.5~5.0 (4.2)	0.393~0.573 (0.497)	24.5~45.5 (35.2)
9世紀 第4四半期	54次調査 SG1031 7層	12.1~15.3 (13.5)	4.7~6.6 (5.7)	3.8~6.0 (4.8)	0.350~0.528 (0.422)	27.7~42.3 (35.7)
10世紀 第1四半期	54次調査 SG1031 4層	11.2~14.2 (12.8)	4.5~6.4 (5.5)	3.2~4.9 (4.3)	0.393~0.475 (0.430)	23.5~39.3 (33.8)
10世紀 第2四半期	67次調査 7層	12.8~13.7 (13.1)	5.4~5.7 (5.6)	4.2~5.2 (4.6)	0.409~0.449 (0.426)	31.9~39.4 (35.2)
	60次調査 SK1270	10.7~11.5 (11.1)	4.1~4.6 (4.2)	3.5~3.9 (3.7)	0.366~0.400 (0.381)	30.4~36.1 (33.8)

## 参考文献

- 『秋田城跡昭和53年度発掘調査概報』秋田市教育委員会 1979年  
 『秋田城跡平成元年度発掘調査概報』秋田市教育委員会 1990年  
 『秋田城跡平成2年度発掘調査概報』秋田市教育委員会 1991年  
 『秋田城跡平成4年度発掘調査概報』秋田市教育委員会 1993年  
 『秋田城跡平成6年度発掘調査概報』秋田市教育委員会 1995年  
 『秋田城跡平成10年度発掘調査概報』秋田市教育委員会 1999年  
 小松正夫「秋田城跡発掘調査の成果—遺構の変遷と性格—」『第16回古代城柵官衙遺跡検討会資料』1990年  
 小松正夫「秋田城とその周辺地域の土器様相(試案)ー第54次調査の本筋・漆紙文書件出土器を中心にしてー」『第18回古代城柵官衙遺跡検討会資料』1992年  
 小松正夫「秋田県の8世紀の土器」「秋田県の9世紀の土器」「秋田県の10世紀の土器」「日本土器事典」雄山閣 1996年

伊藤武士「出羽における10・11世紀の土器様相」『北陸古代土器研究 第7号』1997年

伊藤武士「秋田城周辺須恵器窯の動向について」『秋田考古学46号』秋田考古学協会 1998年

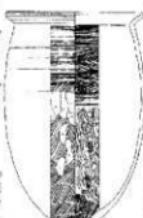
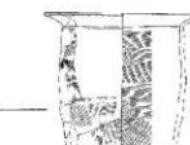
『古城廻窯跡発掘調査報告書』秋田市 1997年

『秋田城跡出土土器と周辺窯の須恵器編年(試案)』『日本考古学協会 1997年度秋田大会 蝦夷・律令国家・日本海一シンポジウムⅡ・資料集一』1997年

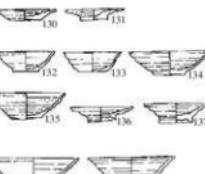
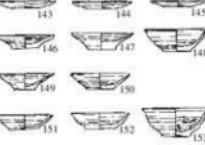
『秋田市史 第7巻 古代 史料編』秋田市 2001年

	須 患 器	赤 色 土 器	土 部 器
8世紀 第1四半期		1~4・7~12・17・54次SG1301 13・14次土取り穴 14・19・41次SL782 15・16・58次SL1165	
8世紀 第2四半期	1~6・7~11	12	13~17 18~19
8世紀 第3四半期	20~25・26~31	32 30~32・36~36・54次SG1031 33・35・14次土取り穴 34・57・64次SL380	33~34 35~36 37~38
8世紀 第4四半期	39~45・46~49	50 51~52	53~57 58~60 126

別編1 図1 秋田城跡出土土器編年表(1)

	須 恵 器	赤 褐 色 土 器	土 飾 器
9世紀 第1四半期	      	    	  
9世紀 第2四半期	     	       	64・85: 17次
9世紀 第3四半期	   	        	86~92: 72次SG1031 93: 72次SK1555 94: 62次SK88 95: 42次SK549 96: 113: 39次SG463
9世紀 第4四半期	   	      	106: 64次SK1362 109~114: 62次第11层 112: 66次SK1271 113 109 110 111 112 113 114 115 116

別編1 図2 秋田城跡出土土器編年表(2)

	須 惠 器	赤 暢 色 土 器	土 鋤 器
10世紀 第1四半期	115・117・118・120・54次第5層 116・62次第11層 119・62次第6層	 	
10世紀 第2四半期	121・123～126・129・60次SH213 122・127・60次SK1270	 	
10世紀 第3四半期	130・132・135・142・243・SI367 131・135・134・138・140・243・SD370 139・243・SI371 141・60次SA1320	 	 
10世紀 第4四半期	143～157・243・SI369	  	
	158～163・63次第4層		

別編1 図3 秋田城跡出土土器編年表(3)

## 2 秋田城跡鶴ノ木地区出土墨書土器集成

鶴ノ木地区出土墨書土器一覧表（1）

通番号	遺物番号	次数	器種	切り離し	調査技法	出土遺物・層位	想定部認	想書跡	備考	時期
1	39	国宮	須恵器・环	ハラ切り		第1地区カマド付近 底部	寺			9世紀第3
2	1-286	22次	土師器・台付环	ホリ切り	無調整	地区中央第7層	底部	足		9世紀第3
3	1-302	22次	須恵器・小型壺	ホリ切り	無調整	SK338-1丸底面	底部	□		9世紀第2
4	1-316	22次	須恵器・小型环	ホリ切り	無調整	地区中央第7層	底部	□		9世紀第3
5	1-317	22次	赤褐色土器・台付环	ホリ切り	無調整	SK338-1丸底面	底部	子、九		9世紀第3
6	1-318	22次	須恵器・环	ホリ切り	無調整	SK338-1丸底面	底部	ホル上(二字異體)		9世紀第1
7	1-663	25次	須恵器・环	ハラ切り	無調整	S1403C カマド付近	底部	数文字の墨書		9世紀第2
8	1-664	25次	須恵器・环	ハラ切り	無調整	S1402A カマド付近	底部	単	内面墨付	9世紀
9	1-665	25次	須恵器・环	ハラ切り	無調整	S1402A カマド付近	底部	□		9世紀
10	1-672	25次	土師器・台付环	ホリ切り	底部無調整、体部横方向ミガキ	S1403B 丸底上面	体部	{平々} □		9世紀第3
11	1-705	25次	須恵器・环	ホリ切り	無調整	地区中央第7層	体部	一		9世紀第2
12	1-710	25次	須恵器・环	ハラ切り	底部軽いナラ	地区中央第7層	底部	中		9世紀第2
13	1-711	25次	須恵器・环	ハラ切り	底部ナラ	地区中央第7層	底部	□		9世紀第2
14	1-712	25次	須恵器・环	ハラ切り	底部ナラ	地区中央第8層	底部	単		9世紀第1
15	1-835	26次	須恵器・环	ホリ切り	無調整	地区中央第7層	底部	樹		9世紀第3
16	1-836	26次	須恵器・环	ハラ切り	底部軽いナラ	地区中央第7層	底部	□ (記号か)		9世紀第2
17	1-837	26次	須恵器・环	ハラ切り	底部ナラ	地区中央第7層	底部	単	御用組合	9世紀第2
18	1-838	26次	須恵器・环	ハラ切り	底部ナラ	地区中央第7層	底部	寺		9世紀第2
19	1-839	26次	須恵器・环	ハラ切り	底部ナラ	地区中央第7層	底部	卍		9世紀第2
20	1-840	26次	須恵器・环	ハラ切り	底部軽いナラ	地区中央第7層	体部	{寺々} □		9世紀第1
21	1-841	26次	須恵器・环	ハラ切り	底部軽いナラ	地区中央第7層	底部	□		9世紀第1
22	1-842	26次	須恵器・瓶	ホリ明	底部から全体墨書き	地区中央第7層	底部	官		8世紀第2
23	1-843	26次	赤褐色土器・环	ホリ切り	無調整	地区中央第7層	底部	{底部} □		9世紀第2
24	1-844	26次	赤褐色土器・环	不 明		地区中央第7層	体部	玉		9世紀第2
25	1-845	26次	赤褐色土器・环	ホリ切り	体部下墨書き	地区中央第7層	底部	単		9世紀第2
26	1-846	26次	赤褐色土器・环	ホリ切り	体部下墨書き	地区中央第7層	底部	{寺} □		9世紀第2
27	1-847	26次	赤褐色土器・环	ホリ切り	無調整	地区中央第7層	底部	能ノ若(右書き)		9世紀第2~
28	1-848	26次	赤褐色土器・环	ホリ切り	体部下墨書き	地区中央第7層	体部	皆		9世紀第2
29	1-849	26次	赤褐色土器・环	ホリ切り	無調整	地区中央第7層	底部	□	御用組	9世紀第2
30	1-850	26次	赤褐色土器・环	ホリ切り	無調整	地区中央第7層	底部	酒		9世紀第3
31	1-851	26次	土師器・环	ホリ切り	無調整	地区中央第7層	底部	酒 貝		不明
32	1-852	26次	赤褐色土器・环	ホリ切り	無調整	地区中央第7層	底部	个→簡		9世紀第2~
33	1-853	26次	赤褐色土器・环	ホリ切り	無調整	地区中央第7層	底部	寺		9世紀第2~
34	1-854	26次	赤褐色土器・环	ホリ 不明		SK447-1丸底面	体部	□		9世紀第4
35	1-855	26次	赤褐色土器・环	ホリ切り	無調整	地区中央第7層	底部	{脚々} □	転用鉢か	9世紀第2
36	1-856	26次	赤褐色土器・环	ホリ切り	無調整	地区中央第7層	底部	{可カ 分々} □		9世紀第2~
37	1-857	26次	赤褐色土器・环	ホリ 不明		地区中央第7層	体部	寺		9世紀第2~
38	1-858	26次	赤褐色土器・环	ホリ 不明		地区中央第7層	体部	□ 見 沈口	不明	9世紀第2
39	1-993	30次	須恵器・环	ハラ切り	無調整	S1494B 土器	底部	直		9世紀第2
40	2-000	30次	須恵器・环	ハラ切り	無調整	S1495B 土器	底部	成	内面墨付	9世紀第1
41	2-009	30次	須恵器・环	ハラ切り	底部軽いナラ	S1494墨土器	底部	脚		9世紀第2
42	2-034	30次	赤褐色土器・环	ホリ切り	無調整	S1497丸底	底部	天→災		9世紀第4
43	2-035	30次	須恵器・环	ホリ切り	無調整	S1497墨土器	底部	直		9世紀第2
44	2-344	34次	赤褐色土器・环	ホリ切り	無調整	地区北端第10層	底部	厨		9世紀第2~
45	2-347	34次	赤褐色土器・环	ホリ切り	無調整	地区北端第10層	底部	{進カ 運ニ} □		9世紀第2
46	2-348	34次	赤褐色土器・环	ホリ切り	無調整	地区北端第10層	底部	六		9世紀第2
47	2-367	34次	須恵器・环	ハラ切り	底部軽いナラ	SK613-1丸底面	底部	{株ノ 緑ニ} □		9世紀第4
48	2-369	34次	赤褐色土器・环	ホリ切り	無調整	SK613-2丸底面	底部	× (記号か)		9世紀第4
49	2-375	34次	須恵器・环	ハラ切り	無調整	SK621墨引方理土器	体部	井		9世紀第2
50	2-376	34次	須恵器・环	ハラ切り	無調整	SE621墨引方理土器	体部	川/川(記号か)		9世紀第2
51	2-377	34次	赤褐色土器・环	ホリ切り	無調整	SE621墨引方理土器	底部	長		9世紀第3
52	2-378	34次	赤褐色土器・环	ホリ切り	無調整	SE621墨引方理土器	底部	脚		9世紀第3
53	2-381	34次	赤褐色土器・环	ホリ切り	無調整	SE621墨引方理土器	底部	□		9世紀第3
54	2-382	34次	赤褐色土器・环	ホリ切り	無調整	SE621墨引方理土器	底部	吉		9世紀第3
55	2-383	34次	赤褐色土器・环	ホリ切り	無調整	SE621墨引方理土器	底部	□		9世紀第3
56	2-498	35次	赤褐色土器・环	ホリ切り	無調整	SK651-1丸底面	底部	□		9世紀
57	2-514	35次	須恵器・环	ホリ切り	底部軽いナラ	地区西端第6層	体部	□		9世紀第2
58	2-907	39次	赤褐色土器・环	ホリ切り	無調整	地区西端第6層	体部	直		9世紀第3
59	2-908	39次	赤褐色土器・环	ホリ切り	無調整	地区北端第10層	体部	{史+ 史ニ} □		9世紀第2
60	2-909	39次	赤褐色土器・环	ホリ切り	無調整	地区北端第10層	体部	□		9世紀第3
61	2-910	39次	赤褐色土器・环	ホリ切り	無調整	地区北端第10層	体部	金		9世紀第3
62	2-911	39次	赤褐色土器・环	ホリ切り	無調整	地区北端第10層	体部	□		9世紀第3
63	2-912	39次	赤褐色土器・环	ホリ切り	無調整	地区北端第10層	底部	長		9世紀第4
64	2-913	39次	赤褐色土器・台付环	ホリ切り	無調整	地区北端第10層	底部	薪		9世紀第3
65	2-914	39次	赤褐色土器・皿	ホリ切り	無調整	地区北端第10層	体部	□		9世紀第3

■□は判定不能の一字

鶴ノ木地区出土墨書土器一覧表（2）

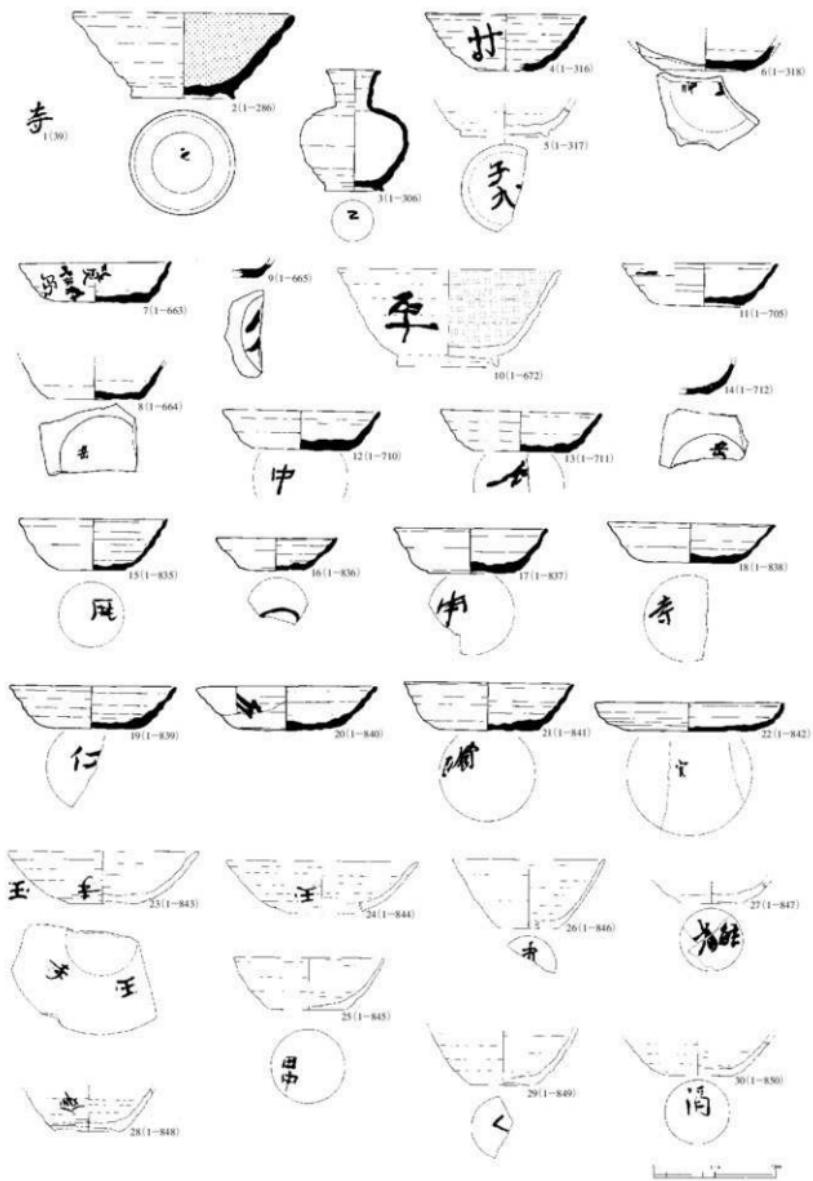
通番号	遺物番号	件数	器種	切り離し	調査段階	出土遺物・層位	墨書き	参考	時期	
66	2-915	39次	赤褐色土器・环	ぬり切り	無調整	地区北部W10#9	底部	「イ」状の記号	9世紀後半~	
67	2-916	39次	赤褐色土器・环	ぬり切り	無調整	地区北部N10#9	底部	刷	9世紀第2	
68	2-917	39次	赤褐色土器・环	ぬり切り	無調整	地区北部N10#9	底部	刷	9世紀第4	
69	2-918	39次	赤褐色土器・环	ぬり切り	無調整	地区北部N10#9	底部	□	9世紀第4	
70	2-919	39次	赤褐色土器・环	ぬり切り	無調整	SD737端土	底部	□	9世紀後半~	
71	2-920	39次	赤褐色土器・台付环	ぬり切り	白周縁ナデ	表土	底部	□	9世紀~	
72	2-921	39次	赤褐色土器・环	ぬり切り	無調整	地区北部N9#9	底部	刷	9世紀第4	
73	2-922	39次	赤褐色土器・环	ぬり切り	無調整	地区北部N9#9	底部	刷	9世紀第4~	
74	2-923	39次	赤褐色土器・环	ぬり切り	無調整	地区北部N9#9	底部	□	9世紀第4	
75	2-924	39次	赤褐色土器・环	ぬり切り	無調整	地区北部N9#9	底部	上	9世紀~	
76	2-925	39次	赤褐色土器・环	ぬり切り	無調整	地区北部N10#9	底部	刷	9世紀第3	
77	2-926	39次	赤褐色土器・环	ぬり切り	無調整	地区北部N9#9	底部	生	9世紀~	
78	2-927	39次	赤褐色土器・环	ぬり切り	無調整	地区北部N9#9	底部	刷	9世紀第4~	
79	2-928	39次	赤褐色土器・环	ぬり切り	無調整	地区北部N9#9	底部	□	9世紀~	
80	2-929	39次	赤褐色土器・环	ぬり切り	無調整	地区北部N9#9	底部	□	10世紀第1~	
81	2-930	39次	赤褐色土器・台付环	ぬり切り	無調整	地区北部N9#9	底部	□	10世紀第1~	
82	2-931	39次	赤褐色土器・环	ぬり切り	無調整	地区北部N7#9	底部	□□(二字異筆)	9世紀~	
83	2-932	39次	赤褐色土器・环	ぬり切り	無調整	地区北部N7#9	底部	刷	10世紀第1	
84	2-933	39次	赤褐色土器・环	ぬり切り	無調整	SD738大溝土	体部	□	9世紀第4	
85	2-935	39次	赤褐色土器・环	ぬり切り	無調整	表土	底部	△形状の墨書き	9世紀第3~	
86	2-936	39次	赤褐色土器・环	ぬり切り	無調整	地区北部N10#9	底部	□	9世紀第3	
87	2-937	39次	銀色器・环	ハラ切り	底部ナデ	地区北部N7#9	底部	□□	内面墨付兼	
88	2-938	39次	銀色器・环	ぬり切り	無調整	地区北部N10#9	底部	□	9世紀第2	
89	2-939	39次	銀色器・环	ハラ切り	底部ナデ	地区北部N9#9	底部	我	9世紀第2	
90	2-940	39次	銀色器・环	ハラ切り	無調整	地区北部N10#9	底部	門	内面墨付兼	
91	2-941	39次	銀色器・环	点切り	無調整	地区北部N10#9	底部	底部	9世紀第3	
92	2-942	39次	銀色器・墨斑片	不 明	天津井部ケズリ	地区北部N10#9	つまみ	内面軸用刷	9世紀第2	
93	2-943	39次	銀色器・环	ハラ切り	無調整	地区北部N10#9	体部	刷	9世紀第2	
94	2-944	39次	銀色器・环	ハラ切り	底部軽いナデ	地区北部N10#9	底部	□	9世紀第2	
95	2-945	39次	銀色器・环	ハラ切り	底部軽いナデ	地区北部N9#9	底部	□	9世紀第1~	
96	2-946	39次	銀色器・台付鋸片	ぬり切り	無調整	地区北部N10#9	底部	□	不明	
97	2-947	39次	赤褐色土器・环	不 明	地区北部N9#9	底部	□	9世紀~		
98	2-948	39次	赤褐色土器・环	ぬり切り	無調整	地区北部N9#9	底部	大	内面墨付兼	
99	2-949	39次	銀色器・环破片	ハラ切り	無	地区北部N10#9	底部	□	不明	
100	2-950	39次	銀色器・环	不 明	地区北部N9#9	底部	体部	□	9世紀第4~	
101	2-951	39次	赤褐色土器・环・墨斑片	ぬり切り	無	地区北部N10#9	体部	□	不明	
102	2-952	39次	土師器・台付組	不 明	月輪柄にケズリ	地区北部N7#9	体部	生	横位	
103	2-953	39次	土師器・环	ぬり切り	無調整	地区北部N10#9	体部	□	9世紀第4	
104	2-954	39次	土師器・环	点跡・墨斑片	不 明	地区北部N10#9	体部	□	不明	
105	2-955	39次	土師器・环破片	不 明	地区北部N10#9	体部	□	不明		
106	3-005	39次	赤褐色土器・环	ぬり切り	無調整	地区北部N7#9	能 部	□	9世紀第4~	
107	3-006	39次	土師器・环	不 明	地区北部N7#9	体部	我	横位	9世紀第4~	
108	3-035	39次	赤褐色土器・环	ぬり切り	無調整	地区北部N10#9	体部	□	横位	
109	3-269	42次	赤褐色土器・环 A	ぬり切り	無調整	SK304A灰穴埋土	底部	道	9世紀第2	
110	3-275	42次	赤褐色土器・环	ぬり切り	調整なし	SK349上灰埋土	底部	□上□	9世紀	
111	5-226	58次	銀色器・环	ハラ切り	底部ナデ	SII159灰土	底部	横	(微明組)	9世紀第2
112	5-239	58次	銀色器・环	ハラ切り	底部ナデ	SII162灰土	底部	□	9世紀第1	
113	5-241	58次	銀色器・环	ハラ切り	底部ナデ	SII162埋土	体部	底部	三・仁	9世紀第1
114	5-243	58次	銀色器・环	ハラ切り	底部ナデ	SII162埋土	底部	能	9世紀第1	
115	5-244	58次	銀色器・环	ハラ切り	底部ナデ	SII162埋土	底部	寺	9世紀第2	
116	5-246	58次	銀色器・环	ハラ切り	底部ナデ	SII162埋土	底部	寺	9世紀第2	
117	5-264	58次	銀色器・环	ぬり切り	不明	SII163埋土	底部	寺・ト	9世紀第1	
118	5-323	58次	銀色器・环	ハラ切り	底部軽いナデ	SEI176井筒隠込灰土	底部	寺	(暗明組)	9世紀第2
119	5-345	58次	銀色器・环	ハラ切り	底部軽いナデ	地区中央第4層	能 部	□	9世紀~	
120	5-409	58次	銀色器・环	ハラ切り	底部軽いナデ	地区中央第4層	底 部	能	9世紀~	
121	5-410	58次	銀色器・环	ハラ切り	底部ナデ	地区中央第4層	底 部	寺	9世紀~	
122	5-413	58次	銀色器・环	ハラ切り	底部軽いナデ	地区中央第4層	底 部	寺	9世紀~	
123	6-055	61次	赤褐色土器・环 A	ぬり切り	無調整	SI1309カマド隠込土境内	内面見込み	伊	9世紀第2	
124	6-063	62次	赤褐色土器・环	ぬり切り	無調整	SII121灰土下端	体 部	田 中	9世紀第3	
125	6-099	62次	赤褐色土器・环 B	ぬり切り	底部から全体下端ケズリ	SII331埋土	底 部	× ×	9世紀第1	
126	6-105	62次	赤褐色土器・环	ぬり切り	無調整	SK1348土丸埋土	底 部	+ カ	9世紀第4	
127	6-113	62次	赤褐色土器・蓋	不 明	白周縁ナデ	SX1350上面埋み内	つまみ	長	9世紀後半~	
128	6-114	62次	銀色器・环	ハラ切り	底部軽いナデ	底 部	丁	板用刷	9世紀~	
129	6-115	62次	銀色器・环	ぬり切り	無調整	旧耕作土	底 部	留 + 留	9世紀第2~	
130	6-116	62次	土師器・台付环	ぬり切り	無調整	表土	底 部	□	9世紀~	
131	6-118	62次	赤褐色土器・环	ぬり切り	無調整	底 部	底 部	○	9世紀第2	
132	6-119	62次	赤褐色土器・环	ぬり切り	無調整	旧耕作土	底 部	帶	9世紀第2	

鶴ノ木地区出土墨書土器一覧表（3）

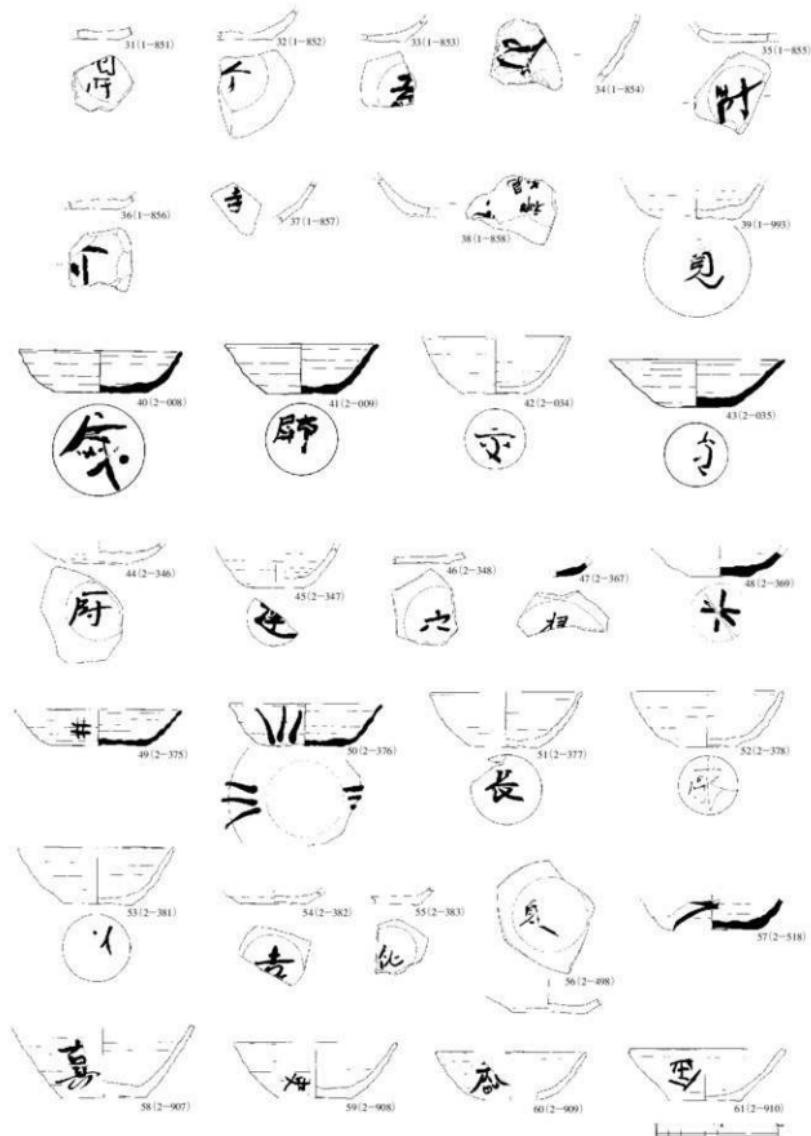
通番号	遺物番号	件数	器種	切り離し	調査段階	出土遺構・層位	墨書き状況	参考書籍	時期
133	6-122	62次	赤褐色土器・环	ホコリ	無調整	表土	底部	□	9世紀第3~
134	6-123	62次	赤褐色土器・环	ホコリ	無調整	表土	体部	□	9世紀第3~
135	6-124	62次	赤褐色土器・环	ホコリ	無調整	表様	底部	□	9世紀第3~
136	6-125	62次	赤褐色土器・环	ホコリ	無調整	表土	底部	秋#	9世紀第2~
137	6-126	62次	赤褐色土器・环	ホコリ	無調整	旧耕作土	底部	□	9世紀第2~
138	6-127	62次	赤褐色土器・环	ホコリ	不明	表土	底部	□	9世紀~
139	6-128	62次	赤褐色土器・环	ホコリ	無調整	表様	底部	□	9世紀第2~
140	6-129	62次	赤褐色土器・环	ホコリ	不明	表様	底部	□	9世紀~
141	6-130	62次	赤褐色土器・环	不明		旧耕作土	体部	今	権位
142	6-131	62次	赤褐色土器・环	不明		旧耕作土	体部	大	9世紀第2~
143	6-132	62次	赤褐色土器・环	不明		旧耕作土	体部	□	9世紀第3~
144	6-133	62次	赤褐色土器・环	不明		旧耕作土	体部	□	9世紀~
145	6-134	62次	赤褐色土器・环	ハラ切り	底部ナデ	地区北屈第7層	底部	十#	8世紀~
146	6-139	62次	赤褐色土器・环	ホコリ	無調整	地区北屈第7層	底部	集	9世紀第2~
147	6-140	62次	赤褐色土器・环	不明		地区北屈第7層	体部	□	9世紀~
148	6-141	62次	赤褐色土器・环	不明		地区北屈第7層	体部	□	9世紀第3~
149	6-153	62次	赤褐色土器・环	ホコリ	無調整	地区北屈第7層	底部	□	9世紀第3~
150	6-160	62次	赤褐色土器・环	ホコリ	無調整	地区北屈第7層	底部	□大何	10世紀第1
151	6-163	62次	赤褐色土器・环	ホコリ	無調整	地区北屈第7層	底部	秋#	9世紀~
152	6-164	62次	赤褐色土器・环	不明		地区北屈第7層	体部	□	9世紀第4~
153	6-176	62次	土師器・台付环	ホコリ	白周縁ナデ	地区北屈第9層	底部	辻	9世紀第4~
154	6-171	62次	土師器・环	不明		地区北屈第9層	体部	□	8世紀~
155	6-189	62次	赤褐色土器・环	不明		地区北屈第9層	体部	重#	9世紀第3~
156	6-190	62次	赤褐色土器・环	不明		地区北屈第9層	体部	□	9世紀第3~
157	6-209	62次	須恵器・环	ホコリ	無調整	地区北屈第9層	底部	□	9世紀第4
158	6-204	62次	須恵器・环	ハラ切り	底部軽いナデ	地区北屈第9層	底部	耐	9世紀第2~
159	6-205	62次	須恵器・环	ホコリ	無調整	地区北屈第9層	底部	兵	9世紀第2~
160	6-206	62次	赤褐色土器・环	ホコリ	無調整	地区北屈第9層	底部	□	9世紀第2~
161	6-207	62次	赤褐色土器・环	不明		地区北屈第9層	体部	吉#	9世紀~
162	6-220	62次	須恵器・环	ハラ切り	底部軽いナデ	地区北屈第9層	底部	□	9世紀第2~
163	6-221	62次	須恵器・环	ハラ切り	底部軽いナデ	地区北屈第9層	底部	□	8世紀~
164	6-222	62次	須恵器・环	ハラ切り	底部軽いナデ	地区北屈第9層	底部	十#	9世紀~
165	6-226	62次	土師器・台付組	ホコリ	白周縁ナデ	地区北屈第9層	底部	十	9世紀第4
166	6-229	62次	土師器・台付环	ホコリ	白周縁ナデ	地区北屈第9層	底部	□	9世紀第4~
167	6-243	62次	赤褐色土器・环	ホコリ	無調整	地区北屈第9層	体部	□手	9世紀第4~
168	6-244	62次	赤褐色土器・环	ホコリ	不明	地区北屈第9層	底部	官	9世紀~
169	6-245	62次	赤褐色土器・环	ホコリ	不明	地区北屈第9層	底部	□	9世紀~
170	6-246	62次	赤褐色土器・环	ホコリ	無調整	地区北屈第9層	体部	□	9世紀第4
171	6-247	62次	赤褐色土器・环	ホコリ	無調整	地区北屈第9層	底部	寺	9世紀第4
172	6-248	62次	赤褐色土器・环	ホコリ	無調整	地区北屈第9層	底部	耐	9世紀第3~
173	6-249	62次	赤褐色土器・环	ホコリ	無調整	地区北屈第9層	体部	□	9世紀第3~
174	6-250	62次	赤褐色土器・环	ホコリ	無調整	地区北屈第9層	体部	□	9世紀第3~
175	6-251	62次	赤褐色土器・环	不明		地区北屈第9層	体部	川#三	9世紀第4~
176	6-252	62次	赤褐色土器・环	不明		地区北屈第9層	体部	□	9世紀第3~
177	6-253	62次	赤褐色土器・环	不明		地区北屈第9層	体部	□黄	9世紀第3~
178	6-296	62次	須恵器・台付环	ハラ切り	体部下端カズリ	地区北屈101号	底部	万	9世紀第1
179	6-300	62次	須恵器・蓋	不明	ナデ	地区北屈第10層	体部	友	9世紀第1
180	6-301	62次	赤褐色土器・环	ホコリ		地区北屈第10層	底部	耐	9世紀第2~
181	6-310	62次	須恵器・环	ホコリ	無調整	地区北屈第11層	底部	七#	9世紀第1
182	6-311	62次	須恵器・环	ホコリ	無調整	地区北屈第11層	体部	□	9世紀第1
183	6-322	62次	赤褐色土器・蓋	不明		地区北屈第11層	体部	□	9世紀~
184	6-327	62次	須恵器・环	ハラ切り		地区北屈第12層	底部	因	8世紀第4
185	6-491	63次	須恵器・台付环	ホコリ	白周縁ナデ	表様	体部	□□	8世紀第3
186	6-493	63次	赤褐色土器	不明	体部外面カリ	表土	体部	□	不明
187	6-504	63次	須恵器・环	ハラ切り	底部丁寧なナデ	地区北屈第6層	底部	寺	9世紀第2
188	6-505	63次	須恵器・环	ハラ切り	底部ナデ	地区北屈第6層	底部	□	8世紀~
189	6-515	63次	須恵器・台付环	ハラ切り	白周縁ナデ	地区中央第7層	底部	万	9世紀第2~
190	6-829	67次	須恵器・蓋	ハラ切り	井戸部丁寧なナデ	表土	外面	京裡	9世紀第1
191	6-844	67次	赤褐色土器・蓋	不明		地区北屈第4層	つまみ	織	9世紀第2~
192	6-877	67次	須恵器・环	ハラ切り	底部丁寧なナデ	地区北屈第8層	底部	全#	9世紀第2
193	6-883	67次	赤褐色土器・环	ホコリ	無調整	地区北屈第8層	体部	物#	10世紀第1
194	6-893	67次	須恵器・环	ハラ切り	底部軽いナデ	地区北屈第9層	底部	刷#	9世紀第2
195	6-894	67次	須恵器・台付环	ホコリ	白周縁ナデ	地区北屈第9層	底部	□/本#	9世紀第2
196	6-895	67次	須恵器・环	不明		地区北屈第9層	外面	□	8世紀~
197	6-898	67次	土師器・台付环	ホコリ	白周縁ナデ	地区北屈第9層	底部	万呂	9世紀第4~
198	6-909	67次	赤褐色土器・环	ホコリ	無調整	地区北屈第9層	底部	可	9世紀第2~
199	6-910	67次	赤褐色土器・环	ホコリ	無調整	地区北屈第9層	底部	耐#	9世紀第4~

鶴ノ木地区出土墨書土器一覧表（4）

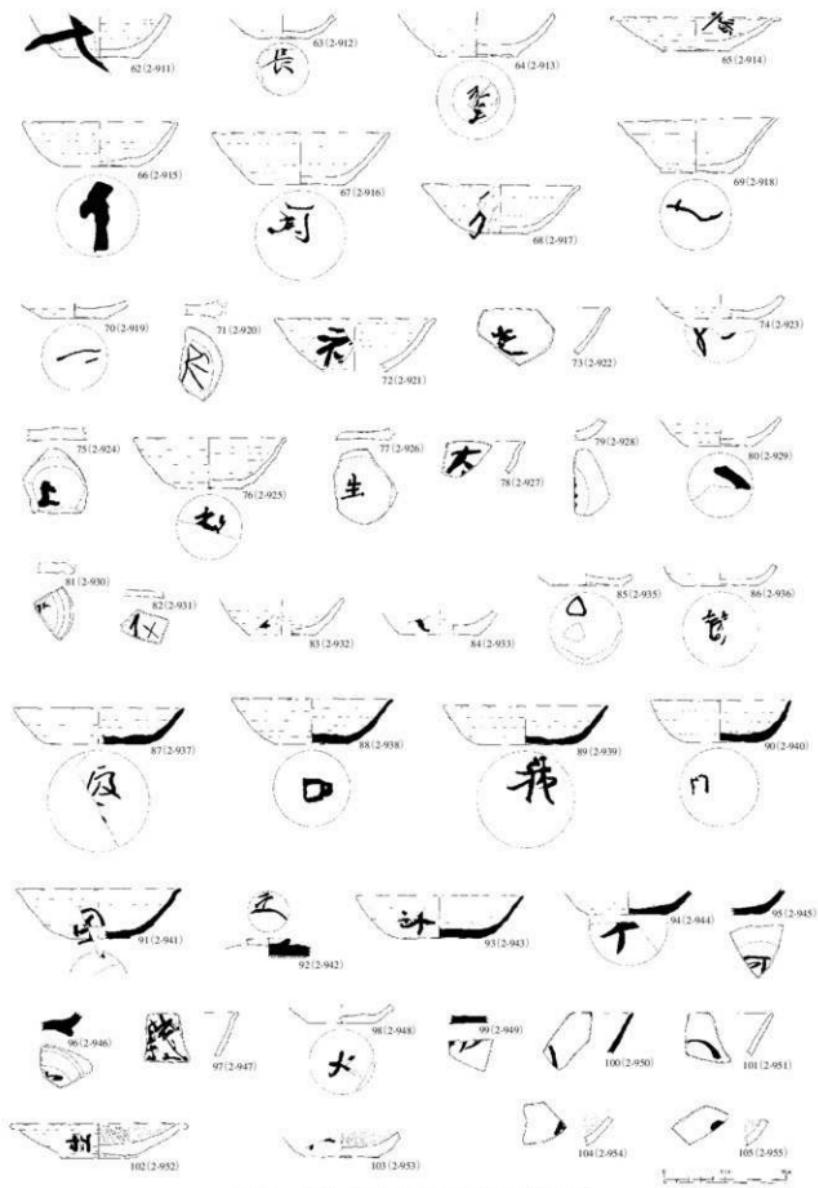
通番号	遺物番号	件数	器種	切り離し	調査技法	出土遺物・層位	墨書き状	参考書誌	時期	
200	6-911	67次	赤褐色土器・环	赤 切り	無調整	地区北都第9層	底 部	解説	9世紀第4~	
201	6-920	67次	銀色器・环	ヘラ切り	底部軽いナダ	地区北都第9層	体部・底部	中・巾	底部(削除)	9世紀第2
202	6-921	67次	銀色器・环	ヘラ切り	底部丁寧なナダ	地区北都第10層	底 部	段	9世紀第1	
203	6-922	67次	銀色器・环	ヘラ切り	底部ナダ	地区北都第10層	底 部	□	9世紀~	
204	6-927	67次	銀色器・环	赤 切り	無調整	地区北都第10層	底 部	五万	9世紀第1	
205	6-928	67次	銀色器・环	赤 切り	無調整	地区北都第10層	底 部	十万	8世紀~	
206	6-929	67次	銀色器・环	不 明		地区北都第10層	体 部	直	8世紀~	
207	6-931	67次	銀色器・台付环	ヘラ切り	台周縁ナダ	地区北都第10層	底 部	□	8世紀第4	
208	6-932	67次	銀色器・台付环	ヘラ切り	台周縁ナダ	地区北都第10層	底 部	□	9世紀第2	
209	6-942	67次	赤褐色土器・环	赤 切り	体部下端ケズリ	地区北都第10層	底 部	本	9世紀第2	
210	6-943	67次	赤褐色土器・环	赤 切り	体部下端ケズリ	地区北都第10層	体部・底部	解説	9世紀第2	
211	6-957	67次	赤褐色土器・环	赤 切り	無調整	地区北都第10層	底 部	干	9世紀第2~	
212	6-958	67次	赤褐色土器・环	赤 切り	無調整	地区北都第10層	底 部	拌	9世紀第2~	
213	6-959	67次	赤褐色土器・环	赤 切り	無調整	地区北都第10層	底 部	下	9世紀第2	
214	6-960	67次	赤褐色土器・环	不 明		地区北都第10層	体 部	□	9世紀~	
215	6-978	67次	銀色器・环	ヘラ切り	底部ナダ	地区北都第11層	底 部	丁毛	8世紀末~9世紀初	
216	6-979	67次	銀色器・环	ヘラ切り	底部軽いナダ	地区北都第11層	底 部	丁毛	8世紀末~9世紀初	
217	6-981	67次	銀色器・环	赤 切り	無調整	地区北都第11層	底 部	丁毛	9世紀第1	
218	6-983	67次	銀色器・蓋	ヘラ切り	天井部ナダ	地区北都第11層	外 面	巾	9世紀第1	
219	6-991	67次	赤褐色土器・环	赤 切り	体部下端ケズリ	地区北都第11層	底 部	毛	9世紀第1	
220	6-992	67次	赤褐色土器・环	赤 切り	体部下端ケズリ	地区北都第11層	底 部	刷	9世紀第1	
221	6-993	67次	赤褐色土器・环	赤 切り	底部から下端ケズリ	地区北都第11層	底 部	巾	9世紀第1	
222	7-033	66次	銀色器・环	ヘラ切り	底部ナダ	裏 土	底 部	鬼	9世紀~	
223	7-036	66次	銀色器・环	ヘラ切り	底部ナダ	裏 土	底 部	争	8世紀~	
224	7-038	66次	赤褐色土器・环	赤 切り	無調整	裏 土	底 部	□	9世紀第3~	
225	7-039	66次	赤褐色土器・环	赤 切り	無調整	裏 土	底 部	目	9世紀第3~	
226	7-040	66次	赤褐色土器・环	赤 切り	無調整	裏 土	底 部	□	9世紀第3~	
227	7-041	66次	赤褐色土器・环	赤 切り	無調整	裏 土	底 部	□	9世紀第3~	
228	7-052	66次	赤褐色土器・环	赤 切り	無調整	地区北都第4層	底 部	□	9世紀第3~	
229	7-074	66次	かわらけ・小皿	赤 切り	無調整	地区北都第5層	底 部	□	悲恋あり 12世紀末~13世紀初	
230	7-089	66次	銀色器・环	赤 切り	無調整	地区北都第9層	底 部	淨	9世紀第4	
231	7-090	66次	銀色器・环	赤 切り	無調整	地区北都第9層	体 部	□	9世紀第4	
232	7-140	66次	銀色器・环	ヘラ切り	底部ナダ	地区北都第10層	体 部・底部	口・三	9世紀第1	
233	7-111	66次	銀色器・环	ヘラ切り	底部ナダ	地区北都第10層	底 部	□	9世紀~	
234	7-114	66次	銀色器・环	赤 切り	無調整	地区北都第10層	底 部	□	9世紀第3	
235	7-118	66次	銀色器・环	赤 切り	無調整	地区北都第10層	底 部	墨 + 色	9世紀第2	
236	7-121	66次	銀色器・蓋	不 明		地区北都第10層	底 部	つまみ 男	軒用器	8世紀~
237	7-133	66次	赤褐色土器・环	赤 切り	無調整	地区北都第10層	体 部	◎△△	記号	9世紀第3
238	7-135	66次	赤褐色土器・环	赤 切り	体部下端ケズリ	地区北都第10層	底 部	□	9世紀第2	
239	7-136	66次	赤褐色土器・环	赤 切り	無調整	地区北都第10層	体 部	行人	調査	9世紀第3
240	7-137	66次	赤褐色土器・环	赤 切り	無調整	地区北都第10層	底 部	公	9世紀第3	
241	7-138	66次	赤褐色土器・环	赤 切り	無調整	地区北都第10層	底 部	手	9世紀第2~	
242	7-139	66次	赤褐色土器・环	赤 切り	無調整	地区北都第10層	底 部	□	9世紀第3~	
243	7-140	66次	赤褐色土器・环	赤 切り	無調整	地区北都第10層	底 部	□	9世紀~	
244	7-155	66次	銀色器・环	ヘラ切り	底部丁寧なナダ	地区北都第11層	底 部	下	9世紀第1	
245	7-156	66次	銀色器・环	ヘラ切り	底部ナダ	地区北都第11層	底 部	土	9世紀第1	
246	7-157	66次	銀色器・环	ヘラ切り	底部丁寧なナダ	地区北都第11層	底 部	門	9世紀第1	
247	7-158	66次	銀色器・环	ヘラ切り	底部ナダ	地区北都第11層	底 部	土	9世紀第1	
248	7-159	66次	銀色器・环	ヘラ切り	底部軽いナダ	地区北都第11層	体 部	大大大	横位・齊書	9世紀~
249	7-160	66次	銀色器・环	ヘラ切り	底部軽いナダ	地区北都第11層	底 部	排	9世紀~	
250	7-161	66次	銀色器・环	ヘラ切り	底部ナダ	地区北都第11層	底 部	□	8世紀第2	
251	7-162	66次	銀色器・环	赤 切り	無調整	地区北都第11層	底 部	中 + 中 ±	9世紀第1	
252	7-163	66次	銀色器・环	赤 切り	無調整	地区北都第11層	底 部	下	9世紀第1	
253	7-164	66次	上輪器・塊	赤 切り	体部下端ケズリ	地区北都第11層	底 部	山	9世紀第1	
254	7-170	66次	赤褐色土器・环	赤 切り	体部下端ケズリ	地区北都第11層	底 部	串	9世紀第1	
255	7-171	66次	赤褐色土器・环	赤 切り	体部下端ケズリ	地区北都第11層	底 部	巾	9世紀第1	
256	7-175	66次	赤褐色土器・环	赤 切り	無調整	地区北都第11層	底 部	厨	9世紀第2	
257	7-176	66次	赤褐色土器・环	赤 切り	無調整	地区北都第11層	底 部	厨	9世紀第2	
258	7-177	66次	赤褐色土器・环	赤 切り	無調整	地区北都第11層	底 部	□	9世紀~	
259	8-089	81次	赤褐色土器・环	赤 切り	無調整	SX1701木造器	底 部	直	9世紀後半	
260	8-490	81次	銀色器・蓋	ヘラ切り	大舟部ナダ	裏 土	外 面	□	軒用器	9世紀~
261	8-101	81次	銀色器・环	ヘラ切り	底部丁寧なナダ	地区中央第7層	底 部	上	9世紀第2	
262	8-104	81次	赤褐色土器・躰	赤 切り	体部下端ケズリ	地区中央第7層	体 部	寺	9世紀第2	
263	8-953	91次	銀色器・环	ヘラ切り	底部ナダ	S11976木面	底 部	天 ±	9世紀~	
264	8-967	91次	銀色器・蓋	ヘラ切り	天井部丁寧なナダ	S11978カマド内	天井部内面	門 ±	9世紀第2	



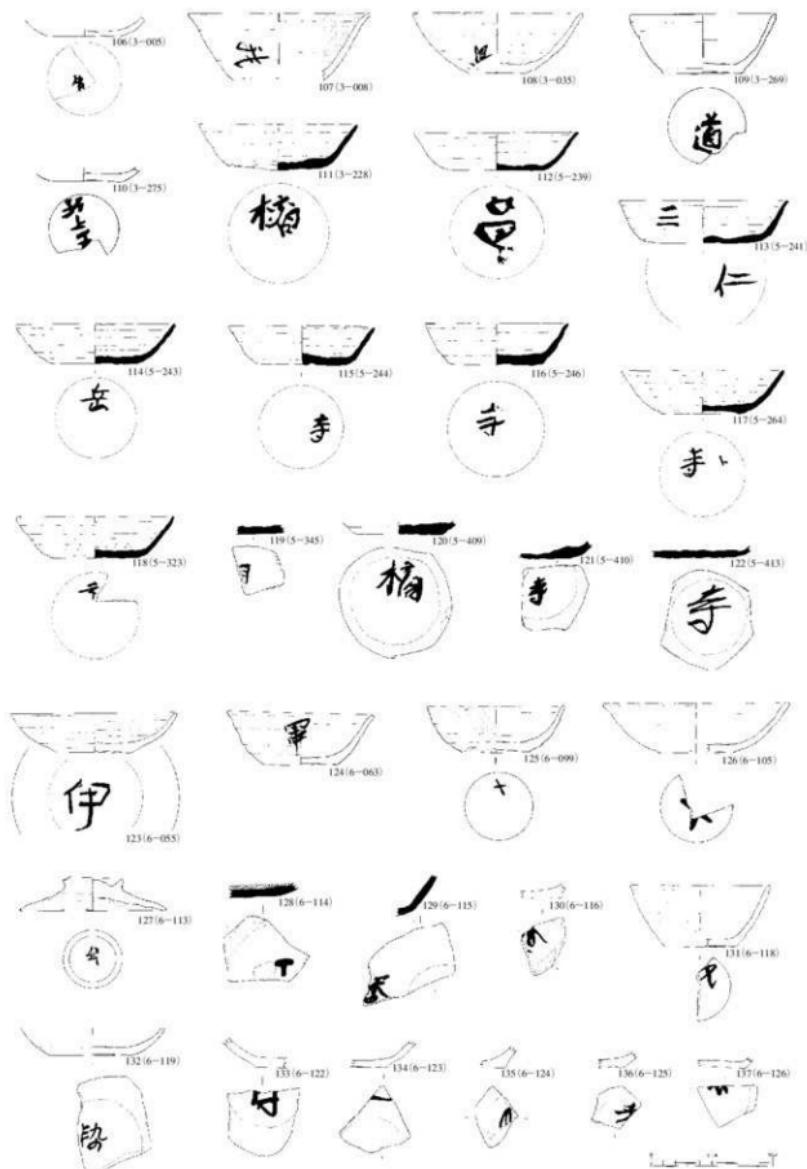
別編1 図4 講ノ木地区出土墨書土器集成①



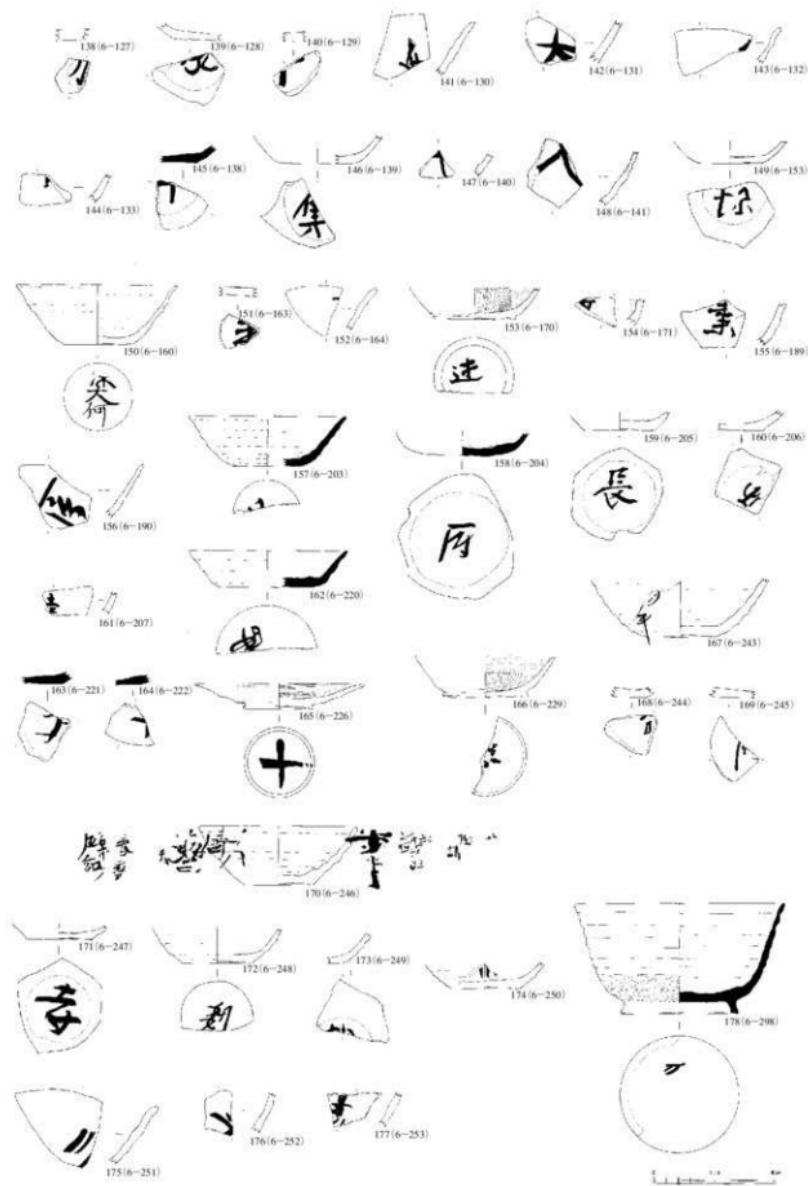
別編1 図5 萩ノ木地区出土墨書土器集成②



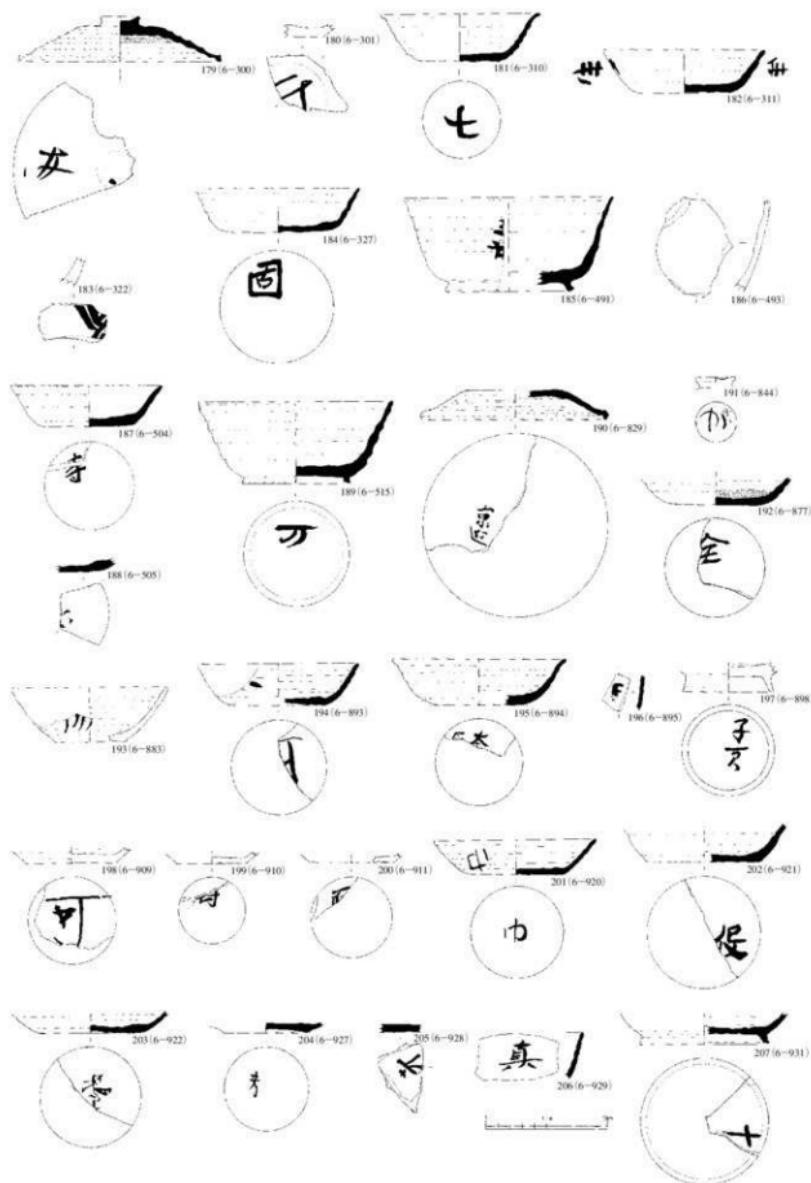
編1 図6 猿ノ木地区出土墨書土器集成③



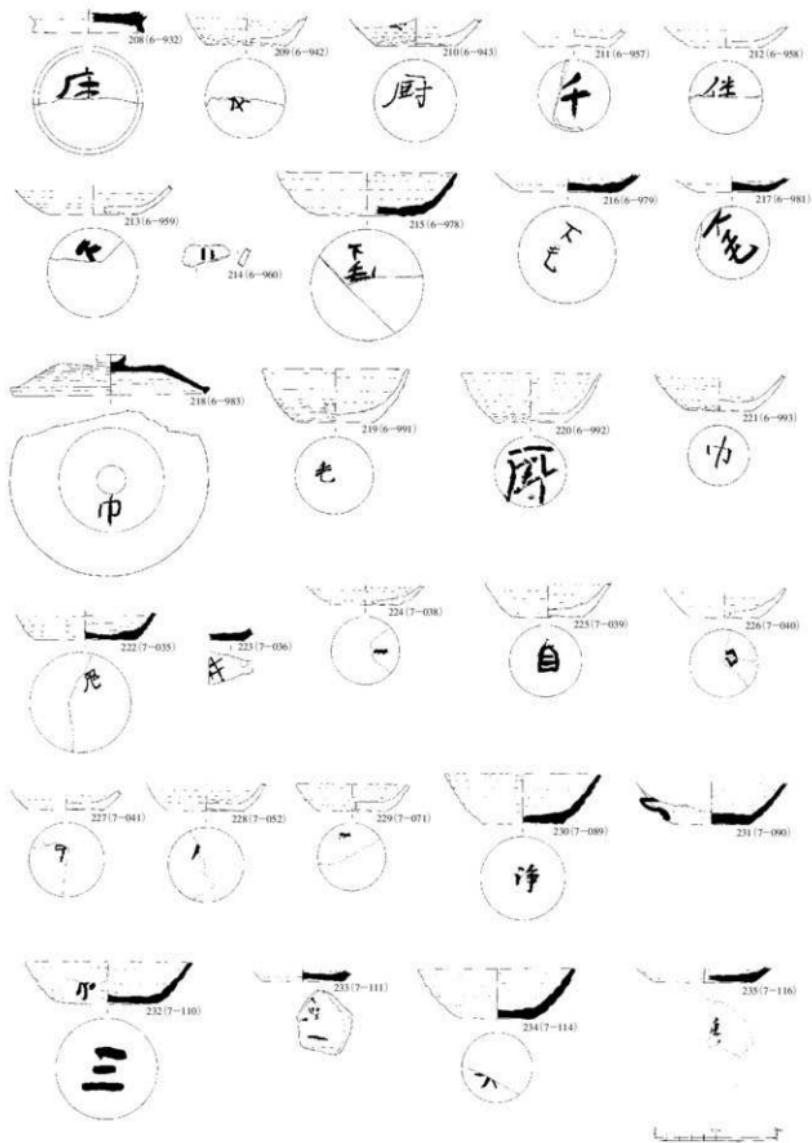
別編1 図7 猿ノ木地区出土墨書土器集成④



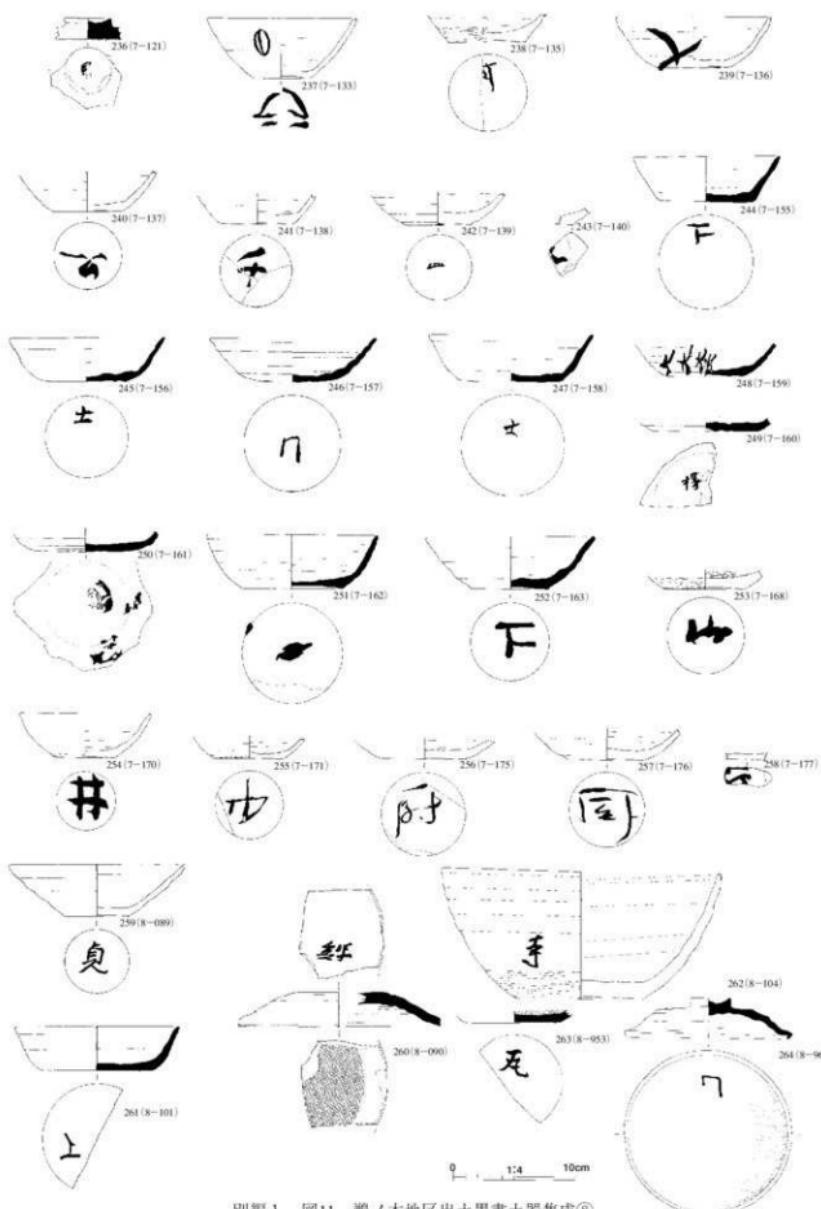
別編1 図8 猿ノ木地区出土墨書土器集成(5)



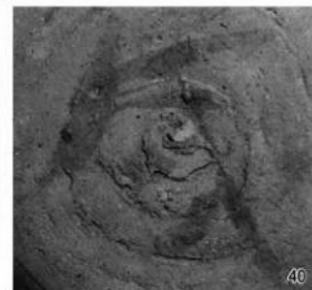
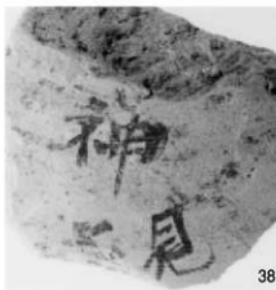
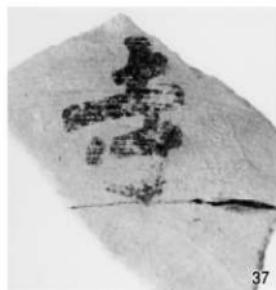
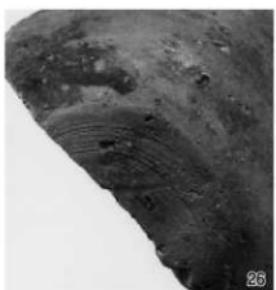
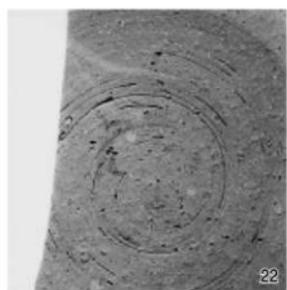
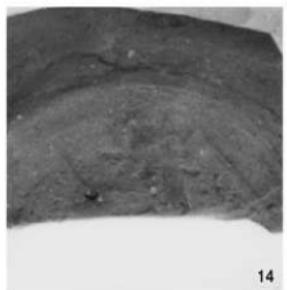
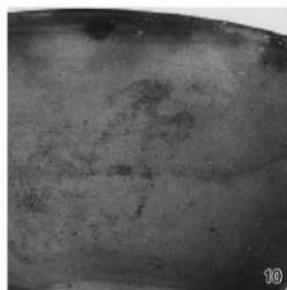
別編1 図9 鶴ノ木地区出土墨書土器集成⑥



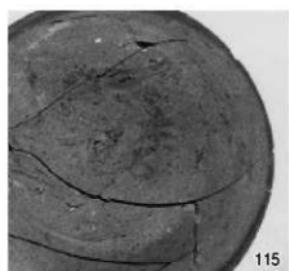
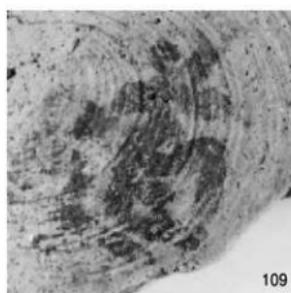
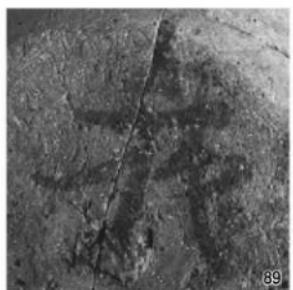
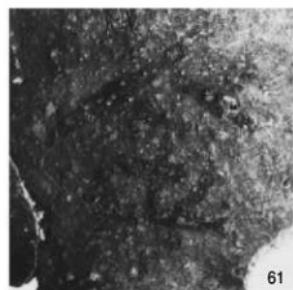
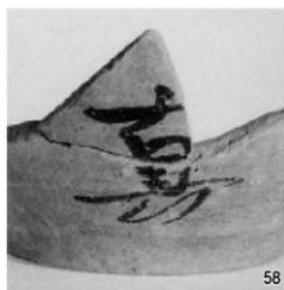
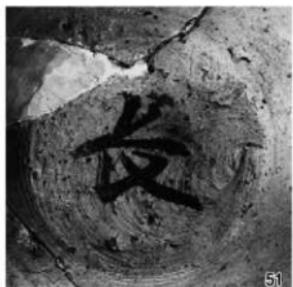
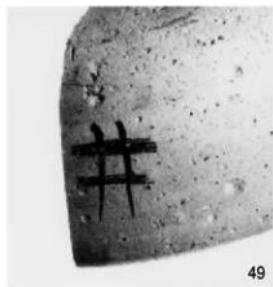
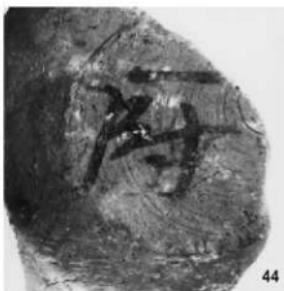
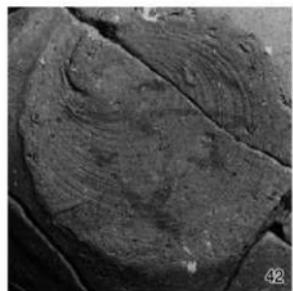
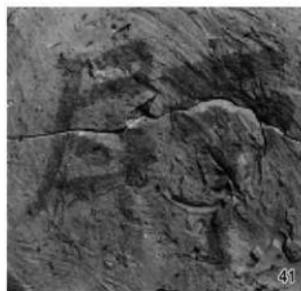
別編1 図10 猿ノ木地区出土墨書土器集成⑦



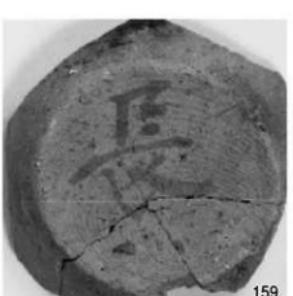
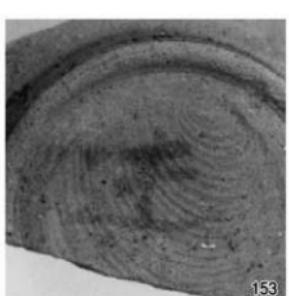
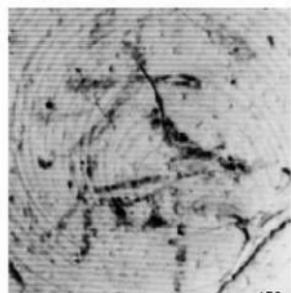
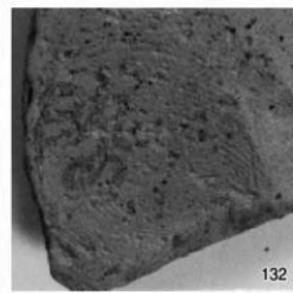
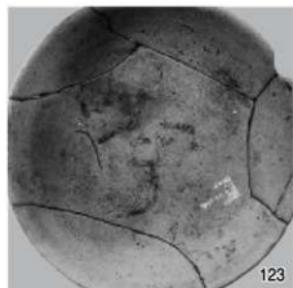
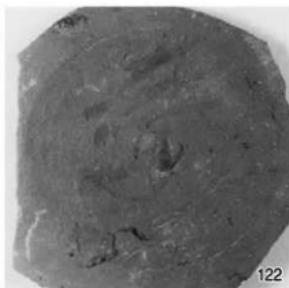
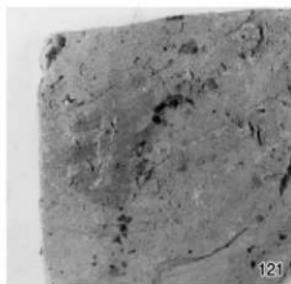
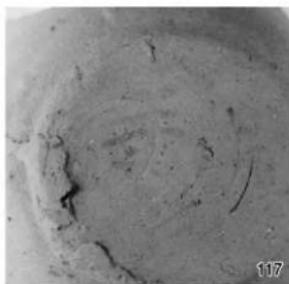
別編1 図11 萩ノ木地区出土墨書土器集成⑧



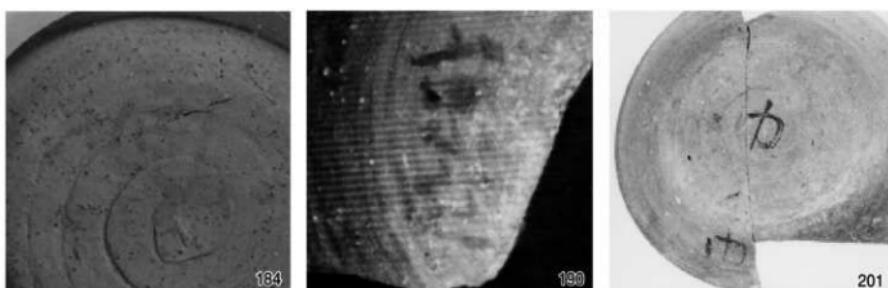
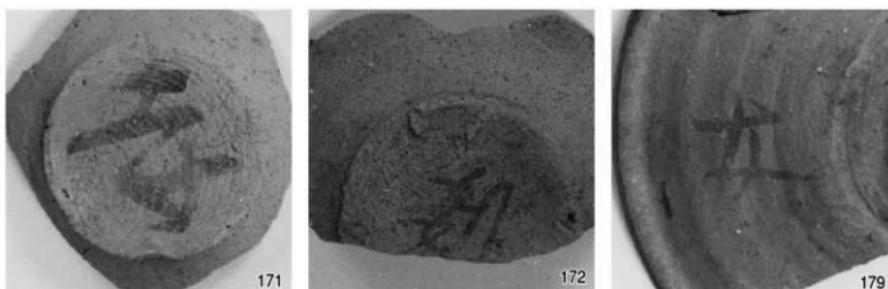
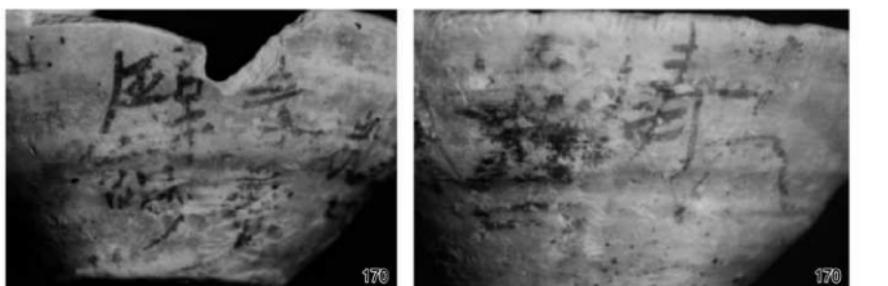
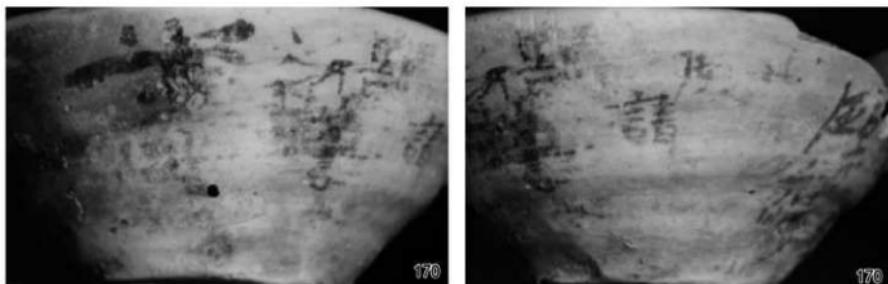
別編 1 図版 1 墨書き土器 (1)



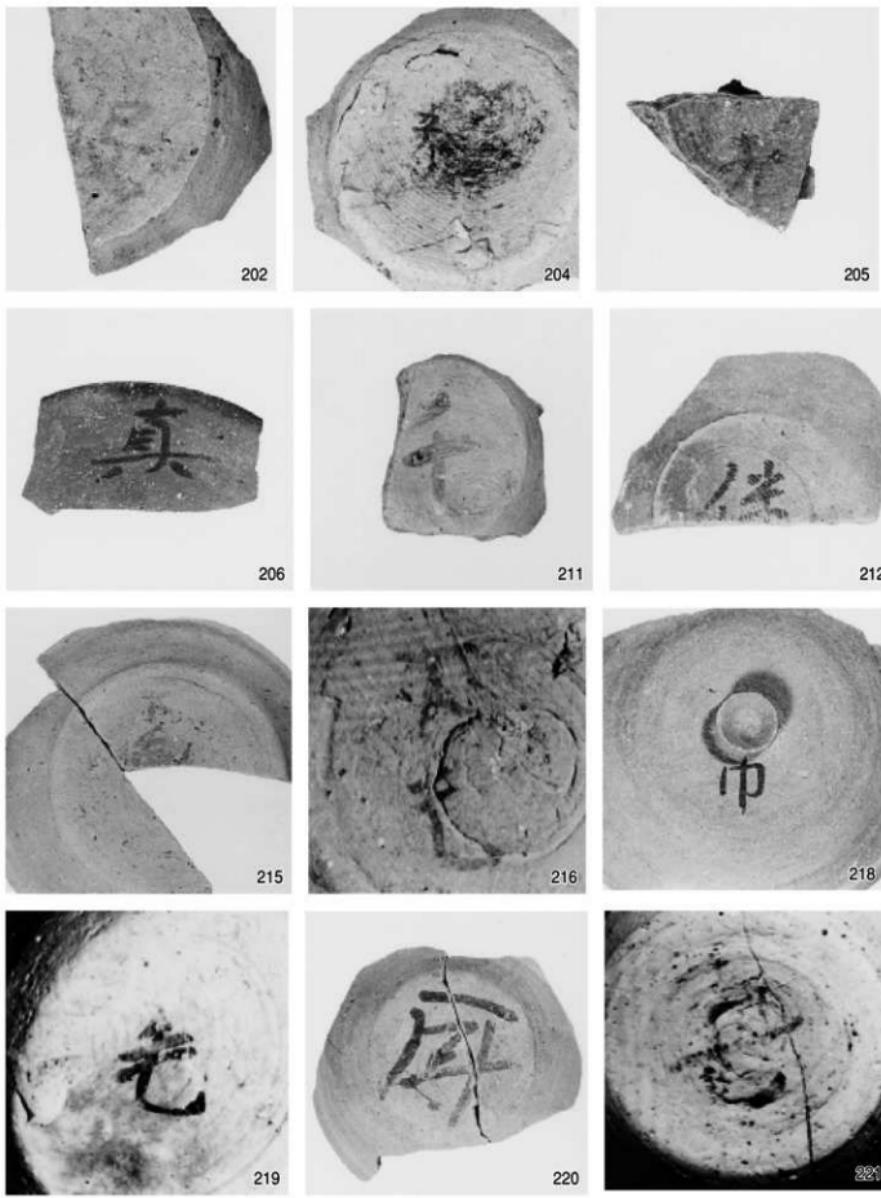
別編 1 図版 2 墨書土器 (2)



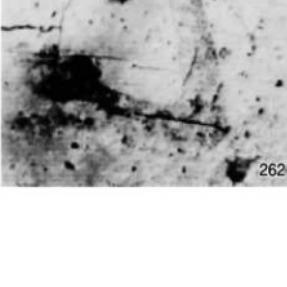
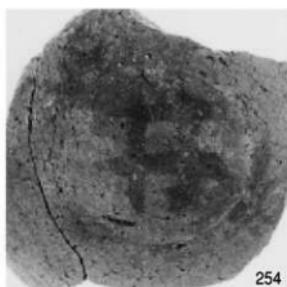
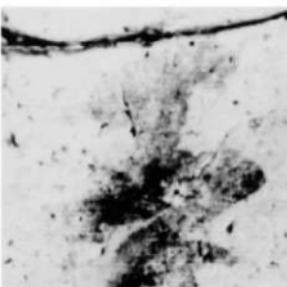
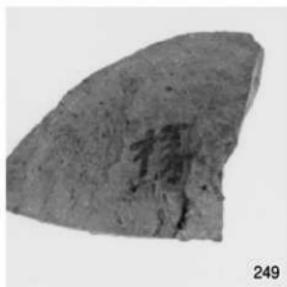
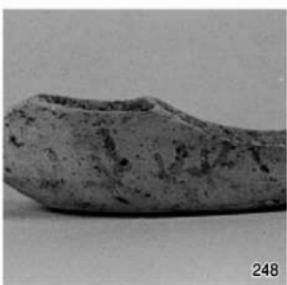
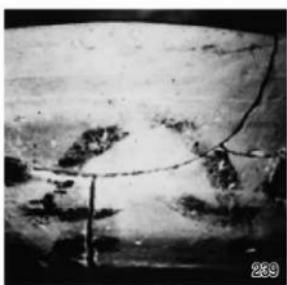
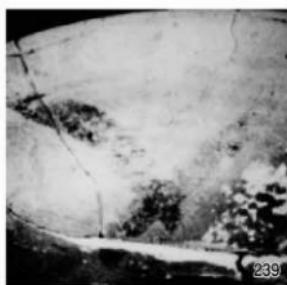
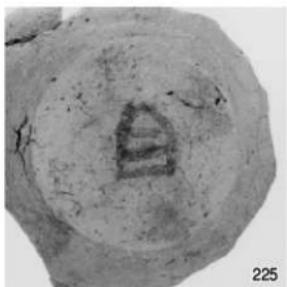
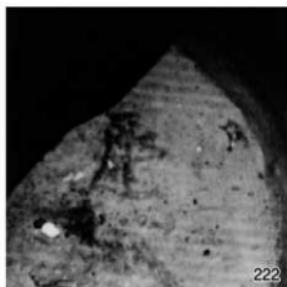
別編1 図版3 墨書き土器（3）



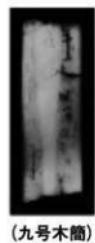
別編1 図版4 墨書き土器(4)



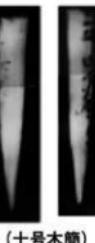
別編 1 図版 5 墨書き土器 (5)



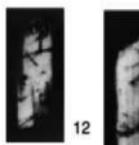
別編1 図版6 墨書き器 (6)



9



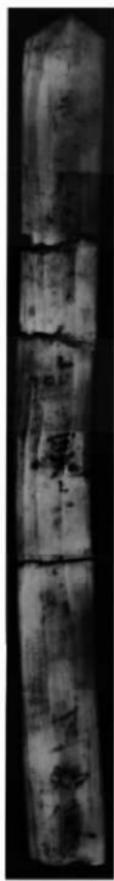
10



12



11



8



14

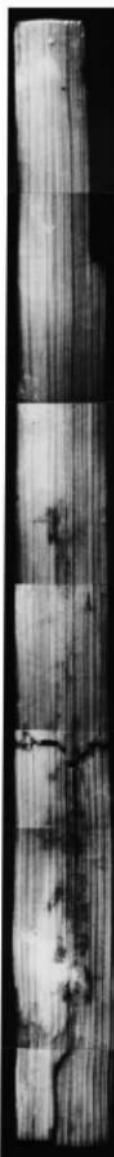


(十三号木筒)



(十五号木筒)

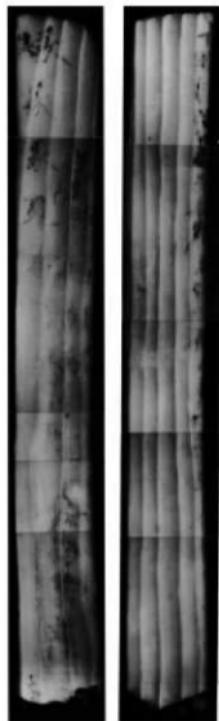
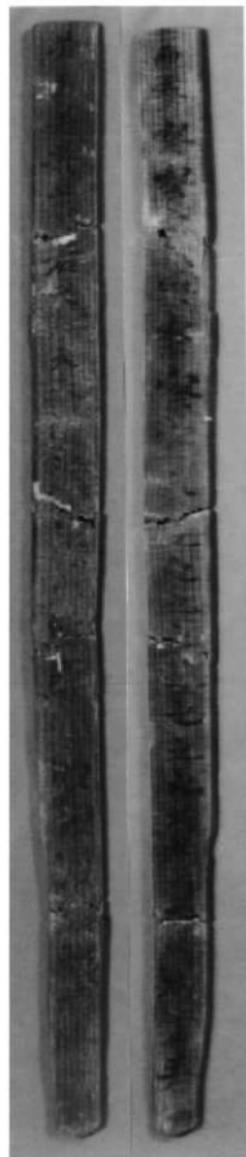
15



(七号木筒)

7

別編2 図版3 第25次調査 SE406井戸跡出土木筒写真③、  
第39次調査 SG463沼地跡北西岸出土木筒写真



(四号木簡)

\*四号木簡と五号木簡は「秋田城跡出土文字資料集Ⅱ」報告段階で別の木簡として報告されたが、現段階では接合し同一個体の木簡となることが判明している。

(五号木簡)

6

(六号木簡)

別編 2 図版 2 第25次調査 SE406井戸跡出土木簡写真②



(三号木簡)

3



3



3



(一号木簡)

1



2

(二号木簡)



※一号木簡以外は全て赤外線テレビカメラ  
により撮影

第五次調査 S E 四〇五井戸跡

第六号木簡。六世紀に成立した中國の詩文集「文選」の「洛神賦」(魏

の曹植が詠んだ賦)の「迫りてこれを察れば、灼きて美奐の瀑波を出する  
が若し」の一節を習書した習書木簡。秋田城に勤務した官人たちが「文選」  
に親しんでいたことを示す。

- 7 「解 申進人事合五人



- 九一型式  
第三九次調査 SG 四六三沼跡北西岸

「



- 九一型式  
第三九次調査 SG 四六三沼跡北西岸

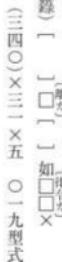
解説

四五八×四〇×一〇 ○一型式  
第二五次調査 S E 四〇五井戸跡

- 九一型式  
第三九次調査 SG 四六三沼跡北西岸

解説 で出土した第七号木簡。解は下級の役所ないし役人から上級の役所  
ないし役人に上申する文書。人の貢進を示す解文本簡で、「五人」の下に  
は人名が記載されていたと考えられるが判読できない。

- 8 「□□□□□」 [ (符跡) ] □ [ (符跡) ] □ [ (符跡) ] □ [ (符跡) ]



- 九一型式  
第三九次調査 SG 四六三沼跡北西岸

(三四〇)×三一×五 ○一九型式  
第三九次調査 SG 四六三沼跡北西岸

解説 第八号木簡。呪いに用いる呪符木簡。斎串・刺串・人形・馬形・人

面墨書き土器などの「祓い」祭祀関係の祭祀具と供伴している。陰陽道に関  
係する祭祀に使用されたものと推定される。

解説

第一四号木簡。長方形の材の一端を尖らせたもの。

- 9 ×解文「」×

(一〇四×二五×四 ○五九型式  
第三九次調査 SG 四六三沼跡北西岸

解説 第九号木簡。解文に関わるもの。

- 九一型式  
第三九次調査 SG 四六三沼跡北西岸

解説 第一五号木簡。削屑。

10 □一斗四合

（和田）

七月

（和田）

（八〇）×一四×三 ○五九型式  
第三九次調査 SG 四六三沼跡北西岸

解説 第一〇号木簡。食料の授受に関わるもの。

- 11 者□

- 九一型式  
第三九次調査 SG 四六三沼跡北西岸

解説

第一号木簡。削屑。

- 女須□

- 九一型式  
第三九次調査 SG 四六三沼跡北西岸

解説

第一二号木簡。削屑。

- 九一型式  
第三九次調査 SG 四六三沼跡北西岸

13 ×□□七日×

- 九一型式  
第三九次調査 SG 四六三沼跡北西岸

- 九一型式  
第三九次調査 SG 四六三沼跡北西岸

14 (墨線四本)

- (六七)×一五×一 ○五九型式  
第三九次調査 SG 四六三沼跡北西岸

- 九一型式  
第三九次調査 SG 四六三沼跡北西岸

解説 第一四号木簡。長方形の材の一端を尖らせたもの。

- 15 □ (曲物の側面に墨書)

- 九一型式  
第三九次調査 SG 四六三沼跡北西岸

解説 第一五号木簡。削屑。

1 天平六年月

三一·五×三×一〇五九型式

第二次調査SE四〇五井戸跡

第一号木簡。文字は線刻で、秋田城跡の創建が天平五年（七三三）に秋田村高清水岡に遷置された出羽守に贈ることを裏付ける資料。其伴した木簡の紀年（天平勝宝四・五年）とは年代差がある。本木簡の上部には鉄釘様のものが認められ、木札として創建以来長期にわたって井戸館に打ち付けられていた可能性が高い。

2  
「浪人丈部八手五斗」  
勝寶五年調米

第二次調査SE四〇五井戸跡

第二号木簡。出羽・陸奥両国での調査の初見資料。戸籍に編附されてい

あるが、出羽国に領有する者として自用に留め置き、或は他の領主の財源として使用したことが「延喜式」に規定されている。更進物の付札であることから、秋田城が調査の納付先と考えられる。「勝寶五年」は天平勝宝五年（七五三）。

〔宇宙字於大大飽〕

二八・三×三四×三四 ○六五型式  
第二五次調査 S E 四〇五井戸跡

第三号木簡。一辺三・四センチメートルの角材の三面に出羽国の郡名な

· · · · · 而察察察察察察察察察察之之之之之之之之灼灼灼灼灼灼若若若若若若夫夫夫夫巢巢巢出綠波波波波醕醕醕醕醕醕

四五八×一六×九 ○一九型式

## 2 秋田城跡鵜ノ木地区出土木簡集成

### 木簡凡例

一、本編は昭和五十三年度の第二十五次、昭和五十九年度の第三十九次発掘調査で出土した主要な木簡を収載した。

二、実測図、および写真については縮尺を任意とした。木簡の法量については数値を参照されたい。

三、数字は、木簡の長さ×幅×厚さを、( ) 内は欠損部があるために全体の寸法が不明なため残存部の寸法を示している。単位はミリメートルである。

四、积文に加えた符号は（独）文化財研究所奈良文化財研究所・木簡学会で使用のものを使用した。

「 」 木簡の上端ならびに下端が原形をとどめていることを示す  
(端とは本目方向の上下両端を言う)  
< 木簡の上端・下端に切り込みのあることを示す。  
□□□ 欠損文字のうち字数の確認できるもの。  
〔 〕 欠損文字のうち字数の数えられないもの。  
× 前後に文字の続くことが内容上推定されるが、折損等により文字が失わっているもの。  
「 」 異筆、追筆。

六、本簡の积文と解説は『秋田城跡出土文字史料集Ⅱ』『秋田市史』を参考にした。

( ) 校訂に関する注で、原則として积文の右傍に付し本文に置き換えるべき文字を含む場合。  
カ 筆者、編者が加えた注で、疑問の残るもの。  
II 組み版の関係で一行のものを二行以上に組まなければならなかつた場合、行末・行初についたもの。

五、最上段の数字は型式番号（奈良文化財研究所制定・木簡学会使用のもの）を示す。

○一形式 短冊型。

○一九形式

○三三形式

○五一形式

○五九形式

○八一形式

○九一形式

長方形の材の一端を尖らせたもの。  
長方形の材の一端の左右に切り込みを入れたもの。

長方形の材の一端に切り込みを入れ、他端を尖らせたもの。

長方形の材の一端を尖らせたもの。  
長方形の材の一端を尖らせたものであるが、他端は欠損あるいは腐食して不明なもの。

欠損文字のうち字数の確認できるもの。  
欠損、腐食その他によつて原形の判明しないもの。

削屑

42 建長四年（一二五二）六月廿十五日丁丑

（吾妻鏡第四十二）

六月廿十五日丁丑。天晴。諸寺佛供灯油等。追日及陵廢由。住持訴

申之。仍今日有其沙汰。被下御教書。云。其狀伝

諸堂寺用供米事

右。陵遲無沙汰之間。有其。訴就中大慈寺者。右大臣家建立。異于

他之間。可專御佛事之處。雜堂等存疎懶。至緩怠之儀。尤以不便。

早尋明子細可被申沙汰之狀。依

仰執達如件

建長四年六月廿五日

相模守

陸奥守

秋田城介殿

43 元弘三年（一三三三）八月十五日

（A）〔公卿補任〕  
正慶二年癸酉

參議 正四位下  
（前略）筆者 同光顯秋田扶桑七日詔爲本職。八月十五日蒙出羽守。宣爲

44 元弘四年（一三四四）二月

（齊藤文書）  
（前略）朝敵餘黨人等、小鹿島并秋田城今添植築所々、可亂入津輕一後

45 延文元年（一三五六）六月

（新渡戸文書）  
出羽國秋田城古四天王寺別當助法印恒智代  
安堵御外題手續證文等、被經嚴密御沙汰、被停止內海三郎  
三浦彌六以下輩等去々年文和八月以來非分滋妨、被沙汰付下地

口寺家、全所務專佛神事、彌抽御祈禱忠勤、寺領當所問事  
嗣進

一通 相傳系圖

一卷 關東代々御下知、當御代安堵御外題手續證文等

一卷 御祈禱御教書、同御卷數御返事、依繁略之

右當寺者、爲聖德太子建立之地、天下無雙靈場也。而成偏僧

都以來、至當寺務恒智法印、六代相傳當知行無相違者也、仍

致都鄙多年御、祈禱忠勤處、被内海三郎、自尾張國內海羽津城

令沒落、爲御敵身、濫妨之條、希代所行也、依之佛神事等令退

轉之、爲無御誠哉、就冥」雖有恐者哉、所詮被經嚴密御沙汰、

仰御使被止當寺達亂、被沙汰付「下地於寺家、被處其身於重科、

全所務專佛神事、彌欲抽御祈禱」忠勤矣、仍粗言上如件

延文元年六月 日

46 長享三年（一四八九）十月

（神宮寺八幡神社棟札）  
（前略）筆者 秋田城四天王寺内黄金寿院内 献贊□

秋田城立用不動、可作官符、付甘萬煎使送。出羽守義理朝臣許上（後略）

**建保六年（一二一八）五月十八日乙丑**（吾妻壽）  
五月十八日乙丑。秋田城介入道号高野名咒。法地。卒字昭在。高野。  
從五位下行出羽卿介藤原朝臣影盛。（号名見地）遷房。

36 永承五年（一〇五〇）九月 平重成の出羽城介任命記事

吾

妻鏡 卷二十三 建保六年三月十六日条

(前略) 当載者、醍醐天皇御宇昌泰二年以来中絶。而至後冷泉院御時、承五年九月一日、平繁盛始任之。(後略)

年正月廿七日出家

37 永承六年（一〇五一）

(陸與話記)

六箇郡内、有安倍頼良者。是同忠良子也。父祖俱果敢、而自称「酋長」。

書一（中略）

六箇郡內、有安倍頼良者。是同忠良子也。父祖俱果敢、而自称酋長。威權甚、使村落皆服。橫行六郡、囚辱于庶士。驕肆滋蔓、漸出衣云之外。不輸賦貢、無勤徭役。代々志已、雖庶上不能制之。永承之頃、大守藤原朝臣登任免、數千兵攻之。出羽秋田城介平朝臣重成為前鋒。大守率大夫士為後。頼良以諸部囚辱拒之、大戰于鬼切部。大守軍敗績、死者甚多。於是朝廷有議、拟追討特軍。衆議所歸、独在源朝臣頼義。(後略)

三月十六日丁亥。晴。波多野於次郎朝定自京都歸着。持參去六日陰。書。(中略)  
出羽城介藤景盛。(中略)  
先召藤石衛門尉景盛於御前。賜聞書。範高於御前。是任「出羽守」之故也。  
景盛恐悅彰顏色。當職者。醍醐天皇御宇昌泰二年以來中絕。而到後冷泉院御時。永承五年九月日。平繁盛始任之。其後亦無補任人之處。今被興絕之條。尤可謂珍重歟。(後略)

4 陈裕川

38 文治六年（一一九〇）正月六日辛酉（吾妻鏡第十）

奧州故泰衡郎從大河次郎兼任以下。去年初冬以來。企「叛逆」。或号「伊豫守義經」。出於出羽國海鳴主。或稱「左馬義伴」。朝日冠者。起于同國。

嘉祐三年（一二〇〇）

一、被任秋田城介間事  
出羽國

卷之三

余騎凶徒。向鎌倉方。令首途。其路歷。河北。秋田城等。越。大關山。疑。出。于多賀國。府。(後略)

外國有名公所書加如此，卽日被宣下之謂也。以出凡分數，加行秋田城務、閱書與所載又如此，嘉慶三年義景拌任之時如此，件

義景父、健保比被任了，其前後此事頗中絕

29 元慶二年（八七八）三月二十九日乙丑（日本三代実録 卷二十  
三）

出羽国守正五位下藤原朝臣興世飛駕上奏、夷俘叛亂、今月十五日燒損秋田城、并郡院屋舍、城辺民家。仍且以鎮兵防守、且徵發諸郡軍。勅符曰、得彼國今月十七日奏狀、既知、夷虜悖逆、攻燒城邑。犬羊狂心、暴惡為性。不加追討、何有懲懥。事須量發精兵、扼其喉咽。但時在農要、人事耕種。若多動衆、恐妨民務。夫上兵伐謀、良將不戰。

巧設方略、以安辺民。亦別有勅符、下陸奥國。若當國之兵、力不足制者、早告陸奥、令其赴救。凡蠻貊之心、候時而動。雖云醜類之可責、抑亦國宰之不眞。宜施慰撫之化、以遏風塵之亂。又勅符陸奧國司曰、得出羽國今月十七日奏狀、稱、逆賊悖亂、攻燒城邑者。兩國接境、非常難知。若無子戒、何備不虞。宜加警肅、以鎮國內。亦若出羽國來請援兵、隨發精勇、應時赴救。兵貴神速、罪深逗留。待其告急、莫失失機。

30 元慶五年（八八二）四月二十五日壬寅（日本三代実録 卷三十  
九）

出羽国元慶二年為夷虜所燒盜穀領畠二万五百一束六把八分六毫、糧七百五十斛、革短甲三百卅七領、胄五百卅三枚、鐵鉢一百五十七枚、革鉢五十枚、木鉢三百廿六枚、箭八千三百八十隻、大角六枚、小角八枚、鼓六十面、大刀五十五柄、弓七十一張、鉄鈎五十五柄、弓廿九具、手弩一百具、鉄十三柄、鍼八柄、楯五十二枚、槍一百八十一竿、鎗槍七十三竿、鰐尾槍一百八竿、官舍一百六十一宇、城櫓廿八字、城櫓槽廿七基、郭櫓槽六十一基。是日、有勅、免除以省交替之煩。

31 延喜十五年（九一五）七月十三日（扶桑略記 第廿三禪書）  
出羽国言上雨灰高二寸、諸鄉農桑枯損之由。

32 天慶二年（九三九）四月十七日（貞信公記抄）  
出羽国馳駕言上。凶賊亂逆、与秋田城軍合戰事等。左衛門督入夜參入、彼聞解文、令外記送家。

33 康保四年（九六七）二月十一日（魚魯墨抄 四）  
以秋田城介任出羽守一例

康保四年二月十一日、即召大臣、前任物六人之中、以散位大江澄景（為右衛門權佐、散位美忠為出羽守。美忠前任出羽守、為立數十字官舍、委納于余石不動、依有其勤、准任源資生城司任滿之後、除授任。

34 年次未詳 出羽城介の補任規定（西宮記 卷十三）

諸宣旨

（中略）

陸奥鎮守府給兵部一城介同之。

帥隨身（中略）。

出羽城介事賜官符。可行秋田城事由、

※出羽城介についてはこのほか「北山抄」、「侍中群要」、「江家次第」など

の有職故実書にも記事がある。それによれば、出羽城介は官旨をもつて任命される勅任相当の官職であり、通常の除目で出羽介に任命され、その後の臨時の除目の際に太政官符（本史料では藏人所の牒ともされる）を下して出羽城介に任じることとされており、出羽城介は鎮守府将軍とともに現地に赴任する受領官相当の官である。

略、人物散亡。勅、宜遷越後國依例供給。

23 承和八年（八四二）二月十三日甲寅（續日本後紀 卷十）  
出羽國百姓二万六百六十八人賜復一年。以年穀不登飢餓相仍也。

20 延曆二十三年（八〇四）十一月二十二日癸巳（日本後紀 卷十）

（二）  
出羽國言、秋田城建置以來卅余年。土地墳塙、不宜五穀。加以孤居  
北隅、無隣相救。伏望永徙停廢、保河邊府者。宜停城為郡。不  
論土人、浪人、以住被城者編附焉。

24 承和十三年（八四六）五月二十九日己巳（續日本後紀 卷十六）  
出羽國凱。遣使賦給。

21 天長七年（八三〇）正月二十八日癸卯（類聚國史 卷百七十二）

出羽國緊伝奏云、鎮秋田城國司正六位上行介藤原朝臣行則今月三日酉時  
驟倒、今日辰刻、大地震動、譬如雷霆。登時城壞官舍并四天王寺丈六佛  
像、四王堂舍等、皆悉顛倒。城內屋仆、擊死百姓十五人、支柱折損之類一  
百余人也。歷代以來未嘗有聞。地之割辟、或廻舟許丈、或廻廿許丈、無  
處不辟。又城邊大河云秋田河。其水濁黑、流細如溝。疑是河底辟分、

25 嘉祥三年（八五〇）六月二十八日甲戌（日本文德天皇實錄 卷  
二）  
出羽國奏言、境接夷落、動為風塵。至有嫌疑、必資占驗。諸省  
史生一員、置陰陽師一員。許之。

26 嘉祥三年（八五〇）十月十六日庚申（日本文德天皇實錄 卷二）  
出羽國言上、地大震裂、山谷易處、压死者衆。

27 天安三年（八五九）三月二十六日壬午（日本三代実錄 卷二）  
出羽國言上、地大震裂、山谷易處、压死者衆。

28 貞觀十七年（八七五）十一月十六日乙未（日本三代實錄 卷一  
十七）  
出羽國言、渡鷦鷯反叛。水軍八十艘、殺略秋田鮑兩郡百姓廿一人。  
詔令出羽國秋田郡俘囚道公宇夜古、道公宇奈岐度之。先是國司上  
言、件俘囚等、幼棄野心、深愧異類。歸依弘理、苦願持戒。仍特許之。  
勅牧宰討平之。

22 天長九年（八三二）七月二十七日己巳（類聚國史 卷百九十一）  
副見兵備不虞者。臣末審商量、事在意外。仍且差援兵五百人、配  
遣、准令馳駕言上。但損物目細錄追上。

23 天長九年（八三二）七月二十七日己巳（類聚國史 卷百九十一）  
出羽國言、上窮弊百姓。詔令賑給。夷俘亦在此內。

及渡渤海、渤海一船遇浪傾覆。大使胥要德等番人沒死。広成等卒遣衆到着出羽国。

之。但來使輕微、不足以為責。今欲遣使給粟自被放還。其駕來船、若有損壞、亦宜修造。婦蕃之日、勿令留滞。

### 11 天平十八年（七四六）是年（續日本紀 卷十六）

是年、渤海人及鐵利想一千一百余人、慕化來朝。安置出羽國、給衣糧、放還。

### 12 天平寶字四年（七六〇）三月十九日（正倉院流出文書）

九部足人頓首々々死罪々々謹解申尊者御足下

足人正身當御馬從仕奉思、然有不令依。生江臣古麻呂御產業所他人使乍、足人安人等、然者、郡司取放雜役令、斬使甚無飯。加以阿支太城米綱丁遷入。由此京來不持參上。仍具注愁狀。附物部安人頓首々々、死罪々々、謹解。

天平寶字四年三月十九日 九部足人謹狀

### 16 宝龜十年（七七九）九月二十七日癸巳（續日本紀 卷三十五）

勒陸奥出羽等國、用常陸調純、相模庸純、陸奥稅布、充渤海鐵利等祿。又勒、在出羽國蕃人三百五十九人、今屬嚴寒、海路艱險。若情願今年留滯者、宜悉聽之。

### 17 宝龜十一年（七八〇）八月二十三日乙卯（續日本紀 卷三十六）

出羽國鎮狄將軍安倍朝臣家麻呂等言、秋志良須俘因宇奈古等歎曰、己等撫憑官威、久居城下。今此秋田城、遂水所棄城、為番舊還保手者。下報曰、夫秋田城者、前代將相會議所建也。禦敵保民、久經歲序。一旦舉而棄之、甚非善計也。宜且遣多少軍士、為之鎮守。勿令喟喟彼熾服之情。仍即差使若國司一人、以為專當。又由理標者、居賊之要害、承秋田之道。亦宜遣兵相助防禦。但以、宝龜之初、國司言、秋田難保、河邊易治者。當時之議、依治河邊。然今積以歲月、尚未移徙。以、此言之、百姓重遷明矣。宜存此情、歷問狄俘并百姓等具言、彼此利害。

### 14 宝龜六年（七七五）十月十三日癸酉（續日本紀 卷三十三）

出羽國言、蝦夷余蠻、猶未平殄。三年之間、請鎮兵九百九十六人、且鎮要害、且遷國府。勒、差相模、武藏、上野、下野四國兵士發遣、野代凌。於常陸國安置供給。

### 18 延曆五年（七八六）九月十八日甲辰（續日本紀 卷三十九）

出羽國言、渤海國使大使李元泰已下六十五人、乘船一隻、漂着部下。被蝦夷略十二人、見存卅一人。

### 15 宝龜十年（七七九）九月十四日庚辰（續日本紀 卷三十五）

勒、渤海及鉄利三百五十九人、慕化入朝、在出羽國。宜依例供給

### 19 延曆十四年（七九五）十一月三日丙申（類聚國史 卷九十三）

出羽國言、渤海國使呂定琳等六十八人、漂着夷地志理波村、因被劫

1 齊明天皇四年（六五八）四月

（日本書紀 卷二十六）

阿陪臣國名、率船師一百八十艘、伐蝦夷。鰐田・淳代二郡蝦夷、望怖乞降。於是、勦軍、陳船於鰐田浦。鰐田蝦夷恩荷、進而誓曰、不為官軍、故持弓矢。但奴等、性食肉故持。若為官軍、以儲弓矢、鰐田浦神知矣。將清白心、仕官朝矣。仍授恩荷、以小乙上、定淳代。

津輕二郡々領。遂於有間浜、召聚渡鷗蝦夷等、大饗而帰。

2 齊明天皇五年（六五九）三月

是月

（日本書紀 卷二十六）

遣阿倍臣國名、率船師一百八十艘、討蝦夷國。阿倍臣、簡集鮑田、淳代二郡蝦夷三百卅一人、其虜卅一人、其虜四人、

胆振鉏蝦夷廿人於一所、而大饗賜。極伊浮多佐、即以船一隻、与五色絲帛、祭彼地神。至肉入龍時、問菟蝦夷胆鹿鳴、菟種名、二人進曰、可

以後方羊蹄、為政所焉。肉入龍、此云之冬祭姑、問菟云、塗毗字。菟種名、此云斯梨戲之政所、蓋蝦夷

高仁義等廿四人朝聘。而着蝦夷境、仁義以下十六人並被殺害、首領齊德等八人僅免死而來。

5 耆老四年（七二〇）正月二十三日丙子

（統日本紀 卷八）

遣渡鷗津輕津司從七位上諸君執男等六人於靺鞨國、觀其風俗。

6 神龜四年（七二七）九月二十一日庚寅

（統日本紀 卷十）

渤海郡王使首領高齊德等八人、來着出羽國。遣使存問、兼賜時服。

7 神龜四年（七二七）十二月二十九日丙申

（統日本紀 卷十）

遣使賜高齊德等衣服冠履。渤海郡者曰高麗國也。渤海朝廷七年冬十月、唐將李勣伐滅高麗。其後朝貢久絕矣。至是、渤海郡王遣寧遠將軍

勝、行程迂遠。請征男勝村、以通直路。於是、詔特節大使兵部卿從三位藤原朝臣麻呂、副使正五位上佐伯宿禰豐人、常陸守從五位上勲六等坂本朝臣宇頭麻佐等、發遣陸奥國。判官四人、主典四人。

8 天平五年（七三三）十二月二十六日己未

（統日本紀 卷十一）

出羽柵遷置於秋田村高清水岡。又於雄勝村、建郡居民焉。

9 天平九年（七三七）正月二十二日丙申

（統日本紀 卷十二）

先是、陸奥按察使大野朝臣東人等言、從陸奧國、達出羽柵、道經男勝、行程迂遠。請征男勝村、以通直路。於是、詔特節大使兵部卿從三位藤原朝臣麻呂、副使正五位上佐伯宿禰豐人、常陸守從五位上勲六等坂

本朝臣宇頭麻佐等、發遣陸奥國。判官四人、主典四人。

4 和銅二年（七〇九）七月一日乙卯

（統日本紀 卷四）

令諸國運送兵器於出羽柵。為征蝦夷也。

太政官議奏曰、建國辟疆、武功所貴。設官撫民、文教所崇。其北

道蝦夷、遠憑阻險、実罹狂心、屢驚邊境。自官軍雷擊、凶賊霧消、

狄部肅然、皇民無擾。誠望便乘時機、遂置二國、式樹司宰。永鎮百姓。奏可之。於是始置出羽國。

10 天平十一年（七三九）十一月三日辛卯

（統日本紀 卷十二）

平群朝臣広成拜朝。初広成、天平五年隨大使多治比真人広成入唐。六年十月事畢却帰、四船同發、從蘇州入海。（中略）十年三月、從登州入海。五月到渤海界、適遇其王大欽茂差、使欲聘我朝。即時同發。

# 1 秋田城跡鶴ノ木地区関係史料集成

## 史料凡例

この史料集は、秋田城および鶴ノ木地区に關係し、報告書記載にも關係する古代文献史料を抄出し、以下の基準で収録したものである。

前略、後略は省いた。  
4. 字体は原則として常用漢字を使用し、それ以外については正字体を用いた。

収録した主要な史料は以下の通りである。

統日本紀、正倉院流出文書、日本後紀、類聚国史、類聚三代格、日本文  
徳天皇実錄、日本三代實錄、日本紀略、貞信公記抄、本朝世紀、魚魯愚抄、  
西宮記、權記、吾妻鏡、齊藤文書、新渡戸文書、神宮寺八幡神社株札

1. 対象時期は秋田の地名が初めて登場する古代の齊明天皇四年（六五八年）から、中世の長享三年（一四九九年）までを収録した。
2. 秋田城をはじめ、出羽橋・出羽國關係や、秋田郡・鮫田・鶴田・秋  
田村などの間連地名、秋田城介などの關係史料も収録した。また、鶴ノ  
本地区の機能と性格に關係する靺鞨國・渤海國（使）關係史料や、四天  
王寺・仏教・陰陽師などの宗教・祭祀關係史料も収録した。
3. 「国立歴史民俗博物館研究報告」第八四集「古代における北方交流の  
研究—資料編—」（二〇〇〇年三月）、「秋田市史第七卷 古代 史料編」  
（二〇〇〇年三月）を参照した。

史料の掲載形式は以下の通りである。

1. 史料は、史料番号を付け、編年順に配列した。ただし、年紀の不明な  
ものについては便宜の位置に配した。
2. 史料には、史料番号の下にその史料の年月日（西暦を付記する）・干  
支・その史料の出典名・卷数を掲載した。
3. 史料のうち、長文のものは適宜省略し、中略した部分は（略）とし、

資料編 別編 2

1 秋田城跡鶴ノ木地区関係史料集成

2 秋田城跡鶴ノ木地区出土木簡集成

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	あきたじょうあと																		
書名	秋田城跡Ⅱ																		
副書名	一鶴ノ本地区																		
巻次																			
シリーズ番号																			
編著者名	小松正夫、石鄰同誠一、松下秀博、伊藤武士																		
編集機関	秋田市教育委員会、秋田城跡調査事務所																		
所在地	〒011-0901 秋田県秋田市寺内字焼山56 Tel018-845-1837 Fax018-845-1318																		
発行年月日	2008年3月																		
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ***	東経 ***	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	原因										
秋田城跡	秋田市寺内	186	39度 44分 20秒	140度 05分 00秒	第7次調査 19720828~ 19721220 第12調査 19740403~ 19740430 第18次調査 19751110~ 19751118 第18次調査 19760412~ 19760701 第22次調査 19770623~ 19770812 第25次調査 19780710~ 19781211 第26次調査 19790416~ 19790922 第30次調査 19800616~ 19801024 第34次調査 19810926~ 19811212 第35次調査 19820405~ 19820704 第37次調査 19830412~ 19830518 第39次調査 19840416~ 19840707 第42次調査 19850525~ 19851213 第46次調査 19861006~ 19861118	330	19870416~ 19870711 第50次調査 19880411~ 19880704 第57次調査 1,692	19910718~ 19911121 第58次調査 1,296	19920410~ 19921008 第61次調査 1,476	19930928~ 19931228 第62次調査 1,683	19940411~ 19940902 第63次調査 1,780	19940905~ 19941024 第63次調査 864	19950413~ 19950818 第67次調査 972	19960827~ 19961211 第69次調査 517	19970407~ 19970708 第81次調査 607	20030415~ 20030605 第91次調査 1,728	20070410~ 20071008	507	保護管理
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項														
秋田城跡	城櫓官街道跡	奈良~平安	掘立柱建物群、水洗便所遺構、三本柱遺構、材木塀跡、一本柱列跡、堅穴住居跡、堅穴状遺構、溝跡、溝状遺構、土坑、土取り穴、「戒」祭祀遺構、土器一括発見遺構、焼土遺構等	須恵器、土師器、赤褐色土器、縁袖陶器、撲文土器、弥生土器、木簡、墨書き土器、鐵製品、土製品、石製品、フイゴ羽口、錢貨	城外南東の大規模建物群、古代水洗便所遺構、「戒」祭祀遺構、出土文字資料などの調査成果のまとめ														

---

## 秋田城跡 II

— 鶴ノ木地区 —

印刷・発行 平成20年3月  
編 集 秋田市教育委員会  
秋田城跡調査事務所  
〒011-0907 秋田市寺内焼山9番6号  
TEL 018-845-1837  
FAX 018-845-1318  
印 刷 秋田活版印刷株式会社

---



付図1 鶴ノ木地区遺構実測図



付図2 鶴ノ木地区遺構期別色分け図